レーニン生誕100年記念

レーニン10巻選集

②

日本共産党中央委員会
レーニン選集編集委員会 編

大月書店

No. 3
1970. 8. 28
大月書店

レーニン10巻選集 第二巻（第三回配本）について

井田　誠

私は、レーニン10巻選集第二巻におさめられている著作、『なにをなすべきか？』と『一歩前進、二歩後退』について、それらがどんな具体的状況のもとで、なにを目的として書かれたものか、その主要な内容はどこにあるのか、またそれらが現在どんな意義をもっているであろうか、などについて学習したことを簡単に記してみようと思います。読者のみなさんがレーニンのこれらの著作を学習されるさいに、いくらかでもお役にたつことができれば幸いに思うわけです。

＊　＊　＊

二〇世紀の初頭のロシアには明らかにブルジョア民主主義革命がせまっていました。世界の革命運動の中心はロシアにうつり、新しい歴史的時代の一連の革命をロシアが先頭をきって開始する時期になっていました。当時のロシアのこのような情勢は、この革命を指導するに足る綱領・戦術・組織をもつ労働者階級の前衛党の樹立をつよく要求していました。

しかし、そのような党を建設する任務は、きわめて大きな困難をともなっていました。ロシアの「社会民主労働党」は、一方ではツァーリズムのきびしい追及のため非合法活動を余儀なくされ、他方では思想的に分裂し、組織的には混乱し崩壊寸前の状態にありました。

当時レーニンの活動は、革命的な党の樹立という事業に集中されていましたが、『なにをなすべきか？』と『一歩前進、二歩後退』はともに、「社会民主労働党」をこのような状態からぬけださせ、マルクス主義を基礎に思想的・政治的・組織的に統一し、せまりくる革命の指導を実際に遂行しうる党を樹立することを目的に書かれたものでした。

『なにをなすべきか？』は、マルクス・エンゲルスの労働者階級の党についての思想を発展させて、新しい歴史的時代に適応した新しい型の革命党建設の理論の基礎をおいたものであり、ロシアにおいてこのような党をどのようにしてつくるかという計画をくわしく述べたもの

です。その骨組みは次の三つから構成されています。

第一に、労働運動の自然発生性の前に拝跪し、社会主義的意識のもつ役割、したがってまた党のもつ役割を否定する「経済主義」とたたかって、科学的社会主義の理論で武装し社会主義と労働運動の結合のために奮闘する前衛党をつくること。

第二に、労働者階級の任務を「雇主と政府にたいする経済闘争」に限定する「経済主義」とたたかって、ツァーリズムとの全般的政治闘争の指導を最も重要な任務とすること。

第三に、組織問題における手工業的なやり方、経験主義を主張する「経済主義」とたたかって、党を、指導的活動家、主として職業的革命家の狭いグループと、勤労大衆の共感と支持にとりかこまれた広範な党組織網の二つから構成される全国的な統一組織とすること。

このような内容で書かれた『なにをなすべきか?』は、「ロシア社会民主労働党」第二回大会で革命的マルクス主義者が日和見主義者を打ちやぶり、大会で革命的綱領を確認させることに、またレーニンら「ボリシェヴィキ」を党中央部に選出させることに大きな役割をはたしました。

第二回党大会後は、粉砕された「経済主義者」にかわって、「メンシェヴィキ」が日和見主義路線を継承し、もとの組織的不統一、狭小グループの散在、手工業的活動へひきもどそうとしました。『一歩前進、二歩後退』は、この日和見主義とたたかい、確固とした中央集権制と規律、党生活の基礎をつくるために書かれたものです。

この論文は、マルクス・エンゲルスの労働者階級の党についての基本的素描を発展させ、また『なにをなすべきか?』の組織問題にかんする部分をいっそう充実させて、とくに中央集権化された規律ある革命党についての理論をまとめあげたものです。『なにをなすべきか?』とあわせて、新しい型の党、労働者階級の前衛党についての理論の根幹をなすものといえるでしょう。

そのおもな内容は次の諸点にあります。

第一に、「社会民主労働党」こそが科学的社会主義の理論で武装されていなければならないし、また全般的な政治闘争を指導する能力をもたなければならないという『なにをなすべきか?』の論点に結合させながら、次のことを明らかにしています。

党は労働者階級の一部であり、社会生活の発展法則と階級闘争の法則についての知識で武装され、よく組織された先進部分で構成された労働者階級の前衛部隊でなければならないこと。

党は、先進的理論と革命運動の経験によって武装され、労働者階級の他のいっさいの諸組織を指導することので

きる最高の組織形態でなければならないこと。
党は大衆との結びつきを強め、労働者階級の前衛と労働者大衆との連携の体現でなければならないこと。
第二に、『なにをなすべきか?』で述べている全国的な統一組織の論点をさらに充実させて、
党は、労働者階級の闘争を実践的に指導し一つの目的に向かわせるために、意志の統一、行動の統一、規律の統一によって結合された単一の組織でなければならないこと。
党は正しく自己の機能を発揮し、計画にもとづいて大衆を指導するために、すべての党員が堅持しなければならない党規律をもつ組織された部隊であり、多数にたいする少数の服従、中央機関にたいする個々の組織の服従という中央集権主義の原則によって組織されなければならないこと。
党は実践において、隊列の統一を保持するために、指導者も一般党員も全党員がまもらなければならない単一の規律をもたなければならないこと。
などを明確にし、労働者階級は科学的社会主義の理論による思想的統合を組織という物質的な統一によってうちかためてこそ、勝利することができると、レーニンは強調しています。

＊　＊　＊

以上は私が理解しえた骨組みというか、大筋の事柄なのですが、二つの論文にはもっと多くの学ぶべき内容があります。それらについてもなるべく簡潔に書いてみます。

『なにをなすべきか?』について

この論文が書かれる時期には、労働・生活条件の改善をもとめる経済的ストライキは、労働者の新しい層に波及し広範なものになっていましたが、労働者の新しい層に波及し広範なものになっていましたが、同時にツァーリズムに反対する公然たる政治闘争へと移っていました。その影響をうけて農民や学生の闘争も高揚していました。しかし指導者たちは理論の点でも実践の点でもこの大衆の高揚にひどくたちおくれていました。
理論の面では、マルクス主義を卑俗化し、社会革命の思想をばかげたものとし、労働者階級のなかに社会主義的意義をもちこむ必要性を否定し、労働者階級の自然発生的運動が自分自身で社会主義意識をつくりあげるまで待たなければならないとする「経済主義」がありました。
レーニンは、この「経済主義」の根底には、労働運動の自然発生性への拝跪と労働運動において社会主義意識のもつ役割や前衛としての党の指導的役割の引き下げがあることを指摘しました。

社会主義イデオロギーは自然発生的運動から生まれるものではなく、党が外からもちこまなければならないものですから、そしてまたブルジョア・イデオロギーと社会主義イデオロギーの中間にはどんなイデオロギーもないのですから、「経済主義者」は結局のところ労働者にたいするブルジョア・イデオロギーの影響を強め、運動をブルジョア・イデオロギーに従属させる方向にすすませることになります。レーニンは、労働者階級のなかにしみこんでくるブルジョア的影響と系統的にたたかい、労働運動に社会主義的意識をもちこむことが決定的に重要であると強調しています。

また、レーニンは運動の大衆的高揚とマルクス主義の広範な普及にともなって、理論的水準の低下、理論にたいする無頓着と混乱があることを指摘し、「経済主義」が横行すればそれに、テロリズムが起こってくればそれに屈服し、自然発生性に受動的に順応しつつ運動の後尾につくだけの最も完全な理論的無関心をするどく批判しました。そして、大衆の自然発生的高揚が大きければ大きいほど、理論活動において (政治活動においても組織的活動においても) 多くの意識性をもつ必要がいっそう増大すると強調しています。

レーニンは、革命的理論なしに革命運動はありえないことを明らかにしながら、世界のただ一つの社会主義党もまだ当面したことのない「ロシア社会民主主義者」の任務の遂行にあたり前衛的闘士の役割をはたしうるのは、先進的理論にみちびかれた党だけであると述べています。さらにレーニンは次のように力をこめて主張しています。

「社会民主主義運動」(共産主義運動のこと) はその本質からして国際的なものであり、若い国にはじまりつつある運動は他の国ぐにの経験を応用してこそ成功できるものであるが、このような応用をやるためには、たんにこの経験に通じていたり、諸決議を書きうつしたりするだけでは不十分である。この経験を批判的にとりあつかい、それを自主的に検討する能力こそがぜったいに必要であると。

政治の面でも、「経済主義者」は、追随主義におちいっていました。これは自然発生性への拝跪が政治的任務の分野に現われたものであり、それは運動を立法的および行政的施策によってかちとれる範囲にとどめることで、それだけでは組合主義的政治にすぎません。このように「経済主義者」はたえず「社会経済主義的政治観」から組合主義的政治観に迷いこみ労働運動をツァーリズムとブルジョアジーの政策に従属させる結果へとみちびいていました。

レーニンは、この日和見主義路線に反対して、革命的な党は改良のための諸闘争を全体にたいする部分として

自由と社会主義のための闘争に従属させ、さしあたりツァーリズムとの全般的政治闘争を指導しうる最高の階級組織でなければならないことを強調しました。

そして労働者の政治的意識を発達させるために、労働者にたいする政治的抑圧を説明するだけでなく、さらにその一つひとつの具体的な現われをとらえて扇動する必要があること、また政治的抑圧の個々の現われは、職業的・一般公民的・個人的・家庭的・宗教的におよぶので、専制政治の全面的・政治的暴露を組織しなければならないと述べました。

レーニンは、このようにプロレタリアートが最も必要としていることは政治的扇動と政治的暴露を手段とする全面的な教育であると強調しながら、労働運動の自然発生性の前に拝跪する「経済主義者」も、革命活動を労働運動に結びつける能力をもたぬインテリゲンチャの憤激の自然発生性の前に拝跪するテロリストも、ともに大衆の革命的積極性を過小評価しており、政治的暴露を組織する仕事に積極性をもっていないことを指摘しています。

組織的任務の面でも、「経済主義者」は狭い考え、手工業性にたよっていたので、個々の社会民主主義サークルは他の地方のどのサークルとの連絡もなく、いくらか長期の系統的な活動の計画もなく、自然発生的に活動を拡大してゆき、やがて根こそぎ検挙されるという状態をくりかえし、「社会民主主義運動」に大きな損害をもたらしていました。

この手工業性は、一つには「経済主義者」が自然発生性の前に拝跪していたので、労働運動と社会主義を結合させるための全国的に統一した中央集権化された前衛党を必要としなかったからですが、さらにレーニンは「経済主義者」が「社会民主党」の任務を組合主義的政治の水準にまで引き下げたことにも結びついているとみています。そのために労働者階級の二つの組織——労働組合と最高の組織である党とを混同していることにあるとみていました。

レーニンは、中央集権的に統一された全国的な組織形態をもち、労働者階級の革命闘争を指導しうる党を建設することが、第一の最も重要な任務であると考え、そのような党の組織的建設の計画をつくりました。それは、指導的活動家、主として職業的革命家の狭いグループと勤労大衆の共感と支持につつまれている広範な党組織網の二つの部分から構成されていなければならないというものでした。

レーニンは、このような党組織建設の計画を実行するためには、どうしても全国的な政治新聞が必要だと考えていました。この考えはすでに論文『なにからはじめるべきか？』のなかで述べられていたものですが、新聞が

党をつくることはできない、その反対だという「経済主義者」の誹謗や、全国的新聞から糸をひく全国的組織のことなど論ずるのは文筆家趣味だというテロリストなどの中傷をしりぞけて、レーニンは全国的政治新聞による以外に強大な党組織を育てあげる手段はほかにないと主張し、「社会民主主義」的任務が低められているときには、生きた政治活動は生きた政治的扇動から始めるほかなく、そしてそれは頻繁に発行され定期的に配布される全国的新聞なしには不可能なことを説いています。また活動が狭い手工業性におちいっているときには、全国的政治新聞を中心にして、この共同の新聞のための共同の活動を手段とする組織計画以外に、全国的に統一した党をつくることができないことを説いています。

こうしてレーニンの著作『なにをなすべきか？』は、党を受動性と無為におとしいれ環境への順応に運命づける歴史的宿命論にマルクス主義を変えてしまった「経済主義」とはちがって、不屈の革命的マルクス主義者を育てあげ、世界の社会主義的改造のための積極的闘争を呼びかけ、革命的理論をだれにもわかるように示しているのです。そして、レーニンはロシアで樹立される労働者階級の前衛党の理想を次のように明らかにしています。

「社会民主主義者の理想は、労働組合の書記ではなくて、どこでおこなわれたものであろうと、またどういう層または階級にかかわるものであろうと、ありとあらゆる専横と圧制の現われに反応することができ、これらすべての現われを、警察の暴力と資本主義的搾取とについての一つの絵図にまとめあげることができ、一つひとつの些事を利用して、自分の社会主義的信念と自分の民主主義的諸要求を万人の前で叙述し、プロレタリアートの解放闘争の世界史的意義を万人に説明することのできる人民の護民官でなければならないということは、どんなに力説しても力説し足りない」、と。

『一歩前進、二歩後退』について

第二回党大会後半年にわたって、ボリシェヴィキとメンシェヴィキとのあいだに激烈な党内闘争がおこなわれていましたが、この党の危機にかんする多くの文献の最大の欠陥は、たくさんのこまごました事柄や、無意味な泥試合にあたる部分を全部ひきさって根本問題を明確にするようになっていない点にありました。『一歩前進、二歩後退』はこの根本問題を明らかにするために書かれていますが、レーニンはこの著作の大部分を、第二回党大会議事録の綿密な研究と大会後のメンシェヴィキの新聞の新しい原則的内容の分析との二つにあて、その総括として党内闘争の真に中心的で基本的な次の二つの点を明らかにしています。

第一には党大会における闘争を分析してボリシェヴィ

キとメンシェヴィキへ党が割れたことの原因と政治的意義。

第二には組織問題についてメンシェヴィキのとっている立場の原則的意義。

そして結論としてボリシェヴィキが党の革命的翼であり、メンシェヴィキが日和見主義的翼であること、そしてこの両翼を分けへだてている意見の相違は『なにをなすべきか?』で述べられていた「経済主義者」と革命家の主要な区分とはちがい、綱領の問題や戦術の問題ではなくて主として組織上の問題に帰着していることを明らかにしています。

大会後メンシェヴィキが党大会の決定にしたがわずに始めた幾多の分裂的傾向はすでに大会における討論と表決のうえに萌芽の形で現われていたのですが、このことをレーニンは組織問題についてくわしく述べています。

大会に提案された規約草案には、中央集権化された、規律あるプロレタリアート党の組織原則がはっきりと表現されていました。そして規約第一条の規定は、党の綱領を承認し、物質的に党を支持し、党の組織の一つに所属するものはすべて党員になることができるとしていました。ところがマルトフらの日和見主義者は、このような考えに反対して、どの教授にも、中学生にも、ストライキ参加者にも、みずから党員とみなす権利をあたえ、第一条の党員資格については、党が承認する組織の一つに所属する必要はないと主張しました。

レーニンは、規約第一条にかんして偶然に単独に現われたようにみえる誤りが、なぜメンシェヴィキのその後の組織問題についての日和見主義的見解の体系にまで発展し、中央集権主義にたいする敵意、規律にたいする憎悪、組織的たちおくれの擁護、小ブルジョア的・日和見主義的分子にたいする労働者党の門戸の無条件開放などの基本的特徴をそなえるにいたったかをするどくえぐりだしています。

私ははじめに『なにをなすべきか?』と『一歩前進、二歩後退』から理解しえた骨組み、大筋の事柄のところで、党は労働者階級の一部であるとともに前衛部隊であること、党は労働者階級のいっさいの諸組織のなかの最高の組織形態であること、党は非党員大衆との強固な結びつきによって発展しうることなど党の性格についてふれましたが、これらの点も主として規約第一条にかんする日和見主義者との論争のなかでまとめて述べられていることです。

またレーニンは、規約第一条をめぐる論争につづく主要な組織上の問題、たとえば中央委員会や機関紙編集委員会の選出などにたいしてとったメンシェヴィキの態度や党大会後のかれらの組織上の日和見主義的・無政府主

義的な行動は、規約第一条についての最初の誤りを深め、拡大させ、分裂主義にまで発展させたものであることを明らかにしています。

レーニンはドイツの例をひいて一般的には、綱領における日和見主義は、当然にも戦術における日和見主義および組織問題における日和見主義と結びついていることを指摘しながら、他方ではロシアにおいては、党大会ですでに綱領が確定され、どのような原則で党を組織すべきかが問題になっているときに、綱領は規約より重要であるとか、綱領の採択は規約の採択よりも活動の中央集権化をおしすすめた、などという組織問題における日和見主義を正当化しようとする者の面皮をひきはいで、官僚主義に反対だといってもとの個々のグループの集合体に党をひきもどそうとする無政府主義的な言動をきびしく批判しています。

このようにして『一歩前進、二歩後退』のなかで、レーニンはマルクス主義にもとづく党の組織論の基礎をつくりあげ、労働者階級の中央集権化された規律ある革命党についての体系的な理論をきずいています。

そして、レーニンはこの著作を次のような感動的なことばで結んでいます。

「権力獲得のためにたたかうにあたって、プロレタリアートは、組織のほかにどんな武器ももたない。ブルジョア世界の無政府的競争の支配によって分裂させられ、資本のための強制労働によって押しひしがれ、まったくの貧困と野蛮化と退化の『どん底』にたえず投げおとされているプロレタリアートは、マルクス主義の諸原則による彼らの思想上の統合が、幾百万の勤労者を一つの労働者階級の軍隊に融合させる組織の具象的統一で打ちかためられることによってのみ、不敗の勢力となることができるし、またかならずなるであろう。この軍隊にむかっては、ロシアの専制の老衰した権力も、国際資本の老衰しつつある権力も、もちこたえることはできない」。

この著作のなかで明らかにされたボリシェヴィキ党の組織的基礎は第二インタナショナルの諸政党と根本的に異なった新しい型の党の組織原則でした。

今日のマルクス・レーニン主義を理論的基礎とする党がもっている性格は、この著作に述べられているレーニンの理念と根本的に一致するものであり、その後の国際共産主義運動の発展によっていっそう豊かにされたものです。

＊　＊　＊

本巻におさめられた二つの著作の学習によって、ロシアの民主主義革命と社会主義革命の指導を遂行する党を建設するための理論、そのような党の性格について基本

的な問題をつかむことができると思います。

レーニンは二つの著作のなかで国際的な日和見主義の潮流にもふれ、それがマルクス主義の理論の基本的な諸命題を歪曲していることをするどく批判しマルクス主義の革命的立場を擁護しています。しかしレーニンはなによりもロシアにおける日和見主義の思想・政治路線・組織方針を粉砕してマルクス主義を基礎とする党の建設に全力を傾け、ロシアの具体的な問題、現実の課題から出発してマルクスのうちたてた思想を創造的に発展させながら、国際的な日和見主義にもするどい批判をくわえるという態度をとっています。したがってロシアにおいてはあいまいで明確でない、したがってそれだけにかえって根づよく種々さまざまの形で復活するおそれのある「経済主義」的傾向と断固としてたたかい、また「経済主義」にたいしてだけでなく、テロリズムともたたかって、両者のあいだには思想上も政治的立場・組織方針でも共通のものがあることを明らかにし、風向きしだいで、「経済主義」だけではなく時としてテロリズムにも傾く混迷と動揺を一掃することに最も多くの努力をしています。この点からも私としては多くのことを学びえたと思います。

またロシアに革命がせまりつつあることを見ぬき、世界中の社会主義党のなかではじめて現実に革命を遂行するという任務に直面して、国際的な社会主義運動から経験を汲みとりながらも、そのまま真似するのでなく批判的に摂取し、ロシアの具体的問題を自主的に検討しなければならないことを強調している点についてもまた私としては学ぶところがありました。ことに日本共産党の第八回党大会以後今日までの発展をあらためて頭に思いうかべ、多くの感ずるものがありました。すなわち

日本共産党の第八回党大会は、第七回党大会で決定した行動綱領と当面の政治方針を三年間実践し、その検証にもとづき、自主独立の立場で、日本の具体的条件にマルクス・レーニン主義を創造的に適用した綱領を満場一致で採択しました。この綱領は、修正主義、右翼社会民主主義、トロツキズムや教条主義、セクト主義とたたかい、アメリカ帝国主義との闘争の軽視、「構造改革論」や大衆闘争をやっていれば党は自然に拡大するという意見などにみられる修正主義、党外から党を批判し攻撃するなどの自由分散主義にたいしての原則的なたたかいをつうじて、また安保闘争や三池の闘争など大きなひろがりとうねりをもった大衆闘争に指導的な役割をはたすなかで、かちとられたものです。

以後日本共産党は、アメリカ帝国主義および日本独占資本の侵略と軍国主義・帝国主義復活の政策に反対してたたかう日本人民の闘争の進路をいっそう明確にすると

ともに、現代修正主義および教条主義・セクト主義とたたかい、国際共産主義運動の真の団結をめざす党の国際路線をさらに明確にして今日にいたっています。とくに最近、中国のいわゆる「プロレタリア文化革命」、ソ連など五ヵ国軍隊によるチェコスロバキア侵略、中ソ国境衝突、一連の党による「モスクワ会議」の一方的開催など、国際共産主義運動に重大な諸事件が起こり、日本の革命運動にも大きな影響をおよぼしました。これにたいし日本共産党は、マルクス・レーニン主義と真のプロレタリア国際主義の原則をまもるために、両翼の日和見主義およびそれと結びついた大国主義的干渉に反対するという一貫した見地から自主的に対処し、日本の革命運動の前進と国際共産主義の真の団結のために奮闘し、この自主独立の立場が、理論的にも実践的にも重要な国際的意義をもっていることを、いっそう明らかにしています。

党建設においても、第八回党大会でかちとられた党の思想的・政治的・組織的団結を土台に、人民の利益と要求にこたえる抜本的で具体的な政策を発展させ統一戦線政策を堅持して人民と民主勢力の団結のためにも一貫してたたかい、今日党史上最大の組織となり、資本主義国の党のなかでも最大の機関紙誌をもつ大衆的前衛党となりました。政治的にもわが党は自民党と対決して七〇年代の進路をきりひらく真の革新政党であり、名実ともに労働者階級の前衛党であると同時に、民族と国民の未来をになない、民族独立などの真の民族的・国民的利益をまもる党――真に国民の党です。

この党建設の成果は、高度に発達した資本主義国における大衆的前衛党建設の実践を科学的に理論化し、計画的な党勢拡大を独自の課題として追求し、必要におうじて集中的にとりくむとともに、大量宣伝などの新しい活動形態を創造的に発展させたこと、困難な闘争や任務の遂行における行動上の戦闘性を強化すると同時に、全党員の学習・教育を制度化し、党の思想・理論武装を系統的に強化したことなどによるものです。

最後に、第二回大会後の執拗ではげしい党内闘争にたいして、とるにたりないエピソードやたくさんのこまごました事柄や、多くの泥試合からふるいわけて、中心的で基本的な問題を明確にするためにレーニンがおこなった綿密な分析方法とその総合の仕方から、非常に深く学ばなければならないと思いました。レーニンが、当時の党内の実情の概観図を、最も正確に全面的にあたえられるものは大会議事録であると判断してこれを資料に選んだこと、またこの議事録をまったく綿密に研究し、分析しつくしたこと――『一歩前進、二歩後退』の三分の二がこれにあてられている――、このことに、ほんとに真剣に学ばなければならないものがあると強く感じました。

レーニン生誕100年記念

レーニン10巻選集

第２巻

日本共産党中央委員会
レーニン選集編集委員会 編

大月書店

はしがき

このヴェ・イ・レーニン十巻選集は、レーニン生誕百年記念出版として日本共産党中央委員会レーニン選集編集委員会の責任で編集し刊行するものである。

一九世紀の四〇年代、マルクスとエンゲルスによってつくりあげられた科学的社会主義の学説のもつ不滅の真理性と豊かな創造性は、一世紀余にわたる世界史の発展と国際労働者階級が示したすべての闘争によって、あますところなく実証されている。

レーニンは、マルクスとエンゲルスの学説を正しく継承し、一九世紀末から二〇世紀の初めにかけて、帝国主義とプロレタリア革命の時代の新しい歴史的条件のもとで、哲学、経済学、社会主義というマルクス主義の三つの構成部分全体にわたって、マルクス主義を創造的に発展させた。レーニンは、社会主義革命とプロレタリアートの執権（ディクタツーラ）の理論と戦術を仕上げ、労働者階級の前衛部隊としての党の建設、ブルジョア民主主義革命におけるプロレタリアートのヘゲモニーの思想、ブルジョア民主主義革命の社会主義革命への成長転化、労働者階級と農民の同盟、帝国主義の理論的分析、一国における社会主義革命の勝利の可能性、社会主義革命と民族解放運動の結合、社会主義建設の道と方法等々の問題について、マルクス主義を新しい段階に発展させた。

マルクスによって創始され、レーニンによって発展させられたマルクス・レーニン主義は、現代の国際プロレタリアートのまえに提起されたすべての根本問題について原則的な解答をあたえている。マルクス・レーニン主義は、今日、全世界のほとんどすべての国で労働者階級の前衛党の行動の指針となり、社会主義世界体制、資本主義諸国の革命運動、民族解放運動を三つの原動力とする現代の人民運動を指導する偉大な物質的力となっている。

日本の労働者階級と人民の闘争を勝利にみちびく最も重要な保障は、マルクス・レーニン主義の基本的諸命題を、

現代の複雑な諸条件や、わが国の特殊性に応じて具体的に適用し、発展させる創造性と、マルクス・レーニン主義の原則を厳密に擁護する原則性とを正しく統一することである。

この選集の発刊の目的、編集の基本的観点も、この要求にこたえることにある。

編集にあたっては、(1)レーニンの全労作をつらぬく思想と基本命題を全体として理解できるようにすること、(2)わが国の歴史的条件、特殊性を考慮し、日本の労働者階級と人民の実践的課題にこたえること、(3)今日、国際共産主義運動とマルクス・レーニン主義の直面している重要な試練を正しくのりこえ、マルクス・レーニン主義と国際共産主義運動の歴史的発展をかちとる課題にこたえることに主眼をおいた。これらの点は、この選集のすぐれた特徴となっていると確信している。

このような選集は、日本の民主運動や革命運動の発展に貢献し、わが国におけるマルクス・レーニン主義の発展を願う多くの人々から、久しく求められていたものである。

この選集は、日本の独立、民主、平和、中立、生活向上をめざしてたたかっているすべての人々に、喜びむかえられるものと確信する。

この選集が、祖国を愛し、平和と民主主義を求めるすべての人々、さらに社会主義、共産主義日本の実現を願う人人にひろく読まれ、民主運動と革命運動の実践のなかで生きいきと活用されることを心から期待してやまない。

＊　＊　＊

選集の刊行にあたって、より正確で、より立派な翻訳に仕上げるために努力してくださった方がた、発行、発売にあたって全面的な協力をいただいた大月書店の方がたにたいして、あらためて謝意を表するものである。

一九六九年一一月

日本共産党中央委員会
レーニン選集編集委員会

凡　例

一　本巻は、レーニン生誕百年記念出版として日本共産党中央委員会レーニン選集編集委員会の責任で編集し刊行するものである。

一　編集にあたっては、邦訳『レーニン全集』（第四版）および『レーニン選集』、国民文庫などの訳文を原則として使用し、全集第五版にもとづいて手をくわえた。

一　原文のゴシック体の箇所は訳文でもゴシック体にし、イタリック体の箇所には傍点を付し、イタリック体で隔字体の箇所には白丸を付した。ただし見出しのところなど、この方針によらなかった場合もある。

一　レーニンの原注は＊をもって示し、本文の段落末にかかげた。

一　事項注は、本文中の該当箇所に通し番号㈠㈡……をつけて巻末に一括してかかげた。この注は全集第四版および第五版の注を参考にして多少簡略にした。そのなかに出てくるレーニンの著作のページ数は邦訳『レーニン全集』のものであり、マルクス、エンゲルスの著作のページ数は邦訳『マルクス＝エンゲルス全集』、同『選集』（全八冊）のものである。また、訳文については、若干手をくわえた。なお簡単な注は〔　〕に入れて本文中に示した。

一　人名注は、全集第五版の注を参考にしてごく簡略にして作成し、アイウエオ順に配列して巻末に一括してかかげた。

一　人名、地名は現地読みに近く表記することを原則にしたが、慣用に従ったものもある。

目　次

なにをなすべきか？

われわれの運動の焦眉の諸問題[一]

「……党派闘争こそが、党に力と生命力をあたえる。党があいまい模糊としており、はっきりした相違点がぼやけていることは、その党の弱さの最大の証拠である。党は、自身を純化することによって強くなる。……」

（一八五二年六月二四日付、ラサールからマルクスへの手紙から）

序文

この小冊子は、著者のはじめの計画では、論文『なにかから始めるべきか？』[二]（『イスクラ』[三]第四号、一九〇一年五月）のなかで述べた思想をくわしく展開することにあてられるはずであった。そこで、われわれはまず第一に、右の論文のなかであたえた（また、たくさんの私的な問合せや手紙に答えて繰りかえしあたえた）約束の履行が遅れたことを、読者にお詫びしなければならない。それがこんなに遅れた一つの理由は、昨年（一九〇一年）六月に、在外社会民主主義諸組織の全体を統合しようという試みがなされたことであった[四]。この試みの結果を待ってみるのが当然であった。というのは、この試みが成功した場合には、おそらく、『イスクラ』の組織上の見解を述べるのにも、いくらか違った視角からおこなうことが必要になったろうし、いずれにせよ、それが成功すれば、ロシアの社会民主党内に二つの潮流が存在する状態を非常に急速に終わらせる見込みがつくわけだからである。読者のご存じのように、この試みは失敗に終わった。また、のちほど立証するつもりであるが、『ラボーチェエ・デーロ』[五]がその第一〇号であらためて「経済主義」[六]への転換をおこなったあとでは、これは失敗に終わるほかはなかったのである。このあいまいな、あまり明確でない、しかしそれだけにかえって根づよく、種々さまざまなかたちで復活してくるおそれのある潮流にたいして、断固たる闘争を始めることが、ぜひとも必要になった。そこで、この小冊子のはじめの計画も、これ

におうじて修正され、いちじるしく拡張されたのである。
本書の主要な主題は、論文『なにから始めるべきか？』のなかで提起した三つの問題となるはずであった。すなわち、われわれの政治的扇動の性格と主要な内容の問題、われわれの組織上の諸任務の問題、さまざまな方面から同時に全国的な戦闘組織を建設してゆく計画の問題、この三つである。これらは、筆者がすでにずっとまえから関心をもっている問題であって、まえに『ラボーチャヤ・ガゼータ』(三)の復刊がなんどか試みられて失敗した、その一つの試みのさいに、筆者はすでに同紙でこれらの問題を提起しようと試みたことがあった（第五章を見よ）。しかし、はじめは、この小冊子では、この三つの問題を検討するだけにとどめ、また自分の見解をできるだけ積極的なかたちで述べて、論戦にはたずさわらないか、あるいはほとんどたずさわらないつもりだったのであるが、このはじめの予定は、二つの理由からまったく実行できないことがわかった。一方では、「経済主義」は、われわれが予想していたよりもずっとしぶといものであることがわかった（われわれはここで「経済主義」ということばを、『イスクラ』第一二号（一九〇一年一二月）の論文『経済主義の擁護者たちとの対話』(四)のなかで説明しておいたあの広い意味で用いている。なお、右の論文は、いわば本小冊子の概要を述べたものである）。この三つの問題への解答についていろいろな見解があるのは、細部の点で意見が分かれているためであるより、はるかに多く、ロシア社会民主党内の二つの潮流の根本的対立によるものであることは、疑う余地がなくなった。他方では、『イスクラ』紙上におけるわれわれの見解の実際の適用を見て「経済主義者たち」が当惑していることは、双方がしばしば文字どおりに別々のことばでものを言っていること、だから、ab ovo〔第一歩から〕始めなければ、われわれはなに一つ了解をとげることができないこと、われわれの意見が相違している根本的な点のすべてについて、できるだけ平易に、非常に多くの具体的な実例で解説しながら、すべての「経済主義者」と系統的に「話しあう」試みをやる必要があることを、明白に示していた。そこで私は、そういう「話しあい」の試みをやってみることにきめた。そうすると小冊子の分量がひどく大きくなり、その刊行を遅らせることになるのは、重々承知していたのだが、そうするよりほかに、論文『なにから始めるべきか？』のなかで自分のあたえた約束を果たすどういう便法も見あたらなかったのである。こうして、遅れたお詫びにつけくわえて、私は、さらに、この小冊子の文章上の仕上げに非常な欠陥があることについて、お詫びしなければならない。というのは、大いそぎで仕事をしなければならなかったうえに、い

ろいろほかの仕事で中断されたからである。

この小冊子でも、さきほど述べた三つの問題の検討がやはり主要な主題となっているが、しかし私はもっと一般的な二つの問題から始めなければならなかった。すなわち、なぜ「批判の自由」というような「罪のない」、「当然な」スローガンが、われわれにとって本式の戦闘開始の合図となっているのか？　なぜわれわれは、自然発生的な大衆運動にたいする社会民主党の役割という基本的な問題についてさえ了解をとげることができないのか？　という問題がそれである。さらに、政治的扇動の性格と内容についての見解を述べることとは、組合主義的政治と社会民主主義的政治との相違を説明することに変わり、組織上の諸任務についての見解を述べることは、「経済主義者」がそれで足れりとしている手工業性と、われわれが必要と考える革命家の組織との相違を説明することに変わった。次に、全国的政治新聞の「計画」については、この計画にたいしてとなえられた異議が根拠のないものであっただけに、また、私が論文『なにから始めるべきか？』のなかで、どうすればわれわれはわれわれの必要とする組織の建設にあらゆる方面から同時に着手することができるだろうか、という問題を提出したのにたいして、本質にふれた回答があまり寄せられなかっただけに、なおさら私はこの計画を固執する。

最後に、本書の結びの部分で、私は次のことを示したいと思っている。すなわち、われわれは「経済主義者」との決定的な決裂を防止するためにわれわれとしてできるだけのことをしたが、結局この決裂は避けられないものだったということ、――『ラボーチェエ・デーロ』が、特別な――なんなら「歴史的な」といってもいい――意義をもつようになったのは、それが、首尾一貫した「経済主義」を言いあらわしたからではなく、ロシア社会民主党の歴史上の一時期全体の特徴となった分散と動揺を最も完全に、最もあざやかに言いあらわしたからであるということ――したがって、この時期を最後的に清算しないかぎりわれわれは前進できないのだから、『ラボーチェエ・デーロ』を相手どった、一見微にいり細をうがちすぎた論戦もまた意義をもってくるということである。

一九〇二年二月

エヌ・レーニン

一　教条主義と「批判の自由」

（a）「批判の自由」とはなにか？

「批判の自由」――これは、たしかに、あらゆる国々の社会主義者と民主主義者のあいだの論争で、なによりも頻繁につかわれている、現在最も流行のスローガンである。ちょっと見たところでは、論争者の一方がこのようにあらたまって批判の自由を言いたてること以上に奇妙なことはないと思われる。いったい、学問と学問研究との自由を保障しているヨーロッパの大多数の国々の憲法にたいして、進歩的諸政党のあいだから反対の声でもあげられたのだろうか？「これはどうも少々へんだ！」――と、いたるところで繰りかえされているこの流行のスローガンを小耳にはさみはしたものの、まだ論争者のあいだの意見の相違の本質を深く究明したことのない局外者はだれしも、きっとこうひとりごとするであろう。「どうやら、このスローガンは、あだ名のように、つかいつけた結果世間に通用するようになり、ほとんど普通名詞のようになる、あの符牒語の一つらしい」と。

じっさい、今日の国際的*社会民主主義のなかに二つの潮流ができあがっていることは、だれにとっても秘密ではない。この両者のあいだの闘争は、ときには燃えあがってえんえんたる炎を吐き、ときには下火になってものものしい「休戦決議」の灰の下にくすぶっている。「古い、教条主義的な」マルクス主義にたいして「批判的」態度をとっている「新しい」潮流がなんであるかは、十分に明確にベルンシュタインが語り、ミルランが示している。

＊　ついでに言っておくが、社会主義の内部の種々な潮流のあいだの争いが一国的なものから、はじめて国際的なものになったということは、最近の社会主義の歴史上でおそらくただ一つのよろこばしい現象であり、ある意味ではすこぶるよろこばしい現象である。以前には、ラサール派とアイゼナッハ派(九)、ゲード派と可能主義者(ポシビリスト)(一〇)、フェビアン派と社会民主主義者(一一)、「人民の意志」(一二)派と社会民主主義者のあいだの論争は、純粋に一国的な論争にとどまって、純粋に一国的な特殊性を反映し、いわばそれぞれ違った平面でおこなわれていた。現在では（いまではこれはすでに目に見えて明白である）、イギリスのフェビアン派も、フランスの入閣主義者(一三)も、ドイツのベルンシュタイン主義者(一四)も、ロシアの批判家も、すべてこうした連中は一家族をなしていて、みなたがいにほめあい、たがいに学びあい、いっしょになって「教条主義的」マルクス主義にむかって武器をとっている。おそらく、社会主義的日和見主義とのこの最初の、真に国際的な戦闘をつうじて、国際的革命的社会民主主義は、すでに多年にわたってヨーロッパ

を支配している政治的反動の息の根をとめることができるだけに、強まるのであろうか？

社会民主党は、社会革命の党から民主主義的な社会改良の党に変わらなければならない。こういう政治的要求をベルンシュタインは、かなりしっくりと調子のあったいろいろな「新しい」論拠や考察の全砲台で打ちかためた。社会主義を科学的に基礎づけ、それが必然的で不可避的であることを唯物史観の見地から立証する可能性は否定された。貧困とプロレタリア化が増大し、資本主義の諸矛盾が激化しているという事実は、否定された。「終局目標」の概念そのものが破産したと宣言され、プロレタリアートの執権（ディクタトゥーラ）の思想は無条件に排撃された。自由主義と社会主義とが原則的に対立するものであることは、否定された。階級闘争の理論は、多数の意志にしたがって統治される厳密な民主主義社会には適用できないものであるという理由で、否定された、等々。

こういうふうに、革命的社会民主主義からブルジョア的社会改良主義にむかってきっぱりと転換せよ、という要求にともなって、それにおとらずきっぱりと、マルクス主義のすべての基本的思想のブルジョア的批判への転換がおこなわれた。ところで、このあとのほうの批判は、すでにずっとまえから、議政壇上からも、大学の講壇からも、おびただしいパンフレットのなかでも、たくさんの学術論文のなかでも、マルクス主義にたいしてくわえられてきたので、また教養ある諸階級の成長期にある子弟はみな、数十年にわたってこういう批判によって系統的に教育されてきたので、いま社会民主党内の「新しい、批判的」潮流が、ちょうどミネルヴァがユピテルの頭のなかからとびだしてきた（一五）ように、すっかり完成したかたちでいきなり現われたのは、べつだん驚くにあたらないのである。この潮流は、その内容からいえば、あらためて発達し形づくられるまでもなかった。それは、ブルジョア文献から社会主義文献へそのまま移されてきたのである。

さらに、それでもまだ、ベルンシュタインの理論的批判や彼の政治的渇望を理解できない人が、だれかいたにしても、フランス人が、この「新しい方法」をまのあたり実地にやってみせる労をとってくれた。こんどもまた、フランスは、「歴史上の階級闘争がいつでもほかのどこよりも徹底的に結末までたたかいぬかれた国」（エンゲルス――マルクスの著作『ブリュメール一八日』への序文から）（一六）であるという、その古来の名声をはずかしめなかった。フランスの社会主義者たちは、理論にふけらずに、すぐさま行動に移った。フランスの政治的条件が民主主義の点でいっそうすすんでいるおかげで、彼らは「実践的ベルンシュタイ

ン主義」に、それから出てくるいっさいの結果をふくめて、いきなり着手することができた。ミルランは、この実践的ベルンシュタイン主義のすばらしいお手本を示した。だから、ベルンシュタインやら、フォルマルやらがミルランを弁護しほめそやすことに、あんなに熱をいれたのは、そうするだけのいわれがあったのだ！　じっさい、もし社会民主党が、実質上改良の党にすぎず、しかもそのことを公然と認める勇気をもつべきであるなら、社会主義者は、ブルジョア内閣にはいる権利があるばかりか、それにはいるようつねに努力さえしなければならないわけである。もし民主主義が実質上階級支配の廃絶を意味するなら、社会主義者の大臣が、階級協力を説いた演説で全ブルジョア世界をうっとりさせてならない理由があろうか？　たとえ憲兵が労働者を殺して、民主主義的な階級協力というものの正体を百回目、千回目に示したあとであっても、彼が内閣に居すわってならない理由があろうか？　いまではフランスの社会主義者たちから絞首台と革鞭と流刑の英雄(knouteur, pendeur et déportateur)という名でしかよばれないツァーリの歓迎式に、彼が自身で参加してならない理由があろうか？　ところで、社会主義が全世界の面前でこのようにかぎりなく屈辱をこうむり、自分をはずかしめ、労働者大衆――われわれの勝利を確保することのできる唯一の土台であるもの――の社会主義的意識を堕落させたことにたいする代償は、貧弱な改良の鳴物いりの計画案であるが、その貧弱なことといったら、ブルジョア諸政府からさえそれ以上のものを獲得できたほどである！

わざと目をふさがない人なら、社会主義のなかの新しい「批判的」潮流が日和見主義の新しい変種にほかならないことを、認めないわけにはいかない。そして、人を判断するのに、彼らが自分で身にまとったきらびやかな制服や、自分でつけた人気とりの呼び名によらずに、彼らがどうふるまい、実際になにを宣伝するかによるならば、「批判の自由」とは、社会民主党内の日和見主義的潮流の自由であり、社会民主党を民主主義的改良党に変える自由であり、社会主義のなかにブルジョア思想とブルジョア的要素とを植えつける自由であることが、明らかになるであろう。

自由とは、偉大なことばではある。しかし、産業の自由という旗じるしのもとで最も強盗的な戦争がおこなわれてきたし、労働の自由という旗じるしのもとで勤労者は略奪されてきた。「批判の自由」ということばの今日の使い方にも、これと同じ内面的な虚偽がひそんでいる。自分の手で科学を前進させたと真に確信している人なら、古い見解とならんで新しい見解を説く自由を要求するのでなく、古い見解を新しい見解とおきかえることを要求するはずであ

る。ところが、「批判の自由万歳！」という今日の叫びは、あまりにも空樽の寓話[一三]を思いおこさせる。

われわれは、固く手をにぎりあい、密集した一団となって、けわしい、困難な道を進んでいる。われわれは、四方八方から敵に包囲されていて、ほとんどいつも、敵の銃火を浴びながら進まなければならない。われわれは自由におこなった決定にもとづいて団結したのだが、それはまさに敵とたたかうためであり、足を踏みはずして隣の沼地に落ちこまないようにするためである。その沼地の住人たちは、われわれが別れて別個の集団をつくり、妥協の道を捨てて闘争の道を選んだというので、最初からわれわれを非難してきた。ところが、いまわれわれの仲間の一部の者が、「あの沼地へ行こう！」と叫びはじめている。──そして、人が彼らをたしなめだすと、彼らは言いかえす。「君たちはなんて時代おくれの人間なのだ！　もっとよい道へ君たちをさそう自由をわれわれに認めないなんて、君たちはなんて恥しらずだろう！」と。──いかにも諸君、君たちには、他人をさそう自由があるだけでなく、自分で、沼地であろうとどこであろうと好きなところへ行く自由がある。われわれは、ほかならぬ沼地こそ君たちのほんとうの居場所だと、考えてさえいる。だからわれわれは、君たちがそこへ引っこしするのによろこんで応分のお手伝いをするつもりだ。ただ、それなら、われわれの手を離してくれたまえ。われわれにつかまらないでくれたまえ。そして、自由という偉大なことばをけがすのはやめてくれたまえ。なぜといって、われわれにもまた同じように、自分の好きなところへ行く「自由」、沼地とたたかうだけでなく、沼地のほうへ向きを変えようとしている人々ともたたかう自由が、あろうというものではないか！

（b）「批判の自由」の新しい擁護者たち

ところで、ごく最近、ほかならぬこのスローガン（「批判の自由」）を、在外「ロシア社会民主主義者同盟」[一〇]の機関誌である『ラボーチェエ・デーロ』（第一〇号）が、しかつめらしく提出した。それも、理論的公準としてではなく、政治的要求として、「外国で活動する社会民主主義組織の統合は可能であるか？」という問題への回答として、提出したのである。──つまり、「永続的な統合のためには、批判の自由が必要である」（三六ページ）というのだ。

この言明から、まったく明確な二つの結論がでてくる。それは、（一）『ラボーチェエ・デーロ』は、国際社会民主主義のなかの日和見主義的潮流全体の弁護を引き受けているということ、（二）『ラボーチェエ・デーロ』は、ロシア

社会民主党内の日和見主義の自由を要求しているということである。これらの結論を調べてみよう。

『ラボーチェエ・デーロ』に「とりわけ」(二九)気にいらないのは、『イスクラ』と『ザリャー』(三〇)が、国際社会民主主義のなかの山岳党とジロンド党との決裂*を予言したがる傾向をもっていること」である。

* 革命的プロレタリアートのなかの二つの潮流（革命的な潮流と日和見主義的な潮流）を、一八世紀の革命的ブルジョアジーのなかの二つの潮流（ジャコバン党——すなわち「山岳党」——とジロンド党）にたとえることは、『イスクラ』第二号（一九〇一年二月）の社説のなかでなされたことである。この論説の筆者はプレハーノフである。ロシア社会民主党内の「ジャコバン主義」を語ることは、カデット(三一)も、「ベズザグラフツイ」(三二)も、メンシェヴィキも、今日にいたるまで大いにこのんでやっていることである。しかし、この概念は、プレハーノフがはじめて社会民主党の右翼に対抗して提出したものだという点については、このごろでは人々は沈黙を守るか、あるいは……忘れるほうを選んでいる。〔一九〇七年版への原注〕

『ラボーチェエ・デーロ』の編集局員ベ・クリチェフスキーは書いている。

「全体としていって、社会民主党の隊列内に山岳党とジロンド党があるなどというこのおしゃべりは、われわれには、マルクス主義者の筆になるものとしては奇妙な、皮相な歴史的類推であるように思われる。山岳党とジロンド党は、観念学者ふうの歴史家たちの目にはそう映るかもしれないが、別々の気質とか思潮とかを代表したものではなくて、別々の階級または層を——つまり、一方は中ブルジョアジーを、他方は小町人とプロレタリアートを、代表していたのである。ところが、今日の社会主義運動のなかには階級利害の衝突というようなものはない。この運動全体が、最も名うてのベルンシュタイン主義者をもふくめて、そのすべての（傍点はクリチェフスキーのもの）「変種をつうじて、プロレタリアートの階級利害の基盤、政治的および経済的解放をめざすプロレタリアートの階級闘争の基盤に立っている。」（三二—三三ページ）

なんと大胆な主張だろう！　ベルンシュタイン主義がこんなに急速にひろまったのは、近年、社会主義運動に「学園」層が広く参加してきた、まさにそのことによって保障されたものだという、すでにずっとまえから認められている事実を、ベ・クリチェフスキーは耳にしたことがないのだろうか？　だが、肝心なことはこうである。わが筆者は、「最も名うてのベルンシュタイン主義者」までがプロレタリアートの政治的および経済的解放をめざす階級闘争の基

盤に立っている、というその意見を、なにを根拠にして立てているのだろうか！　なんであるかわからない。最も名うてのベルンシュタイン主義者を断固として弁護しながら、まったくどういう論拠によっても、どういう考察によっても、それを裏づけていないのだ。どうやら筆者は、最も名うてのベルンシュタイン主義者たちが、自分について言っていることを繰りかえして言いさえすれば、自分の主張を証明する必要がなくなるように考えているらしい。だが、このように、一潮流全体を判断するのに、その潮流の代表者たちが自分で自分について言っていることを根拠にすること以上に「皮相な」ものを、考えることができるだろうか？　そのあとのほうに述べられている二つの相異なる、正反対でさえある党発展の型または道についての「訓話」（『ラボーチェエ・デーロ』、三四—三五ページ）以上に皮相なものを、考えることができるだろうか？　それはこういうのだ。ドイツの社会民主主義者は、知ってのとおり、批判の完全な自由を認めている、ところが、フランス人はそれを認めない、そして、ほかならぬこのフランス人の実例こそ「偏狭の害」をあますところなく示している、と。

われわれはこれにこう答えよう。ほかならぬベ・クリチェフスキーの実例こそ、文字どおり「イロヴァイスキー流に」歴史を考察する〔三三〕人々でさえ、ときにはマルクス主義者と自称することがあるのを示している、と。ドイツの社会主義党が統一していてフランスの社会主義党が細分している理由を説明するためには、それぞれの国の歴史の特殊性を掘りさげたり、軍事的半絶対主義の諸条件と共和主義的議会制度の諸条件とを対比したり、パリ・コミューンの結果と社会主義者取締法〔三四〕の結果とを検討したり、経済生活や経済的発展を比較したり、「ドイツ社会民主党の比類のない成長」には、理論上の謬見（ミュールベルガー、デューリング*、講壇社会主義者〔三五〕）だけでなく、また戦術上の謬見（ラサール）にたいする、社会主義の歴史上比類のない精力的な闘争がともなっていたことを思いだしたり、等々する必要は全然ない。そんなことはみなよけいなことだ！　フランス人が争っているのは、彼らが偏狭だからで、ドイツ人が統一しているのは、彼らがお利巧さんだからだ、というのだ。

＊　エンゲルスがデューリングをやっつけたときには、ドイツ社会民主党のかなり多くの代表者が後者の見解に傾いていて、エンゲルスにたいし、苛酷だとか、偏狭だとか、非同志的な論戦だとかいう非難が、公けに党大会でさえあびせかけられた〔三六〕。モストは同志をかたらって（一八七七年の大会で）、エンゲルスの論文は「大多数の読者には興味がない」から、『フォールヴェルツ』〔三七〕の紙面から締めだせという動議をだし、またヴァールタイヒは、この論文をのせたために党はひどい損

害をこうむった、デューリングもまた社会民主党に貢献した、と言明した。「われわれは、党の利益のためにだれでも利用しなければならないのであって、教授連が論争するとすれば、『フォールヴェルツ』はそういう論争をおこなう場所ではけっしてない」（『フォールヴェルツ』一八七七年六月六日付、第六五号）と。ごらんのとおり、これもまた「批判の自由」を擁護した一例である。だから、ドイツ人の例を引合いにだすことが大好きな、わが国の合法的批判家や非合法的日和見主義者は、この例を一考してみるがよかろう！

ところで、ご注意ねがいたいのは、こういう深遠無比な思想の助けで、ベルンシュタイン主義者の擁護論を完全に論駁すべき一事実が「はぐらかされている」ことである。はたしてベルンシュタイン主義者はプロレタリアートの階級闘争の基盤に立っているのか、これは、歴史的経験をまってはじめて最終的に、きっぱり解答できる問題である。だから、まさにフランスの実例が、この点でこのうえなく重要な意義をもってくるのだ。というのは、フランスは、ベルンシュタイン主義者が、そのドイツの同僚たちの（いくらかはまたロシアの日和見主義者たちの――『ラボーチェエ・デーロ』第二―三号、八三―八四ページを参照）熱烈な賛同をえて、自主的に、一本立ちでやってゆく試みをした唯一の国だからである。したがって、フランス人の「非妥協性」を言いたてるのは、――その「歴史的」（ノズドリョーフ式の意味での）[19]意義を別にすれば――はなはだ不愉快な事実を憤然たる文句で言いまぎらそうとする試みでしかないことがわかる。

しかし、われわれはまた、ドイツ人のほうをも、ベ・クリチェフスキーその他大勢の「批判の自由」の擁護者にわがものにさせておくつもりは、けっしてない。「最も名うてのベルンシュタイン主義者」がいまもってドイツの党の隊列内にとどまることを許されているとしても、それはただ、彼らが、ベルンシュタインの「修正」を断固として排撃したハノーヴァー決議[20]にも、またベルンシュタインへの直接の警告をふくんでいる（いろいろ外交辞令をつかっているにもかかわらず）リューベック決議[21]にも、服従しているかぎりのことである。ドイツの党の利益という見地からみて、外交辞令を用いることがはたしてどれだけ適当であったか、この場合にはたして悪い平和が良い争いよりもましであるかどうかについては、議論の余地はあろう。一言でいえば、ベルンシュタイン主義を拒否するあれこれの仕方が目的にかなっているかどうかの評価では、意見が分かれるかもしれない。しかし、ドイツの党が二度までもベルンシュタイン主義を拒否したという事実を見ないわけにはいかない。だから、ドイツ人の実例が「最も名うてのベルンシュタイン主義者でさえ、プロレタリアートの経済的お

よび政治的解放をめざす階級闘争の基盤に立っている」という命題を確証している、などと考えるのは、万人の見ているまえでおこなわれている事柄を、全然理解しないというものである。*

* 『ラボーチェエ・デーロ』が、ドイツの党内のベルンシュタイン主義の問題については、いつもなまの事実を取りつぐにとどまっていて、それについての同誌自身の評価をくだすことをまったく「さしひかえて」きたことを、指摘しなければならない。たとえば、同誌第二―三号、六六ページのシュトゥットガルト大会(三)についての記事を見よ。――そこでは、いっさいの意見の相違を「戦術」の問題に帰着させており、また大多数の人々は従来の革命的戦術を忠実に守っているということを確認しているだけである。あるいはまた、同誌第四―五号、二五ページ以下を見よ。――そこでは、ベーベルの決議を引用し、ハノーヴァー大会でなされたいろいろな演説を転載しているだけで、ベルンシュタインの見解の紹介と批判は、「特別の論文」で扱うといって、またもや（第二―三号でもそうだったが）延期されているのである。奇妙なことに、第四―五号の三三ページには、「……ベーベルの述べた見解は大会の大多数の支持をうけている」と書かれているが、そのすこしあとのほうには、「……ダーヴィットはベルンシュタインの見解を擁護した。……まず彼は、……ベルンシュタインとその同志たちが、とにもかくにも（原文のまま！）階級闘争の基盤に立っていることを示そうとつとめた……」と書かれている。これは一八九九年一二月に書かれたものであるが、一九〇一年九月には、『ラボーチェエ・デーロ』は、すでにベーベルの見解の正しさについての信念をなくしたものとみえて、ダーヴィットの見解を同誌自身の見解として繰りかえすのだ！

それだけではない。すでに述べたように、『ラボーチェエ・デーロ』は、「批判の自由」の要求とベルンシュタイン主義の擁護論とをふりかざして、ロシア社会民主党の前に立ちあらわれる。どうやら同誌は、わが国ではわが国の「批判家」やベルンシュタイン主義者を不当に侮辱してきたと、確信するにいたったらしい。だがいったいだれを？　だれが？　どこで？　いつ、侮辱したのか？　まさにどういうところが不当だったのか？――これらの点については、『ラボーチェエ・デーロ』は沈黙を守っており、ただひとりのロシアの批判家やベルンシュタイン主義者の名も、ただの一度もあげていないのである！　そこで、われわれとしては、考えられる二つの場合のどちらか一つを仮定するほかはない。すなわち、不当な侮辱をうけたのは、ほかならぬ『ラボーチェエ・デーロ』自身であるのか（これを裏づけるのは、同誌第一〇号の二論文では、『ザリャー』と『イスクラ』が『ラボーチェエ・デーロ』にくわえた侮辱のことしか、問題になっていないことである）。そうだとすると、日ごろあのように頑強にベルンシュタイン主義と

のいっさいの連帯関係を否認してきた『ラボーチェエ・デーロ』が、「最も名うてのベルンシュタイン主義者」や批判の自由のためにとりなしのことばを述べずには自分の弁護をやれなかったというような奇妙な事実は、いったいなにによって起こったのだろうか？　それとも、不当に侮辱されたのはだれか第三者なのか。そうだとすれば、いったいどういう動機からその人々の名をあげないのか？

こうして、われわれは、『ラボーチェエ・デーロ』がその創刊の当初からやってきた（のちに示すように）隠れんぼう遊びをまだつづけているのだということに、気がつく。だが次に、あのほめそやされた「批判の自由」のこの最初の実地応用に、注意をはらっていただきたい。実際には、この「自由」は、どんな批判ももちあわせないばかりか、総じて独自の判断というものを全然もちあわせないという ことに、たちまち帰着してしまったのである。ロシアのベルンシュタイン主義については、まるでこれが人前にだせぬ病気（スタロヴェールの適切な表現を借りれば）[三]ででもあるかのように沈黙を守っている当の『ラボーチェエ・デーロ』が、この病気の治療策として、この病気のドイツ的変種にたいする最近のドイツの処方箋をそっくりそのまま書きうつすことを、提案するのだ！　批判の自由ではなくて奴隷的模倣……いやもっと悪い、猿まねだ！　今日の国際日和見主義の同じ一つの社会的＝政治的内容が、それぞれの国の特殊性におうじて、あれやこれや、違ったかたちをとって現われている。ある国では、日和見主義者の群れはずっとまえから独自の旗をかかげて進出している。別の国では、日和見主義者は理論を軽視し、しかも実践では急進社会党の政策をおこなってきた。その次の国では、革命党の一部の党員が日和見主義の陣営へ脱走し、原則や新しい戦術のための公然たる闘争によってその目的を遂げるのではなく、徐々に、こっそりと、こう言ってよければ、罰せられることのないやり方で自党を腐敗させることで、その目的を遂げようとつとめている。さらにその次の国では、同じような脱走者たちが、政治的奴隷制の闇のなかで、「合法」活動と「非合法」活動とのまったく独特な相互関係のもとで、これと同じやり方を用いている、などというぐあいである。批判の自由やベルンシュタイン主義の自由を認めることがロシアの社会民主主義者の統合の条件である、などと話しだしながら、そのさいロシアのベルンシュタイン主義がまさにどういう点に現われ、またどういう特殊な実を結んだかを分析しないのは、なにも話さないために話しだすのと同じことである。

そこで、『ラボーチェエ・デーロ』が話したがらなかったこと（あるいは、おそらく理解さえできなかったこと）

を、試みに、たとえ数語にせよわれわれが話してみよう。

（c）ロシアにおける批判

ここで問題となっている点についてのロシアの基本的な特殊性は、一方では自然発生的な労働運動が、他方ではマルクス主義にむかっての進歩的な世論の転換が始まったその当初から、はやくも次の特徴が現われていたことである。それは、明らかに異質的な諸要素が、共通の旗のもとに、また共通の論敵（古くさくなった社会的＝政治的世界観）との闘争のために、連合したということである。われわれがここで言っているのは、「合法マルクス主義」の蜜月のことである。これは、一般的にいって、すこぶる独特な現象であって、八〇年代あるいは九〇年代のはじめには、だれひとり、こういうことがありうるということさえ信じることができなかったであろう。出版物が完全に奴隷化されている専制国で、政治的不満や抗議のどんな小さな芽ばえをも迫害していた狂暴な政治的反動の時代に、検閲のもとにある文書のなかへ不意に革命的マルクス主義の理論が割りこんできて、イソップふうの、しかし「関係者」にはだれにでもわかることばで語ったのであった。政府は、（革命的）「人民の意志」派の理論だけを危険なものと考えつけていて、例によってこの理論の内面的進化に気がつかず、この理論にたいして鋒先をむけた批判であれば、どんなものでも歓迎した。政府がそれと気づき、検閲官と憲兵の鈍重な軍勢が新しい敵を探知して、それをやっつけにかかるまでには、少なからぬ（われわれロシア人の標準で）時がたった。そして、そのあいだにマルクス主義の本がつぎつぎに出版され、マルクス主義の雑誌や新聞が発刊され、だれもかれもあげてマルクス主義者になり、マルクス主義者はちやほやされ、ひっぱりだこになり、出版屋はマルクス主義の本が飛ぶように売れるので有頂天になった。だから、こうした、ぼうっとさせる雰囲気にとりまかれた初心のマルクス主義者のあいだに、ひとりならず「思いあがった作家」[12]が出たのは、まったく当然であった。……

いまではわれわれは、この時代のことを過ぎさったこととして平静に語ることができる。だれでも知っているように、わが文筆界の表面にマルクス主義がつかの間の花を咲かせたのは、急進派とまったくの穏健派との同盟によるものであった。じつをいうと、後者はブルジョア民主主義者であった。そして、この結論（これは、後年彼らが「批判家」に発展したことによって明白に確証された）は、この「同盟」にまだひびがはいっていなかったころにさえ、一部の人々の頭に浮かんだのであった。*

＊　これは、カ・トゥーリンのストルーヴェ批判の論文をさし

ている。この論文は、『ブルジョア文献におけるマルクス主義の反映』という表題の研究報告からまとめられたものである。序文を参照。〔一九〇七年版への原注〕(三五)

だが、もしそうだとすれば、それにつづいて起こった「混乱」にたいする最大の責任は、未来の「批判家」とこのような同盟を結んだ、当の革命的社会民主主義者たちにあるのではなかろうか？　こういう質問を、「しかり」という、それへの答えといっしょに、あまりにも一本調子に物事を見る人々の口から、ときどき聞く。しかし、この人人はまったくまちがっている。たとえ信頼できない人々とでも、一時的同盟を結ぶことを恐れるのは、自分で自分を信頼しない人々だけがやれることである。それに、このような同盟を結ばずにやっていける政党は、ただの一つもないであろう。ところで、合法マルクス主義者との連合は、ある意味で、ロシアの社会民主党が結んだ真の政治的同盟の最初のものだったのである。この同盟のおかげで、ナロードニキ主義にたいして驚くほど急速に勝利が達成され、マルクス主義思想が（たとえ俗流化されたかたちでにせよ）非常に幅広くひろがった。そのうえ、この同盟はまったくの無「条件」で結ばれたわけではけっしてなかった。その証拠は、一八九五年に検閲当局によって焼きすてられたマルクス主義論集『ロシアの経済的発展の問題にかんする資料集』である。もし合法マルクス主義者との文筆上の協定を政治的同盟にたとえることができるとすれば、この書物は政治的協約にたとえることができる。

決裂が引きおこされたのは、この「同盟者」がブルジョア民主主義者であることがわかったからでは、もちろんない。反対に、この潮流の代表者は、ロシアの現状によって前面に押しだされている社会民主党の民主主義的諸任務にかんするかぎり、社会民主党の自然な、望ましい同盟者なのである。だが、このような同盟を結ぶために不可欠な条件は、社会主義者が、労働者階級の利益とブルジョアジーの利益とが敵対的なものであることを、労働者階級に明らかにする完全な可能性をもっていることである。ところが、合法マルクス主義者の大多数があげてそれへ転向したベルンシュタイン主義と「批判的」潮流とは、マルクス主義を卑俗化し、社会的諸矛盾が緩和しつつあるという理論を説き、社会革命やプロレタリアートの執権（ディクタツーラ）の思想はばかげていると宣言し、労働運動と階級闘争を狭い組合主義（トレードユニオニズム）と小さい漸進的改良のための「現実主義的」闘争とに帰着させることによって、この可能性を奪いさり、社会主義的意識を堕落させた。これは、ブルジョア民主主義者が社会主義者の自主権を、したがってまたその生存権を否認したのに、まったくひとしかった。実践においては、これは、始まり

かけた労働運動を自由主義者の後尾に変えるためにつとめることであった。

こういう事情のもとでは、当然に、決裂はまぬかれえなかった。しかし、ロシアの「独特な」特殊性の結果として、この決裂は、とりもなおさず、だれにでもたやすく手にはいる、ひろく普及していた「合法的」文書から社会民主主義者が放逐されることを意味していた。これらの合法的文書は、「批判の旗じるし」をかかげた「元マルクス主義者たち」の拠点となり、彼らは、マルクス主義を「こきおろす！」独占権に近いものをもつようになった。「正統派反対」だとか、「批判の自由万歳」だとかいう叫び（いま『ラボーチェエ・デーロ』がそれを繰りかえしているのだが）が、たちまちに流行語となったが、この流行にたいしては検閲官も憲兵も抵抗できなかったことは、有名な（ヘロストラトスふうに有名な）(三六)ベルンシュタインの著書のロシア語訳(三七)が三種も出版されたり、ベルンシュタインや(三八)プロコポーヴィチ氏などの著書がズバートフの推称をうけたり（『イスクラ』第一〇号）した事実によって、明らかである。いまや社会民主主義者には、新しい潮流と闘争するという、それ自体困難なうえに、純外部的な障害によってさらに信じられないほど困難にされた任務がかかってきた。しかも、この潮流は文筆の分野にとどまらなかった。「批判」への転換にともない、それに呼応して、社会民主主義的実践家が「経済主義」のほうへ引きつけられていったのである。

合法的な批判と非合法的な「経済主義」との結びつきと相互依存関係とがどのようにして発生し、成長していったか、――この興味ある問題は、特別の論文の題材とすることができよう。ここでは、この結びつきがまちがいなく存在することを、指摘するだけで十分である。悪名高い『クレード』(三九)があのような、それにふさわしい評判を得たのも、この結びつきを率直に定式化して、「経済主義」の基本的な政治的傾向をしゃべりたてたからであった。労働者は経済闘争（組合主義的闘争というほうが、いっそう正確であろう。というのは、組合主義的闘争には、それ特有の労働者政治もふくまれるから）をおこなえ、そしてマルクス主義的インテリゲンツィアは政治「闘争」をおこなうために自由主義者に合流せよ、と。「人民のなかでの」組合主義的活動はこの任務の前半を、合法的批判はその後半を果たすものであった。この声明は、「経済主義」とたたかううえにじつにすばらしい武器となったので、もし『クレード』が出なかったら、それを発明するだけの値うちがあったと思われるほどである。

『クレード』は発明されたものではなかったが、その筆者たちの意志によらずに、またおそらくは、その意志に反

してすら、発表されたものであった。すくなくとも、この新「綱領」を明るみに引きだすことに一役買った本論の筆者*などは、演説者たちが自分の見解を下書きした要領書きが複写されてひろめられ、『クレード』というレッテルをちょうだいし、抗議文をつけて印刷までされたというので、苦情やら小言やらを聞かされたものである！　われわれがこの挿話にふれるのは、これがわが「経済主義」のはなはだおもしろい一特徴をあらわに示しているからである。それは、公開を恐れることである。これは、ひとり『クレード』の筆者たちに限られる特徴ではなくて、まさに「経済主義」全体の特徴である。「経済主義」の最も率直な、最も正直な味方である『ラボーチャヤ・ムィスリ』[illegible]も『ラボーチェエ・デーロ』（「経済主義」の記録文書が『ヴァデメクム』[illegible]に発表されたことを憤慨しているところの）も、また二年ほどまえに自分たちの『プロフェシオン・ド・フォア』[illegible]をそれにたいする反駁文といっしょに発表することに許可をあたえたがらなかったキエフ委員会**も、「経済主義」の個々の代表者の多くの者、じつに多くの者も、みなこの特徴をあらわしていた。

* これは、『クレード』にたいする一七人の抗議[illegible]のことである。本論の筆者はこの抗議の起草に参加した（一八九九年末）。この抗議は、一九〇〇年の春に『クレード』と合わせて国外で印刷された。いまではもう、クスコーヴァ女史の論文（たぶん『ブィロエ』[illegible]誌上でだったと思うが）から、彼女が『クレード』の筆者であり、また当時の在外「経済主義者」のあいだではプロコポーヴィチ氏がきわめて有力な役割を演じていたことが、知られている。〔一九〇七年版への原注〕

** われわれの知るかぎりでは、その後キエフ委員会の構成は変わった。

批判の自由の味方があらわしているこの批判にたいする恐怖は、ずるさのためとばかり説明することはできない（もっとも、ときにはずるくなければやっていけないことは確かである。まだ根をはっていない新しい潮流の芽ばえを論敵の攻撃にさらすのは不用意なことだから！）。そうではない。大多数の「経済主義者」は、あらゆる理論上の論争や、分派間の意見の相違や、広範な政治問題や、革命家を組織する計画などを、まったく心からの悪意をもってながめている（そして「経済主義」の本質そのものからいって、悪意をもってながめざるをえない）。「そんなものはみな国外の連中にゆずってしまいたい！」——と、かつてかなり一貫した「経済主義者」のひとりが私に言ったことがあるが、このことばで彼は、はなはだひろまっている（これまた純組合主義的な）見解を言いあらわしたのである。それは、われわれの仕事はここ、当地での労働運動、労働者組織であり、それ以外のことは空論家たちが考えだ

したことで、『イスクラ』第一二号所載の手紙[22]の筆者たちが『ラボーチェエ・デーロ』第一〇号に調子を合わせて述べた表現を借りれば、「イデオロギーの過大評価」である、というのだ。

　そこで問題となるのは、次のことである。ロシアの「批判」とロシアのベルンシュタイン主義とのこういう特殊性からみて、口先だけでなく実際に日和見主義の反対者でありたいと望む者の任務は、どういうものでなければならないか？　第一には、合法マルクス主義の時代にようやく始まったばかりの、いままたしても非合法活動家の肩にかかってきた理論活動を復活するために、骨をおる必要があった。このような活動なしには、運動が首尾よく成長することは不可能だった。第二には、人々の頭にひどい堕落をもちこんだ合法的「批判」との闘争に、積極的にのりだすことが必要であった。第三には、意識的、無意識的にわれわれの綱領とわれわれの戦術とを低めようとするあらゆる試みを暴露し、反駁することによって、実践運動のなかの混乱と動揺を克服するために積極的にのりだす必要があった。

　『ラボーチェエ・デーロ』が第一の仕事も、第二の仕事も、第三の仕事もやらなかったことは、周知のことである。そして、あとでわれわれはこの周知の事実を、種々さまざまな側面からくわしく究明するおりがあろう。いまはただ、「批判の自由」という要求が、わが祖国の批判とロシアの「経済主義」との特殊性にはなはだしく矛盾しているということだけを、示しておきたい。じっさい、「在外ロシア社会民主主義者同盟」が採択した[23]『ラボーチェエ・デーロ』の見地を確認した決議の本文に、目をはしらせてみたまえ。

　「社会民主党のいっそうの思想的発展をはかるために、われわれは、党文書のなかで社会民主主義理論の批判をおこなう自由が――その批判がこの理論の階級的、革命的な性格に背馳しないかぎりで――絶対に必要であると認める。」（『二つの大会』、一〇ページ）

　そして、その趣旨説明にはこうある。この決議は、「その前半では、ベルンシュタイン問題についてのリューベック党大会の決議に一致している。」……「同盟員」たちは、心が単純なため、こういう書きうつしをやることが、自分自身にどんな testimonium paupertatis（貧困証明書）を発行することになるかに、気がつかないのだ！……「しかし……後半では、リューベック党大会のおこなった以上に厳格に批判の自由を制限している。」

　では、「同盟」の決議は、ロシアのベルンシュタイン主義者に鋒先をむけたものなのか？　もしそうでないなら、リューベックを引合いにだすのは、まったくばかげたこと

であろう！　しかし、決議が「厳格に批判の自由を制限している」というのは、うそである。ドイツ人は、そのハノーヴァー決議によって、ベルンシュタインがおこなったまさにその修正を逐条的に拒否し、またリューベック決議では、決議のなかに名まえをあげて、ベルンシュタイン自身に警告を発したのである。ところが、わが国の「自由な」模倣家たちは、ロシア特有の「批判」やロシアの「経済主義」のただ一つの現われについても、ただ一言のほのめかしもしていない。こういう点で沈黙を守りながら、ただ理論の階級的、革命的性格だけを言いたてるときは、曲解の余地がはるかに多く残る。ことに「同盟」は、「いわゆる『経済主義』」を日和見主義のなかにふくめることを拒絶しているのだから、なおさらである（『二つの大会』、八ページ、第一節）。だが、これはことのついでに言ったまでで、肝心なことは、革命的社会民主主義者にたいする日和見主義者の立場がドイツとロシアとで正反対になっていることである。よく知られているように、ドイツでは、革命的社会民主主義者は現状維持を主張している、つまり、みなが知っており、何十年という経験によってあらゆる細目にいたるまで解明されている古い綱領と戦術とに、賛成している。他方、「批判家」のほうは、それに変更をくわえたがっている。そして、これらの批判家はとるにたりない少数者で、その修正主義的な志向ははなはだおずおずしたものなので、多数派が「革新」をそっけなく拒否するだけでことをすませている動機も、理解できるというものである。ところが、わがロシアでは、現状維持を主張しているのは、批判家と「経済主義者」のほうである。つまり、「批判家」は、ひきつづき彼らをマルクス主義者と見なしてほしい、彼らがこれまであらゆる点で享有してきた「批判の自由」（というのは、彼らは、実質上かつてどんな党紐帯も認めたことがなく、*そのうえわが国には、せめて勧告によってでも批判の自由を「制限する」ことのできるような、全員の認める党機関がなかったから）を保障してほしい、と望んでいるのだし、また「経済主義者」は、「現在の運動のもつ完全な権利」（『ラボーチェエ・デーロ』第一〇号、二五ページ）を、すなわち現存するものが現存することの「正当性」を、革命家が認めてほしい、「物質的諸要素と物質的環境との交互作用によって規定される」（『イスクラ』第一二号所載の『手紙』）道から運動を「そらせよう」と、「イデオローグ」が試みないでほしい、また「そのときの事情のもとで労働者がおこないうる」闘争をおこなうことこそ望ましく、そして「現在の瞬間に労働者が現実におこなっている」（『ラボーチャヤ・ムィスリ』別冊付録、一四ページ）闘争こそおこないうる闘争なのだということを、

認めてほしい、と望んでいるのである。これに反して、われわれ革命的社会民主主義者は、自然発生性への、すなわち「現在の瞬間に」存在するものへの、このような拝跪には不満である。われわれは、近年支配的になっている戦術を変更することを要求する。われわれは、「統合するまえに、また統合するために、まずきっぱりと、明確に、分界線を引くことが必要である」（『イスクラ』発刊の知らせから）と声明する。一言でいえば、ドイツ人は現にあるものを堅持して、それの変更を拒否するのであるが、われわれは現にあるものを変更するよう要求して、この現にあるものへの拝跪やそれとの妥協を排撃するのである。

＊　公然たる党紐帯や党伝統がこのように欠けている点だけでも、ロシアはドイツと根本的に違っているのだから、分別のある社会主義者ならだれでも、盲目的な模倣をやらないように警戒するはずである。ところで、次にかかげるのは、ロシアにおける「批判の自由」がどんな極端まですすむかの見本である。ロシアの批判家ブルガーコフ氏は、オーストリアの批判家ヘルツをこういって叱責している。「彼の到達した結論はまったく独自のものであるにもかかわらず、ヘルツは、この問題（協同組合の問題）では、どうも、彼の所属する党の意見にいまなお縛られすぎているように思われる。そして、彼は細部の点では異なった意見をとなえながらも、一般原則を捨てる決心がつかないのである」（『資本主義と農業』第二巻、二八七ページ）と。住民一〇〇〇人のうち九九九人までが政治的奴僕根性と、党の名誉や党紐帯についての完全な無理解とによって骨の髄まで堕落させられている、政治的奴隷国家の臣民が、立憲国家の市民をつかまえて、「党の意見に縛られ」すぎるといって、横柄に叱りつけているのである！これでは、わが国の非合法諸組織のほうでも、批判の自由についての決議の作成にとりかかるほかには、しかたがなかろうというものだ。……

ドイツの諸決議のわが国における「自由な」書きうつし屋たちは、こんな「瑣末な」違いには、気がつかなかった！

（d）理論闘争の意義についてのエンゲルスの所論

「教条主義、空論主義」、「思想を強圧的に束縛することの不可避のむくいとしての、党の硬直化」――これが、『ラボーチェエ・デーロ』誌上の「批判の自由」の守護者たる騎士たちが、武器をとって立ちむかう当の敵である。――われわれは、この問題が日程にのぼされたことをまことに喜ばしく思うものであるが、ただこれをいま一つの別の質問で補うことを提議したい。

ところで、審判者はだれか？　と。

ここに二つの文書出版の知らせがある。一つは『ロシア

社会民主主義者同盟定期機関誌「ラボーチェエ・デーロ」の綱領』(『ラボーチェエ・デーロ』第一号の抜刷り)で、いま一つは『「労働解放」団の出版再開の知らせ』(註)である。このどちらも、「マルクス主義の危機」がもうとっくに日程にのぼっていた一八九九年の日付になっている。ところでどうか？ 第一の著作のなかに、この現象を指摘している箇所や、新機関誌がこの問題についてどういう立場をとるつもりかを明確に述べた箇所を捜しにかかっても、むだであろう。理論活動とそれが現在もっている緊要な諸任務とについては、この綱領も、また、一九〇一年の「同盟」第三回大会で採用されたこの綱領への補足(『二つの大会』、一五一―一八ページ)も、ひとことも言っていない。この全期間をつうじて、『ラボーチェエ・デーロ』の編集局は、理論上の諸問題が全世界のすべての社会民主主義者の心をかきたてていたときに、それを捨ててかえりみなかったのである。

もう一つの知らせは、これに反して、まっさきに、近年理論への関心が弱まったことを指摘し、「プロレタリアートの革命運動の理論的側面におこたりなく注意をはらう」ようにせつに要望し、われわれの運動内部の「ベルンシュタイン主義的傾向その他の反革命的傾向を容赦なく批判する」ように、呼びかけている。この綱領がどう実行されたかは、『ザリャー』の既刊各号が示している。

そこで、思想の硬直化等々を攻撃する大げさな文句は、理論的思考の発展にたいする無頓着と無力を隠すものであることがわかる。ロシアの社会民主主義者の実例は、悪名高い批判の自由なるものが、ある理論を別の理論とおきかえることではなく、いっさいの、まとまりのある、考えぬいた理論からの自由を意味し、折衷主義と無原則性とを意味するという、全ヨーロッパ的な現象(すでにずっと以前にドイツのマルクス主義者によっても指摘された現象)の、とくに明瞭な例証となっている。われわれの運動の実情にすこしでも通じている人なら、マルクス主義の広範な普及にともなって理論的水準がある程度低下したことに、気づかずにはいられない。運動が実践的な意義をもつようになり、実践的成功をおさめたので、理論的素養のひどく乏しい人々、それどころか全然そういう素養のない人々までが、おおぜい運動に参加してきた。この点からみて、『ラボーチェエ・デーロ』が、「現実の運動の一歩一歩は一ダースの綱領よりも重要である」(註)というマルクスの金言を勝ちほこったようすでもちだしているのが、どんなに気のきかないことであるかが、わかる。理論的混乱の時代にこのことばを繰りかえすのは(註)、葬列を見て、「いくら運んでも運びきれないように！」と叫ぶのと同じことである。おまけに、

マルクスのことばは、彼のゴータ綱領（二一）についての手紙からとってきたものだが、この手紙ではマルクスは、原則の定式化において折衷主義を許したことを、鋭く責めているのである。マルクスは、党の首脳者たちに次のように書きおくった、――もしぜひとも手を結ばなければならないのなら、運動の実践的目的をみたすために協定を結ぶがよい、けれども、原則の取引を許してはならない、理論上の「譲歩」をしてはならない、と。これがマルクスの思想であった。ところが、わが国には、マルクスの名において理論の意義を弱めようとつとめる人間がいるのだ！

革命的理論なしには革命的運動もありえない。日和見主義の当世流行の説教と、実践活動の最も狭い形態への熱中とが、抱き合っているような時代には、どれほど強くこの思想を主張しても主張したりない。しかも、ロシアの社会民主党の場合には、人のしばしば忘れがちな次の三つの事情のために、理論の意義がいっそう強まる。第一には、わが党はいまようやく形づくられつつあり、いまようやく自分の個性をつくりあげつつあるところであって、運動を正しい道からそらすおそれのある革命思想の他の諸潮流との対決を終わるにはまだほどとおいのである。それどころか、まさに最近の時期にこそ、いろいろな非社会民主主義的な革命的潮流の復活が目だって見られた（すでにずっと以前にアクセリロードが「経済主義者たち」に予言しているように（二二））。こういう事情のときには、一見「重要でない」ように思える誤りがこのうえなく悲しむべき結果を引きおこさないともかぎらないのであって、近視的な人間だけが、分派間の論争や、色合いの厳密な区別だてを、時宜に適しないとか、無用なことだとかと、考えることができるのである。どの「色合い」が強まるかによって、ロシア社会民主党の将来が今後長年にわたって決定されることになりかねないのだ。

第二に、社会民主主義運動は、その本質そのものからして国際的である。これは、われわれが民族的排外主義とたたかわなければならないことを意味するだけではない。これは、若い国にいま始まりつつある運動は、他の国々の経験を摂取してこそはじめて成功できるということをも、意味している。しかし、このように摂取するためには、たんにこの経験に通じていたり、最近の諸決議を書きうつすだけでは足りない。そのためには、この経験を批判的に取り扱い、それを自主的に検討する能力が必要である。今日の労働運動がどんなに巨大な成長をとげ、多くの枝に分かれているかを思いうかべるなら、だれでも、どれほど大きな理論的勢力と政治的（同時にまた革命的）経験とのたくわえがこの任務の遂行のために必要であるかを、理解するで

あろう。

第三に、ロシアの社会民主党に課せられている国民的任務は、世界のただ一つの社会主義政党もまだ当面したことのないようなものである。あとでわれわれは、全人民を専制のくびきから解放するというこの任務がわれわれに負わせている政治上、組織上の義務について述べるおりがあろう。いまは、先進的な理論にみちびかれる党だけが先進闘士の役割を果たすことができるということを、指摘するだけにとどめたい。だが、これがどういうことを意味するかを、いくらかでも具体的に心にえがくには、読者は、ゲルツェン、ベリンスキー、チェルヌィシェフスキーや、七〇年代の革命家の輝かしい明星の一団のような、ロシア社会民主党の先駆者たちのことを思いおこされたい。ロシア文学が今日世界的意義を獲得しつつあることを考えていただきたい。さらに……いや、これだけでももう十分だ！

次に、社会民主主義運動における理論の意義について、一八七四年にエンゲルスが論じたところを引用しよう。エンゲルスは、社会民主党の大きな闘争の形態として、二つのもの（政治闘争と経済闘争）を認めるのでなく、――わが国ではこうするのが普通であるが――、理論闘争をこの二つと同列において、三つの形態を認めている。実践的にまた政治的にすでに強固なものになっていたドイツの労働運動にエンゲルスが贈ったはなむけのことばは、今日の諸問題や論争の立場からみてはなはだ教訓に富んでいるので、すでにだいぶまえからすこぶる稀覯書となっている小冊子『ドイツ農民戦争』*の序文から、ここに長い抜粋をしても、読者の不平をまねくことはないと信じる。

＊ 第三版、ライプチヒ、一八七五年、協同組合出版所発行。

「ドイツの労働者は、ヨーロッパの他の国々の労働者にくらべて二つの重要な利点をもっている。第一には、彼らがヨーロッパで最も理論的な国民に属しており、そして、ドイツのいわゆる『教養ある人々』がまったく失ってしまった、あの理論的感覚を保持していることである。もしドイツ哲学、とくにヘーゲル哲学というものがさきだって存在していなかったなら、ドイツの科学的社会主義――これまでに存在したただひとつの科学的社会主義――は、けっして生まれてこなかったであろう。もし労働者のあいだに理論的感覚がなかったなら、この科学的社会主義は、けっしていまのように彼らの肉となり血となってはいなかったであろう。そして、このことがどんなにはかりしれぬ利点であるかは、一方では、イギリスの労働運動が、個々の職業ではいかにもみごとに組織されているにもかかわらず、あのように遅々として前進しないおもな原因の一つが、いっさいの理論にたいす

る無関心にあることを考え、他方では、プルードン主義が、フランス人とベルギー人のあいだではその元の姿で、スペイン人とイタリア人のあいだではバクーニンによって一段と戯画化された形態で、引きおこした無秩序や混乱を見れば、はっきりわかる。

第二の利点は、ドイツ人が時期的にはほとんど最後に労働運動に登場してきたことである。ドイツの理論的社会主義は、サン－シモン、フーリエ、オーエンという三人の人物、あらゆる空想ざたやユートピア主義にもかかわらず、やはりすべての時代をつうじて最も傑出した思想家に属し、今日その正しさが科学的に立証されつつある無数の事柄を天才的に予見した三人の人物の仕事に、自分が立脚していることをけっして忘れないであろうが、それと同様に、ドイツの実践的労働運動もまた、自分がイギリスとフランスの運動の成果に立脚して発展してきたこと、この両国の運動が高価な代価を支払って得た経験をそのまま利用して、当時にあっては大部分避けられなかったそれらの運動の誤りを、今日では避けることができたことを、けっして忘れてはならない。もし、イギリスの労働組合とフランスの労働者の政治闘争との先例がなかったなら、ことにパリ・コミューンがあたえた巨大な刺激がなかったなら、われわれはいまどうなっていることだろうか？

ドイツの労働者が自分の地位の利点を、まれにみる聡明さをもって利用してきたことを、認めなければならない。労働運動が成立して以来、いまはじめて、闘争は、その三つの側面――理論的側面、政治的側面、実際的＝経済的側面（資本家にたいする反抗）――にわたって、調和と連関をたもちつつ、計画的に遂行されている。このいわば集中攻撃にこそ、ドイツの運動の強さと不敗の力がある。

一方では、彼らのこのような有利な立場のために、他方では、イギリスの運動の島国的な特殊性と、フランスの運動の暴力的弾圧とのために、ドイツの労働者は、いまのところプロレタリア闘争の前衛の地位に立たされている。事態の経過が彼らにどれだけのあいだこういう名誉ある部署をゆだねておくかは、あらかじめ言うことはできない。しかし、この部署を占めているあいだは、彼らはおそらくその部署をはずかしめないであろう。そのためには、闘争と扇動のあらゆる分野で努力を倍加することが必要である。とりわけ指導者の義務は、あらゆる理論問題についてますます理解を深め、古い世界観につきものの、伝来の空文句の影響からますますおのれを解放し、そして、社会主義が科学となったからには、やは

り科学としてこれを取り扱わなければならないこと、すなわち研究しなければならないことを、たえず心にとめておくことであろう。このようにして獲得され、ますます明確になってゆく理解を労働者大衆のあいだにいっそう熱心にひろめ、党および労働組合の組織をますますしっかり固めることが肝要であろう。……

……もしドイツの労働者がこのようにして前進してゆくなら、彼らは、かならずしも運動の先頭に立ってすすむとはかぎらないが——どれか一つの国の労働者が運動の先頭に立ってすすむことは、けっしてこの運動の利益にはならない——、しかし、戦列のなかに名誉ある持ち場を占めるであろう。また、思いがけない重大な試練なり大事件なりが起こって、彼らがいっそう大きな勇気、いっそう大きな決意と実行力を必要とされるときには、戦備をととのえて持ち場に立つであろう。(三)」

エンゲルスのことばは予言となった。数年後にドイツの労働者は、社会主義者取締法という思いがけない重大な試練をこうむった。そして、ドイツの労働者は、実際に戦備をととのえてこの試練をむかえ、勝利をもってそれを切りぬけることができた。

いまロシアのプロレタリアートは、はるかに苦しい試練に当面している。それにくらべれば立憲国における例外法などはまったくの一寸法師にしか見えないような、怪物との闘争がせまっている。歴史は、いま、他のあらゆる国々のプロレタリアートに課せられたあらゆる当面の任務のうちで最も革命的な当面の任務を、われわれに提起している。この任務を実現し、ひとりヨーロッパだけでなく、（いまではこう言うことができる）アジアをもふくめた反動の最も強力な砦を破壊するならば、ロシアのプロレタリアートは国際的な革命的プロレタリアートの前衛となるであろう。そして、もしわれわれが七〇年代の運動の千倍も広くまた深いわれわれの運動に、同じ献身的な決意と精力を鼓吹することができるなら、さきにわれわれの先駆者である七〇年代の革命家がかちえたこの名誉ある称号を、われわれも獲得するものと、期待してよいのである。

二　大衆の自然発生性と社会民主主義者の意識性

さきにわれわれは、七〇年代の運動よりもはるかに広くまた深いわれわれの運動に、当時と同じ献身的な決意と精力を鼓吹することが必要である、と言った。じっさい、今日の運動の強みが大衆の（主として工業プロレタリアートの）覚醒にあり、その弱みが革命的指導者の意識性と創意性との不足にあることは、今日まで、まだだれひとり疑った者はないと思われる。

ところが、ごく最近、これまでこの問題について支配的だったいっさいの見解をくつがえしかねない、驚くべき発見がなされた。この発見をしたのは『ラボーチェエ・デーロ』である。つまり、同誌は、『イスクラ』や『ザリャー』と論戦をまじえるにあたって、たんなる部分的反論にとどまらずに、「全般的な意見の相違」をもっと深い根源に――すなわち、「自然発生的要素と意識的・『計画的』要素との相対的意義についての評価の相違」に――帰着させようと試みたのである。『ラボーチェエ・デーロ』の非難は次の命題に言いあらわされている、「発展の客観的あるいは自然発生的要素の意義の軽視」*、と。われわれはこれについてこう言おう。かりに『イスクラ』と『ザリャー』にこのおこなった論戦が、『ラボーチェエ・デーロ』に思いつかせたほかには、まったくなんの成果ももたらさなかったとしてさえ、われわれはこの一つの成果があっただけで大いに満足したであろう、と。この命題は、それほど意味深長であり、それほどあざやかに、ロシアの社会民主主義者のあいだに現在ある理論上、政治上の意見の相違の核心全体を照らしだしているのである。

* 『ラボーチェエ・デーロ』第一〇号、一九〇一年九月、一七、一八ページ。傍点は『ラボーチェエ・デーロ』のもの。

だからこそ、意識性と自然発生性との関係という問題はきわめて大きな一般的関心をひくのであって、この問題については非常にくわしく論じなければならない。

（a）　自然発生的高揚の始まり

前章でわれわれは、九〇年代のなかごろ、ロシアの教養のある青年が全般的にマルクス主義理論に熱中したことを指摘した。ほぼ同じころ、有名な一八九六年のペテルブルグの産業戦争(三四)のあとで、労働者のストライキも同じような全般的な性格をおびるにいたった。ストライキがロシアの全土にひろがったことは、新しく高まりつつあった人民運

動の深刻さを明らかに立証するものであった。そこで、いやしくも「自然発生的要素」をうんぬんするとすれば、もちろん、まず第一に、このストライキ運動をこそ、自然発生的なものと認めなければならないであろう。しかし、自然発生性にもいろいろあろうというものではないか。ロシアには、七〇年代にも六〇年代にも（それどころか、一九世紀の前半にさえ）ストライキはあったし、「自然発生的な」機械の破壊等々をともなったものである。こういう「一揆」にくらべると、九〇年代のストライキなどは「意識的」と言ってもよいくらいである。この期間に労働運動がなしとげた前進は、それほどいちじるしいものがあったのだ。このことがわれわれに示すのは、「自然発生的要素」とは、本質上、意識性の萌芽形態にほかならないということである。それに、原始的な一揆にしても、すでに意識性がある程度めざめたことをあらわすものであった。つまり、労働者は、自分らを圧迫している制度が確固不動のものであるという古くからの信仰を失って、集団的反抗の必要を……理解しはじめたとは言わないが……感じはじめ、上長への奴隷的従順をきっぱりと捨てさったのである。だが、それでもやはり、それは、闘争であるよりも、はるかに多く絶望と復讐心との現われであった。九〇年代のストライキは、これにくらべてはるかに多くの意識性のひらめきを示している。すなわち、明確な要求を提出したり、どういう時機が好都合かをあらかじめ考慮したり、よく知られている他の地方の事例や実例を検討したりしている、等々。一揆が抑圧された人々のたんなる蜂起でしかなかったのにたいして、組織的なストライキはすでに階級闘争の芽ばえをあらわしていた。だが、あくまで芽ばえにすぎない。それ自体としてみれば、これらのストライキは、組合主義的闘争であって、まだ社会民主主義的闘争ではなかった。それらは、労働者と雇い主との敵対のめざめを示すものではあったが、しかし労働者は、自分たちの利害が今日の政治・社会体制全体と和解しえないように対立しているという意識、すなわち社会民主主義的意識をもっていなかったし、またもっているはずもなかった。こういう意味で、九〇年代のストライキは、「一揆」にくらべれば非常な進歩であったにもかかわらず、やはり純然たる自然発生的な運動の範囲を出なかったのである。

われわれはいま、労働者は社会民主主義的意識をもっているはずもなかった、と言った。この意識は外部からもちこむほかはなかったのである。労働者階級が、まったくの独力では、組合主義的意識、すなわち、組合に団結し、雇い主と闘争をおこない、労働者に必要なあれこれの法律を政府に公布させるために努める等々のことが必要だとい

う確信しかつくりあげえないことは、すべての国の歴史の立証するところである。* 他方、社会主義の学説は、有産階級の教養ある代表者であるインテリゲンツィアによって仕上げられた哲学、歴史学、経済学の諸理論から、成長してきたものである。近代の科学的社会主義の創始者であるマルクスとエンゲルス自身、その社会的地位からすれば、ブルジョア・インテリゲンツィアに属していた。ロシアでもそれとまったく同様に、社会民主主義の理論的学説は、労働運動の自然発生的成長とはまったく独立に生まれてきた。それは、革命的社会主義的インテリゲンツィアのあいだでの思想の発展の自然の、不可避的な結果として生まれてきたのである。いま論じている時代、つまり九〇年代のなかごろには、この学説は、「労働解放」団のすでに完全に形をなした綱領となっていたばかりか、ロシアの革命的青年の大多数を味方に獲得していた。

* 組合主義は、往々考えられているように、あらゆる「政治」を排除するものではけっしてない。労働組合は、つねにある種の（だが社会民主主義的ではない）政治的扇動や闘争をやってきた。組合主義的政治と社会民主主義的政治との相違については、次章で述べよう。

こうして、労働者大衆の自然発生的なめざめ、すなわち意識的な生活と意識的な闘争へのめざめも存在していたし、また労働者に近づこうと熱望していた、社会民主主義的理論で武装した革命的青年もいた。このさい、しばしば忘れられがちな（そしてわりあいに知られていない）一事実を確認しておくことが、とくに重要である。それは、この時期の最初の社会民主主義者たちは、経済的扇動に熱心に従事しながらも――（そしてこの点では、そのころまだ手稿で読まれていた小冊子『扇動について』(三三)があたえていた真に有益な指示を、十分に尊重しながらも）――、そういう経済的扇動を自分たちの唯一の任務と考えなかったばかりか、反対に、最初から、一般にロシア社会民主党の最も広範な歴史的諸任務、とりわけ専制の打倒の任務をも提起していたということである。たとえば、「労働者階級解放闘争同盟」(三四)を創立したペテルブルグの社会民主主義者グループによって、はやくも一八九五年の末に『ラボーチェエ・デーロ』という名の新聞の創刊号が作成されたのが、それである。この号は印刷にまわすばかりになっていたのだが、一八九五年一二月八日から九日にかけておこなわれた手入れのさいに、団員の一人アナトーリ・アレクセーエヴィチ・ヴァネーエフ* の家で憲兵に押収されてしまい、第一次の『ラボーチェエ・デーロ』はついに陽の目を見ないでしまった。この新聞(三五)（おそらく今後三〇年もたったら、『ルースカヤ・スタリナ』とでもいったものが、この新聞を瞥保

局の記録保管所から引っぱりだしてくることだろう）の社説は、ロシアの労働者階級の歴史的諸任務を概説し、これらの任務の筆頭に政治的自由の獲得をおいていた。その次には、各地の読み書き委員会を警察が破壊した問題を扱った『わが大臣諸公はなにを考えているか？』と題した論文[28]、さらにペテルブルグばかりでなくロシアの他の諸地方からも寄せられた多くの通信（たとえばヤロスラヴリ県における労働者の殺戮[29]についての通信）があった。このように、九〇年代のロシアの社会民主主義者のこの、われわれの思いちがいでなければ「最初の試み」は、ストライキ闘争を専制にたいする革命運動に結びつけ、反動的な非開化主義の政治の抑圧下にある人々の全部を社会民主党の支持者に獲得することをめざした新聞であって、狭い地方的な新聞でもなければ、まして「経済主義的な」新聞でもなかった。そして、当時の運動の状態をすこしでも知っている人なら、このような新聞が首都の労働者からも革命的インテリゲンツィアからも完全な共感をもってむかえられ、非常に広く普及したであろうことを、疑わないであろう。この企画が失敗したことは、当時の社会民主主義者たちが革命的経験と実地の訓練との不足のために時代の緊要な要請をみたす力がなかったことを、立証しただけである。『サンクトーペテルブルグスキー・ラボーチー・リストーク[30]』や、とりわけ『ラボーチャヤ・ガゼータ』についても、さらにまた一八九八年の春に成立したロシア社会民主労働党[31]の『宣言』についても、これと同じことを言わなければならない。いうまでもなく、われわれは、こういう訓練の不足のかどで当時の活動家を責めようとは夢にも思わない。しかし、運動の経験を利用し、この経験から実践的教訓を引きだすためには、あれこれの欠陥の原因や意義を完全に理解することが必要である。そこで、一八九五―一八九八年に活動していた社会民主主義者の一部が（おそらくはその大多数さえもが）、「自然発生的」運動が始まったばかりのその当時でも、最も広範な綱領と戦闘的戦術とを提出することが可能であると、まったく正当に考えていたということを確認することが、きわめて重要になるのである。** 大多数の革命家が訓練を欠いていたことはまったく当然な現象であったから、なにも特別の懸念をおこさせるものではありえなかった。任務が正しく提起されさえすれば、またこの任務の実現を繰りかえし試みるだけの精力がありさえすれば、一時の失敗はなかばの不幸でしかなかった。革命的練達と組織者としての手腕は、おいおいに獲得できるものである。ただ、必要な資質を自分のうちにやしなおうという意欲がありさえすればよいのだ！　欠陥が意識されていさえすればよいのだ！　革命の事業では、欠陥を意識することは、

それをなかば以上訂正したにひとしいのである。

* ア・ア・ヴァネーエフは、未決監の独房に収容されていたときにかかった肺患がもとで、一八九九年に東部シベリアで死去した。そこで、われわれは、本文にあげた情報を公表してもさしつかえないと考えたしだいである。この情報が確実なものであることを、われわれは保証する。というのは、この情報は、ア・ア・ヴァネーエフの直接の知人で、最も親密だった人々から出たものだからである。

** 『『イスクラ』は、九〇年代末の社会民主主義者の活動にたいして否定的な態度をとっているが、これは、その当時には、小さい要求のための闘争以外に他の活動をおこなう条件がなかったことを無視するものである』──このように「経済主義者たち」は、その『ロシアの社会民主主義的諸機関紙への手紙』（『イスクラ』第一二号）のなかで声明している。本文にあげたいろいろな事実は、「条件がなかった」ということの主張が真実と正反対であることを立証している。九〇年代の末どころか、そのなかごろにさえ、小さい要求のための闘争以外の活動をおこなうのに必要ないっさいの条件が、指導者の十分な訓練ということを除けばいっさいの条件が、完全にそなわっていた。しかも、「経済主義者たち」は、われわれ自身の、イデオローグや指導者の、この訓練不足を率直に認めようとしないで、万事を「条件がなかった」ことのせいに、つまり物質的環境の影響のせいにしようとしている。その物質的環境こそ道を規定するもので、どんなイデオローグもこの道から運動をそらすことはできない、というのだ。これが自然発生性への屈従でなくてなんであろう？「イデオローグ」が自分の欠陥に惚れこんでいるものでなくてなんであろう？

しかし、この意識がくもりはじめて（ところで、前記のいろいろなグループの活動家たちにあっては、この意識はまことに生きいきとしていた）、欠陥を美徳にまつりあげるのをはばからず、自分たちの自然発生性への屈従と拝跪を理論的に基礎づけようとさえ試みる人々が──いや、社会民主主義的機関紙さえが──現われてきたとき、このなかばの不幸はほんとうの不幸になった。この潮流の内容は、「経済主義」という概念ではそれを表現するのに狭すぎて、きわめて不正確にしか特徴づけられないのだが、いまやこの潮流に決算をあたえるべき時がきている。

(b) 自然発生性への拝跪。『ラボーチャヤ・ムィスリ』

この拝跪の文筆上の現われを論じるまえに、われわれは、次の特徴的な事実（これも、さきほど述べたのと同じ出所からわれわれに知らされたものだが）を指摘しておこう。この事実は、ペテルブルグで活動していた同志たちのあいだに、ロシア社会民主党の将来の二つの潮流のあいだに不和が発生し成長していったしだいを、いくらか明らかにす

るものである。一八九七年のはじめに、ア・ア・ヴァネーエフと彼の幾人かの同志とは、流刑地への出発をまえにして、ある私的な会合[63]に出席するおりがあったが、そこで「労働者階級解放闘争同盟」の「老人組」と「青年組」の同盟員がおちあった。会話はおもに組織のこと、ことに『労働者基金組合規約』についておこなわれた。この『規約』というのは、『小型版「ラボートニク」』[64]第九—一〇号（四六ページ）にその最終的な案文が印刷されたものである。「老人組」（当時ペテルブルグの社会民主主義者たちが冗談によんでいた名で言えば、「十二月党員（デカブリスト）」）と「青年組」のある人々（のちに『ラボーチャヤ・ムィスリ』に密接に参加した人々）とのあいだに、たちまち、鋭い意見の相違が表面化して、激しい論戦が燃えあがった。「青年組」は、印刷された案文のとおりの規約の主要原則を擁護した。「老人組」は、われわれにまずもって必要なのは、けっしてこんなものではなく、「闘争同盟」を固めて革命家の組織に仕上げることであり、いろいろな労働者基金組合や、学生青年のあいだの宣伝サークルなどは、ともにこの革命家の組織に従属すべきものだ、と述べた。論争者たちが、この意見の相違が分裂の端緒になろうなどとは夢にも考えず、むしろ、この意見の相違はその場かぎりのもの、偶然的なものと考えていたことは、いうまでもない。だが、この事実は、ロシアでも、「経済主義」の発生と伝播はけっして「古い」社会民主主義者との闘争なしにおこなわれたわけではないことを、示すものである（今日の「経済主義者たち」は往々この点を忘れているが）。そして、この闘争の大部分がなんの「記録上の」跡も残していないとすれば、その唯一の理由は、活動していたサークルのメンバーが信じられないほど頻繁に変わって、どんな継承性も打ちたてられず、そのために意見の相違も全然記録にとどめられなかったことにある。

『ラボーチャヤ・ムィスリ』の発刊は「経済主義」を明るみに引きだしたが、それとても一挙にそうしたわけではなかった。いろいろな都市でこの新潮流があるいは成功しあるいは失敗したのには、どんなに多くの偶然的な要素があずかっていたかを理解するためには、また、これがはたして実際に特別の一潮流であるのか、それともたんに個々人の訓練不足の現われにすぎないのか、この「新要素」の味方も敵もじつに長いあいだきめかねたこと、またきめることが文字どおりまったく不可能であったことを理解するためには、多くのロシアのサークルの活動条件とその短命なことを具体的に思いうかべる必要がある（ところで、それを具体的に思いうかべているのは、それを体験した者だけである）。たとえば、こんにゃく版で刷った『ラボー

チャヤ・ムィスリ』のはじめの数号などは、圧倒的多数の社会民主主義者には全然知られずに終わったので、今日われわれが同紙創刊号の社説を引き合いにだすことができるのは、まったくこの社説がヴェ・イの論文（『小型版「ラボートニク」』第九一一〇号、四七ページ以下）に転載されたおかげである。もちろん、ヴェ・イは、前記の諸新聞や新聞発行計画とはいちじるしく趣きを異にしていたこの新しい新聞を、熱心に――法外に熱心に――ほめそやさずにはおかなかった。* ところで、この社説は、立ちいって取り扱うだけの値うちがある。それほどこの社説は、『ラボーチャヤ・ムィスリ』の、また一般に「経済主義」の、全精神をあざやかに言いあらわしていたのである。

＊ ついでに一言すれば、「経済主義」が、ことに国外では、すでに完全に明確になっていた一八九八年一一月に、ラボーチャヤ・ムィスリ』にこのように賛辞をおくったのは、その後まもなく『ラボーチェエ・デーロ』の編集局員の一人になったあのヴェ・イその人である。それでも『ラボーチェエ・デーロ』は、ロシアの社会民主党内に二つの潮流が存在することを否定したし、いまでも否定しつづけているのだ！

社説は、青袖ども〔憲兵〕に労働運動の発展が阻止できるものではない、と指摘したのち、つづけてこう書いている。「……労働運動がこのような根づよさを得たのは、労働者が自分の運命を指導者たちの手からもぎとって、ついに自分の手にそれをとりあげつつあるたまものである」と。そして、この基本命題がつづいてくわしく展開される。事実は、指導者たち（すなわち社会民主主義者、「闘争同盟」の組織者たち）は警察によっていわば労働者の手からもぎとられたのだ。* ――ところが、このことを、まるで労働者がこれらの指導者とたたかって、そのくびきをはらいおとしたことのように、見せかけるのだ！ 前進するよう、革命的組織を固めるよう、政治活動を拡大するように呼びかけようとはしないで、後退するよう、組合主義的闘争だけをやるように呼びかけはじめたのだった。「政治的理想をつねに忘れまいとする志向のために、運動の経済的基礎がぼやかされる」だの、労働運動の標語は「経済状態のための闘争」（！）である、あるいはもっとすてきなことに、「労働者が労働者のために」ということであると宣言し、また、ストライキ基金は「運動にとって他の凡百の組織よりも貴重である」（この一八九七年一〇月になされた主張を、一八九七年のはじめにおこなわれた「十二月党員」と青年組との論争に比較せよ）、等々と声明したのだ。労働者の「精鋭分子」にではなく、「中程度の」労働者、大衆たる労働者に重点をおかなければならないとか、「政治はつねに従順に経済のあとに従う」** などというような警句が流行となって、多くの場合合法的な解説をつうじてマルクス主義

の断片を読み知っただけで運動に引きいれられてくる青年大衆に、さからいがたい影響をおよぼした。

＊　この比喩が正しいことは、次の特徴的な事実から知ることができる。「十二月党員」の逮捕のあとで、この一斉検挙には、「十二月党員」に接触のあった一グループに近い関係をもっていた挑発者エヌ・エヌ・ミハイロフ（歯科医）が協力したという情報が、シリッセリブルグ大通りの労働者のあいだにひろまったとき、これらの労働者は、激昂のあまり、ミハイロフの殺害をきめたほどである。

＊＊『ラボーチャヤ・ムィスリ』創刊号の同じ社説からとったことば。これらの「ロシア社会民主党のヴェ・ヴェたち(注32)」の理論的素養の程度は、これによっておしはかられる。政治と経済の関係をこれと同じように理解したために、すでにずっとまえから「反動の達人」というあだ名をもらっていたほんもののヴェ・ヴェ氏にたいして、文書のうえでマルクス主義者の論戦がおこなわれていたちょうどそのときに、この諸君は「経済的唯物論」の粗雑な卑俗化の繰りかえしをやっていたのだ！

これは、意識性が自然発生性によって完全に圧服されたものであった。すなわち、ヴェ・ヴェ氏の「思想」の繰りかえしをやっていた「社会民主主義者たち」の自然発生性、一ルーブリにつき一コペイカ増してもらうほうが、どんな社会主義やどんな政治より身近でたいせつであるとか、労働者は「なにか未来の世代のためなどでなく、自分自身と自分の子どものためにたたかっているのだということを自覚して、闘争を」おこなわなければならない（『ラボーチャヤ・ムィスリ』第一号、社説）とかいう議論にまるめられた労働者の自然発生性によって圧服されたものであった。こういう空文句は、日ごろ西ヨーロッパのブルジョアの愛用の武器となってきたもので、彼らは、社会主義を憎むところから、みずからイギリス流の組合主義を祖国の土壌に移し植えることに尽力し（ドイツの「社会政策家」ヒルシュのように）、労働者にむかっては、純労働組合的闘争＊こそ、なにか未来の社会主義のもとに住む、なにか未来の世代のためなどでなく、自分自身と自分の子供とのためにおこなう闘争なのだ、と言いきかせたのであった。ところが、いま「ロシア社会民主党のヴェ・ヴェたち」は、このブルジョアの空文句の繰りかえしにとりかかったのだ。ここで三つの事情を指摘しておくことが重要である。それは、われわれが今日の＊＊意見の相違の検討を今後さらにすすめるにあたって非常に役に立つであろう。

＊　ドイツ人は、「純労働組合的」闘争の主張者をさす〈Nur-Gewerkschaftler〉という、特別の用語さえもっている。

＊＊　われわれが今日のということばを強調するのは、パリサイ人式に肩をすぼめて、「いまになって『ラボーチャヤ・ムィスリ』に毒づくのはやさしいことだが、それは大昔の話じゃ

ないか！」という人々があるだろうことを、考えてのことである。このような今日のパリサイ人にたいしてわれわれはこう答えよう、――Mutato nomine de te fabula narratur〔名まえを変えれば、これはおまえの話なのだ〕と。彼らが『ラボーチャヤ・ムィスリ』の思想に完全に隷属していることについては、のちほどこれを立証するであろう。

第一に、前述したように意識性が自然発生性によって圧服されたのは、これまた自然発生的におこなわれたことである。こう言うと地口のように聞こえるが、――悲しいかな！――これはにがい真実なのである。この圧服は、二つの、まったく対立した見解が公然とたたかって、一方が他方に打ちかつという道すじでおこなわれたのではなく、「老人組」の革命家がますます数多く憲兵によって「もぎとられ」、「青年組」の「ロシア社会民主党のヴェ・ヴェたち」がますます数多く舞台に登場してくる、という道すじでおこなわれたのである。今日のロシアの運動に参加したといわないまでも、その空気だけでも嗅いだことのある者ならだれでも、まさにこれが実情であることをよく知っている。しかも、それにもかかわらずわれわれが、この周知の事実を完全に理解してほしいと、ことさら読者に要求し、またこれをいわば目に見えるようにわからせるために、第一次の『ラボーチェエ・デーロ』や、一八九七年はじめの「老人組」と「青年組」の論争についての資料をあげるのは、広範な公衆（またはごく若年の青年たち）がこの事実を知らないことをあてこんで、自分たちの「民主主義」をひけらかす連中がいるからである。この問題には、あとでもう一度たちかえろう。

第二に、すでに「経済主義」の最初の文筆上の現われにおいて、すこぶる独特で、今日の社会民主主義者たちのあいだのいっさいの意見の相違を理解するうえにきわめて特徴的な現象を認めることができる。それは、「純労働運動」の味方たち、プロレタリア闘争との最も緊密な、最も「有機的な」（『ラボーチェエ・デーロ』の表現）結びつきの礼賛者たち、あらゆる非労働者的インテリゲンツィア（たとえそれが社会主義的インテリゲンツィアであっても）の敵対者たちが、自分の立場を擁護するのに、ブルジョア的な「純組合主義者」の論拠にたよることをよぎなくされているということである。このことは、『ラボーチャヤ・ムィスリ』が最初から――自分ではそれと意識しないで――『クレード』の綱領の実行にとりかかったことを示している。それはまた次のことを示している――（これは『ラボーチェエ・デーロ』にはどうしても理解できないことである）――。すなわち、およそ労働運動の自然発生性のまえに拝跪すること、およそ「意識的要素」の役割、社会民主党の

役割を軽視することは、とりもなおさず――その軽視する人がそれを望むと望まないとにはまったくかかわりなく――労働者にたいするブルジョア・イデオロギーの影響を強めることを意味する、ということである。「イデオロギーの過大評価」*や、意識的要素の役割の誇張、**等々について論じる人々はみな、労働者が「自分の運命を指導者たちの手からもぎとり」さえすれば、純労働運動は独力で独自のイデオロギーをつくりあげることができるし、また現につくりあげつつある、と想像しているのである。だが、これはひどいまちがいである。以上に述べたことの補足として、なおK・カウツキーがオーストリア社会民主党の新綱領草案について述べた、***次の、きわめて正しくまた重要なことばを引用しよう。

* 『イスクラ』第一二号所載、「経済主義者たち」の手紙。

** 『ラボーチェエ・デーロ』第一〇号。

*** 『ノイエ・ツァイト』一九〇一―一九〇二年、第二〇年、第一巻第三号、七九ページ。K・カウツキーが論じている委員会の草案は、いくらか変更をくわえて（昨年末に）ウィーン大会(32)で採用された。

「わが修正主義的批判家たちの多くは、マルクスが、経済的発展と階級闘争とは社会主義的生産の条件をつくりだすだけでなく、さらにこの社会主義的生産が必然的だという意識」（傍点はカウツキーのもの）「をも直接につくりだす、と主張したかのように考えている。そこで、これらの批判家たちは異議をとなえて言う。最高の資本主義的発展をとげた国であるイギリスは、どこよりもこのような意識に遠い、と。新しい草案によると、こういうやり方で論駁された、いわゆる正統マルクス主義の見地なるものを、オーストリアの綱領の起草委員会もとにしているように、うけとられるおそれがある。草案には次のように書かれている。『資本主義の発展がプロレタリアートを増大させればさせるほど、プロレタリアートはますます資本主義とたたかわざるをえなくなり、またたたかう能力を得る。プロレタリアートは』社会主義の可能性と必然性とを『意識するにいたる』うんぬん。こういう文脈のうちにおかれると、社会主義的意識は、プロレタリア的階級闘争の必然的な、直接の結果であるかのようにみえる。だが、これはまったくのまちがいである。もちろん、学説としての社会主義は、プロレタリアートの階級闘争と同じく、今日の経済関係のうちに根ざしており、またそれと同じく、資本主義の生みだす大衆の貧困と悲惨にたいする闘争のうちから成立してくる。けれども、社会主義と階級闘争は、並行して生まれるものであって、一方が他方から生まれるのではなく、また

それぞれ違った前提条件のもとで生まれるのである。近代の社会主義的意識は、深い科学的知識にもとづいてのみ生まれることができる。じっさい、今日の経済科学は、たとえば今日の技術などとまったく同じように、社会主義的生産の一条件であるが、しかしプロレタリアートは、どんなにそれを望んだところで、そのどちらをもつくりだすことはできない。それらは、両方とも、今日の社会過程のうちから生まれてくる。ところで、科学の担い手は、プロレタリアートではなく、ブルジョア・インテリゲンツィア」（傍点はカウツキーのもの）「である。近代社会主義も、やはりこの層の個々の成員の頭脳に生まれ、彼らによってまずはじめに知能のすぐれたプロレタリアに伝えられたのであって、ついでこれらのプロレタリアが、事情の許すところで、プロレタリアートの階級闘争のなかにそれをもちこむのである。だから、社会主義的意識は、プロレタリアートの階級闘争のなかへ外部からもちこまれたあるもの（von aussen Hineingetragenes）であって、この階級闘争のなかから自然発生的に（urwüchsig）生まれてきたものではない。したがって、旧ハインフェルト綱領もまた、プロレタリアートのなかに自分たちの地位と自分たちの任務とについての意識をもちこむこと」（文字どおりには、「プロレタリアートを……意識でみたすこと」）「が社会民主党の任務であると、まったく正しく述べている。もしこの意識が階級闘争のなかからひとりでに発生してくるものなら、そんな必要はないわけである。ところが、新しい草案は、この命題を旧綱領から受けついで、右に引用した命題にくっつけてしまった。だが、そのために思想の歩みはまったく断ちきられてしまった。……」

労働者大衆自身が彼らの運動の過程それ自体のあいだに独自のイデオロギーをつくりだすことが考えられない以上、*問題はこうでしかありえない——ブルジョア・イデオロギーか、それとも社会主義的イデオロギーか、と。そこには中間はない（なぜなら、人類はどんな「第三の」イデオロギーもつくりださなかったし、それにまた総じて階級矛盾によって分裂させられている社会に、階級外の、あるいは超階級的なイデオロギーなどは、けっしてありえないからである）。だから、およそ社会主義的イデオロギーを軽視すること、およそそれから遠ざかることは、とりもなおさず、ブルジョア・イデオロギーを強めることを意味する。しかし、労働運動の自然発生性をうんぬんする人々がいる。しかし、労働運動の自然発生的な発展は、まさに運動をブルジョア・イデオロギーに従属させる方向にすすみ、ほかならぬ『クレード』の綱領にしたがってすすむのである。なぜなら、自然

発生的な労働運動とは組合主義であり、Nur-Gewerkschaftlerei〔純組合主義〕であるが、組合主義とは、まさしくブルジョアジーによる労働者の思想的奴隷化を意味するからである。だから、われわれの任務、すなわち社会民主党の任務は、自然発生性と闘争すること、ブルジョアジーの庇護のもとにはいろうとする組合主義のこの自然発生的な志向から労働運動をそらして、革命的社会民主党の庇護のもとに引きいれることである。たとえ最も〔すぐれた理論に〕鼓舞されたイデオローグがどれほど努力しようとも、物質的諸要素と物質的環境との交互作用によって規定される道から労働運動をそらすことはできない、という『イスクラ』第一二号の「経済主義的な」手紙の筆者たちの文句は、だから、社会主義を放棄するのにまったくひとしい。そして、もしこの筆者たちが自分の言っていることを最後まで、恐れることなく、徹底的に考えぬく能力をもっていたなら――およそ文筆活動や公共的活動の舞台に立つ者はすべて、そういうふうに自分の思想を考えぬかなければならないのだが――、彼らは「無用な手をからっぽな胸のうえに組み」、そうして……そうして、労働運動を「最小抵抗線にそって」、すなわちブルジョア的組合主義の線にそって引っぱってゆくストルーヴェやプロコポーヴィチ一派の諸氏なり、労働運動を坊主的＝憲兵的「イデオロギー」の線にそって引っぱってゆくズバートフ一派の諸氏なりに、活動場面を明け渡すほかなかったはずである。

＊　もちろん、これは、労働者がこのイデオロギーをつくりあげる仕事に参加しないということではない。ただ、彼らが参加する場合には、労働者としてではなく、社会主義の理論家として、つまりプルードンやヴァイトリングのような人として、参加するのである。言いかえれば、彼らが、多少ともその時代の知識をもっていて、この知識を前進させることができるときにだけ、またそのかぎりでだけ、参加するのである。だが、労働者がこういうことをもっと頻繁にやれるようにするには、労働者の意識水準を全体として高めるために極力骨をおる必要がある。そのためには、労働者は、「労働者むきの文献」という人為的にせばめられた枠内に閉じこもらないで、ますます多く一般的な文献を摂取することを学ぶ必要がある。「閉じこもる」というより、「閉じこめられる」といったほうが、むしろ正しいだろう。なぜなら、労働者自身は、インテリゲンツィアを対象として書かれたものでもなんでも読んでいるし、また読みたがっているのだが、ただ一部の（よくない）インテリだけが、「労働者のためには」工場内の事態を話してきかせ、とっくに人の知っていることを繰りかえして聞かせれば十分だ、と考えているのだからである。

ドイツの例を思いおこしてみたまえ。ドイツの労働運動にたいするラサールの歴史的功績はどういう点にあったか？　それは、彼がドイツの運動を、それが自然発生的に

向かいつつあった（シュルツェ＝デーリチュ一派やその同類どもの好意ある協力のもとに）進歩党的組合主義や協同組合運動の道からそらしたことにあった。[26] この任務を遂行するためには、自然発生的要素の軽視だとか、過程としての戦術だとか、諸要素と環境との交互作用だとかなんとかいうおしゃべりとは、およそ似もつかない、あるものが必要であった。そのためには、自然発生性との必死の闘争が必要であった。そして、この闘争を長い長い年月にわたっておこなった結果としてはじめて、たとえばベルリンの労働者の住民が進歩党の支柱から転じて社会民主党の最良のとりでの一つになったというようなことが、なしとげられたのである。そしてまた、この闘争はいまでもけっして終わっていない（ドイツの運動史をプロコポーヴィチによって研究し[27]、その哲学をストルーヴェによって研究している人々には、もう終わったと思えるかもしれないが）。いまでもドイツの労働者階級は、そう言ってよければ、いくつかのイデオロギーに分裂している。すなわち、労働者の一部はカトリック系および王党系の労働組合に、他の一部はイギリスの組合主義のブルジョア的礼賛者たちの創立したヒルシュ＝ドゥンカー組合に[28]、次の一部は社会民主主義的な労働組合に結集されている。この最後にあげた部分は、ほかのどれよりもはるかに大きいが、社会民主主義的イデオロギーがこのような首位をかちえたのも、ひとえに他のいっさいのイデオロギーにたいしてたゆみない闘争をおこなったからであって、今後もそうしてこそはじめてこの首位をたもつことができるであろう。

読者はこうおたずねであろう。では、なぜ自然発生的運動、最小抵抗線をすすむ運動は、ほかならぬブルジョア・イデオロギーの支配にむかってすすむのか、と。それは、ブルジョア・イデオロギーが、社会主義的イデオロギーより、その起原においてずっと古く、いっそう全面的に仕上げられていて、はかりしれないほど多くの普及手段をもっているという、単純な理由による。* だから、ある国の社会主義運動が若ければ若いほど、非社会主義的イデオロギーを強めようとするあらゆる試みにたいする闘争をいっそう精力的におこなわなければならず、「意識的要素の誇張」等々をやかましく攻撃する、よくない助言者たちにまどわされないよう、いっそう断固として労働者に警告する必要があるのである。例の「経済主義的な」手紙の筆者たちは、『ラボーチェエ・デーロ』に調子を合わせて、運動の幼年期につきものの偏狭さをさんざんに叱りつけている。われわれは、これにたいしてこう答えよう。いかにもわれわれの運動は、実際に幼年期にある。だから、できるだけ速く成人するために、それは、自然発生性へのおのれの拝跪によ

って運動の成長を妨げるような人々にたいしては、ほかならぬ偏狭の精神を身につけなければならないのだ。闘争のあらゆる決定的な局面をすでにとっくの昔に体験してきた老人を気どるくらい、こっけいで有害なものはない！と。

＊　労働者階級は自然発生的に社会主義に引きつけられる、としばしば言われている。このことばは、次の意味ではまったく正しい。すなわち、社会主義理論は、最も深く、また最も正しく労働者階級の困苦の原因を示しているので、もしこの理論自身が自然発生性に降伏さえしなければ、もしそれが自然発生性を自己に従属させさえすれば、労働者はこの理論をきわめて容易にわがものにする、という意味である。普通ならこれは自明なことだが、『ラボーチェエ・デーロ』は、まさにこういう自明なことを忘れ、また歪曲するのである。労働者階級は自然発生的に社会主義に引きつけられるが、それにもかかわらず、労働者に自然発生的に最も多く押しつけられてくるものは、最も普及している（そして、たえず多種多様なかたちで復活されている）ブルジョア・イデオロギーである。

第三に、『ラボーチャヤ・ムィスリ』の創刊号を見てわかることは、「経済主義」という名称（もちろん、われわれはこの名称の使用をやめるつもりはない。というのは、この呼び名は、とにもかくにもすでに確立されたものであるから）が新潮流の本質を十分正確に伝えるものでないことである。『ラボーチャヤ・ムィスリ』は政治闘争をまったく否定しているわけではない。『ラボーチャヤ・ムィスリ』第一号にのった基金組合規約は、政府との闘争のことを述べている。ただ『ラボーチャヤ・ムィスリ』は、「政治はつねに従順に経済のあとに従う」と考えているだけである（他方、『ラボーチェエ・デーロ』はこの命題を言いかえて、その綱領のなかで、「ロシアでは、他のどの国にもまして、経済闘争は政治闘争と切り離しえない」と主張している）。もし政治ということを社会民主主義的政治の意味に解するなら、『ラボーチャヤ・ムィスリ』と『ラボーチェエ・デーロ』のこれらの命題はまったく誤っている。すでに見たように、労働者の経済闘争が、ブルジョアや坊主などの政治と結びついている（切り離しえないほどでないにしても）ことが、ごくしばしばある。もしまた政治ということを組合主義的政治の意味に解するなら、すなわち、労働者の境遇につきものの困苦の克服を目的とするが、まだこの境遇そのものを廃止しない、すなわち資本への労働の隷属を廃絶しないあれこれの方策を、国家に実施させようとするすべての労働者の共通の志向という意味に解するなら、そのときには『ラボーチェエ・デーロ』の命題は正しい。このような志向なら、社会主義に敵意をいだいているイギリスの組合主義者にも、カトリック系の労働者にも、「ズバートフ系」の労働者その他にも、実際に共通してい

る。政治にもいろいろあるというものだ。このように、『ラボーチャヤ・ムィスリ』は、政治闘争についても、この闘争の否定というよりは、むしろこの闘争の自然発生性への、この闘争の無意識性への拝跪を示していることがわかる。同紙は、労働運動そのもののなかから自然発生的に成長してくる政治闘争（より正しく言えば、労働者の政治的願望と要求）を完全に承認するが、社会主義の一般的任務と今日のロシアの諸条件とにおうじた、特有の意味での社会民主主義的政治を自主的につくりあげることを、まったくやらないのである。われわれは次に、『ラボーチェエ・デーロ』の誤りもこれと同じものであることを示そう。

（c）「自己解放団」と『ラボーチェエ・デーロ』

われわれが、あまり人の知らない、いまではほとんど忘れられている『ラボーチャヤ・ムィスリ』創刊号の社説をこんなにくわしく検討したのは、この社説が、のちに無数の細流となって地表に注ぎでたあの一般的潮流を、だれよりも早く、またほかのだれよりもあざやかに言いあらわしたからである。ヴェ・イが『ラボーチャヤ・ムィスリ』創刊号とその社説とをほめそやしながら、この社説は「鋭く、激情をもって」書かれている（『小型版「ラボートニク」』第九—一〇号、四九ページ）と言ったのは、まったく正しかった。自分の意見に確信をもち、自分は新しいものを世に提供しているのだと考えている者はだれでも、「激情をもって」書き、また自分の見解をあざやかに言いあらわすように書くものである。ただ二道かけることに慣れている連中だけが、どんな「激情」ももちあわせないのだ。そういう連中だけが、きのうは『ラボーチャヤ・ムィスリ』の激情をほめながら、きょうは同紙の論敵を「論戦上の激情」の理由で攻撃するようなまねができるのである。

われわれは『「ラボーチャヤ・ムィスリ」別冊付録』をすどおりして（「経済主義者」の思想をだれよりも一貫したかたちで言いあらわしているこの作品については、のちにいろいろな問題に関連して言及するおりがあろう）、『労働者自己解放団の檄』（一八九九年三月。ロンドンの『ナカヌーネ』[32]第七号、一八九九年七月、に転載されている）のことをごく簡単に指摘しておこう。この檄の筆者たちは、「労働者のロシアはいまやっと目をさましかけ、やっとあたりを見まわしているところで、本能的に手あたりしだいの闘争手段をつかんでいる」と、まことに正しく述べているが、しかし、本能的なものとはまさに無意識的なもの（自然発生的なもの）であり、社会主義者の助力を必要とすること、「手あたりしだいの」闘争手段とは、今日の社

会ではいつでも組合主義的な闘争手段であろうし、また「手あたりしだいの」イデオロギーとはブルジョア的（組合主義的）イデオロギーであろうということを忘れて、このことから『ラボーチャヤ・ムィスリ』と同一のまちがった結論を引きだしている。同紙とまったく同様に、これらの筆者は、政治をも「否定」しないが、ただ（ただ！）ヴェ・ヴェ氏の口まねをして、政治は上部構造だから、「政治的扇動は経済闘争のための扇動の上部構造でなければならず、この闘争を基盤として成長し、この闘争のあとに従ってすすまなければならない」と、語るのである。

『ラボーチェエ・デーロ』についていえば、同誌はいきなり「経済主義者」の「擁護」をもってその活動を始めた。その創刊号（第一号、一四一―一四二ページ）で『ラボーチェエ・デーロ』は、アクセリロードがその有名な小冊子*のなかで「経済主義者」に警告を発したのは、「どういう若い同志たちのことを言ったのか、われわれにはわからない」という、まっかなうそをついたが、このうそをめぐって燃えあがったアクセリロードとプレハーノフ相手の論戦のさいには、「当惑をよそおうという形式で、この不当な非難」（アクセリロードが「経済主義者」を見識の狭さの理由で非難したこと）「から若い在外社会民主主義者全体を擁護したいと思ったのだ」と、認めないわけにはいかなかった。(三) 実際には、この非難はまったく正しいものであったし、『ラボーチェエ・デーロ』は、この非難がとりわけ同誌の編集局員であるヴェ・イにもむけられていたことを、よく知っていたのである。ついでに一言すれば、この論戦では、私の小冊子『ロシア社会民主主義者の任務』の解釈については、アクセリロードがまったく正しく、『ラボーチェエ・デーロ』がまったくまちがっていた。この小冊子は、一八九七年に『ラボーチャヤ・ムィスリ』が発刊されるまえに書かれたもので、そのころには私は、さきに特徴づけたようなサンクト－ペテルブルグ「闘争同盟」の最初の傾向を支配的な傾向だと考えていたし、またそう考えてもよかった。そのうえ、すくなくとも一八九八年のなかばまで、この傾向は実際に支配的だったのである。だから、サンクト－ペテルブルグで一八九七―一八九八年に「経済主義的」見解によって駆逐されてしまったその見解を述べたこの小冊子を、「経済主義」が存在するし、それは危険だという主張を反駁するための典拠として引き合いにだす権利を、『ラボーチェエ・デーロ』はまったくもっていなかったのである。**

* 『ロシア社会民主主義者の今日の任務と戦術の問題によせて』、ジュネーヴ、一八九八年。一八九七年に書かれた『ラボーチャヤ・ガゼータ』紙にあてた二つの手紙。

＊＊『ラボーチェエ・デーロ』が、その『回答』のなかに次のように書いたのは、自分を弁護しようとして、その第一のうそ（「ペ・ペ・アクセリロードがどういう若い同志たちのことを言ったのか、われわれにはわからない」という）に第二のうそをつけくわえたものである。「『任務』の書評が書かれたあとで、一部のロシア社会民主主義者のあいだに経済的一面性への傾向が生まれるか、あるいは多少ともはっきりした形をとってきたが、この傾向は、『任務』のなかに描かれているわれわれの運動の状態にくらべて一歩後退である。」（九ページ）一九〇〇年に出版された回答はこう言っている。ところで、『ラボーチェエ・デーロ』の創刊号（書評がのった）は一八九九年四月に出た。いったい「経済主義」は、一八九九年にはじめて生まれたものであろうか？　そうではない。一八九九年には、「経済主義」にたいするロシア社会民主主義者の抗議（『クレード』にたいする抗議）の声がはじめてあげられたのである。「経済主義」そのものは一八九七年に生まれたことは、『ラボーチェエ・デーロ』がよく承知しているとおりである。なぜなら、ヴェ・イはすでに一八九八年一一月に（『小型版「ラボートニク」』第九—一〇号）、『ラボーチャヤ・ムィスリ』をほめそやしたからである。

しかし、『ラボーチェエ・デーロ』は「経済主義者」を「擁護した」だけでなく、自分もたえず彼らの基本的な謬見に迷いこんでいった。こういうふうに迷いこんでいった根源は、『ラボーチェエ・デーロ』の綱領のなかの次の命題が二とおりの意味に理解されることにあった。それはこうである。「われわれの考えで、ロシアの生活のなかで最も重要な現象であり、同盟の文筆活動の任務」（傍点はわれわれのもの）「と性格を主として規定するであろう」（傍点はわれわれのもの）「ものは、近年発生した大衆的労働運動」（傍点は『ラボーチェエ・デーロ』のもの）「である。」大衆運動が最も重要な現象であるということには、なんの異論もあるはずがない。だが、全問題は、この大衆運動が「任務を規定する」ということをどう理解するかである。これは二とおりの意味に理解することができる。すなわち、この運動の自然発生性の前に拝跪するという意味、つまり、社会民主党の役割を、あるがままの労働運動へのたんなる奉仕に帰着させるという意味（これが『ラボーチャヤ・ムィスリ』、「自己解放団」その他の「経済主義者」の理解である）にも、また、この大衆運動が発生する以前の時期にはそれで足りていた任務にくらべて、はるかに複雑な、新しい理論上、政治上、組織上の諸任務を、大衆運動がわれわれに提起するという意味にも、どちらにも解することができる。『ラボーチェエ・デーロ』は、まさにこの第一の理解に傾いていたし、いまでも傾いている。なぜなら、同誌は、どのような新しい任務についてもなにひとつはっきりしたことは言わなかったし、また、まるでこの「大衆運動」が、この運動によって提起される諸任務を明

僚に意識し解決する必要をわれわれに免除してくれるかのような調子で、つねに論じてきたからである。『ラボーチエエ・デーロ』が、大衆的労働運動にたいして専制の打倒を第一の任務として提起することはできないと考えて、この任務を（大衆運動の名において）最も身近な政治的要求のための闘争という任務に低めた（『回答』、二五ページ）ことをあげれば、十分である。

『ラボーチェエ・デーロ』第七号所載の同誌編集局員ベ・クリチェフスキーの論文——『ロシアの運動における経済闘争と政治闘争』——も、これと同じ誤りを繰りかえしている論文であるが、*この論文はすどおりして、すぐさま『ラボーチェエ・デーロ』第一〇号に移ろう。もちろん、われわれは、ベ・クリチェフスキーとマルトィノフが『ザリャー』と『イスクラ』にたいしておこなった個々の反論の検討に立ちいろうとするものではない。ここでわれわれが関心をもつのは、『ラボーチェエ・デーロ』が、その第一〇号でとった原則的立場だけである。たとえば、『ラボーチェエ・デーロ』が、

「社会民主党はなにか一つのあらかじめ考案された政治闘争の計画や方法によって自分の手をしばったり、自分の活動をせばめたりはしない。——社会民主党は、党の現存の力量に相応するものでさえあれば、あらゆる闘争手段を認める」うんぬん（『イスクラ』第一号）(三)

という命題と、

「もしどんな情勢のもとでも、またどんな時期にも政治闘争をおこなえるほどに練達した、強固な組織がないなら、それのみが戦術の名に値する、あの堅固な原則に照らしだされ一貫して実行される系統的な活動計画などは、問題にさえなりえない」（『イスクラ』第四号）(三)

という命題とのあいだに「まったくあいいれない矛盾」を見てとったという、珍妙な事柄の検討は、われわれはおこなわないであろう。

* たとえば、この論文では、政治闘争における「段階論」、つまり「おずおずとジグザグ踏んで」の理論は、次のように言いあらわされている。「政治的要求は、その性質上全ロシアに共通であるが、しかし、はじめは」（これは一九〇〇年八月に書かれたものなのだ！）「当該の労働者層（原文のまま！）が経済闘争から引きだした経験に合致するものでなければならない。この経験にもとづいてのみ（！）、政治的扇動に着手することができるし、また着手しなければならない」うんぬん（一一ページ）。四ページでは、筆者は、経済主義的異端という、彼の考えではまったく無根の非難に反抗して悲痛な叫びをあげて言う。「マルクスとエンゲルスの学説によれば、個々の階級の経済的利益が歴史上決定的な役割を演じるのであり、したがって、とくに自己の経済的利益の

ためのプロレタリアートの闘争が、プロレタリアートの階級的発展と解放闘争とにとって第一義的な意義をもたなければならないということを、いやしくも社会民主主義者で知らない者があろうか？」（傍点はわれわれのもの）と。この「したがって」はまったく場ちがいである。経済的利益が決定的な役割を演じるからといって、したがって経済闘争（＝労働組合闘争）が第一義的な意義をもつという結論には、けっしてならない。なぜなら、諸階級の最も本質的で「決定的な」利益は、一般に根本的な政治的改革によってはじめて満足させることができるし、とくにプロレタリアートの基本的な経済的利益は、ブルジョアジーの執権をプロレタリアートの執権とおきかえる政治革命によって、はじめて満足させることができるからである。ベ・クリチェフスキーは、「ロシア社会民主党のヴェ・ヴェたち」の議論（政治は経済のあとに従う、等々）や、ドイツ社会民主党のベルンシュタイン主義者たちの議論（たとえば、ヴォルトマンは、まさにこういう議論を用いて、労働者は政治革命のことを考えるまえに、まずもって「経済的勢力」を獲得しなければならない、ということを証明しようとした）を繰りかえしているのである。

目的にかなったものであるかぎり、あらゆる闘争手段、あらゆる計画と方法を原則上認めるということと、かりにも戦術を論じようと思えば、ある一つの政治的時期には、一貫して実行される一つの計画にしたがって行動する必要があるということとを、混同するのは、あらゆる治療法が医学上認められているということと、ある一つの病気を治療するときには一つの特定の方法を守る必要があるということを、混同するのにまったくひとしい。しかし問題は、『ラボーチェエ・デーロ』が、自然発生性への拝跪とわれわれが名づけた病気に自分でかかっていながら、この病気にたいするどういう「治療法」も認めようとしないことにある。そこで同誌は、「計画としての戦術ということはマルクス主義の基本精神とあいいれない」（第一〇号、一八ページ）とか、戦術とは、「党とともに成長する党任務の成長の過程」（一一ページ、傍点は『ラボーチェエ・デーロ』のもの）であるとかいう、注目すべき発見をすることになったのである、このあとのほうの格言は、名だかい格言となり、『ラボーチェエ・デーロ』の「潮流」の不朽の記念碑となる見込みが十分にある。「どこへゆくべきか？」という質問にたいして、指導的機関誌がこう答えるのだ。「運動とは、運動の起点と次の点とのあいだの距離の変化の過程である」と。しかし、この深遠無比な迷論は、珍妙なものというだけでなく（もしそれだけだったら、わざわざ立ちいって論じるまでもなかったであろう）、一潮流全体の綱領なのである。それは、エル・エムが（『「ラボーチャヤ・ムィスリ」別冊付録』のなかで）、おこないうる闘争こそ望ましく、そして現在の瞬間におこなわれている闘

争こそおこないうる闘争である、ということばで表現した、まさにあの綱領である。これこそ、まさに、自然発生性に受動的に順応する、底なしの日和見主義の潮流である。

「計画としての戦術ということはマルクス主義の基本精神とあいいれない！」と。だが、これは、マルクス主義にたいする中傷であり、かつてナロードニキがわれわれとのたたかいにあたって描いてみせた、まさにあの戯画に、マルクス主義を変えてしまうものである。これは、まさしく意識的活動家の創意と精力を低めるものである。だが、マルクス主義は、それとは反対に、社会民主主義者の前に最も広大な見とおしをひらき、「自然発生的に」闘争に立ちあがってくる労働者階級の幾百万、幾千万人の強大な軍勢を彼の自由な駆使にゆだねる（もしこう言ってよければ）ことによって、社会民主主義者の創意と精力に巨大な刺激をあたえるのである！　国際社会民主主義の全歴史は、あるときは甲の、あるときは乙の政治的指導者によって提出された計画でみたされており、ある人々の政治上、組織上の見解の先見の明と正しさを実証し、他の人々の短見と政治的誤りをあからさまに示している。ドイツが最大の歴史的急転換の一つ——帝国の成立、国会の開設、普通選挙権の付与——に臨んだとき、社会民主党の政策と活動一般とについての一つの計画をリープクネヒトがもち、別の計画をシュヴァイツァーがもっていた。ドイツの社会主義者の頭上に例外法がおそいかかったとき、モストとハッセルマンに一つの計画があり、彼らはいきなり暴力とテロルに呼びかけることを辞さなかった。またヘヒベルク、シュラム、そして（部分的に）ベルンシュタインに別の計画があり、彼らは、社会民主主義者にむかって、君たちが無分別にも激越で革命的だったためにこの法律の発布をまねいたのだ、だからこんどは模範的な行状によってお許しをあがなわなければならない、と説きはじめた。さらに、非合法機関紙の発行を準備し、実現しようとしていた人々に第三の計画があった。すすむべき道の選択の問題をめぐる闘争が終りをつげ、また選んだ道が適当であったかどうかについて、歴史がその最後の判定をくだしてから多くの年月がたったあとで、昔をかえりみ、党とともに成長する党任務の成長という格言によって自分の深遠さを示すのは、もちろん、むずかしいことではない。しかし、ロシアの「批判家」や「経済主義者」が、社会民主主義を組合主義に低めており、またテロリストが、古い誤りを繰りかえす「計画としての戦術」を採用するように、熱心に説いている混乱の時期に*、このような深遠な迷論でことをすませるのは、自分自身にくの社会民主主義者が、ほかならぬ創意と精力に不足し、「貧困証明書」を発行するというものである。ロシアの多

「政治的宣伝、扇動、組織の規模」**に不足し、革命的活動をいっそう広範に組織するための「計画」に不足している時期に、「計画としての戦術というこ とはマルクス主義の基本精神とあいいれない」などと語るのは、理論的にマルクス主義を卑俗化するだけでなく、さらに実践的に党をうしろへ引きもどすというものである。

* Ein Jahr der Verwirrung（混乱の一年）――メーリングは、彼の著書『ドイツ社会民主党史』のなかで、社会主義者が新しい条件に適合した「計画としての戦術」を選ぶにあたってはじめのうち示した躊躇と不決断を記述した一章に、こういう表題をつけた。

** 『イスクラ』第一号の社説[注]から。

『ラボーチェエ・デーロ』は、つづいてわれわれに教えを垂れて言う。

「革命的社会民主主義者の任務は、その意識的活動によって客観的発展を速めることにすぎず、客観的発展を廃止したり、それを主観的な計画とおきかえたりすることではない。『イスクラ』は、理論上はこういうことをみな知っている。けれども、『イスクラ』は、戦術についての空論主義的な見解をいだいているために、マルクス主義が意識的な革命的活動に正しくも巨大な意義をあたえていることに心を奪われて、実践上では、発展の客観的あるいは自然発生的要素の意義の軽視におちいっている。」（一八ページ）

これもまた、ヴェ・ヴェ氏の一党にふさわしい、このうえない理論的混乱である。わが哲学者におたずねするが、主観的な計画の立案者が客観的発展を「軽視する」とすれば、それはいったいどういう点に現われるだろうか？　明らかに、この客観的発展があれこれの階級や層や集団、あれこれの民族や民族群などを、あるいはつくりだし、あるいは強め、あるいは滅ぼし、あるいは弱め、それによって、あれやこれやの国際的な政治的勢力編成や、革命的政党の立場等々を条件づけていることを、この立案者が見おとす点に現われる。だが、そうとすれば、そういう立案者の罪は、自然発生的要素を軽視していることではなく、反対に、意識的要素を軽視していることにあろう。というのは、彼は、客観的発展を正しく理解する「意識性」に不足していることになるからである。だから、自然発生性と意識性との「相対的」（傍点は『ラボーチェエ・デーロ』のもの）「意義についての評価」などを論じるということ自体、すでに「意識性」がまったく欠如していることを、暴露しているのである。もしある種の「発展の自然発生的要素」が、いやしくも人間の意識にのぼりうるものとすれば、それにまちがった評価をあたえるということは、「意識的要素を

軽視する」のにひとしいであろう。だが、もしそれが意識にのぼりえないとすれば、われわれはそれを知らないのだし、それを論じることもできないわけである。いったいベ・クリチェフスキーはなんのことを論じているのか？もし彼が、『イスクラ』の「主観的な計画」はまちがっていると考えるなら（そして、彼はそれをまさしくまちがっていると宣言しているのだ）、まさにどういう客観的諸事実がそれらの計画で無視されているかを示し、このように事実を無視した点で『イスクラ』には意識性が不足していることを、すなわち彼のことばで表現すれば、「意識的要素を軽視している」ことを非難すべきだったのだ。もしまた彼が、主観的な計画に不満であっても、「自然発生的要素の軽視」（!!）を言いたてる以外には、なんの論拠ももちあわせていないのなら、そのことは、彼が、（一）理論上は――ベリトフによってしたたか嘲笑されたカレーエフやミハイロフスキー一派の流儀でマルクス主義を理解していること、（二）実践においては――わが合法マルクス主義者をベルンシュタイン主義に、またわが社会民主主義者を「経済主義」にさそいこんだ、あの「発展の自然発生的要素」に満足しきっていること、そしてロシア社会民主党をぜひとも「自然発生的な」発展の道からそらせようと決心した人々に「ひどくむかっぱらをたてている」ことを、証明するだけである。

ところで、そのさきにあるのは、まったく愉快な事柄である。「自然科学がどんなに進歩しても、人間は祖先伝来の方法で繁殖してゆくであろうように、社会科学がどんなに進歩し、また意識的な闘士がどんなにふえても、新しい社会制度の誕生は、今後も主として自然発生的爆発の結果であるだろう。」（一九）祖先伝来の英知が、「子供をつくるのに知恵の足りない人間があろうか？」と言っているように、「最新の社会主義者たち」の（ナルツィス・トゥポルィロフ流の）英知は、「新しい社会制度の自然発生的誕生に参加するのに知恵の足りない人間はいない」と言うのである。われわれもまた、そうするのに知恵の足りない人間はいないと思う。それに参加するためには、――「経済主義」が横行しているときには「経済主義」に、テロリズムが起こってくればテロリズムに、屈服するだけで十分なのだ。たとえば、ことしの春に、テロルへの熱中にたいして警告を発することがきわめて重要だったときには、『ラボーチェエ・デーロ』は、同誌にとっては「新しい」この問題に当面して、当惑してしまった。ところが、それから半年たって、いまや問題がそれほど焦眉のものでなくなったときに、同誌は、「われわれは、テロリスト的気分の高まりを抑えることは、社会民主党の任務ではありえないし、

またあってはならないと考える」（『ラボーチェエ・デーロ』第一〇号、二三ページ）という声明と、「大会は、組織的な攻撃的テロルを時宜に適しないものと認める」（『二つの大会』、一八ページ）という大会決議とを、同時にわれわれにふるまってくれるのである。これは、なんとまあ、すばらしく明瞭で、理路整然としていることか！　抑えはしない、――だが、時宜に適しないものと宣言する、おまけに、非組織的な、また防衛的なテロルは「決議」にふくまれないようなかたちで、宣言するのだ。このような決議ははなはだあぶなげがなく、誤りをおかすおそれがまったくないことを、認めてやらなければならない。それはちょうど、なにも語らないためにものを言う人間には、誤りをおかすおそれがないようなものである！　そして、このような決議をつくるためには、ただ一つのことしか必要でない。運動の後尾にくっついてゆくことができればよいのである。『ラボーチェエ・デーロ』がテロルの問題を新しい問題だと宣言したことを、『イスクラ』が嘲笑したとき[三六]、『ラボーチェエ・デーロ』は立腹して、「一五年以上もまえに亡命著作家の一グループがあたえた戦術上の諸問題についての解答を党組織に押しつけようとする、まったく信じられない僭越さ」（二四ページ）を示したと言って、『イスクラ』を非難した。じっさい、いろいろな問題にあらかじめ理論的に解答をあたえ、そのあとでこの解答の正しいことを組織にも、党にも、大衆にも納得させようとするとは、なんという僭越さ、なんという意識的要素の誇張であろう！＊　わかりきったことを繰りかえすだけで、だれにたいしてもなにひとつ「押しつける」でもなく、「経済主義」の側へであろうが、テロリズムの側へであろうが、「転換」が起こるごとにそれに服従するほうが、ずっとましではないか。『ラボーチェエ・デーロ』は、『イスクラ』と『ザリャー』を、「形なき混沌のうえをただよう精霊のように、自分の綱領を運動に対置する」（二九ページ）と言って非難することで、この処世術の偉大な遺訓を一般化さえしている。だが、社会民主党の役割は、自然発生的運動のうえをただようだけでなく、この運動を「自分の綱領」のところまで引き上げる「精霊」となることでなくて、いったいなんであろうか？　よもや運動の後尾にくっついてゆくことが、その役割ではあるまい。そんなふうにすることは、最もうまくいっても運動にとって無益であるし、最もまずくいけば、じつにはなはだしく有害である。ところが、『ラボーチェエ・デーロ』は、このような「過程としての戦術」を追っているばかりか、それを原則にまつりあげているのだ。だから、同誌の傾向も、日和見主義とよぶより、（「後尾（フヴォスト）」ということばから）追随主義（フヴォスティズム）と名づけたほうが、

正しいであろう。そして、つねに運動の後尾として運動のうしろについてゆこうと、固く心をきめている人々が「発展の自然発生的要素の軽視」をおかすおそれは、永遠にまた絶対にないことを、認めないわけにはいかない。

＊「労働解放」団は、テロルの問題を「理論的に」解決するにあたって、それ以前の革命運動の経験を一般化したのだということも、また忘れてならないことである。

＊＊

こうして、ロシア社会民主党内の「新しい潮流」の基本的な誤りは、自然発生性の前に拝跪する点に、大衆が自然発生的であればこそわれわれ社会民主主義者は多くの意識性をもつ必要があることを理解しない点にあることを、われわれは確信するにいたった。大衆の自然発生的な高揚が大きければ大きいほど、運動がひろまればひろまるほど、社会民主党の理論活動においても、政治活動においても、組織活動においても、多くの意識性をもつ必要が、くらべものにならないほどいっそう急速に増大する。

ロシアでは、大衆の自然発生的高揚がはなはだ急速におこなわれた（そしていまもひきつづいておこなわれている）ため、社会民主主義的青年はこれらの巨大な任務を果たすだけの訓練を欠いていた。この訓練の不足は、われわれの共通の不幸、ロシアの社会民主主義者全体の不幸である。大衆の高揚は、いちど始まった場所で停止しなかったばかりか、新しい地方と新しい住民層（労働運動の影響をうけて、学生青年や、一般のインテリゲンツィアや、さらに農民までもの動揺が、さかんになった）とをまきこみながら、中断なく、つぎからつぎへと受けつぎながら進行し、拡大していった。ところが、革命家たちは、「理論」でも、活動でも、この高揚に立ちおくれてしまい、運動全体を指導する能力のある、中断のない、継承性のある組織をつくりだすことができなかったのである。

第一章でわれわれは、『ラボーチェエ・デーロ』がわれわれの理論的任務を低めていることを、そして、「批判の自由」という流行のお題目を「自然発生的に」繰りかえしていることを、確認した。この口まね屋たちは、日和見主義的「批判家」と革命家との立場がドイツとロシアとでは正反対になっていることを理解するだけの「意識性」ももっていなかった。

以下の各章では、自然発生性へのこの拝跪が、社会民主党の政治的任務の分野と組織活動とにどう現われたかを、調べてみよう。

三　組合主義的政治と社会民主主義的政治

こんどもまた、『ラボーチェエ・デーロ』に賛辞を呈することから始めよう。『暴露文書とプロレタリア闘争』――マルトィノフは『ラボーチェエ・デーロ』第一〇号所載の、『イスクラ』との意見の相違を論じた自分の論文に、こういう表題をつけた。「われわれは、それ」（労働者党）「の発展を妨げている諸制度を暴露するだけにとどめることはできない。われわれはまた、プロレタリアートの最も身近な日常的利害にも反応しなければならない。」（六三ページ）――マルトィノフは、この意見の相違の核心をこう定式化した。「……『イスクラ』は、……事実上、わが国の諸制度、主として政治的諸制度を暴露する革命的反政府派の機関紙である。……他方、われわれは、プロレタリア闘争と緊密な有機的結びつきをたもって、労働者の事業のために活動しており、将来も活動するであろう」（前掲箇所）。この定式化にたいして、マルトィノフに感謝しないわけにはいかない。この定式化は、絶大な一般的関心をよぶものである。というのは、実質上、この定式化は、われわれと『ラボーチェエ・デーロ』との意見の相違を包含しているだけではけっしてなく、おしなべて政治闘争の問題についてのわれわれと「経済主義者」とのあいだの意見の相違全体を包含しているからである。われわれがすでに示したように、「経済主義者」は絶対的に「政治」を否定するのではなく、ただ政治の社会民主主義的な理解から組合主義的な理解へと、たえず迷いこんでゆくのである。マルトィノフもまた、まったくそのように迷いこんでゆく。だから、われわれはよろこんで、ほかならぬ彼をとって、この問題についての「経済主義的」謬見の見本としようと思う。こういう選び方をしたことについて、――のちほど実証するようにつとめるつもりであるが――『「ラボーチャヤ・ムィスリ」別冊付録』の筆者たちも、「自己解放団」の宣言の筆者たちも、また『イスクラ』第一二号所載の「経済主義的な」手紙の筆者たちも、われわれに苦情を申したてる資格はないであろう。

（a）政治的扇動、および経済主義者がそれをせばめたこと

ロシアの労働者の経済闘争*が広範にひろまり、また強まっていったのにともなって、経済的暴露（工場内や職業内の状態の暴露）「文書」がつくりだされたことは、だれでも知っている。いろいろな「リーフレット」の主要な内容

は、工場内の状態の暴露であった。そして、まもなく労働者のあいだに、暴露をやろうという真の熱情が燃えあがった。労働者たちは、自分たちの乞食のような生活や、とほうもなく苦しい労働や、無権利状態について、あますところなく真実を語る新しい種類のリーフレットを、社会民主主義者のサークルが自分たちに提供したがっており、また提供できるということを見てとると、たちまち工場からいわば通信の雨を降らせはじめた。こういう「暴露文書」は、そのリーフレットによって自分のところの状態を糾弾された当の工場だけでなく、暴露された事実のことをなにやかや聞きつたえたすべての工場に、大きなセンセーションを呼びおこした。そして、いろいろな経営、いろいろな職業の労働者の窮乏や困苦には共通するところが多かったから、「労働者の生活の実情」はすべての人々の心をうごかした。最も遅れた労働者のあいだにさえ、「活字にしたい」という真の熱情が——すなわち、略奪と抑圧のうえにきずかれた現代の全社会体制との戦争の、この萌芽的な形態への高貴な熱情が、起こってきた。そして、「リーフレット」は、大多数の場合に、実際に宣戦の布告であった。というのは、その暴露は、激しい刺激作用をおよぼして、最もはなはだしい不法状態を取りのぞけという一般的な要求と、ストライキによってこれらの要求を支持する覚悟とを、労働者のあいだに呼びおこしたからである。ついには工場主たち自身も、これらのリーフレットの宣戦布告としての意義を大いに認めざるをえなくなったので、ほんとうに戦争が起こるまで待とうとしないことも、きわめて頻繁であった。いつもながら、暴露文書は、それが出たというだけで、すでに作用をおよぼし、強い精神的圧力としての意義をもつようになった。リーフレットが出ただけで、要求の全部または一部を貫徹させるのに十分だったことも、再三あった。一言でいえば、経済的暴露（工場内の状態の暴露）は経済闘争の重要なてこであったし、いまでもそうである。そして、労働者の自己防衛を必然的に生みだす資本主義が存在しているかぎり、それはひきつづいてこの意義をたもつであろう。片田舎のあれこれの「営業」や、だれからも忘れられた家内労働のあれこれの部門におこなわれている不法状態の暴露が、階級意識のめざめの出発点、労働組合闘争や社会主義の普及が始まる出発点となる場合は、ヨーロッパの最も先進的な国々でさえ、いまでも見ることができる。**

* 誤解を避けるために言っておくが、以下の叙述においてわれわれが経済闘争と言うときには、いつでも（われわれのあいだで慣用となっている語法にしたがって）、エンゲルスがまえにあげた引用文のなかで「資本家にたいする反抗」とよび、また自由な国々では労働組合（サンディカあるいはトレ

ード・ユニオン）闘争とよんでいる、あの実際的経済闘争をさしているのである。

＊＊　本章でわれわれが論じるのは、政治闘争のことであり、政治闘争を広い意味に理解するか、狭い意味に理解するか、という問題にかぎられている。だから、ほんのついでに、ただ珍しい話として言っておくのだが、『ラボーチェエ・デーロ』は、『イスクラ』を、経済闘争にたいして「あまりにもよそよそしい態度をとっている」と言って非難している（『二つの大会』、二七ページ。マルトィノフは彼の小冊子『社会民主党と労働者階級』のなかでも、これをむしかえしている）。もし論難者各位が、この一年間に『イスクラ』の経済闘争欄にのった記事の分量を、目方でなり印刷用紙の連数なりに換算し（彼らはこういうことがお好きなのだが）、それを『ラボーチェエ・デーロ』と『ラボーチャヤ・ムィスリ』の当該欄を合計した分量にくらべてみたなら、この点でさえ自分らが立ちおくれていることに、たやすく気がついたはずである。明らかに彼らは、この単純な真実を意識しているので、自分たちの困惑をはっきり示すような論拠にたよらざるをえないのだ。彼らはこう書いている。「『イスクラ』は、好むと好まざるとにかかわらず（！）、生活ののっぴきならない要請を考慮して、せめて（!!）労働運動についての通信なりとも、掲載しないわけにはいかなくなっている（！）」（『二つの大会』、二七ページ）と。これこそ真にグーの音も出させない議論というものだ！

最近では、ロシアの社会民主主義者の圧倒的多数が、工場内の状態の暴露を組織するこの仕事に、ほとんどまったく没頭していた。この没頭がどんな程度に達していたか、またそのさい、この仕事がそれ自体では本質上まだ社会民主主義的な活動ではなく組合主義的な活動にすぎないことが、どんなに忘れられていたかを知るためには、『ラボーチャヤ・ムィスリ』を思いだせば十分である。本質上、この暴露は、その当の職業の労働者と彼らの雇い主との関係をとらえただけで、それによってなしとげられたのは、労働力の売り手が、この「商品」をより有利な条件で売ることと、また純商業取引を基盤として買い手とたたかうことを、学びとったことだけであった。こういう暴露は、（革命家の組織がそれを一定のやり方で利用するときには）社会民主主義的活動の端緒とも、構成部分ともなることのできるものであったが、しかしまた、「純労働組合的」闘争と非社会民主主義的な労働運動とにみちびくものともなりえた（そして自然発生性の前に拝跪するときには、そうなるほかはなかった）。社会民主党は、労働力販売の有利な条件を獲得するための労働者階級の闘争を指導するだけでなく、また、無産者が金持に身売りしなければならないような社会制度をなくすための彼らの闘争をも指導する。社会民主党は、ひとりその当該の企業家集団にたいしてではなしに、現代社会のすべての階級にたいして、組織された

政治的強力としての国家にたいして、労働者階級を代表するのである。これからして明らかなことは、社会民主主義者は、経済闘争にとどまることができないばかりか、経済的暴露の組織が彼らの主要な活動であるような状態を許すこともできないということである。われわれは、労働者階級の政治的教育に、その政治的意識を発達させることに、積極的にとりかからなければならない。今日、『ザリャー』と『イスクラ』によって「経済主義」に第一撃がくわえられたあとでは、このことには「みなが同意している」（もっとも、じきに見るように、一部の人々はただ口さきで同意しているにすぎないのだが）。

そこで問題になるのは、この政治的教育はいったいどういうものでなければならないか、ということである。労働者階級は専制にたいして敵対的な関係にあるという思想を宣伝するだけにとどまることができるだろうか？　もちろん、できない。労働者にたいする政治的抑圧を説明するだけでは足りない（労働者に、彼らの利害が雇い主の利害と対立することを説明するだけでは足りなかったのと同じように）。さらに、この抑圧の一つひとつの具体的な現われをとらえて扇動することが必要なのだ（われわれが経済的圧制の具体的な現われをとらえて扇動しはじめたのと同じように）。ところで、この抑圧は、種々さまざまな社会階級にのしかかっており、職業的、一般市民的、個人的、家庭的、宗教的、学問的、等々の、生活と活動の種々さまざまな分野に現われているのだから、専制の全面的な政治的暴露を組織する仕事を取りあげないかぎり、われわれは労働者の政治的意識を発達させるという自分の任務を果たしえないであろうことは、明らかではないだろうか？　圧制の具体的な現われをとらえて扇動するためには、この現われを暴露することが必要ではないだろうか（経済的扇動をおこなうためには、工場内の濫用行為を暴露しなければならなかったのと同じように）？

これは明瞭なことのように思われるだろう。しかし、まさにこの点で、政治的意識を全面的に発達させる必要があることに「みなが」同意しているというのが、口さきだけの話であることが、たちまち明らかになる。まさにこの点で、たとえば『ラボーチェエ・デーロ』にしても、全面的な政治的暴露を組織する（あるいはそれを組織する糸口をつける）という任務を自分で引きうけなかったばかりか、この任務に着手した『イスクラ』までもうしろへ引きもどそうとしかかったことが、たちまち明らかになるのである。まあ、聞きたまえ。「労働者階級の政治闘争は、経済闘争の最も発達した、広範な、効果的な形態にすぎない。」（まさに、それだけにとどまらないのだ）（『ラボーチェエ・デ

ーロ』の綱領――『ラボーチェエ・デーロ』第一号、三ページ)。「いま社会民主主義者が当面している任務は、どうやって経済闘争そのものにできるだけ政治性をあたえるか、ということである。」(マルトィノフ、第一〇号、四二ページ)「経済闘争は、大衆を積極的な政治闘争に引きいれるために、最も広範に適用しうる手段である。」(同盟大会決議と「修正提案」――『二つの大会』、一一ページ、および一七ページ)。読者の見られるとおり、これらの命題は、同誌創刊のはじめから最近の『編集局への指針』にいたるまで、『ラボーチェエ・デーロ』誌を一貫しているものであって、それらはみな、明らかに、政治的扇動と闘争とについての同一の見解を、あらわしている。ところで、この見解を、政治的扇動は経済的扇動のあとに従わなければならないという、「経済主義者」全体のあいだにおこなわれている意見に照らして調べてみたまえ。経済闘争が一般*に大衆を政治闘争に引きいれるために「最も広範に適用しうる手段」であるというのは、正しいであろうか？　まったくまちがっている。警察の圧制や専制の暴虐のありとあらゆる現われも、そういう「引きいれ」のために「広範に適用しうる」手段である点でいささかも劣るものではなく、経済闘争に関連のある現われ[三七]だけがそういう手段なのではけっしてない。農村司政長や、農民の体罰、役人の収賄や、都市「庶民」にたいする警察の扱い方、飢えた人々にたいする闘争や、知識と学問を求める人民の渇望にたいする迫害、税金のむごい取立てや、異宗派の迫害、兵士のきびしい訓練や、学生と自由主義的インテリゲンツィアの兵籍編入――「経済闘争」に直接関連のないこれらすべての圧制の現われや、その他幾千の同様な圧制の現われは、なぜ一般に政治的扇動のため、大衆を政治闘争へ引きいれるために、経済闘争ほど「広範に適用しうる」手段やきっかけでないのか？　事実はまさにその反対である。労働者が(自分自身のことでなり、身寄りの人々のことでなり)日常生活で無権利や専横や暴力に苦しめられる場合全体のなかで、まさに労働組合闘争で警察の圧制をこうむる場合がほんの一小部分を占めるにすぎないことは、疑いがない。では、社会民主主義者にとって、一般的にいって、同じくらい「広範に適用しうる」手段がほかにもいろいろあるにちがいないのに、いったいどういうわけでただひとつの手段だけを「最も広範に適用しうる」手段であると宣言して、あらかじめ政治的扇動の規模をせばめるようなことをするのか？

＊　われわれが「一般に」というのは、『ラボーチェエ・デーロ』が論じているのは、まさに全党の一般的諸原則や一般的諸任務のことだからである。実践においては、実際に政治が経済のあとに従わなければならない場合もたびたびあること

は、疑いがない。――しかし、全ロシアを対象とした決議のなかでこんなことを言うのは、「経済主義者」でなければやれないことである。「はじめからもっぱら経済を基盤として」のみ政治的扇動をおこなうことのできる場合だってしばしばあるのだが、それでも『ラボーチェエ・デーロ』は、けっきょく、そういうふうにする「必要はまったくない」(『二つの大会』、一一ページ)という結論におちついたではないか。われわれは次の章で、「政治家」と革命家の戦術が社会民主党の労働組合的任務を無視するものでないばかりか反対に、この戦術だけがそういう任務の首尾一貫した遂行を保障することを示そう。

ずっとずっと大昔には(いまを去ること一年まえには！……)、『ラボーチェエ・デーロ』はこう書いていた。「当面の政治的諸要求は、一回の、よくよくの場合でも、数回のストライキをやったあとでは、「政府が警察隊や憲兵を出動させるやいなや」、「大衆にとって理解しやすいものになる」(第七号、一五ページ、一九〇〇年八月)と。この日和見主義的な段階論は、いまではもう同盟によっても否認されている。というのは、同盟は、「政治的扇動をおこなうのに、はじめからもっぱら経済だけを基盤とする必要はまったくない」(『二つの大会』、一一ページ)と言明して、われわれに譲歩しているからである。ロシア社会民主党の将来の歴史家は、「同盟」がその以前の謬見の一部をこのように否認したということだけで、どんな長たらしい議論にもまして、わが「経済主義者たち」が社会主義をどれほど低めつつあったかを知るだろう！　だが、政治をせばめる一つの形態をこのように放棄すれば、それをせばめるいま一つの形態にわれわれを同意させることができるだろうと、同盟が想像したのは、なんという素朴なことだろう！　ここでもまた次のように言うほうがもっと論理的ではなかろうか、――すなわち、経済闘争はできるだけ広範におこなわなければならないし、それはつねに政治的扇動に利用されなければならない。しかし、経済闘争をもって、大衆を積極的な政治闘争に引きいれるために最も広範に適用しうる手段と見なす「必要はまったくない」と。

同盟は、同じ問題についてユダヤ人労働者同盟(ブンド)(三七)の第四回大会が採用した決議のなかにある「最良の手段」という表現を「最も広範に適用しうる手段」という表現と代えたということに、重大な意味をあたえている。じつのところ、われわれは、この二つの決議のどちらのほうがよりよいかを言いかねる。われわれに言わせれば、どちらもより悪い。この場合、同盟もブンドも、(おそらく、一部は伝統の影響をうけて、無意識のうちにさえ)経済主義的、組合主義的な政治の解釈に迷いこんでいるのである。それが「最良の」という文句によってなされようが、「最

も広範に適用しうる」という文句によってなされようが、事の本質はすこしも変わらない。もし同盟が、「経済を基盤とする政治的扇動」は最も広範に適用されている（「適用しうる」ではなしに）手段である、と言ったのだったら、わが国の社会民主主義運動のある発展の時期については、それは正しかったであろう。すなわち、「経済主義者」については、一八九八―一九〇一年代の多くの（大多数の、とは言わないまでも）実践家については、それは正しかったであろう。なぜなら、これらの「経済主義的」実践家たちは、実際に政治的扇動をほとんどもっぱら経済だけを基盤として適用した（とにもかくにもそれを適用したかぎりでは！）からである。われわれがさきほど見たように、このような政治的扇動ならば、『ラボーチャヤ・ムィスリ』も「自己解放団」も、認めていたし、推称さえしていたのである！　『ラボーチェエ・デーロ』は、経済的扇動という有益な仕事に政治闘争の有害な狭隘化がともなっていたことを、断固として断罪すべきであったのに、同誌はそうはしないで、最も広範に適用されている（「経済主義者」によって）手段を、最も広範に適用しうる手段であると、宣言する！　われわれがこの人々を「経済主義者」とよぶと、彼らは、われわれを「瞞着者」だの、「攪乱者」だの、「教皇使節」だの、「中傷者*」だのと、さんざんに罵倒し、われわれからひどい侮辱をくわえられたといって相手かまわず哀訴し、「今日では断じてただ一つの社会民主主義組織も、『経済主義的』だということで非難されるべきものはない**」と、誓いを立てんばかりにして断言するほかないのも、あやしむにたりない。ああ、これはなんという中傷者、なんというよこしまな――政治家どもだろう！　彼らは、ひとえにその人間ぎらいから、人々にひどい侮辱をくわえようと思って、わざとこの「経済主義」なるものをでっちあげたのではあるまいか？

* これは、小冊子『二つの大会』の三一、三二、二八、三〇ページに、正真正銘つかわれている表現である。

** 『二つの大会』、三二ページ。

社会民主党が「経済闘争そのものに政治性をあたえる」任務に当面している、とマルトィノフが言うとき、これはどんな具体的、現実的な意味をもっているのか？　経済闘争とは、労働力を販売するいっそう有利な条件を獲得するため、労働条件と生活状態を改善するために、労働者が雇い主にたいしておこなう集団的闘争である。この闘争は、必然的に職業的闘争である。なぜなら、労働条件は各職業によってきわめて多種多様であり、したがってこれらの条件の改善のための闘争は、職業ごとにおこなうほかはない（西欧では労働組合によって、ロシアでは一時的な職業的

結合やビラによって等々）からである。したがって、「経済闘争そのものに政治性を」あたえるということは、この同じ職業的要求、この同じ職業別の労働条件改善の実現を、「立法上および行政上の諸施策」（マルトィノフが、彼の論文の次のページすなわち四三ページで言いあらわしているように）によってかちとるべくつとめることである。これはまさしくすべての労働組合が現にやっており、またつねにやってきたことである。根本的な学者である（そして「根本的な」日和見主義者である）ウェッブ夫妻の著作(二〇)を一読すれば、イギリスの労働組合が、すでにとっくの昔から「経済闘争そのものに政治性をあたえる」任務を認識して、それを実現しており、とっくの昔から、ストライキの自由のため、協同組合運動や労働組合運動にたいするありとあらゆる法律上の障害を取りのぞくため、婦人や児童の保護の法律を公布させるため、衛生法や工場法の制定によって労働条件を改善させる、等々のためにたたかっていることがおわかりになろう。

こうして、「おそろしく」深遠で革命的なように聞こえる「経済闘争そのものに政治性をあたえる」というはでな空文句のかげには、実際には、社会民主主義的政治を組合主義的政治に低めようとする伝統的な志向が隠されているのである！「教条の変革を生活の変革よりも*」重視している――おわかりか――『イスクラ』の一面性を訂正するという触れこみで、彼らは、なにか新しいものであるかのように、経済的改良のための闘争をわれわれにふるまうのである。じっさい、「経済闘争そのものに政治性をあたえる」という文句には、経済的改良のための闘争以外にはまったくなにひとつふくまれていない。マルトィノフその人にしても、自分自身のことばの意味をよく吟味したなら、この簡単明瞭な結論に思いあたったはずである。彼は、そのもちあわせている最大の重砲を『イスクラ』にむけて言う。――「わが党は、経済的搾取、失業、飢饉などを克服する立法上および行政上の諸施策の具体的な要求を政府に提出できたであろうし、また提出すべきであったろう」（『ラボーチェエ・デーロ』第一〇号、四二―四三ページ）と。ところで、諸施策の具体的な要求とは、はたして社会改良の要求ではないだろうか？　そこで、いま一度公平な読者におたずねするが、ラボーチェエ・デーロ派（どうか、この無器用な流行語を許していただきたい！）が、自分たちと『イスクラ』と意見が違う点だと言って、経済的改良のための闘争が必要だという命題をもちだしてくるとき、われわれが彼らを隠れたベルンシュタイン主義者とよぶと、彼らを中傷することになるのだろうか？

＊『ラボーチェエ・デーロ』第一〇号、六〇ページ。これは、

「現実の運動の一歩一歩は一ダースの綱領よりも重要である」という命題を、われわれの運動の混沌たる現状にあてはめるあのやり方——われわれがすでにまえに特徴づけておいたところの——の、マルトィノフ式言いかえである。実際には、これは、「運動がすべてで、終局目標は無である」という、ベルンシュタインの迷文句をロシア語に翻訳したものにすぎない。

革命的社会民主党は、改良のための闘争を、つねにその活動にふくめてきたし、いまでもふくめている。だが、革命的社会民主党が「経済的」扇動を利用するのは、政府に各種の施策を実施せよという要求を提出するためだけでなく、また（そしてまず第一に）この政府が専制政府であることをやめよ、という要求を提出するためでもある。そればかりではない。革命的社会民主党は、この要求を、たんに経済闘争を基盤として提出するだけでなく、およそあらゆる社会＝政治生活の現われを基盤として提出することをも、自分の義務と考えている。一言でいえば、革命的社会民主党は、改良のための闘争を、部分の全体にたいする関係として、自由と社会主義とのための闘争に従属させる。ところが、マルトィノフは政治闘争に、いわばもっぱら経済的な発展の道を指定しようとして、段階論を別のかたちで復活させている。彼は、革命的高揚の時機に、改良のための闘争の特別の「任務」と称するものをもちだし、それによって党をうしろへ引きもどし、「経済主義的」日和見主義と、さらに自由主義的日和見主義とのお先棒をかついでいるのである。

さらに、マルトィノフは、恥ずかしそうに改良のための闘争を、「経済闘争そのものに政治性をあたえる」という大げさな命題のかげに隠したのち、なにか特別なものであるかのように、もっぱら経済的な改良だけを（それどころか、もっぱら工場内の状態の改良だけを）提出した。なぜ彼がそれだけを提出するのか、われわれにはわからない。あるいは不注意からだろうか？　だが、もし彼が「工場内の状態」の改良だけを頭においていたのでないなら、いましがたわれわれが引用した彼の命題全体は、全然意味のないものになってしまうであろう。あるいはまた彼が、政府から「譲歩」が得られるのは、また得られそうなのは、経済的分野においてだけだと、考えるからであろうか？* もしそうなら、それは奇妙な思いちがいである。譲歩は、笞刑や、旅券制度や、土地買戻賦払金や、異宗派や、検閲、等々についての立法の分野でも得られるし、また現にしばしば得られている。政府にとっては、いうまでもなく、「経済的な」譲歩（ないし、にせの譲歩）がいちばん安あがりで、またいちばん有利である。というのは、政府はそれによって労働者大衆に政府への信頼の念をおこさせよう

と望んでいるからである。だがそれだからこそ、われわれ社会民主主義者は、われわれには経済的改良のほうが貴重であるとか、われわれはまさに経済的改良を特別重要なものと見なしているなどという考え（あるいは誤解）を生じさせる余地を、けっして、絶対にどういう点でも、あたえてはならないのである。マルトィノフは、彼が提出した前述の立法上および行政上の諸施策の具体的な要求について、次のように言っている。「このような要求は、空虚なかけ声ではないであろう。なぜなら、それは一定の目に見える成果を約束するので、おそらく労働者大衆の積極的な支持を得られるだろうからである」と。……われわれは「経済主義者」などではない、断じてない！　われわれはただ、ベルンシュタイン、プロコポーヴィチ、ストルーヴェ、エル・エムらの諸君やその一党と同じく奴隷的に、具体的成果の「目に見える明白性」の前に、はいつくばっているだけなのだ！　われわれはただ、「目に見える成果を約束」しないものはみな「空虚なかけ声」であることを、のみこませようとしている（ナルツィス・トゥポルィロフといっしょに）だけなのだ！　われわれはただ、労働者大衆は、それが自分たちの目に見える成果を絶対になにひとつ約束しない場合にさえ、専制にたいするあらゆる抗議を積極的に支持する能力をもっていないかのように（そして自分の俗物根性を労働者大衆になすりつける人々にもかかわらず、この能力をすでに立証していないかのように）言っているだけなのだ！

＊　四三ページ、「われわれが、一定の経済的要求を政府に提出するように労働者に勧めるとすれば、もちろん、経済的分野では、専制政府はやむなくある種の譲歩に応じる用意があるからこそ、それを勧めるのである。」

たとえば、マルトィノフ自身があげている、あの失業や飢饉の克服のための「施策」の例を、とってみよう。『ラボーチェエ・デーロ』が、同誌の約束から判断すると、「目に見える成果を約束する」「立法上および行政上の諸施策の具体的な」（法案のかたちをとった？）「要求」をつくりあげ、仕上げる仕事に没頭しているときに、「いつもながら教条の変革を生活の変革よりも重視している」『イスクラ』は、失業と資本主義制度全体との切っても切れない関連を説明することに努力し、「飢饉は進行している」と警告し、警察の「飢えた人々にたいする闘争」や、言語道断な「臨時懲役規則」を暴露し、また『ザリャー』は、『国内評論』から飢饉を取り扱った部分を別刷にして、扇動パンフレットとして発行したのである。(二〇)だが、おお、なんということだろう、その場合にも、この手のつけられない偏狭な正統派の連中、「生活そのもの」の命令に耳を貸そう

としない教条主義者たちは、なんと「一面的」だったことか！　彼らの論文のどのひとつにも、――じつにひどいではないか！――「目に見える成果を約束する」ただひとつの――えっ、あろうことかあるまいことか、まったくただひとつの「具体的な要求」もなかった！　哀れな教条主義者たちよ！　こんな連中は、すべからくクリチェフスキーやマルトィノフというような人々のところに入門させて、戦術とはなんとやらで成長する成長の過程であるとか、経済闘争そのものに政治性をあたえる必要があるとかいうことを、納得させるべきだ！

「雇い主と政府とにたいする労働者の経済闘争」（「政府にたいする経済闘争」だって!!）「は、それがもつ直接の革命的意義のほかに、さらに労働者をたえず自分たちの政治的無権利の問題に突きあたらせるという意義をもっている。」（マルトィノフ、四四ページ）われわれがこの引用文を書きぬいたのは、すでに百回も千回も言ったことをもう一度繰りかえして言うためではなく、「雇い主と政府とにたいする労働者の経済闘争」という、この新しい、卓抜な定式化にたいして、マルトィノフにとくに感謝するためである。なんというみごとさだろう！　この簡潔で明瞭な命題には、「すべての労働者の状態の改善をめざして、一般的利益のためにおこなう政治闘争」*を労働者に呼びかけることから始まって、段階論につづき、「最も広範に適用しうるもの」についての大会決議等々に終わる、「経済主義」の全核心が、なんという追随を許さない才能で、また「経済主義者たち」のあいだの部分的な意見の相違や色合いの違いをすべて除去する、なんというたくみな手腕で言いあらわされていることだろう！「政府にたいする経済闘争」とは、まさしく組合主義的政治であって、そこから社会民主主義的政治までは、まだまだ前途遼遠なのだ。

＊『「ラボーチャヤ・ムィスリ」別冊付録』、一四ページ。

（b）マルトィノフがプレハーノフを深めた話

「近ごろわが国には、社会民主主義者のロモノーソフたちがなんと大量に出現したことだろう！」――かつてある一人の同志は、「経済主義」に傾いている人々の多くが、かならず「自分の知恵で」偉大な真理（経済闘争は労働者を無権利の問題に突きあたらせる、というような）にたどりつき、そのさい、生まれながらの天才にもちまえのすばらしい軽侮心から、革命思想と革命運動とのこれまでの発展によってすでにもたらされたいっさいの成果を無視するという、驚くべき性癖をもっているのを心にとめて、こう批評したことがあった。ロモノーソフ＝マルトィノフこそ、

まさにこのような生まれながらの天才である。彼の『当面の諸問題』という論文を一読すれば、アクセリロード（もちろんわがロモノーソフは、この人のことについては完全に沈黙を守っている）がすでにとっくの昔に言った事柄に、いまマルトィノフが「自分の知恵で」近づきつつあること、たとえばブルジョアジーのあれこれの層の反政府的態度をわれわれは無視することはできない（『ラボーチェエ・デーロ』第九号、六一、六二、七一ページ――これを『ラボーチェエ・デーロ』編集局のアクセリロードへの『回答』、二二、二三―二四ページとくらべてみたまえ）などということを、彼がいま理解しはじめていることが、おわかりになろう。けれども――悲しいかな！――ただ「近づきつつあり」、ただ「はじめている」だけで、それ以上ではない。というのは、彼は、やはりアクセリロードの思想がまだまったく理解できないで、「雇い主と政府とにたいする経済闘争」などを論じているほどだからである。三年のあいだ（一八九八―一九〇一年）『ラボーチェエ・デーロ』は、アクセリロードを理解しようとして一生懸命につとめた。そして――やっぱり理解できなかったのだ！　おそらくこれもまた、社会民主党は、「人類と同じように」、つねに自分で解決できる任務だけを自分に提起するからであろうか？(二)しかし、ロモノーソフ連の特徴は、知らないことがたくさんあるという点だけでなく（それだけだったら、まだなかばの不幸であったろうが！）、また自分の無知を自覚しないという点にある。こうなると、もうほんとうの不幸であって、この不幸が彼らを駆って、いきなりプレハーノフを「深めること」にとりかからせるのである。

ロモノーソフ＝マルトィノフは語る。

「プレハーノフが前述の小著」（『ロシアの飢饉との闘争における社会主義者の任務について』）「を書いてから、多くの歳月が流れさった。社会民主主義者は、一〇年にわたって労働者階級の経済闘争を指導してきたが、……党の戦術に広範な理論的基礎づけをあたえるいとまはまだなかった。いまでは、この問題は機が熟している。そして、もしこのような理論的基礎づけをあたえたければ、われわれは、疑いもなく、かつてプレハーノフが展開した戦術の諸原則をいちじるしく深めなければならないであろう。……いまやわれわれは、宣伝と扇動の差異を、プレハーノフとは違ったふうに規定しなければならないであろう。」（マルトィノフは、ついそのまえのところで、「宣伝家は一人または数人の人間に多くの思想をあたえるが、扇動家は、ただひとつの、または数個の思想をあたえるにすぎない。そのかわりに、扇動家はそれらを多数の人々にあたえる」というプレハーノフのことばを引

用したのである。）「われわれは、宣伝ということばを、個々の人間にとって理解しやすい形態でなされるか、広範な大衆にとって理解しやすい形態でなされるかにかかわりなく、現制度全体またはその部分的現われを革命的に解明することと解したい。また、扇動ということばを、厳密な意味では（原文のまま！）、大衆に一定の具体的行動を呼びかけること、社会生活へのプロレタリアートの直接の革命的介入をうながすことと解したい」。

新しい、より厳密な、より深遠なマルティノフ式用語が生まれたことについて、ロシアの――そしてまた国際的な――社会民主党に祝意を述べよう。いままでわれわれは（プレハーノフや、さらにまた国際労働運動のすべての指導者たちといっしょに）、宣伝家とは、たとえば同じ失業の問題をとりあげるにしても、恐慌の資本主義的な性質を説明し、今日の社会で失業が避けられない原因を示し、この社会が社会主義社会へ改造されてゆく必要性を描きだすなどのことを、しなければならないものと、考えていた。一言でいえば、宣伝家は「多くの思想」を、しかも、それらすべての思想全体をいっぺんにわがものにすることは少数の（比較的にいって）人々にしかできないくらいに多くの思想を、あたえなければならない。これに反して扇動家は、同じ問題を論じるにしても、自分の聞き手全部に最もよく知られた、最もいちじるしい実例――たとえば失業者の家族の餓死とか、乞食の増加などというような――をとりあげ、このだれでも知っている事実を利用して、ただ一つの思想――富の増大と貧困の増大との矛盾がばかげたものであるという思想――を「大衆に」あたえることに全力をつくし、大衆のなかにこのようなはなはだしい不公平にたいする不満と憤激をかきたてることにつとめるが、他方、この矛盾の完全な説明は、宣伝家にまかせるであろう。だから、宣伝家は、主として、印刷されたことばによって、扇動家は生きたことばによって、活動する。宣伝家に要求される資質は、扇動家に要求される資質と同じではない。たとえばわれわれは、カウツキーやラファルグを宣伝家とよび、ベーベルやゲードを扇動家とよぶであろう。しかし、実践活動の第三の分野または第三の機能を別にとりだして、「大衆に一定の具体的行動を呼びかけること」をこの第三の機能にかぞえるのは、このうえなく不条理な話である。なぜなら、単独の行為としての「呼びかけ」は、理論的小冊子であれ、宣伝パンフレットであれ、扇動演説であれ、そのどれにとっても自然の、なくてならない補足物であるか、それとも純然たる執行的機能をなすものであるか、どちらかであるからだ。じじつ、今日ドイツの社会民主主義者が穀物関税に反対してやっている闘争を例にとってみよ

う。理論家は関税政策についての研究を書いて、たとえば、通商条約の締結と通商の自由のためにたたかうように「呼びかける」。宣伝家は雑誌のなかで、扇動家は公開演説のなかで、これと同じことをやる。大衆の「具体的行動」とは、この場合には、穀物関税を引き上げるなという国会への請願書に署名することである。この行動の呼びかけは、間接には、理論家、宣伝家および扇動家によってなされ、直接には、署名用紙を工場や各民家にくばる労働者たちによってなされる。「マルトィノフ式用語」によると、カウツキーもベーベルも宣伝家で、署名用紙のくばり手が扇動家だということになる。そうではないか？

ドイツ人の例が出たので、私はドイツ語で Verballhornung ということばを思いだした。ロシア語に直訳すると、これは、バルホルン化ということである。ヨハン・バルホルンは一六世紀のライプチヒの出版業者で、初等読本を出版し、そのなかに、慣例によって雄鶏のさし絵を掲載した。ただ彼は、足にけづめのある雄鶏を描いた普通の絵のかわりに、けづめのない雄鶏を描いて、まわりに卵を二個そえた。そして、読本の表紙には、「ヨハン・バルホルンの改正版」とつけたしたものである。そこで、それ以来ドイツ人は、実際には改悪であるような「改正」のことを Verballhornung と言う。そこで、マルトィノフのような人がプレハーノフを「深める」のを見ると、思わず知らずバルホルンのことが思いだされるのである。……

わがロモノーソフはなんのためにこんなごたごたしたものを「発明した」のだろうか？『イスクラ』が、「もう一五年も昔にプレハーノフがやっていたのとまったく同じように、事物の一面にしか注意をはらっていない」(三九)ということの例証にするためである。「『イスクラ』にあっては、すくなくともいまのところ、宣伝の任務が扇動の任務をかげに押しやっている」(五二)。この最後の命題をマルトィノフ式のことばから普通の人間のことばに翻訳してみると(というのは、人類はまだこの新発見の用語を採用するまでになっていないので)、次のようになるであろう。——『イスクラ』にあっては、政治的宣伝と政治的扇動の任務が、「一定の目に見える成果を約束する」「立法上および行政上の諸施策の具体的要求」(すなわち、まだマルトィノフの水準まで成長していない古い人類の古い用語を、せめてもう一度だけつかわせてもらえば、社会改良の要求)「を政府に提出する任務を、かげに押しやっている」と。われわれは、この命題と次の長広舌とをくらべてみるように、読者にお勧めする。——

「これらの綱領」(すなわち、革命的社会民主主義者たちの諸綱領)「を読んで驚かされるのは、それらが、(わ

が国にありもしない）議会内での労働者の活動の有利な点をたえず前面に押しだしながら、わが国に現にある工場主たちの工場問題にかんする立法会議に労働者が参加すること、……あるいは、せめて都市の自治行政にでも労働者が参加することとの重要性を、（その革命的虚無主義のために）まったく無視していることとである。……」この長広舌の筆者は、ロモノーソフ＝マルトィノフが自分の知恵でたどりついた当の思想を、もうすこし率直、明瞭、あからさまに言いあらわしている。ところで、この筆者とは、『「ラボーチャヤ・ムィスリ」別冊付録』（一五ページ）のエル・エムである。

（c）政治的暴露と「革命的積極性をそだてること」

マルトィノフは、『イスクラ』に反対して「労働者大衆の積極性を高める」彼の「理論」を提出することによって、実際には、この積極性を低めようという志向をあからさまにしたのであった。というのは、彼が、このような積極性を呼びさます手段、またこの積極性を発揮する場面として望ましく、とくに重要で、「最も広範に適用しうる」ものと宣言したのは、「経済主義者」の全部がやはりその前にはいつくばっているあの経済闘争だからである。この謬見は、けっしてひとりマルトィノフに特有のものでないからこそ、特徴的なのである。実際には、「労働者大衆の積極性を高める」ことは、われわれが「経済を基盤とする政治的扇動」にとどまらない場合に、はじめてなしとげられることである。だが、政治的扇動の必要な拡大がなされるための基本的条件の一つは、全面的な政治的暴露を組織することである。このような暴露による以外には、大衆の政治的意識と革命的積極性とをそだてることはできない。だから、この種の活動は、国際社会民主主義全体の最も重要な機能の一つとなっている。というのは、政治的自由が得られてさえ、こういう暴露が必要でなくなるわけではけっしてなく、ただその暴露のむけられる範囲がいくらか移り変わるだけだからである。たとえば、ドイツの党がその地位をとくに強め、その影響を拡大しつつあるのは、ほかでもなく、党がその政治的暴露カンパニアの精力を弱めなかったおかげである。もし労働者が、専横と抑圧、暴力と濫用行為のありとあらゆる事例——この事例がどの階級に関係するものであれ——に反応する習慣を、しかも、ほかのどれかの見地からではなく、まさに社会民主主義的な見地から反応する習慣を身につけていないなら、労働者階級の意識は真に政治的な意識ではありえない。もし労働者が、具体的な、しかもぜひとも焦眉の（切実な）政治的事実や事件にもと

づいて、他のそれぞれの社会階級の知的・精神的・政治的生活のいっさいの現われを観察することを学びとらないなら、――また住民のすべての階級、層、集団の活動と生活のすべての側面の唯物論的分析と唯物論的評価を、実地に適用することを学びとらないなら、労働者大衆の意識は真に階級的な意識ではありえない。労働者階級の注意や観察力や意識をもっぱら、でないまでも主として、この階級自身にむけさせるような人は、社会民主主義者ではない。なぜなら、労働者階級の自己認識は、現代社会のすべての階級の相互関係についての、完全に明瞭な理解――たんに理論的な理解だけでなく、さらに……理論的な理解よりもむしろ、と言うほうが正しくさえある……政治生活の経験にもとづいてつくりだされた理解――と、不可分に結びついているからである。だからこそ、経済闘争は大衆を政治運動に引きいれるために最も広範に適用しうる手段である、というわが「経済主義者たち」の説教は、その実践的意義からすればじつにはなはだしく有害であり、またじつにはなはだしく反動的なのである。社会民主主義者となるためには、労働者は、地主や坊主、高官や農民、学生や浮浪者の経済的本性と社会的＝政治的特性を明瞭に理解し、彼らの強味と弱点とを知り、それぞれの階級やそれぞれの層が自分の利己的な意向やほんとうの「はら」をつつみかくすのに用いている慣用文句やありとあらゆる詭弁を見きわめることができ、どういう制度や法律があれこれの利害を反映しているか、しかもまさにどのように反映しているかを、見きわめることができなければならない。ところで、こういう「明瞭な理解」は、どんな本からも借りてくることはできない。そのような理解は、現在われわれのまわりにおきていること、だれもかれもが思いおもいに語ったり、少なくともささやきあっていること、あれこれの事件、あれこれの数字、あれこれの裁判の判決、等々に現われていることを、生きいきと描写し、すぐその場で暴露することによってのみ、あたえることができるのである。こうした全面的な政治的暴露こそ、大衆の革命的積極性をそだてるのに必要な基本的条件である。

ロシアの労働者が、人民にたいする警察の残虐な取扱いについて、異宗派征伐や、農民の笞打ちについて、検閲当局の不法行為や、兵士の拷問や、まったく罪のない文化的企画の迫害などについて、まだあまり革命的積極性を示していないのは、なぜであろうか？　それは、「経済闘争」が彼らをこれらの問題に「突きあたらせ」ないためではあるまいか、これらの問題があまり「目に見える成果」をあまり「約束」せず、あまり「明確なもの」をあたえないためではあるまいか？　そうではない。繰りかえして言うが、そ

のような見解は、自分の罪を人になすりつけ、自分自身の俗物根性（ならびにベルンシュタイン主義）を労働者大衆になすりつけようとするものにほかならない。われわれは、これらすべての忌まわしい行為の、十分に広範な、あざやかな、速やかな暴露をまだ組織できなかったことについて、われわれ自身を、大衆の運動に自分が立ちおくれていることを、責めなければならない。われわれがそういう暴露を組織するなら（そしてわれわれはそれを組織しなければならないし、また組織できる）、どんなに遅れた労働者でも、学生や異宗派、百姓や著作家を罵倒し、これに暴行をくわえているのは、彼、労働者自身をその生活の一歩ごとにあのようにひどく抑圧し、押しつぶしている、まさにその同じ暗黒の勢力であることを、理解するか、でなければ感じるであろう。だが、それを感じた以上、労働者は自分でもこれに反応したいという願望、しかも抑えきれない願望をいだくであろう。そのときには彼は、きょうは検閲官にやじをとばし、あすは農民一揆を鎮圧した知事の家の前でデモをおこない、あさっては異端糾問の仕事をしている法衣をきた憲兵どもに思いしらせる、等々のことをやれるようになろう。われわれは、全面的な、生まなましい暴露を労働者大衆のなかに投げこむために、まだきわめてわずかなことしかやっていない、いな、ほとんどなにもやっていない。われわれのあいだには、まだ自分たちのこういう義務を自覚しないで、工場生活の狭い枠のなかで自然発生的なやり方で「じみな日常闘争」のあとを追いかけまわしているものが多い。こういう状態のもとで、「『イスクラ』には、輝かしい、完成された思想の宣伝にくらべて、じみな日常闘争の漸進的な歩みの意義を軽んじる傾向がある」（マルトィノフ、六一ページ）などと語るのは、党をうしろへ引きもどすことであり、われわれの訓練不足と立ちおくれを弁護し、賛美することである。

また、大衆に行動を呼びかけることについていえば、これは、精力的な政治的扇動がありさえすれば、生きいきとした、あざやかな暴露がありさえすれば、ひとりでに生まれてくる事柄である。だれかを現行犯でとっつかまえ、これを即座に万人の前で、またいたるところで糾弾することは、それだけでどんな「呼びかけ」よりも有効であり、ときにはだれがいったい群衆に「呼びかけた」のか、また、だれがいったいあれこれのデモンストレーションの計画等々を提出したのか、あとになってはきめかねるくらいに、その効果は大きい。呼びかけ——一般的な意味ではなくて、具体的な意味での——は、行動の現場でしかできないことであり、また自分自身、即座にその場へ出てゆくものにしかできないことである。だが、われわれの仕事、社会民主

主義的評論家の仕事は、政治的暴露と政治的扇動を深め、ひろめ、強めることにある。

ついでに「召集」のことについて一言しよう。この春の諸事件以前に、学生の兵籍編入問題のように、労働者にたいして、目に見える成果をまったくなに一つ約束しない問題へも積極的に介入するように労働者に呼びかけた唯一の機関紙は、『イスクラ』であった。「一八三人の学生の兵籍編入」についての一月一一日付の命令が発表された直後に、『イスクラ』は、この問題を扱った論文をのせて（第二号、二月）、デモンストレーションがまだどんなかたちでも全然始まらない以前に、「労働者は、学生を助けにゆけ」とはっきり呼びかけ、また「人民は」政府の不遜な挑戦にこたえよ、と公然と呼びかけたのである。そこでわれわれは、すべての人々におたずねしよう。――マルトィノフが、あれほどいろいろと「呼びかけ」について論じ、「呼びかけ」を特別の活動形態として取りだしさえしながら、この召集については一言半句も述べなかったという、注目すべき事態は、どのようにして起こったのか、また、どういう理由によるものなのか？　またこういうことがあったのにマルトィノフが、「目に見える成果を約束する」要求のための闘争を「呼びかける」点で不十分だというので、『イスクラ』を一面的だと宣言したのは、はたして俗物根性ではないだろうか？

『ラボーチェエ・デーロ』をふくむわが「経済主義者たち」が成功を博したのは、遅れた労働者に媚びへつらったおかげであった。しかし、社会民主主義的労働者、革命的労働者は（そしてこのような労働者の数はますますふえている）、「目に見える成果を約束する」要求のための闘争等々についてのこうした議論をみな、憤然としてしりぞけるだろう。なぜなら、彼は、これが一ルーブリについて一コペイカ増し、という古い歌の替え歌にすぎないことを理解するだろうからである。このような労働者は、『ラボーチャヤ・ムィスリ』や『ラボーチェエ・デーロ』に陣どった自分の助言者たちにたいして、次のように言うであろう。諸君、君たちが、われわれ自身で処理できる問題に度はずれに熱心におせっかいをし、君たち自身のほんとうの義務の履行を怠けているのは、むだ骨おりというものだ。君たちが、社会民主主義者の任務は経済闘争そのものに政治性をあたえることである、などと言っているのは、まったくばかげているではないか。それはほんの手はじめのことで、社会民主主義者の主要な任務はそんなものではない。というのは、ロシアをふくめた全世界で、警察がしばしば自分で経済闘争に政治性をあたえはじめているし、労働者は、政府がだれの味方であるかを、自分で理解することを学び

つつあるからである。* 君たちが、まるでアメリカ大陸でも発見したかのようにかつぎまわっている「雇い主と政府とにたいする労働者の経済闘争」なるものは、ロシアの多くの片田舎で、ストライキのことは聞いたことがあっても、社会主義のことなどほとんど耳にしたことのない労働者たち自身が、やっていることではないか。君たちみなが、目に見える成果を約束する具体的な要求をかかげることによってうながそうと思っているわれわれ労働者の「積極性」は、われわれがすでにもっているものではないか。またわれわれ自身が、われわれの日常の小さな労働組合的活動のなかで、そのような具体的要求を、ときにはインテリゲンツィア諸君の援助などすこしもうけずに、提出しているではないか。しかし、われわれにはこのような積極性だけでは足りない。われわれは、「経済」政策のお粥だけで腹がくちくなるような子どもではない。われわれは、他人が知っていることは、なんでも知りたい。われわれは、政治生活のすべての側面をくわしく知り、ありとあらゆる政治的事件に積極的に参加したい。そのためには、インテリゲンツィア諸君は、われわれ自身がすでに知っていることを繰りかえすのをいますこし少なくし、** われわれがまだ知らないこと、われわれが自分の工場での経験や「経済的」経験からは自分ではけっして知りえないこと、つまり政治的知識を、いますこし多くわれわれにあたえてくれなければならない。こういう知識を諸君インテリゲンツィアは身につけることができるし、諸君には、それをいままで諸君がやってきたより百倍も千倍も多くわれわれに提供してくれる義務がある。それも、たんに議論や、小冊子や、論文（失礼だが、あけすけに言うと！――少々退屈なことが多い）のかたちで提供してくれるだけでなく、ぜひとも、わが国の政府とわが国の支配階級とがいまこのときあらゆる生活分野でやっている事柄の生きいきとした暴露のかたちで提供してくれる義務がある。君たち自身のこの義務を、どうかいますこし熱心に果たしてくれたまえ、そして「労働者大衆の積極性を高める」ことについて論じるのは、いますこし少なくしてくれたまえ。われわれは、君たちが考えているよりもずっと大きな積極性をもっている。そして、われわれは、「目に見える成果」をなにも約束しないような要求さえ、公然たる街頭闘争によって支持することを解している！　それに、君たちがわれわれの積極性を「高める」などということができるわけがない。なぜといって、君たち自身に、まさにこの積極性が不足しているからだ。自然発生性の前に拝跪するのをいますこし少なくし、自分自身の積極性を高めることをいますこし多く考えたまえ、諸君！と。

* 「経済闘争そのものに政治性をあたえよ」という要求は、

政治活動の分野における自然発生性への拝跪をこのうえなくあざやかに言いあらわしている。経済闘争は、きわめてしばしば自然発生的に、すなわち、「革命的バチルスたるインテリゲンツィア」の介入がなくても、意識的社会民主主義者の介入がなくても、政治性をおびてくる。たとえばイギリスの労働者の経済闘争も、社会主義者が全然参加しなくても、政治性をもつようになった。しかし、社会民主主義者の任務は、経済を基盤とする政治的扇動に尽きるものではない。彼らの任務は、この組合主義的政治を社会民主主義的な政治闘争に転化すること、経済闘争が労働者のうちに生みだした政治的意識のひらめきを利用して、労働者を社会民主主義的な政治的意識まで引き上げることである。ところが、マルトィノフ一派は、自然発生的にめざめてくる政治的意識を引き上げ、押しすすめようとはしないで、自然発生性の前に平身低頭し、経済闘争は労働者を自分たちの政治的無権利の問題に「突きあたらせる」と繰りかえす、しかも胸の悪くなるほど何度も繰りかえすのである。諸君、組合主義的な政治的意識のこの自然発生的なめざめが、まさに諸君を、諸君の社会民主主義的任務の問題に「突きあたらせ」ないのは、困ったことである！

＊＊「経済主義者」にたいする労働者のこの対話全体が、われわれのでまかせな思いつきでないことを裏づけるために、二人の証人を引合いにだそう。それは、疑いもなく、労働運動の消息に直接通じていて、われわれ「教条主義者」をえこひいきする傾向の最も少ない人々である。というのは、一人の証人は、「経済主義者」（『ラボーチェエ・デーロ』をさえ政治的機関誌と考えているような！）であるし、いま一人はテロリストだからである。第一の証人は、『ラボーチェエ・デーロ』第六号にのった、真実で生きいきとした点で注目に値する論文『ペテルブルグの労働運動と社会民主党の実践的任務』の筆者である。[40]彼は労働者を、（一）意識的革命家、（二）中間層、（三）残りの大衆、に分けている。ところで、その中間層は、「自分たちの最も身近な経済的利害と一般的な社会的諸条件との関連を、とうの昔に理解していて、しばしばこれらの最も身近な経済的利害よりも、政治生活の諸問題にいっそう大きな関心を寄せているのである。」……彼らは『ラボーチャヤ・ムィスリ』を「こう辛辣に批判している。」「どれもこれも同じことばかりだ、とっくに知っていることだ。そんなことはとっくに読んだ、」「政治評論にはまたしてもなにもなかった」（三〇—三一ページ）、と。だが、第三の層でさえ次のような状態である。「労働者大衆のなかでも、より敏感で、比較的若く、酒場や教会のためにさほど堕落させられていない者は、政治的内容をもった書物を手にいれる機会などはほとんどまったくないので、政治生活の諸現象を思いおもいに解釈し、学生一揆についての断片的な報道を読んで考えこむ」、うんぬん。他方、テロリストはこう書いている。「……彼らは、自分たちの居住地でないいろいろな都市における工場生活のこまごましたことを、一、二度ぐらいは読むだろうが、そのあとはもうやめてしまうだろう。……退屈なのだ。……労働者新聞で国家のことを論じないの

は、労働者を小さい幼児扱いにするものだ。……労働者は幼児ではない。」(『スヴォボーダ』、革命的社会主義者団刊、六九、七〇ページ)(22)

(d)　経済主義とテロリズムとには なにか共通点があるか？

前節の注のなかで、われわれは、たまたま意見の一致をみた「経済主義者」と、非社会民主主義者のテロリストとを引きくらべた。しかし、一般的にいって、この両者のあいだには、偶然でない必然的な内面的つながりがあるのであって、それについてはあとのほうでも語るおりがあるだろうが、いま、ほかならぬ革命的積極性をそだてる問題に関連して、それにふれておく必要がある。「経済主義者」と今日のテロリストとには一つの共通の根がある。すなわち、われわれが前章で一般的現象として述べ、いま政治活動と政治闘争の分野に現われたその影響について検討している、あの自然発生性への拝跪がそれである。一見したところでは、われわれのこの主張は逆説のように思われるかもしれない。「じみな日常闘争」を強調する人々と、個々人の最も自己犠牲的な闘争を呼びかける人々とでは、それほどまでに大きな相違があるように見えるのである。しかし、これは逆説ではない。「経済主義者」とテロリストとは、自然発生的潮流の相異なる対極の前に拝跪するのである。すなわち、「経済主義者」は「純労働運動」の自然発生性の前に拝跪するし、テロリストは、革命的活動を労働運動に結びつけて渾然一体化する能力、または可能性をもたないインテリゲンツィアの、最も熱烈な憤激の自然発生性の前に拝跪するのである。それを結びつける可能性を信じなくなった人、あるいは一度も信じたことのない人には、テロルのほかには、自分の激昂した感情と自分の革命的精力とのはけ口を見いだすことは、実際に困難である。こうして、前記の二つの潮流の双方に現われた自然発生性への拝跪は、『クレード』の名だかい綱領――労働者は自分のために、自分たちの「雇い主と政府とにたいする経済闘争」をおこない（『クレード』の筆者は、どうかわれわれがの思想をマルトィノフ式のことばで表現するのをお許しねがいたい！　われわれは、そうしてもさしつかえなかろうと思う。というのは、『クレード』のなかにも、労働者は経済闘争において「政治制度に突きあたる」と述べられているからである）、インテリゲンツィアは自分のために自力で、もちろんテロルにうったえて政治闘争をおこなう！という綱領――の実現の手はじめにほかならない。これは完全に論理的な、避けられない結論であって、たとえこの綱領を実行しはじめている人々が自分ではこの結論

の避けられないことを意識していなかろうと、われわれはこう主張しないわけにはいかない。政治活動にはそれ自身の論理があって、この論理は、あるいはテロルを、あるいは経済闘争そのものに政治性をあたえよと、最大の善意をもって呼びかける人々の意識にはかかわらない。地獄への道は善意で敷きつめられている。そして、この場合、善意だけでは、「最小抵抗線」に沿い、『クレード』の純ブルジョア的綱領の線に沿って自然発生的に引っぱられてゆくのをまぬかれることはできない。まったく、多くのロシアの自由主義者たちが——あからさまな自由主義者も、マルクス主義の仮面をかぶった自由主義者も——心からテロルに共鳴し、現在テロリスト的気分の高まりを支持することにつとめているという事情も、また偶然ではない。

そこで、まさに労働運動を全面的に促進することを自分の任務と定めながら、その綱領にテロルをふくめ、社会民主主義からいわば自分を解放した「革命的社会主義者団スヴォボーダ」が生まれたとき、この事実は、ペ・ペ・アクセリロードのすばらしい洞察力を、さらにもう一度確証したものであった。すなわち、アクセリロードは、すでに一八九七年の末に、社会民主主義者の動揺からこういう結果が生まれることを文字どおりに予言して（『今日の任務と戦術の問題によせて』）、その名だかい「二つの見とおし」を略述したのである。それ以後にロシアの社会民主主義者のあいだに起こった論争や意見の相違はみな、ちょうど植物が種子のうちにふくまれているように、この二つの見とおしのうちにすでにふくまれている。*

* マルトィノフは、「別の、より現実的な（？）二者択一を考えている。」（『社会民主党と労働者階級』、一九ページ）——すなわち、「社会民主党がプロレタリアートの経済闘争の直接の指導を引きうけ、それによって（！）この闘争を革命的階級闘争に転化するか」、……「それによって」、つまり、明らかに、経済闘争の直接の指導によって、である。労働組合闘争を指導するだけで組合主義的運動を革命的階級運動に転化できたという例が、いままでどこにあったか、マルトィノフに示してもらおうではないか。このような「転化」のためには、われわれは、全面的な政治的扇動の「直接の指導」に積極的に着手しなければならないことを、彼は理解できないのだろうか？……「それとも、いま一つの見とおしは、社会民主党が労働者の経済闘争の指導を放棄し、それによって……自分の翼をはさみきるか、どちらかである。」……さきほど引用した『ラボーチエエ・デーロ』の意見によってみれば、……このように「放棄している」のは『イスクラ』なのである。しかし、われわれが見てきたように、『イスクラ』は、経済闘争の指導のためには、『ラボーチエエ・デーロ』よりもずっと多くのことをしているのであって、ただそれだけにとどめたり、それを理由として自分の政治的任務をせばめたりしないだけの話である。

右に述べた見地からすれば、「経済主義」の自然発生性に抵抗できなかった『ラボーチェエ・デーロ』が、テロリズムの自然発生性にも抵抗できなかったわけも、理解できるというものである。ここで「スヴォボーダ」団がテロルの弁護のために提出した特別の論証を指摘することが、はなはだ興味ぶかい。同団は、テロルの威嚇的な役割を「まったく否認する」(『革命主義の再生』、六四ページ)が、そのかわりにそれの「刺激的(興奮剤的)意義」を押しだしている。このことは、第一には、人々をテロルに執着させていた伝統的な(前社会民主主義的な)思想圏の分解、衰退の一段階として、特徴的である。今日ではテロルによって政府を「威嚇する」――したがってまた瓦解させる――ことは不可能だということを承認するのは、実質上、闘争方式としての、綱領によって是認される活動分野としてのテロルを、完全に排撃することとである。第二に、このことは、「大衆の革命的積極性をそだてる」面でのわれわれの緊要な諸任務を理解しない見本として、さらにいっそう特徴的である。「スヴォボーダ」団は、労働運動を「興奮させ」、それに「強力な衝撃」をあたえる手段として、テロルを宣伝する。自分で自分をこれ以上明瞭に反駁する論証を考えることは困難である! そこで、おたずねしたいが、はたしてロシアの生活には、特別の「興奮」剤を考えださなければならないほどに不法行為が少ないのであろうか? また他方では、ロシアの専横によってさえ興奮もせず、興奮させることもできないような人間なら、政府とひとにぎりのテロリストとの一騎討ちをも、「鼻くそをほじくりながら」高見の見物をするであろうことは、明らかではなかろうか? 問題はこうなのだ。労働者大衆はロシアの生活の醜悪事によって大いに興奮しているのだが、こう言ってよければ、人民の興奮の水滴と細流をことごとく寄せ集め、集中する能力が、われわれにないのである、そういう水滴と細流は、われわれみなが想像したり考えたりしているよりもはるかに大量にロシアの生活からしたたりおちているが、しかし、それらはまさに単一の巨大な流れに結合されなければならないのである。これが実現可能な任務だということは、労働運動の巨大な成長や、すでに前述した政治文献にたいする労働者の熱望が、反駁の余地のないまでに立証している。ところが、テロルへの呼びかけも、経済闘争そのものに政治性をあたえよという呼びかけも、ロシアの革命家の最も緊急な義務――全面的な政治的扇動の遂行を組織すること――を回避する別々の形式である。「スヴォボーダ」団は扇動をテロルで代用させようと望み、率直にこう認めている。「いったん大衆のあいだにいっそう強力な、精力的な激動が始まるなら、テロルの刺

激的（興奮剤的）役割は終わったことになる」（『革命主義の再生』、六八ページ）と。これはまさに、テロリストも「経済主義者」もその双方とも、この春の諸事件*が明瞭に証拠だてたところに反して、大衆の革命的積極性を過小評価していることを示すものである。その場合、前者は人為的な「興奮剤」を捜しにとびだし、後者は「具体的な要求を」論じたてる。双方とも、政治的扇動をおこない、政治的暴露を組織する面で自分自身の積極性を発展させることには、十分注意をはらっていない。だが、この仕事は、今日でも、またほかのどういうときでも、他のなにものかで代用させうるものではないのである。

* ここに言っているのは、一九〇一年の春のことで、そのときに大規模な街頭デモンストレーションが始まったのである。〔一九〇七年版への原注〕

（e）　民主主義のための先進闘士としての労働者階級

以上にわれわれは、最も広範な政治的暴露を組織することが、いやしくも真に社会民主主義的な活動にとって絶対に必要な、最も緊急に必要な任務であることを、見てきた。とはいえ、われわれはこの結論を、もっぱら、労働者階級が政治的知識と政治的教育とをきわめて緊急に必要としているということから出発して引きだしたのであった。しかし、問題をこういうふうに立てただけでは、あまりにも狭く、一般にあらゆる社会民主党の、とくに今日のロシア社会民主党の一般民主主義的任務を無視することになるだろう。この命題をできるだけ具体的に説明するために、「経済主義者」にとって最も「身近な」側面、すなわち実際的側面から、この問題をとりあげてみよう。労働者階級の政治的意識を発達させる必要があることには、「みなが同意している」という。だが問題は、どのようにしてそれをやるのか、またそれをやるためにはなにが必要なのか、ということにある。経済闘争は、労働者を政府と労働者階級との関係の問題に「突きあたらせる」だけであって、したがって、どんなにわれわれが「経済闘争そのものに政治性をあたえる」任務に骨をおっても、この任務の枠内では、労働者の政治的意識を（社会民主主義的な政治的意識の段階に）発達させることはけっしてできないであろう。というのは、この枠そのものが狭いからである。マルトィノフの定式がわれわれに貴重なのは、それが、物事をごっちゃにするマルトィノフの能力を例証しているからではけっしてなく、すべての「経済主義者」の基本的な誤りをあざやかに言いあらわしているからである。すなわち、労働者の階級的・

政治的意識を、いわば労働者の経済闘争の内部から、つまり、もっぱら（でないまでも主として）この闘争から出発して、またもっぱら（でないまでも主として）この闘争にもとづいて発達させることができるという確信が、それである。このような見解は、根本的にまちがっている。――そして、「経済主義者たち」が、われわれの彼らにむけた論戦のことで腹をたてて、意見の相違の由来をよく考えようとしないからこそ、われわれは文字どおり、理解し合えず、たがいに違ったことばで話すということになってしまうのである。

階級的・政治的意識は、外部からしか、つまり経済闘争の外部から、労働者と雇い主との関係の圏外からしか、労働者にもたらすことができない。この知識を汲みとってくることのできる唯一の分野は、すべての階級および層と国家および政府との関係の分野、すべての階級の相互関係の分野である。だから、労働者に政治的知識をもたらすにはなにをなすべきか、という問いにたいしては、「経済主義」に傾いている実践家はもとより、大多数の場合に実践家を満足させている回答――つまり「労働者のところにゆけ」という回答をあたえるだけではだめなのだ。労働者に政治的知識をもたらすためには、社会民主主義者は、住民のすべての階級のなかにはいってゆかなければならない、自分の軍隊の部隊をあらゆる方面に派遣しなければならない。

われわれはこういう四角ばった定式化をわざと選び、単純化した鋭い表現をわざとつかっているが、これはけっして逆説を語りたいからではなく、「経済主義者たち」が許しがたいほど軽蔑している諸任務に、彼らが理解しようとしない組合主義的政治と社会民主主義的政治との相違に、彼らをこっぴどく「突きあたらせる」ためなのである。だから、われわれは読者に、かんしゃくをおこさないで、われわれの言うことをおしまいまで注意ぶかく聞いてくれるようにお願いする。

近年最もひろまった型の社会民主主義者のサークルをとって、その活動を調べてみたまえ。このサークルは「労働者との結びつき」をもっていて、そのことに満足し、工場内の濫用行為や、資本家をえこひいきする政府のやり方や、警察の暴力行為を攻撃したリーフレットを発行している。労働者といっしょの集会の席上でも、会話は普通これと同じ主題の範囲を出ないか、あるいはほとんど出ない。革命運動の歴史、わが国の政府の国内政策や対外政策の諸問題、ロシアおよびヨーロッパの経済的進化や、現代社会におけるあれこれの階級の状態などの問題について、報告や会話がおこなわれるのは、すこぶるまれなことである。社会の他の諸階級のなかに系統的に結びつきを獲得し、ひろげて

ゆくことなど、だれひとり考えない。じつを言えば、大部分の場合、このようなサークルのメンバーが活動家の理想として心にえがいているのは、社会主義者たる政治的指導者というよりは、はるかに労働組合の書記に似たものである。というのは、どこの労働組合、たとえばイギリスの労働組合の書記にしても、つねに労働者が経済闘争をおこなうのを助け、工場内の状態の暴露を組織し、ストライキの自由やピケット（ここの工場はいまストライキ中だということを、万人に警告するための）の自由を制限する法律や措置の不当なことを説明し、国民中のブルジョア階級に属する仲裁裁判判事の不公平を説明する、等々しているからである。一言でいえば、どの労働組合の書記でも、「雇い主と政府とにたいする経済闘争」をおこなっているし、またおこなうことを助けている。ところで、こういうことはまだ社会民主主義ではないこと、社会民主主義者の理想は、労働組合の書記ではなくて、どこでおこなわれたものであろうと、またどういう層または階級にかかわるものであろうと、ありとあらゆる専横と圧制の現われに反応することができ、これらすべての現われを、警察の暴力と資本主義的搾取とについての一つの絵図にまとめあげることができ、一つひとつの瑣事を利用して、自分の社会主義的信念と自分の民主主義的諸要求を万人の前で叙述し、プロレタリアートの解放闘争の世界史的意義を万人に説明することのできる人民の護民官でなければならないということは、どんなに力説しても力説し足りない。たとえば、ロバート・ナイト（イギリスの最も強大な労働組合の一つであるボイラー製造工組合の有名な書記で指導者）のような活動家と、ヴィルヘルム・リープクネヒトとを比較して、マルトィノフが自分と『イスクラ』との意見の相違点をまとめたあの対照法を、この二人にあてはめてみたまえ。そうすると、こういうことがわかるだろう。——マルトィノフの論文のはじめからページを繰ってゆくと、R・ナイトは、「大衆に一定の具体的行動を呼びかける」（三九）ほうがはるかに多かったが、W・リープクネヒトは、「現制度全体またはその部分的現われの革命的解明」（三八—三九）に従事するほうが多かった。R・ナイトは、「プロレタリアートの最も身近な要求を定式化し、それを実現する手段を示した」（四一）が、W・リープクネヒトは、それもやったけれども、また「いろいろな反政府諸層の積極的活動を同時に指導し」、「彼らに明確な行動綱領を口授する」＊（四一）ことを拒まなかった。R・ナイトは、まさに「経済闘争そのものにできるだけ政治性をあたえる」（四二）ことにつとめ、「一定の目に見える成果を約束する具体的な要求を政府に提出する」（四三）ことを、みごとに解していたの

に、W・リープクネヒトは、「一面的な」「暴露」(四〇)に従事することがはるかに多かった。R・ナイトは、「じみな日常闘争の漸進的な歩み」(六一)のほうをいっそう重視したが、W・リープクネヒトは、「輝かしい、完成された思想の宣伝」(六一)を重視した。W・リープクネヒトは、自分の指導する新聞を、まさに「わが国の諸制度、主として政治的諸制度を、それらが種々さまざまな住民層の利益と衝突するかぎりにおいて暴露する革命的反政府派の機関紙」(六二)につくりあげたのに、R・ナイトは、「プロレタリア闘争と緊密な有機的結びつきをたもって」――「緊密な有機的結びつき」ということを、われわれがさきにクリチェフスキーとマルトィノフを例にとって研究した、あの自然発生性への拝跪の意味にとれば――、「労働者の事業のために活動し」(六三)、また「自分のはたらきかけの範囲をせばめ」たが、もちろん彼は、マルトィノフと同じように、「そうすることによってはたらきかけそのものを複雑化した」(六三)と信じたのであった。一言でいえば、マルトィノフが、de facto〔事実上〕社会民主党を組合主義に低めていることが、おわかりになろう。もっとも彼がそうするのは、社会民主党のためよかれと願わないからではけっしてなく、ただ彼がプレハーノフを理解する労をとらずに、プレハーノフを深めることをすこしばかり急ぎすぎたからである。

＊　たとえばプロイセン＝フランス戦争のおりにリープクネヒトは、民主主義派全体に行動綱領を口授した。――マルクスとエンゲルスも、一八四八年には、それ以上にこういう活動をした。

だが、本論にかえろう。われわれはさきほど、社会民主主義者は、もしプロレタリアートの政治的意識を全面的に発達させる必要を、ただ口さきで主張しているだけでないなら、「住民のすべての階級のなかにはいってゆか」なければならない、と述べた。そこで問題となるのは、次のことである。どういうふうにそれをやるのか？　われわれはそうするだけの人手をもっているだろうか？　他のすべての階級のなかでそのような活動をするための基盤があるだろうか？　それは階級的見地から逸脱することを意味しないだろうか、あるいは逸脱する結果になりはしないだろうか？　しばらくこれらの問題について考えてみよう。

われわれが「住民のすべての階級のなかにはいってゆく」というのは、理論家としても、宣伝家としても、扇動家としても、組織者としてもそうしなければならないのである。社会民主主義者の理論的活動が、それぞれの階級の社会的・政治的地位のあらゆる特殊性の研究を目標としなければならないことについては、だれも疑う者はいない。

しかし、この点で現在なされていることは、ごくごくわずかなもので、工場生活の特殊性の研究を目標としてなされた活動にくらべると、釣合いがとれないくらいわずかである。委員会やサークルでは、製鉄業のある部門についての専門的調査に没頭している人さえ見かけることはあっても、組織の成員（よくあることだが、なにかの理由で実践活動から離れることをよぎなくされたような）が、わが国の社会・政治生活のなにか焦眉の問題――他の住民層のなかでの社会民主主義的活動のきっかけとなりうるような――についての資料の収集に専門的に従事している例は、ほとんど見いだされないであろう。今日の労働運動の大多数の指導者が訓練に不足していることを述べるときには、この点の訓練のことも述べないわけにはいかない。なぜなら、このこともまた、「プロレタリア闘争との緊密な有機的結びつき」ということの「経済主義的な」理解に関連があるからである。だが、肝心なことは、もちろん、人民のすべての層のなかで宣伝と扇動をおこなうことである。西ヨーロッパには、出席したい者はだれでも出席できる人民集会や寄りあいがあり、また社会民主主義者がすべての階級出身の代議士たちの前で語る議会があって、同地の社会民主主義者がこの任務を果たすのは容易である。わが国には議会もなければ寄りあいの自由もない。にもかかわらず、われわれは、社会民主主義者の話を聞こうとする労働者たちとの集会を組織することができている。これと同じように、われわれは、民主主義者の話を聞こうとする者でさえあれば、住民のありとあらゆる階級の人々との集会を組織することができなければならない。なぜなら、「共産主義者はあらゆる革命運動を支持する」(六六)のであって、したがってわれわれには、全人民にむかって一般民主主義的任務を説き、これを強調する義務がある――しかも自分の社会主義的信念をただの一瞬間もつつみかくすことなく――ことを、実際に忘れる者は、社会民主主義者ではないからである。あらゆる一般民主主義的問題を提起し、激化し、解決する点でだれよりもさきんじなければならない自分の義務を実践において忘れる者は、社会民主主義者ではない。

「そのことにはまったくみなが同意しているのだ！」――とせっかちな読者はさえぎって言うだろう。そして、最近の同盟大会で採択された『ラボーチェエ・デーロ』編集部にたいする新指令も、はっきりこう言っている。「プロレタリアートに関係のある社会＝政治生活上の現象や事件は、それが特別の一階級としてのプロレタリアートに直接関係するものであれ、あるいは自由のための闘争におけるいっさいの革命勢力の前衛としてのプロレタリアートにかんするものであれ、すべて政治的宣伝と扇動のきっかけとされ

なければならない。」（『二つの大会』、一七ページ。傍点はわれわれのもの）。いかにもそのとおり、これはまったく正しく、まったくりっぱなことばである。そして、もし『ラボーチェエ・デーロ』がこのことばを理解してさえいたら、もし同誌がこのことばにならべてそれに反することを言ってさえいなかったなら、われわれはまったく満足したであろう。「前衛」とか、先進部隊とかと自称するだけではまだ足りないではないか。――さらに、われわれが先頭にすすんでいることを、その他のすべての部隊がその目で見、それを認めざるをえないように、行動することが必要である。そこで読者におたずねするが、いったいその他の「部隊」の人々は、われわれが口さきで「前衛」だと言っただけで、信用するほど阿呆であろうか？　まあひとつこういう場面を具体的に想像してみたまえ。ロシアの教養ある急進主義者なり自由主義的立憲主義者なりの「部隊」に社会民主主義者がやってきて、こう言う。――われわれは前衛である、「いまわれわれの当面する任務は、どうやって経済闘争そのものにできるだけ政治性をあたえるかということである」と。いくらかでも利巧な急進主義者か立憲主義者なら（そしてロシアの急進主義者や立憲主義者のあいだには利巧な人間が多い）、そういうことばを耳にしたなら、ただうす笑いをうかべて、こう言うだろう（もちろん、ひとりごとで、というのは、たいがいの場合、彼は練達の外交家だから）、――「ふん、この『前衛』は少々足りないわい！　労働者の経済闘争そのものに政治性をあたえるということは、われわれの任務、ブルジョア民主主義の先進的代表者の任務だということさえ、奴にはわかっていないのだ。まったく、われわれだって、西ヨーロッパのすべてのブルジョア同様に、労働者を政治に引きいれたいのだ。ただし、ほかならぬ組合主義的政治に限ってのことで、社会民主主義的政治ではない。労働者階級の組合主義的政治とは、とりもなおさず労働者階級のブルジョア的政治なのだ。ところが、この『前衛』が自分の任務だと言って定式化したのは、まさしく組合主義的政治の定式化だ！　だから、奴らにはいくらでも好きなだけ、社会民主主義者と自称させておくがよい！　じっさい、おれは、レッテルのことでむきになるような子どもじゃないからな！　ただあの有害な正統派の教条主義者たちに牛耳らせないことだ！　それと気づかずに社会民主党を組合主義の水路に引きずりこむ連中に『批判の自由』をたもたせておくことだ！」と。

そして、社会民主党は前衛であるなどと言っているその社会民主主義者が、現在、自然発生性がほとんど完全にわが運動を支配しているときに、この世の中でなによりも

「自然発生的要素の軽視」を恐れており、「輝かしい、完成された思想の宣伝にくらべて、じみな日常闘争の漸進的な歩みの意義を軽んじる」のを恐れていることなどを知ったなら、わが立憲主義者のかすかなうす笑いは、とめどのない大笑いに変わるであろう！「先進」部隊ともあろうものが、意識性が自然発生性を追いこしはしないかと恐れ、思想の違う人々からさえ一般的承認をかちえずにはおかない大胆な「計画」を提出することを恐れるとは！　彼らは、前衛ということばを後衛ということばととりちがえているのではあるまいか？

じっさい、マルトィノフの次のような議論をよくよく考えてみたまえ。彼は四〇ページでこう言っている。『イスクラ』の暴露戦術は一面的である。「いくらわれわれが政府にたいする不信と憎悪をひろめても、われわれが政府を打倒するために十分なほど活発な社会的精力を発展させることができないうちは、この目的は達せられないだろう」と。ついでに言えば、これは、自分の積極性を低めることに汲々としながら、大衆の積極性を高める世話をやくという、例のおなじみのやり口である。だが、いまはそれを問題にしているのではない。だから、ここではマルトィノフは、革命的精力（「打倒するための」）について論じているのである。では、そこから彼はいったいどういう結論に達するか？　いろいろな社会層は日ごろは不可避的にばらばらに行動するほかないから、「この点を考えれば、われわれ社会民主主義者が、いろいろな反政府諸層の積極的活動を同時に指導したり、彼らに明確な行動綱領を口授したり、日々にどういう手段で自分たちの利益のためにたたかうべきかを彼らに指示したりすることができないのは、明らかである。……自由主義的諸層は、自分たちの最も身近な利益のための積極的闘争については、たしかに自分で心がけるだろうし、この闘争が彼らをわが国の政治体制にまともにぶつからせるであろう。」（四一）こうして、革命的精力や専制の打倒のための積極的闘争のことを語りはじめたとたん、たちまちマルトィノフは、労働組合的精力へ、最も身近な利益のための積極的闘争へ、それてしまったのである！　学生、自由主義者などの「最も身近な利益」のための闘争を、われわれが指導するわけにいかないのは、自明のことである。だが、いとも尊敬すべき「経済主義者」よ、ここでの問題はそんなことではなかったではないか！　ここでの問題は、いろいろな社会層が専制の打倒に参加することは可能であり、また必要だということだった。そして、われわれは、この「いろいろな反政府諸層の積極的活動」を指導できるばかりか、もし、「前衛」でありたければ、ぜひともそれを指導しなければならないのである。

わが国の学生、自由主義者などが「わが国の政治体制にまともにぶつかる」ことについては、彼ら自身が心がけるだけではないだろう。それについては、だれよりもさきに、まただれよりも多く、警察と専制政府の役人たち自身が心がけてくれるだろう。しかし、「われわれ」は、もし先進的民主主義者でありたければ、もともと大学内やゼムストヴォ内の状態等々に不満をもっているにすぎない人々を、政治制度全体がだめなのだという考えに突きあたらせるように、心がけなければならない。われわれは、このような全面的な政治闘争をわが党の指導のもとに組織する任務を引きうけ、ありとあらゆる反政府諸層が、その力におうじた援助をこの闘争とこの党とにあたえることができるように、また実際にあたえはじめるようにならせなければならない。われわれは、社会民主主義的実践家を訓練して、このような全面的闘争のあらゆる現われを指導することができ、必要な瞬間には、騒擾をおこしている学生にも、不平満々たるゼムストヴォ議員にも、激昂した異宗派にも、はずかしめられた農村学校の教師、その他にも、「明確な行動綱領を口授する」ことができるような政治的指導者へと仕上げなければならない。だから、「彼らにたいしては、われわれは、現制度の暴露者という消極的な役割をつとめうるだけである。……われわれにできることは、彼らがいろいろな政府委員会にかけている期待を吹きちらすことだけである」（傍点はわれわれのもの）というマルトィノフの主張は、完全にまちがっている。マルトィノフがこんなことを言うのは、とりもなおさず、革命的「前衛」の真の役割の問題をまるっきりなにも理解していないことを示すものである。そして、もし読者がこのことを考慮するなら、次のマルトィノフの結びのことばの真の意味も理解できるようになろう。「『イスクラ』は、わが国の諸制度、主として政治的諸制度を、それらが種々さまざまな住民層の利益と衝突するかぎりにおいて暴露する革命的反政府派の機関紙である。他方、われわれは、プロレタリア闘争と緊密な有機的結びつきをたもって、労働者の事業のために活動しており、将来も活動するであろう。われわれは自分のはたらきかけの範囲をせばめ、そうすることによってはたらきかけそのものを複雑化する。」（六三）この結論の真の意味はこうである。『イスクラ』は、労働者階級の組合主義的政治（わが国の実践家たちは、誤解や、訓練の不足や、信念から、こういう活動にとどまっている場合が非常に多いが）を社会民主主義的政治に引き上げようと望んでいる。他方、『ラボーチェエ・デーロ』は、社会民主主義的政治を組合主義的政治に低めようと望んでいる、と。ところが、それなのに、『ラボーチェエ・デーロ』は、これが「共同の

事業において完全に両立する立場である」（六三）と、だれかれなしに断言して聞かせる。ああ、sancta simplicitas！〔なんという神聖な単純さであろう！〕

そのさきに移ろう。われわれは、自分の宣伝や扇動を住民のすべての階級にむけておこなうだけの人手をもっているだろうか？　もちろん、もっている。わが「経済主義者たち」は、往々このことを否定したがるが、彼らは、われわれの運動が（およそ）一八九四年から一九〇一年にかけてなしとげた巨大な前進を見おとしているのである。真の「追随主義者」である彼らは、とっくの昔に過ぎさった運動の端緒期の考え方を、いまなお往々にしてたもっている。そのころには、じじつ、われわれには驚くほど人手が足りなかった。そのころには、労働者のあいだの活動にまったく専念して、それからすこしでもそれるのをきびしく非難する決意を固めていたのは、当然でもあり、正当でもあった。そのころには、全任務は、労働者階級のなかに地盤を固めることであった。いまでは、膨大な勢力が運動に引きいれられている。教養ある階級の若い世代の最もすぐれた人々が、みなわれわれのもとに投じつつある。地方には、いたるところに、運動にすでに参加したか、あるいは参加を希望しながらも、社会民主党に心をひかれながらも、よぎなくなにもせずに日をおくっている人々がいる（ところが、一八九四年には、ロシアの社会民主主義者は、指を折って数えられるくらいだった）。われわれの運動の基本的な政治上、組織上の欠陥の一つは、われわれにこういう勢力の全部を働かせ、全員に適当な仕事をあたえる能力がないことである（この点については次章でもっとくわしく論じよう）。これらの勢力の大多数は、「労働者のところへゆく」可能性をまったくもたないのだから、われわれの基本的な仕事から人手を奪いさるおそれなどは、全然ありようがない。ところが、労働者に真の、全面的な、生きた政治的知識を供給するためには、いたるところに、あらゆる社会層のなかに、わが国の国家機構の内面的ばねを知る便宜のあるあらゆる部署に、「仲間」が、社会民主主義者がいることが必要である。そして、このような人々は、宣伝と扇動の部面だけでなく、それ以上にまた組織の部面でも必要なのである。

住民のすべての階級のなかで活動するための基盤はあるだろうか？　この基盤が見えない人も、やはりその意識性が大衆の自然発生的高揚に立ちおくれている人である。労働運動は、ある人々の心には不満を、別の人々の心には反政府運動への支持の期待を、さらに別の人々の心には、専制はとうてい耐えられないもので、その崩壊は避けられないという意識を呼びおこしたし、またひきつづき呼びおこ

している。もしわれわれが、ありとあらゆる不満の現われを利用し、たとえ萌芽的なものでも抗議のあらゆる種子を寄せ集めてそだてあげることが、自分の任務であることを自覚しないなら、われわれは口さきだけの「政治家」、社会民主主義者にすぎないだろう（じじつ、そういう場合をきわめて頻繁に見かけるが）。このほか、いくらかでも巧みな社会民主主義者が伝道するなら、勤労農民、家内工業者、小手工業者などの幾千万にのぼる全大衆が、つねにむさぼるように傾聴するであろうことは、いまさら言わないことにしよう。だが、無権利や専横に不満をいだいており、したがってまた最も焦眉の一般民主主義的な必要の表明者である社会民主主義者の伝道を容易に受けいれることのできる人々やグループやサークルが存在しないような住民階級を、ただひとつでもあげることができるだろうか？　そして、住民のすべての階級や層のなかで社会民主主義者がおこなうこの政治的扇動がどんなものか、具体的に把握したいと思う人々には、われわれは、広い意味での政治的暴露こそそのような扇動の主要な手段（だが、もちろん、唯一の手段ではない）であることを指摘しよう。

私は、論文『なにから始めるべきか？』（『イスクラ』第四号、一九〇一年五月）――この論文については、のちにくわしく語るおりがあるだろう――のなかで次のように書いた。

「われわれは、いくらかでも自覚したあらゆる人民層のなかに、政治的暴露の熱情を呼びさまさなければならない。政治的暴露の声が現在このように弱々しく、まれであり、おずおずしているからといって、心をなやませるにはおよばない。そうなっている原因は、だれもかれもが警察の専横にあまんじているからではけっしてない。それは、暴露をおこなう能力と覚悟をもっている人々に、ものを言うことのできる演壇がなく、弁士のことばに熱情をもって耳を傾け激励をおくる聴衆がいないからであり、また彼らが、『全能の』ロシア政府にたいする苦情を訴えかける骨おりに値する勢力を、人民のなかのどこにも見ていないからである。……いまではわれわれは、ツァーリ政府の全人民的暴露をおこなうための演壇をつくりだすことができるし、またつくりだす義務がある。――社会民主主義的新聞こそ、そのような演壇でなければならない。[六]」

政治的暴露のためのこのような理想的な聴衆は、ほかならぬ労働者階級である。労働者階級は、全面的な、生きた政治的知識を、なによりもさきに、またなによりも第一に必要としており、――この知識を積極的な闘争――たとえその闘争が「目に見える成果」をなにひとつ約束しなくとも

も——に転化する能力を最も多くもっている。また全人民的暴露のための演壇になれるのは、全国的な新聞だけである。「現代のヨーロッパでは、政治的機関紙なしには、政治運動の名に値する運動は考えられない。」そして、この点では、ロシアもまた疑いもなく現代ヨーロッパにふくまれている。出版物は、わが国ではすでにずっとまえから一勢力になっている。——もしそうでなかったなら、政府は、何百万ルーブリもつかって出版物を買収したり、あらゆるカトコーフ、メシチェルスキーふうの人間に補助金をやったりはしなかったであろう。また、非合法出版物が検閲の封鎖を突きやぶって、合法的な機関紙や保守的な機関紙がこの非合法出版物のことを公然と語らないわけにはいかないようになったのは、専制ロシアでも新しいことではない。七〇年代にもそういうふうだったし、五〇年代にさえそうであった。しかし、非合法出版物を読み、『イスクラ』（第七号）に手紙を寄せた一労働者のことば(六二)を借りて言えば、「いかに生き、そして死ぬべきか」をそれから学ぼうとする人民の層は、いまでは幾層倍広く、また深くなっていることか。経済的暴露が工場主にたいする宣戦布告であるのとちょうど同じく、政治的暴露は政府にたいする宣戦布告である。そして、この暴露カンパニアが広く、強力になればなるほど、また開戦するために宣戦を布告する社会階級が数多く、また断固としていればいるほど、この宣戦布告はますます大きな精神的意義をもつようになる。だから、政治的暴露は、すでにそれ自体で、われわれに敵対的な制度を解体させる最も強力な手段、敵からその偶然の、もしくは一時的な同盟者を引き離す手段、専制権力の常時の参加者たちのあいだに敵意と不信をひろめる手段の一つなのである。

現代では、真に全人民的な暴露を組織する党だけが、革命勢力の前衛となることができよう。ところで、この「全人民的」ということばは非常に大きな内容をもっている。非労働者階級出身の暴露者たちの大多数は（そして、前衛となるためには、まさに他の諸階級を引きいれなければならない）、まじめな政治家であり、冷静な実務家である。彼らは、「全能」のロシア政府はおろか、最下級の役人についてさえ「苦情を言う」ことがどんなに危険なことであるかを、よく知っている。そして、彼らがその苦情をわれわれに訴えてくるのは、こういう苦情が実際にききめがあること、われわれが政治勢力であることを、彼らが見てとるときにかぎられるであろう。われわれが第三者の目にそういう勢力として映るためには、われわれの意識性と創意性と精力を高めるために、大いに、またねばりづよく努力する必要がある。そのためには、後衛の理論と実践に「前

衛」というレッテルを貼りつけるだけでは、不十分である。

しかし、もしわれわれが政府の真に全人民的な暴露を組織する仕事を引きうけなければならないとすれば、その場合にはわが運動の階級性はどこに現われるのか？――「プロレタリア闘争との緊密な有機的結びつき」の法外に熱心な礼賛者は、こう言ってわれわれに質問するだろうし、また現に質問している。――これらの全人民的暴露を組織する者がわれわれ社会民主主義者である点に、――扇動によって提起されるいっさいの問題が、故意と故意でないとを問わず、マルクス主義のいささかの歪曲をも大目に見ない、一貫した社会民主主義的精神に立って解明される点に、――この全面的な政治的扇動をおこなう者が、全人民の名による政府にたいする攻撃をも、プロレタリアートの政治的独自性を守りながらおこなわれるプロレタリアートの革命的教育をも、労働者階級の経済闘争の指導をも、つぎつぎにプロレタリアートの新しい層を立ちあがらせてわれわれの陣営に引きいれるような、労働者階級とその搾取者との自然発生的な衝突の利用をも、不可分の一体に結びつける党である点に、わが運動の階級性が現われるのである！

ところが、プロレタリアートが最も緊要に必要としている事柄（政治的扇動と政治的暴露とによる全面的な政治的教育）と、一般民主主義的運動が必要としている事柄とのこの結びつき――いやそれ以上だ、この一致を理解しないことこそ、「経済主義」の最大の特徴の一つなのである。この無理解は、「マルトィノフ式」の空文句に現われているだけでなく、趣旨からすればこの空文句と同じことになるが、階級的見地と称するものを言いたてることにも現われている。たとえば、『イスクラ』第一二号所載の「経済主義的な」手紙*の筆者たちは、この点を次のように言いあらわしている。「『イスクラ』のこの同じ基本的欠陥（イデオロギーの過大評価）が種々な社会階級や潮流にたいする社会民主党の態度の問題で同紙が首尾一貫を欠く原因である。『イスクラ』は、絶対主義との闘争へただちに移るという任務を、理論的運算によって……」（「党とともに成長する党任務の成長……」によってではなく）「解決したものの、どうやら、この任務が現在の事情のもとでは労働者にとってきわめて困難なことを感じているらしく」……（この任務は労働者には、幼い子どもたちの世話をやいてくれる「経済主義的」インテリゲンツィアたちの目に映るほどに困難には思えないということを、感じているだけでなく、よく知っているので、――というのは、労働者は、忘れがたいマルトィノフのことばを借りて言えば、「目に見える成果」をなにひとつ約束しない要求のためにでも、たたかう覚悟があるから）、……「そうかといって、この闘争の

ために必要な力を労働者がいっそう多くたくわえるまで待つ忍耐心をもたないので、自由主義者やインテリゲンツィアの隊列のなかに同盟者を求めはじめている。……」

＊　われわれは、「経済主義者」の特徴をきわめてよく示しているこの手紙にたいして、紙面がないため『イスクラ』の紙上では十分くわしく答えることができなかった。この手紙が現われたことは、われわれにはたいへん喜ばしかった。というのは、『イスクラ』は階級的見地を堅持していないという陰口が、すでにずっとまえから、また種々さまざまな方面からわれわれの耳にはいっていて、われわれは、適当な機会があるか、この流布されている非難がはっきりしたかたちで言いあらわされるかしたなら、それに答えるつもりで待ちかまえていたのだからである。そして、攻撃には防御ではなくて反撃をもってこたえるのが、われわれのならわしである。

いかにもそのとおり、そのとおり。じっさい、われわれは、あらゆる「調停派」がすでにずっとまえからわれわれに約束してきたように、わが「経済主義者たち」が、自分の立ちおくれを労働者のせいにしたり、労働者の力が不足しているかのように言って自分自身の精力の不足を正当化したりするのをやめる喜ばしい日を「待つ」「忍耐心」を、すでにまったくなくしてしまった。わが「経済主義者たち」におたずねするが、「この闘争に必要な力を労働者がたくわえる」ことは、なにによっておこなわれるのだろうか？　労働者の政治的教育によって、わが国のいとうべき専制のあらゆる側面を彼らの前にあばきだすことによって、おこなわれるのは、明らかではなかろうか？　そして、まさにこの仕事のために、われわれは、「自由主義者やインテリゲンツィアの隊列のなかに」、ゼムストヴォ議員や教師や統計家や学生その他にたいする政治的征伐の暴露をわれわれといっしょにやる心がまえのある「同盟者」をもつ必要があることは、明らかではなかろうか？　この驚くべきほど「こみいったからくり」を理解することは、実際にそんなにむずかしいことだろうか？　ペ・ペ・アクセリロードがすでに一八九七年以来、諸君に繰りかえしてこう語ってきたではないか、「ロシアの社会民主主義者が非プロレタリア的諸階級のあいだに味方や直接間接の同盟者を獲得する任務は、まず第一に、また主として、プロレタリアート自身のあいだでおこなわれる宣伝活動の性格によって解決される」[82]と。だが、それなのにマルトィノフ一派その他の「経済主義者たち」は、いまでもあいかわらず、労働者はまずはじめに「雇い主と政府とにたいする経済闘争」によって（組合主義的政治のために必要な）力をたくわえ、そのあとではじめて――たぶん、組合主義的な「積極性をやしなう」ことから社会民主主義的積極性へと「移ってゆか」なければならないというふうに、この問題を考えてい

るのだ！

「経済主義者たち」はつづけて言う。「……『イスクラ』は、同盟者を求めるにあたって、しばしば階級的見地をはずれ、階級矛盾をぼやかし、政府にたいする不満の共通性を前面に押しだしているが、そのじつ、そういう不満の原因や程度は、『同盟者』のあいだでもきわめて種々さまざまなのだ。たとえば、ゼムストヴォにたいする『イスクラ』の態度がそうである」と。……彼らの言うところでは、『イスクラ』は、「政府の施し物に不満足な貴族にたいして労働者階級の援助を約束しているが、しかもそのさいこれらの住民層のあいだの階級的反目には一言半句ふれなかった」のである。たぶんこの手紙の筆者たちは、論文『専制とゼムストヴォ』[42]（『イスクラ』第二号および第四号）のことを言っているのであろうが、もし読者がそれについて見られるなら、この論文が*「身分制的・官僚的ゼムストヴォのなまぬるい扇動」や「有産階級の自主的活動」にたいして「さえ」政府のとっている態度を論じたものであることが、おわかりになろう。この論文には、労働者は政府のゼムストヴォ征伐を無関心に傍観していてはならない、と述べ、またゼムストヴォ議員に、革命的社会民主主義派がすっくと立ちあがって、政府に立ちむかうときには、諸君もまたそのなまぬるい演説を捨てて、しっかりした、鋭いことばで語るように、と勧告している。手紙の筆者たちは、これのどういうところに不同意なのであろうか？——それはわからない。彼らは、「有産階級」とか「身分制的・官僚的ゼムストヴォ」とかいうことばは、労働者には「理解できないだろう」とでも考えているのだろうか？　ゼムストヴォ議員を鞭撻して、なまぬるい語調を捨てさせ、鋭い語調に移らせることは、「イデオロギーの過大評価」だとでも考えているのだろうか？　労働者は、ゼムストヴォにたいする絶対主義の態度をも知ることなしに、絶対主義との闘争のために必要な「力をたくわえる」ことができると、彼らは想像しているのだろうか？　これらの点もみな、やはりわからずじまいである。はっきりしているのはただひとつ、この筆者たちが社会民主党の政治的任務についてひどくぼんやりした考えをもっていることだけである。このことは、「学生運動にたいする『イスクラ』の態度も、これと同じである」（すなわち、同じように「階級対立をぼやかしている」）という彼らの文句にくると、いっそうはっきりする。われわれは、暴力や暴虐や無法なふるまいの真の根源が学生にはなくてロシア政府にあることを、公衆デモンストレーション[43]によって表明するよう労働者に呼びかけ（『イスクラ』第二号）たりしないで、おそらく、『ラボーチャヤ・ムィスリ』の精神で書いた考察でものせればよか

ったのだろう！ しかも、二月と三月の事件のあとをうけて、学生運動の新しい高揚——それは、この分野でも、専制にたいする抗議の「自然発生性」が社会民主党によるこの運動の意識的指導を追いこしつつあることを、あらわに示すものだ——をまえにした一九〇一年の秋に、社会民主主義者がこういう思想を表明しているのである。警官とカザックに打ちのめされている学生たちを支持しようとする労働者の自然発生的な志向が、社会民主主義組織の意識的活動を追いこしつつあるのだ！

＊ そして、第一論文と第二論文の中間に、『イスクラ』第三号、わが国の農村における階級対立を特別に論じた論文がのった。(六三)

手紙の筆者たちはさらにつづける。「その一方、別の諸論文では、『イスクラ』は、あらゆる妥協を激しく非難し、たとえばゲード派の偏狭なふるまいの擁護にのりだしている」と。今日の社会民主主義者たちのあいだの意見の相違について、通常いかにも自信ありげに、またいかにもかるがるしく、これらの意見の相違は本質的なものでなく、分裂を正当化するものでない、と言明する人々にたいして、われわれは、このことばをよく熟考してみるように忠告する。専制が種々さまざまな階級にたいして敵対的であることを解明する仕事で、また種々さまざまな層が専制に反対していることを労働者に知らせる仕事で、われわれはまだ驚くほどわずかなことしかしていない、と言う者と、こういう仕事を「妥協」——きっと、「雇い主と政府とにたいする経済闘争」の理論との妥協なのだろう——と見なす者とが、一つの組織内でうまく活動してゆけるであろうか？

われわれは、農民解放の四〇周年にさいして、農村に階級闘争をもちこむ必要を説き（第三号）、またヴィッテの秘密回想録に関連して、自治と専制とがあいいれないものであることを語った（第四号）。われわれは、新法律に関連して、地主とそれに奉仕する政府との農奴主義を攻撃し（第八号）(六四)、また非合法にひらかれたゼムストヴォ大会を歓迎し、ゼムストヴォ議員たちを、卑屈な請願をやめて闘争に移るように激励した（第八号）(六五)。——われわれは、政治闘争の必要を理解しはじめてそれに移りかけていた学生を激励し（第三号）、それと同時に、学生に街頭デモンストレーションに参加しないように勧めていた「純学生」運動の味方たちのさらけだした「奇怪な無理解」をたたいた（第三号、モスクワ学生執行委員会の二月二五日の檄に関連して）(六六)。——われわれは、新聞『ロシア』(六七)の自由主義的狡猾漢どもの「ばかげた夢想」や「うそっぱちの偽善」を暴露し（第五号）、それと同時に、「平和な文筆家や、老年の教授や学者、有名な自由主義的ゼムストヴォ議員に懲罰をくわえた」政府の拷問部屋の狂暴ぶりを指摘した（第

五号、『文筆界にたいする警察の襲撃』(九九)。われわれは、「労働者の福祉にたいする国家の配慮」という綱領の真の意味を暴露し、また「下からの改革の要求を待つより、上からの改革で先手をうったほうがよい」という「貴重な告白」を歓迎した(第六号)(九九)。われわれは、抗議をおこなった統計家たちを激励し(第七号)、ストライキ破りをやった統計家たちを非難した(第九号)(一〇〇)。こういう戦術を目して、プロレタリアートの階級意識をぼやかし、自由主義と妥協するものだと考える人は、そのことによって、彼が『クレード』の綱領の真の意義をまったく理解しておらず、自分ではどんなにこの綱領を否認していようと、de facto〔事実上〕まさにこの綱領を実行していることを、暴露しているのである! なぜなら、彼は、そうすることによって、社会民主党を「届い主と政府とにたいする経済闘争」のほうへ引っぱるからであり、また、あらゆる「自由主義的」問題に積極的に介入し、この問題にたいする彼自身の社会民主主義者としての態度を決定する任務を捨てて、自由主義に降伏するからである。

(f)　もういちど「中傷者」、もういちど「瞞着者」

読者が記憶しておられるように、これらのあいそのよいことばは『ラボーチェエ・デーロ』の口から出たものであって、われわれが、同誌は「労働運動をブルジョア民主主義派の道具に変える地盤を間接に準備している」と言って非難したのにたいして、同誌はこういうやり方で答えているのである。『ラボーチェエ・デーロ』は、無邪気なために、この非難は論戦上の激語にほかならないと、きめこんだのだ。同誌は言う。この悪辣な教条主義者たちは、われわれに不愉快な文句のありったけをあびせかける腹をきめたのだ、ところで、ブルジョア民主主義派の道具になることくらい不愉快なことがいったいあるだろうか? と。そこで、これにたいする「反駁」が、「あけすけの中傷」(『二つの大会』、三〇ページ)だとか、「瞞着」(三一)だとか、「仮面かぶり」(三三)だとかと、ゴシック活字で印刷されることになる。『ラボーチェエ・デーロ』は、ユピテルと同じように(もっとも、同誌はあまりユピテルに似ていないけれども)、まさに自分がまちがっているので腹をたててしまい、そのせっかちな悪口沙汰によって、自分の論敵の思想の道すじを考えぬく能力をもたないことを証明しているのである。しかし、およそ大衆運動の自然発生性の前に拝跪すること、およそ社会民主主義的政治を組合主義的政治に低めることが、なぜ、とりもなおさず、労働運動をブルジョア民主主義派の道具に変える地盤を準備することに

なるかを理解するために、すこしばかり考えてみる必要があろうではないか。自然発生的な労働運動は、それ自体では組合主義しか生みだせない（また不可避的にそれを生みだす）が、労働者階級の組合主義的政治とは、まさに労働者階級のブルジョア的政治なのである。労働者階級が政治闘争に参加しても、それどころか政治革命に参加してさえ、それだけではまだ労働者階級の政治はけっして社会民主主義的政治にはならない。『ラボーチェエ・デーロ』は、このことを否認しようと思いたったのではないだろうか？ ついに、国際社会民主主義とロシア社会民主党の焦眉の諸問題についての同誌自身の理解を、率直に、逃げ口上をかまえずに万人のまえで述べようと思いたったのではないだろうか？——おお、どうしてどうして。同誌は、けっしてそんなことを思いたちはしないだろう。なぜなら、同誌は、「ないないずくし」の方法とでもよべるような方法を、かたく守っているからである。私は私でない、馬は私のものでない、私は馭者ではない、というぐあいである。われわれは「経済主義者」ではない、『ラボーチャヤ・ムィスリ』は「経済主義」ではない、ロシアにはおよそ「経済主義」などというものはない、と。これは、すばらしく巧妙な、「政略的な」方法であるが、ただこれにはちょっとぐあいのわるいことがある。それは、こういう方法を実行している機関誌を、世間では「よろずご用うけたまわり所」というあだ名でよびならわしているということである。

『ラボーチェエ・デーロ』には、総じてロシアにおけるブルジョア民主主義派などは、「幻」（『二つの大会』、三二ページ）のように思えるのである。* なんとしあわせな人々であろう！ ちょうど駝鳥のように、彼らは自分の頭を翼のしたに隠して、それでまわりのものがみな消えてなくなったと想像しているのである。マルクス主義は崩壊した、それどころか消滅したと言って、毎月毎月万人にむかって自分の勝利を告げしらせる一連[100]の自由主義的評論家も、ブレンターノ式の階級闘争の理解と組合主義的な政治の理解とを労働者にもたらす自由主義者たちに激励をおくっている一連の自由主義新聞（『サンクト・ペテルブルグスキエ・ヴェードモスチ』[101]、『ルースキエ・ヴェードモスチ』[102]、その他多くのもの）も、——『クレード』によってその真の傾向をあのようにはっきりとさらけだした、そしていまではその手になる文筆商品だけがロシア全国を自由に大手をふってのし歩いている、あのマルクス主義批判家の明星の群れも、——二月と三月の諸事件以来とりわけいちじるしい非社会民主主義的な革命的諸潮流の復活も、——これらはみな、きっと幻なのだ！ これらはみな、ブルジョア民主主義派にはまったくなんの関係もない事柄なのだ！

＊　この同じ箇所に「労働運動を宿命的に革命的進路に押しやるロシアの具体的諸条件」が引合いにだされている。労働運動の革命的進路というだけでは、非社会民主主義的な進路もありうることを、この連中は理解しようとしないのだ！　絶対主義の時代には、西ヨーロッパの全ブルジョアジーは、労働者を革命的進路に「押しやった」、しかも意識的に押しやったではないか。だが、われわれ社会民主主義者は、そんなもので満足することはできない。もしわれわれが、どんな仕方にせよ社会民主主義的政治を自然発生的な組合主義的政治に低めるなら、まさにそうすることで、われわれはブルジョア民主主義派のお先棒をかつぐことになるのである。

『ラボーチェエ・デーロ』も、また『イスクラ』第一二号所載の「経済主義的な」手紙の筆者たちも、「この春の諸事件が、社会民主党の権威と威信を高めることにならないで、非社会民主主義的な革命的諸潮流をあのように復活させることになったのはなぜか、その理由を考えめぐらしてみる」べきであろう。それは、われわれに自分の任務をみたす能力がなかったからであり、労働者大衆の積極性がわれわれの積極性をこえていたからであり、またすべての反政府層の気分をよく知っていて、運動の先頭に立ち、自然発生的なデモンストレーションを政治的デモンストレーションに転化させ、その政治性を拡大し、等々することのできる、十分に訓練された革命的指導者や組織者を、われわれがもちあわせていなかったからである。こういう状態では、より敏活でより精力的な非社会民主主義的革命家が、われわれの立ちおくれに乗じるのは、避けられないであろうし、また労働者は、どんなに自己犠牲的に、また精力的に警官や軍隊とたたかい、どんなに革命的に行動しても、これらの革命家の補助勢力となるにすぎず、社会民主主義的前衛ではなくてブルジョア民主主義派の後衛となるだろう。わが「経済主義者たち」がその弱点だけを見ならおうとしているドイツ社会民主党をとって考えてみたまえ。なぜドイツでは、どんな政治的事件も、かならず社会民主党の権威と威信をいよいよ高めるように作用するのであろうか？　それは、社会民主党が、この事件を最も革命的に評価する点で、また専制にたいするあらゆる抗議を擁護する点で、いつでもすべての人に先んじているからである。党は、経済闘争が労働者を自分たちの無権利の問題に突きあたらせるだろうとか、具体的な諸条件が労働運動を宿命的に革命的進路に押しやるであろうとかいう議論で、自分を眠りこませてはいない。党は、ヴィルヘルムがブルジョア的進歩党出身の市長を承認しなかった問題にも（わが国の「経済主義者たち」は、こんな問題に介入することは実質上自由主義との妥協であるということを、ドイツ人に教えこむひまがなかった！）、「わいせつ」文書図画取締法の公

布の問題にも、教授の選任を政府が左右する問題等々にも、社会＝政治生活のすべての分野とすべての問題に介入している。党は、どこでもだれよりも先んじており、すべての階級のなかに政治的不満をかきたて、眠っている人々をゆりおこし、遅れた人々をせきたて、プロレタリアートの政治的意識と政治的積極性を発展させるための全面的な材料を供給している。そしてその結果は、先進的な政治的闘士には社会主義の意識的な敵さえも敬意をいだき、ブルジョア社会ばかりか、官界や宮廷方面からさえ、しばしばなにかの奇跡によって重要文書が『フォールヴェルツ』の編集室に舞いこんでくるという状態である。

ここにこそ、『ラボーチェエ・デーロ』が両手をさしあげて「仮面かぶり」と叫ぶほかないほど同誌の理解力をこえているあの外見上の「矛盾」を解く鍵が、ひそんでいるのだ！　じっさい、考えてもみたまえ。われわれ『ラボーチェエ・デーロ』は大衆的労働運動に重点をおいている（そしてこれをゴシック活字で印刷する！）。われわれは、だれにでもかれにでも、自然発生的要素の意義を軽視しないように警告している。われわれは、経済闘争そのもの、そのもの、そのものに政治性をあたえたいと望んでいる。われわれは、プロレタリア闘争との緊密な有機的結びつきをたもってゆきたいと望んでいる！　ところが、そのわれわれにむかって、諸君は労働運動をブルジョア民主主義派の道具に変える地盤を準備している、などと言うのだ。しかも、どういう連中がこんなことを言うのか？　あらゆる「自由主義的」問題に介入し（「プロレタリア闘争との有機的結びつき」にたいするなんという無理解だろう！）、学生や、それどころか（おお、なんという恐ろしいことだ！）ゼムストヴォ議員にさえあのように大きな注意をはらって、自由主義と「妥協」を結ぶ連中なのだ！　一般に自分の勢力のより大きい割合（「経済主義者」にくらべて）を、非プロレタリア的な住民諸階級のなかでの活動にふりむけようとしている連中なのだ！　これでも「仮面かぶり」でないというのか？？

かわいそうな『ラボーチェエ・デーロ』よ！　同誌は、いつかはこのこみいったからくりを解く鍵に思いあたるであろうか？

四　経済主義者の手工業性と革命家の組織

以上でわれわれが検討した、経済闘争は政治的扇動のために最も広範に適用しうる手段であるとか、今日のわれわれの任務は経済闘争そのものに政治性をあたえることであるなどという、『ラボーチェエ・デーロ』の主張は、われわれの政治的任務の狭い理解をあらわしているだけではなく、またわれわれの組織上の任務の狭い理解をもあらわしている。「雇い主と政府とにたいする経済闘争」をやるためには、政治的反対や抗議や憤激のありとあらゆる現われを結びつけて一つの総攻撃にする全国的な中央集権的な組織などは、職業革命家からなりたち、全人民の真の政治的指導者たちに率いられる組織などは、全然必要でないし、――だからまた、このような闘争にもとづいてそういう組織がつくりあげられるはずもない。それもまた当然である。およそどのような団体でも、その組織の性格は、この団体の活動の内容によっておのずから、また不可避的にきまるものである。だから、『ラボーチェエ・デーロ』は、以上に検討してきた同誌の主張によって、政治活動の狭さだけでなく、組織活動の狭さをも是認し正当化していることになる。この場合にも、『ラボーチェエ・デーロ』は、いつものように、その意識性が自然発生性に降伏している機関誌である。ところが、自然発生的に形づくられる組織形態の前に拝跪していること、われわれの組織活動がどれほど狭くて原始的であるか、この重要な分野でわれわれがいまでもまだどのような「手工業者」であるかの自覚を欠いていること、繰りかえしていうが、この自覚を欠いていることが、われわれの運動の真の病気なのである。いうまでもなく、これは、衰退にともなう病気ではなくて、成長にともなう病気である。しかし、自然発生的な憤激の波が、運動の指導者であり組織者であるわれわれをいわば押しながしている今日こそ、およそ立ちおくれを弁護すること、およそこの問題における狭さを正当化することにたいして、最も非妥協的にたたかうことがとくに必要である。実践活動に参加しているか、あるいはいまはじめてそれにとりかかろうとしている一人ひとりの者の心に、われわれのあいだに支配している手工業性にたいする不満と、それから脱却しようとする不屈の決意とを呼びさますことが、とくに必要である。

(a)　手工業性とはなにか？

この問いにたいしては、一八九四―一九〇一年代の典型

的な社会民主主義的サークルのささやかな描写で答えてみることにしよう。この時期の学生青年が全般的にマルクス主義に熱中したことを、われわれはすでに指摘しておいた。もちろん、この熱中は、理論としてのマルクス主義にたいする熱中であったただけでなく、というより、であった以上に、むしろ「なにをなすべきか？」という問いへの答えとしての、敵にむかって出征せよという呼びかけとしての、マルクス主義にたいする熱中であった。そして、新しい戦士たちは、驚くほど原始的な装備と訓練とをもって出征した。ほとんどなんの装備もなく、まるっきりなんの訓練もうけていない場合さえ多かった。野良からきた百姓と同様に、ただ棍棒を一本つかんで戦争に出かけたのだ。学生のサークルは、運動の古い活動家たちとはなんの連絡もなく、ほかの地方のサークルや、あるいは同じ都市のほかの地区（またはほかの学校の）サークルともなんの連絡もなく、革命的活動の個々の部門を組織することもまったくせずに、いくらかでも長期を見こした系統的な活動計画などはなにひとつもたずに、労働者と連絡をつけて、仕事にとりかかる。サークルは宣伝と扇動をしだいにますます広く展開し、それが活動を始めたというだけでかなり広い労働者層や、教養ある社会の一部までの共感をよぶようになる。後者は、サークルに資金を出し、またつぎつぎと新しい青年の群れを「委員会」の指揮にゆだねる。委員会（または闘争同盟）の魅力は高まり、その活動の規模は大きくなり、委員会はまったく自然発生的にこの活動をひろげてゆく。一年か数ヵ月まえまでは学生サークルのなかで活動して、「どこへゆくべきか？」という問題の解決にあたっていた当の人々、労働者と連絡をつけたり、それをつづけたり、リーフレットをつくって発行していた当の人々が、ほかの革命家グループと連絡をつけ、文献を手にいれ、地方新聞の発行にとりかかり、デモンストレーションの組織を問題にしはじめ、ついには公然たる戦闘行動（その場合、この公然たる戦闘行動は、そのときの事情しだいで、最初の扇動リーフレットだったり、新聞の創刊号だったり、はじめてのデモンストレーションだったりする）に移ってゆく。そして、普通はこのような行動が始まるやいなや、たちまちつづいて根こそぎの一斉検挙がやってくる。これがたちまちに、また根こそぎにやってくるというのは、まさにこれらの戦闘行動が、長期にわたる頑強な闘争のために、あらかじめ周到に考えぬいて、順をおって準備してきた系統的な計画の結果でなくて、伝統的になされてきたサークル活動が自然発生的に成長したものにすぎなかったからである。それはまた、まだ学生の時分から「名の売れた」地方の運動の主要な活動家たちはみな、当然にほとんどいつで

も警察に知られており、警察はただ明白な corpus delicti〔罪体〕をにぎるために、わざとサークルがかなりひろがり発展するままにほうっておき、警察にわかっている人間のうちの幾人かをいつでもわざと「養殖用に」（私の知っているかぎりでは、これがわれわれの仲間でもつかい、憲兵のほうでもつかっている術語である）あとに残しておいて、警察にとって最もつごうのよい手入れの時機をうかがっていたにすぎなかったからである。このような戦争は、棍棒で武装した百姓の群れが近代軍隊に立ちむかって出征するのにたとえないわけにはいかない。しかも、驚嘆するほかないのは、戦闘員がこのようにまったく訓練を欠いていたにもかかわらず、運動がひろがり、成長し、勝利を獲得していった、その生活力である。なるほど、歴史的見地からすれば、装備の原始的なことは、はじめのころには避けられないことであったばかりでなく、戦士たちをひろく引きいれるための一条件として、正当でさえ
あった。けれども、いったん真剣な戦闘行動が始まるやいなや（そしてこれは、実質上すでに一八九六年夏のストライキをもって始まった）、われわれの戦闘組織の欠陥はいよいよ痛切に感じられはじめた。政府は、はじめめんくらって、たくさんの失策（社会主義者の悪行を書きつらねて社会に訴えたり、労働者を両首都から地方の工業中心地に追放したような）をおかしたけれども、まもなく新しい闘争条件に順応して、あらゆる改良装備をほどこした挑発者、スパイ、憲兵の部隊を要所要所に配置することを知った。手入れがきわめて頻繁に繰りかえされ、きわめて多くの人々を引っかけ、地方的なサークルをじつに洗いざらい一掃するようになったので、労働者大衆は文字どおり、指導者の全員を失い、運動は信じられないほどの突発性をおび、どのような活動の継承性も関連性も絶対に打ちたてることができないようになった。こういう状態の避けられない結果は、地方の活動家が驚くほどちりぢりばらばらになり、サークルの顔ぶれがゆきあたりばったりになり、理論、政治、組織問題の分野における訓練が不足し、視野が狭くなったことであった。あげくのはてには、二、三のところでは、われわれに堅忍さと秘密をたもつ能力が欠けているという理由で、労働者がインテリゲンツィアに不信の念をいだき、これを避けるまでになっている。労働者は言っている。インテリゲンツィアはあまりにも軽率に一斉検挙をまねく！と。

このような手工業性が、ついに思慮ある社会民主主義者のだれからも病気と感じられるようになったことは、いくらかでも運動の消息に通じている人ならばだれでも知っていることである。しかし、運動の消息に通じていない読者

が、われわれが人為的に運動の特別の段階や特別の病気を「でっちあげている」のだと考えないように、われわれはすでに一度名まえをあげた証人を引き合いにだすことにしよう。長い引用をする点はどうか大目に見ていただきたい。『ラボーチェエ・デーロ』第六号に、ベ——ヴェが次のように書いている。

「ますます広範な実践活動へしだいに移行しつつあること——この移行は、ロシアの労働運動が目下際会している全般的な過渡期に直接に由来するものであるが——が、一つの特徴であるとすれば、……これにおとらず興味のあるいま一つの特徴が、ロシアの労働者革命の全般的機構のうちに見られる。われわれが言うのは、ペテルブルグだけでなく、ロシア全土にわたって感じられている、行動に適した革命的勢力の全般的不足のことである。*労働運動が全般的に活発になるにつれ、労働者大衆が全般的に発達するにつれ、ストライキがますます頻繁になるにつれ、労働者の大衆闘争がますます公然とおこなわれ、その結果政府の迫害や逮捕や流刑や追放が強められるにつれて、質の高い革命的勢力のこのような不足はますますひどくなるばかりであって、このことが運動の深さや一般的性格に影響せずにおかないことは明らかである。ストライキの多くは、革命的組織の強力な、直接のはたらきかけなしにおこなわれている。……扇動リーフレットや非合法文献の不足が感じられている。……労働者のサークルにはあいかわらず扇動家がいない。……それとならんで、資金の不断の欠乏が現われている。一言でいえば、労働運動の成長が革命的組織の成長と発展を追いこしているのである。活動している革命家の現在数があまりにも少ないので、動揺をおこした労働者大衆全体にたいする影響力をその手に集中することも、あらゆる動揺に整然さと組織性の影なりとあたえることさえできない。……個々ばらばらのサークル、個々ばらばらの革命家は、集められず、統合されず、その各部分を計画的に発達させた単一の、強力な、規律ある組織を形づくっていない。」……そして、筆者は、破壊されたサークルのかわりに、すぐさま新しいサークルが現われていることは、「運動の生活力を証明するだけで、……十分に有能な革命的活動家が十分にいることを示すものではまだない」とことわって、次のように結論している。「ペテルブルグの革命家の実践的訓練の不足は、彼らの活動の結果にも現われている。最近のいろいろな裁判、とくに『自己解放』団と『労資闘争』団の裁判[103]が明らかに示したところでは、若い扇動家は、当の工場における労働条件や、したがってまた扇動の条件をくわしく知りもせ

ず、秘密活動の原則も知らないで、ただ社会民主主義の一般的見解を身につけた」（ほんとうに身につけたのだろうか？）「にすぎず、四ヵ月か、五ヵ月か、六ヵ月も活動できれば、関の山である。ついで検挙がやってきて、その結果、組織全体、すくなくともその一部が破壊されることがまれでない。そこで問題となるのはこうである。もしあるグループの存続する期間が月数で測られるようなら、そのグループは、はたして効果のあるみのり多い活動をすることができるだろうか？　……現在の諸組織の欠陥を、なにもかも過渡期のせいにするわけにいかないことは、明らかである。……これについては、現在の諸組織の量的な構成、また第一に質的な構成が、少なからぬ役割を演じていることは明らかであって、われわれ社会民主主義者の第一の任務は、……成員を厳選したうえで諸組織を現実に統合することでなければならない。」

＊　傍点はすべてわれわれのもの。

（b）　手工業性と経済主義

いまやわれわれは、どの読者の心にもすでに浮かんだにちがいない一つの疑問に立ちいって調べなければならない。運動全体につきまとっている成長の病気であるこの手工業性を、ロシア社会民主党内の一潮流である「経済主義」に関連させることができるであろうか？　われわれは、できるとたしかに、はじめから一貫して革命的マルクス主義の見地に立ってきた人をふくめて、われわれ全体に共通していることである。また、たしかにだれにせよ、訓練が不足しているというそれだけのことで実践家を責めることはできないだろう。しかし、「手工業性」という概念には、訓練の不足ということ以外に、まだ別のあるものがふくまれている。総じて革命的活動全体の規模が狭いこと、このような狭い活動にもとづいてすぐれた革命家の組織が生まれるはずがないのを理解しないこと、最後に、――これが肝心な点であるが――この狭さを正当化して特別の「理論」にまつりあげようと試みていること、つまり、この分野でもやはり自然発生性の前に拝跪していること、これがそうである。このような試みが現われたからには、手工業性が「経済主義」と関連があること、そして一般に「経済主義」（すなわち、マルクス主義の理論や、社会民主党の役割やその政治的任務についての狭い理解）から脱却せずには、われわれの組織活動の狭さからも脱却できないであろうことは、もはや疑いをいれない。そして、こういう試みは二とおりの方向をとって現われた。ある人々はこう言いはじめた。労働者大衆は、革命家が彼らに「押しつけている」ような

広範な、戦闘的な政治的任務をまだ自分では提起していない、彼らはいまはまだ最も身近な政治的要求のためにたたかい、「雇い主と政府とにたいする経済闘争」をおこなわなければならない*（ところで、大衆運動にとって「とりつきやすい」このような闘争に似つかわしいものは、当然のこととして、最も訓練のない青年にさえ「とりつきやすい」組織である）、と。別のある人々は、どんな「漸進主義」にも縁どおい人々であるが、彼らはこう言いはじめた。「政治革命をなしとげること」は可能だし、またなしとげなければならない、しかしそれをやるのに、堅忍不抜な、頑強な闘争によってプロレタリアートを教育する強固な革命家の組織をつくる必要は、まったくない、そのためには、「とりつきやすい」、おなじみの棍棒をわれわれ全部がつかむだけで十分である、と。つまり、比喩ぬきで言うと、――われわれがゼネラル・ストライキを組織するか、**または「刺激的なテロル」によって労働運動の「無気力な」歩みを鼓舞すれば十分だ、***と言うのである。この二つの潮流は、日和見主義者のほうも「革命主義者」のほうも、そのどちらも現在支配している手工業性に降伏してしまい、それから脱却できるということを信ぜず、われわれの第一の、最も緊急な実践的任務――政治闘争に精力と確固さと継承性とを保障できるような革命家の組織をつくるという任務――を理解しないのである。

* 『ラボーチャヤ・ムィスリ』と『ラボーチェエ・デーロ』、とくにプレハーノフへの『回答』。

** 小冊子『だれが政治革命をなしとげるか？』(102)――ロシア国内で出版された論集『プロレタリア闘争』に収録。また、キエフ委員会によっても覆刻された。

*** 『革命主義の再生』と『スヴォボーダ』。

われわれはたったいま「労働運動の成長が革命的組織の成長と発展を追いこしている」というベ――ヴェのことばを引用した。この「現地観察者の貴重な報告」（ベ――ヴェの論文にたいする『ラボーチェエ・デーロ』編集局の批評）は、われわれにとって二重に貴重である。この報告は、われわれがロシア社会民主党の今日の危機の根本原因は大衆の自然発生的高揚にたいする指導者（「イデオローグ」、革命家、社会民主主義者）の立ちおくれにあると考えたのが、正しかったことを示している。それは、自然発生的要素やじみな日常闘争の意義を軽視する危険だの、過程としての戦術だの、なんだのという、「経済主義的な」手紙（『イスクラ』第一二号所載）の筆者たちや、ベ・クリチェフスキーやマルトィノフのこうした議論が、すべて手工業性の賛美と弁護とにほかならないことを示している。「理論家」ということばを口にするときには、かならず軽蔑し

たようなしかめっつらをしてみせないと気がすまず、現実生活にかんする訓練不足と未熟さの前に自分たちが平伏していることをさして「現実感覚」とよんでいるこの連中は、実際には、われわれの最も緊急な実践的諸任務を理解していないことを暴露しているのである。彼らは、遅れた人々にむかって、歩調を合わせろ！　さきばしるな！　と叫びかけ、組織活動における精力と創意に不足し、広範で大胆な仕事を組織する「計画」に不足している人々にむかって、「過程としての戦術」を呼びかける！　われわれの基本的な罪は、われわれの政治的ならびに組織的任務を、日常的な経済闘争の最も身近な、「目に見える」、「具体的な」利益にまで低めていることにあるのだが、それなのに彼らは、経済闘争そのものに政治性をあたえることが必要だ、とわれわれにむかって繰りかえし言いつづけるのである！　いま一度言うが、これは葬列を見て、「いくら運んでも運びきれないように！」と叫んだ、あの民話の主人公の示した「現実感覚」と、文字どおり同じものである。

この賢人たちが、なんと比類のない、真に「ナルツィス的な」高慢さでプレハーノフに説教したことか、思いだしてみたまえ。「政治的任務は、真実の、実践的な意味では、すなわち政治的要求のための適切で効果のある実践的闘争という意味では、一般に（原文のまま！）労働者サークルにとってとりつきにくいものである」（『「ラボーチェエ・デーロ」編集局の回答』、二四ページ）と。サークルにもいろいろあろうというものだ、諸君！　もちろん、「手工業者」のサークルにとっては、その手工業者が自分たちの手工業性を自覚して、それから脱却しないあいだは、政治的任務はとりつきにくいものである。そして、もしこれらの手工業者が、そのうえ自分たちの手工業性にほれこんでいるようなら、彼らが「実践的」ということばをかならずゴシック文字で書き、また実践的であるためには、自分たちの任務を大衆の最も遅れた層の理解力の水準に低めることが必要だと考えているようなら、――そのときには、これらの手工業者たちはとても見込みがなく、彼らにとっては実際に政治的任務が総じてとりつきにくいのは、いうまでもない。しかし、アレクセーエフやムィシキン、ハルトゥーリンやジェリャーボフのような巨匠たちのサークルにとっては、最も真実な、最も実践的な意味での政治的任務は、とりつきやすいものである。それがとりつきやすいのは、まさに彼らの熱烈な伝道が自然発生的にめざめつつある大衆のうちに反響をよび、彼らのたぎりたつ精力が革命的階級の精力によって受けつがれ、ささえられるからであり、またそのかぎりにおいてである。プレハーノフが、この革命的階級を示すだけにとどまらず、またこの階級の自然発

生的なめざめが不可避であり、必然的であることを証明するだけにとどまらずに、「労働者サークル」にたいしてさえ、高く、大きな政治的任務を提起したのは、重々正しかった。ところが、諸君は、この任務を低めるために、――「労働者サークル」の精力と活動の規模とをせばめるために、その後に発生した大衆運動を言いたてる。これは、手工業者が自分の手工業にほれこんでいるものでなくて、なんであろうか？　諸君は、自分たちの実践的なことを自慢しているが、そのくせロシアのどんな実践家でも知っている事実を、すなわち、革命の事業においては、サークルはおろか個々人の精力によってさえどのような奇跡をおこなうことができるかを、見ないのである。それとも、諸君は、七〇年代のような巨匠たちは、われわれの運動にいるはずがないとでも考えているのか？　どうしてそうなのか？　われわれの訓練が足りないからであろうか？　だが、われわれは自分を訓練しつつあるし、今後も訓練するであろうし、訓練しとげるであろう！　なるほどわが国では、不幸なことに、「雇い主と政府とにたいする経済闘争」のよどみ水の表面にかびが生えてしまい、ロシア・プロレタリアートの（プレハーノフの表現を借りれば）「お尻」をうやうやしくながめながら、自然発生性の前にひざまずいて祈りをささげる人々が現われた。しかし、われわれはこのかびをはらいのけることができるであろう。いまこそ、ロシアの革命家は、真に革命的な理論にみちびかれ、真に革命的な、自然発生的にめざめつつある階級にたよりながら、ついに――ついにだ！――すっくと立ちあがって、彼らの剛勇の力量をあますところなく発揮することができる。そのためには、われわれの政治的任務を低め、われわれの組織活動の規模をせばめようとするあらゆるもくろみが、多くの実践家のあいだで、またすでに学窓にあるころから実践活動を夢みているいっそう多くの人々のあいだで、嘲笑と軽蔑とでむかえられるようになりさえすればよい。そしてわれわれは、そうならせよう。心配したもうな、諸君！

私は、論文『なにから始めるべきか？』のなかで、『ラボーチェエ・デーロ』に反対して次のように書いた。「なにか特殊な問題についての扇動の戦術や、党を組織するうえでのなにかの細目を実行するための戦術なら、二四時間以内に変更することもできるが、戦闘組織や大衆のあいだでの政治的扇動が一般に、いつでも、無条件に必要かどうかについての自分の見解を、二四時間以内はさておいて、二四ヵ月以内にでも変更するというのは、なんの原則ももたない人々でなければやれないことである」と。(10八)『ラボーチェエ・デーロ』はこれに答えて言う。『『イスクラ』が事実にもとづく非難であるかのようによそおっているこのた

だ一つの非難も、まったく根拠のないものである。われわれが、『イスクラ』が発刊されるのを待たないで、最初から政治的扇動を呼びかけたばかりか」……（そのさい、労働者サークルにたいしてだけでなく、「大衆的労働運動にたいしてさえ、絶対主義の打倒を第一の政治的任務として提起することは不可能」であって、最も身近な政治的要求のための闘争しか提起できないと語り、また「最も身近な政治的諸要求は、一回の、よくよくの場合でも、数回のストライキをやったあとでは、大衆にとって理解しやすいものになる」と語りながら）、……「さらに、自分の出版物によって国外から、ロシア国内で活動する同志たちに唯一の社会民主主義的な政治的扇動資料を供給してきたことは、『ラボーチェエ・デーロ』の読者がよく知っているとおりである。」……（そのさい諸君は、この唯一の資料のなかで、政治的扇動をもっぱら経済闘争だけを基盤として最も広範に適用したばかりか、ついには、このようなせばめられた扇動が「最も広範に適用しうるもの」である、などと考えるにいたったのだ。ところで諸氏よ、諸君の論証は、まさに『イスクラ』の発刊が必要であったこと――唯一の資料がこんな種類のものであってみれば――、また『ラボーチェエ・デーロ』にたいする『イスクラ』の闘争が必要であったことを証明していることに、諸君は気がつかないのか？）……「他方では、われわれの出版活動は実際に党の戦術上の統一を準備し」……（戦術は、党とともに成長する党任務の成長の過程である、と確信する点での統一か？　なんと貴重な統一であろう！）、……「それによってまた『戦闘組織』の可能性を準備したのである。このような組織をつくるために、同盟は、およそ在外組織として自分の力におよぶことはなんでもした。」（『ラボーチェエ・デーロ』第一〇号、一五ページ）言いぬけようと骨おっても、むだというものだ！　諸君が諸君の力におよぶことはなんでもしたということを、私は否定しようなどと思ったことは、一度もない。私が主張したし、またいまも主張していることは、諸君の「力におよぶこと」の限界が、諸君の近視的な考え方のためにせばめられているということなのである。「最も身近な政治的諸要求」のための闘争とか、「雇い主と政府とにたいする経済闘争」とかをやるために、「戦闘組織」をうんぬんすることさえ、滑稽である。

しかし、もし読者が手工業性への「経済主義者」のほれこみの珠玉を見たいと思えば、いうまでもなく、折衷主義的で、ぐらついた『ラボーチェエ・デーロ』をおいて、首尾一貫した、断固たる『ラボーチャヤ・ムィスリ』についてみなければならない。エル・エムは、『別冊付録』、一三ページに次のように書いている。――「さて、本来の、い

わゆる革命的インテリゲンツィアなるものについて、二言三言述べておこう。なるほど彼らは、『ツァーリズムとの断固たる格闘に立ちあがる』十分な覚悟をもっていることを、一度ならず実際に示した。ただひとつ困ったことには、わが国の革命的インテリゲンツィアは、政治警察に無慈悲に追及されているために、この政治警察との闘争を、専制との政治闘争ととりちがえている。だからこそ、『専制との闘争のために必要な勢力をどこから得てくるべきか？』という問題もまた、彼らには今日まで依然として明らかになっていないのである」と。

自然発生的運動の礼賛者（悪い意味での礼賛者）が、警察との闘争を尊大に軽蔑することといったら、なんと比類のないものではあるまいか？　自然発生的な大衆運動の場合には政治警察との闘争はわれわれにとっては実質上重要でないという理由で、われわれの秘密活動の拙劣さを正当化することをはばからないのだ!!　こんな奇怪な結論に賛成するのは、ごくごく少数の人々だけであろう。それほど、わが革命的諸組織の欠陥の問題は、すべての人に痛切に感じられているのだ。しかし、たとえばマルトィノフがこれに賛成しないとすれば、それは、彼が自分の命題をおしまいまで考えぬく能力がないか、またはその勇気がないからにすぎない。じっさい、目に見える成果を約束する具体的な要求を大衆が提出するというような「任務」を果たすために、堅固な、中央集権化された革命家の戦闘組織をつくりだすことにわざわざ苦労する必要があろうか？　この「任務」ならば、「政治警察と闘争する」ことなどまったくない大衆でも、現に遂行しているではないか。それればかりではない。この任務は、少数の指導者のほかに、「政治警察と闘争する」能力をまったくもたない労働者（その大多数者）もまたそれを取りあげないかぎり、はたして遂行できるであろうか？　このような労働者や、平均的な大衆分子は、ストライキや、警察や軍隊相手の街頭闘争で、巨大な精力と自己犠牲心とを発揮する能力をもっており、われわれの全運動の帰結を決定する能力をもっている（またこれは彼らにしかできない）。――しかし、ほかならぬ政治警察との闘争のためには、特別の資質が必要であり、職業革命家が必要である。そして、われわれは、大衆が具体的な要求を「提出する」ように心をくばるだけでなく、また労働者大衆がこのような職業革命家をますます多数「提出する」ように心をくばらなければならないのである。こうして、われわれは、いまや職業革命家の組織と純労働運動との相互関係の問題にたどりついた。これは、出版物にはあまり反映されなかったけれども、われわれ「政治家」が、多少とも「経済主義」に傾いている同志たちとの会話や論

争のなかで、すくなからず論議した問題である。この問題にはとくに立ちいって論じるだけの値うちがある。しかし、はじめにいま一つ引用文をかかげて、手工業性と「経済主義」との関連についてのわれわれの命題の例証を終わることにしよう。

N・N氏は、その『回答』のなかでこう書いている。「『労働解放』団は、政府との直接の闘争を要求しているが、この闘争のために必要な物質的勢力がどこにあるかを考量せず、そのための道がどこにあるかを指示してもいない」と。そして、そのための道うんぬんの句に傍点を打ったうえ、筆者は、「道」ということばに次のような注釈をつけている。「この事情を、秘密保持の目的からだと言って弁明することはできない。なぜなら、綱領で問題になっているのは、陰謀ではなくて大衆運動だからである。ところで、大衆は秘密の道をすすむことはできない。秘密のストライキなどというものがはたしてありうるだろうか？　秘密の示威行動や請願などというものがはたしてありうるだろうか？」（『ヴァデメクム』、五九ページ）と。筆者は、この「物質的勢力」（ストライキや示威行動を組織する人々）と、闘争のための「道」とのいずれにも、ほんのまぎわまでせまりながら、やっぱりまごついて当惑してしまった。それというのも、彼が大衆運動の前に「拝跪している」からである。つまり、大衆運動をもって、われわれの革命的積極性を鼓舞し駆りたてるべきものとは考えないで、自分の革命的積極性を発揮する必要をわれわれから免除してくれるもののように考えているからである。秘密のストライキなどというものは、それへの参加者や直接の関係者にとってはありえない。しかし、ロシアの労働者大衆にとっては、このストライキが「秘密」にされたままになってしまうことはありうる（じじつ、たいていそうなっている）。というのは、政府は、罷業者とのあらゆる連絡を断ち切るように心がけ、ストライキの情報がすこしでもひろまるのを阻止するように心がけるだろうからである。そこで、この点だけからしても、特別な「政治警察との闘争」が、すなわちストライキに参加しているような広範な大衆にはけっして積極的にやれないような闘争が、必要になる。このような闘争は、職業的に革命的活動に従事する人々によって「技術のすべての規則にしたがって」組織されなければならない。この闘争を組織する必要は、大衆が自然発生的に運動に引きいれられることによって減じはしなかった。反対に、これを組織する必要は、そのためにかえって増大する。というのは、警察があらゆるストライキ、あらゆる示威行動を秘密のうちに葬りさるのを、われわれ社会主義者が妨げることができないなら（そしてときには自分でそれらを秘

密のうちに準備しないなら）、われわれは大衆にたいするる自分の直接の義務を果たすことができないだろうからである。そして、われわれにはそれをやる可能性がある。それは、ほかでもなく、自然発生的にめざめつつある大衆もまた、自分たちのあいだからますます多くの「職業革命家」を送りだしてくるであろう（われわれが労働者に、同じ場所で足ぶみをしているように、手をかえ品をかえて勧めようと考えつきさえしなければ）という理由によってである。

（c）　労働者の組織と革命家の組織

もし社会民主主義者が、政治闘争という概念を「雇い主と政府とにたいする経済闘争」という概念と一致するものと考えるようであれば、彼が、「革命家の組織」という概念を、多かれ少なかれ「労働者の組織」という概念と一致するものと考えるだろうことは、当然に予期される。そして、これは実際に起こっていることなので、われわれが組織のことについて語り合うときには、文字どおり別々のことばで話していることがわかるほどである。たとえば、私は、ある初対面の、かなり一貫した「経済主義者」とかわした会話のことを、ついいましがたのことのように記憶している。(103)話はたまたま『だれが政治革命をなしとげるか？』という小冊子のことにおよんだが、われわれは、この小冊子の根本的な欠陥が組織問題を無視している点にあるということに、すぐさま意見が一致した。われわれは、おたがいに見解を同じくしているものと、はやくも思いこんでしまった。――ところが、……会話をすすめてゆくうちに、われわれが別々の事柄を話しているのだということがわかってきた。私の話し相手は、小冊子の筆者がストライキ基金や共済組合などを無視していることを非難しているのだが、私のほうでは、政治革命を「なしとげる」のに必要な革命家の組織のことを頭においていたのである。そして、いったんこの意見の相違が明らかになるやいなや、もう総じてどのような原則上の問題についてもこの「経済主義者」と意見の一致をみなかったと、記憶する！

いったいわれわれの意見の相違の根源はどういう点にあったのか？　それは、まさに「経済主義者たち」が、政治的任務の場合と同様に、組織上の任務においても、たえず、社会民主主義から組合主義に迷いこんでいる点にある。社会民主主党の政治闘争は、雇い主と政府とにたいする労働者の経済闘争よりもずっと広範で複雑である。それとまったく同様に（またその結果として）、革命的社会民主主党の組織は、どうしてもこのような闘争のための労働者の組織とは別種のものでなければならないのである。労働者の組織は、第一に、労働組合的組織でなければならない。第二に、

できるだけ広範なものでなければならない。第三に、できるだけ秘密でないものでなければならない（いうまでもなく、私はここでも、また以下の文中でも、専制ロシアだけを念頭において言っている）。これに反して、革命家の組織は、まず第一に、また主として、革命的活動を職業とする人々をふくまなければならない（だから私は、社会民主主義的革命家を念頭において、革命家の組織と言っているのである）こういう組織の成員に共通なこの標識をまえにしては、労働者とインテリゲンツィアのあいだのあらゆる差異はまったく消えさらなければならず、まして両者の個個の職業の差異についてはいうまでもない。この組織は、必然的に、あまり広範なものであってはならず、またできるだけ秘密なものでなければならない。この三とおりの差異を立ちいって調べてみよう。

政治的自由のおこなわれている国々では、労働組合的組織と政治的組織との差異がまったく明瞭であることは、労働組合と社会民主党との差異が明瞭であるのと同様である。もちろん、後者と前者との関係は、いろいろな国で、それぞれの歴史的、法律的その他の条件におうじて、不可避的に変化する。――この関係の緊密さや複雑さなどの程度は、大小さまざまでありうる（われわれの見地からすれば、それはできるだけ緊密で、またできるだけ複雑でないものでなければならない）が、労働組合の組織と社会民主党の組織とが一致するということは、自由な国々では問題にならない。ところが、ロシアでは、一見したところ、専制の圧制が社会民主主義的組織と労働者団体のあいだのあらゆる差異を消しさっているかのようである。なぜなら、あらゆる労働者団体、あらゆるサークルが禁止されており、労働者の経済闘争の主要な現われであり道具であるストライキは、総じて刑事上の犯罪となっている（そして、ときとして政治上の犯罪にさえなっている！）からである。こうして、わが国の諸条件は、一方では、経済闘争をおこなう労働者を大いに政治問題に「突きあたらせる」が、他方では、社会民主主義者を組合主義と社会民主主義との混同に「突きあたらせる」のである（そしてわがクリチェフスキー、マルトィノフらの一派は、第一の種類の「突きあたらせ」を熱心に論じながら、第二の種類の「突きあたらせ」には気がつかない）。じっさい、「雇い主と政府とにたいする経済闘争」に九割九分まで没頭しきっている人々のことを思いうかべてみたまえ。そのうちのある人々は、その活動の全期間（四ヵ月ないし六ヵ月）をつうじてただの一度も、もっと複雑な革命家の組織が必要だという問題に突きあたることはないだろう。別のある人々は、おそらくかなりにゆきわたったベルンシュタイン主義の文献に「突

きあたって」、そこから、「じみな日常闘争の漸進的な歩み」がとくに重要だという確信をくみとるだろう。最後に、さらに別のある人々は、おそらく「プロレタリア闘争との緊密な有機的結びつき」の、労働組合運動と社会民主主義運動との結びつきの、新しい模範を世に示したいという、魅惑的な思想に熱中するだろう。そういう人々は次のように論じる。ある国が資本主義の舞台に、したがってまた労働運動の舞台に登場することがおそければおそいほど、社会主義者はそれだけ多く労働組合運動に参加して、それに支持をあたえることができ、また非社会民主主義的な労働組合はそれだけ少なくてよく、また少なくなければならない、と。この点まではこのような議論もまったく正しい。しかし、不幸なことに、彼らはもっと論旨をすすめて、社会民主主義と組合主義との完全な融合を夢想する。われわれは、じきに『サンクト－ペテルブルグ闘争同盟規約』の例によって、こうした夢想がわれわれの組織計画にどんなに有害な影響をおよぼしているかを見るであろう。

経済闘争のための労働者の組織は労働組合的組織でなければならない。社会民主主義的労働者は、だれでもできるだけこれらの組織に協力して、そのなかで積極的に活動しなければならない。これはいかにもそのとおりである。だが、社会民主主義者だけが「職業」組合の一員となることができるような状態を要求することは、けっしてわれわれの利益にはならない。そんなふうにすると、大衆にたいするわれわれの影響範囲をせばめることになるからである。雇い主と政府とにたいして闘争するために団結が必要であることを理解している労働者なら、だれでも職業組合に参加させるがよい。もし職業組合が、せめてこの程度の初歩の理解をもちうる人々の全部を結合しないなら、もしこれらの職業組合が非常に広範な組織でないなら、職業組合の目的そのものが達せられないであろう。そして、これらの組織が広範であればあるほど、それにたいするわれわれの影響もいっそう広範になるであろう。この影響は、経済闘争の「自然発生的」発展によってあたえられるだけでなく、また組合員中の社会主義者がその同僚たちに直接に意識的にはたらきかけることによってもあたえられるのである。しかし、組織の成員が広範な場合には、厳格な秘密活動（経済闘争への参加に必要なよりもずっと多くの訓練を必要とする活動）は不可能である。成員が広範なことが必要なのに、また厳格な秘密活動も必要だという、この矛盾を、どうやって調和させたらよいのか？　職業組合をできるだけ秘密でないようにするには、どうしたらよいのか？　一般的にいって、このためには二つの道しかありえない。すなわち、職業組合を合法化するか（ある国々では、これが

社会主義団体や政治団体の合法化にさきだっておこなわれた)、それとも、組織は秘密にたもつけれども、組合員大衆にとって秘密活動がほとんどゼロになってしまうくらい「自由な」、ほとんどきまった形のない、ドイツ人のいうlose〔ルーズ〕なものとするか、どちらかである。

非社会主義的、非政治的な労働者団体の合法化は、ロシアでもすでに始まっている。そして、急速に成長しつつあるわが社会民主主義的労働運動の一歩一歩が、こういう合法化の試みを倍増させ、また鼓舞するであろうことには、すこしの疑いもありえない。こういう試みは、おもに現存制度の味方に由来するものであるが、部分的にはまた労働者自身や、さらに自由主義的インテリゲンツィアにも由来している。合法化の旗じるしはすでにヴァシーリエフやズバートフらによってかかげられており、すでにオーゼロフ氏やヴォルムス氏らがそれへの協力を約束し、またあたえており、すでに労働者のあいだにもこの新潮流の追随者がいる。そこで、われわれとしても、今後この潮流のことを考慮しないわけにはいかない。これをどう考慮するかについては、社会民主主義者のあいだにおそらく二つの意見はありえない。われわれは、この潮流へのズバートフやヴァシーリエフら、憲兵や坊主どものどのような参加をもたゆまず暴露し、これらの参加者の真の意図を労働者に説明する義務がある。われわれはまた、労働者の公開集会で自由主義的活動家がおこなう演説のなかにしのびこんでくるあらゆる調停的、「協調的」な論調を暴露する義務がある。彼らのそういう論調が、本気に諸階級の平和的協力を望ましいものと確信するからであろうと、当局にとりいりたいという願いからであろうと、また最後に、たんにへまなためであろうと、同じことである。最後にわれわれは、労働者に警察のわなにひっかからないように用心させる義務がある。警察は、こういう公開集会の席上や公認団体のなかで「過激分子」を物色したり、合法組織をつうじて非合法組織のなかへも挑発者を送りこもうと試みたりして、しばしば労働者にこういうわなをしかけるからである。

しかし、こういうことをするからといって、労働運動の合法化が結局はほかならぬわれわれの利益になり、けっしてズバートフらの利益にならないことを、忘れるわけではけっしてない。反対に、まさにこういう暴露カンパニアをつうじて、われわれは小麦から毒麦をよりわけるのである。なにが毒麦であるかは、われわれはすでにこれを示しておいた。小麦というのは、広範な、最も遅れた労働者層の注意が社会問題や政治問題に引きつけられること、本質上合法的な機能(合法的な書籍の配布、共済事業など)からわれわれ革命家が解放されることを言うのである。これらの

機能が発達すれば、かならずそれは、ますます多くの扇動材料をわれわれに提供するであろう。この意味で、われわれはズバートフらやオーゼロフらに、こう言うことができるし、また言わなければならない。――精だしてやりたまえ、諸君、精だしてやりたまえ！　諸君が労働者にわなをしかけるかぎり（直接の挑発の意味にせよ、労働者を「ストルーヴェ主義」によって「まじめに」堕落させる意味にせよ）、われわれはきっと諸君を暴露するよう心がけるだろう。諸君が真の一歩前進をするかぎり――たとえどんなに「おずおずとジグザグ踏んで」にせよ、とにかく一歩前進をするかぎり、われわれは、どうぞ！　と言うだろう。真の一歩前進でありうるのは、どんなにわずかでも労働者の活動の余地を真に拡大することだけである。そして、そのような拡大なら、どれでもわれわれのために役だつであろうし、挑発者が社会主義者をつかまえるのでなく、社会主義者が自分の支持者をつかまえるような合法団体の出現をはやめるであろう。一言でいえば、今日われわれのなすべきことは、毒麦とたたかうことである。われわれのなすべきことは、室内の植木鉢のなかで小麦をそだてることではない。われわれは、毒麦を抜きとり、それによって、小麦の種子が発芽できるように土壌をきよめる。そして、アファナーシー・イヴァーヌィチとプリヘーリヤ・イヴァーノヴナのような人々[10]が室内で植物栽培をやっているあいだに、われわれは、きょう毒麦を刈りとることもでき、また、あす小麦を取りいれることもできる刈入人たちを養成しなければならない。*

* 『イスクラ』がおこなった毒麦との闘争は、『ラボーチェエ・デーロ』の次のような憤然とした攻撃をまねいた。「『イスクラ』に時代の表徴と思われるのは、これらの大事件（この春の）よりも、むしろ、ズバートフの手先どもがやっている労働運動の『合法化』の哀れな試みなのである。まさにこれらの事実こそ『イスクラ』の主張を反駁していることに、同紙は気がつかない。これらの事実こそ、労働運動が非常に恐るべきひろがりをもってきたと、政府の目に映っていることを証明するものなのだ。」（『二つの大会』、二七ページ）なにもかも、「生活ののっぴきならぬ命令に耳をかさない」これらの正統派の連中の「教条主義」のせいなのだ。この連中は、かたくなにも一アルシン[11]もある小麦を見ようとしないで、一ヴェルショーク[12]ほどの毒麦とたたかうのだ！　これは、「ロシアの労働運動の見とおしにたいするゆがんだ感覚」（前掲書、二七ページ）ではないだろうか？

だから、合法化によってはわれわれは、なるべく秘密でない、できるだけ広範な労働組合的組織をつくりだす問題を解決できないのである（しかし、ズバートフやオーゼロフらがわれわれにこれを解決するための部分的な可能性でもひらいてくれるなら、われわれは大喜びするだろう。

――そうさせるために、われわれはできるだけ精力的に彼らとたたかわなければならない！）。あとに残るのは、秘密の労働組合的組織の道だけである。そして、すでにこの道にすすんでいる（われわれが確実に知っているように）労働者たちに、われわれはあらゆる援助をあたえなければならない。労働組合的組織は、経済闘争を発展させ、強めるうえに大いに役だつことができるだけでなく、また政治的扇動と革命的組織とのためにも、きわめて重要な補助者となることができる。こういう成果をおさめるためには、始まりかけた労働組合運動を社会民主党にとって望ましい軌道にみちびきいれるためには、――まず第一に、ペテルブルグの「経済主義者たち」がもう五年ちかくもかつぎまわっているあの組織計画の愚劣さを、はっきり理解する必要がある。この計画は、一八九七年七月の『労働者基金組合規約』（『小型版「ラボートニク」』第九―一〇号、四六ページ――『ラボーチャヤ・ムィスリ』第一号からの転載）のなかにも、また一九〇〇年一〇月の『組合労働者組織の規約』（サンクト・ペテルブルグで印刷された単行のリーフレットで、『イスクラ』第一号のなかに論及されているもの）のなかにも述べられている。この両規約の基本的な欠陥は、細目にわたって広範な労働者組織の形をきめている点、またこの組織と革命家の組織とを混同している点にある。第二の規約のほうがよく仕上げられているので、こちらを取りあげることにしよう。この規約の根幹は、五二箇条からなっている。そのうち二三箇条は、「労働者サークル」の組織、事務処理手続、管轄範囲について述べている。この労働者サークルは各工場に設けられ（「その成員は一〇名をこえない」）、各自の「中央（工場）グループ」を選出する。第二条に言う。「中央グループは、各自の工場内に起こるいっさいの事柄を注視し、工場内の出来事を記録する。」「中央グループは、毎月掛金支払者の全員に基金の状態について報告をおこなう」（第一七条）等々。一〇箇条は「地区組織」にあてられ、一九箇条は、「労働者組織委員会」と「サンクト・ペテルブルグ闘争同盟委員会」とのきわめて複雑なからみ合いにあてられている（この両委員会は、各地区と、「もろもろの実行グループ」――「宣伝家グループ、地方連絡、国外連絡、倉庫管理、出版、基金の各グループ」――とから選出される）。

社会民主党、すなわち、労働者の経済闘争のための「もろもろの実行グループ」、というわけだ！「経済主義者」の考えが社会民主主義から組合主義へと迷いこんでいること、また、社会民主主義者は、なによりもまず、プロレタリアートの解放闘争全体を指導する能力のある革命家の組織について考えなければならないという思想が、「経済主

義者」にとってまったく無縁なものであることを、これ以上あざやかに示すことはむずかしいであろう。「労働者階級の政治的解放」や「ツァーリ専制」について論じながら、こんな組織規約を書くというのは、社会民主党の真の政治的任務をまったく理解していない証拠である。五〇箇条のうちただ一つとして、ロシアの絶対主義のいっさいの側面や、ロシアの種々な社会階級の全容を明らかにするような、最も広範な政治的扇動を大衆のあいだでおこなう必要を理解しているらしい形跡を、毛筋ほども示しているものはない。このような規約では、政治的目的はおろか、労働組合的な目的さえ、実現することはできない。なぜなら、そういう目的のためには職業別の組織が必要なのに、それについてはなにも言っていないからである。

しかし、おそらく最も特徴的な点は、三段階の選挙制にもとづいて、画一的な、滑稽なほどこまごました規則の恒久的な糸で、一つひとつの工場と「委員会」とを結びつけようとしている、この「体系」全体の驚くべき鈍重さであろう。ここでは、思想が「経済主義」の狭い視界に圧迫されて細目にはまりこんでいて、そのためにはなはだしく繁雑な手続とお役所仕事とのにおいがする。もちろん実際には、これらの全条項の四分の三はけっして実行されることはないが、そのかわりに、各工場に中央グループをおくこのような「秘密」組織は、信じられないほど広範な一斉検挙をおこなう便宜を憲兵にあたえる。ポーランドの同志たちは、だれもかれも労働者基金組合の広範な設置に熱中した運動の一時期をすでにとおってきたが、これが憲兵に豊富な獲物を提供するものでしかないことを確信して、じきにこのような考えを捨てた。もし広範な労働者組織を望んで広範な一斉検挙を望まず、憲兵に満足をあたえることを望まないなら、われわれは、これらの組織を全然きまった形のないものにするよう努力しなければならない。——そうしても、それらの組織は機能を発揮できるであろうか？——では、その機能というものを見てみたまえ。「……工場内に起こるいっさいの事柄を注視し、工場内の出来事を記録する。」（規約第二条）いったいこれに、ぜひともきまった形をあたえることが必要であろうか？　そのための特別のグループなどはなにもつくらずに、非合法新聞に通信を送るほうが、もっとよくこの目的を達しうるのではないだろうか？　「……工場における労働者の状態の改善をめざす労働者の闘争を指導する。」（規約第三条）これもまたきまった形をあたえる必要などまったくないことである。労働者がどんな要求を提出したいと望んでいるかということは、多少とも頭のはたらく扇動家ならだれでも、普通の会話のあいだにすっかり探りだすだろうし、そして

いったん探りだしたなら、それをまさに狭い――広範ではなくて――革命家の組織に伝達して、適当なリーフレットを供給してもらうことができるであろう。「……収入一ルーブリにつき二コペイカを払いこむ……基金を組織する」(第九条)、――それから、毎月全員に基金の会計報告をおこなう(第一七条)、掛金を払わない加入者は除名する(第一〇条)、等々。これこそ、警察にとってまったくの天国というものだ。というのは、この「中央工場基金」の秘密を完全に看破し、金を没収し、すぐれた分子を全部からめとることほど、たやすいことはないからである。そんなことをするよりも、周知の(非常に狭い、そして非常に秘密な)組織のスタンプを押した一コペイカか二コペイカの券を発行するか、または全然券などなしに集金して、なにか符牒をきめて非合法新聞にその報告をのせるようにしたほうが、簡単ではなかろうか？　それでも同じ目的は達せられるだろうし、しかもそうすれば、憲兵が糸を探りあてることは百倍も困難になるであろう。

まだいくらでも例をあげて規約の検討をつづけることもできるだろうが、以上に述べたことで十分だと思う。最も確かな、経験に富み、鍛練された労働者たちからなる、固く結束した小さな中核があって、主要な諸地区に世話役をもち、最も厳格な秘密活動のあらゆる規則にしたがって革命家の組織と結びついているなら、それは、大衆の最も広範な協力をうけて、どんなきまった形もとらずに、労働組合的組織に課せられるいっさいの機能を果たし、そのうえまさに社会民主党にとって望ましいやり方で果たすことが完全にできるであろう。このような方法によるときにだけ、どんなに憲兵がいようとも、社会民主主義的な労働組合運動の確立と発展をなしとげることができるのである。

私に反論して次のように言う人があろう。全然きまった形がなく、はっきりそれとわかった登録した成員さえまったくいないほど lose〔ルーズ〕な組織を組織とよぶことはできない、と。そうかもしれない。私には名称はどうでもよい。しかし、この「成員のいない組織」は、必要なことはなんでもやるだろうし、またわれわれの未来の労働組合と社会主義とのしっかりした結びつきを最初から保障するであろう。ところで、絶対主義のもとで選挙や、報告や、一般投票などをおこなう広範な労働者組織を望むものは、まったく度しがたいユートピア主義者である。

以上から引きだされる教訓は簡単である。すなわち、もしわれわれが革命家の強固な組織をしっかりと打ちたてることから始めるなら、運動全体に確固さを保障し、社会民主主義的な目的をも、本来の労働組合的な目的をも、そのどちらをも実現することができるであろう。もしこれに反

して、われわれが、大衆にとって最も「とりつきやすい」と称する（そのじつ、憲兵にとって最もとりつきやすく、革命家を警察にとって最もとりつきやすくするところの）広範な労働者組織から始めるなら、どちらの目的も実現できず、手工業性から脱却することもできないで、われわれ自身がちりぢりばらばらで、いつも壊滅状態にある結果、ズバートフ型あるいはオーゼロフ型の労働組合を、大衆にとって最もとりつきやすくするだけであろう。

この革命家の組織の機能はいったいどういうものでなければならないか？——この点について、われわれはいますぐくわしく語りあうことにしよう。だが、まずはじめにいまひとつ、わがテロリストのはなはだ典型的な所論を検討しよう。このテロリストは、この点でもまた（なんと悲しい運命であろう！）「経済主義者」の壁一重へだてた隣人であることを明らかにしている。労働者むけの雑誌『スヴォボーダ』（第一号）に『組織』と題する論文がのっているが、その筆者は、自分の知り合いのイヴァノヴォ・ヴォズネセンスクの「経済主義的な」労働者たちを弁護しようとしている。

彼はこう書いている。「民衆がだまりこんでいて無自覚であり、運動が下から起こらないのは、よくないことである。まあこういう状態を考えてみたまえ。大学都市から学生たちが休暇や夏休みに帰省してしまうと、労働運動は停止してしまう。わきから駆りたてられるような労働運動が、はたして真の一勢力でありうるだろうか？そうではありえない。……この運動は、まだひとり歩きできるようになっておらず、他人に手を引いてもらっているのだ。万事がこのとおりで、学生が帰省してしまうと、停止してしまうのだ。精鋭中の最も有能な分子が奪いさられると、全体がくさってしまう。『委員会』が逮捕されると、新しい委員会が組織されるまでは、またもや鳴りをしずめる。それにまた、どんな委員会が組織されることやら、わからない、ことによると、以前のものとは似ても似つかないものかもしれない。まえの委員会はこう言い、こんどの委員会はその反対を言うというぐあいに、きのうとあすとのあいだのつながりは失われ、過去の経験は未来への教訓にならない。そして、こうしたことはみな底ふかくに、民衆のなかに根をもっていないためであり、仕事をする者が一〇〇人の愚者でなくて一〇人の賢者であるためである。一〇人だったらいつでも一網打尽にすることができるけれども、いったん組織が民衆を把握するなら、万事が民衆から起こり、だれがどんなにやっきになろうと、事業を滅ぼすことはできなくなる。」（六三ページ）

事実は正しく述べられている。われわれの手工業性はなかなかうまく描かれている。しかし、結論は、その愚かしさといい、その政治的な分別なさといい、『ラボーチャヤ・ムィスリ』級のものである。これが愚かしさの骨頂であるというのは、筆者が、「底ふかくに」ある運動の「根」についての哲学的・社会史的問題と、憲兵にたいする闘争をもっとうまくやるという技術的＝組織的問題とを、混同しているからである。これが政治的な分別なさの骨頂であるというのは、筆者が悪い指導者に背をむけて良い指導者に呼びかけようとはしないで、指導者一般に背をむけて「民衆」に呼びかけているからである。政治的扇動を刺激的なテロルとおきかえようとする思想が政治の面でわれわれをうしろへ引きもどすものであるのと同様に、これは組織の面でわれわれをうしろへ引きもどそうとする試みである。ほんとうに、私は、『スヴォボーダ』がわれわれにふるまうこんぐらかったしろものを解きほぐすのに、どこから手をつけてよいやらわからず、ほんとうの embarras de richesses〔ありあまっているためのもてあまし〕を感じている。問題を一目瞭然にするために、はじめに実例を示してみよう。ドイツ人を見たまえ。ドイツ人のところでは、組織が民衆を把握しており、万事が民衆から起こり、労働運動がひとり歩きできるようになっていることは、諸君も否定しようとはすまいと思う。ところが、この幾百万人の民衆は、自分らの「一〇人」ほどの試練を経た政治的指導者たちをなんとよく評価することができ、なんとしっかりとこの指導者たちによりすがっていることだろう！議会で反対党の代議士が社会主義者をからかって、次のように言ったことが再三あった。「なんというけっこうな民主主義者だろう！　君たちの運動は、労働者階級の運動とは口さきだけで、実際にはいつも同じ一団の首領たちが表面に立っている。年から年中、一〇年たっても二〇年たっても、いつも同じベーベル、いつも同じリープクネヒトだ。たしかに、君たちのいわゆる労働者の選出代表は、皇帝の任命する官吏以上に動かしえないものなのだ！」と。しかし、ドイツ人は、「首領」に「民衆」を対置し、民衆の心に邪悪な、虚栄の本能を燃えたたせ、「一〇人の賢者」にたいする大衆の信頼を傷つけることによって、運動から堅固さと確固さを奪おうとするこれらのデマゴギー的な試みを、せせら笑っただけであった。ドイツ人はすでに政治思想が十分に発達しており、政治的経験を十分につんでいるので、今日の社会では、「一〇人」の才能ある（才能ある人は何百人も生まれるものではない）、試練を経た、職業的に訓練され、多年の修業によって修練をつみ、たがいにみごとに協調をたもってきた指導者なしには、どの階級も

堅忍不抜の闘争をおこなうことができないということを、理解しているのだ。ドイツ人はまた、彼らの仲間うちにも、「何百人の愚者」におもねって、これを「何十人の賢者」以上にほめあげたり、大衆の「たくましい鉄拳」(二三)におもねって、彼らをあおって（モストやハッセルマンのやったように）軽率な「革命的」行動をやらせようとしたり、確固たる堅忍不抜な指導者たちにたいする不信をひろめるデマゴーグを、たびたび見てきた。そして、ドイツの社会主義がこのように成長し、強くなったのも、ひとえに、社会主義の内部のありとあらゆるデマゴーグ的な分子にたいして、たゆみない、非妥協的な闘争をおこなってきたおかげなのである。ところが、自然発生的にめざめた大衆のあいだに、十分に訓練され、熟達し、経験をつんだ指導者がいないことが、ロシア社会民主党の危機全体の原因となっている時期に、わが賢人たちは、ばかのイヴァヌーシカの深遠さよろしくふれまわる、「運動が下から起こらないのは、よくないことである」と！

「学生からなる委員会は役にたたない。それは腰がすわらない。」——まったくそのとおりである。しかし、このことから生まれる結論は、職業革命家からなる委員会が必要だということであって、自分をそういう職業革命家にそだてあげる能力のある者が学生であろうと労働者であろうと、それはどちらでもよい。ところが、諸君は、わきから労働運動を駆りたてるべきでない、という結論を引きだす！　諸君は政治的な素朴さのために、そういうことをすると、わが「経済主義者」や、われわれの手工業性のお先棒をかつぐことになるのに、気がつかないのだ。おたずねしたいが、わが国の学生がわが国の労働者を「駆りたてた」ということは、どういう点に現われていたのか？　学生が、彼らのもちあわせる政治的知識の断片、彼らの聞きかじった社会主義思想のかけら（というのは、今日の学生の主要な知識の糧である合法マルクス主義は、イロハのほか、かけらのほかには、なにも学生にあたえることができなかったからだ）を労働者に伝えたということ、ただその一点に現われていたのである。このような「わきからの駆りたて」は、われわれの運動のうちに多すぎたのでなく、かえって少なすぎた。不埒なくらいに、言語道断なくらいに、少なすぎたのである。というのは、われわれはあまりにも自分の殻のなかに閉じこもっていて、初歩的な「雇い主と政府とにたいする労働者の経済闘争」の前にあまりにも奴隷的に拝跪していたからである。このような「駆りたて」ならば、われわれ職業革命家は、いままでの百倍も多くやらなければならないし、またやるであろう。しかし、諸君は、「わきからの駆りたて」というような忌まわしい

ことば、すなわち労働者たちの心に（すくなくとも諸君が未熟なのと同じ程度に未熟な労働者たちの心に）、政治的知識と革命的経験とをわきから労働者に伝える人々全体にたいする不信の念をおこさせ、そういう人々全体に反抗しようという本能的願望をおこさせずにはおかないようなことばを選んでいることで、自分がデマゴーグであることを明らかにしているのである。そして、デマゴーグは労働者階級の最悪の敵である。

まあ、まあ！　私の論戦の「やり方が非同志的だ」といって、いそいでわめきたてないでくれたまえ！　私にしても、諸君の意図の純粋さを疑おうとは思っていない。私がすでに言ったように、政治的な素朴さだけからでも、人間はデマゴーグになりうるのである。ところで、私は諸君がデマゴギーをやるまでに堕落したことを示した。そして、私は、デマゴーグは労働者階級の最悪の敵であると、あくまでも繰りかえして言おう。これが最悪だというのは、まさに彼らが民衆の邪悪な本能を燃えたたせるからであり、また未熟な労働者には、自分たちの味方のようにふるまっている、しかもときとすると本気に味方のつもりでふるまっているこれらの敵を、見わけることができないからである。これが最悪だというのは、混乱と動揺の時期、われわれの運動の個性がようやく形づくられようとしている時期には、デマゴギーで民衆をまどわすほど、たやすいことはないからである。民衆は、のちになって、このうえなくにがい試練をなめてから、はじめて自分の誤りを悟ることができる。だからこそ、今日のロシアの社会民主主義者の当面のスローガンは、デマゴギーをやるまでに堕落しつつある『スヴォボーダ』と、デマゴギーをやるまでに堕落しつつある『ラボーチェエ・デーロ』（これについては、なおあとでくわしく述べよう*）との双方にたいする断固たる闘争でなければならない。

* ここでは次のことだけを指摘しておこう。「わきからの駆りたて」や、そのほか組織についての『スヴォボーダ』のいっさいの議論についてわれわれが言ったことは、みなそのまま、「ラボーチェエ・デーロ派」をふくむ「経済主義者たち」全部にあてはまる。というのは、彼らの一部は、組織問題についてこれと同じ見解を積極的に説いたり擁護したりしているし、他の一部はそういう見解に迷いこんでいるからである。

「一〇人の賢者は一〇〇人の愚者よりもたやすく一網打尽にすることができる」このすばらしい真理（こういう真理を提供されれば、一〇〇人の愚者は、いつでも諸君に喝采をおくるであろう）が自明なことのように見えるのは、ひとえに諸君が議論をすすめるあいだに、一つの問題から別の問題にとびうつったおかげなのである。諸君は、「委

員会」が一網打尽にされること、「組織」が一網打尽にされることを論じはじめ、またひきつづきそれを論じてきたのだが、いまや「底ふかくに」ある運動の「根」を一網打尽にする問題にとびうつってしまったのだ。もちろん、われわれの運動を一網打尽にすることができないのは、ひとえにそれが底ふかくに何十万、何百万という根をもっているからであるが、いまここでの問題は全然そのことではないではないか。「底ふかくにある根」という意味でならば、われわれのあらゆる手工業性にもかかわらず、いまでもわれわれを「一網打尽にする」ことなどできないのだが、それにもかかわらずわれわれはみな、「組織」が一網打尽にされて運動の継承性がまったく破壊されることを嘆いており、また嘆かないわけにはいかないのである。だが、諸君が、組織が一網打尽にされる問題を提起したからには、そしてそれからそれないというのであれば、私は諸君に言おう。一〇人の賢者は一〇〇人の愚者よりもずっと一網打尽にしにくい、と。そして、諸君が「反民主主義的」だとかなんとかいって、どれほど私に反対するよう民衆をけしかけようと、私はこの命題を擁護するであろう。すでに再三指摘したように、組織の方面で「賢者」と言うときには、もっぱら職業革命家——自分をそういう職業革命家にそだてあげる者が学生であろうと労働者であろうと、それはどちらでもよい——という意味に理解しなければならない、そこで、私はこう主張する。（一）確固たる、継承性をもった指導者の組織がないなら、どんな革命運動も永続的なものとはなりえない。（二）自然発生的に闘争に引きいれられて、運動の土台となり、運動に参加してくる大衆が広範になればなるほど、こういう組織の必要はいよいよ緊急となり、またこの組織はいよいよ永続的なものでなければならない（なぜなら、そのときには、あらゆる種類のデマゴーグが大衆の未熟な層をまどわすことがいよいよ容易になるからである）。（三）この組織は、職業的に革命的活動にしたがう人々から主としてなりたたなければならない。（四）専制国では、職業的に革命的活動にしたがい、政治警察と闘争する技術について職業的訓練をうけた人々だけを参加させるようにして、この組織の成員の範囲を狭くすればするほど、この組織を「一網打尽にする」ことはますます困難になり、また（五）労働者階級の出身であると、その他の社会階級の出身であるとを問わず、運動に参加し、そのなかで積極的に活動できる人々の範囲が、ますます広くなるであろう。

私は、わが「経済主義者」、テロリスト、「経済主義的テロリスト*」に、これらの命題を論駁してみるよう、お勧めしたい。いま私はこれらの命題のなかの、最後の二つに立

ちいって論じることにしよう。「一〇人の賢者」と「一〇〇人の愚者」と、どちらが一網打尽にしやすいかという問題は、要するに、最も厳格な秘密活動が必要なときに大衆組織が可能であるかという、さきに検討した問題に帰着する。それなしには政府にたいする確固たる、継承性をたもった闘争などとうてい問題にならないあの高度の秘密性を、広範な組織にあたえることは、けっしてできないであろう。また、いっさいの秘密の機能をできるだけ少数の職業革命家の手に集中するということは、これらの革命家が「みなのかわりに考える」だろうということでも、民衆が運動に活発に参加しないだろうということでもけっしてない。その反対に、こういう職業革命家は民衆によってますますたくさん送りだされてくるであろう。なぜなら、そのときには、民衆は、幾人かの学生と経済闘争をおこなう労働者とが集まって「委員会」をつくるだけでは不十分で、多年にわたって自分を職業革命家にそだてあげることが必要なのだということを知るであろうし、また手工業的なやり方のことばかりでなく、まさにこのようなそだてあげについて「考える」ようになるだろうからである。組織の秘密の機能を集中するということは、けっして運動のいっさいの機能を集中するということではない。「一〇〇人の」職業革命家が非合法文書の仕事の秘密の機能をその手に集中すれば、それによって、この文書への最も広範な大衆の積極的参加は少なくならずに、かえって一〇倍も強まるであろう。そうすることによって、そしてただそうすることによってのみ、非合法文書を読んだり、それに寄稿することが、またある程度までそれを配布することまでが、ほとんど秘密の仕事でないようになることができよう。なぜなら、警察は、何千部もばらまかれる出版物の一部一部について、だらだらした裁判沙汰や行政措置をおこなうことがばかげていて不可能であることを、まもなく理解するだろうからである。そして、これは出版物にかぎったことではなく、デモンストレーションにいたるまで、運動のいっさいの機能にあてはまることである。「一〇〇人」の試練を経た、わが国の警察にひけをとらないほどに職業的修練をつんだ革命家が、仕事のいっさいの秘密な方面——ビラの作成、おおよその計画の作成、各市区、各工場街、各学校にたいする指導者部隊の任命、等々——をその手に集中すれば、それによって、デモンストレーションへの大衆の最も積極的な、また最も広範な参加は、少なくならないばかりか、反対に大いに増大するであろう（私は、私の見解が「非民主主義的」だといって異議をとなえる人がいるだろうことを知っている。だが、このまったく愚かしい反論には、のちほどくわしく答えよう）。最も秘密な機能を革命家の組織に集中す

ることによって、広範な公衆を目あてとした、したがってできるだけきまった形をもたず、できるだけ秘密でない他の多くの組織――労働組合も、労働者の自習サークルや非合法出版物の読習サークルも、他のあらゆる住民層のなかの社会主義的および民主主義的サークルも、その他いろいろなものも――の活動の広さと内容とは、弱められずに、かえって豊富になるであろう。このようなサークル、組合、組織は、いたるところに、きわめて大量に、またきわめて多種多様な機能をもって、存在しなければならない。しかし、それらを革命家の組織と混同して、この両者のあいだの境界を抹消するのは、また、大衆運動に「奉仕する」ためには専門的に社会民主主義的活動に全身をささげた人々が必要であり、そういう人々は忍耐とがんばりを発揮して自分を職業革命家にそだてあげなければならないのだという意識――そうでなくとも信じられないほどぼんやりしてしまっている意識――を、大衆のあいだから消滅させるのは、ばかげた、有害なことである。

＊『スヴォボーダ』を形容する語としては、おそらく、この用語のほうがその一つまえの用語よりも正しいだろう。なぜなら、『革命主義の再生』のなかではテロリズムを擁護し、ここで検討している論文のなかでは「経済主義」を擁護しているからである。意図はたいへんよいが、運がわるい！――これが総じて『スヴォボーダ』について言えることである。きわめてすぐれた素質ときわめてりっぱな意図――しかも結果は混乱なのだ。この混乱は、主として、『スヴォボーダ』が組織の継承性を擁護しながら、革命的思想と社会民主主義的理論との継承性を認めようとしないために生じたものである。職業革命家を復活させようとつとめながら（『革命主義の再生』）、そうするために、第一に刺激的テロルを、第二になるべく「わきから駆りたてられ」ない「中程度の労働者の組織」を提案する（『スヴォボーダ』第一号、六六ページ以下）のは、ほんとうに、自分の家を暖めるために、この家そのものをとりこわして、薪にするようなものである。

そうなのだ、この意識は信じられないほどぼんやりしてしまっているのだ。組織の面でのわれわれの基本的な罪は、われわれが、自分の手工業性によってルーシ〔ロシアの古名〕の革命家の威信を失墜させたことである。理論上の問題ではだらけてふらふらしており、視界は狭く、大衆の自然発生性を引き合いにだしては自分の無気力を弁明し、人民の護民官に似るよりも労働組合の書記に似ており、敵にさえ尊敬をいだかせるような大胆な計画を提出する能力がなく、自分の職業的技術――政治警察との闘争――にかけては未経験で不器用で、――おやおや！　これは革命家などではなく、どこかのみじめな手工業者だ。

どうか実践家のひとりでも、私がこういう辛辣なことば

を吐いたことで、気をわるくすることのないように願いたい。なぜなら、こと訓練不足にかんするかぎり、私は以上のことばをまっさきに自分自身にくわえているのだからである。私はあるサークル[三]で働いていたことがあるが、このサークルははなはだ広範な、包括的な任務をとりあげていた。――ところで、このサークルの成員であったわれわれはみな、有名な格言を言いかえて、われわれに革命家の組織をあたえよ、しからばわれわれはロシアをくつがえすであろう！とも言えるようなこの歴史的時機に、自分たちが手工業者でしかないことを自覚して、胸がいたいほど苦しみ、悩まなければならなかった。そして、それ以来、私は、当時自分の感じたあの焼きつくような恥ずかしさを思いだすおりがますます頻繁になるにつれて、その説教によって「革命家の聖職をはずかしめ」、われわれの任務が、革命家を手工業者に低めるのを弁護することではなくて、手工業者を革命家に引き上げることであるのを理解しないにせ社会民主主義者たちを、いよいよにがにがしく思うようになったのである。

(d)　組織活動の規模

われわれはさきにベ――ヴェから、「ペテルブルグだけでなく、ロシア全土にわたって感じられている、行動に適した革命的勢力の不足のこと」を聞いた。この事実に異論をとなえようとする者は、おそらくないであろう。しかし、問題はこの事実をどう説明するかにある。ベ――ヴェはこう書いている。

「われわれは、この現象の歴史的諸原因の究明に深いりはすまい。ただ次のことだけを言っておこう。それは、長いあいだの政治的反動によって退廃させられ、すでに起こった、また現在進行中の経済的変動のためにばらばらに分解された社会は、革命的活動に適した人物をきわめて少数しか生みださないということ、また労働者階級が労働者革命家を生みだして、非合法組織の隊列をある程度補充していること、だが、このような革命家の数は時代の要求におうじていないということである。工場で日に一一時間半も働く労働者は、その地位からして主として扇動家の機能を果たしうるだけであるし、他方、宣伝や組織非合法文書の配布や複製、ビラの発行などのおもな負担は、やむをえず、ごく少数のインテリゲンツィア勢力に負わされているので、なおさらそうである。」(『ラボーチェエ・デーロ』第六号、三八―三九ページ)

このベ――ヴェの意見には、われわれは多くの点で不賛成であり、とくに、われわれが傍点をつけたことばに不賛

成である。このことばは、ベーーヴェ、がわれわれの手工業性に悩みぬきながらも（いくらかでもものを考えたことのある実践家ならば、だれでもそうであるように）、「経済主義」に締めつけられているため、このがまんのならない状態からぬけだす道を探りあてることができないでいることを、とくにあざやかに示している。そうではないのだ。社会は「事業」に適した人物をきわめて多数生みだすが、彼らの全部を活用する能力がわれわれにないのである。ここで問題となっている点については、われわれの運動がおかれている危機的、過渡的な状態は、次のことばで定式化することができる。——人がいない、しかも人はたくさんいる、と。人はたくさんいるというのは、労働者階級ばかりでなく、ますます多種多様な社会層が、不満をもつ人々、抗議したいと願っている人々、絶対主義との闘争に応分の援助をあたえる用意のある人々を、年ごとにますます数多く生みだしてくるからである。まだだれもかれもが絶対主義をがまんできないものと意識するまでにはなっていないが、しかし、ますます広範な大衆がますます痛切にそう感じるようになっている。また、それと同時に人がいないというのは、指導者がいず、政治的首領がいず、また、どんなにわずかな勢力でもあらゆる勢力に働く場をあたえるような、広範であると同時に統一ある、整然たる活動を組織することのできる、才能ある組織者がいないからである。「革命的組織の成長と発展」は、ベーーヴェも認めているように労働運動の成長に立ちおくれているだけでなく、さらに人民のすべての層のあいだの一般民主主義的運動の成長にも立ちおくれているのである（もっとも、いまではおそらくベーーヴェも、彼の結論にたいするこの補足を認めるであろう）。革命的活動の規模は、運動の広い自然発生的な基底にくらべてあまりにも狭く、「雇い主と政府とにたいする経済闘争」というみすぼらしい理論によってあまりにも締めつけられている。だが、いまでは、政治的扇動家だけでなく、社会民主主義的組織者も、「住民のすべての階級のなかにはいって」ゆかなければならないのである。*そして、社会民主主義者がその組織活動の幾千のこまごました機能を、種々さまざまな階級に属する個々の人たちに分担させることができるということは、おそらく実践家のだれひとりとして疑わないであろう。専門化が足りないことは、われわれの技術の最大の欠陥の一つであって、ベーーヴェがきわめて痛切に、またきわめて正当に訴えているとおりである。共同事業の個々の「作業」がこまかくなればなるほど、この作業を果たす能力のある（そして大多数の場合に職業革命家となるにはまったく適していない）人物を、ますます多く発見できるし、警察がこれらの「局

部的働き手」全部を「一網打尽にする」ことはますます困難になり、なにか些細なことで人をつかまえては、国庫の「保安」費支出に釣り合うような「事件」にでっちあげることは、ますます困難になるであろう。そして、われわれでもわれわれは、五年ばかりのあいだにこの点で起こったに協力をおしまない人々の数についていえば、すでに前章巨大な変化のことを指摘しておいた。しかし他方からいえば、これらの小さい粒子を全部一つにまとめるためにも、また運動の機能を細分しながらもこの運動そのものは細分しないようにするためにも、さらに、こまかい機能の執行にあたる人々に自分の仕事の必要性と意義とにたいする信念——そういう信念がなければ、彼らはけっして仕事をしないだろう**——をいだかせるためにも、——すべてこうしたことのために、ほかならぬ試練を経た革命家の強固な組織が必要なのである。こういう組織があるなら、その組織が秘密であればあるほど、党の力にたいする信念はますます強まり、ますます広範にひろまるであろう。——だが、周知のように、戦争では、味方の軍隊ばかりでなく、敵にも、またいっさいの中立分子にも、味方の力にたいする信念をいだかせるのが、なにより重要なのだ。好意的中立がときには戦局を決定することもありうる。確固たる理論的基礎に立って、社会民主主義的機関紙を駆使するこのような組織があるなら、運動に引きよせられた多数の「外部の」分子のために運動が軌道からそらされることを恐れるにはおよばないであろう(反対に、手工業性がはびこっている今日こそ、多くの社会民主主義者が『クレード』の線に沿って引っぱられており、自分だけで社会民主主義者のつもりでいるのが見られるのである)。一言でいえば、専門化は必然的に集中化を前提し、また逆に専門化によって集中化が絶対の必要になるのである。

* たとえば、最近、軍人のあいだに民主主義的精神が疑いもなくさかんになってきたことが認められるが、これは、一部は、労働者や学生のような「敵」と市街戦をおこなう場合が頻繁になってきた結果である。そこで、手持ちの勢力がそれを許すようになりしだい、われわれは、ぜひとも兵士や将校のあいだでの宣伝扇動や、わが党に所属する「軍人組織」の創設に、最も真剣な注意をはらわなければならない。

** 私は、ある同志からこういう話を聞いたことを記憶している。社会民主党を援助する気持ちがあり、また実際にも援助してきたある工場監督官が、彼の供給する「情報」がはたしてほんとうの革命的中央部に届くのか、また彼の援助がどの程度必要なのか、彼のささやかな、小さな奉仕を活用する可能性がどの程度にあるのか、わからない、と言って、ひどくこぼしていたということである。もちろん、どの実践家でも、われわれの手工業性のためにわれわれが同盟者を失った同様の事例を、一つならず知っている。そして、一つひとつは「小

さく」ても集まればはかりしれない値うちのあるこういう奉仕を、工場方面の職員や役人ばかりでなく、郵便、鉄道、税関、貴族界、僧職界、その他警察や宮廷にいたるあらゆる方面の職員や役人が、われわれに提供できるはずだし、また提供するだろう！　もしわれわれが真の党、革命家の真に戦闘的な組織をすでにもっていたなら、われわれはこういう「補助者」を全部あらいざらい矢おもてにさらしたり、いつもかならず「非合法活動」の中核のなかにいそいで彼らを引きいれたりしないで、逆に、彼らをとくにたいせつにし、また学生のなかには、「短期の」革命家としてよりも役人の「補助者」としてのほうがいっそう多く党に貢献できるものが数多くいることを念頭において、こういう機能を果たす人々を専門的に養成さえしたであろう。しかし、――いま一度繰りかえして言っておくが――このような戦術は、積極的勢力の不足を感じていない、すでに完全に確立された党だけが、適用する権利をもっているのだ。

しかし、専門化がきわめて必要なことを、あれほどみごとに描きだしたべ――ヴェ自身が、右に引用した所論の後半部では、われわれの見るところでは、この必要を十分に評価していない。労働者出身の革命家の数が足りない、と彼は言う。これはまったく正しい。そして、われわれは、この「現地観察者の貴重な報告」が、社会民主党の今日の危機の原因、したがってまたこの危機を克服する手段についてのわれわれの見解を完全に確証していることを、あらためて強調する。総じて革命家が大衆の自然発生的高揚に立ちおくれているだけでなく、労働者革命家さえ、労働者大衆の自然発生的高揚に立ちおくれているのである。そして、この事実がまったく一目瞭然に確証していることは、労働者にたいするわれわれの義務の問題を論じるさいにしょっちゅうもちだされてくるあの「教育学」が、「実践」の見地からみてさえばかげているばかりか、政治的に反動的だということである。この事実は、党活動の面でインテリゲンツィア革命家と水準を同じくする労働者革命家の養成を助けることが、われわれの第一の最も緊急な義務であることを、証明している（われわれが、党活動の面でというのは、これ以外の方面で労働者が同じ水準に到達することは、必要ではあっても、けっしてこれほどたやすくはなく、これほど緊急でもないからである）。だから、労働者を革命家に引き上げることを主要な眼目とすべきであって、けっして、「経済主義者」がやりたがっているように、自分のほうからぜひとも「労働者大衆」のところにおりていったり、『スヴォボーダ』がやりたがっているように、ぜひとも「中程度の労働者」のところにおりてゆく（この点で、『スヴォボーダ』は「経済主義的」「教育学」の二年生に進級しているわけだ）ことを主眼としてはならないのである。労働者のためにわかりやすい文

献が必要であり、とくべつ遅れた労働者のためにはとくべつわかりやすい（ただし、もちろん、道化たものではなく）文献が必要だということを、私は否定しようとはさらさら思わない。しかし、私を憤慨させるのは、こういうふうに政治の問題や組織の問題にたえず教育学を引きこんでくるやり方である。「中程度の労働者」のために心をくばっている諸君、君たちが労働者の政治や労働者の組織について語りだすまえに、きまって身をかがめたがるのは、実質上、むしろ労働者を侮辱するものではないか。でも、重大な事柄について語るときには、背をまっすぐにのばして語りたまえ、そして教育学のことは、政治家や組織者にではなく、教育者にまかせたまえ！　インテリゲンツィアのなかにだって、やはり先進分子と「中程度の人々」と「大衆」とがいるではないか？　インテリゲンツィアのためにも同様にわかりやすい文献が必要であることは、みなが認めており、また現にそういう文献が書かれているではないか？　しかし、大学生や中学生の組織化を論じる論文のなかで、その筆者が、なにか一大発見でもしたかのように、「中程度の学生」を組織することが第一に必要であると、くどくど繰りかえして述べはじめる場合を、まあ考えてみたまえ。そのような筆者は嘲笑されるにきまっているし、またそうされても自業自得というものである。人々は彼にむかってこう言うだろう。もし君が組織上の考えをもちあわせているなら、それをわれわれに告げたまえ。そうすれば、われわれは、われわれのなかのだれが「中程度の人人」で、だれがそれ以上で、またたれがそれ以下かを、自分で吟味しよう。だが、もし君が自分自身の組織上の考えをもちあわせていないのだったら、君が「大衆」や「中程度の人々」やについてどんなにまくしたてても、退屈なだけであろう。「政治」や「組織」の問題は、問題そのものがすでにきわめて重大なので、まったく真剣なやり方でなければそれについて語ってはならないことを、理解したまえ。これらの問題について彼らと会話を始めることができるように、労働者を（そしてまた大学生や中学生を）訓練することはできるし、また訓練しなければならないが、いったんこれらの問題について語りはじめたら、ほんとうの答をあたえたまえ。「中程度の人々」やら「大衆」やらのところまであともどりしてはならない。だじゃれや空文句でお茶をにごしてはならない、と。*

* 『スヴォボーダ』第一号所載の論文『組織』の六六ページに言う。「労働者の大群の重々しい足どりは、ロシアの労働」（ぜひとも大きい文字でなければいけないのだ！）「の名で提出されるいっさいの要求を打ちかためるであろう。」――しかも、この同じ筆者が叫んで言う。「私はけっしてインテリ

ゲンツィアに敵意をいだくものではない。しかし」……（この「しかし」は、シチェドリーンが、「耳は額よりうえへは伸びない！」という文句に翻訳した、あの「しかし」である）……「しかし、人が私のところにやってきて、たいそう美しく、すばらしい事柄をしゃべりたてたうえ、このものは（というと、その人のことか？）美しいし、ほかにもいろいろよい点があるから、これを受けいれるように、と要求するときには、私はいつでもひどく腹がたつ。」（六二）いかにも、私もご同様に、それには「いつでもひどく腹がたつ。」……

労働者革命家も、自分の仕事について完全な修業をつむためには、やはり職業革命家にならなければならない。だから、ベ——ヴェが、労働者は工場で日に一一時間半も働くので、残りの（扇動を除いた）革命的機能の「おもな負担は、やむをえず、ごく少数のインテリゲンツィア勢力に負わされている」と言っているのは、正しくない。事態がそういうふうになっているのは、けっして「やむをえない」からでなく、われわれの立ちおくれによるものであり、すべて能力のすぐれた労働者を助けて職業的な扇動家、組織者、宣伝家、配布者などにならせることが自分の義務であるのを、われわれが自覚していないためである。この点でわれわれは、とくにいたわってそだて、つちかわなければならないものを、たいせつにすることを知らないで、自分の勢力をまったく恥ずべきやり方で濫費しているのである。ドイツ人を見たまえ。彼らはわれわれの百倍も多くの人手をもっているが、しかし彼らは、「中程度の人々」から は、真に有能な扇動家等々はけっしてそんなに頻繁に生まれてこないことを、よく知っている。だから、彼らは、有能な労働者と見れば、すぐさまその能力を十分に発揮し、十分にはたらかせることのできるような条件のもとに、彼をおこうとつとめる。彼は職業的扇動家とされる。その活動舞台をひろげて、一つの工場からその職業全体へ、一つの地方から国全体へとおよぼしてゆくようにはげまされる。彼は、自分の職業について経験と手腕を獲得し、その視野と知識をひろげる。他の地方や他の党のすぐれた政治的指導者を身近に観察する。自分でもこれと同じ水準に到達しようとつとめ、また、労働者社会についての知識と、社会主義的信念の清新さと、それなしにはプロレタリアートがその敵のみごとな訓練を経た隊列にたいして頑強な闘争をおこなうことのできないあの職業的修練とを、一身に結びつけようとつとめる。こういうふうにして、そしてこういうふうにしてはじめて、ベーベルやアウアーのような人々が労働者大衆のうちから送りだされてくるのである。しかし、政治的に自由な国ではかなりの程度までひとりでにおこなわれることでも、わが国では、われわれの諸組織がこれを系統的に遂行しなければならない。いくらかでも才能

があって「前途有望な」労働者出身の扇動家を、工場で一日に一一時間も働かせてはならない。われわれは、彼の生活を党の資金でまかない、適当なときに非合法状態に移れるようにしてやり、その活動場所を変えてやるように心がけなければならない。というのは、そうしなければ、彼は多くの経験を身につけることができないし、その視野をひろげることも、憲兵との闘争にせめて数年もちこたえることも、できないだろうからである。労働者大衆の自然発生的高揚がいっそう広くまた深くなればなるほど、労働者大衆は、才能ある扇動家だけでなく、才能ある組織者や宣伝家や、よい意味での「実践家」(これは、たいがいはいくらかロシア式にずぼらで、ぐずな、わが国のインテリゲンツィアのあいだには、非常に少ない)を、ますます大勢送りだしてくる。われわれが、専門的訓練をうけ長年の修業を経た労働者革命家たち(そのうえ、もちろん「あらゆる兵種の」革命家たち)の部隊をもつときには、世界のどんな政治警察もこの部隊には歯がたたない。なぜなら、全幅的に革命にささげた人々からなるこの部隊は、最も広範な労働者大衆の同じように全幅的な信頼をうけるだろうからである。そして、われわれが、労働者にも「インテリゲンツィア」にも共通の、この職業革命家としての修業の道へ労働者を「駆りたてる」ことが少なすぎ、労働者大衆や「中程度の労働者」にはなにが「とりつきやすい」かなどという愚論によって労働者を引きもどしている場合が多すぎるのは、まさしくわれわれの罪である。

これらの点でも、ほかのいろいろな点でもそうであるように、組織活動の規模が狭いことは、われわれの理論やわれわれの政治的任務がせばめられていることと不可分の(たとえ大多数の「経済主義者」や駆けだしの実践家はそれを意識していないにしても)関係があることは、疑いをいれない。自然発生性の前に拝跪していることが、大衆にとって「とりつきやすい事柄」から一歩でも離れることにたいするある種の恐怖、大衆の最も身近な直接の要求へのたんなる奉仕をこえて高くのぼりすぎることにたいする恐怖を、生みだすのだ。諸君、恐れたもうな! われわれは組織の点ではきわめて低いところにいるので、高くのぼりすぎるかもしれないなどと考えること自体ばかげていることを、忘れないでくれたまえ!

(e)「陰謀」組織と「民主主義」

ところで、われわれのあいだには、「生活の声」にはなはだ敏感で、まさにこの声をなによりも恐れていて、ここで述べているような見解をとるものを「人民の意志主義」だとか、「民主主義」を理解していない、などといって、

非難する人々がたくさんいる。そこで、これらの非難に立ちいって論じなければならないが、『ラボーチェエ・デーロ』もこの非難の尻馬に乗ったことはいうまでもない。

ペテルブルグの「経済主義者たち」が『ラボーチャヤ・ガゼータ』をさえ人民の意志主義だといって非難したこと（これは、同紙と『ラボーチャヤ・ムィスリ』とをくらべてみれば、なるほどと了解されることである）を、本論の筆者はたいへんよく知っている。だから、『イスクラ』の発刊後まもないころに、某都市の社会民主主義者たちが『イスクラ』を「人民の意志派」の機関紙だとよんでいるということを、ある同志から知らされたとき、われわれはすこしも驚かなかった。もちろん、この非難は、われわれにとってはむしろお世辞であった。というのは、まともな社会民主主義者で、経済主義者たちから、人民の意志主義だという非難をうけなかったものが、いったいあったろうか？

この非難は、二とおりの誤解から生まれている。第一に、われわれのあいだでは革命運動の歴史がろくに知られていないために、ツァーリズムにたいして断固たる戦争を布告する戦闘的な中央集権的組織を考えたりすると、なんでも「人民の意志主義」だとよばれるのである。しかし、七〇年代の革命家がもっていたみごとな組織はわれわれすべてが模範としなければならないものであるが、あの組織をつくりだしたのは、人民の意志派では全然なく、土地と自由派であり、これが黒い割替派（チョールヌィ・ペレデール）と人民の意志派とに分裂したのである。こういうわけだから、戦闘的な革命組織を、なにか人民の意志派に特有なもののように考えるのは、歴史的にも論理的にもばかげている。なぜなら、どういう革命的潮流にせよ、実際に真剣な闘争を考えるかぎり、このような組織なしにはやっていけないからである。人民の意志派の誤りは、彼らが、不満をいだくすべての人々を自分たちの組織に引きよせようとつとめ、そしてこの組織に専制との断固たる闘争の方向をとらせようとつとめたことにあったのではない。そのことこそ、彼らの大きな歴史的功績だったのである。彼らの誤りは、彼らが、本質上全然革命的理論でなかった理論をよりどころとしたことに、そして自分たちの運動を、発展しつつある資本主義社会内部の階級闘争と不可分に結びつけることを知らなかったか、またはそうすることができなかったことにあった。そして、大衆的な自然発生的労働運動が起こってくれば、土地と自由派がもっていたのと同じようなすぐれた革命家の組織、いな、くらべものにならないほどさらにすぐれた革命家の組織をつくりだす義務をわれわれに免除してくれるかのように考える意見は、マルクス主義のこのうえない

無理解（あるいはマルクス主義の「ストルーヴェ主義」的な「理解」）からしか生まれえなかったのである。事実は、反対に、この運動はまさにこの義務をわれわれに負わせるのだ。なぜなら、プロレタリアートの自然発生的な闘争は、強固な革命家の組織に指導されないあいだは、プロレタリアートの真の「階級闘争」にはならないからである。

第二に、政治闘争を「陰謀的に」解する見解に反対している人が多い。そして、見うけるところ、ベ・クリチェフスキー（『ラボーチェエ・デーロ』第一〇号、一八ページ）もそのひとりのようである。われわれは、政治闘争を陰謀にせばめることにたいしては、いままでも敵対してきたし、将来ももちろんつねに敵対するであろう。* しかし、いうまでもないことだが、これは、強固な革命家の組織の必要を否定することを意味するものでは全然なかった。たとえば、ここの注にあげた小冊子のなかでも、政治闘争を陰謀に帰着させることに反対して論戦しているのと同時に、「絶対主義に断固たる打撃をくわえるために、「蜂起」にでも、あらゆる「他の攻撃方法」にでも「うったえる」ことのできるほど強固な組織が、（社会民主主義者の理想として）描かれている。** 形式からすれば、専制国の場合には、このような強固な革命的組織は「陰謀」組織とよぶこともできる。というのは、フランス語の「コンスピラシオン」はロシア語の「ザーゴヴォル」（「陰謀」）にあたる語であるが、このような組織には秘密性（コンスピラチーヴノスチ）が最大限に必要だからである。このような組織には、秘密性はまったく不可欠の条件であって、他の条件（成員数、成員の選抜、機能、その他）はみな、これに適応させられなければならない。だから、われわれ社会民主主義者が陰謀組織をつくろうとしていると非難されはしないかと恐れるのは、このうえない素朴さというものだろう。「経済主義」の敵であるすべての人にとっては、この非難も、「人民の意志主義」だという非難と同様に、お世辞としてうけとられなければならないのである。

＊『ロシア社会民主主義者の任務』、二一ページ、ペ・エリ・ラヴローフにたいする論戦を参照せよ。[二五]

＊＊『ロシア社会民主主義者の任務』、二三ページ。[二六] ついでながら、『ラボーチェエ・デーロ』は、自分で言っていることがわからないのか、または「風向きしだい」でその見解を変えているのか、どちらかであることを示す、いま一つの例証がここにある。『ラボーチェエ・デーロ』第一号に、傍点つきで次のような句が印刷されている。——「この小冊子の上述の要旨は、『ラボーチェエ・デーロ』の編集綱領と完全に一致する。」（一四二ページ）ほんとうにそうか？　大衆運動にたいして専制の打倒を第一の任務として提起することは不可

能だという見解が、『任務』と一致しているだろうか？「雇い主と政府とにたいする経済闘争」の理論が、それと一致しているだろうか？段階論がそれと一致しているだろうか？「一致」ということをこんなに独特に解釈する機関誌について、原則上の確固さが問題になりうるかどうか、読者の判断におまかせしよう。

次のように言ってわれわれに異議をとなえる人もあるだろう。秘密活動のいっさいの糸をその手に集中する、このような強力で、厳格に秘匿された組織、必然的に中央集権的となるほかない組織は、あまりにもやすやすとはやまった攻撃にとびだす可能性があり、また政治的不満の増大によって、労働者階級その他のあいだの動揺や憤激の強さによってそれが可能かつ必然とならないうちに、軽率に運動を激化させる可能性がある、と。これにたいしては、われわれはこう答えよう。抽象的にいえば、戦闘組織が軽率な戦闘にみちびく可能性があること、そしてそういう戦闘が違った条件のもとでならけっして不可避でない敗北をまねく可能性があることは、もちろん、否定できない。しかし、このような問題で抽象的な議論にとどまることはできない。というのは、どんな戦闘も敗北の抽象的可能性をふくんでおり、戦闘を組織的に準備すること以外にこの可能性を少なくする手段はないからである。しかし、問題を今日のロシアの諸条件という具体的な基盤において考えるなら、まさに運動に確固さをあたえ、運動が軽率な攻撃に出る可能性を未然に防止するためにこそ、強固な革命的組織が絶対に必要だという、明確な結論をくださざるをえないであろう。まさにこのような組織がなく、しかも革命運動が急速に自然発生的に成長しつつある現在においてこそ、相反する両極端（それは当然予想されるように「一致する」）がすでに認められる。すなわち、あるときは、まったく根拠を欠いた「経済主義」と穏健さの説教、あるときは、同じように根拠を欠いた「刺激的テロル」が見られる。後者は、「発展し強化しつつはあるが、まだ終点よりは始点のほうに近い地点にある運動において、人為的にそれの終結の徴候を呼びおこそう」（ヴェ・ザスーリチ、『ザリャー』第二―三号、三五三ページ）とつとめるものである。そして、『ラボーチェエ・デーロ』の実例は、この両極端の双方に降伏する社会民主主義者もすでにいることを示している。といこういう現象が起こるのは、不思議なことではない。というのは、ほかのいろいろな原因を別にしても、「雇い主と政府とにたいする経済闘争」などに革命家はけっして満足しないだろうし、相反する極端が、あるときにはここ、あるときにはそこと、つねに発生するだろうからである。ただ確固として社会民主主義的政治を実行し、いわばあらゆ

る革命的な本能と意欲とを満足させる中央集権的な戦闘組織だけが、運動が軽率な攻撃に出るのを未然に防止し、勝算ある攻撃を準備することができるのである。

さらに、ここに述べている組織観は、「民主主義の原則」に反していると言って、われわれに異議をとなえる人もあるだろう。まえの非難がその起原からいってロシア特有のものであるのと同程度に、この非難は、外国特有の性格をもっている。だから、在外の組織（「ロシア社会民主主義者同盟」）がはじめて、自分の編集局にたいして、ほかのいろいろな指令にくわえて次のような指令をあたえることができたのだ。

「組織原則。社会民主党を首尾よく発展させ、統合するためには、その党組織の広範な民主主義的原則を強調し、発展させ、そのためにたたかわなければならない。これは、わが党の隊列内に反民主主義的傾向が現われたことからみて、とくに必要である。」（『二つの大会』、一八ページ）

『ラボーチェエ・デーロ』がまさにどういうやり方で『イスクラ』の「反民主主義的傾向」とたたかうかについては、次の章で見ることにしよう。そしていまは、「経済主義者」が提出しているこの「原則」を、いますこしくわしく調べてみよう。「広範な民主主義的原則」というなかには、次の二つの必要条件がふくまれるということには、おそらくだれも異存がないであろう。すなわち、第一に完全な公開性、第二にすべての職務の選挙制、である。公開性なしに、しかもその組織の成員だけに限られない公開性なしに、民主主義を論じるのは、滑稽であろう。われわれは、ドイツの社会主義党の組織を民主主義的だと言う。というのは、この党では、党大会の会議をもふくめて、万事が公然とおこなわれているからである。だが、自己の成員以外のすべての人々にたいして秘密のヴェールで閉ざされているような組織を、だれも民主主義的だとは言わないだろう。そこで、おたずねしたいが、秘密の組織にとっては「広範な民主主義的原則」の基本的条件が実行できないのに、この原則をかかげることにどんな意味があるのか？「広範な原則」というのは、聞こえがよいだけの空文句だということがわかる。それればかりではない。この文句は、組織の面での当面の緊要な任務をまったく理解していないことを証明している。わが国の革命家の「広範な」大衆のあいだにひろく見られる秘密性の欠如がどんなにはなはだしいものかは、だれでも知っている。われわれはさきに、ベ——ヴェがこの点を痛切に訴えて、まったく正当にも「成員の厳選」（『ラボーチェエ・デーロ』第六号、四二ページ）を要求していることを見た。ところが、そこへ「現

実感覚」をもっていると自慢する人々が現われて、こういう事情のもとにありながら、最も厳格な秘密活動をおこない、成員を最も厳密に（したがってもっと狭い範囲で）選ぶ必要を強調するのでなく、「広範な民主主義的原則」を強調するのだ！　これこそ見当ちがいというものだ。

民主主義の第二の標識である選挙制についても、事態はこれよりましではない。この条件は、政治的自由のおこなわれている国々では自明のことである。「党綱領の諸原則を承認し、その力におうじて党を支持する人は、すべて党員と認められる」——と、ドイツ社会民主党の組織規約の第一条に書かれている。そして、劇場の舞台が観客の眼にさらされているように、政治舞台全体がすべての人の眼にさらされているのだから、あるひとがこれを承認しているか承認していないか、支持しているか反対しているかということは、新聞からでも人民集会からでも、だれにでもわかる。これこれの政治家が、これこれのスタートをきり、これこれの進化を経て、その生涯の難局にあたってこれこれの仕方で力量をあらわし、総じてこれこれの資質においてすぐれているということは、だれもが知っていることであり、だから当然に、全党員が、事情に精通したうえで、そのような活動家をある党職務に選出するとも選出しないとも、きめることができる。党人がその政治舞台においてとる一挙一動が世人の全般的（文字どおりの意味で）監督のもとにおかれている結果、生物学で「適者生存」とよばれるものをもたらす自動的な機構がつくりだされる。完全な公開性と選挙制と全般的監督との「自然淘汰」によって、次のような状態が保障される。すなわち、各活動家がけっきょく「その適所に」おちつき、自分の力量と才能とに最も適した仕事にとりくみ、誤りをおかしたときにはその結果をことごとく身をもって味わい、また彼がどれだけ誤りを自覚し、それを避ける能力をもっているかをすべての人の眼のまえで証拠だてる、という状態である。

こういう情景をわが国の専制の枠にはめこめるものかどうか、まあやってみたまえ！　わが国で、「党綱領の諸原則を承認し、その力におうじて党を支持する」人々のすべてが、秘密活動にしたがう革命家の一挙一動を監督するというようなことが、考えられるであろうか？　革命家が、仕事の利益のために、この「すべての人々」の一〇人中の九人にたいして自分の正体を隠す義務を負っているときに、そのすべての人々が秘密活動にしたがう革命家のだれかれを選挙するというようなことが、考えられるであろうか？　『ラボーチェエ・デーロ』が述べたてている大言壮語の真の意味をすこしでも考えてみれば、専制の闇のなかで、憲兵による引っこぬきが広くおこなわれているところでの党

組織の「広範な民主主義」が、空虚で有害な遊びごとでしかないことがわかるだろう。これが空虚な遊びごとだと言うのは、いまだかつて革命的組織で実際に広範な民主主義を実行したものは一つもなく、また自分ではどんなにそうしたくても、実行できないからである。これが有害な遊びごとだと言うのは、もし「広範な民主主義的原則」を実際に実行しようと試みるなら、警察に広範な一斉検挙をやりやすくしてやるだけで、現在はびこっている手工業性を永続させ、自分を職業革命家にそだてあげてゆくという真剣な、緊急な任務から、選挙制度についてのくわしい「紙上の」規約を書く仕事のほうへ、実践家の考えをそらせる結果になるからである。ほんとうの、生きた仕事を見つける可能性をもたない人々が寄り集まる場合のまれでない国外でこそ、あちこちで、とりわけいろいろな小グループのなかで、こういう「民主主義遊び」などがひろがることができたのである。

革命的事業における民主主義というような、もっともらしい「原則」をもちだす『ラボーチェエ・デーロ』のお好みのやり方が、そのじつ、どんなにみっともないものであるかを読者に示すために、われわれは、またもや証人を引き合いにだすことにしよう。この証人というのは、ロンドンで発行されている雑誌『ナカヌーネ』の編集者イェ・セレブリャコーフであるが、これは『ラボーチェエ・デーロ』には非常な偏愛をよせ、プレハーノフと「プレハーノフ派」には非常な憎悪をいだいている人である。『ナカヌーネ』は、在外「ロシア社会民主主義者同盟」の分裂を論じた諸論文で、断固として『ラボーチェエ・デーロ』に味方し、プレハーノフにやくざな文句を雨あられのようにあびせかけてくってかかった。(一九) それだけに、この問題についてはこの証人はわれわれにとってますます貴重である。『ナカヌーネ』第七号（一八九九年七月）所載の論文『労働者自己解放団の檄について』のなかで、イェ・セレブリャコーフは、「真剣な革命運動において、うぬぼれだとか、優位だとか、いわゆるアレイオパゴス(二〇)だとかいう」問題をもちだすのは、「不謹慎なこと」であると指摘し、とりわけ次のように書いている。

「ムィシキン、ロガチョーフ、ジェリャーボフ、ミハイロフ、ペロフスカヤ、フィグネルなどは、指導者をもって自任したことは一度もなかったし、だれかが彼らを選出したのでも任命したのでもなかった。それでも、彼らは実際に指導者であった。というのは、宣伝の時期にも、政府との闘争の時期にも、彼らは最も困難な仕事を引きうけ、最も危険な場所におもむき、彼らの活動こそ最も実り多いものだったからである。そして、優位は、

彼らが望んだ結果得られたのではなく、彼らの知力、彼らの精力と献身とにたいして周囲の同志たちが寄せた信頼の結果だったのだ。運動を専断に支配しかねないなにかのアレイオパゴスを恐れるのは（もし恐れていないなら、なんだってそれについて書くのか）、あまりにも素朴なことである。だれがいったいそんなものの言うことをきくだろうか？」

読者におたずねするが、「アレイオパゴス」と「反民主主義的傾向」とは、どこが違うのか？　また『ラボーチェエ・デーロ』の「もっともらしい」組織原則が、これとまったく同じように素朴でもあり、不謹慎でもあることは、明白ではないだろうか？　これが素朴だというのは、「彼らの知力、精力、献身にたいして周囲の同志たちが信頼を」寄せていないかぎり、「アレイオパゴス」なり「反民主主義的傾向」をもった人々なりの言うことをきくものは、全然いないだろうからである。不謹慎だというのは、これが、ある人々の虚栄心、別な人々の、われわれの運動の実情についての無知、さらに別な人々の訓練不足と革命運動の歴史についての無知をあてこんだ、デマゴギー的な攻撃だからである。われわれの運動の活動家にとって唯一の真剣な組織原則は、次のものでなければならない。すなわち、最も厳格な秘密活動、成員の最も厳格な選択、職業革命家の訓練である。これらの特質がそなわっているなら、「民主主義」以上のあるものが、すなわち革命家たちのあいだの完全な同志的信頼が、保障される。そして、この、より以上のあるものこそ、われわれにとって絶対に必要なものである。なぜなら、わがロシアでこれを民主主義的な全般的監督で代用させることは、まったく問題にならないからである。そして有効な「民主主義的」監督が不可能なら、革命的組織の成員はなんの監督もうけないことになると考えるなら、大きなまちがいであろう。彼らは、民主主義（完全に信頼しあっている同志たちの緊密な中核の内部の民主主義）の遊びごとふうの形式を考えるひまこそないが、自分の責任を非常に生きいきと感じており、そのうえ、経験によって、真の革命家の組織は不適当な成員を取りのぞくためにはどんな手段をも辞さないであろうことを知っている。そのうえ、われわれには、ロシアの（および国際的な）革命家社会のかなりに発達した、また長い歴史を経た世論があって、同志関係の義務にすこしでもはずれる者を容赦なく厳罰に処している（そして、「民主主義」、つまり遊びごとふうの民主主義ではない真の民主主義は、部分が全体にふくまれるように、この同志関係の概念にふくまれているではないか！）。もし諸君がすべてこういうことを考慮するなら、「反民主主義的傾向」なるものについての

こうした論議や決議から、国外での大将遊びのかびくさいにおいが立ちのぼっていることに、気がつかれるであろう！

なお言っておかなければならないことは、こうした論議のもう一つの源泉である素朴さもまた、民主主義とはなにかについてのぼんやりした考え方に由来するということである。イギリスの労働組合を論じたウェッブ夫妻の著書に、「原始的民主主義」というおもしろい一章がある。そのなかで筆者たちは、イギリスの労働組合が生まれた当初の時期には、組合の運営上の仕事をなにもかも全員でやることが民主主義の欠くべからざるしるしだと労働者たちが考えていたことを、物語っている。つまり、いっさいの問題が全組合員の投票できめられたばかりでなく、いろいろな職務も全組合員が順番に執行していたのである。民主主義についてのこのような考え方がばかげたものであり、一方には代議機関が、他方には職業的な役員が必要だということを、労働者たちが悟るまでには、長い歴史的経験が必要であった。組合費の払込額と扶助金の給付額との比率の問題は、民主的投票だけできめることのできるものではなく、保険事業の専門家の意見をも聞く必要があるということを、労働者たちが悟るまでには、何回か組合金庫の破産のうき目をなめなければならなかった。さらに諸君が、議会制度と人民立法とを論じたカウツキーの著書(一九)をひもとくなら、このマルクス主義理論家の結論が、「自然発生的に」団結した労働者の多年の実践の教訓と一致していることが、おわかりになるであろう。カウツキーは、民主主義についてのリッティングハウゼンの原始的な考え方に断固として反対し、「人民の新聞は直接人民の手で編集されるべきだ」と民主主義の名において要求することをはばからない人々を嘲笑して、社会民主党がプロレタリアートの階級闘争を指導するためには職業的なジャーナリストや議員などが必要であることを証明し、また、直接の人民立法ということが今日の社会ではきわめて条件的にしか適用できないことを理解できないで、「人気とり」にこれをほめそやす「無政府主義者や文筆家の社会主義」を攻撃している。

われわれの運動にくわわって実践活動をしたことのある者は、学生青年や労働者の大衆のあいだに、民主主義についての「原始的な」見解がどんなに広くひろまっているかを知っている。この見解が規約や文書のなかにまではいりこんでいるのは、不思議ではない。ベルンシュタイン流派の「経済主義者たち」は、彼らの規約に次のように書いている。「第一〇条、組合組織全体の利害にかんする事柄は、すべて全組合員の多数決によってきめられる。」テロリスト流派の「経済主義者たち」は、前者をおうむがえしにし

て言う。「委員会の決定は、すべてのサークルに回付され、そののちはじめて有効な決定とされなければならない。」（『スヴォボーダ』第一号、六七ページ）一般投票を広範におこなえという要求が、組織全体を選挙制の原則にもとづいて建設せよという要求につけくわえて提出されていることに留意されたい！　もちろん、われわれは、このことで実践家たちを責めようなどとは、すこしも考えていない。彼らには、真に民主主義的な組織の理論と実践を知る機会が、あまりにも乏しかったからである。しかし、指導的役割をあえて誇称する『ラボーチェエ・デーロ』が、こういう事情のもとで、広範な民主主義的原則についての決議をつくるにとどめているとすれば、それをたんなる「人気とり」と言わずにいられるであろうか？

(f)　地方的活動と全国的活動

ここに述べている組織計画にたいして、これは非民主主義的で陰謀的な性格をおびたものだという見地からくわえられた反論がまったく根拠のないものであるにしても、なおもう一つ、きわめてしばしば提出され、くわしく調べるに値うちのある問題が、残っている。それは、地方的活動と全国的活動との相互関係の問題である。こういう懸念が表明されている。中央集権的な組織をつくったりすると、重心が前者から後者に移動させられることにならないだろうか？　そうすると、われわれと労働者大衆との結びつきの堅固さや、総じて地方的扇動の確固さを弱め、運動を害することにならないだろうか？　と。これにたいしては、われわれはこう答えよう。近年のわれわれの運動の欠点は、まさに、地方の活動家たちがあまりに地方的活動に没頭しすぎていることにあるのだ。だから、重心をいくらか全国的活動のほうに移動させることが絶対に必要である、このような重心の移動は、われわれの結びつきの堅固さをも、われわれの地方的扇動の確固さをも、弱めるどころか強めるであろう、と。中央機関紙と地方機関紙との問題について考えてみよう。われわれが新聞の事業を取りあげるのは、はるかに広範で多面的な革命事業全般を例証するための一例としてにすぎないことを、読者は忘れないようにしていただきたい。

大衆運動の第一期（一八九六—一八九八年）に、全国的な機関紙——『ラボーチャヤ・ガゼータ』を発行しようという試みが、地方の活動家によってなされた。その次の時期（一八九八—一九〇〇年）には、運動は巨大な前進をなしとげるが、指導者たちの注意は地方機関紙にまったく吸収されてしまう。これらの地方機関紙を全部集計してみると、おおよそ月に一号ずつの割合で新聞が出たことになる

のがわかるだろう。* これこそ、われわれの手工業性を一目瞭然と例証するものではないだろうか？ これこそ、われわれの革命的組織が運動の自然発生的な高揚に立ちおくれていることを、明白に示すものではないだろうか？ もしこれと同じ号数の新聞が、ばらばらの地方的諸グループによってではなく、単一の組織によって発行されたとしたら、われわれは莫大な労力を節約できたばかりか、さらに、われわれの活動にはるかに多くの確固さと継承性とを確保できたであろう。こういう簡単な理屈を、ほとんど地方機関紙の仕事だけを積極的にやっている（残念なことに、いまでも大多数の場合にこういうふうである）実践家たちも、この問題で驚くべきドン・キホーテぶりを発揮している政論家たちも、見おとしている場合があまりにも多い。ふつう、実践家たちは、地方の活動家が全国的な新聞の発行にしたがうことは「困難」** だし、また全然新聞がないよりは地方新聞でもあったほうがよい、という議論で満足している。このあとのほうにあげた議論は、もちろん、まったく正しいし、われわれとても、一般に地方新聞の巨大な意義と巨大な効用とを認める点では、どんな実践家にもゆずらないだろう。しかし、ここでの問題はそんなことではなくて、全ロシアをつうじて二年半のあいだに地方新聞が三〇号発行されたという事実に一目瞭然と表現されている細分状態と手工業性とから脱却できないか、ということではないか。一般的にいって地方新聞が有用だという、議論の余地のない、しかしあまりにも一般的な命題にとどまらずに、二年半の経験によって明らかにされた地方新聞の否定的な面をも、公然と認めるだけの勇気をもちたまえ。この経験が証明しているところでは、わが国の現状では、地方新聞は、大多数の場合に、原則の点で確固さを欠いており、政治上は意義をもたず、革命勢力の消費の点で法外に高くついており、技術の点でまったく不満足である（私の考えているのは、もちろん、印刷技術のことではなくて、発行の回数や定期性のことである）。そして、ここにあげたいろいろな欠陥はみな偶然のものではなく、細分状態から生まれる、避けられない結果なのである。この細分状態は、一面では、この問題としている時期に地方新聞が優勢だった原因であるが、他面では、地方新聞が優勢なためにこの細分状態が維持されているのである。個々の地方組織にとっては、自分の新聞に原則上の確固さを保障し、新聞を政治的機関紙の水準に高めるということは、まったくその力におよばぬ仕事であり、わが国の政治生活全体を解明するに足る材料を集めて利用することも、その力におよばぬことである。そして、ふつう自由な国々で多数の地方新聞が必要だという主張の論拠にされている、地方の労働者の手で

印刷すれば新聞が安くでき、また地方の住民にいっそう十分にまた速やかに情報が伝えられるということ、この論拠は、わが国では、経験の証明するところによれば、地方新聞に反対する論拠に変わる。地方新聞は革命勢力の消費の点で法外に高くつき、またごくまれにしか発行されないことがわかる。それは、どんなにささやかな非合法新聞を発行するにも大がかりな秘密機構が必要であるが、そういう機構は、家内工業的な仕事場ではとうていつくれるものでないので、これには工場制大工業が必要になる、という単純な理由による。まさに秘密機構が原始的なために、新聞が一、二号発行されてくばられると、警察がそれを大量検挙のために利用し、なにもかもきれいさっぱりと一掃してしまうので、またもや始めからやりなおさなければならなくなる場合が、しょっちゅう起こっている（実践家なら、だれでもこうした例をたくさん知っている）。すぐれた秘密機構をつくりだすためには、革命家にすぐれた職業的訓練をほどこし、また最も徹底的に分業をおこなうことが必要であるが、この二つの要求はどちらも、個々の地方組織――それがさしあたってどんなに強力であるにせよ――にとってはまったく力におよばぬことである。われわれの運動全体の一般的利益（一貫した社会主義的、政治的原則による労働者の教育）のことはしばらくおくとしても、もっぱら地方的な利益でさえ、地方的でない機関紙のほうがいっそうよくこれを満足させる。これが逆説のように思えるのは、一見そう思えるにすぎず、実際には、さきほど指摘した二年半の経験がこのことを反駁の余地のないまでに立証しているのである。もし三〇号の新聞を発行した地方の勢力の全員が一つの新聞の仕事をしたなら、その新聞は、一〇〇号とはいわないまでも、六〇号を発行することは容易だったろうし、したがって、運動の純地方的な特性のすべてをもっと十分に反映できたであろうということには、だれでも同意するであろう。そのような組織性に到達することが容易でないのは疑いないが、しかし、われわれはそれが必要であることを認識しなければならないし、また一つひとつの地方的サークルが、外部からうながされるのを待たずに、また、おおむね幻想にすぎない――われわれの革命的経験の示すところによれば――地方機関紙の理解しやすさとか身近さとかいうことにまどわされずに、この必要について考え、そのために積極的に活動しなければならないのである。

＊『パリ大会への報告』[三〇]、一四ページを見よ。「そのとき（一八九七年）から一九〇〇年の春までに、いろいろな場所でいろいろな新聞が合計三〇号発行された。……平均して月に一号あまり発行されたわけである。」

** この困難は外見上だけのものである。実際には、全国的事業のなんらかの機能を積極的に引きうけることのできないような地方的サークルは、一つもない。「できないと言わずに、したくないと言え。」

また、実践家ととくべつ密接な関係にあると自分で考えている政論家たちも、実践活動に悪い影響をおよぼしている。この政論家たちは、これが幻想だということに気がつかないで、地方の新聞も必要だ、地区の新聞も必要だ、全国的新聞も必要だという、驚くべく安っぽい、驚くべくからっぽな議論で、お茶をにごしているのである。もちろん、一般的にいえば、それらはどれもみな必要である。しかし、具体的な組織問題をとりあげるからには、環境や時機の諸条件を考えることも必要だろうではないか。『スヴォボーダ』（第一号、六八ページ）がわざわざ「新聞の問題に立ちいって論じながら」、次のように書いているのは、ほんとうにドン・キホーテ式ではないだろうか。「われわれは、いくらかでも大きな労働者の密集地には、どこにも、かならずその土地の労働者新聞がなければならないと思う。どこかほかの土地からもちこんだものでなくて、まさにその土地の新聞が。」もしこの政論家が自分のことばの意味を考えようとしないなら、せめてあなたがた読者が彼にかわって考えていただきたい。ロシアには、「いくらかでも大きな労働者の密集地」は、何百といわないまでも、何十かあるだろう。そして、もし実際にあらゆる地方組織が自分自身の新聞の発行にとりかかるなら、われわれの手工業性をどんなに永続させることだろう！　こういう細分状態は、わが国の憲兵が、地方活動家たちに真の革命家に成長する余裕をあたえずに、彼らが活動を始めたばかりのところで一網打尽にする――しかも「いくらかでも大きな」骨おりなどすこしもせずに――という任務を果たすのを、どんなにやりやすくすることだろう！　この筆者は、さらにつづけてこう書いている。全国的な新聞に工場主たちのわるだくみや、「自分の都市でない、いろいろな都市の工場生活のこまごました事柄」などが書いてあっても、興味は起こらないだろうが、「オリョールの人が自分の住むオリョールの出来事を読むのは、けっして退屈ではない。彼には、だれを『やっつけている』のか、だれを『たしなめている』のか、いちいちわかるので、その胸はおどる」のか（六九ページ）。いかにも、いかにも、オリョールの人の胸はおどる。しかし、わが政論家の思想も「おどり」すぎる。地方根性をこんなふうに擁護することが、分別のあることだろうか？――こう彼は考えてみるべきだったろう。われわれとても、工場内の状態の暴露が必要で重要なことを認める点では、だれにもひけをとりはしない。しかし、べ

テルブルグの新聞『ラボーチャヤ・ムィスリ』にのったペテルブルグ通信を読むことがペテルブルグの人に退屈になったというところまで、われわれがすでにきているることを、忘れてはならない。その土地土地での工場内の状態の暴露のためには、われわれにはつねにリーフレットというものがあったし、これからもつねになければならないであろう。——しかし、新聞の型をわれわれは高めなければならないのであって、それを工場リーフレットに低めてはならない。「新聞」のためにわれわれが必要としているのは、「こまごました事柄」の暴露よりも、工場生活の大きな、典型的な欠陥の暴露であり、とくにきわだった実例にもとづいてなされているためすべての労働者とすべての運動指導者との興味を呼びおこすことができるような、また実際に彼らの知識を豊かにし、彼らの視界をひろげ、新しい地区や労働者の新しい職業層をめざめさせる端緒となることができるような、暴露なのである。

「次に地方新聞では、工場の首脳部その他の権力者のあらゆるわるだくみを、ただちにその現場でとっつかまえることができる。ところが、遠く離れた共通の新聞に報道が届くころには、現地ではもうどういうことがあったのか忘れてしまって、『ええっと、これはいつのことだったたか、なんとか思いだせないものか！』ということになる」（前掲箇所）。なんとか思いだしてもらいたいのは、まさに次のことである！　同じ典拠から知られるように、二年半のあいだに発行された三〇号の新聞は、六つの都市に分かれている。つまり、平均して一都市につき半年に一号ずつという勘定である！　そして、たとえ、かるがるしいわが政論家が彼の仮定のなかで地方的活動の生産性を三倍に高めた（これは、各都市の平均としては絶対に正しくないだろう。というのは、手工業性の枠内では、生産性をいちじるしく高めることは不可能だからである）としてさえ、やはり、二ヵ月に一号ずつにしかならないだろう。すなわち、「現場でとっつかまえる」こととは似ても似つかないのである。ところが、一〇個の地方組織が合同して、それぞれ代表を送って共通の新聞の整備のための積極的な機能を分担させるだけで、全ロシアにわたって、こまごました事柄ではなく、真にきわだった、典型的な不法状態を、二週間に一度ずつ「とっつかまえる」ことができるだろう。われわれの諸組織の実情に通じている人ならだれでも、このことを疑わないであろう。また敵の現行犯をとっつかまえるということは、たんなることばのあやとしてでなく、まじめにとるなら、だいたい非合法新聞の力におよばないことである。そういうことは、流しこみビラだけにやれることである。というのは、そういうふうにとっつかまえることと

ができる期間は、たいていの場合一両日を出ないからである（たとえば、普通の短期間のストライキや、工場内での激突や、デモンストレーション、などを考えてみよ）。

わが筆者は、ボリス・クリチェフスキーその人にとってさえほまれとなるであろうような厳密な首尾一貫性をもって、特殊から一般へとのぼりながら、なおつづけて言う。「労働者は工場で生活しているだけでなく、市民としての生活もおくっている」と。そして、彼は、市議会や市立病院や市立小学校の問題をあげ、労働者新聞が一般に市政の問題を黙過しないように、と要求している。——この要求は、それ自体としてはりっぱな要求であるが、しかし、人人が地方新聞について論じる場合にそれで満足することのあまりにも多い、あの無内容な抽象性を、とりわけまざまざと例証している。第一に、もし『スヴォボーダ』の望んでいるようなくわしい市政欄をもった新聞が、実際に「いくらかでも大きな労働者の密集地にはどこにも」発行されるとすれば、わがロシアの現状では、これは不可避的に真の地方根性に堕落し、ツァーリ専制にたいする全国的な革命的攻撃の重要性についての意識を弱める結果になるだろうし、革命家たちはありもしない議会のことを論じすぎ、現にある市議会のことを論じなさすぎるという有名な格言[三]によってすでに名声を博したあの潮流の芽ばえ——それははなはだ根づよいもので、根こそぎにされたというよりは、むしろ身を隠したか、あるいは押えつけられているにすぎない——を、強めることになるだろう。不可避的に、とわれわれが言うのは、『スヴォボーダ』は、意識的にそうなることを望んでいるわけではなく、かえってその反対のことを望んでいるのだということを、強調するためである。しかし、意図がよいだけでは足りない。——市政の問題の解明がわれわれの全活動の適切な見とおしにもとづいておこなわれるためには、まず最初に、この見とおしを完全につくりあげ、それを議論によるだけでなく、たくさんの実例によってしっかりと確立すること、この見とおしがすでに伝統のもつ堅固さをおびていることが、必要である。われわれはまだまだそういう状態に達していないが、広範な地方的定期刊行物のことを考えたり論じたりすることが許されるまえに、このことこそまず最初になしとげられなければならないのである。

第二に、市政の問題をほんとうにうまく、興味ぶかく書くためには、これらの問題を十分に——本で知っているだけでなく——知っていることが必要である。ところが、全ロシアをつうじてこういう知識をもちあわせている社会民主主義者はほとんどいない。新聞（大衆的なパンフレットではなく）に市政や国政の問題について書くためには、練

達した人の手で集められ、まとめられた、新鮮な、多方面にわたる資料をもたなければならない。だが、そのような資料を集め、まとめるためには、だれもかれもがなにもかもやり、みなが一般投票遊びに打ち興じているような原始的サークルの「原始的民主主義」では不十分である。そのためには、専門の著作家と専門の通信員からなる幕僚や、いたるところに連絡をつけ、ありとあらゆる「国家機密」（ロシアの役人がひどくもったいをつけながら、ひどく簡単に口外してしまうところの）に割りこみ、あらゆるものの「舞台裏」にもぐりこむことのできる社会民主主義者の探訪記者の軍隊、「職務上」どこにもいて、なんでも知っていなければならない人々の軍隊が、必要である。そして、あらゆる経済的・政治的・社会的・民族的圧制とたたかう党であるわれわれは、このような、なんでも知っている人人の軍隊を見つけだし、集合させ、訓練し、動員し、進軍させることができるし、またしなければならない。――だが、これは、まだこれからやらなければならないことなのである！　そして、わが国の大多数の地方では、まだこの方向へ一歩も踏みだしていないばかりか、そうすることが必要だという意識さえないことがしばしばある。わが社会民主主義的定期刊行物のなかに、わが国の外交、軍事、教会、都市、財政、等々の大小さまざまな問題についての、生きいきとした、興味ある論文や通信や暴露記事を捜してみたまえ。ほとんどなにも見つからないか、ごくすこし見つかるだけだろう。* だからこそ、「人が私のところにやってきて」、「いくらかでも大きな労働者の密集地にはどこにも」、工場、都市、国家でおこなわれている不法状態をどれもこれも暴露する新聞が必要であると、「たいそう美しく、すばらしい事柄をしゃべりたてるときには、私はいつでもひどく腹がたつ！」

* 例外的にすぐれた地方機関紙の実例さえ、われわれの見地を完全に確証しているのは、このためである。たとえば、『ユージヌイ・ラボーチー』（三三）は、原則上の確固さが欠けているという非難をまったくまぬかれた、りっぱな新聞である。しかし、その発行回数がまれであるのと、広範な一斉検挙とのために、同紙が地方的運動に提供したいと思っていたものは達せられなかった。現在、党がなによりも緊急に必要としているもの――運動の根本的諸問題の原則的な提起と全国的な政治的扇動――は、一地方機関紙の力におよぶものではなかったのである。そして、鉱山業者会議や失業などについての論文のように、同紙にのった資料のうちでとくにすぐれたものは、厳密な意味での地方的資料ではなく、南部ロシアだけではなく、全ロシアにとって必要なものであった。わが社会民主主義的定期刊行物全体をつうじても、この種の論文は見られなかった。

中央の定期刊行物より地方の定期刊行物のほうが優勢で

あるということは、乏しさのしるしであるか、でなければぜいたくのしるしである。運動がまだ大規模生産に必要な力をつくりだしておらず、まだ手工業性のうちでその日暮らしをしており、「工場生活のこまごました事柄」のなかにほとんどおぼれきっているときには、それは乏しさのしるしである。――運動が全面的暴露と全面的扇動という任務をすでに完全になしとげていて、その結果中央機関紙のほかにたくさんの地方機関紙が必要になるときには、それはぜいたくのしるしである。現在われわれのあいだで、地方新聞が優勢であることがなにを証明するものかは、各人が自分で判定していただきたい。私はただ、誤解のたねをあたえないために、自分の結論を正確に定式化するだけにとどめよう。今日までわれわれの地方組織の大多数は、ほとんどまったく地方機関紙のことだけを考え、またほとんどその仕事だけを積極的にやっている。これは正常ではない。その反対でなければならない。すなわち、地方組織の大多数が、主として全国機関紙のことを考え、また主としてその仕事をやらなければならないのである。そういうふうになるまでは、われわれは、紙上での全面的な扇動によっていくらかでも真に運動に役だつことのできる新聞を、ただのひとつも発行することができないであろう。だが、そういうふうになれば、必要な中央機関紙と必要な地方諸機関紙とのあいだの正常な関係は、ひとりでに打ちたてられるであろう。

***

一見したところでは、重心を地方的活動から全国的活動に移動させる必要があるという結論は、純経済闘争の分野には適用できないように思えるかもしれない。というのは、この場合には労働者の直接の敵は個々の企業家か企業家グループなのだが、政治闘争でのわれわれの直接の敵であるロシア政府が、純軍事的な、厳格に中央集権的な、きわめて些細な事柄にいたるまで単一の意志によって指揮される組織をもっているのにひきかえ、企業家は、ほんのすこしでもそれに似かよった組織で結合されてはいないからである。

しかし、そうではないのだ。経済闘争は――われわれはすでに何回となくこのことを指摘してきたが――職業的闘争〔労働組合闘争〕であり、したがってそのためには、労働者をその労働場所別に結合するだけでなく、またその職業別に結合することが必要である。そして、このような職業別の結合は、各種の会社やシンジケートへのわが企業家たちの結合が急速にすすめばすすむほど、いよいよ緊急に必要となる。われわれの細分状態と手工業性とは、この結

合を直接に妨げている。このような結合のためには、労働者の全国的な労働組合の指導を引きうけることのできる単一の全国的な革命家の組織が必要である。この目的のために望ましい組織の型についてはわれわれはすでにまえのほうで述べたので、いまはわれわれの定期刊行物の問題に関連して、数言つけくわえるだけにとどめよう。

どんな社会民主主義新聞にも労働組合（経済）闘争の欄がなければならないということについては、おそらくだれにも疑問はあるまい。しかし、労働組合運動が成長してくると、労働組合の定期刊行物のことも考えられてくる。しかし、われわれは、まれな例外を除けば、いまのところロシアでは労働組合新聞は問題にならないと思う。それはぜいたく品であって、われわれは日々のパンにさえしょっちゅうこと欠いているしまつなのだ。わが国で非合法活動の諸条件に適していて、いまでもすでに必要な労働組合刊行物の形態は、当然、労働組合パンフレットでなければなるまい。そういうパンフレットのなかでは、その業種における労働条件や、この点でのロシアのいろいろな地方のあいだの差異や、その職業の労働者の主要な諸要求や、この職業にかんする法規の欠陥や、この職種の労働者の経済闘争の顕著な事例や、彼らの労働組合的組織の芽ばえ、現状、必要としている事柄、などの問題について、合法的*ならびに非合法的な資料を集め、系統的に分類しなければならないであろう。このようなパンフレットが出れば、第一に、その当の職種の労働者だけがとくに興味をもっているような、たくさんの職業上の細部の問題を、わが社会民主主義的刊行物が取り扱わなくてもすむようになるであろう。第二に、それは、労働組合闘争におけるわれわれの経験の成果を記録にとどめ、集められてくる資料――いまはたくさんのリーフレットや断片的な通信のなかに文字どおり埋没しているところの――を保存し、この資料を総括するであろう。第三に、それは、扇動家のための一種の手引となることができよう。なぜなら、労働条件は比較的変化がおそく、ある職種の労働者の基本的諸要求はいちじるしく固定的であって（一八八五年のモスクワ地区の織物工の要求と一八九六年のペテルブルグ地区のそれとを比較せよ）(三三)、これらの要求や必要事などをまとめた本は、遅れた地方や遅れた労働者層のあいだでの経済的扇動にとって、長年にわたるすばらしい参考書となることができるだろうからである。ある地方における成功したストライキの実例、ある地方におけるより高い生活水準やよりよい労働条件の資料は、他の諸地方の労働者をも鼓舞して、つぎつぎと新しい闘争へ駆りたてるであろう。第四に、社会民主主義者は、労働組合闘争の一般化に率先してあたり、こうしてロシアの労

働組合運動と社会主義との結びつきを固めると同時に、われわれの労働組合活動がわれわれの社会民主主義的活動の総体のなかで占める割合が、小さすぎもせず大きすぎもしないように心がけるであろう。ほかの諸都市の組織と切り離されている場合、地方組織がこの点で正しい比率をたもつことははなはだ困難であり、ときには不可能でさえある(そして、『ラボーチャヤ・ムィスリ』の実例は、その場合に組合主義のほうにどれほど法外にかたよりうるかを、示している)。しかし一貫してマルクス主義の見地に立ち、全政治闘争を指導し、職業的扇動家の幕僚を自由に駆使する全国的な革命家の組織は、この正しい比率をきめるのにけっして困難を感じないであろう。

* この点では合法資料がとりわけ重要であって、われわれは、このような資料を系統的に集めて利用する能力の点で、とくに立ちおくれている。合法資料だけをもとにしても、まだなんとか労働組合パンフレットを書くことができるが、非合法資料だけをもとにしては、これは不可能であるといっても、誇張でないだろう。われわれは、『ラボーチャヤ・ムィスリ』[二三〇]の出版物に扱われているような種類の問題について、労働者から非合法資料を集めるのにおびただしい革命家の勢力を空費しており(こういう仕事なら合法的活動家でもらくに代わってやれるのに)、それでいて、よい資料はけっして手にはいらないのである。というのは、労働者は、大工場のただ一つの部門のことしか知らない場合がしばしばあり、またほとんどいつでも、自分の労働の経済的結果は知っていても、労働の一般的な条件や基準のことは知らないので、工場職員や監督官や医師などがもちあわせており、新聞の小さな通信記事や、工業、衛生、ゼムストヴォ、等の専門書のなかにおびただしく散在しているような知識を獲得することは、彼らには不可能だからである。

　私は自分の「最初の実験」のことを、ついいましがたのことのように記憶しているが、私はこうしたことをもうけっして繰りかえさないつもりである。私は、私のところによくたずねてきたある一人の労働者から、彼の働いていた大工場におこなわれているあらゆる制度をなにもかも聞きとろうとして、何週間もかかりきって彼を「責めたてた」のであった。私は、大骨をおってではあったが、とにかくどうにかこうにか記述(たった一つの工場についての!)をまとめたが、そのかわりにその労働者は、日課の終りには、汗をふきふき、ほほえみながらこう言ったものである。「あなたの質問に答えるよりは、残業をやったほうがらくですよ!」と。

　われわれが革命的闘争を精力的におこなえばおこなうほど、政府は、ますます「労働組合的」活動の一部を合法化しなければならないようになり、それによってわれわれの負担の一部を取りのぞいてくれるだろう。

五　全国的政治新聞の「計画」

ベ・クリチェフスキーは、われわれのことを「理論を実践から遊離させて死んだ教条に変える」傾向があると言って非難しながら、次のように書いている（『ラボーチェエ・デーロ』第一〇号、三〇ページ）。――「この点で『イスクラ』がおかした最大の失策は、その全党組織の「計画」（つまり論文『なにから始めるべきか？』）「である」と。そして、マルトィノフもこれにあいづちをうって、こう声明する。「輝かしい、完成された思想の宣伝にくらべて、じみな日常闘争の漸進的な歩みの意義を軽視する『イスクラ』の傾向は、……同紙第四号所載の論文『なにから始めるべきか？』に提案されている党の組織計画において頂点に達した」と（前掲書、六一ページ）。最後に、ごく最近になってエリ・ナデージジンも、ついさきごろわれわれの手にはいった小冊子『革命の前夜』（われわれがすでにおなじみになった「革命的社会主義者団」スヴォボーダの発行になるもの）のなかで、この「計画」（括弧はこの計画にたいする皮肉の気持ちを言いあらわすためのもの）に憤慨した人々の仲間いりをした。この小冊子にはこう述べられている。「いまごろ、全国的新聞から出ている糸でつながれた組織のことなどを論じるのは、書斎的思想と書斎仕事を生むものである」（一二六ページ）、これは「文筆家気質」の現われである、等々、と。

わがテロリストが「じみな日常闘争の漸進的な歩み」の擁護者たちと意見が一致したことは、われわれが政治や組織を論じた諸章でこういう親近性の根源をあとづけたあとでは、われわれには不思議ではない。しかし、ここで指摘しておかなければならないことは、エリ・ナデージジンが、そして彼ひとりだけが、自分の気にいらない論文ながら、その思想の道すじを誠意をもって把握しようと試み、核心にふれた回答をあたえようと試みたのに、『ラボーチェエ・デーロ』は、核心にふれたことは全然なにも言わずに、いかがわしい、デマゴギー的な攻撃をさんざんあびせかけて、問題をこんぐらかせようとつとめたにすぎない、ということである。そこで、たとえどんなに不愉快でも、まずはじめに、アウギアスの厩[三三]の掃除にしばらく時を費やさなければならない。

（a）だれが論文『なにから始めるべきか？』に感情を害したか？[三四]

『ラボーチェエ・デーロ』がわれわれにあびせかけた文句や絶叫の詞華を、次に引用しよう。「新聞が党組織をつ

くりだすことはできない。その反対である。」……「それ自身の受任者網をもっているおかげで、党のうえに、その統制のそとに立ち、党から独立している新聞。」……「どういう奇跡によって『イスクラ』は、自分の所属する党の、現実に存在する社会民主主義的諸組織のことを忘れたのか?」……「確固たる原則とそれにおうじた計画とをもちあわせている者は、また党の現実の闘争の最高規制者でもあり、自分の計画の遂行を党に口述するというわけだ。」……「この計画は、われわれの生きた、生命ある諸組織を幽界に追いやるものであり、幻想的な受任者網をつくりだそうと望むものである。」……「もし『イスクラ』の計画が実行されるなら、わが国に形づくられてきたロシア社会民主労働党は、跡かたもなく完全に一掃されるであろう。」……「一宣伝機関が実践的革命闘争全体にたいして、なんの統制もうけない専制的な立法者になる。」……「わが党は、自治的な編集局に党が完全に従属させられることにたいして、どんな態度をとるべきであるか?」等々、等々。

以上の引用文の内容や調子から読者におわかりのように、『ラボーチェエ・デーロ』は感情を害したのである。しかし、同誌は、自分のことで感情を害したのではなく、『イスクラ』がわが党のもろもろの組織や委員会を幽界に追いやろうと望み、また跡かたもなく一掃しようとさえ望んでいるというので、感情を害したのである。まあまあ、なんと恐ろしいことだろう? ただここに奇妙なことが一つある。論文『なにから始めるべきか?』が出たのは一九〇一年五月で、『ラボーチェエ・デーロ』の諸論文が出たのは一九〇一年九月、そしていまはもう一九〇二年一月のなかばである。この五ヵ月ずつ(九月までと九月以後との)のあいだに、もろもろの委員会や組織を幽界に追いやろうと望んでいるこの人非人にたいして、党のただひとつの委員会も、ただひとつの組織も、正式の抗議をおこなわなかったのだ! しかも、このあいだに、『イスクラ』にも、ほかの多くの地方的および非地方的な出版物にも、あまねく、ロシアの各地からの報道が何十、何百となくのったではないか。幽界に追いやられようとしている当の人々が、そのことに気がつかず、そのことで感情を害していないのに、第三者が感情を害したのは、どういうわけだろう?

そのわけは、委員会や、その他の諸組織は、「民主主義」遊びなどでなく、ほんとうの仕事にいそがしいからである。それらの委員会は、論文『なにから始めるべきか?』を読んで、これが「あらゆる方面から組織の建設に着手できるように一定の組織計画をつくりあげる」試みであることを見てとったのだ。そして、彼らは、この「あらゆる方面」のただひとつといえども、こういう建設が必要なことや、

設計図が正しいことを確信しないうちは、「建設に着手し」ようなどと考えないであろうことを、よく知っていたし、理解してもいたから、『イスクラ』の紙上で、「この問題の喫緊の重要性を考えて、われわれのほうからも、この計画の下書きを提出して、同志諸君のご参考に供することにきめた。なおこの下書きは、われわれが目下印刷準備中の小冊子のなかで、もっとくわしく展開されている」(註)と述べた人々のあつかましさに「感情を害する」などということは、もちろん考えもしなかったのである。誠意をもって問題にむかったならば、次のことが理解できなかったはずがあろうか？　つまり、もし同志たちが自分たちの参考に供された計画を採用するとすれば、それは「従属」しているからではなく、この計画がわれわれの共同事業に必要だと確信するからであり、また、もし採用しないとすれば「下書き」(なんと僭越なことばではないか？)はまさしくたんなる下書きにとどまるであろうということである。計画の下書きにたいして、それを「こきおろし」、同志たちにこの計画を拒否するように勧めることによってたたかうだけでなく、下書きの作成者たちが不遜にも「立法をおこない」、「最高規制者」としてふるまっているという、つまり不遜にも計画の下書きを提出しているというだけの理由で、革命的事業に経験の浅い人々をこの作成者たちにけしかけるというやり方でこれとたたかうのは、デマゴギーではあるまいか？　地方の活動家たちをいっそう広範な見解、任務、計画などのところまで引き上げようとする試みにたいして、そういう見解は正しくないという見地から反論するだけでなく、自分たちを「引き上げよう」と「望んでいる」ことに「感情を害する」という立場から反論するようなことで、はたしてわが党は発展し前進することができようか？　エリ・ナデージヂンもやはりわれわれの計画を「こきおろした」が、しかし、彼は、政治的見解の素朴さとか幼稚さとかいうことだけではもう説明のつかないようなデマゴギーをやるほどには堕落しなかったし、「党を監督する」という非難などは、最初から断固として拒否したではないか。だからこそ、ナデージヂンのくわえた計画の批判にたいしては、核心にふれた回答をあたえることができるし、またあたえなければならないが、『ラボーチェエ・デーロ』には、軽蔑で答えるほかはないのである。

しかし、「専制」とか「従属」とか叫びたてるほど身をおとした著作家を軽蔑しただけでは、われわれは、そのような連中が読者の頭にもちこんでいるごたごたを解きほぐす義務をまぬかれはしない。そのうえ、まさにここでわれわれは、「広範な民主主義」というこれらのはやり文句がどういう性質のものかを、すべての人々に一目瞭然に示す

ことができる。われわれは、もろもろの委員会のことを忘れているとか、それらを幽界に追いやろうと願っている、あるいは試みている、などと非難されている。われわれは、もろもろの委員会にたいするわれわれの実際の関係について、ほとんどなにひとつ事実を読者に物語るわけにいかないのに、すなわち、秘密活動の条件のためにそうするわけにいかないのに、どうやってこの非難に答えたらよいか？大衆をいらだたせるような辛辣な非難をあびせかける連中がわれわれより有利な立場にあるのは、彼らが慎みを知らないおかげであり、また自分のもっている関係や結びつき、自分がととのえつつあるか、あるいはととのえようと試みている関係や結びつきを、世人の目から注意ぶかく隠さなければならない革命家の義務を、彼らが蔑視しているおかげなのだ。われわれがこんな連中を相手に「民主主義」の活動舞台で競争するのをきっぱり拒絶することは、いうまでもない。すべての党内問題に通暁していない読者についていえば、われわれがそういう読者にたいして自分の責務を果たすことのできる唯一の手段は、現にある事柄や、目下 im Werden〔生成しつつ〕ある事柄を物語ることではなく、まえにあった事柄で、いまでは過去のこととして物語ってもよいことの一小部分を物語ることである。

ブンドは、われわれが「詐称者」であるかのようにほのめかしているし、在外「同盟」は、われわれが党を跡かたもなく一掃しようと試みている、と言って非難する。諸君、お好きなように。われわれが過去にあった四つの事実を読者に物語れば、諸君は完全に得心がいくであろう。〔三〇〕*

* 『イスクラ』第八号所載の、民族問題についてのわれわれの論文に、在ロシア＝ポーランド・ユダヤ人総同盟中央委員会があたえた回答。〔三一〕

第一の事実。* わが党の結成と党創立大会への代表派遣とに直接参加したある「闘争同盟」の成員たちが、運動全体の必要におうじる特別の労働者文庫を発刊する問題について「イスクラ」グループの一員と打ち合わせをおこなった。労働者文庫の発刊は不成功に終わり、文庫のために書かれた小冊子『ロシア社会民主主義者の任務』と『新工場法』とは、まわりまわって、第三者の手を経て国外にたどりつき、そこで印刷に付された。

* われわれは、わざと、これらの事実が起こった順序を変えて述べることにする。

第二の事実。ブンドの中央委員たちが、「イスクラ」グループの一員にたいし、その当時ブンドが用いていた表現でいうと「文筆実験所」を設立することを提議した。そのさい彼らは、もしこれがうまくできないようだと、われわれの運動ははなはだしく後退するおそれがあると指摘した。

この交渉の結果が小冊子『ロシアにおける労働者の事業』である。*

* ついでながら、同小冊子の筆者が、私に、次のことを声明しておいてほしい、と依頼している。この小冊子は、彼のそれ以前のいくつかの小冊子と同じように、在外「同盟」に送付されたのであるが、それは「労働解放」団が「同盟」の出版物の編集にあたっているという推定にもとづくものであったのである（そのころ、すなわち一八九九年の二月には、彼は、ある事情のために、編集局の更迭のことを知ることができなかったのだ）。この小冊子はちかく連盟[二〇]から再刊されるはずである。

第三の事実。ブンド中央委員会が、地方の一小都市をつうじて、「イスクラ」の一員にたいし、復刊される『ラボーチャヤ・ガゼータ』の編集を引きうけてほしい、と提議し、もちろんその承諾を得た。そののちこの提議は変更され、編集局の組合せが変わるので寄稿者になってほしい、という提議がなされた。いうまでもなく、これにも承諾があたえられた。いくつかの論文が送られた（それらは、さいわい今日まで保存されている）。すなわち、『われわれの綱領』――ベルンシュタイン主義と、合法文献や『ラボーチャヤ・ムィスリ』に現われた方向転換とにたいする直接の抗議をふくんでいるもの――、『われわれの当面の任務』（「規則正しく発行され、すべての地方的グループと緊密に結びついた党機関紙を組織すること」、今日はびこっている「手工業性」の諸欠陥）、『緊要な問題』（共通の機関紙の発行に着手するまえにまずもって地方的グループの活動を発展させなければならないという反対論の検討、「革命的組織」の第一義的重要性の強調――すなわち「組織、規律、秘密活動の技術を最高度に完成させる」必要性の強調）である。『ラボーチャヤ・ガゼータ』の復刊の提案は実現されず、これらの論文は印刷されずに終わった。

第四の事実。わが党の第二回定例大会の準備委員会の一員が、「イスクラ」グループの一員に大会のプログラムを通知して、復刊される『ラボーチャヤ・ガゼータ』の編集の仕事の候補者に同グループを推した。この委員のとった、いわば予備的な措置は、あとで、彼の所属する委員会からも、ブンド中央委員会からも承認をうけた。「イスクラ」グループは、大会の開催地と期日の通知を受け取ったが、（若干の理由で、この大会に代表を送れるかどうか確信がなかったので）文書による大会への報告をもあわせて作成した。この報告書には次のような考えが述べられていた。すなわち、現在のように完全な分散の支配している時期には、中央委員会を選出するだけでは統合の問題を解決できないばかりか、もし、迅速で完全な一斉検挙が新たにやってくるなら――そして秘密性の欠如がひろくはびこってい

る現状では、これはきわめてありそうなことであるが――、党の創設という偉大な思想の信用を失墜させるおそれがある。だから、必要なことは、復刊された共同の機関紙にたいする支持を、すべての委員会とその他すべての組織に要請することから始めることであり、そういう機関紙は現実にすべての委員会のあいだに事実上の結びつきを打ちたて、現実に運動全体の指導者グループを訓練してゆくであろう。ところで、もろもろの委員会によってつくりだされたそういうグループを――このグループが成長し、強化したあかつきに――中央委員会に変えることは、それらの委員会と党とにとってまったくたやすいことであろう、というのである。しかし、何度か検挙がおこなわれた結果、大会は実現せず、報告書も一委員会の全権代表たちをふくむわずか数名の同志に読まれただけで、秘密保持の考慮から破棄された。

ブンドがわれわれを詐称者であるかのようにあてこすったり、『ラボーチェエ・デーロ』が、われわれがもろもろの委員会を幽界に追いやり、党組織を一新聞の思想をひろめるための組織と「おきかえ」ようと望んでいると論じたりする、こういうやり口がどういう性質のものであるかは、いまや読者が自分で判断していただきたい。われわれが共同活動の一定の計画を採用する必要について報告したのは、ほかならぬもろもろの委員会にたいして、これらの委員会の再三の勧めにおうじてしたことであった。われわれが『ラボーチャヤ・ガゼータ』への寄稿論文や党大会への報告のなかでこの計画を仕上げたのは、ほかならぬ党組織のためであったし、これまた、党の（事実上の）復活の提唱をするほど党内で有力な地位を占めていた人々の勧めにおうじてしたことである。そして、党組織がわれわれといっしょに党の中央機関紙を正式に復刊しようとした二度までの試みが失敗に終わったのちにはじめて、われわれは、同志たちが第三回目の試みをやるときには、すでにたんなるあて推量でなく、ある程度の実験の結果をもちあわせているように、非公式の機関紙を発刊することを、自分の直接の義務と考えたのである。いまでは、この実験のいくらかの結果は、すでにだれでも見ることができる。そこで、われわれが自分の義務を正しく理解していたかどうか、また、前者にたいしては「民族」問題における彼らの一貫性の欠如を、後者にたいしては無原則的な動揺が許しえないことを、われわれが証明したのをいまいましく思って、つい最近の過去のことも知らない人々をまどわそうとつとめている連中を、どう考えるべきかについて、すべての同志が判断をくだせるわけである。

(b) 新聞は集団的組織者になることができるか？

論文『なにから始めるべきか？』の要点は、まさに右の質問を提起して、それに、できる、という解答をあたえたことにある。われわれの知るかぎりでは、この問題についで核心にふれた検討をおこなったうえ、これに、できない、という解答をあたえる必要があることを立証しようと試みているただひとりの人は、エリ・ナデージヂンである。だから、われわれは彼の論拠を全文転載することにする。

「……『イスクラ』(第四号)に全国的新聞の必要性の問題が提起されたのは、たいへん喜ばしい。しかし、われわれは、この問題を提起したことが、『なにから始めるべきか？』という論文の表題にあてはまるということには、どうしても同意できない。これは疑いもなくきわめて重要な事業の一つであるが、しかし新聞によっても、またどんなにたくさんの大衆的リーフレットや山のようなビラによっても、革命的時期のための戦闘組織の基礎をおくことはできない。必要なことは、地方で強力な政治的組織の建設に着手することである。われわれにはこういう組織がない。われわれの活動は主として知識的な労働者のあいだでおこなわれてきたが、他方、大衆はほとんどまったく経済闘争だけをおこなってきた。地方に強力な政治的組織がそだてられないなら、どんなにりっぱに組織された全国的新聞があったところで、なんになろうか？　それは、みずからは燃え、たえることなく燃えるが、なんびとをも燃えたたせない、燃えつきることのないくさむら〔三〕のようなものである！　新聞を中心として、そのための仕事をつうじて、人々が集まり、組織をつくるであろうと、『イスクラ』は考えている。だが、人々にとっては、もっと具体的な仕事を中心として集まり、組織をつくるほうが、はるかに身近なのだ！　そういう仕事となることができ、またならなければならないのは、地方新聞を広範に組織すること、いますぐ労働者勢力にデモンストレーションの準備をさせること、地方組織が失業者のあいだでたえず活動すること(失業者のあいだにリーフレットやビラをうまずたゆまずくばったり、彼らを集会に招集したり、政府に反抗するように呼びかけたりする、等々)である。地方で生きた政治活動を始めることが必要である。そして、こういう現実的な基盤のうえに統合が必要となるときには、それは人為的な統合ではなく、紙上の統合ではないであろう。地方的活動をこのように統合して全国的事業とすることは、新聞によってはなしとげられない！」(『革命の前夜』、

五四ページ）

われわれは、この雄弁な長広舌のなかで、われわれの計画にたいする筆者の評価の誤り、一般に彼がここで『イスクラ』に対置している見地の誤りを、最もあざやかに示している箇所に、傍点をうっておいた。地方に強力な政治的組織がそだてられないなら、どんなりっぱな全国的新聞もなんにもならないだろう、と。まったくそのとおりである。だが、問題の核心は、全国的新聞以外には、強力な政治的組織をそだてる手段がないことにある。筆者は、『イスクラ』が、自分の「計画」の叙述に移るにさきだっておこなった、最も肝要な言明を見おとしている。それはこうである。「すべての勢力を統合する能力、名目のうえだけでなく実際に運動を指導する能力をもった革命的組織、すなわち、つねにあらゆる抗議やあらゆる燃えあがりを支持する準備があり、それらを利用して決戦に役だつ兵力を増大させ強化するような革命的組織をつくりあげるように呼びかける」必要がある、と。『イスクラ』はつづけて言っている。しかし、二月と三月の事件を経た今日では、みなが原則上ではこのことに同意するであろうが、われわれに必要なことは、問題の原則上の解決ではなくて実践上の解決である。必要なことは、すべての人がさまざまな方面からいますぐ建設に着手できるように、一定の建設計画をただちに提出することである、と。ところが、いまやわれわれは、この実践上の解決から、「強力な政治的組織をそだてる」という、原則上は正しく、争う余地がなく、偉大であるが、しかしまったく不十分で、広範な労働者大衆にはまったく理解できない真理のほうへ、ふたたび引きもどされようとしているのだ！　尊敬すべき筆者よ、いまでは問題はもうそのことではなく、まさにどのようにしてこれをそだて、そしてそだておおせるかということにあるのだ！

「われわれの活動は主として知識的な労働者のあいだでおこなわれてきたが、他方、大衆はほとんどまったく経済闘争だけをおこなってきた」というのは、正しくない。こういう形で言いあらわすと、この命題は、『スヴォボーダ』のやりつけている、根本的にまちがった、知識的な労働者と「大衆」との対置に、迷いこんでしまう。近年わが国では、知識的な労働者もまた「ほとんどまったく経済闘争だけをおこなってきた」。一方ではこうである。だが、他方では、知識的な労働者のなかからも、インテリゲンツィアのなかからも、政治闘争の指導者がそだってくるようにわれわれが助けないかぎり、大衆もまたけっして政治闘争をおこなうことを学びとりはしないだろう。そして、このような指導者は、もっぱらわが国の政治生活のすべての側面、さまざまな階級がさまざまな動機でおこなう抗議や闘争の

すべての試みを系統的、日常的に評価することをもととしてのみ、そだつことができるのである。だから、「政治的組織をそだてる」ことを語りながら、それと同時に、政治新聞の「紙上の仕事」に「地方における生きた政治的活動」を対置するのは、まったく笑うべきことである！『イスクラ』は、まさに、失業者の運動であろうが、農民の一揆であろうが、ゼムストヴォ議員の不満であろうが、「羽目をはずしたツァーリのバシバズーク〔三〕どもにたいする住民の憤激」等々であろうが、そのどれをも支持するような「戦闘準備」をつくりあげる「計画」に、自分の新聞計画を合わせているではないか。大多数の地方組織がこういうことを考えてさえいないこと、ここに略述されている「生きた政治的活動」の見とおしの多くは、まだただの一度も、ただひとつの組織によっても実現されなかったこと、また、たとえばゼムストヴォのインテリゲンツィアのあいだの不満と抗議の増大に注意をうながそうと試みると、ナデージジチンも（「これはどうだ、この機関紙はゼムストヴォ議員たちの機関紙ではないのか？」――『革命の前夜』一二九ページ）、「経済主義者たち」も（『イスクラ』第一二号所載の手紙）、また多くの実践家たちも、とほうにくれて当惑してしまうということは、運動の実情に通じているものなら、だれでもくわしく知っているではないか。こういう状態では、人々がこれらすべてのことについて考えるようにしむけること、動揺や積極的闘争のありとあらゆるひらめきを総括し一般化するようにしむけることから「始め」るほかはない。今日のように社会民主主義的任務が低められているときには、「生きた政治的活動」はもっぱら生きた政治的扇動から始めるほかはなく、そしてこの生きた政治的扇動は、頻繁に発行されて規則正しく配布される全国的新聞なしには不可能である。

『イスクラ』の「計画」を「文筆家かたぎ」の現われと考える人々は、現在の時機における最も適当な手段として提出されているものを目的ととりちがえたわけで、計画の核心そのものをまったく理解していないのだ。この人々は、提案された計画を一目瞭然と例証している二つのたとえを、考えてみる労もとらなかったのだ。『イスクラ』にはこう言っていた。――われわれがこの組織（すなわち、つねにあらゆる抗議やあらゆる燃えあがりを支持する準備のある革命的組織）をたゆむことなく発展させ、深め、拡大するためのたよりとするしるべの糸は、全国的政治新聞の発行でなければならない、と。どうか言ってもらいたい。石工たちが、まったく前例のない大建築物のための石材をいろいろな場所に積むときに、一本の糸を引いて、石を積む正しい場所を見いだすたよりにし、それによって共同作業の

最終の目標を示し、こうして石工たちが、一つひとつの石ばかりか、一つひとつの石片までも使って、まえに積んだ石とあとから積む石とにつぎ合わせ、その全部が合わさって仕上りの線をつくりあげてゆくことのできるようにするとき、これは「紙上の」仕事ではないのか？　また、まさにいまわれわれは、石もあり石工もいるが、全員の目に見え、全員につかむことのできる糸が欠けている、そういうわが党生活の一時機にあるのではないのか？　われわれが糸を張るのは、号令しようとするものだと、叫びたければ叫ぶがよい。諸君、もしわれわれが号令したければ、われわれは、「『イスクラ』第一号」と書かずに、「『ラボーチャヤ・ガゼータ』第三号」と書いたであろう。じじつ、そうするようにわれわれに勧めた同志たちも幾人かいたし、またさきに物語ったような諸事件があったあとでは、われわれにはそうする十分な権利があったであろう。しかし、われわれはそうしなかった。それは、われわれが、あらゆるにせ社会民主主義者たちと非妥協的な闘争をやることのできるように、行動の自由を自分に保留しておきたかったからである。また、われわれの糸が正しく引かれたとして、この糸が公式の機関紙によって引かれたからではなく、正しいゆえに尊重されるようになることを、われわれが望んだからである。

エリ・ナデージヂンはわれわれに教えをたれて言う。「地方的活動を中央諸機関において統合する問題は、どうどうめぐりをするものである。統合するためにはその諸要素が同質的であることが必要だが、この同質性それ自体は、なにかの統合的な要因によってしかつくりだせない。しかし、この統合的要因は強力な地方諸組織の産物としてしか現われることができない。だが、地方諸組織はいまのところけっして同質性をもっていない」と。これは、強力な政治的諸組織をそだてることが必要だという真理と同じくらい尊ぶべく、また同じくらい争えない真理である。そして、右の真理と同じくらい無益な真理である。あらゆる問題が「どうどうめぐりをする」のだ。なぜなら、政治生活全体が、無限につらなる環からなる無限の鎖だからである。政治家の全技術は、手からたたきおとされるおそれが最も少なく、当面の時機に最も重要で、その環をもっていれば最も確実に鎖全体を保持することができるような、まさにそういう環を見いだして、それを固く、固くにぎることにある。* もしわれわれが、糸などなくてもちょうど必要なところに石を積むことができるほど呼吸のあった、熟練した石工の部隊をもっているなら（これは、抽象的にいえばけっして不可能なことではない）、たぶん、われわれはほかの環をつかんでもよかったであろう。ところが、不幸なこと

には、われわれはまだ熟練し、呼吸のあった石工たちをもっておらず、石はしじゅうまったくでたらめに置かれ、共通の糸に沿ってではなく、ひどくてんでんばらばらに置かれるので、敵は、まるでこれが石ではなくて砂粒ででもあるかのように、吹きとばしてしまうのである。

* 同志クリチェフスキーおよび同志マルトィノフよ！ 私は、「専制」、「なんの統制もうけない権威者の地位」、「最高の規制」、等々のこの言語道断な現われに、諸君の注意をうながすものである。とんでもない、鎖全体を保持したいだなんて！ すぐ訴状を書きなさい。『ラボーチェエ・デーロ』第一二号にのせる二つの社説の主題がそっくりできあがったというものだ！

もう一つのたとえはこうである。「新聞は、集団的宣伝者および集団的扇動者であるだけでなく、また集団的組織者でもある。この最後の点では、新聞は建築中の建物のまわりに組まれる足場にたとえることができる。それは、建築の輪郭を示し、個々の建築工のあいだの連絡を容易にし、彼らが仕事の割りふりをおこない、組織的な労働によってなしとげられた共同の成果を見わたすのを助ける。」* なんとこれは、文筆家、書斎人が自分の役割を誇張するのにそっくりではないか？ 足場は住宅そのものには全然必要でない。足場はいちばん粗悪な材料で組まれる。足場は、短期間建てられるだけで、建物があらましでもできあがるがはやいか、暖炉に投げこまれてしまう。革命的諸組織の建設について言えば、ときには足場がなくてもそれを建設できることは、経験の証明するところである。――七〇年代をとって考えてみたまえ。しかし、今日のわが国では、足場なしにわれわれに必要な建築物を建てうるなどということは、思いもよらない。

* マルトィノフは、『ラボーチェエ・デーロ』のなかにこの引用文のはじめの句を引きながら（第一〇号、六二ページ）、まさに第二の句をはぶいたのであるが、これは、彼が問題の核心にふれたくないか、それともこの核心を理解する能力がないことを、強調しているかのようである。

ナデージヂンはこれに同意しないで、こう言っている。「新聞を中心として、そのための仕事をつうじて人々が集合し組織をつくるであろうと、『イスクラ』は考えている。だが、人々にとっては、もっと具体的な仕事を中心として集合し組織をつくるほうが、はるかに身近なのだ！」と。そのとおり、「もっと具体的な事柄を中心とするほうが、はるかに身近だ」……ロシアのことわざに言う。「井戸につばを吐くな、いつかは水を飲むのに役だつだろうから」と。しかし、すでにつばを吐きこまれている井戸からでも、平気で水を飲む人間がいるものだ。わがすてきな合法的「マルクス主義批判家たち」や『ラボーチャヤ・ムィスリ』

の非合法的礼賛者たちは、このもっと具体的な事柄の名において、どんなにけがらわしいことまで言ったことか！「もっと具体的な事柄を中心とするほうが、はるかに身近だ」というおきまりの論拠によって正当化されているわれわれの狭さや創意性の欠如や臆病のために、われわれの運動全体がどんなに締めつけられていることか！　ところが、ナデージジン――とくに鋭い「現実」感覚の持ち主をもって自任し、「書斎」人をとくにきびしく断罪し、『イスクラ』はいたるところに「経済主義」を見たがる弱点があると言って（才気を気どりながら）非難し、自分は正統派と批判家とへのこの分裂をはるかに超越していると考えているそのナデージジンが、夫子自身の論拠によって、自分の憤慨している当の狭さのお先棒をかついでいることに、つまり、つばをいっぱい吐きこまれた井戸から自分が水を飲んでいることに、気がつかないのだ！　そうだ、もし狭さを憤慨している人が、舵ももたなければ帆ももたずに、ちょうど七〇年代の革命家たちのように「自然のままに」ただよっていて、「刺激的テロル」やら、「農民テロル」やら、「早鐘」などにしがみついているようなら、たとえ彼がこの狭さをどんなに本気に憤慨していようと、狭さの前に拝跪している人々を立ちあがらせたいとどんなに熱望していようと、それだけでは足りないのだ。彼の考えによれば、それを中心として集合し組織をつくるほうが「はるかに身近だ」という、この「もっと具体的な事柄」なるものを、まあ調べてみたまえ。いわく、（一）地方新聞、（二）デモンストレーションの準備、（三）失業者のあいだの活動、と。一見しただけで、これらの仕事はどれもこれも、なにかものを言うために、まったくゆきあたりばったりに、でたらめにつかみだしてきたものだということがわかる。なぜなら、どんなにそれらをながめてみても、そこになにかとくに人を「集合し、組織する」のに役だつものがあるように考えるのは、まったくばかげているからである。当のナデージジン自身が、その二、三ページあとで言っているではないか。「いまやわれわれは率直に事実を確認すべきときであろう。地方でおこなわれている活動ははなはだみじめなもので、もろもろの委員会は、当然やれるはずのことの十分の一もやっていない。……今日われわれがもっている統合的諸中心は、擬制であり、革命的なお役所仕事であり、たがいに大将に任命しあうことである。そして、強力な地方諸組織が成長をとげるまでは、こういう状態がつづくだろう」と。このことばには、いろいろな誇張とならんで、疑いもなく、多くのにがい真実がふくまれている。ところで、ナデージジンは、地方の活動のみじめなことと、活動家たちの視野の狭さ、彼らの活動の規模の狭さ――活

動家たちが地方組織の枠内に閉じこもり、訓練に不足している場合にはまぬかれられないところの——とのあいだに関連があることが、ほんとうにわからないのだろうか？ほんとうに彼は、『スヴォボーダ』にのった、組織を論じた論文の筆者と同様に、広範な地方的定期刊行物への移行（一八九八年以後）にともなって「経済主義」と「手工業性」とがとくに強まったことを、忘れてしまったのだろうか？だが、たとえ「広範な地方的定期刊行物」をいくらかでも満足すべき程度に組織することができるとしても（ところで、まったく特殊な場合を除いてこれが不可能なことは、われわれがさきに示したとおりである）、そのときでさえ地方機関紙によっては、専制にたいする総攻撃のため、統一的闘争の指導のために、すべての革命的勢力を「集合し、組織する」ことはできないだろう。ここではただ、新聞の「呼集者」としての、組織者としての意義だけが問題になっていることを、忘れたもうな。そして、われわれは、細分状態を擁護するナデージヂンにたいして、彼自身が提出した皮肉な質問、「われわれは、どこからか二〇万人の革命的組織者の軍勢でも相続したのではないのか？」という質問を、返上することができるだろう。さらに、「デモンストレーションの準備」を『イスクラ』の計画に対置することは、後者の計画がその目的の一つとしてほかならぬ最も広範なデモンストレーションを予定しているという理由だけからでも、なしえないことである。問題はどういう実践的手段を選ぶかにある。ナデージヂンは、デモンストレーション（これまで大多数の場合にまったく自然発生的に起こっているところの）を「準備する」ことは、すでに「集合し、組織された」軍隊にしかやれないことなのに、われわれにはまさにその集合し、組織する能力がないのだということを見おとして、ここでもまた混乱におちいっている。「失業者のあいだの活動」もまた、同じような混乱である。なぜなら、これもまた、動員された軍隊の戦闘行動の一つであって、軍隊を動員する計画ではないからである。ナデージヂンが、ここでもまた、われわれの細分状態の弊害を、われわれが「二〇万人の軍勢」をもちあわせていないために生じる弊害を、どんなに過小評価しているかは、次のことからわかる。『イスクラ』は、失業についての報道をあまりのせず、農村生活のごくありふれた現象について思いつきで通信をのせているだけだといって、多くの人から（ナデージヂンもふくめて）叱責された。この叱責はもっともだが、しかし、この点では『イスクラ』は「罪なくして罪を問われた」ものである。われわれは農村にも「糸を張り」わたす努力をしているのだが、農村にはほとんどどこにも石工がいないので、たとえあり

ふれた事実のことでも通信してくれる人ならだれでも、奨励しないわけにいかないのである。——これは、そうしていけば、この分野についての協力者の数がふえてくるだろうし、ついにはわれわれ全部が実際にきわだった事実を選びだすことを学びとるだろうと期待してのことである。しかし、学習材料がいかにも乏しいので、これをロシア全国にひろめないなら、全然なにも学習する材料がないことになるだろう。せめてナデージヂンに見られる程度の扇動家としての能力と浮浪者の生活についての知識とをもっている人ならば、疑いもなく、失業者のあいだで扇動することによってはかりしれない貢献を運動にもたらすことができよう。しかし、もしそういう人が、自分の活動の一歩一歩をロシアの同志全部に知らせて、まだ大部分新しい仕事に着手することができずにいるこの人々の教訓とし模範とするように心がけないなら、せっかくの才能を地中にうずもらせることになるであろう。

統合が重要なこと、「集合し、組織する」必要があることについては、いまではまったくだれもかれもが語っている。しかし、なにから始めるべきか、またこの統合の事業をどうすすめるべきかについては、大多数の場合なにもはっきりした考えがない。われわれが一つの都市の個々のサークル——たとえば、地区サークル——を「統合する」場合には、共同の機関が必要なこと、すなわち「同盟」という共通の呼び名だけでなく、実際に共同の活動が必要であり、資料や経験や人手を交流し、その都市の活動全体の諸機能を、地区別に分担するだけでなく、さらに専門別に分担する必要があることには、たしかに、だれもが同意するであろう。充実した秘密機構は、一地区だけの「資材」（いうまでもなく、物的資材も人的資材もふくめて）ではまかなええない（商業用語を使ってよいのなら）であろうし、このような狭い活動舞台では専門家の才能が発揮されないであろうということにも、だれもが同意するであろう。しかし、これと同じことは、いろいろな都市を統合する場合についても言える。なぜなら、わが国の社会民主主義運動の歴史では、個々の地方というような活動舞台でさえも、とほうもなく狭いものになりつつあり、またすでになっているからである。それは、われわれがさきに政治的扇動の例についても、また組織活動の例についても、くわしく証明したとおりである。必要なこと、ぜひとも必要なことは、なによりも必要なことは、この活動舞台をひろげ、規則的な共同活動にもとづいていろいろな都市のあいだに実際上の結びつきをつくりだすことである。というのは、人々は細分状態に締めつけられて、「いわば洞穴のなかにすわりこみ」（『イスクラ』に寄せられたある手紙の筆者の表現を

借りれば）、広い世界ではどんなことが起こっているのか、だれに学んだらよいのか、どうすれば経験を身につけられるのか、広範な活動をやりたいという願望をどうして満足させたらよいのか、わからずにいるからである。そして、私はやはり主張する。このような実際上の結びつきをつくりだす仕事は、共同の新聞にもとづいてはじめて開始することができる。共同の新聞は、多種多様な活動の成果を総括し、それによって、すべての道がローマにつうじるように革命につうじている数多くの道のすべてに沿って倦むことなく前進するよう、人々を駆りたてる唯一の規則的な全国的事業だからである、と。もしわれわれが口さきだけでなく、統合を望んでいるのでないなら、あらゆる地方的サークルが、いますぐ、各自の勢力のたとえば四分の一を、共同事業のための積極的活動にさくことが必要である。そうすれば、すぐに新聞がそのサークルに、この事業の一般的輪郭や規模や性格を示してくれ、*また全国的活動全体のうちでまさにどういう欠陥が最も強く感じられているか、どこで扇動が欠けているか、どこで結びつきが弱いか、この巨大な総機構のどの歯車を、そのサークルが修理し、またはよりよい歯車に取り替えることができるかを、示してくれる。これまで活動をやっていないで、いまようやく仕事を捜しもとめているサークルも、こんどはもう、自分より以前におこなわれた「工業」の発達のことも知らなければ、現行の工業上の生産方式の概況も知らない、個々の小作業場の手工業者として発足するのではなく、専制にたいする全般的な革命的強襲全体を反映する広大な事業の参加者として、発足できるようになるだろう。そして、一つひとつの歯車の仕上げが完全であればあるほど、共同事業の局部的働き手の数が多くなればなるほど、われわれの網の目もいよいよ緻密となり、また、避けられない一斉検挙のために隊列全体に引きおこされる混乱は、それだけ少なくなるであろう。

* 但し書。これは、そのサークルが、この新聞の方向に共鳴し、その協力者になることが事業のために有益であると考え、しかも協力者になるということを、寄稿するというだけの意味に解しないで、一般にあらゆる種類の革命的協力と解する場合のことである。『ラボーチエエ・デーロ』のための注記——民主主義遊びをたいせつにするのでなく、事業をたいせつに思い、「共鳴」と、最も積極的で活発な参加とを切り離して考えない革命家のあいだでは、この但し書は自明のことである。

新聞を配布するという機能だけでも（もしその新聞が新聞の名に値するものなら、すなわち、規則的に発行され、総合雑誌式に月一回の発行でなく、月に四回ぐらい発行されるなら）、実際上の結びつきをつくりだしはじめるであ

ろう。今日では、革命的事業の必要におうじていろいろな都市のあいだに連絡がとられる場合はきわめてまれで、いずれにしても例外である。だが、右に述べたようになれば、この連絡は常則になるだろうし、もちろんそれは、新聞の配布だけでなく、また(はるかに重要なことだが)経験や資料や人手や資材の交流をも保障するであろう。組織活動の規模は一挙に何倍もひろがり、一地方でおさめられた成功は人々をはげまして不断にいっそうの改善にむかわせ、国の他の地点で活動している同志がすでになしとげた経験を利用したいという願いをおこさせるであろう。地方的活動は、現在よりもはるかに豊富で多方面的なものとなるだろう。ロシア全国から集められる政治的および経済的暴露は、あらゆる職業、あらゆる発達段階の労働者に知識の糧をあたえ、また多種多様な問題についての会話や講演の材料ときっかけをあたえるであろう。そのうえ、こういう問題は、合法的出版物のほのめかしや、世間の雑談や、政府の「遠慮がちな」発表によっても、提起される。一つひとつの燃えあがり、一つひとつのデモンストレーションが、ロシアのいたるところで、あらゆる方面から評価され討議されて、他の人々に立ちおくれまい、他の人々よりもうまくやろうという願望——(われわれ社会主義者は、あらゆる張りあい、あらゆる「競争」を、全体的に排撃するわけではけっしてない!)——、はじめてのときにはなにかの拍子で自然発生的に起こったことを意識的に準備し、その地方あるいはそのときの有利な条件を利用して攻撃計画に修正をくわえる、等々の願望を呼びおこすであろう。それと同時に、地方的活動がこのように活発になっても、全勢力を必死に、「息もたえだえに」ふりしぼったり——現在では、デモンストレーション一つやるにも、地方新聞一号発行するにも、往々にしてこういうありさまなのだが——、ありったけの人間を駆りだして矢おもてに立てたりしなくてもよいであろう。一方では、どの地方に「根」を求めるべきかがはっきりしないので、警察がこの根を探りあてることはずっと困難になるだろうし、他方では、人々は、規則的な共同活動によって訓練されて、当面の攻撃の力を全軍隊のなかのあれこれの部隊の兵力の現状に適応させること(現在では、ほとんどだれも、こうした適応のことを全然考えていない。というのは、攻撃は十中八、九まで自然発生的に起こっているからである)に慣れるであろうし、また文書だけでなく革命的勢力をも、よそから「移送」してくることが容易になろう。

現在では、これらの勢力は、多くの場合に狭い地方的活動に精魂をすりへらしているが、右に述べたようになれば、いくらかでも有能な扇動家あるいは組織者を国の一方のは

しから他方のはしに移動させることができるようになろうし、またそうする機会がたえず生まれてくるだろう。党務のために党の費用で小旅行することからはじめて、人々は、完全に党の給与で生活するようになり、職業革命家となり、自分を真の政治的指導者にそだてあげてゆくことに慣れるであろう。

そして、もし地方委員会や地方的グループやサークルの全部またはそのかなりの多数が、積極的に共同事業に取りくむようにならせることが実際にできるなら、われわれは、全ロシアにわたって数万の部数で規則的に配布される週刊新聞を、ごく近い将来に発行することができよう。この新聞は、階級闘争と人民の憤激の一つひとつの火花を吹きおこして全般的な火事にする巨大なふいごの一小部分となるであろう。この、それ自体ではまだはなはだ罪のない、はなはだ小さい、しかし規則的で、完全な意味で共同の事業を中心にして、試練を経た戦士の常備軍が系統的に選抜され、訓練されてゆくであろう。まもなくこの共同の組織的建造物の足場あるいは板囲いに沿って、わが革命家たちのなかから幾多の社会民主主義的ジェリャーボフが、わが労働者たちのなかから幾多のロシアのベーベルが身をおこし、すすみでてくるであろう。そして、彼らは、動員された軍隊の先頭に立って、ロシアの汚辱と禍いとに対決するために全人民を決起させるであろう。

これこそ、われわれが夢想すべきことである！

＊＊＊

「夢想すべきことである！」このことばを書きおわって、私は愕然とした。私は、自分が「合同大会」に列席して、『ラボーチェエ・デーロ』の編集局員たちや寄稿家たちと向かいあってすわっているような気がしたのである。いまそこに、同志マルトィノフが立ちあがって、こわい顔をして私にことばをかける。「ところで、おたずねしたいが、自治的な編集局には、あらかじめ党のもろもろの委員会の意見も問いあわせずに夢想などする権利があるのか！」と。すると、つづいて同志クリチェフスキーが立ちあがって、（すでにずっと以前に同志プレハーノフを深めた同志マルトィノフをさらにいっそう哲学的に深めながら）もっとこわい顔をして、引きとって言う、「私はもっと突っこんでたずねよう。マルクスによれば、人類はいつも自分で解決できる任務だけを自分に提起するものであること、また戦術は党とともに成長する任務の成長の過程であることを忘れないなら、いったいマルクス主義者が、夢想などする権利があるのか？」と。

この恐ろしい質問を思っただけで、私は膚が寒けだって

くる。そこで、どこに身を隠そうかと、それぱかり考える。ひとつピーサレフのうしろに隠れてみるとしよう。

ピーサレフは、夢想と現実の不一致という問題について次のように書いている。「一概に不一致といっても、いろいろなものがある。私の夢想が諸事件の自然の歩みを追いこすこともありうるし、諸事件のどんな自然の歩みもそこまではけっして到達できないような、まったくのわき道にはいりこむこともありうる。まえの場合には、夢想はどのような弊害ももたらさない。それは、働く人の精力を維持し強めることさえできる。……このような夢想には、働く力をゆがめたり麻痺させたりするものはなにもない。むしろ、その正反対でさえある。もし人間がこういう夢想をする能力をまったくもたないとしたら、もし人間がときどきは先ばしって、自分の手中でようやく形をなしかけた創作品を、彼の想像によって完全な、完成した姿でながめることができないとしたら、そのときには、どういう動機が人間を刺激して、芸術、科学、実際生活の各分野で、広大な、精魂をすりへらす仕事を企てさせ、また最後までやりとげさせるか、私にはまったく考えることができない。……夢想する人物が生活を注意ぶかく熟視しつつも、真剣に自分の夢想を信じ、自分の観察と自分の空中楼閣とを引きくらべ、総じて自分の空想の実現のために誠実にはたらきさえするなら、夢想と現実との不一致は、どのような弊害ももたらすものではない。夢想と生活のあいだになにか接触があれば、万事は順調におこなわれる。」[三]

不幸なことに、われわれの運動にはまさにこういう種類の夢想があまりにも少なすぎる。そして、それについてだれよりも責任があるのは、自分のきまじめさや、「具体的な事柄」に「近づいている」ことを鼻にかける、合法的批判と非合法的「追随主義」との代表者たちなのである。

（c）　われわれにはどのような型の組織が必要か？

以上に述べたことから諸君におわかりのように、われわれの「計画としての戦術」は、いますぐ突撃を呼びかけることを拒否して、「敵の要塞の正規の攻囲」を組織するように要求すること、言いかえれば、常備軍を集合し、組織し、動員することに全力をそそぐように要求することにある。『ラボーチェエ・デーロ』が「経済主義」から一躍して突撃の叫び（『小型版「ラボーチェエ・デーロ」』第六号[三]、一九〇一年四月、のなかでひびきわたったところの）をあげたことで、われわれが同誌を嘲笑したとき、もちろん同誌は、「空論主義」とか、革命的義務を理解していないとか、慎重にせよと呼びかけているのだ、などという非難を、

われわれにあびせかけた。もちろん、われわれは、なんの原則ももたずに、深遠な「過程としての戦術」をもちだしてお茶をにごしている連中の口からこういう非難を聞かせられても、すこしも驚かなかったし、同様にまた、総じて綱領や戦術上の堅固な原則にたいしてこのうえない尊大な軽蔑の念をいだいているナデージヂンが、そういう非難を繰りかえしたことにも驚かなかった。

歴史は繰りかえさない、と言われている。しかし、ナデージヂンは、一生懸命に歴史を繰りかえそうとして、「革命的文化主義」をこきおろしたり、「ヴェーチェ」(三三)の早鐘を打ち鳴らす」だの、特別な「革命前夜の見地」などと叫びたてて、熱心にトカチョーフを模倣している。どうやら彼は、歴史的事件の原本は悲劇であっても、その模倣は茶番でしかない、という有名な格言(三四)を忘れているようである。トカチョーフの伝道によって準備され、「威嚇的な」、そして実際に人を威嚇したテロルを手段として実行された権力奪取の試みは壮大であったが、小トカチョーフの「刺激的」テロルは滑稽なだけであり、それが中程度の人々の組織化という思想でおぎなわれているときには、とりわけ滑稽である。

ナデージヂンはこう書いている。——「『イスクラ』がその文筆家かたぎの圏外にぬけだしさえしたら、これ(『イスクラ』第七号にのった一労働者の手紙、などのような現象)は、『突撃』がごくまぢかに始まる兆候であり、いまごろ(原文のまま！)、全国的新聞から出ている糸でつながれた組織のことなどを論じるのは、書斎的思想と書斎仕事を生むものであることが、わかったはずである」と。これはなんという思いもよらない混乱であることか、見てくれたまえ。一方では、地方新聞というような「もっと具体的な事柄」を中心として集合するほうが「はるかに身近だ」という意見があるかと思うと、他方では、「いまどき」全国的組織のことを論じるのは、書斎的思想を生むことになる。つまり、もっと率直にあからさまに言えば、「いまでは」もうおそすぎる、と言う！　では、「地方新聞を広範に組織する」ことなら、まだおそすぎないのか、尊敬すべきエリ・ナデージヂンよ？　そして、これと次の『イスクラ』の見地、戦術とをくらべてみたまえ。刺激的テロルはばかげており、ほかならぬ中程度の人々を組織することや、地方新聞を広範に組織することを論じるのは、「経済主義」に扉を広くあけはなすものである。論じなければならないのは、まさに単一の全国的な革命家の組織についてであり、またそれについて論じるのは、紙上の突撃でなく真実の突撃が始まるその瞬間まで、おそすぎるということはない、

と。

ナデージヂンはつづけて言う。「いかにも、組織の点では、われわれのあいだの状態ははなはだかんばしくない。いかにも、われわれの兵力の主力が義勇兵と蜂起者であると『イスクラ』が言っているのは、まったく正しい。……諸君が冷静にわれわれの兵力の状態を考えているのは、けっこうである。しかし、その場合に、民衆がいつ戦闘行動を開始すべきかをわれわれにたずねたりしないで、『一揆』を始めるだろうことを、どうして忘れるのか。……民衆自身がその自然力的な破壊力をもって行動するときには、われわれがそれに異常に整然たる組織をもちこもうとたえず志しながら、ついにまにあわなかった『常備軍』などは、民衆によって踏みつぶされ、押しのけられてしまうかもしれないではないか。」（傍点はわれわれのもの）

驚きいった論理である！　まさに「民衆がわれわれのものになっていない」からこそ、いまこのときに「突撃」と叫びたてることは、愚かしく、また不謹慎なことなのだ。なぜなら、突撃とは常備軍の攻撃のことであって、民衆の自然発生的な爆発のことではないからである。まさに民衆が常備軍を踏みつぶし、押しのけるかもしれないからこそ、われわれは、常備軍のなかに「異常に整然たる組織をもちこむ」ための活動によって、ぜひとも、自然発生的な高揚に「まにあう」ようにしなければならないのである。というのは、われわれがこのような組織性をもちこむことに「まにあえば」まにあうほど、常備軍が民衆に踏みつぶされないで、民衆の前に、その先頭に立つ見込みがますます大きくなるからである。ナデージヂンが混乱におちいっているのは、この整然と組織されるべき軍隊が、なにか民衆から自分自身を切り離す仕事にしたがうかのように、彼が想像しているためである。ところが、事実は、この軍隊はひたすら全面的、包括的な政治的扇動にしたがうのである。すなわち、まさに民衆の自然力的な破壊力と革命家の組織の意識的な破壊力とを近づけ、一体に融合させる仕事にしたがうのである。諸君、これは諸君自身のとがを罪もない他人になすりつけるものではないか。というのは、ほかならぬ「スヴォボーダ」団こそ、綱領のなかにテロルをもちこみ、そうすることでテロリストの組織に呼びかけているのだが、このような組織は、実際にわれわれの軍隊を民衆――遺憾ながらまだわれわれのものになっておらず、遺憾ながらいつ、どのように戦闘行動を開始すべきかをまだわれわれにたずねていない、あるいはほとんどたずねていないその民衆――への接近から引き離すだろうか

らである。

ナデージヂンは、なおも『イスクラ』をおどかしつづけて言う。――「われわれは、文字どおり青天の霹靂のように落ちかかってきた今度の諸事件を見おとしたのと同じように、革命そのものをも見おとすだろう」と。この文句を、まえに引用した文句に結びつけてみると、『スヴォボーダ』があみだした特別な「革命前夜の見地*」なるもののばからしさが、一目瞭然に明らかになる。あからさまに言えば、この特別な「見地」というのは、けっきょく、「いまごろ」議論したり準備したりするのは、もうおそすぎるということに帰着する。もしそうなら、おお、尊敬すべき「文筆家かたぎ」の敵よ、なんのために一三二ページにもわたって「理論と戦術の諸問題について**」書いたのか？　「やつらをたたきのめせ！」という短い呼びかけをのせた一三万二〇〇〇枚のビラを出したほうが、「革命前夜の見地」にいっそう似つかわしいとは考えなかったのか？

* 『革命の前夜』、六二ページ。

** とはいうものの、エリ・ナデージヂンは、「理論の諸問題についての評論」と銘うった彼の著書のなかに、「革命前夜の見地」からみてはなはだ興味ぶかい次の一節を別にすれば、理論の問題についてはほとんどなにも提供していない。「現在では、ベルンシュタイン主義全体がその切実さを失いつつあることは、ストルーヴェ氏はもう名誉退職してよいころだとアダモーヴィチ氏が論証するか、それとも反対にストルーヴェ氏がアダモーヴィチ氏を反駁して、引退をことわるか、ということと、まったく同様である。――そんなことはまったくどうでもよいことだ。というのは、革命の『決定的な時』が、いまやせまりつつあるからである」（一一〇ページ）と。これ以上にあざやかに描きだすことはむずかしかろう。われわれは「革命の前夜」を宣言した。――だから、正統派が批判家たちを最後的にその陣地から追いはらうことができるかどうかは、「まったくどうでもよいことだ」と!!　そして、まさに革命の時期にこそ、われわれは、批判家の実践的陣地にたいする決定的闘争のために、彼らにたいする理論闘争の成果を必要とするだろうということに、わが賢人は気がつかないのだ！

『イスクラ』のように、その綱領も、戦術も、組織活動も、いっさいのものの重点を全人民的な政治的扇動におくものこそ、革命を見おとすおそれが最も少ないのである。ロシアの全土にわたって全国的新聞から出ている組織の糸を撚る仕事にしたがっている人々は、この春の諸事件を見おとさなかったばかりか、反対に、彼らのおかげでわれわれはそれを予言することができたのである。彼らはまた、『イスクラ』の第一三号と第一四号とに記述されている[三三]デモンストレーションをも見おとさなかった。それどころか、彼らは、民衆の自然発生的高揚を応援することが自分たち

の義務であることを生きいきと自覚して、これらのデモンストレーションに参加すると同時に、新聞をつうじて、全ロシアの同志たちにこれらのデモンストレーションのことを知らせ、同志たちがこの経験を活用する手助けをしたのであろう。彼らの目が黒いかぎり、彼らは革命をも見おとさないであろう。そして、その革命がなによりも第一にわれわれに要求するのは、扇動における熟達と、あらゆる抗議を支持する（社会民主主義的なやり方で支持する）能力、自然発生的運動に方向をあたえ、それを味方の誤りからも敵のわなからも守る能力であろう！

こうして、われわれは、共同の新聞のための共同の活動によって全国的新聞を中心とする組織をつくるという計画を、なぜわれわれがとくに主張するかという理由の最後のものにたどりついた。このような組織だけが、社会民主主義的な戦闘組織になくてならない柔軟性を保障するであろう、すなわち、多種多様で、急速に変化してゆく闘争条件に即応する能力、「一方では、兵力において圧倒的に優勢な敵が全兵力を一地点に集結したときにはこの敵との野戦を避けるとともに、他方では、この敵の不敏活性を利用して、敵が最も攻撃を予期しない場所と時機を選んでこれを攻撃する」*能力を保障するであろう。爆発や市街戦だけを予定し、あるいは「じみな日常闘争の漸進的な歩み」だけを予定して、党組織を建設するのは、このうえない誤りであろう。われわれはつねにわれわれの日常活動を遂行しなければならないし、またつねにあらゆる事態にたいして準備していなければならない。なぜなら、爆発の時期と沈静の時期との交替をまえもって予見することは、ほとんど不可能な場合がきわめて多いし、またそれが可能な場合でも、この予見にもとづいて組織をつくりかえることは、とてもできないからである。というのは、専制国では、このような交替は驚くほど速やかにおこなわれ、ときには、ツァーリのイェニチェリ(三三)どものただ一回の夜襲によって引きおこされることもあるからである。また、革命そのものも、けっして一回かぎりの行為と考えるべきではなく、（どうやら、ナデージヂン一派はそう考えているらしいが）、多少とも強力な爆発と多少とも深い沈静とがいくたびか急速に交替するものと考えなければならないのである。だから、わが党組織の活動の基本的な内容、この活動の焦点は、最も強力な爆発の時期にも、最も完全な沈静の時期にも同様におこなうことができ、またおこなう必要があるような活動でなければならない。すなわち、全ロシアにわたって統一的で、生活のいっさいの側面を解明する、最も広範な大衆を対象とした政治的扇動の活動がそれである。ところで、今日のロシアでは、このような活動は、きわめて頻繁に発

行される全国的新聞なしには考えられない。この新聞を中心としてひとりでに形づくられる組織、この新聞の協力者たち（最も広い意味での協力者たち、すなわちこの新聞のためにはたらく人々の全部）の組織こそ、まさに革命の最大の「沈滞」の時期に党の名誉と威信と継承性を救うことに始まって、全人民の武装蜂起を準備し、その日取りをきめ、実行することにいたるまでの、あらゆる事態にたいする準備をもった組織であるだろう。

＊『イスクラ』第四号、『なにから始めるべきか？』――ナデージヂンはこう書いている。「革命前夜の見地に立たない革命的文化主義者は、仕事が長びくことには、いっこうに心を悩まさないのだ」（六二ページ）と。われわれは、これについて次のように言おう。もしわれわれが、かならずきわめて長期にわたる活動を予定すると同時に、この活動の過程そのものをつうじて、わが党に、どのような不測の事件にさいしても、またどのように諸事件の進行が速められたときでも自分の部署につき、自分の義務を果たす準備を保障するような、政治的戦術と組織計画をつくりあげることができないなら、われわれはみじめな政治的冒険主義者にすぎないことになろう。ついきのうから社会民主主義者と自称しはじめたナデージヂンにしてはじめて、社会民主党の目的が全人類の生活条件を根本的に改造することであり、したがって社会民主主義者が、仕事が長びくという問題で「心を悩ます」ことは許されないということを、忘れることができるのだ、と。

じっさい、わが国でごく通常の事柄になっている、一地方または数地方にわたる完全な一斉検挙の場合を考えてみたまえ。すべての地方組織が一つの共同の、規則的な仕事をもっていないために、このような一斉検挙があると、何ヵ月も活動が中絶することがしばしばある。ところが、もしすべての組織に共同の仕事があったなら、最も手いたい一斉検挙をこうむった場合にさえ、二、三人の精力的な人人が数週間も活動すれば、いろいろな新しい青年サークルを共通の中央部に結びつけるのに十分であろう。よく知られているように、こういう青年サークルは、いまでさえきわめて急速に生まれているのだが、一斉検挙のために被害をこうむるにいたったこの共同の仕事がだれの目にもはっきり見えるようになれば、新しいサークルはさらにいっそう急速に生まれて、この仕事に結びつくことができる。

他方では、人民蜂起を考えてみたまえ。われわれがこれを考え、その準備をしなければならないということには、いまではおそらくだれもが同意するであろう。しかし、どういうふうにその準備をするべきなのか？　中央委員会が蜂起の準備のためにすべての地方に受任者を任命するわけにはいかない！　たとえわれわれが中央委員会をもっていたにしても、ロシアの現状では中央委員会がそういう任命をおこなったところで、まったくなにも達せられないであ

ろう。これに反して、共同の新聞の発行と配布の活動にもとづいてひとりでに形づくられる受任者網*は、蜂起を呼びかけるスローガンが出されるのを「坐して待つ」必要はなく、まさに蜂起が起こった場合に成功の公算を最もよくそれに保障するような、そういう規則的な仕事をおこなうであろう。まさにそのような仕事こそ、最も広範な労働者大衆との結びつきをも、専制に不満をいだくすべての層との結びつきをも、固めるものであろうし、そしてこのことが蜂起にとっては非常に重要なのである。まさにそのような仕事にもとづいてこそ、一般的政治情勢を正しく評価する能力、したがってまた蜂起に最も適した時機を選ぶ能力が、つくりあげられるであろう。まさにそのような仕事こそ、すべての地方組織を訓練して、ロシア全体を激動させている同じ政治問題、場合、出来事に同時に反応し、これらの「出来事」にできるだけ精力的に、できるだけ一様に、また適切にこたえる習慣をつけさせるであろう。――そして、蜂起とは、実質上、政府にたいする全人民の最も精力的な、最も一様な、最も適切な「答え」ではないか。最後に、まさにそのような仕事こそ、ロシア各地いたるところのすべての革命的組織を訓練して、党の実際上の統一をつくりだすような、最も恒常的であると同時に最も秘密な連絡をたもつ習慣をつけさせるであろう。――そして、このような連絡がないなら、蜂起の計画を集団的に討議することも、極秘にしておかなければならない蜂起前夜の必要な準備方策をとることも、不可能である。

* これはしたり、これはしたり！　私としたことが、マルトィノフ一派の民主主義的な耳にひどく耳ざわりな「受任者」という、この恐ろしいことばを、またも口からすべらせてしまった！　どうしてこのことばが、七〇年代の巨匠たちの感情を害せず、九〇年代の手工業者たちの感情を害するのか、おかしなことだ。私にはこのことばは気にいっている。というのは、このことばは、共同の仕事があって、すべての受任者たちが自分の考えや行為をそれに従属させていることを、明らかに、また鋭く示しているからだ。そして、もしこのことばをほかのことばでおきかえなければならないとすれば、「協力者」(ソトルードニク)〔寄稿家〕ということばでも選ぶほかはないだろうが、ただ後者は、いくらか文筆家ふうのものをにおわせ、いくらか散漫なものを感じさせるのが傷だ。ところで、われわれに必要なのは受任者たちの軍事的組織なのだ。もっとも、われわれ「たがいに大将に任命しあう」ことで時をすごすのがお好きなたくさんの(とくに在外の)マルトィノフたちは、「旅券事務受任者」というかわりに「対革命家旅券供給特設部長官」などと言おうと、それはご自由である。

一言でいえば、「全国的政治新聞の計画」は、空論主義や文筆家かたぎに染まった人々の書斎仕事の産物(この計画をろくろく考えてみなかった人々の目には、そう見えた

のだが）でないばかりか、反対に、いますぐあらゆる方面から蜂起の準備を始めると同時に、自分の緊要な日常活動をただの一瞬間も忘れない、最も実践的な計画なのである。

結論

ロシア社会民主党の歴史は、三つの時期にはっきりと分かれる。

第一期は、およそ一八八四年から一八九四年にいたる約一〇年間をふくむ。これは、社会民主党の理論と綱領が成立し、確立されていった時期であった。ロシアにおけるこの新潮流の支持者の数は、十指で数えられるくらいであった。社会民主党は労働運動と結びつかずに存在し、政党として胎児的発展の過程にあった。

第二期は、一八九四年から一八九八年にいたる三—四年間をふくむ。社会民主党は、社会運動として、人民大衆の高揚として、政党として、この世に現われる。これは、幼年および少年期である。インテリゲンツィアのあいだには ナロードニキ主義とたたかい労働者に近づくことへの全般的熱中が、また労働者のあいだにはストライキにたいする全般的熱中が、燎原の火のように急速にひろがる。運動は巨大な進歩をとげる。指導者の大多数はまったく若い人々で、エム・ミハイロフスキー氏が一種の自然的境界と見なしていた「三五歳」にはまだほど遠かった。その若さのために、彼らは実践活動の訓練に不足していて、驚くほど急

速に舞台を去ってゆく。しかし、彼らの活動の規模は、たいがいは非常に広かった。彼らのなかには、その革命的な思考を人民の意志派として始めた人も多かった。そのほとんど全部のものが、若年のころには、テロルの英雄たちを熱狂的に崇拝していた。この英雄的伝統の魅惑的な印象を捨てさるためには、闘争が必要であったし、この闘争は、どんなことがあっても人民の意志派に忠誠を守ろうとした人々——それは、若い社会民主主義者たちが高い尊敬をはらっていた人々だった——との訣別をともなった。闘争は人々をうながして学ばせ、あらゆる潮流の非合法著作を読ませ、合法的ナロードニキ主義の問題を熱心に研究させた。この闘争で教育された社会民主主義者たちは、明るい光を自分たちにそそいでくれたマルクス主義の理論のことも、専制の打倒の任務のことも「一瞬間も」忘れずに、労働運動のなかにはいっていった。一八九八年の春における党の結成は、この時代の社会民主主義者たちの最もきわだった、それと同時に最後の事業であった。

第三期は、われわれが見てきたように、一八九七年に下準備されて、一八九八年に最後的に第二期と入れかわった(一八九八—?年)。これは分散、崩壊、動揺の時期である。少年時代には声がわりするものである。そこで、この時期のロシア社会民主党も声がわりをはじめ、一方では、ストルーヴェやプロコポーヴィチ、ブルガーコフやベルヂャーエフの諸氏の著作において、他方では、ヴェ・イやエル・エム、ベ・クリチェフスキーやマルティノフの著作において、調子はずれの声をだしはじめた。しかし、ばらばらにさまよい、あともどりしていったのは、指導者たちだけであった。運動そのものは成長をつづけ、巨大な前進をつづけていった。プロレタリア闘争は労働者の新しい層に波及し、ロシアの全土にひろがってゆき、それと同時に、学生その他の住民諸層のあいだの民主主義的精神の復活にも、間接に影響をあたえた。けれども、指導者の意識性は、自然発生的高揚の広さと力とに屈してしまった。社会民主主義者のあいだには、すでに別の層——ほとんどもっぱら「合法」マルクス主義文献で教育された活動家の層が、優勢を示していた。だが、大衆の自然発生性が活動家たちにますます多くの意識性をもつことを要求すれば要求するほど、このような文献ではいよいよ不十分になった。指導者たちは、理論の点でも(「批判の自由」)、実践の点でも(「手工業性」)遅れていたばかりか、あらゆる種類の大げさな議論で自分の立ちおくれを弁護しようと試みた。社会民主主義は、合法文書のブレンターノ主義者たちによっても、非合法文書の追随主義者たちによっても、組合主義に低められた。『クレード』の綱領が実行されはじめたが、社会民

主主義者の「手工業性」が非社会民主主義的な革命的諸潮流の復活を呼びおこすようになると、これはとりわけひどくなった。

そこでもし読者が、たかが『ラボーチェエ・デーロ』ふぜいに、あまりにくわしくかかりあいすぎたといって、私を責めるなら、私はそれにこう答えよう。『ラボーチェエ・デーロ』はこの第三期の「精神」を最もあざやかに反映したので、「歴史的」意義をもつようになったのだ、と。* 首尾一貫したエル・エムではなく、まさに風向きしだいでどうにでも変わるクリチェフスキーやマルトィノフ一派こそ、分散と動揺を、また、「批判」であろうが、「経済主義」であろうが、テロリズムであろうが、そのどれにでも譲歩する心がまえを、ほんとうに表明することができたのだ。この時期の特徴は、だれか「絶対的なもの」の崇拝者が実践にたいして尊大な軽蔑の念をいだいていることではなくて、まさに、ちっぽけな実用主義と完全無欠な理論的無関心との結合である。この時期の英雄たちは、「偉大なことば」を率直に否定するよりも、むしろそれを卑俗化することを仕事とした。科学的社会主義は全一的な革命的理論ではなくなって、雑炊に変えられ、ドイツのあらゆる新教科書の中味がこれに「自由に」まぜこまれた。「階級闘争」のスローガンは、人々をますます広範な、ますます精力的な活動へ押しすすめるのでなく、かえって鎮静剤の役目をつとめた。なぜなら、「経済闘争は政治闘争と切り離しえないように結びついている」ではないか。党の思想は、革命家の戦闘組織の創設への呼びかけとはならないで、ある種の「革命的お役所仕事」や、子どもらしい「民主主義的」形式遊びを正当化するものとなった。

* これには、また次のドイツのことわざで答えることもできよう――Den Sack schlägt man, den Esel meint man〔ロバの身がわりに袋をひっぱたく〕、これをロシア語で言えば、「猫をぶって嫁にあてつけ」というわけである。流行の「批判」に熱中し、自然発生性の問題で混乱し、われわれの政治的・組織的任務の社会民主主義的な理解から組合主義的な理解に迷いこんだのは、『ラボーチェエ・デーロ』だけでなく、実践家および理論家の広範な大衆であった。

いつ第三期が終わって第四期が始まるか（いずれにしてもすでにそれを予告する多くのしるしがあるが）、――われわれは知らない。ここで、われわれは歴史の領域から現在の、一部は未来の領域に移る。しかし、われわれは、第四期が戦闘的マルクス主義の確立にみちびくであろうこと、ロシアの社会民主党が危機をぬけだすとき、それはいっそう強く、いっそう成育した姿で立ちあらわれるであろうこと、日和見主義者の後衛と「交替して」最も革命的な階級の真の先進部隊が進出するであろうことを、固く確信する。

このような「交替」を呼びかける意味で、また以上に述べたこと全体を総括して、われわれは、「なにをなすべきか？」という問いに、こう簡単に答えることができる。

第三期を清算せよ、と。

付録[139]

『イスクラ』と『ラボーチェエ・デーロ』の統合の試み

最後になお、『ラボーチェエ・デーロ』との組織上の関係において『イスクラ』が採用し、一貫して遂行してきた戦術を述べなければならない。この戦術は、すでに、『イスクラ』[140]第一号所載の論文『在外ロシア社会民主主義者同盟の分裂』のなかに完全に表明されている。われわれは、はじめから次の見地をとってきた。すなわち、わが党の第一回大会で党の在外代表部として承認されたほんとうの、「在外ロシア社会民主主義者同盟」は、二つの組織に分裂してしまい、党の代表部の問題は未決のままになっている、そしてパリ国際大会では、分裂した「同盟」の両部分から一名ずつ、つごう二名がロシア代表として常設の国際社会主義ビューロー[141]に選出されるというかたちで、暫定的また条件的に解決されたにすぎない、ということである。われわれは、本質上『ラボーチェエ・デーロ』はまちがっていると声明して、原則上の点では断固として「労働解放」団

の味方をしたが、それと同時に、分裂の詳細に立ちいって述べることを拒み、また純実践活動の分野における「同盟」の功績を指摘した。*

* 分裂についてのこの評価のもとになったのは、文献についての知識だけでなく、国外に滞在中のわれわれの組織の数名の成員によって国外で集められた資料であった。

こうして、われわれの立場はある程度まで形勢観望的なものであったが、これは「経済主義」のどんなに断固たる敵でも「同盟」と手をにぎって仕事をやってゆくことが可能だという、大多数のロシア社会民主主義者のあいだに支配的だった意見に譲歩したものであった。というのは、「同盟」は、原則の点では「労働解放」団に同意見である、と再三声明していたし、理論と戦術の根本的な諸問題について独自性を主張するものではないように思えたからであった。われわれのとった立場の正しかったことは、次の事実によって間接に確証された。それは、『イスクラ』の創刊号（一九〇〇年一二月）が発行されたのとほぼ同じころに、三人の同盟員が「同盟」から分かれていわゆる「発起人グループ」なるものをつくり、（一）「イスクラ」(三二)組織の在外支部、（二）革命的組織「社会民主主義者」団、（三）「同盟」の三者にたいして、和解の交渉をすすめるための仲介の労をとろうと、申し入れたことである。まえの二組織はすぐこれに承諾の回答をあたえたが、第三の組織は拒絶の回答をした。昨年の「合同」大会の席上で一演説者が、これらの事実を述べたとき、「同盟」首脳部の一員が、この申し入れを自分たちが拒絶したのは、ひとえに発起人グループの顔ぶれにたいして「同盟」が不満だったためである、と声明したのは、事実であるが、私は、この釈明を紹介しておくことを自分の義務と考えると言わないわけにはいかない。というのは、両団体が交渉に同意したことがわかっていたのだから、「同盟」は、別の仲介者を介するなり、直接になり、この両団体に呼びかけることができたはずだからである。

一九〇一年の春に、『ザリャー』（第一号、四月）と『イスクラ』（第四号、五月）(三三)が、『ラボーチェエ・デーロ』にたいする直接の論戦を開始した。とりわけ『イスクラ』は、『ラボーチェエ・デーロ』のおこなった「歴史的転換」を攻撃した。というのは、『ラボーチェエ・デーロ』は、その『小型版』の四月号で、したがって、すでに春の諸事件が起こったあとで、テロルと「流血の」呼びかけとへの熱中にたいしてぐらついた態度を示したからである。この論戦(三四)にもかかわらず、「同盟」は、新しい「調停者」グループの仲介で和解交渉を再開することに同意するむねを答え

た。六月に、前記三組織の代表たちからなる予備会議がひらかれて、非常にくわしい「原則協定」にもとづいて協約草案を作成した。この協定は、「同盟」は小冊子『二つの大会』のなかに、また「連盟」は小冊子『「合同」大会記録文書』のなかにこれを採録している。

この原則協定（あるいは六月会議決議。こうよばれる場合のほうが多い）の内容は、われわれが一般に日和見主義の、とくにロシアの日和見主義の、ありとあらゆる現われを断固として否認することを、合同の必須の条件として提出したことを、このうえなく明瞭に示している。その第一項はこうなっている。「われわれは、プロレタリアートの階級闘争のなかに日和見主義をもちこもうとするあらゆる企て――いわゆる『経済主義』、ベルンシュタイン主義、ミルラン主義、その他に現われた企てを排撃する。」「社会民主党の活動範囲には、……革命的マルクス主義のいっさいの敵にたいする思想闘争がふくまれる。」（第四項C）。「その組織・扇動活動のあらゆる分野で、社会民主党は、ロシア・プロレタリアートの当面の任務――専制の打倒――をただの一瞬間も見うしなってはならない。」（第五項a）……「資本にたいする賃労働の日常闘争の基盤だけにとどまらない扇動」（第五項b）、……「純経済闘争と部分的な政治的要求のための闘争との段階なるものを……認めることなく」（第五項c）、……われわれは、運動の低い諸形態の初歩性……と狭さとを……「原則にまつりあげる諸潮流を批判することが、運動にとって重要であると考える。」（第五項d）。まったくの局外者でも、これらの決議をほんのすこし注意ぶかく読めば、その定式化の仕方そのものからして、これらの決議が、日和見主義者や「経済主義者」だった人々、専制の打倒の任務をただの一瞬間にもせよ忘れた人々、段階論を認め、狭さを原則にまつりあげ、等々した人々に反対したものであることが、おわかりになろう。また、「労働解放」団や、『ザリャー』および『イスクラ』が『ラボーチェエ・デーロ』にたいしておこなった論戦をすこしでも知っている人なら、これらの決議が、まさに『ラボーチェエ・デーロ』がおちいった謬見を、逐条的に排撃したものであることを、ただの一瞬間も疑わないであろう。だから、「合同」大会の席上で「同盟」員の一人が、『ラボーチェエ・デーロ』第一〇号の諸論文が書かれたのは、「同盟」が新しい「歴史的転換」をおこなったからではなく、さきの決議がはなはだしく「抽象的」だったからだ、＊と声明したときに、一演説者がそれを嘲笑したのは、完全に正しかったのである。後者は答えて言った。――決議は抽象的でないばかりか、信じられないくらい具体的である。これらの決議を一瞥しただけで、ここで「だ

れかが取りおさえられた」ことを知るのに十分である、と。

＊この主張は、『二つの大会』、二五ページにも繰りかえされている。

この最後の言いまわしがきっかけとなって、大会で特徴的な挿話がもちあがった。一方では、ベ・クリチェフスキーが、この「取りおさえられた」ということばはうっかり口をすべらしたもので、われわれが悪だくみ（「わなをかけよう」という）をいだいていたことを洩らしたものだときめこんで、このことばをとらえて、悲壮な調子で叫びだしたのである。「それはいったいだれのことだ、ここでだれが取りおさえられたのだ？」——プレハーノフが皮肉な調子でたずねた。「さあ、ほんとうにいったいだれだろう？」——ベ・クリチェフスキーが答えた。「私が同志プレハーノフの勘のにぶいのを助けてあげよう。説明してあげるが、ここで取りおさえられたというのは、『ラボーチェエ・デーロ』編集局のことなのだ（満座の哄笑）。けれども、われわれは、取りおさえさせなどしなかった！」（左方から声——そうだとすると、君たちにとってますますまずいことになる！）——他方では、「ボリバ」団（調停者グループ）の一員が、決議にたいする「同盟」の修正提案に異議をとなえながら、われわれの側の演説者を弁護するつもりで、こう言明したものである。「取りおさえられた」という言いまわしは、明らかに、論戦に熱中したあまりにうっかり口から出たものである、と。

私としては、この論議のまととなった言いまわしをつかった演説者には、このような「弁護」はありがたくなかったことと思う。私は、「だれかが取りおさえられた」という文句は、「冗談にかこつけて、本心を言った」ものと考える。われわれはつねに『ラボーチェエ・デーロ』を、ぐらついており、動揺している、といって非難してきた。だから、これからさき動揺など起こりえないようにするためには、当然、同誌を取りおさえることに努力しなければならなかったのである。この場合に悪だくみなどということはまったく問題にならない。なぜなら、ここでは、原則上のぐらつきが問題になっているのだから*である。そして、われわれは「同盟」をきわめて同志的に「取りおさえる」ことができたので、ベ・クリチェフスキー自身と、さらに「同盟」首脳部のもう一人が、六月決議に署名したくらいである。

＊すなわち、六月決議の前文のなかでわれわれは、ロシア社会民主党は全体としてつねに「労働解放」団の原則の基盤に立ってきた、そして、「同盟」の功績はとくにその出版・組織活動にあった、と述べた。言いかえれば、われわれは、われわれが「取りおさえ」ようとつとめてきたその動揺を今後

完全にやめることを条件にして、過去のすべてを水に流し、「同盟」に所属するわが同志たちの活動の有用性（事業にとっての）を認める用意が十分にあることを、表明したのである。偏見をもたない人ならだれでも、六月決議を読んで、こうとしか理解しようがないであろう。もし「同盟」が自分の「経済主義」への新しい転換（第一〇号の諸論文と修正提案とのなかで）によって決裂を引きおこしたあとで、いまになって、われわれが右のようなことばで「同盟」の功績を語ったのはうそだったのだ、ともったいぶって非難する（『二つの大会』、三〇ページ）とすれば、もちろん、そんな非難は微笑をさそうものでしかない。

『ラボーチェエ・デーロ』第一〇号の諸論文（われわれの同志たちは、開会の数日まえに大会にやってきたときに、はじめてこの号を見たのであった）は、夏から秋までのあいだに「同盟」内に新しい転換が起こったことを、はっきりと示していた。またもや「経済主義者たち」が勝ちを制して、あらゆる「風向き」に従順な編集部は、またもや「最も名うてのベルンシュタイン主義者たち」や「批判の自由」を擁護し、「自然発生性」を擁護し、マルトィノフの口をつうじて、われわれの政治的はたらきかけの範囲を「せばめる理論」（このはたらきかけそのものを複雑化するためという口実で）を説教することにとりかかったのであった。日和見主義者はどんな定式によってでもなかなか取りおさえられない、彼はどんな定式にでも簡単に賛成するだろうし、そして簡単にそれにそむくだろう、というのは、日和見主義とはまさに、いくらかでも一定した、確固たる原則をもたないことなのだから、と言ったパルヴスの適切な評言が、いまいちど確証されたわけである。日和見主義者は、きょうは、日和見主義をもちこもうとするあらゆる試みを排撃し、あらゆる狭さを排撃し、「専制の打倒をただの一瞬間も見うしなうことなく」、「資本にたいする賃労働の日常闘争の基盤だけにとどまらない扇動」をおこなう、などと、おごそかに約束する。ところが、あすになると、彼らは表現法を変えて、自然発生性や、じみな日常闘争の漸進的な歩みを擁護し、目に見える成果を約束する要求をほめそやす、などと見せかけて、昔のやり口にかえるのである。「わが『同盟』は」第一〇号所載の諸論文のなかに「会議の草案の一般的諸原則にたいするどんな異端的背反も見いださなかったし、現在でも見いださない」（『二つの大会』、二六ページ）、と「同盟」がいまなお主張しつづけているのは、意見の相違の核心を理解する能力がまったくないか、または理解しようという気持ちがないか、どちらかであることを暴露するものでしかない。

『ラボーチェエ・デーロ』第一〇号が出たあとでは、われわれとしてはただ一つの試みをやってみるほかはなかっ

た。それは、「同盟」員全体がこれらの論文や自分たちの編集局と同じ意見なのかどうかを確かめるために、一般討論を始めることであった。「同盟」は、このことでとくにわれわれに不満をいだき、われわれが「同盟」内に不和をひろめようと試みているとか、他人の内部問題に干渉しているなどといって非難している。このような非難は明らかにいわれのないものである。なぜなら、どんなそよ風にでも「方向を変える」ような選出編集部のもとでは、万事はまさに風向きできまるわけだし、しかもわれわれがこの風向きの測定をやったのは、合同を予定した諸組織の成員のほかにはだれもまじえない非公開の会議の席上だったからである。「同盟」の名で六月決議にたいする修正提案が提出されたことは、われわれから協定にたいする望みを最後の一片までも奪いさった。この修正提案は、「同盟」員の多数者が新たに「経済主義」にむかって転換し、『ラボーチェエ・デーロ』第一〇号と意見を同じくしていることを、文書のうえで証明したものであった。日和見主義の現われのなかから「いわゆる経済主義」が削除され（この二語のなかから「意味が明確でない」からといって、——こういう理由づけからは、この広範にひろまっている謬見の本質をもっと正確に規定することが必要だという結論しか出てこないにもかかわらず）、さらに「ミルラン主義」も削除されたた（ベ・クリチェフスキーが、『ラボーチェエ・デーロ』第二一三号、八三—八四ページで、またもっと率直に『フォールヴェルッ』紙上で、この「ミルラン主義」を擁護したにもかかわらず）*。六月決議は、「政治的・経済的・社会的抑圧のいっさいの形態にたいするプロレタリアートの闘争のあらゆる現われを指導する」ことが社会民主党の任務であると、はっきり指摘し、そうすることによって、これらの闘争の現われのすべてに計画性と統一をもたらすように要求していたにもかかわらず、——「同盟」は、さらにこれに、「経済闘争は大衆運動にたいする強力な刺激である」（これは、それ自体としては争う余地のないことであるが、狭い「経済主義」が存在しているさいには、曲解のきっかけをあたえずにおかないものであった）という、まったくよけいな文句をつけくわえた。それればかりではない。「ただの一瞬間も」（専制の打倒の目的を忘れない）という句を削除することによっても、また「経済闘争は大衆を積極的政治闘争に引きいれるために最も広範に適用しうる手段である」という文句をつけくわえることによっても、六月決議のなかに「政治」の直接の狭隘化さえがもちこまれたのであった。このような修正提案がもちこまれたあとでは、われわれの側の演説者たちが、「経済主義」にまたもや転換しはじめて動揺の自由を自分たちに確保しようとし

ている連中を相手に、これ以上交渉をつづけてもまったくむだだと考えて、つぎつぎに発言を拒絶しはじめたのは当然のことであった。

＊『フォールヴェルツ』紙上では、これをきっかけとして同紙の現編集局、カウツキー、『ザリャー』の三者のあいだに論戦が始まった。われわれは、この論戦をぜひともロシアの読者諸君にご紹介しよう。(訳)

「わが『同盟』の考えでは将来の協定が永続的なものとなるために sine qua non〔必須の〕条件であるまさにその事柄、すなわち『ラボーチェエ・デーロ』の独自性と自治との維持を、『イスクラ』は、協定にたいするつまずきの石と見なした。」(『二つの大会』、二五ページ)これはまったく不正確である。われわれは『ラボーチェエ・デーロ』の自治を一度も侵害しようとしたことはない。＊同誌の独自性という点については、もしこれを理論と戦術の原則的諸問題における「独自性」という意味に解するものとすれば、われわれは実際にそれを無条件に拒否した。六月決議は、まさにそのような独自性を無条件に否認することを内容としたものである。なぜなら、繰りかえしていうが、そのような「独自性」は、実践においてはつねにあらゆる種類の動揺を意味したし、われわれのあいだに支配的な、党の観点から見て耐えがたい混乱を、そのような動揺によって維持することを意味したからである。『ラボーチェエ・デーロ』は、その第一〇号所載の諸論文と「修正提案」とによって、まさにこのような独自性を保持したいという願望をはっきりと示したのであって、このような願望は、当然、不可避的に、決裂と宣戦布告とにみちびかざるをえなかった。しかし、『ラボーチェエ・デーロ』が特定の文筆上の機能に集中するという意味での同誌の「独自性」ならば、われわれはみなそれを承認するのにやぶさかでなかった。これらの機能の正しい分担のためには、おのずから次のようなものが必要であった。(一)学術雑誌、(二)政治新聞、(三)大衆的論集と大衆的パンフレット。『ラボーチェエ・デーロ』がこういう分担に同意してこそ、同誌が六月決議によって排撃された謬見を最後的に清算しようという誠実な願望をもっていることが、はじめて証明されたであろうし、またこのような分担だけが、あらゆる摩擦の可能性を取りのぞき、協定の永続性を実際に保障すると同時に、わが運動の新しい高揚とそれの新しい成功との基礎となったであろう。

＊もし、合同した諸組織の共同の最高評議会の設置にともなって編集上の打合わせ会をもつということを、自治の制限と見なさないならば。だが、六月には、こういう打合わせ会をもつことに『ラボーチェエ・デーロ』も同意したのだ。

革命的潮流と日和見主義的潮流との最後的な決裂が、なにか「組織上の」事情によって引きおこされたものでなく、まさに日和見主義の独自性を確立し、ひきつづきクリチェフスキーやマルトィノフ一派の議論によって人々の頭を混乱させたいという日和見主義者たちの願望によっておこされたものだということは、いまではもうロシアの社会民主主義者のだれひとりとして疑うことができない。

一九〇一年秋―一九〇二年二月に執筆
一九〇二年三月、シュトゥットガルトで単行本として発行
全集、第五版、第六巻、一―一八三ページ所収
邦訳全集、第五巻、三六三―五七一ページ所収

『なにをなすべきか？』にたいする訂正

小冊子『なにをなすべきか？』の一四一ページ〔本書、一七八ページ〕で私が物語った「発起人グループ」が、在外社会民主主義諸組織を和解させる試みで同グループの果たした役割についての記述に、次の訂正をくわえてほしいと私に求めてきた。――「同グループの三人の成員のうちの二人は、一九〇〇年末に『同盟』を脱退したのは一人だけで、残りの二人は、一九〇一年に『イスクラ』在外組織および『革命的組織社会民主主義者団』との会議をもつことに『同盟』の同意を得ること――これが『発起人グループ』の申し入れの趣意であった――が不可能なことを確信したのちに、はじめて脱退したのである。はじめ『同盟』首脳部は、会議を拒絶する理由として、仲介者たる『発起人グループ』にくわわっている人たちが『権限を欠いている』ことをあげて、この申し入れを拒否したのであるが、そのさい『イスクラ』在外組織とは直接に連絡をとりたいと願っている、と述べたのであった。しかし、まもなく『同盟』首脳部は『発起人グループ』に次のように通告してきた。『同盟』の分裂についての記事をのせた『イスクラ』創刊号が出たあとでは、『同盟』はその決心をかえ、いまでは『イスク

ラ』と連絡をとりたいとは思わない、というのであった。
こういうわけであるのに、『同盟』首脳部の一員が、『同盟』が会議を拒絶したのはひとえにこのまえの『発起人グループ』の顔ぶれに不満だったためだと声明したのは、どういうわけなのか？　もっとも、『同盟』首脳部が昨年六月の会議に同意したことも、同様に不可解である。なぜといって、『イスクラ』創刊号の記事は取り消されてはいないし、『同盟』にたいする『イスクラ』の否定的な態度は、六月会議以前に出た『ザリャー』第一号と『イスクラ』第四号とに、いっそうはっきり現われていたではないか。」

エヌ・レーニン

『イスクラ』、第一九号、一九〇二年四月一日
全集、第五版、第六巻、一九一ページ所収
邦訳全集、第五巻、五七二ページ所収

一歩前進、二歩後退

（わが党内の危機[一四六]）

まえがき

頑強で激烈な闘争が長期にわたっておこなわれるときには、中心的、基本的な論争点はしばらくたってからはっきり現われはじめるのが普通である。そして、運動の最後の結末はこの中心的な論争点がどう解決されるかにかかっていて、それにくらべると、闘争の小さな、とるにたりないエピソードは、どれもこれもますます後景へ退いてゆく。

もうこれで半年も全党員の注意を集めているわれわれの党内闘争の場合も、そのとおりである。だが、ここに読者に提供する闘争全体の概説のなかでは、私は、あまり興味のない、多くのこまごました事柄や、実のところなんの興味もひかない多くの泥仕合にふれなければならなかったので、まさにそのために、真に中心的で基本的な二つの点に、はじめから読者の注意をむけておきたいと思う。この二つの点は、非常に興味ふかく、また疑いもなく歴史的な意義をもっているもので、わが党内で日程にのぼっている最もさしせまった政治問題なのである。

その第一の問題は、「多数派」と「少数派」へわが党が分かれたことの政治的意義の問題である。この区分は、第二回党大会[一四七]で生じたもので、ロシアの社会民主主義者のあいだのそれ以前の区分をすべてはるかかげのほうに押しやったのである。

第二の問題は、組織問題について新『イスクラ』[一四八]のとっている立場の原則的意義――この立場が実際に原則的なものであるかぎりで――の問題である。

第一の問題は、われわれの党内闘争の出発点、その根源、その諸原因、その基本的な政治的性格の問題である。第二の問題は、この闘争の最終結果、その結末の問題であり、原則の分野にはいるものを全部集計し、泥仕合の分野にはいるものを全部差し引いて得られる、原則上の総括の問題である。第一の問題への解答は、党大会での闘争を分析することによって得られ、第二の問題への解答は、新『イスクラ』の新しい原則的内容を分析することによって得られ

る。私の小冊子の一〇分の九を占めているこの二つの分析からでてくる結論は、「多数派」はわが党の革命的翼であり、「少数派」はその日和見主義的翼であるということ、現在この両翼を分けへだてているおもな意見の相違は、綱領の問題や戦術上の問題ではなくて、もっぱら組織上の問題に帰着するということ、新『イスクラ』が自分の立場を深めようとすればするほど、またこの立場が補充をめぐる泥仕合からぬけだせばぬけだすほど、新『イスクラ』のなかにますますはっきり現われてくる新しい見解の体系は、組織問題における日和見主義である、ということである。

わが党の危機にかんする現存の文献の主要な欠陥は、事実を研究し解明する点では、党大会の議事録がほとんどまったく分析されていないことであり、組織問題の基本原則を明らかにする点では、規約第一条を定式化し、この定式を擁護するにあたって同志マルトフと同志アクセリロードがおかした根本的な誤りと、他方、組織問題についての『イスクラ』の現在の原則的見解の全「体系」（ここで体系が問題になりうるかぎりで）とのあいだには疑いもなく関連があるのに、その関連が分析されていないことである。「多数派」の文献には第一条をめぐる論争の意義がすでになんども指摘されているのに、どうやら、『イスクラ』の現編集局はこの関連に気がついてさえいないようである。

実際には、同志アクセリロードと同志マルトフは、いま、第一条についての自分たちの当初の誤りを深め、押しすすめ、拡大しているにすぎない。実際には、すでに第一条をめぐる論争のなかに、組織問題における日和見主義者の立場全体が現われはじめていたのである。すなわち、あいまいな、結束の固くない党組織の弁護、党大会および党大会でつくられた諸機関から出発して、上から下へ党を建設してゆくという思想（いわゆる「官僚主義的」思想）にたいする彼らの敵意、どの教授にも、どの中学生にも、また「どのストライキ参加者」にも自分を党員と見なす権利をあたえることによって、下から上へすすもうとする彼らの志向、党員に党の承認する組織の一つに所属するように要求する「形式主義」にたいする彼らの敵意、「組織関係を精神的に承認する」だけの心がまえしかないブルジョア・インテリゲンツィアの心理への彼らの傾斜、日和見主義的な迷論と無政府主義的な空文句に引きずられやすい彼らの性向、中央集権主義に反対して自治主義を支持する彼らの傾向、一言でいえば、今日新『イスクラ』のなかに爛漫と咲きほこっていて、はじめの誤りを完全にまた一目瞭然にはっきり示すのをますます容易にしている事柄のすべてが、すでにそこに現われはじめていたのである。

党大会の議事録についていえば、それがまことに不当に

も無視されているのは、ひとえにわれわれの論争が泥仕合でうずまっているからであり、そのうえ、おそらくはこの議事録には、苦すぎる真実が多すぎるからであろう。党大会の議事録は、この種のものとしてただ一つの、正確で、完全で、全面的で、豊富で、確実だという点でかけがえのない、わが党内の実情の一覧図をあたえており、運動の参加者たち自身が描きだした見解と気分と計画の一覧図、党内に存在するいろいろな政治的色合いについてそれらの相対的な力や相互関係や闘争を示す一覧図をあたえている。われわれがどれだけ実際に旧来の純サークル的な結びつきのあらゆる残存物を一掃して、それを単一の大きな党的な結びつきとおきかえることができたかをわれわれに示してくれるものは、ほかならぬ党大会の議事録であり、またこの議事録だけである。もし自覚ある態度で自分の党の仕事に参加したければ、党員はみな、わが党大会を綿密に研究しなければならない。まさに研究しなければならない。というのは、議事録にふくまれている大量のなまの材料を読むだけでは、大会の情景はわからないからである。綿密に自主的に研究してはじめて、演説の簡単な梗概や、討論の無味乾燥な抜粋や、小さな（見たところ小さな）諸問題についての小ぜりあいを一つの全体に融合させ、一人ひとりのおもだった演説者の姿を生きいきと党員のまえに浮かびあがらせ、党大会の代議員のそれぞれのグループの政治的特性全体を明らかにすることができる（またそうするようにつとめなければならない）。本書の筆者は、党大会の議事録の広範で自主的な研究に刺激なりともあたえることができれば、自分の労作がむだではなかったと考えるであろう。

社会民主党の敵対者にむかってなお一言いっておこう。彼らはわれわれの論争をながめてほくそえみ、顔をしかめてみせる。彼らは、もちろん、わが党の欠陥や弱点を論じている私の小冊子の個々の箇所を、自分たちの目的に利用するために抜きだそうとするだろう。だが、ロシアの社会民主主義者はすでに十分に砲火をあびてきているので、こんな、つねられたほどのことでは心をうごかさず、そんなことにはおかまいなく、自己批判をおこない、自分の欠陥を容赦なく暴露する活動をつづけてゆくだろう。そして、これらの欠陥は、労働運動の成長によってかならず不可避的に克服されるであろう。ところで、敵対者の諸君は、彼らの「党」内の実情について、わが党の第二回大会の議事録があたえているものにほんのわずかでも似かよった一覧図を提供するよう、やってみるがよい！

エヌ・レーニン

一九〇四年五月

(a)　大会の準備

だれにも二四時間は自分の裁判官を呪う権利がある、という格言がある。どの党のどの大会でもそうであるように、わが党大会もまた、指導者の地位をねらって敗北した若干の人たちにたいする裁判官であった。いま、「少数派」のこれらの代表者は、人を感動させるほどのおめでたさで「自分の裁判官を呪って」おり、大会の信用をおとさせ、大会の意義と権威をけなそうと、極力努力している。こうした志望が最もくっきりと現われたのは、おそらく、大会を至上の「神」とみる考えに憤慨している『イスクラ』第五七号の一実践家の論文(二九)のなかであろう。これは、新『イスクラ』の特徴をきわめてよく示しているので、黙過するわけにはいかない。大会の拒否した人物が大半を占めている編集局は、一方では、ひきつづき「党」編集局と自称しながら、他方では、大会は神ではない、と主張している連中に抱擁の手をひろげている。なんと気持ちのよいことではないか。そのとおりだ、諸君。大会は、もちろん、神ではない。だが、大会で敗北したあとで大会を「こきおろし」はじめる連中を、どう考えたらいいのか？

じっさい、大会準備の歴史上の主要な事実を思いだしてみたまえ。

『イスクラ』は、最初から、同紙の発刊に先だつ一九〇〇年の予告のなかで、統合するまえにまず分界線を引かなければならない、と声明した(三〇)。『イスクラ』は、一九〇二年の会議(三一)を、党大会ではなくて、私的な打合わせ会にするように努力した。* 『イスクラ』は、一九〇二年の夏と秋にきわめて慎重に行動しながら、この打合わせ会で選ばれた組織委員会を再建しようとした。ついに、分界線を引く仕事は終わった、——われわれがみな認めているように、終わった。組織委員会は一九〇二年の暮れに結成された。『イスクラ』は、組織委員会の確立を歓迎し、——第三二号の編集局論文で——党大会の招集は最も緊急な、さしせまった必要事である、と声明した(三二)。こういうわけであるから、第二回大会の招集を急ぎすぎたといってわれわれを責めるのは、不当もはなはだしいのである。われわれは、まさに七度測って一度裁てという準則にしたがって行動した。われわれには、裁ってしまったあとで同志諸君が泣きごとを言いはじめたり、測りなおしを始めたりすることはあるまいと信じてよい、道義上の権利が十分にあった。

* 第二回大会議事録、二〇ページを見よ。

組織委員会は、第二回大会のきわめて綿密な（形式主義的で官僚主義的な、と言う人もいよう。この人たちはいま、

こういうことばで自分の政治的無節操をおおいかくしている）規程を作成し、この規程をすべての委員会に承認させて、最後にそれを確認した。とりわけ、規程の第一八条にはこう規定している。「大会のすべての決定と大会のおこなったすべての選挙とは、すべての党組織にたいして拘束力をもつ党決定である。これにたいしては、なんぴとも、どんな口実によっても、異議をとなえることはできないし、次の党大会によらなければそれを廃止または変更することはできない」*と。当時自明なこととして一言の文句もなしに承認されたこのことばは、それ自体としては、なんと罪のないものではなかろうか。ところがそれが、いまではなんと奇妙に、まるで「少数派」に申し渡された判決のように聞こえることだろう！　このような条項はどういう目的で設けられたのであろうか？　形式をととのえるためだけであろうか？　もちろん、そうではない。この決定は必要だと思われたし、また実際に必要であった。というのは、党は幾多の細分した、独立のグループからなっていたので、それらのグループが大会を認めないことが予想されないでもなかったからである。この決定は、まさにすべての革命家の自由意志をあらわしていた（このことばは、いまでは非常にしばしば、また非常に不適当につかわれていて、むしろ、気まぐれな、という形容詞がふさわしいところを、遠まわしに、自由な、という用語で言いあらわしている）。この決定は、ロシアのすべての社会民主主義者が名誉にかけて誓約をとりかわしたのにひとしかった。それは、大会に関連した非常な労苦や危険や出費がむだにならないように、また大会が茶番劇になってしまわないように、保障するはずであった。それは、大会の決定や選挙を認めないことはすべて背信行為であると、あらかじめ定めていた。

* 第二回大会議事録、二二一二三ページと三八〇ページを見よ。

では、大会は神ではなく、その決定は神聖なものではないという新しい発見をした新『イスクラ』は、いったいだれのことをあざわらっているのか？　同紙の発見は、「新しい組織上の諸見解」をふくむものか、それとも古い犯跡をくらまそうとする新しい試みをふくむにすぎないのか？

(b) 大会におけるグループ分けの意義

こうして、大会は、きわめて綿密な準備ののちに、きわめて完全な代表選出方法にもとづいて招集された。大会の構成が正当なこと、また大会の決定が無条件に拘束力をもつことを、だれもが認めていたことは、大会成立後の議長の声明（議事録、五四ページ）のなかにも現われていた。

では、大会の主要な任務はなににあったか？『イスクラ』が提出し仕上げた原則上、組織上の基礎のうえにほんとうの党をつくりだすことにあった。大会がほかならぬこの方向で活動しなければならなかったことは、『イスクラ』の三年間の活動と、各地の委員会の大多数が『イスクラ』を承認した事実とによって、まえもって決定されていた。イスクラの綱領と方向が、党の綱領と方向にならなければならなかったし、イスクラの組織計画が、党の組織規約として確認されなければならなかった。しかし、いうまでもなく、こうした結果は闘争なしには達成できなかった。というのは、大会への代表選出方法が完全であったので、それまで『イスクラ』にたいして断固たる闘争をおこなってきたような組織（ブンドや『ラボーチェエ・デーロ』）や、またロさきでは『イスクラ』を指導的機関紙として承認しながら、実際には自分の独自の計画を追求し、原則上の点でのぐらつきを特徴としてきたような諸組織（「ユージヌィ・ラボーチー」グループや、これに同調していた若干の委員会の代議員たち）の大会出席も保障されていたからである。こういう条件のもとでは、大会は、イスクラの潮流の勝利をめざす闘争の舞台にならざるをえなかった。大会が実際にこのような闘争になったことは、大会の議事録をいくらかでも注意ぶかく読む者にはだれにも、すぐに明らかになるであろう。いまのわれわれの任務は、大会でいろいろな問題をめぐって現われた最も主要なグループ分けをくわしくあとづけ、大会のそれぞれの主要グループの政治的特性を議事録の正確な資料にもとづいて再現することにある。『イスクラ』の指導のもとに、大会で単一の党に融合するはずであった、いろいろなグループや潮流や色合いは、いったいどのようなものであったか？――これこそ、われわれが討論と表決とを分析することによって明らかにしなければならないことである。この事情を明らかにすることは、われわれ社会民主主義者は実際にはなんであるかを研究するためにも、不一致の原因を理解するためにも、最大の重要性をもっている。だからこそ、私は〔ロシア革命的社会民主主義在外〕連盟大会での演説[一三]でも、新『イスクラ』編集局あての手紙[一四]でも、まさに種々なグループ分けの分析を前面に押しだしたのである。私の論敵である「少数派」の代表者たち（とその先頭に立っているマルトフ）は、問題の本質をすこしも理解していなかった。連盟の大会では、彼らは、自分たちにくわえられた日和見主義への転換という非難にたいして「弁明しながら」、部分的な訂正をするにとどめ、大会におけるグループ分けについて、いくらかでも違った一覧図を描いてみようとさえしなかった。いまマルトフは、『イスクラ』（第五六号）

で、大会における種々な政治的グループを正確に区分けしようとする試みはすべて「サークル政治」にすぎないかのように見せかけようとしている。同志マルトフよ、きつい言い方をしたものだ！　だが、新『イスクラ』のきついことばは一つの独特な性質をもっている。大会に始まる不一致のすべての推移を正確に再現してみさえすればよい。そうすれば、このきついことばはみな、そっくりそのまま、まず第一に、現在の編集局にはねかえってゆくのである。サークル政治をうんぬんしているいわゆる党編集局員諸君、自分をふりかえってみたまえ！

党大会におけるわれわれの闘争の諸事実は、いまではマルトフにははなはだ不愉快なものなので、彼はそれをすっかりごまかそうとつとめている。彼はこう言っている。「イスクラ派とは、党大会の席上や、党大会前に、『イスクラ』との完全な連帯性を表明し、『イスクラ』の綱領とその組織上の見解を擁護し、その組織政策を支持した者のことである。こうしたイスクラ派は大会に四〇名以上もいた。それだけの票が『イスクラ』の綱領と『イスクラ』を党の中央機関紙として承認するという決議とに賛成して投ぜられた」と。大会の議事録をひらいてみたまえ。そうすれば、綱領は、棄権したアキーモフを除いて、全員によって採択されたこと（二三三ページ）がおわかりになろう。こうして、同志マルトフは、ブンド派も、ブルケールも、マルトィノフも、『イスクラ』との「完全な連帯性」を証明し、『イスクラ』の組織上の見解を擁護した、とわれわれに信じさせようとしているのである！　これは滑稽なことである。ここでは、大会後には大会参加者はみな平等な権利をもつ党員になった（それとても、ブンド派は退場したのだから、みなというわけではない）ということと、大会の席上で闘争を引きおこしたグループ分けとが、混同されている。大会後にどんな分子から「多数派」と「少数派」が形成されたかを研究することが、綱領を承認したという公式の文句とすりかえられているのである！

『イスクラ』を中央機関紙として承認する件にかんする投票をとってみたまえ。そうすれば、いま同志マルトフがこんなことには惜しいほどの大胆さで主張したところでは、『イスクラ』の組織上の見解と組織政策とを擁護したというほかならぬあのマルトィノフが、決議を二つの部分に分けるよう、すなわち、たんに『イスクラ』を中央機関紙として承認することと、『イスクラ』の功績を認めることとの二つに分けるよう主張したことが、おわかりになろう。決議の前半（『イスクラ』の功績の承認、『イスクラ』との連帯性の表明）を表決に付したさいには、賛成は三五票だけで、反対が二票（アキーモフとブルケール）、そして一

一票（マルトィノフ、五名のブンド派、編集局の五票、つまり私とマルトフがもっていた各二票とプレハーノフの一票）が棄権した。したがって、ここにも、マルトフの現在の見解にとって最も有利な、彼自身の選んだこの例によっても、反イスクラ・グループ（五名のブンド派と三名のラボーチェエ・デーロ派）が、まったくはっきりと現われているわけである。決議の後半——理由文はなにもつけず、連帯性を表明せずに、『イスクラ』を中央機関紙として承認すること（議事録、一四七ページ）——にたいする賛成投票をとってみたまえ。賛成しているのは、現在のマルトフがイスクラ派に数えている四四票である。全部で五一票あったのだから、棄権した編集局員の五票を差し引くと四六票残る。そのうち二票は反対投票した（アキーモフとブルケール）。したがって、残りの四四票のなかには五票のブンド派も全部はいっている。そこで、ブンド派は大会で『イスクラ』との完全な連帯性を表明した、ということになる。公式の『イスクラ』の公式の歴史には、こう書かれている！　先まわりして、この公式の真理のほんとうの動機を読者に説明しておこう。それは、『イスクラ』の現在の編集局は、もしブンド派やラボーチェエ・デーロ派が大会から退場さえしなかったら、真の党編集局（現在のような、えせ党編集局ではなくて）になることができたろうし、またなっただろう、と言いたいのである。だからこそ、現在のいわゆる党編集局のこれらの最も忠実な番人を、「イスクラ派」にまつりあげなければならなかったのである。だが、このことについてはあとでくわしく述べることにしよう。

次に、こういう疑問が起こる。もし大会がイスクラ分子と反イスクラ分子との闘争であったなら、両者のあいだを動揺する中間的なぐらつき分子はいなかったのか？　わが党のことや、あらゆる大会が普通に示す特徴やをいくらかでも知っている者ならだれでも、この質問にたいして、そういう分子はいた、と a priori に〔まえもって〕答えたいところであろう。いまでは、同志マルトフは、これらのぐらつき分子のことを思いだすのを非常にいやがっており、「ユージヌィ・ラボーチー」グループとそれに引きつけられていた代議員たちとを典型的なイスクラ派として描き、またわれわれと彼らとの意見の相違をとるにたりない、重要でないもののように描いている。幸いにも、いまわれわれのまえには議事録の完全なテキストがある。したがって、われわれは、記録文書の資料にもとづいて、この問題——いうまでもなく事実の問題——に解答をあたえることができる。われわれが大会における一般的なグループ分けについて以上に述べたことは、この問題への解答のつもりで述

としたものにすぎない。

政治的なグループ分けを分析することなしには、またあれこれの色合いと色合いのあいだの闘争としての大会の一覧図なしには、われわれの意見の不一致を理解することはまったくできない。ブンド派までもイスクラ派のなかにいれることによって、いろいろな色合いの相違を塗りつぶそうとするマルトフの試みは、問題を回避するものにすぎない。大会にいたるまでのロシア社会民主党の歴史にもとづいて、すでに a priori に次の三つのおもなグループが(さらに確かめ、くわしく研究すべきものとして)認められる。すなわち、イスクラ派、反イスクラ派、ぐらついた、動揺的な、無定見な分子がそれである。

(c)　大会のはじめ――組織委員会事件

しだいにはっきり現われてくるいろいろな政治的色合いを系統的に記録するためには、大会の会議の順序にしたがって大会における討論と表決を分析するのが、最も適当であろう。ぜひとも必要な場合にかぎって、時間的な順序からそれて、密接に関連した問題や、同型のグループ分けをいっしょに考察することにしよう。公平を期するために、われわれは、すべての主要な表決をあげるようにつとめよう。もちろん、われわれが無経験で、素材をいろいろな委員会の会議と全体会議とのあいだに区分する点で不手ぎわだったために、またいくぶんは、議事妨害にもひとしい議事引き延ばしのために）こまかな問題についての多くの表決は、はぶくことにする。

色合いの相違を明るみにだしはじめた討論を引きおこした最初の問題は、「党内におけるブンドの地位」の件を第一順位（大会の「議事日程」の）におく問題であった（議事録、二九―三三ページ）。プレハーノフ、マルトフ、トロツキー、および私が擁護したイスクラ派の見地からすれば、この点について疑問の余地はすこしもなかった。ブンドが党から脱退したことは、われわれの考えの正しかったことをまざまざと示した。もしブンドに、われわれといっしょにすすむ意志がなく、党の大多数が『イスクラ』とともに信奉していた組織上の原則を認める意志がないのなら、われわれがいっしょにすすんでいるような「ふりをして」、ただ大会を長びかせる（ブンド派が実際にそれを長びかせたように）のは、無益で、無意味なことであった。問題は文献のうちですでに十分に明らかにされていたし、多少でも考えぶかい党員ならだれにも、あとはただ、問題を公然

かつ）か、そのどちらかを率直に、正直に選ぶだけであることは明らかであった。

その政策全体をつうじてぬらりくらりとしているブンド派は、この場合にもぬらりくらりとして、問題を引き延ばそうとした。同志アキーモフが彼らに合流した。彼は、明らかに「ラボーチェエ・デーロ」の味方の全員を代表して、『イスクラ』との組織上の意見の相違をただちにもちだしたのである（議事録、三一ページ）。同志マホフ（彼は、すこしまえに『イスクラ』との連帯性を表明した（！）ニコラーエフ委員会の二票をもっていた）が、ブンドと「ラボーチェエ・デーロ」に味方した。同志マホフにとっては、問題がまったく明らかでなく、彼は、「民主主義的組織か、それとも反対に」（この点に注意！）「中央集権制か、という問題」もまた「むずかしい問題」の一つだと考えていた、――現在のわが「党」編集局の大半とまったく同じように！　もっとも、大会では彼らはまだこの「むずかしい問題」に気がついていなかったが。

こうして、ブンド、「ラボーチェエ・デーロ」および同志マホフがイスクラ派に反対したのであるが、彼らは合わせて一〇票を、まさにわれわれに反対して投じられたその一〇票をもっていたのである（三三ページ）。賛成票は三〇票であった。これは、あとで見るように、イスクラ派の票がそれを中心としてしばしば変動した、その票数である。一一票が棄権したことがわかる。明らかに、あいたたかう「両当事者」のどちらにもつかなかったのである。しかも、われわれがブンドの規約第二条[三]（この第二条を否決したことがブンドを脱党させた）を表決したとき、第二条に賛成した票と棄権した票を合わせてやはり一〇票であったこと（議事録、二八九ページ）、しかも、棄権したのは、ほかならぬ三名のラボーチェエ・デーロ派（ブルケール、マルトィノフ、アキーモフ）と同志マホフであったことを知るのは、興味ふかいことである。ブンド問題の順位の問題にかんする投票が示したグループ分けが、偶然のものでなかったことは、明らかである。これらの同志のすべてが、審議の順序という技術的な問題についてだけでなく、実質的な点でも、「イスクラ」と意見がくいちがっていたことは、明らかである。「ラボーチェエ・デーロ」の場合には、この本質的な不一致はだれにも明らかであるが、同志マホフは、ブンドの脱退についての演説のなかで自分の立場を比類のない仕方で特徴づけた（議事録二八九―二九〇ページ）。この演説には、立ちいって調べる値うちがある。同志マホフはこう言っている。連合を否認した決議がなされた以上、「ロシア社会民主労働党内でのブンドの地位の問

題は、自分にとっては、原則的な問題ではなくなり、歴史的に形成された民族的組織にたいする現実政策の問題になった。この場合、私は——と演説者はつづけた——、われわれの表決の結果として起こりうるあらゆる結果を考慮しないわけにはいかなかった。そこで、私は第二条全体に賛成投票したいと思った」と。同志マホフは、「現実政策」の精神をりっぱに体得している。つまり、彼は、原則上はすでに連合を否認したので、だから、実践のうえでは、この連合を実現するような規約の条項に賛成投票したいと思った、というのである！　そして、この「実践的な」同志は自分の深遠な原則的立場を、次のようなことばで説明した。「しかし」（これは、シチェドリーンの有名な「しかし」である！）、「他のすべての大会参加者がほとんど一致した投票をした以上、私が賛成投票するか反対投票するかは、原則的な性質（!!）をもつにすぎず、実践的性質をもちえなかったので、私は、この場合の自分の立場と、この条項に賛成投票したブンドの代議員たちが擁護している立場との違いを、原則的に」……（主よ、このような原則性からわれわれを救いたまえ！）……「強調するために、棄権するほうを選んだのである。逆に、もしブンドの代議員たちが、まえにそうすると主張したようにこの条項の表決にあたって棄権していたなら、私はこの条項に賛成投票したであろう」と。なにがなにやら、さっぱりわからない！　原則的な人間は、すべての人が、反対、と言っているときには、賛成、と言っても実践的に無益だという理由で、賛成、と声高に言うのをさしひかえるというのである。

「ブンド問題」を第一順位におく問題の表決につづいて、大会には「ボリバ」団の問題がもちあがった。この問題もまた、きわめて興味あるグループ分けをもたらしたし、また大会の最も「むずかしい」問題、すなわち、中央諸機関の人的構成の問題と密接に結びついていた。大会の構成を決定するための委員会〔資格審査委員会〕は、組織委員会の二回の決定（議事録、三八三ページと三七五ページを見よ）と、委員会における組織委員会の代表たちの報告（三五ページ）とにしたがって、「ボリバ」団を招くことに反対を表明した。

組織委員会の一員である同志エゴーロフは、「『ボリバ』の問題」（「ボリバ」の問題であって同団のあれこれの成員の問題でないことに注意せよ）「は私にとって新しい問題である」と声明し、休憩を求めた。組織委員会によって二回も決定された問題が、組織委員会の一員にとって、いったいどうして新しい問題であったのかは、いまだに不明の闇につつまれたままである。休憩のあいだに、たまたま大会に出席していたメンバーだけで（元の「イスクラ」組織

の成員を代表する若干の組織委員は、大会に出席していなかった*、組織委員会の会議がひらかれた（議事録、四〇ページ）。「ボリバ」について討論が始まった。ラボーチェエ・デーロ派は賛成した（マルトィノフ、アキーモフ、ブルケール。三六—三八ページ）。イスクラ派（パヴローヴィチ、ソローキン、ランゲ、トロツキー、マルトフ、その他）は反対した。大会はふたたび、すでにわれわれにおなじみのグループに分かれた。「ボリバ」のことで頑強な闘争が始まり、同志マルトフは、とくべつくわしい（三八ページ）「戦闘的な」演説をした。彼はそのなかで、ロシア国内のグループと在外グループの「代表選出権の不平等」を正当にも指摘し、在外グループに「特権」をあたえるのは「よい」ことではあるまい（大会後に起こった出来事の見地からみて、今ではとくに教訓に富んだ金言である！）、「なんらの原則上の理由にもよらない細分を特徴としていた党内の組織上の混沌」を奨励すべきではない（わが党大会の……「少数派」には図星である！）、と指摘した。発言者のリストを締め切るまで、「ラボーチェエ・デーロ」の味方のほかにはだれも、公然と、理由をあげて「ボリバ」を支持する者はなかった（四〇ページ）。同志アキーモフと彼の同僚たちに公平を期するために言っておかなければならないが、少なくとも彼らは、言葉じりをにごしたり、真意を隠したりせずに、公然と自分の方針を遂行し、自分たちの言いたいことを公然と述べた。

* この会議については、組織委員会の一員で、大会の開催前に全員一致で編集局の受任者、七人目の編集局員に選ばれたパヴローヴィチの『手紙』を見よ（連盟議事録、四四ページ）。(三五)

発言者のリストを締め切ったのちに、すなわち、本題についてはもう発言できなくなったときに、同志エゴーロフは、「たったいま採択された組織委員会の決定を大会が聴取するよう、せつに要求した」。大会参加者たちがこういうやり方に憤慨したのは、また同志プレハーノフが議長として、「どうして同志エゴーロフが自分の要求を固執できるのか、当惑する」と言ったのは、異とするにたりない。大会の全員のまえで、公然と、明確に問題の本質にふれた意見を述べるか、それともまったく意見を述べないか、二つに一つであるように思われるであろう。ところが、発言者のリストを締め切らせておいて、そのあとで、「結語」にかこつけて、組織委員会の新しい決定——まさに審議ずみの問題についての——を大会に提出するのは、闇討ちをかけるのにひとしい！

会議は昼食後に再開されたが、まだ当惑を脱していなかったビューローは、「正規の手続」をやぶって、「非公式の説明」という、大会では異例な場合にしか用いられない、

最後の手段にうったえることを決定した。組織委員会の代表ポポーフは、パヴローヴィチ一人の反対で全員によって採択された組織委員会の決定（四三ページ）、すなわち、リャザーノフを招くことを大会に提案するという決定を伝えた。

パヴローヴィチは、自分は組織委員会のこの会合が適法なものであることを否定してきたし、いまも否定している、また組織委員会の新しい決定は「同委員会の以前の決定に反している」、と声明した。この声明は大騒ぎをおこした。やはり組織委員会の一員で、「ユージヌィ・ラボーチー」グループの一員である同志エゴーロフは、実質的な回答を避けて、規律の問題に重点を移そうとした。組織委員会はパヴローヴィチの異議を討議して「パヴローヴィチの少数意見を大会に伝えないこと」に決定したのだから、同志パヴローヴィチは党規律に違反したのだ（！）というのである。討論は党規律の問題に移され、プレハーノフが、大会の割れるような拍手をうけながら、同志エゴーロフをさとして「われわれのあいだには拘束的委任はない」と説明した（四二ページ。三七九ページの大会規程第七条、「代議員の全権を拘束的委任によって制限してはならない。自分の全権を行使するさい、代議員はまったく自由で独立的である」を参照せよ）。「大会は最高の党機関である」、したがって、だれであれ代議員が例外なくすべての党生活上の問題について直接に大会にうったえるのを、どういうやりかたででも拘束する者こそ、党規律と大会規程とに違反しているのである。こうして、論争されている問題は、サークル根性か党精神かという二者択一に帰着する。すなわち、いろいろな合議体やサークルの仮想の権利や規約のために、大会代議員の権利を制限するか、それとも、真の公式の党機関がつくられるまで、大会の前で下部機関や古い小グループを全部完全に——口さきだけではなくて実際に——解散するか、ということである。読者は、すでにこのことからして、実際に党を復活することを目的とした大会の当初（第三回会議）におこなわれたこの論争が、どんなに大きな原則的な重要性をもっていたか、おわかりになろう。この論争には、旧来のサークルや小グループ（「ユージヌィ・ラボーチー」のような）と復活しようとしている党との衝突が、いわば集中されていた。そして、反イスクラ諸グループはたちまちその正体を暴露した。ブンド派のアブラムソーンも、『イスクラ』の現在の編集局の熱心な同盟者である同志マルトィノフも、われわれにおなじみの同志マホフも、みなパヴローヴィチに反対して、エゴーロフと「ユージヌィ・ラボーチー」グループとを支持したのである。いまマルトフやアクセリロードと張り合って、組織上の

「民主主義」をひけらかしている同志マルトィノフは、……下級機関をつうじなければ上級機関に上訴することのできない軍隊まで、引合いにだした!!　この「結束した」反イスクラ的反対派の真の意味は、大会に出席していた者、あるいは大会以前のわが党の内部の歴史を注意してあとづけてきた者にはだれにも、まったく明らかであった。反対派の任務（おそらく、反対派のすべての代表者が、かならずしもつねに意識していたわけでさえなく、ときには惰性で固守していた任務）は、イスクラ的原則にもとづいて創設される広範な党に吸収されないように、小グループの独立性や孤立性や郷党的利益を守ることにあった。

当時まだマルトィノフと手をつなぐにいたっていなかった同志マルトフも、ほかならぬこの見地からこの問題をとりあげた。同志マルトフは、「自分の所属している下級グループにたいする革命家の義務をこえないような党規律観をもっている」人たちに反対して、きっぱりと立ちむかった、正当にも立ちむかった。「単一の党内に、強制力をもつ」「グループをつくることは、（傍点はマルトフのもの）だんじて許されない」——マルトフはサークル根性の擁護者たちにこう説明した、大会の終りごろの、また大会後の自分自身の政治的行動を、このことばで糾断することになろうとは予想もせずに……。強制力をもつグループをつくることは、組織委員会には許されないが、編集局にはまったく許される、というわけだ。強制力をもつグループをつくることを、マルトフは、中央部から物事を見ているときには非難するが、自分が中央部の構成に不満をもつようになったそのときからは、擁護するのである。……

同志マルトフがその演説のなかで同志エゴーロフの「大きな誤り」のほかに、さらに組織委員会があらわに示した政治的ぐらつきをとくに強調した事実を知るのは、興味ふかい。マルトフは、正当にも憤慨してこう述べた。「組織委員会の名で、委員会〔資格審査委員会〕の報告」（私のほうでつけくわえて言えば、これは組織委員たちの報告にもとづいたものであった——四三ページ、コリツォーフのことば）「や組織委員会のこれまでの諸提案に相反する提案がなされた」（傍点は私のもの）と。ごらんのように、当時は、つまり彼の「転換」以前には、マルトフは、「ボリバ」のかわりにリャザーノフをもってきたところで、組織委員会の行動の完全な矛盾と無定見はいささかも取りのぞかれるものでないことを、はっきり理解していたのである（党員は、マルトフが転換後にこの問題をどう考えていたかを、連盟大会議事録、五七ページから知ることができる）。マルトフは、そのとき、規律問題の検討だけにとどまりはしなかった。彼はまた組織委員会に、「変更を必要

とするようなどんな新事態が起こったのか?」(傍点は私のもの)と、率直に質問した。じっさい、組織委員会は、自分の提案をもちだすにあたって、自分の意見を公然と擁護する――アキーモフその他が自分の意見を擁護したように――だけの勇気さえ、もちあわせていなかったのである。マルトフはこのことを否定している(連盟議事録、五六ページ)が、大会議事録を読んだ者には、マルトフがまちがっていることがわかるであろう。組織委員会を代表して提案をおこなったポポーフは、提案理由については一言も述べなかった(党大会議事録、四一ページ)。エゴーロフは、問題を規律の問題に移してしまい、本題にふれることとしては、次のように言っているにすぎない。「組織委員会に、新しい意見が生まれたのか、またどんな意見が生まれたのか、それはわからない)……「委員会がだれかを提案するのを忘れたということも等々もありうる」(この「等々」は、この演説者のただ一つの逃げ場所である。なぜなら、組織委員会は、大会まえに二回も討議し、また小委員会で一回討議した「ボリバ」の問題を忘れるはずがなかったからである)、「組織委員会がこの決定を採択したのは、『ボリバ』団にたいする自分の態度を変えたからではなくて、将来の党の中央組織がその活動の第一歩を踏みだすにあたってその行く手からよけいな岩を取りのぞきたい、と思うからである。」これは、趣旨説明ではなく、まさに趣旨説明を避けるものだ。まじめな社会民主主義者ならだれでも(そして、われわれは、大会参加者のだれについてでも、そのまじめさをあえて疑うものではない)、自分が暗礁だと見なすものを取りのぞくように、しかも自分が適切と認める方法で取りのぞくように、心がけている。趣旨説明ということは物事についての自分の見解を説明し、正確に表明することであって、わかりきったことを言ってお茶をにごすことではない。そして「『ボリバ』にたいする自分の態度を変え」ずには、趣旨を説明することはできなかったであろう。なぜなら、組織委員会が以前にくだしたこれと反対の決定も、やはり暗礁を取りのぞくことを心がけたものであったが、ただこの「岩」をいまとは反対のところに見ていたからである。同志マルトフは、この論拠をきわめて鋭く、きわめて根本的に攻撃し、それを「言いのがれ」ようという願望から生まれた「こせこせした」論拠だとよび、組織委員会にむかって、「人がどう言うだろうかと気づかうな」と忠告した。同志マルトフはこのことばによって、大会で大きな役割を演じたあの政治的色合い――自主性のなさ、こせこせしたやり方、自身の方針の欠如、人がどう言うだろうかという気づかい、二つのはっきりした陣営のあいだ

でのたえまない動揺、自分の *credo*〔信条〕を公然と述べるのを恐れること、一言でいえば、「沼地根性」*を特徴とする政治的色合いの核心と意味を、みごとに特徴づけたのである。

* いま党内には、このことばを聞いておぞけをふるい、非同志的な論戦だと叫ぶ者がいる。場ちがいの儀礼……にわざわいされた、なんと奇妙な、感覚の歪みであろう！　内部闘争を経てきた政党で、闘士たちのあいだを動揺するぐらつき分子をよぶのにつねにつかわれるこの用語なしにすましえたものは、ほとんど一つもなかった。すばらしくしっかりしたドイツ人は、枠内に内部闘争を押しこめることを解しているドイツ人は、《versumpft》〔「沼地の」〕ということばに腹をたてたり、おぞけをふるったり、滑稽な儀礼的な prüderie〔猫かぶり〕を発揮したりしてはいない。

ぐらつき分子のグループのこの政治的無節操の結果の一つは、けっきょく、ブンド派のユーヂン（五三ページ）以外にはだれも、「ボリバ」グループの成員のひとりを招くという決議案を大会に出さなかったことであった。ユーヂンのこの決議案には、五名が賛成投票したが、どうやら、これはみなブンド派らしい。つまり、動揺分子はまたもや寝がえってしまったのである！　中間派の票数がほぼどれほどの大きさであったかは、この問題についてのコリツォーフの決議案とユーヂンの決議案とへの投票が示している。(一〇七)

イスクラ派に賛成したのは三二票（四七ページ）で、ブンド派に賛成したのは一六票であった。すなわち、八名の反イスクラ派の票のほかに同志マホフの二票（四六ページ）、「ユージヌィ・ラボーチー」グループの成員の四票、それ以外に二票あった。われわれは、この配分がけっして偶然とは考えられないことを、すぐに示そう。しかし、はじめに、この組織委員会事件についてのマルトフの現在の意見を簡単に述べておこう。マルトフは連盟で、「パヴロヴィチその他が激情をあおりたてた」と言った。だが、大会の議事録を参照しさえすればわかるように、「ボリバ」や組織委員会に反対して最もくわしい、熱烈な、激しい演説をしたのは、当のマルトフであった。彼が「罪」をパヴロヴィチに転嫁しようと試みたのは、自分のぐらつきを実証しているにすぎない。彼は、大会前にはほかならぬパヴローヴィチを七人目の編集局員に選び、大会ではエゴーロフに反対してパヴローヴィチに完全に味方した（四四ページ）が、あとでパヴローヴィチのために敗北をなめたのちには、パヴローヴィチが「激情をあおりたてた」と言って彼を非難しはじめたのである。まったく滑稽である。

マルトフは『イスクラ』（第五六号）で、Xを招くかYを招くかという問題に重要な意義があたえられていることを皮肉っている。この皮肉は、またしてもマルトフにはね

かえる。なぜなら、ほかならぬ組織委員会事件は、中央委員会や中央機関紙へXを招くかYを招くかというような「重要」問題をめぐる論争の発端となったからである。問題が自分の所属している「下級グループ」(党にたいして)にかんするものか、それとも他人の所属している「下級グループ」にかんするものかによって、違った尺度で測るのは、よくないことである。これは、ほかならぬ俗物根性、サークル根性であって、事業にたいする党的な態度ではない。マルトフの連盟での演説(〔連盟議事録〕五七ページ)と大会での演説(四四ページ)とをくらべてみるだけで、このことは十分に証明される。マルトフは、連盟でとりわけこう言った。「是が非でもイスクラ派と名のろうと策をめぐらすと同時に、イスクラ派であることを恥とする人たちがいるのは、どういうわけか、私には理解しかねる」と。これは、「名のること」と「そうであること」との差異、つまりことばと行為との差異を、奇妙にも理解しないことである。マルトフ自身、大会では強制力をもつグループの反対者だと名のったが、大会後には、その味方であった。……

(d) 「ユージヌィ・ラボーチー」グループの解散

組織委員会の問題での代議員の配置は、あるいは、偶然なものと思われるかもしれない。だが、そういう意見は誤りであろう。そこで、そういう意見を取りのぞくために、われわれは、時間的な順序からそれて、大会の終りに起こったけれども、前述の事件ときわめて密接に結びついている一事件を、いまここで調べてみよう。この事件とは、「ユージヌィ・ラボーチー」グループの解散のことである。この場合には、イスクラ派の組織上の傾向——党勢力を完全に結束させて、それをばらばらにしている混沌を取りのぞこうとする傾向——と、ほんとうの党がなかったときには有益な仕事をしたが、活動が中央集権的に組織されると、よけいなものとなってしまった一グループの利益とが衝突した。サークルの利益という立場からすれば、「継承性」の保持と自分の不可侵性とを主張する権利をもつ点で、「ユージヌィ・ラボーチー」グループは『イスクラ』旧編集局に劣るものでなかった。だが、党の利益のためには、このグループは、自分の勢力を「適当な党組織」に移すことに服従しなければならなかった(三一三ページ、大会で

採択された決議の末尾)。サークルや「俗物根性」の利益という見地からすれば、『イスクラ』の旧編集局が解散を望まなかったのと同様、解散を望まなかった有益な一グループを解散させることとは、「デリケートな」(同志ルソフと同志デイチの表現) 事柄と見えざるをえなかった。党の利益という見地からすれば、解散が、党への「解消」(グセフの表現) が、必要であった。「ユージヌィ・ラボーチー」グループは、自派の解散を声明することを「必要とは考えない」と、率直に言明して、「大会が自分の意見をきっぱり言明する」よう、しかも「即座に、イエスかノーか」を言明するよう要求した。「ユージヌィ・ラボーチー」グループはその「継承性」――『イスクラ』旧編集局が……その解散後に言いたてはじめたあの同じ継承性――を、公然と言いたてた！　同志エゴーロフはこう言った。「われわれはみな単一の党を構成しているが、それにもかかわらず、党は、歴史的な存在として考慮にいれなければならない幾多の組織からなっている。……もしこのような組織が党に有害でなければ、それを解散させる必要はない」と。

こうして、重要な原則問題がまったく明確に提起され、そしてイスクラ派はみな、――自分自身のサークル根性の利害が表面に現われるまでは――ぐらつき分子にきっぱり反対した (ブンド派とラボーチェエ・デーロ派の二名は、このときすでに大会にいなかった。疑いもなく、彼らは、「歴史的な存在を考慮にいれる」必要に身も心もあげて賛成したことであろう)。投票は賛成三一票、反対五票、棄権五票 (「ユージヌィ・ラボーチー」グループの成員の四票と、もう一票。これはベローフの以前の声明から判断すると、おそらく彼の票であろう。三〇八ページ)。「イスクラ」の首尾一貫した組織案にたいして激しく否定的な態度をとり、また党精神に反対してサークル根性を擁護する一〇票にのぼる一グループが、まったく明確に現われている。討論では、イスクラ派は、この問題をまさに原則的に提起して (ランゲの演説を見よ、三一五ページ)、手工業性や分散状態に反対し、個々の組織の「同情」を考慮にいれることを拒み、「もし『ユージヌィ・ラボーチー』の同志たちがもっと早く、一年か二年もまえにもっと原則的な見地をとっていたなら、党を統合する事業も、われわれがここで承認した綱領の諸原則の勝利も、もっと早くなしとげられたであろう」と、率直に述べた。オルローフも、グセフも、リャードフも、ムラヴィヨーフも、ルソフも、パヴローヴィチも、グレーボフも、ゴーリンも、みなこういう趣旨の意見を述べた。「ユージヌィ・ラボーチー」、マホフその他の人々の政策と「方針」における原則性の不足についての、こういう明確な指摘は、大会で一度ならずなされた

が、イスクラ「少数派」の人々は、これらの指摘に反対しなかっただけでなく、またこの点についてなんの留保条件もつけなかっただけでなく、逆にデイチの口をつうじて、断固としてこの指摘に賛成し、「混沌」を非難し、同志ルソフ、すなわち、この同じ会議で不敵にも――なんと恐ろしいことだろう！――旧編集局の問題をもやはり純粋に党的な基盤のうえに「率直に提起した」（三二五ページ）同志ルソフの「率直な問題提起」（三一五ページ）を、歓迎したのであった。

「ユージヌィ・ラボーチー」グループの解散の問題は、このグループのものすごい憤激をまきおこし、その跡は議事録のなかにも見られる（議事録は、演説を完全にのせるかわりに、ごく簡略な要約と抜粋をのせているだけであるから、討論の模様をおぼろに伝えているにすぎないことを忘れてはならない）。たんに「ユージヌィ・ラボーチー」とならべて「ラボーチャヤ・ムィスリ」グループの名をあげただけで、同志エゴーロフは、「うそ」だとさえ言った。――これは、一貫した「経済主義」にたいして大会でどんな態度が支配していたかを示す特徴的な例である。エゴーロフは、ずっとあとになって、第三七回会議の席上でさえ、「ユージヌィ・ラボーチー」の解散についてこのうえもなく憤慨して語り（三五六ページ）、「ユージヌィ・ラボーチー」問題を審議したさい、このグループの成員に出版資金についても、中央機関紙と中央委員会の監督をうける件についても、だれひとり質問した者がいなかったことを、議事録にとどめるように求めた。同志ポポーフは、「ユージヌィ・ラボーチー」にかんする討論のさい、結束した多数派があって、このグループの問題についてまえもってきめているのだ、とほのめかした。「同志グセフと同志オルローフの演説を聞いたあとのいまでは、万事明らかである」と、彼は言った。このことばの意味は、疑問の余地がない。つまり、イスクラ派が意見を述べ、決議を提案したいまでは、万事明らかである、すなわち、「ユージヌィ・ラボーチー」が自分の意志に反して解散させられることは明らかである、というのである。ここでは、「ユージヌィ・ラボーチー」の代表者自身が、イスクラ派（しかも、グセフやオルローフといった）と自分の味方とを、それぞれ組織政策上の異なる「方針」の代表者として、区別しているのである。そして、現在の『イスクラ』が、「ユージヌィ・ラボーチー」グループを（おそらくマホフをも？）、「典型的なイスクラ派」と称しているとすれば、それは、大会のいちばんの（このグループの見地からみて）大事件を忘れていることを、また、いわゆる「少数派」がどういう分子からなっていたかを示す痕跡を消しさりたいという新編集局の

願望を、まざまざと示すものにすぎない。

残念なことに、大会では、大衆的な機関紙の問題は、提起されなかった。イスクラ派全員は、大会前にも、また大会中にも会議外で、この問題をきわめて活発に審議し、党生活の現在の時機にそういう機関紙の発行を企てたり、いまある機関紙の一つをそういう機関紙に変えたりするのは、きわめて不合理だということに、意見が一致した。反イスクラ派は、大会でこれと反対の趣旨の意見を述べ、「ユージヌィ・ラボーチー」グループもその報告のなかで同じことを述べた。だから、この趣旨の決議が一〇人の署名で提案されなかったのは、偶然か、あるいは、「見込みのない」問題を提起したくなかったことによるものでしかない。

(e)　言語の同権事件

大会の会議の日程にもどろう。

実質的な諸問題の審議に移るまえに、すでに大会にはまったく明確な反イスクラ派の一グループ（八票）がはっきり現われただけでなく、この八人組を支持して、それをおよそ一六ないし一八票にふやす用意のある中間的なぐらつき分子の一グループもまたはっきり現われたことを、いまわれわれは確認した。

大会で異常にくわしく、くわしすぎるほどくわしく審議された、党内におけるブンドの地位の問題は、けっきょく原則的な命題を決定するにあったのであって、問題の実践的な解決は組織関係を審議するまで延期された。大会前に出された文献には、この問題に関係した論題の説明にかなり多くの紙面がさかれていたので、大会での審議は比較的わずかしか新しいものをもたらさなかった。ただ指摘しておかなければならないのは、『ラボーチェエ・デーロ』の一党（マルティノフ、アキーモフ、ブルケール）が、マルトフの決議案に同意しながらも、この決議案を不十分と認め、それから引きだされた結論には同意しない、という留保条件をつけたことである（六九、七三、八三、八六ページ）。

大会は、ブンドの地位の問題から綱領に移った。この場合、討論は、主としてあまり興味をひかない部分的な修正動議をめぐっておこなわれた。反イスクラ派の原則的な反対意見は、自然発生性と意識性という有名な問題提起にたいする同志マルティノフの攻撃として現われただけであった。もちろん、ブンド派とラボーチェエ・デーロ派とは、全員マルティノフを支持した。彼の反対が根拠のないものであることは、とりわけ、マルトフとプレハーノフとによって示された。奇妙なこととして指摘しなければならないのは、いま『イスクラ』編集局は（きっと、考えなおした

のだろう)、マルトィノフの側に移ってしまい、大会で言ったこととは反対のことを言っていることである![三七] きっと、これは有名な「継承性」の原則にかなっているのであろう。……あとはただ、編集局はいったいいつから、マルトィノフとったいどの点で、またいったいどの程度に、いったいどの程度に、意見が一致したかという問題を、編集局が完全に解明して、われわれに説明してくれるのを、待つばかりである。それを期待して、われわれはただ、大会のあとで、大会で言ったことと正反対のことをしゃべりはじめるような編集局をもつ党機関紙が、これまでどこかにあったか、とたずねるだけにしよう。

『イスクラ』を中央機関紙と認めるかどうかについての論争(これについてはすでにさきにふれた)と、規約にかんする討議の開始(これは規約の審議全体と関連して考察するほうが適当であろう)とをとばして、綱領を審議するさいに現われたいろいろな原則上の色合いに移ろう。最初に、細部問題ではあるが、きわめて特徴的な一つの事情を指摘しておこう。それは、比例代表制の問題についての討論のことである。「ユージヌィ・ラボーチー」の同志エゴーロフは、この問題を綱領のなかにいれることを主張した、しかも、ポサドフスキー(イスクラ少数派)から「重大な意見の相違がある」という正当な評言をまねいたようなやり方で主張した。同志ポサドフスキーはこう言った。「疑いもなく、われわれは、次の基本的な問題にかんして意見が一致していない。すなわち、しかじかの基本的な民主主義的諸原則に絶対的価値を認め、それにわれわれの将来の政策を従わせることが必要であるのか、それとも民主主義的諸原則のすべてを、もっぱらわが党の利益に従わせなければならないのか、という問題である。私は、断固として後者に賛成する」と。プレハーノフは、ポサドフスキーにまったく同意し」、いっそう明確な、いっそうきっぱりした表現で、「民主主義的諸原則の絶対的価値」に反対し、それらを「抽象的に」考察することに反対した。彼はこう言った。「われわれ社会民主主義者が普通選挙権に反対するような場合も、仮説的には考えることができる。かつてイタリアの諸共和国のブルジョアジーは、貴族に属していた人々から政治的権利を取りあげた。革命的プロレタリアートは、上流階級がかつてプロレタリアートの政治的権利を制限したように、上流階級の政治的権利を制限するかもしれない」と。プレハーノフの演説は、拍手とシッシッという声とにむかえられた。そして、「シッシッと言うな」というZwischenruf〔やじ〕に、プレハーノフが異議をとなえて、同志たちに、遠慮なしにやってくださいと言うと、同志エゴーロフは立ちあがって、こう言った。「こん

な演説が拍手をまきおこす以上は、私はシッシッと言う義務がある」と。同志ゴリドブラット（ブンドの代議員）といっしょに、同志エゴーロフは、ポサドフスキーとプレハーノフの見解に反対した。残念なことには、討論は打ち切られ、この討論にかんして浮かびあがってきた問題は、舞台からすぐ消えさってしまった。ところで、いま同志マルトフは、この問題の意義を弱め否定さえしようとむだ骨おりをしており、連盟の大会でこう言った。「こうしたことば」（プレハーノフの）「は、一部の代議員の憤激を買ったが、もし同志プレハーノフが、プロレタリアートが自分の勝利を固めるために出版の自由といった政治的権利まで踏みにじらなければならないような悲劇的な事態は、もちろん考えることはできない、とつけくわえたなら、この憤激はたやすく避けることができたであろう……（プレハーノフ。《merci》（ありがとう））」（連盟議事録、五八ページ）。この解釈は、「基本的な問題」にかんして「重大な意見の相違」があり、意見が一致していないという、大会で同志ポサドフスキーの述べたまったくきっぱりとした言明と、まっこうから矛盾している。この基本的な問題については、イスクラ派全員が、大会で、反イスクラ的「右翼」の代表者（ゴリドブラット）や、大会「中間派」の代表者（エゴーロフ）に反対した。これは事実である。そして、もし「中間派」（この用語なら、ほかのどの用語よりも、おだやかさの「公式の」味方たちの気をわるくさせないであろうと思う……）、もしこの「中間派」が（同志エゴーロフなりマホフなりをつうじて）この問題か、あるいはこれに類する問題について「自由に」意見を述べるおりがあったなら、重大な意見の相違がたちどころに現われたであろうということは、あえて保証できる。

意見の相違は、「言語の同権」の問題をめぐっていっそうくっきりと現われた（議事録、一七一ページ以下）。この点については、討論よりも投票の回数のほうが雄弁に物語っている。すなわち、それを集計してみると、一六回という信じられない数字が得られるのである！　なんについて投票したのか？　綱領のなかに、性等々、および言語の別なくすべての市民は同権をもつ、と規定するだけで十分であるか、あるいはまた、「言語の自由」とか「言語の同権」とかと述べる必要があるかどうか、ということについてである。同志マルトフが連盟の大会で次のように言ったのは、このエピソードをかなり正しく特徴づけたものであった。「綱領の一条項の文案をめぐるとるにたりない論争が、大会の半数に綱領委員会をひっくりかえそうという気持ちがあったために原則的な意義をもつようになった」と。まさにそのとおりである。* 衝突の動機は、まさにとる

にたりないものであったが、それにもかかわらず、衝突は、真に原則的な性質をおび、したがってまた綱領委員会を「ひっくりかえそう」と企てたり、「大会にいっぱいくわせよう」としているのではないかという疑いをかけたり（エゴーロフはマルトフにこういう疑いをかけた！）このうえなくひどい……人身攻撃をやりとりするほどに、おそろしく激烈なかたちをとった（一七八ページ）。同志ポポーフさえ、くだらない原因から、三回の会議（第一六回、第一七回、第一八回）のあいだ支配していたような「ああいう雰囲気が生じたのは残念である、と述べた」（傍点は私のもの、一八二ページ）。

＊　マルトフは、これにつけくわえて、「この場合、プレハーノフがロバについての皮肉を言ったことが、われわれに非常な害をおよぼした」と言っている（言語の自由が論じられていたとき、ブンド派の一人だったと思うが、諸施設の一つとして種馬場のことにふれた。するとプレハーノフが、「馬は口をきかないが、ロバはものを言うときがある」とひとりごとを言った）。私は、もちろん、この皮肉を、とくにおだやかな、遠慮ぶかい、慎重な、柔軟性のあるものだと考えるわけにはいかない。しかし、それにしても、マルトフが、論争の原則的な意義を認めながら、どの点にこの原則的なものがあり、どういう意見の色合いがここに現われたかということの分析にはまったく立ちいらないで、皮肉の「害」を指摘するにとどまっているのは、私には奇妙に思われる。これこそ、まったく官僚主義的で、形式主義的な見地である！　辛辣な皮肉は、実際に「大会で非常な害をおよぼした」し、ブンド派についての皮肉だけでなく、ときおりブンド派の支持をうけ、ブンド派に敗北から救ってもらいさえした人々についての皮肉も、そうであった。けれども、この事件の原則的意義を認める以上は、ある種の皮肉は「許しえないもの」（連盟議事録、五八ページ）であった、という空文句でかたづけてはならないのである。

以上のことばはみな、次の最も重要な事実を、きわめて明確に、きっぱりと示している。それは、「疑い」や最も激烈な闘争形態（「ひっくりかえし」）やの雰囲気は――のちに連盟の大会では、イスクラ多数派がこの雰囲気をつくりだしたのだと言って非難された！――、実際には、われわれが多数派と少数派に分裂するよりもずっと以前につくりだされたものであるということである。繰りかえして言うが、これはきわめて重要な事実、基本的な事実であって、この事実を理解しないために、非常に多くの人々が、大会の終りにできた多数派は人為的なものであるという、きわめてかるはずみな意見に到達しているのである。大会では一〇分の九がイスクラ派であったと断言するマルトフの現在の見地からすれば、「くだらないこと」から、「とるにたりない」原因から、「原則的な性質」をおび、あやうく大

会の委員会をひっくりかえすところまでいった衝突が起こりえたというこの事実は、絶対に説明できないし、筋がとおらない。この事実を、皮肉が「害をおよぼした」といって嘆いたり、残念がったりすることでかたづけようとするのは、笑うべきことであろう。なにかの辛辣な皮肉のために衝突が原則的な意義をおびることは、ありえなかった。それがそういう意義をおびることができたのは、もっぱら、大会における政治的なグループ分けの性格によるものであった。衝突は辛辣なことばから生じたのでも、皮肉から生じたのでもない。——辛辣なことばや皮肉は、大会の政治的なグループ分けそのもののなかに「矛盾」があり、衝突の生じるあらゆる要素があり、また、どんな原因からでも、とるにたりない原因からでさえ、内在的な力で表面にほとばしりでる内部的な異質性があることを示す徴候にすぎなかったのである。

これに反して、私が大会を考察している見地からすれば、そして私は、諸事件の一定の政治的な解釈として——たとえこの解釈がある人には侮辱的に思われようとも——この見地を主張することが自分の義務だと考えているのだが、——この見地からすれば、「とるにたりない」原因から原則的な性質をおびた死にものぐるいの激しい衝突が生じたことは、完全に説明できることであり、また避けられないことである。われわれの大会では終始イスクラ派と反イスクラ派の闘争がおこなわれていたとすれば、また両者の中間にはぐらつき分子がいたとすれば、そしてこのぐらつき分子は反イスクラ派といっしょになれば票数の三分の一（私の計算では、五一票のうち八票プラス一〇票、すなわち一八票。もちろん、これは概算であるが）を占めていたとすれば、——たとえわずかな数の少数派でも、イスクラ派の少数派が同派から離脱するたびに、反イスクラ的潮流の勝利の可能性が生じ、したがって、「気ちがいじみた」闘争が引きおこされたのは、まったく理解できることであり、当然なことである。それは、不適当な、激しい罵倒や攻撃の結果ではなく、政治的組合せの結果である。辛辣なことばが政治的衝突を生みだしたのではなく、大会のグループ分けそのもののなかに政治的衝突のあったことが、辛辣なことばや攻撃を生みだしたのである。——大会の政治的意義と大会の結果とを評価するうえでの、マルトフとわれわれとの基本的、原則的な意見の不一致は、この対句のなかにふくまれている。

大会の全期間をつうじて、最も大きな問題でイスクラ少数派がイスクラ多数派から離脱した場合が三回あった、——言語の同権、規約第一条、選挙がそれである。そして、この三つの場合のどれにあたっても、激しい闘争が生じた

が、この闘争が、けっきょく、現在の重大な党内危機をもたらしたのである。この危機やこの闘争を政治的に理解するためには、許しえない皮肉という空文句にとどめずに、大会で衝突したいろいろな色合いをもつ政治的グループを考察しなければならない。だから、「言語の同権」事件は、不一致の原因をはっきりさせるという見地からすれば、二重の興味をひく。というのは、この場合はまだマルトフはイスクラ派であったし（まだイスクラ派であった！）、反イスクラ派や「中間派」と、おそらく他のだれよりも激しくたたかっていたからである。

たたかいは、同志マルトフとブンド派の指導者である同志リーベルとの論争で始まった（一七一—一七二ページ）。マルトフは「市民の同権」という要求で十分なことを証明した。「言語の自由」は否定されたが、すぐさま「言語の同権」がもちだされ、そしてリーベルとともに同志エゴーロフがたたかいに打ってでた。マルトフは、こう言明した。「発言者たちが民族は同権だと主張して、権利の不平等を言語の分野に移しているのは、物神崇拝である。「ところが、問題はまさにこれとは反対の側から考察しなければならない。つまり、民族の権利の不平等が存在しており、ある民族に属している人々が母語をつかう権利を奪われているのは、そのことの一つの現われなのである」（一七二ページ）と。マルトフがそのとき言ったことは、まったく正しかった。実際に、リーベルとエゴーロフがまったく無根拠にも、自分たちの定式が正しいと主張し、また、われわれが民族同権の原則をつらぬくことを望んでいないか、またはそうする能力がないのだというふうに示そうと試みたのは、一種の物神崇拝であった。じじつ彼らは、「物神崇拝者」のように、まさにことばを擁護したのであって、原則を擁護したのではなかったし、またなにかの原則的な誤りをおかすことを恐れて行動したのではなく、人がどう言うだろうかという気づかいから行動したのである。わが「中間派」全体がここでまったく明らかにあらわしたのも、まさにこのぐらついた心理（でも「他人」がこのことでわれわれを非難したらどうしよう？）——われわれが組織委員会事件のさいに認めたところの——であった。中間派のもう一人の代表者で「ユージヌィ・ラボーチー」に近い関係にあった鉱業労働者の代議員リヴォーフは言った。「辺境地方から提出されている言語圧迫の問題は、非常に重大なものと思う。社会民主主義者はロシア化を主張しているのではないかという疑いをかけられるおそれがあるので、言語にかんする条項をわれわれの綱領にいれて、そういうロシア化政策という臆測を完全に取りのぞくことが重要である」。まことに、問題の「重大さ」についての注目すべ

き理由づけである。辺境地方が疑いをいだく可能性を取りのぞく必要があるので、この問題は非常に重大だ、というのである！　演説者は、実質的なことにはまったく一言もふれず、また物神崇拝という非難に答えもしなかった。そして、なんの論拠もまったくもちあわせていないことを示すことにより、また、辺境地方が言うだろうことを引合いにだすだけでかたづけることによって、物神崇拝だという非難を完全に裏書きしたのである。君たちがなにを言おうと、それはまちがいだ、と彼にむかって言うと、彼は、それがまちがっているかいないかを検討もせずに、「疑いをかけられるかもしれない」と答えるのである。

問題の重大さや重要性を主張しながら、こういうふうに問題を提起するのは、実際にすでに原則性をもったことである。もっともそれは、リーベル、エゴーロフ、リヴォーフのような人たちがそこに見いだそうとしたあの原則性ではない。われわれは、綱領の一般的、基本的な諸命題を適用すること、すなわち、それを具体的な諸条件に適用し、またこのように適用する方向でこれらの命題を発展させることを、党組織と党員にまかせるべきなのか、それとも、疑いをかけられるかもしれないというたんなる恐れから、こまごました細目や、部分的な指示や、繰りかえしや、決疑論(三五)で綱領をみたすべきであろうかという問題、これが原則問題となるのである。また、社会民主主義者でありながら、いったいどうして決疑論とのたたかいを基本的な民主主義的権利や自由をせばめる企てと考える（そういう企てではないかと「疑いをかける」）ことができるのかという問題、これが原則問題となるのである。いったいいつになったらわれわれはこの物神崇拝的な決疑論への拝跪をついにやめるのだろうか？——これが、「言語」をめぐる闘争を見て、われわれの頭にひらめいた考えであった。

この闘争にあたって生じた代議員のグループ分けは、記名投票が何度もおこなわれたおかげで、とくにはっきりしている。それは三回もおこなわれた。イスクラ派の中核に反対して、反イスクラ派の全員（八票）と、ごくわずかな出入りはあったが、中間派全体（マホフ、リヴォーフ、エゴーロフ、ポポーフ、メドヴェーデフ、イヴァノフ、ツァリョーフ、ベローフ——最後の二人だけが、はじめのうち動揺して、あるいは棄権し、あるいはわれわれに同調して投票したが、三回目の投票になってはじめて態度をまったく明確にした）とが、終始全力をあげて立ちむかった。イスクラ派から一部の者が——主として、カフカーズ代表（三人で六票をもっていた）が脱落した。——そして、このために、けっきょく、「物神崇拝」の潮流が優勢となった。両傾向の味方が自分たちの立場を最もはっきりさせた

三回目の投票のさいに、イスクラ多数派から合わせて六票をもった三人のカフカーズ代表が分離して反対側についたのである。イスクラ少数派から合わせて二票をもつ二人――ポサドフスキーとコースチチ――が分離した。はじめの二回の投票のさいに反対側に移るか、棄権したのは、イスクラ多数派のレンスキー、ステパーノフ、ゴルスキー、少数派のデイチである。イスクラ派の八票（総計三三票のうちの）が分離したことは、反イスクラ派とぐらつき分子との連合を優勢にした。これは、大会におけるグループ分けの基本的な事実であって、まさにこのことが規約第一条の表決のさいにも、選挙のさいにも繰りかえされたのである（ただイスクラ派の別の成員が分離しただけの違いである）。選挙で敗北した連中が、いまこの敗北の政治的原因に、ぐらついた、政治的に無節操な分子を党のまえにますますはっきりさらけだし、ますます容赦なく暴露した、種種な色合いのあいだの闘争の出発点に、ひたすら目を閉じているのは、異とするにたりない。当時は同志マルトフもまだアキーモフやマホフの称賛や賛同をかちとっていなかっただけに、言語の同権事件はこの闘争をいっそうくっきりわれわれに示しているのである。

(f) 農業綱領

反イスクラ派と「中間派」とが原則の点で確固としていないことは、農業綱領にかんする討論にもくっきりと現われた。この討論は、大会で少なからぬ時間をとり（議事録、一九〇―二二六ページ）、またきわめて興味のある問題を少なからず提起した。当然予想されたように、綱領にたいする攻撃は、同志マルティノフによって開始された（同志リーベルと同志エゴーロフがちょっとした意見を述べたあとで）。彼は、われわれが「ほかならぬこの歴史的不正」[10]を是正することによって間接に「その他のもろもろの歴史的不正」を「神聖視している」という、昔ながらの論拠をもちだした。同志エゴーロフも彼に味方したが、彼には「この綱領がどういう意義をもっているのか」ということさえ「はっきりしない」のであった。彼は言った。「これはわれわれのための綱領なのか、つまり、それはわれわれがかかげる要求を規定しているのか、それとも、われわれは綱領を一般うけのするものにしたいのか」（?!?）と。同志リーベルは、「同志エゴーロフが指摘したのと同じ指摘をしたい」と言った。同志マホフは、彼のもちまえの断固たる態度で演説し、こう説明した。「発言者の大多数（？）は、提出された綱領がどんなもので、どんな目的を追求しているのかを、まったく理解できないでいる。」提出されている綱領は、よろしいか、「社会民主党の農業綱領とは見なし

がたい」。それは……「いくらか歴史的不正の是正をもてあそんでいる気味がある」、それには、「デマゴギーと冒険主義の色合い」がある、と。この深遠な迷説を理論的に裏づけるものは、俗流マルクス主義のおきまりの誇張と単純化である。彼は言う。イスクラ派は、「農民をなにか単一の構成をもつものとして取り扱いたがっている。だが、農民はすでに早くから（？）諸階級に分化しているのであるから、単一の綱領をかかげるならば、かならずや綱領は全体としてデマゴギー的なものになり、それを実行すると冒険となってしまう」と（二〇二ページ）。この場合、同志マホフは、『イスクラ』を承認する用意はあるけれども（マホフ自身も承認したように）、『イスクラ』の方向やその理論的および戦術的な立場をすこしも考えてみなかった多くの社会民主主義者が、われわれの農業綱領に否定的な態度をとっている真の原因を、「うっかり洩らした」のである。この綱領の無理解を生んだもの、また現に生んでいるものは、まさしく、ロシアの農民経済の今日の構造のように複雑で多面的な現象にマルクス主義を適用するさいにそれを俗流化することであって、個々の細目についての意見の不一致ではけっしてないのである。そして、反イスクラ分子の指導者たち（リーベルとマルトィノフ）と「中間派」の指導者たち——エゴーロフとマホフ——とは、こういう俗流マルクス主義的見地にもとづいて急速に意見が一致した。同志エゴーロフはまた、「ユージヌィ・ラボーチー」や、それに引きつけられているグループやサークルの特徴の一つを、率直に言いあらわした。それは、農民運動の重要性を理解していないことであり、また、この重要性の過大評価ではなくて、反対にその過小評価（と、この運動を利用する力が足りなかったこと）こそ、有名な最初の農民蜂起のとき[(六七)]のわが国の社会民主主義者の弱点であったのを、理解していないことである。同志エゴーロフは言った。「私は、農民運動にたいする編集局の熱中、農民騒擾ののちに多くの社会民主主義者をとらえた熱中にはけっして同調しない」と。ただ残念なことに、同志エゴーロフは、編集局のこの熱中がどういう点に現われたかを、いくらかでも正確に大会に紹介する労をとらなかったし、『イスクラ』の提供した文献的資料を具体的に指示する労もとらなかった。そればかりか、彼は、われわれの農業綱領のすべての基本点は、『イスクラ』によってすでにその第三号[(六八)]で、すなわち、農民騒擾よりずっとまえに、叙述されていることを、忘れてしまった。口さきだけで『イスクラ』を「承認」しているのでなければ、『イスクラ』の理論的および戦術的な原則に、もうすこし注意をはらってもさしつかえあるまい！

「いや、農民のなかでは、われわれはたいしたことはで

きない！」——と同志エゴーロフは叫び、つづいてこの叫びが、ある個々の「熱中」にたいする抗議ではなくて、われわれの立場全体の否定を意味することを明らかにして、次のように言った。つまり「われわれのスローガンは、冒険主義者のスローガンと競争することはできないのだ」と。これは、万事をいろいろな党のスローガンの「競争」に帰着させる無原則的な態度を、きわめてよく示す定式化である！　しかもこれが言われたのは、われわれは一時的な失敗にうろたえずに、扇動で永続的な成功をおさめるように努力しており（……しばしの「競争者」がやかましく叫びたてているにもかかわらず）、そして、永続的な成功をおさめることは綱領の確固たる理論的土台がなくては不可能である（一九六ページ）、と述べた〔レーニンの〕理論的説明に、この演説者が「満足した」と声明したあとのことなのである。このように「満足した」と確言した口の下から、農業綱領の問題ばかりでなく、全体としての綱領の問題も、経済闘争と政治闘争の戦術全体の問題も、あらゆる問題が「スローガンの競争」で決定されるという、古い「経済主義」から受けついだ俗悪な命題を繰りかえすとは、なんという混乱をさらけだしていることであろう。同志エゴーロフは言った。「諸君は、富裕な農民と肩をならべて切取地のためにたたかうよう、雇農に強要することはできないだろう。切取地の少なからぬ部分は、すでにこの富裕な農民の手中にあるのだから」と。

またしても、単純化である。その少なからぬ部分がいまでもブルジョアジーの手中にあり、将来はいっそう多くの部分がブルジョアジーの手中におちいるようなもののためにたたかうことを、プロレタリアに「強要する」ことはできない、と主張したわが日和見主義的経済主義に疑いもなく類似した単純化である。またしても、雇農と富裕な農民とのあいだの一般的な資本主義的関係のロシア的特殊性を忘れる俗流化である。切取地は、現在雇農をも圧迫しているのである。しかも実際に圧迫しているので、債務奴隷制からの解放のためにたたかうよう、雇農に「強要する」にはおよばないのである。「強要」しなければならないのは、若干のインテリゲンツィアである。すなわち、自分たちの任務についてもっと広い視野をもつように強要し、具体的な問題を審議するさいに紋切型をやめるように強要し、われわれの目標を複雑にし修正している歴史的な事情を考慮にいれるように強要しなければならないのである。百姓は愚かだという偏見——同志マルトフの正しい指摘（二〇二ページ）によれば、同志マホフその他の農業綱領の反対者たちの演説のなかにはいりこんでいた偏見——まさにこの偏見によってだけ、これらの反対者がわが国の雇農の現実の生

活条件を忘れた理由の説明がつくのである。

わが「中間派」の代表者たちは、問題を単純化して、労働者と資本家というたんなる対立に帰着させてしまい、例のように、自分の視野の狭さを百姓になすりつけようとつとめた。同志マホフはこう言った。「私は、百姓がその狭い階級的見地の限界内では賢いと考えるからこそ、彼らは奪取と分配という小ブルジョア的理想に賛成するだろうと考えるのだ」と。ここでは明らかに二つの事柄が混同されている。すなわち、小ブルジョアとしての百姓の階級的見地の特徴づけと、この見地をせばめること、この見地を「狭い限界」に押しこめることとが、混同されている。こういうふうに押しこめていることにこそ、エゴーロフやマホフのような連中の誤りがある（マルトィノフやアキーモフのような連中の誤りが、プロレタリアの見地を「狭い限界」に押しこめる点にあったのと、まったく同じように）。しかし、論理も歴史もともに教えているように、小ブルジョアの階級的見地は、小ブルジョアの地位のほかならぬ二重性のために、多少とも狭くもなりえるし、また多少とも進歩的にもなりうる。そして、われわれの任務は、百姓が狭い（「愚かだ」）、百姓が「偏見」に支配されているからといって、絶望して手をこまねいていることではけっしてない。反対に、百姓の見地をうまずたゆまずひろげ、百姓の判断がその偏見に打ちかつのを助けることにある。

ロシアの農業問題についての俗流「マルクス主義的」見地は、『イスクラ』の旧編集局の忠実な擁護者である同志マホフの原則的な演説の結語で極点に達した。この結語が拍手……もっとも、皮肉の拍手ではあるが……をうけたのは、理由のないことではない。黒い割替をめざす運動はわれわれをすこしも恐ろしがらせないし、この進歩的な（ブルジョア的に進歩的な）運動をわれわれが阻止しようとすることはないだろうというプレハーノフの指摘に憤慨して、同志マホフはこう言った。「なにを困ったこととよぶべきか、もちろん、私にはわからない、だが、この革命――もしそれをこうよんでもよいとすれば――は革命的なものではないだろう。もっと正確には、これはもはや革命ではなく、反動（笑声）であり、一揆に類する革命である、と私は言いたい。……こんな革命は、われわれをあともどりさせるであろうし、われわれがふたたび現状に達するには、相当の時間を必要とするだろう。だが、われわれはいま、フランス革命の当時よりもはるかに多くのものをもっている（皮肉の拍手）。われわれは社会民主党をもっている（笑声）」と。……まったく、マホフ流の議論をするような社会民主党、あるいは、マホフのような人たちに立脚する中央諸機関をもつような社会民主党は、じっさい、嘲笑にし

か値しないであろう。……

こうして、農業綱領によって提起された純原則的な問題についても、すでにわれわれにおなじみのグループ分けがさっそく現われたことがわかる。反イスクラ派（八票）が俗流マルクス主義の名において攻撃を始め、「中間派」の指導者たち、エゴーロフやマホフらが、たえず混乱し、同じ狭い見地に迷いこみながら、そのあとによちよちついていったのである。そこで、まったく当然なことであるが、農業綱領の若干の条項の表決にあたっては、賛成が三〇票と三五票という数になった（二二五および二二六ページ）。すなわち、ブンド問題の審議の順序にかんする論争のさいにも、組織委員会事件のさいにも、「ユージヌィ・ラボーチー」の解散問題のさいにも見られた票数とほぼ同じ票数になったのである。ありきたりの、既成の紋切型の枠から多少ともはずれた問題、独特な、新しい（ドイツ人からみて新しい）社会＝経済的諸関係にマルクスの理論を自主的に適用することを多少とも必要とする問題がもちあがるやいなや、――任務に耐えうるイスクラ派は総票数の五分の三にすぎないことが、たちまち明らかになり、「中間派」全体は、たちまちリーベルやマルトィノフらのほうへ向きをかえたのである。ところが、同志マルトフは、この明白な事実をいまだにごまかそうと努力し、いろいろな色合いがはっきりと表面化した表決にふれることを、おずおずと避けているのである！

農業綱領についての討論からは、大会のたっぷり五分の二を相手どったイスクラ派の闘争がはっきりと見られる。カフカーズの代議員たちは、ここではまったく正しい立場をとった――それは、おそらく、かなりの程度まで、その地方の数多くの農奴制の残存物の諸形態を身近に知っていたことが、マホフらを満足させた抽象的で生徒ふうな、単純な対立におちいらないよう、彼らをいましめたおかげであろう。マルトィノフとリーベル、マホフとエゴーロフに反対して、プレハーノフも、グセフも（同志エゴーロフの見解のような……「われわれの農村活動についての悲観的な見解」……には「ロシア国内で活動している同志たちのあいだでしばしば出会ったことがある」と、彼は確言した）、コストローフも、カルスキーも、トロツキーも、立ちむかった。トロツキーは、農業綱領の批判者たちの「善意の忠告」は、「あまりにも俗物根性のにおいがする」と正しく指摘した。ただ大会における政治的グループの研究の問題にかんして注意しておかなければならないのは、彼の演説のこの箇所で（二〇八ページ）、同志ランゲをエゴーロフやマホフと同列においているのは、おそらく正しくないであろうということである。議事録を注意して読む者に

は、ランゲとゴーリンの立場は、エゴーロフとマホフのとった立場とまったく違うことがわかるであろう。ランゲとゴーリンには、切取地の条項の定式化が気にいらなかった。彼らは、われわれの農業綱領の思想を完全に理解していたが、それを違った仕方で実現しようと試み、また彼らの見地からみてもっと難点の少ない定式を探しだそうとして積極的に活動し、綱領の起草者たちを説きつけるために、つまり、非イスクラ派全員に対抗して起草者の味方をするために、いくつかの決議案を提出したのである。たとえば、マホフがだした農業綱領全体の否決動議（二一二ページ、賛成九票、反対三八票）や、綱領の個々の条項の否決動議（二一六ページ、その他）と、切取地の条項の独自の文案を提出したランゲの立場（二二五ページ）とをくらべてみるだけで、両者の根本的な相違を納得するのに十分である。*

* ゴーリンの演説、二一三ページを参照せよ。

「俗物根性」のにおいのする論拠についてさらにことばをつづけて、同志トロツキーはこう指摘した。「せまりつつある革命期には、われわれは農民と結びつかなければならない。」……「この任務に当面しては、マホフやエゴーロフの懐疑論や政治的『遠視』は、どんな近視よりも有害である」と。イスクラ少数派の他の一人、同志コースチチは、きわめて的確に、同志マホフの「自信のなさ、自分の原則上の確固さにたいする自信のなさ」を指摘した。これは、わが「中間派」の図星をさした特徴づけである。同志コースチチはつづけてこう言った。「悲観論の点では、同志マホフは同志エゴーロフと一致している、もっとも、彼らのあいだには色合いの違いはあるが。同志マホフは、社会民主主義者がいまでもすでに農民のなかで活動していて、すでに可能なかぎり彼らの運動を指導していることを、忘れている。そして、彼らは、自分のこの悲観論によってわれわれの活動の規模をせばめている」（二一〇ページ）と。

大会における綱領討論の問題を終わるためには、なお反政府諸潮流の支持をめぐる簡単な討論に言及しなければならない。われわれの綱領には、社会民主党は、「ロシアの現存の社会制度と政治制度に反対するあらゆる反政府運動と革命運動を」支持する、とはっきり述べられている。ここにつけられている条件は、反政府的諸潮流のうちのまさにどのようなものをわれわれが支持するかを、十分正確に示していると思えるであろう。それにもかかわらず、わが党内にすでにずっと以前から形づくられているいろいろな色合いの相違は、この場合にもたちまち現われてきた――これほど論じつくされた問題について、まだ「当惑と誤解」があるなどとは、いかにも考えにくいことではあるが！　問題は、明らかに、誤解にあったのではなく、まさ

に色合いにあったのである。マホフ、リーベルおよびマルトィノフは、すぐさま警報を打ちならした。そして、彼らはまたもやきわめて固く「結束した」少数派をなしていることを明らかにしたので、同志マルトフは、おそらくこの場合にも、陰謀だとか、たくらみだとか、外交術策だとか、その他のけっこうなもの（連盟大会での彼の演説を見よ）で、これを説明すべきであったろう。少数派のほうにも多数派のほうにも「結束した」グループが形成された政治的原因を深く考えることのできない連中が、こうしたしろものにうったえるのである。

マホフは、またもやマルクス主義の俗悪な単純化から始めた。「わが国でただ一つの革命的な階級は、プロレタリアートである」と彼は言ったが、この正しい命題からすぐさま次のような誤った結論を引きだした。「その他の階級は、どっちつかずの蛇足である（満場の哄笑）。……さよう、彼らは蛇足であり、〔革命を〕利用しようとしているにすぎない。私は彼らを支持することに反対する」（二二六ページ）と。同志マホフが自分の立場を類のないやり方で定式化したことは、多くの人（彼の味方の）を当惑させたが、リーベルもマルトィノフも、「反政府運動」ということばをけずるか、でなければ「民主主義的反政府運動」とつけくわえて、このことばを限定するようにと提案して、実質上彼に合流した。マルトィノフのこの修正にプレハーノフが反対したのは、正しかった。彼はこう言った。「われわれは、自由主義者を批判し、彼らの中途半端さを暴露しなければならない。これは正しい。……しかし、社会民主主義運動以外のすべての運動の狭さと制約を暴露しながらも、われわれは、普通選挙権をあたえない憲法すら、絶対主義にくらべれば一歩前進であること、だからプロレタリアートはこのような憲法よりも現存制度のほうがよいと考えてはならないことを、プロレタリアートに説明する義務がある」と。同志マルトィノフ、同志リーベル、同志マホフは、これに同意しないで、自分の立場を固執した。そして、アクセリロード、スタロヴェール、トロツキーがそれを攻撃し、プレハーノフももう一度攻撃した。同志マホフは、そのさいまたもや自分で自分をやっつけるようなことを言った。はじめ彼は、その他の階級（プロレタリアート以外の）は「どっちつかず」で、「彼らを支持することに反対する」と言った。そのあとで彼は譲歩して、「本質的には反動的であっても、ブルジョアジーは――たとえば、封建制度や、その残存物との闘争が問題となるときには――しばしば革命的である」ことを認めた。「だが」と、彼は、もう一度小難をのがれて大難におちいり、こうつづけた。「つねに（？）反動的なグループがある。それは手工業者である」

と。あとでは口角泡をとばして旧編集局を擁護したわが「中間派」の指導者たち自身が、原則的な点でこんな珠玉の言まで吐いたのである！　ツンフト（同職組合）組織が非常に強かった西ヨーロッパでさえ、ほかならぬ手工業者は、絶対主義の没落期には、他の都市小ブルジョアと同じように、特別の革命性を発揮した。絶対主義が没落したときから一世紀も半世紀もへだたっている現代の手工業者について西欧の同志たちが言っていることを、考えもせずに繰りかえすのは、ほかならぬロシアの社会民主主義者の場合にはとくに筋がとおらない。政治問題の分野でブルジョアジーにくらべて手工業者が反動的であるというのは、ロシアでは、丸暗記したきまり文句以外のなにものでもない。

残念なことには、議事録には、この問題にかんする、マルトィノフ、マホフおよびリーベルの否決された諸修正案が何票得たかについては、なんの記録もない。われわれに言えることは、反イスクラ分子の指導者たちと、「中間派」*の指導者の一人とが、このときにもイスクラ派に反対して、われわれにすでにおなじみのグループに結束したということだけである。綱領にかんする全討論をまとめると、いくらかでも活発で、全員の関心をひいた討論で、いま同志マルトフや『イスクラ』の新編集局が口をつぐんでいる色合いの差異を明るみにださなかったようなものは一回もなかった、という結論をくださざるをえない。

* この同じグループ、すなわち「中間派」のもう一人の指導者である同志エゴーロフは、反政府的諸潮流の支持の問題について、別の機会に、すなわち、社会革命党[一四〇]にかんするアクセリロードの決議案のさいに、意見を述べた（三五九ページ）。同志エゴーロフは、あらゆる反政府運動と革命運動を支持するという綱領の要求と、エス・エル派にたいしても自由主義者にたいしても否定的な態度をとることとのあいだに「矛盾」を見てとった。別なかたちで、またすこし別な側面から問題をとりあげた同志エゴーロフは、この点で同志マホフ、同志リーベル、同志マルトィノフと同じような、マルクス主義の狭い理解と『イスクラ』の立場（彼が「承認した」）にたいするぐらついた、なかば敵意ある態度とをさらけだした。

（g）党規約。同志マルトフの草案

大会は、綱領から党規約に移った（われわれは、さきにふれた中央機関紙の問題や代議員たちの報告をとばすことにする。大多数の代議員は、残念ながら、満足なかたちでその報告を提出することができなかった）。規約の問題がわれわれ全員にとって非常に大きな意義をもっていたことは、いうまでもない。じっさい、『イスクラ』は、最初から文筆上の機関紙として行動しただけでなく、組織上の細胞

としても行動したのである。第四号の主張（『なにから始めるべきか？』(二五)）のなかで、『イスクラ』は、組織計画＊ともいうべきものをかかげ、また三年のあいだこの計画を系統的に、終始一貫実行してきた。第二回党大会が『イスクラ』を中央機関紙として承認したとき、これにかんする決議の理由文の三項目のうち（一四七ページ）、二項目は『イスクラ』のほかならぬこの組織計画と組織上の思想とに、すなわち党の実践活動を指導するうえで『イスクラ』が果たした役割と、統合のための活動でそれが果たした指導的役割とに、あてられていた。そこで、まったく当然なこととして、『イスクラ』の活動と党を組織する全事業、党を実際に復活する全事業は、特定の組織上の思想を党全体が承認して、それを正式に確認することなしには、完了したものと見なすことができなかった。この任務を果たすことこそ、党の組織規約のしなければならないことであった。

＊『イスクラ』を中央機関紙として承認することについての演説のなかで、同志ポポーフはとりわけこう言った。「私は、『イスクラ』の第三号か第四号かにのった論文――『なにから始めるべきか？』を思いだす。ロシアで活動している同志のうちには、それを分別を欠いたものと考えた者も多かった。他の人々には、この計画は空想的に思われた。そして、大多数」（？　おそらく同志ポポーフの周囲の人々の大多数だろう）「は、それをたんなる功名心によるものと解した」（一四〇ページ）と。読者もおわかりのように、私は、私の政治的見解がこういうふうに功名心で説明されることには、もう慣れている。この説明は、いま同志アクセリロードや同志マルトフがむしかえしているものである。

『イスクラ』が党組織の基礎におこうと努力した基本的な思想は、本質的には、次の二点に帰着する。第一の、中央集権主義の思想は、組織上の幾多の部分的、細部的な問題全体の解決方法を、原則的に規定するものであった。第二の思想――思想上の指導機関である新聞の特殊な役割――は、まさに、政治的奴隷制の環境のもとにあって、革命的強襲の最初の作戦基地が国外につくられるという条件のもとでの、ロシアの社会民主主義的労働運動の一時的な、特殊な必要を考慮したものであった。ただ一つ原則的な思想である第一の思想が、規約全体をつらぬかなければならなかった。行動の場所と方法との一時的な事情の生みだす部分的な思想である第二の思想は、中央集権主義からの外見的な逸脱に、すなわち、中央機関紙と中央委員会という二つの中央機関をつくるという点に、現われていた。イスクラ的な党組織のこの二つの基本思想を、私は、『イスクラ』（第四号）の主張『なにから始めるべきか？』のなかでも、『なにをなすべきか？』(二六)のなかでも展開し、最後に、『一同志にあたえる手紙』のなかで、ほとんど規約のよう

なかたちで、くわしく説明した。実質上なお残っていた仕事は、規約の各条項を定式化するための案文作成の仕事だけであった。そして、もし、『イスクラ』の承認が名目にとどまるのではなく、たんなる慣用文句でないのなら、この規約は、ほかならぬ以上の思想を具体化しなければならなかったのである。私は、私の再版した『一同志にあたえる手紙』の序文のなかで、(二〇)党規約とこの小冊子とを比較するだけで、両者のなかの組織上の思想の完全な一致を確認することができる、とすでに指摘しておいた。

『イスクラ』の組織上の思想を規約に定式化する案文作成の仕事にかんして、私は、同志マルトフが引きおこした一事件にふれなければならない。マルトフは連盟の大会で次のように言った(五八ページ)。「……この条項(すなわち、第一条)にかんして私が日和見主義におちいったことが、レーニンにとってどの程度まで予想外のことであったかは、事実をしらべれば、おわかりになろう。私は、大会の一月半ないし二月まえにレーニンに私の草案を示したが、その草案の第一条は、私が大会で提案したのと同じように述べていた。レーニンは、あまり細目にわたりすぎると言って私の草案に反対した。そして、第一条——党員の規定——の思想だけはレーニンの気にいったが、私の定式化はまずいと思うので、修正したうえ彼の規約のなかに取りいれよう、と言った。こういうわけで、レーニンは、私の定式化をずっとまえから知っていたし、この問題についての私の見解も知っていたのである。諸君の見られるとおり、こういうわけで私は素面で、自分の見解を隠さずに大会に臨んだのである。私は相互補充制とたたかい、中央委員会、中央機関紙等々の補充のさいの全員一致の原則とたたかうだろうと、予告しておいたのである」と。

相互補充制とたたかうという予告については、実際にどうであったかは、その箇所にいってから見ることにしよう。ここでは、マルトフの規約のこの「素面」について述べよう。連盟で、自分のまずい草案のエピソードを記憶にたよって伝えるさい(マルトフは、大会ではこの草案をまずいといって自分でひっこめたが、大会のあとで、彼特有の頑固さで、またも明るみにもちだしたのである)、マルトフは、列によって、多くのことを忘れてしまい、そのためにまたもや話をごちゃごちゃにした。個人的な会話や自分の記憶をよりどころとしないようにいましめる事例は、すでにかなりたくさんあったと、思われるであろう(人は、われ知らず自分に都合のよいことだけを思いだすものである!)。だが、それにもかかわらず同志マルトフは、ほかに材料をもっていないので、質の劣った材料を利用した。いまでは同志プレハーノフさえ、彼のまねを始めている

――悪い先例は、きっと、伝染するのだろう。
マルトフの草案の第一条の「思想」が私の「気にいる」はずはなかった。というのは、彼の草案には、大会で現われた思想はまったくふくまれていなかったからである。彼の記憶ちがいである。幸いにも私は、書類のなかにマルトフの草案を見つけだしたが、その「第一条は、彼が大会で提案したのと同じように述べてはいなかった」！　次にあげるのが、その「素面」である！
マルトフの草案の第一条、「党の綱領を承認し、党の任務を実現するため党諸機関（原文のまま！）の統制と指導のもとに積極的に活動する者は、すべてロシア社会民主労働党に所属するものと見なされる。」
私の草案の第一条。「党の綱領を承認し、物質的手段によっても、また党組織の一つにみずから参加することによっても党を支持する者は、すべて党員と見なされる。」
大会でマルトフが提案し、大会が採択した定式化による第一条。「党の綱領を承認し、物質的手段によって党を支持し、党組織の一つの指導のもとに党に規則的な個人的協力をおこなう者は、すべてロシア社会民主労働党の党員と見なされる。」
こう対照すれば、マルトフの草案には、まさしくなんの思想もなく、空文句しかないことが、はっきりわかる。党員が党諸機関の統制と指導のもとに活動するということは、わかりきったことで、それ以外でありようがない。こんなことを言うのは、肝心なことをなにも言わないためにしゃべるのが好きな人、際限のないおしゃべりと官僚主義的な（すなわち、仕事にとっては不必要だが、体裁上必要だと考えられている）定式で「規約」をうずめることが好きな人だけである。第一条の思想は、次のような問題が提起されたときにはじめて現われてくるのである。すなわち、党組織のどのひとつにも所属しない党員にたいして党機関は実際にその指導を実現できるか、という問題である。この思想は、同志マルトフの草案のなかには跡かたもない。したがって、私は、「この問題についての」同志マルトフの「見解」を知るはずもなかった。というのは、同志マルトフの草案のなかには、この問題についてのどんな見解もないからである。同志マルトフの事実しらべは混乱したものであることがわかる。
それどころか、ほかならぬ同志マルトフについて言っておかなければならないのは、彼が、私の草案から「この問題についての私の見解を知っていた」のに、異議をとなえなかったし、また、私の草案が大会の二、三週間ほどまえにみなに示されていたにもかかわらず、それを編集局でも私の草案しか知らない代議員たちの前でも、論駁しなかっ

たことである。それだけではない。大会の席上ですら、私が私の規約草案を提出し、*規約委員会の選挙がおこなわれるまえにそれを擁護したとき、同志マルトフははっきりと言明した。「私は同志レーニンの結論に同意する。ただ二つの問題でだけ、私はレーニンと意見が違う」（傍点は私のもの）と。この二つの問題というのは、評議会の構成方法の問題と、補充は全員一致によるという問題である（一五七ページ）。第一条にかんする意見の相違については、ここではまだ一言も述べられていないのである。

＊ ついでに言っておくが、議事録委員会は、付録第一一に、「レーニンが大会に提出した」規約草案をのせている（三九三ページ）。ここでは、議事録委員会もまた、すこし事柄をこんぐらからしている。委員会は、全代議員に[一六〇]（また大会まえに非常に多くの人に）示された私の最初の草案と、大会に提出された草案とを混同して、前者を後者として印刷した。もちろん、私は、たとえその作成のどの段階のものであろうと、自分の草案が公表されることにすこしも反対はしないが、それにしても混乱をもちこんではならない。ところが、混乱が起こったのだ。というのは、ポポーフとマルトフは（一五四ページと一五七ページ）、私が実際に大会に提出した草案にはあったが、議事録委員会の印刷した草案のなかにはない定式を批判しているからである（三九四ページ、第七条および第一一条を参照せよ）。もっと問題に注意ぶかい態度をとったなら、私があげたページをくらべてみるだけで、たやすく誤りに気づいたはずである。

同志マルトフは、戒厳状態についての彼の小冊子の[一六一]なかで、もう一度、しかもとくにくわしく、自分の規約を想起することが必要だと考えた。彼はそのなかで、自分は、若干の第二次的な細目を除けば、いまでも（一九〇四年二月のこと――三ヵ月ほどたてばどうなるかわからないが）自分の規約を主張する心がまえであるが、この規約は、「中央集権主義の異常肥大にたいする私の否定的な態度を十分はっきりと表明していた」と断言している（前付四ページ）。この草案を大会に提出しなかったことを、同志マルトフはいまでは次のように説明している。第一に、「イスクラ的教育は、規約を軽視する気持ちを彼に植えつけていた」と（同志マルトフのお気にめすときには、イスクラ的ということばは、彼にとってもはや狭いサークル根性を意味せずに、最も確固たる潮流を意味するのだ！　ただ残念なことに、三年にわたるイスクラ的教育も、無政府主義的空文句を軽視する気持ちを同志マルトフに植えつけなかった。インテリゲンツィアのぐらついた心理は、一致して採択した規約への違反をこうした空文句で合理化することができるのである）。第二には、彼同志マルトフは、「『イスクラ』のような基本的な組織的中核の戦術のなかに、どんなものであれ、不協和音をもちこむこと」を避けたのだとい

う。これは、なんとすばらしく筋のとおっていることだろう！　同志マルトフは不協和音を非常に恐れたので（この不協和音が恐ろしいのは、最も狭いサークル的見地からみる場合だけである）、規約第一条の日和見主義的定式化とか、中央集権主義の異常肥大とかいう原則的な問題について、編集局のような中核にすら、自分の意見の相違を提出しなかったというのだ！　中央諸機関の構成という実践的な問題については、同志マルトフは、「イスクラ」組織（この真に基本的な組織的中核）の成員の大多数の投票に異議をとなえて、ブンドやラボーチエ・デーロ派の助けを求めた。だれよりも判定資格のある人々がこの問題にくだした判断のなかにある「サークル根性」を否認するために、えせ編集局を擁護してサークル根性をこっそりもちこんでいる自分の空文句のなかの「不協和音」には、同志マルトフは気づかないのである。その罰として、彼の規約草案を全文引用し、彼がどんな見解、どんな異常肥大をさらけだしているかを、われわれのほうから指摘することにしよう。*

* おことわりしておくが、残念なことに、私は、マルトフの草案の第一次案を見つけだせなかった。この第一次案は、およそ四八条からなっていて、無用な形式主義の「異常肥大」にわずらわされている点ではいっそうはなはだしいものであった。

「党規約草案。――I　党への所属。――（1）党の綱領を承認し、党の任務を実現するため党諸機関の統制と指導のもとに積極的に活動する者は、すべてロシア社会民主労働党に所属するものと見なされる。――（2）党の利益とあいいれない行動の理由による党員の党からの除名は、中央委員会がこれを決定する。《理由文を付した除名決定書は、党文書保管所に保管され、要求におうじて各党委員会に通知される。二個以上の委員会の要求がある場合には、中央委員会の除名決定にたいして大会に上訴することができる。》」……私は、マルトフの草案中で、どんな「思想」もふくんでいないばかりか、どんな明確な条件あるいは要求をもふくんでいない、明らかに無内容な命題を、《　》にいれて示しておこう。――たとえば、決定書をほかならぬどこに保管しなければならないかを『規約』のなかで指示する類のないやり方、中央委員会の除名決定にたいして（一般に中央委員会のいっさいの決定にたいしてではないのか？）大会に上訴することができる、という指示がそれである。これこそまさに空文句の異常肥大であるか、でなければ、明らかに無益な、あるいは煩雑でよけいな条項を編みだすという意味で、真の官僚主義的形式主義である。「……II　地方委員会。――（3）地方活動において党を代表する

ものは党委員会である。……」（新しくもあれば、賢明でもある！）。「……（4）《第二回大会のときに存在し、大会に代表を送った委員会は、そのまま党委員会として認められる。》――（5）第四条に示したもの以外の新しい党委員会は、中央委員会がこれを任命する。《中央委員会は、当該地方組織をそのまま委員会として認めるか、あるいはこれを改組して地方委員会を構成する。》――（6）委員会は自主的にその委員を補充する。――（7）中央委員会は、（中央委員会の知っている）同志を地方委員会に補充する権限をもつ。ただし、その数は現存委員数の三分の一をこえてはならない。……」（まさにお役所かたぎの見本である。なぜ三分の一をこえてはいけないのか？　そうするのはなにが目的なのか？　なにひとつ制限することにならない――というのは、補充はなんども繰りかえすことができるから――こういう制限に、いったいどんな意味があるのか？）「……（8）《弾圧によって地方委員会が崩壊するか破壊された》」（つまり、全員が逮捕されたわけではないということか？）「場合には、中央委員会がこれを再建する。》」……（もう第七条を無視するのか？　ところで、同志マルトフは、第八条が、平日には働き祭日には休息するように命じているロシアの礼節法と似かよっているとは思わないか？）

「……（9）《定例党大会は、ある地方委員会の活動が党の利益と一致しないと認めた場合には、その委員会の構成の改革を中央委員会に委任することができる。この場合には、従来の委員会は解散されたものと見なされ、この委員会が活動する地方の同志は、この委員会への服従*を免ぜられる。》」……この条項にふくまれている準則は、なんびとも泥酔を禁ぜられるという、ロシアの法律のなかにいまでも残っている条項と同じくらいにきわめて有益である。「……（10）《党の地方委員会は、党の地方的な宣伝・扇動ならびに組織活動全体を指導し、また党中央委員会と中央機関紙とがそれに課せられた全党的任務を遂行するにあたって、できるかぎりこれを援助する。》」……うふっ！　いったいぜんたい、これはなんのためなのか？……「（11）《地方組織の内規、委員会とそれに従属する」（聞いていますか、聞いていますか、同志アクセリロードよ？）「諸グループとの相互関係、およびこれらのグループの権限の範囲と自治の範囲」（ところで、権限の範囲と自治の範囲とは同じことではないのか？）「は、委員会自身でこれを決定して、中央委員会と中央機関紙編集局とに通知する。》」……（脱落――これらの通知がどこに保管されるかが述べられていない。）……「（12）《委員会に従属するグループと個々の党員はすべ

て、どのような問題についてでも自分の意見または希望を党中央委員会と党中央機関紙とに伝達するよう要求する権利をもつ。》――（13）党地方委員会は、その収入のなかから、中央委員会の定める割当額を中央委員会の財政に納入する義務を負う。――Ⅲ　他の言語（ロシア語以外の）による扇動を目的とする諸組織。――（14）《ロシア語以外のある一つの言語による扇動をおこない、このような扇動の対象となっている労働者を組織するために、このような扇動を専門化し、この種の組織を別につくる必要のある地点では、そういう組織をつくることができる。》――（15）これがどの程度に必要かという問題の解決は、党中央委員会にゆだねられ、疑義のある場合には党大会にゆだねられる。」……この条項の前半は、規約のこのあとの諸規定を考えればよけいなものであり、疑義のある場合にかんする後半は、まったく滑稽である。……「（16）《第一四条にあげた地方諸組織は、その専門事項については自治的であるが、地方委員会の統制のもとに行動し、これに従属する。そのさい、この統制の形態、および当該委員会と当該専門組織とのあいだの組織上の関係の基準は、地方委員会が決定する。」（……やれやれ、ありがたいことだ！　空語のうえに空語をかさねたこの章句全体が、まったく無用なものであったことが、これではっきりした。）……「党の一般的事項にかんしては、これらの組織は委員会の組織の一部として行動する。》――（17）《第一四条にあげた地方諸組織は、その専門的任務を首尾よく達成するために、自治的な連盟をつくることができる。この種の連盟は、独自の機関紙誌と執行機関をもつことができる。そのさい、この両機関は党中央委員会の直接の統制下におかれる。この種の連盟の規約は、連盟自身で作成し、党中央委員会の承認をうける。》――（18）《党地方委員会が、地方的諸条件のために、主として当該言語で扇動にしたがう場合には、この地方委員会もまた第一七条にあげた自治的連盟に所属することができる。付則。この種の委員会は、自治的連盟の一部となっても、党委員会であることをやめない。》」……（この条項全体は、きわめて有益で、特別に賢明である。そして、この付則はそれに輪をかけている。）……「（19）《自治的連盟に所属する地方組織と、その連盟の中央諸機関との連絡は、地方委員会の統制のもとにおかれる。》――（20）《自治的連盟の中央機関紙誌および中央執行機関の党中央委員会にたいする関係は、党地方委員会の党中央委員会にたいする関係と同一である。》――Ⅳ　党中央委員会と党機関紙誌。――（21）《党全体の代表者は、党中央委員会と機関紙誌――

政治的機関紙と学術的機関誌――である。》――(22)中央委員会の任務は次のとおりである。党の実践活動全体の一般的指導、党の全勢力の正しい利用と配置にかんする配慮、党のすべての部分の活動の統制、地方諸組織への文献の供給、党の技術機構の組織、党大会の招集。――(23)党の機関紙誌の任務は次のとおりである。党生活の思想的指導、党綱領の宣伝、および社会民主党の世界観の科学的および時評的な仕上げ。――(24)党地方委員会と自治的連盟とは、すべて党中央委員会および党機関紙誌編集局と直接の連絡をたもち、その地方における運動と組織活動との進行状態を定期的にこれに通知する。――(25)党機関紙誌の編集局は党大会で任命され、次期大会までその職にあたる。――(26)《編集局は、その内部問題については自治的であり、》大会から大会までのあいだにその局員を補充し、変更することができる。ただし、そのつどこれについて中央委員会に通知する。――(27)中央委員会の作成または承認した声明は、すべて中央委員会の要求にしたがって党機関紙誌に印刷される。――(28)中央委員会は、党機関紙誌編集局の同意を得て、あれこれの種類の文筆活動のために、専門的な文筆家グループをつくる。――(29)中央委員会は、党大会で任命され、次期大会までその職にあたる。中央委員会は、中央委員を人数に制限なくみずから補充する。ただし、そのつどこれについて中央機関紙誌編集局に通知する。――V　党の在外組織。――(30)党の在外組織は、外国に住むロシア人のあいだでの宣伝と、彼らのなかの社会主義的分子の組織とをつかさどる。その頭部には選挙による執行部をおく。――(31)党に所属する自治的連盟は、これらの連盟の専門的任務を助けるために国外にその支部をおくことができる。これらの支部は、自治的グループとして、一般的な在外組織に所属する。――VI　党大会。――(32)党の最高機関は党大会である。――(33)《党大会は、党の綱領、規約、および党活動の指導原則を決定し、すべての党機関の活動を統制し、それらのあいだの紛争を審議する。》――(34)大会への代表選出権をもつものは次のとおりである。(a)党の各地方委員会。(b)党に所属する各自治的連盟の中央執行機関。(c)党中央委員会と党中央機関紙誌編集局。(d)党の在外組織。――(35)委任状による全権の委任は認められる。ただし、一名の代議員の代表する有効委任は三個をこえてはならない。一個の委任を二人の代表に分けることは認められる。拘束的委任は認められない。――(36)中央委員会は、その出席を有益と考える同志に評議権をあたえてこれを大会に招

待する権限をもつ。——（37）党の綱領または規約の変更の問題については、出席総票数の三分の二の多数決を要する。その他の問題は単純多数決で決定する。——（38）大会時に現存する党委員会総数の半数以上の党委員会の代表が出席していれば、その大会は有効と見なされる。——（39）大会は——できるかぎり——二年に一回招集する。《中央委員会の意志にかかわりなく、この期間内における大会の招集を妨げる事由がある場合には、中央委員会は、自己の責任においてこれを延期する。》」

* われわれは、このことばに同志アクセリロードの注意をうながすものである。恐ろしいことだ！　ここにこそ、……編集局の構成を変えることまで……そういうことまでやってのける「ジャコバン主義」の根源がある。

この規約と称するものをおしまいまで読みとおす辛抱づよさを例外的にもちあわせていた読者は、きっと、次の結論についての特別の考察をわれわれに要求しはしないであろう。第一の結論。この規約は、治療しにくい水ぶくれにかかっている。第二の結論。中央集権主義の異常肥大にたいする否定的な態度をあらわす組織上の見解の特別な色合いを、この規約のなかに見つけることは不可能である。第三の結論。同志マルトフが自分の規約の三九分の三八以上を世間の目から（また大会での審議から）隠してしまったのは、きわめて思慮ぶかい行動であった。ただこうして隠蔽しておきながら素面と言っている点が、いくらか独創的なだけである。

(h)　イスクラ派内に分裂がおきるまえの、中央集権主義にかんする討論

規約第一条の定式化の問題は、実際に興味があるし、疑いもなく見解のいろいろな色合いをあからさまにしているが、この問題に移るまえになお、大会の第一四回会議と第一五回会議の一部とを占めた規約にかんする短い一般的討論に、すこし立ちいってみよう。この討論は、中央諸機関の構成の問題で「イスクラ」組織が完全に仲間割れするまえにおきた点で、多少の重要性をもっている。これに反して、一般に規約にかんする、とくに補充にかんするその後の討論は、「イスクラ」組織内でわれわれが仲間割れしたのちにおこなわれたものである。当然なことだが、仲間割れするまえには、全員を興奮させた中央委員会の人的構成の問題によって判断が左右されることがより少なかったという意味で、われわれはより公平に自分の見解を述べることができた。同志マルトフは、すでに私が述べたように、私の組織上の見解に賛成し（一五七ページ）、ただ細目で

二ヵ所同意しないところがあるという留保をつけたにすぎなかった。これに反して、反イスクラ派も、「中間派」も、「イスクラ」の組織計画全体の（したがって、規約全体の）二つの基本的な思想の両方にたいしても、すなわち、中央集権主義にたいしても、「二つの中央機関」にたいしても、すぐさま攻撃を始めた。同志リーベルは、私の規約を「組織された不信」とよび、二つの中央機関を分権主義と見なした（同志ポポーフや同志エゴーロフもそうであった）。同志アキーモフは、地方委員会の権限の範囲をもっと広く規定し、とくに地方委員会自身に「自分の構成を変更する権限」をあたえるように、という希望を述べた。「地方委員会にもっと大きな活動の自由をあたえる必要がある。……地方委員会によって選挙されるように、中央委員会がロシアのすべての活動的な組織の代表によって選挙されるように、地方委員会はその地方の積極的な活動家によって選出されなければならない。もしこれすら許しえないというのなら、中央委員会が任命する地方委員の数を制限するがよい。……」（一五八）。ごらんのとおり、同志アキーモフは、「中央集権主義の異常肥大」に反対する論拠を暗示したのだ。だが、同志マルトフは、中央諸機関の構成の問題での敗北が彼にアキーモフのうしろについてゆく気をおこさせるまでは、この権威ある指示にあくまで耳をかさなかった。彼は、同志アキーモフが、マルトフ自身の規約の「思想」（第七条――中央委員会が〔地方〕委員会の委員を任命する権利の制限）を彼に暗示しているときでさえ、やはり耳をかさなかった！　まだそのときには、同志マルトフは、われわれとの「不協和」を望んでおらず、だから同志アキーモフとの不協和をも、自分自身との不協和をも、我慢していたのである。……まだそのときには、「奇怪な中央集権主義」とたたかったのは、「イスクラ」の中央集権主義が明らかに自分たちに不利益だと見てとった人々だけであった。すなわち、たたかったのはアキーモフ、リーベル、ゴリドブラットであって、彼らのうしろには、エゴーロフ（一五六ページと二七六ページを見よ）その他が、用心ぶかく、慎重に（いつでもあともどりできるように）ついていった。まだそのときには、中央集権主義への抗議を引きおこしているものが、ブンドや「ユージヌィ・ラボーチー」などの、ほかならぬ郷党的、サークル的な利害であることは、党員の大多数に明らかであった。もっとも、いまでも、中央集権主義にたいする『イスクラ』旧編集局の抗議を引きおこしているものが、ほかならぬ『イスクラ』旧編集局のサークル的利害であることは、大部分の党員に明らかであるが。……

たとえば、同志ゴリドブラットの演説（一六〇―一六一）をとってみたまえ。彼は、私の「奇怪な」中央集権主

義に反対してたたかい、それは下級組織の「絶滅」にみちびく、それは「無制限の権力を、あらゆることに無制限に干渉する権利を中央部にあたえようという欲求にみたされている」、それは諸組織に、「上からの命令に黙々として服従する権利しか」あたえていない、うんぬん、と述べた。「草案によってつくられる中央部は、真空の空間にいることになろう。そのまわりにはどんな外郭組織もなく、あるのは、あるはっきりした形のない集団だけで、そのなかで中央部の執行受任者たちが動きまわることになろう。」これは、大会で自分が敗北したあとで、マルトフやアクセリロードらがわれわれにふるまいはじめたごまかしの空文句にそっくりではないか。われわれの中央集権主義には反対しながら、自分たちの中央部には、もっとはっきりしたかたちで無制限の権利を（たとえば、党員を採用し除名する権利や、さらに、大会への代議員の出席を拒否する権利さえも）あたえているブンドは、笑いものにされた。問題が検討されたなら、少数派のときには中央集権主義と規約に反対してわめきたてるが、どうにかして多数派になると、たちまち規約を楯にとる少数派の絶叫も、笑いものにされることとであろう。

二つの中央機関の問題についても、グループ分けがはっきり現われた。イスクラ派全員に、リーベルも、アキーモフ（評議会内で中央機関紙が中央委員会にたいして優位をもつことになるという、今日アクセリロード＝マルトフの愛唱する歌を最初に歌いだしたところの）も、ポポーフも、エゴーロフも対立した。二つの中央機関という計画は、旧『イスクラ』がつねに展開してきた（かつ、同志ポポーフや同志エゴーロフらが口さきでは承認した！）組織上の思想から、ひとりでに出てくるものであった。旧『イスクラ』の政策は、「ユージヌィ・ラボーチー」の計画、並行的に大衆的機関紙をつくって、それを事実上支配的な機関紙にするという計画とは相反するものであった。まさにここに、反イスクラ派の全員と沼地派の全員とが一つの中央部に、すなわちより強い中央集権主義らしく見えるものに賛成したという、一見奇妙な矛盾の根源がある。もちろん、「ユージヌィ・ラボーチー」の組織計画がどんな結果になるか、また、事の成りゆきとしてどんな結果にならずにはおかないかを、あまりはっきり理解していなかった代議員もいた（とくに沼地派のなかには）。だが、彼らの決断力のない、自信のない本性そのものが、彼らを反イスクラ派の側に押しやったのである。

規約にかんするこの（イスクラ派の分裂に先だった）討論のさいにイスクラ派がおこなった演説のうちでは、同志マルトフの演説（私の組織上の思想への「賛同」）と同志

トロツキーの演説とが、とくに注目すべきものであった。同志トロツキーが同志アキーモフや同志リーベルにあたえた答えは、その一語一語が「少数派」の大会後のふるまいと大会後の理論とのまったくの不誠実さを暴露するようなものであった。「規約は、中央委員会の権限の範囲を十分正確に規定していない、と彼（同志アキーモフ）は言った。私は彼に同意できない。それどころか、この規定は正確であって、党が全一的なものであるかぎり、地方委員会にたいする党の統制を確保しなければならないことを、意味している。同志リーベルは、私の表現をつかって、この規約は『組織された不信』であると言った。これはほんとうである。しかし、私がこの表現をつかったのは、ブンドの代表たちが提案した規約についてであって、その規約は、党の一部が党全体にたいして組織された不信を示したものであった。ところが、われわれの規約は」（中央諸機関の構成の問題で敗北するまでは、この規約は「われわれの規約」であった！）、「党の側から党のすべての部分にたいして示す組織された不信、すなわち、すべての地方的、地域的、民族的、その他の諸組織にたいする統制である」と（一五八）。そうだ、ここでは、われわれの規約は正しく特徴づけられている。だから、われわれは、悪がしこい多数派が「組織された不信」の制度を、あるいは同じことであるが「戒厳状態」の制度を考えだし実施したなどと、いまになって良心の苛責も感ぜずに断言している人々に、この特徴づけをできるだけたびたび思いだすように忠告したい。政治的無節操の見本が見たければ、また問題になっているのが自分の所属する下級合議体であるか、それとも他人の所属する下級合議体であるかによってマルトフ一派の見解がどう変わったかの見本が見たければ、右に引用した演説を、在外連盟の大会でのいろいろな演説とくらべてみるだけで十分である。

（i）規約第一条

われわれはすでに、大会で興味のある討論が燃えあがるもとになった相異なる定式化をあげた。この討論は、ほとんど二回の会議を占め、二回の記名投票で終わった（私の思い違いでなければ、大会全体をつうじて記名投票は八回しかなかった。記名投票は非常に時間をむだにしたので、とくに重要な場合にしかおこなわれなかった）。疑いもなく、ここでは事柄は原則的な問題にふれていた。討論にたいする大会の関心は、きわめて大きかった。表決にはすべての代議員が参加した――これは、わが大会では（どの大きな大会でもそうであるが）まれな現象であって、このこ

ともまた、論争者の関心を立証するものである。

　では、いったい論争問題の核心はどういう点にあったのか？　私はすでに大会で次のように言い、その後再三繰りかえしてこう述べた。「私は、われわれの意見の相違（第一条にかんする）を、党の生死を左右するほど重大なものとは全然考えていない。規約の条項がまずいくらいでは、われわれはまだ破滅したりはしない！」[三]（二五〇ページ）と。この意見の相違はいろいろな原則的色合いを明るみにだしてはいるが、それ自体では、大会後に生じたような仲間割れ（実際には、率直に言えば、分裂だが）を引きおこしうるものではけっしてなかった。しかし、どんな小さな意見の相違でも、それをあくまで固執するなら、それを前面に押しだすなら、この意見の相違の根と枝葉とをあらいざらい捜しもとめはじめるなら、大きなものとなりかねない。どんな小さな意見の相違も、それがあるまちがった見解への転換の出発点となるなら、そしてこれらのまちがった見解が、新しい追加的な不一致のために無政府主義的な行動と結びつき、それが党を分裂させるところまでゆくなら、巨大な意義をもつようになりかねないのである。

　この場合にも、まさにそういうふうであった。第一条にかんする比較的小さな意見の相違は、いまでは非常に大きな意義をもつようになっている。というのは、まさにこの意見の相違が、少数派の日和見主義的な迷論と無政府主義的な空文句への転換点となったからである（とくに連盟の大会で、またその後、新『イスクラ』の紙上でも）。ほかならぬこの意見の相違が、イスクラ少数派と、反イスクラ派および沼地派との連合の発端となったし、またこの連合は〔中央諸機関の〕選挙のときまでに最後的に明確な形をとったのである。だから、この連合を理解せずには、中央諸機関の構成の問題で生じた主要な根本的な不一致も、理解できない。第一条にかんするマルトフとアクセリロードの小さな誤りは、われわれの壺にはいった小さなひび割れであった（私が連盟の大会で言ったように）。この壺を固くくくった紐で（連盟の大会のときヒステリーに近い状態にあったマルトフにそう聞きとれたような、首くくりの縄ではなく）できるだけしっかり縛ることもできたし、また、ひびを大きくし、壺を割ってしまうことに全力をかたむけることもできた。のぼせあがったマルトフ派のボイコットや、それに類する無政府主義的な措置のおかげで、まさにこのあとのほうのことが起こったのである。第一条についての意見の相違は、中央諸機関の選挙の問題で少なからぬ役割を演じた。そして、この問題でマルトフが敗北した結果として、彼は、乱暴で機械的な、言語道断とさえ言える手段（「ロシア革命的社会民主主義在外連盟」の大会での諸演

説）によって「原則的な闘争」をやるまでになったのである。

こうして、以上のようないろいろな出来事があったあとのいまでは、第一条の問題は巨大な意義をもつようになっている。そこで、われわれは、この条項の表決のさいに大会で現われた諸グループの性格をも、また、――これとは比較にならないほどいっそう重要なことであるが――第一条をめぐって現われた、あるいは現われはじめた見解のいろいろな色合いの真の性格をも、はっきりと理解しなければならない。読者のご存じのいろいろな出来事があったあとのいまでは、問題はすでに次のようなかたちで提出されている。すなわち、アクセリロードが擁護したマルトフの定式化には、私が党大会で述べたように（三三三）、彼の（あるいは、彼らの）ぐらつき、無定見、政治的あいまいさが反映していたのか、またプレハーノフが連盟の大会で推察したように（連盟議事録、一〇二その他）、ジョレス主義と無政府主義への彼（または彼ら）の偏向が現われていたのか？　それともまた、プレハーノフが擁護した私の定式化には、中央集権主義のまちがった、官僚主義的な、ポンパドゥール[13]的な、非社会民主主義的な理解が反映していたのか？　日和見主義と無政府主義か、それとも官僚主義と形式主義か？――小さな不一致が大きな不一致となったいまでは、問題はこういうかたちで提出されている。そして、私の定式化にたいする賛否の論拠を核心にふれて討議するさいには、いろいろな事件によってわれわれすべてに押しつけられた――大げさに聞こえさえしなければ、歴史的に形成された、と私は言いたい――ほかならぬこの問題提起を、念頭におかなければならないのである。

大会の討論を分析することから、これらの論拠の検討を始めよう。最初の演説である同志エゴーロフの演説は、次のような点で興味があるにすぎない。すなわち、彼の態度（non liquet 私にはまだはっきりしない、どこに真実があるのか、私にはまだわからない）は、このほんとうに新しく、またかなり複雑な細部問題の意味をなかなかのみこめなかった多くの代議員の態度を非常によく示していた。次の同志アクセリロードの演説は、すでに問題をいきなり原則的に提起した。それは、同志アクセリロードがこの大会でおこなった最初の原則的な演説、もっと正確に言うと総じて最初の演説であったが、悪名高い「教授」論をひっさげての彼の初舞台が、とくに成功したものであったとは認めがたい。同志アクセリロードはこう言った。「われわれは党という概念と組織という概念とを区別する必要がある、と私は考える。ところが、ここではこの二つの概念が混同されている。この混同は危険である」と。これが私の定式化に反対する第一の論拠である。もっとくわしくこれを調

べてみよう。私が、党は諸組織の総和*（だが、たんなる算術的な総和ではなく、複合体）でなければならないと言うとき、それは、私が党という概念と組織という概念を「混同している」ことを意味するであろうか？　もちろん、そうではない。私は、これによって、党は階級の先進部隊としてできるだけよく組織されたものでなければならない、党はせめて最小限度の組織性をもちうる分子だけを加入させなければならないという、自分の要望、自分の要求を、まったく明瞭かつ正確に言いあらわしているのである。これに反して、私の論敵は、党に組織された分子と組織されていない分子、指導に従う者と従わない者、先進的な人々と改善の見込みのないほど遅れた人々――というのは、遅れていても、改善の見込みのある人々なら、組織にはいることができるからである――を、混同している。この混同こそ、真に危険なものである。同志アクセリロードは、さらに、「過去の厳重に秘密な中央集権的な組織」（「土地と自由」団と「人民の意志」団）を引合いにだした。これらの組織のまわりには、「組織には所属しないが、なんらかのかたちでその組織を援助し、党員と認められていた多くの人々が結集していた。……この原則は、社会民主主義組織では、もっと厳重に実行されなければならない」と、彼は言った。ほかならぬここで、われわれは問題の要点の一つに達したのである。すなわち、「この原則」――党のどの組織にも所属せず、「なんらかのかたちで党を援助している」にすぎない者に、党員と名のるのを許す原則――は、ほんとうに社会民主主義的な原則であろうか、ということである。そして、プレハーノフは、この問題にただ一つ可能な解答をくだした。「アクセリロードが一八七〇年代を引合いにだすのは正しくない。当時は、よく組織され、みごとに訓練された中央部があり、そのまわりには、中央部のつくった各級の組織があった。そして、これらの組織のそとにあったものは、混沌、無政府状態であった。この混沌の構成分子は、党員と名のっていたが、このことは、事業の利益にならずに害になった。われわれに必要なのは、七〇年代の無政府状態をまねることではなく、それを避けることである」と。だから、同志アクセリロードが社会民主主義的な原則のように見せかけようとした「この原則」は、実際には、無政府主義的な原則なのだ。これを論駁するためには、組織の外部でも統制や指導や規律が可能であるということを示さなければならず、「混沌の分子」に党員という名称をあたえる必要があることを示さなければならない。同志マルトフの定式化の擁護者たちは、そのどちらをも示さなかったし、また示すこともできなかった。同志アクセリロードは、一例として、「自分は社会民主主義

者であると考え、そう言明する一教授」をあげた。この例にふくまれる思想を最後まで突きつめるためには、同志アクセリロードは、さらにこう言わなければならなかったはずである。すなわち、組織された社会民主主義者自身はこの教授を社会民主主義者と認めるだろうか？と。同志アクセリロードは、この第二の質問をださずに、自分の論証を中途で投げだしてしまった。じっさい、二つに一つである。組織された社会民主主義者は、ここで問題になっている教授を社会民主主義者と認めるか、――その場合には、なぜ彼らは、教授をどれかある社会民主主義組織にいれてはならないのか？　こういうふうにいれる場合にはじめて、教授の「言明」は彼の行為に一致し、空文句（教授たちの言明は、あまりにもしばしばこういうものにとどまっているが）ではなくなるであろう。それとも、組織された社会民主主義者は教授を社会民主主義者と認めないか――その場合には、党員という名誉あり責任ある称号を名のる権利を教授にあたえることは、愚かなことであり、無意味であり、有害である。こうして、問題は、組織の原則を一貫してつらぬくか、それとも、分散と無政府状態をあがめるか、に帰着する。われわれは、すでに形成され結束している社会民主主義者の中核――たとえば、すでに党大会を実現していて、あらゆる党組織を拡大し、ふやすべき立場にある中核――から出発して、党を建設するのか、それとも、援助する者はみな党員であるという気やすめの空文句で満足するのか？　同志アクセリロードはつづけてこう言った。「われわれがレーニンの定式を採用するなら、直接に組織に加入させることはできないが、それにもかかわらず党員である一部の人を、捨てさってかえりみないことになるだろう」と。同志アクセリロードは、概念を混同していると言って私を非難しようと思ったのだが、その概念の混同は、ここで彼自身の場合に、まったくはっきり現われている。彼は、援助する者はみな党員であるということを、すでに既定の事柄としている。ところが、まさにこのことをめぐって論争がおこなわれているのであって、私の論敵は、このような解釈が必要であり利益があることをまだこれから証明しなければならないところなのだ。捨てさってかえりみないという、ちょっと見ると恐ろしいこの文句の内容は、いったいどんなものか？　党組織と認められた組織の成員だけを党員と認めるとしても、どれか一つの党組織に「直接に」加入することのできない人々は、党組織ではないが、党に同調する組織ではたらくことができるではないか。したがって、仕事から除外し、運動への参加から除外するという意味での、捨てさってかえりみないということは、問題にならない。それどころか、真の社会民主主義者からな

るわれわれの党組織が強固になればなるほど、また党内に無定見とぐらつきが少なくなればなるほど、労働者大衆のなかの、党をとりまき、党に指導される分子にたいする党の影響は、それだけいっそう広く、多面的に、豊かになり、またみのり多いものとなるであろう。じっさい、労働者階級の先進部隊としての党を、階級全体と混同するのは許されないことではないか。ところが、同志アクセリロードが次のように言っているのは、まさにこの混同（一般にわが日和見主義的「経済主義」の特徴であるもの）におちいったものである。「われわれは、もちろん、まず第一に、党の最も積極的な分子の組織、革命家の組織をつくりだすが、しかし、われわれが階級の党であるからには、あまり積極的でないかもしれないが、意識的にこの党に同調する人々を、党外に残しておかないように考慮しなければならない」と。第一に、社会民主労働党の積極的な分子にふくまれるのは、けっして革命家の諸組織だけではなく、党組織として認められた多数の労働者組織も、これにふくまれるであろう。第二に、いったいどういう理由で、またどういう論理によって、われわれが階級の党であるという事実から、党に所属する人々と党に同調する人々とを差別する必要はない、という結論がでてくるようなことになったのか？　まったく逆である。まさに意識の程度や積極性の程度に差があるからこそ、党への近さの程度にも差をつけることが必要なのである。われわれは階級の党である。だから、階級のほとんど全体が（そして、戦時や内乱時代には、完全に階級全体が）、わが党の指導のもとに行動し、できるだけ緊密にわが党に同調しなければならない。だが、資本主義のもとでいつかは階級のほとんど全体が、あるいは階級全体がその先進部隊、その社会民主党の意識性と積極性まで高まることができると考えるのは、マニーロフかたぎ(三三)であり、「追随主義」であろう。資本主義のもとでは、労働組合組織（より初歩的な、また遅れた層の意識により受けいれられやすい組織）でさえ、労働者階級のほとんど全体を、あるいはその全体をふくむことはできないということは、これまで分別のある社会民主主義者のだれひとりとして疑ったことはなかった。先進部隊と、それに引きつけられる全大衆との差異を忘れ、ますます広範な層をこの進んだ水準に高める先進部隊の不断の義務を忘れる*とは、自分をあざむき、われわれの任務の巨大なことに目を閉じ、これらの任務をせばめることでしかないであろう。党に同調する者と党に所属する者との差、自覚した積極的な人々と援助する人々との差を抹殺することは、まさにこのように目を閉じることであり、忘れることである。

＊「組織」という語は、普通は二つの意味に、広い意味と狭

い意味とにつかわれている。狭い意味では、それは、ごくルーズなものにもせよ、きまった形をもった人間集合体の個々の細胞を意味している。広い意味では、それは、一つの全一体に結集された、そのような細胞の総和を意味している。たとえば、海軍、陸軍、国家は、諸組織（狭い意味の）の総和であると同時に、社会組織（広い意味の）の一種である。学務局は一つの組織（広い意味での）であるが、また一連の諸組織（狭い意味での）からなっている。ちょうどこれと同じように、党も一つの組織であり、一つの組織でなければならない（広い意味の）。それと同時に、党は幾多の多種多様な諸組織（狭い意味の）からなりたっていなければならない。だから、党という概念と組織という概念の区別を述べている同志アクセリロードは、第一に、組織という語の広い意味と狭い意味とのこの差を考えにいれなかったのであり、第二に、彼自身が組織された分子と未組織分子とをいっしょくたに混同したことに、気がつかなかったのである。

組織のあいまいさを合理化し、組織と組織解体との混同を合理化するために、われわれは階級の党である、と言いたてることは、——『底ふかくに』ある運動の『根』についての哲学的・社会史的問題と技術的＝組織的問題」とを混同したナデージヂン[一三三]の誤り（『なにをなすべきか？』、九一ページ）を繰りかえすことを意味する。同志アクセリロードのよい模範にしたがってなされているこの混同こそ、同志マルトフの定式化を擁護した演説者たちがそののち何十ぺんとなく繰りかえしたものである。「党員という名称が広くひろまればひろまるほどよい」——とマルトフは言っているが、しかし、内容に一致しない名称が広くひろまることにいったいどんな利益があるのかは、説明しなかった。党組織に所属しない党員にたいする統制とは擬制にすぎないことを、否定できるであろうか？　擬制が広くひろまることは、有害であって有益ではない。「どのストライキ参加者、どのデモンストレーション参加者も自分の行動に責任を負って、自分は党員であると言明することができるなら、われわれはこのうえなくうれしく思う」（二三九ページ）。実際にそうか？　どのストライキ参加者も自分は党員であると言明する権利をもつべきであろうか？　この命題によって同志マルトフは、自分の誤りを一挙に背理にいたらせ、社会民主主義をストライキ主義に低め、アキーモフらのおちいった不運を繰りかえしている。もし社会民主党がどのストライキをも指導できるなら、われわれはこのうえなくうれしく思う。なぜなら、社会民主党の直接、無条件の義務は、プロレタリアートの階級闘争のあらゆる現われを指導することであるが、ストライキは、この闘争の最も深刻で、最も威力ある現われの一つだからである。しかし、このような初歩的な、ipso facto〔事実上〕組合主義的なものにすぎない闘争形態と、全面的で意識的な社

会民主主義的な闘争とを同一視するなら、われわれは追随主義者となるであろう。どのストライキ参加者にも、自分は「党員であると言明する」権利をあたえるなら、われわれは、明白なうそを、日和見主義的に公認することになるであろう。というのは、このような「言明」は、多くの場合、うその言明であろうから。資本主義のもとでは、はてしない細分や、抑圧や、愚鈍化が、「訓練をうけていない」不熟練労働者のきわめて広範な層のうえに不可避的にのしかかっているにもかかわらず、どのストライキ参加者も社会民主主義者になり、社会民主党員になることができると、自分にも他人にも信じこませようなどと思いつくなら、われわれは、マニーロフ流の夢想で自分をなぐさめることになるであろう。ほかならぬこの「ストライキ参加者」の例によって、どのストライキをも社会民主主義的に指導しようとする革命的な意欲と、どのストライキ参加者も党員であると言明する日和見主義的空文句との差が、とくにはっきりわかる。われわれが実際にプロレタリアートという階級のほとんど全体、いな、階級全体をさえ、社会民主主義的に指導するかぎり、われわれは階級の党である。だが、このことから、われわれは口さきで党と階級とを同一視しなければならない、という結論を引きだせるのは、アキーモフのような連中だけである。

「私は、秘密組織を恐れはしない」と、同じ演説のなかで同志マルトフは述べた。しかし——と、彼はつけくわえた——、「私にとっては、秘密組織は、広範な社会民主労働党がそれをとりかこんでいるかぎりで、はじめて意味をもつ」（二三九ページ）と。正確には、広範な社会民主主義的労働運動がそれをとりかこんでいるかぎりで、と言うべきであった。そして、そういうかたちでなら、同志マルトフの命題は、争う余地がないばかりでなく、まったく自明の理でもある。私がこの点に立ちいって述べるのは、そのあとに発言した演説者たちが同志マルトフの自明の理を、レーニンは「党員の総和を秘密活動家の総和に限ろう」と望んでいるという大はやりの俗悪きわまる論拠に仕立てあげたからにほかならない。微笑をさそうものでしかありえないこの結論を、同志ポサドフスキーも同志ポポーフも引きだした。そして、それをマルトィノフやアキーモフがとりあげたとき、この結論の真の性格はすでに完全に明らかになった。それは、ほかならぬ日和見主義的空文句という性格である。いま同志アクセリロードは、新編集局の新しい組織上の見解を読者に紹介するために、この同じ論拠を新『イスクラ』で展開している。すでに大会で、つまり規約第一条の問題を審議した最初の会議で、私は、論敵がこうした安手な武器をつかおうとしているのに気がついたの

で、自分の演説のなかでこう警告した（二四〇ページ）。「党組織は、職業革命家だけからならなければならないと考えるにはおよばない。われわれには、きわめて狭い、秘密の組織から、きわめて幅広い、自由な lose Organisationen〔ルーズな組織〕にいたる、あらゆる種類、あらゆる等級、あらゆる色合いの多種多様な組織が必要である」[134]と。これは、きわめて自明な、わかりきった真理であるから、それを詳論するのはよけいなことだと、私は考えた。しかし、われわれが非常に多くの点であとに引きもどされている現在では、この問題についても「おさらい」をしなければならない。このおさらいのために、『なにをなすべきか？』と『一同志にあたえる手紙』とからいくつかの箇所を引用しよう。

……「アレクセーエフやムィシキン、ハルトゥーリンやジェリャーボフのような巨匠たちのサークルにとっては、最も真実な、最も実践的な意味での政治的任務は、とりつきやすいものである。それがとりつきやすいのは、まさに彼らの熱烈な伝道が自然発生的にめざめつつある大衆のうちに反響をよび、彼らのたぎりたつ精力が革命的階級の精力によって受けつがれ、ささえられるからであり、またそのかぎりにおいてである」[135]。社会民主党であるためには、ほかならぬ階級の支持を獲得しなければならない。同志マルトフが考えたように、党が秘密組織をつつむべきなのではなく、革命的階級、プロレタリアートが、秘密組織をも秘密でない組織をもふくんでいる党を、とりかこまなければならないのである。

……「経済闘争のための労働者の組織は、労働組合的組織でなければならない。社会民主主義的労働者は、だれでもできるだけこれらの組織に協力して、そのなかで積極的に活動しなければならない。……だが、社会民主主義者だけが『職業』組合の一員となることができるような状態を要求することは、けっしてわれわれの利益にはならない。そうすると、大衆にたいするわれわれの影響範囲をせばめることになるからである。雇い主と政府とにたいして闘争するために団結が必要であることを理解している労働者ならだれでも、職業組合に参加させるがよい。もし職業組合が、せめてこの程度の初歩の理解をもちうる人々の全部を結合しないなら、もしこれらの職業組合が非常に広範な組織でないなら、職業組合の目的そのものが達せられないであろう。そして、これらの組織が広範であればあるほど、それにたいするわれわれの影響もいっそう広範になるであろう。この影響は、経済闘争の『自然発生的』発展によってあたえられるだけでなく、また組合員中の社会主義者がその同僚たちに直接に意識的にはたらきかけることによっ

てもあたえられるのである。」(八六ページ)[一七六] ついでに言っておくが、労働組合のこの例は、規約第一条にかんする論争問題を評価するうえで、とくに特徴的である。労働組合が社会民主主義組織の「統制と指導のもとに」活動しなければならないこと、——このことについては、社会民主主義者のあいだに二つの意見があるはずがない、だが、それを根拠にして、労働組合のすべての成員に、「自分は」社会民主党の党員であると「言明する」権利をあたえることは、明らかに愚かなことであり、二重の害をおよぼすおそれがあるであろう。その害とは、一方では、労働組合運動の範囲をせばめ、これを基盤とした労働者の連帯性を弱めることである。他方では、それはあいまいさと無定見とにたいして社会民主党の門戸をひらくことになるであろう。ドイツ社会民主党は、出来高払制で働いていたハンブルクの石工たちの有名な事件[一七七]がおきたとき、具体的に提起された同種の問題を解決する機会があった。社会民主党は、ストライキ破りは社会民主主義者の見地からすれば恥ずべき行為であると認めること、すなわちストライキを指導しそれを支持するのが自分の切実な任務であると認めることを、一瞬もためらわなかったが、それと同時に、党は、党の利益と職業組合の利益とを同一視せよ、個々の組合の個々の行動にたいする責任を党に負わせよ、という要求を、同じくきっぱりと拒否した。党は、職業組合に自分の精神を浸透させ、これを自分の影響に従わせるように努力しなければならないし、また努力するであろう。だが、まさにこの影響をあたえるためにこそ、党は、これらの組合のなかの完全に社会民主主義的な(社会民主党に所属している)分子と、十分な自覚をもたず、政治的に十分に積極的でない分子とを区別しなければならないのであって、同志アクセリロードがやりたがっているように、両者を混同してはならないのである。

……「最も秘密な機能を革命家の組織に集中することによって、広範な公衆をめあてとした、したがって、できるだけきまった形をもたず、できるだけ秘密でない他の多くの組織——労働組合も、労働者の自習サークルや非合法文献の読習サークルも、他のあらゆる住民層のなかの社会主義的および民主主義的サークルも、その他いろいろなものも——の活動の広さと内容とは、弱められずに、かえって豊富なものになるであろう。このようなサークル、組合、組織は、いたるところに、きわめて大量に、またきわめて多種多様の機能をもって存在しなければならない。しかし、それらを革命家の組織と混同して、この両者のあいだの境界を抹消するのは、……ばかげた、有害なことである。」……(九六ページ)[一七八] この引用から、広範な労働者諸組織が

革命家の組織をとりかこまなければならないと、同志マルトフが私に注意してくれたのが、どんなに的はずれであるかがわかる。私は、すでに『なにをなすべきか？』のなかでこれを指摘したし、また『一同志にあたえる手紙』のなかで、この思想をもっと具体的に展開した。そのなかで、私はこう書いた。工場サークルは、「われわれにとってはとくに重要である。運動の主要な力はすべて大工場の労働者の組織性にある。なぜなら、大工場は、労働者階級全体のうちで数の点で優勢なだけでなく、影響力や、意識の発達や、闘争能力からみればさらにそれ以上の優勢を占める部分を擁しているからである。一つひとつの工場がわれわれの要塞でなければならない。……工場の下級委員会は、労働者のありとあらゆるサークル（または受任者）の網の目が全工場にゆきわたり、できるだけ大きな部分の労働者がそれにふくめられるように努力しなければならない。……すべてのグループ、サークル、下級委員会などは、委員会の機関または委員会の支部の立場におかれなければならない。そのうちのあるものは、ロシア社会民主労働党に加入したいという希望をはっきり表明するだろう。そして、委員会の承認が得られれば党に加入し、一定の機能を引き受け（委員会の委託により、あるいは委員会との合意にもとづいて）、党諸機関の指揮に従う義務を負い、すべての党員のもつ権利を取得し、委員会の成員の最も手近な候補者と見なされる等々ということになるだろう。他のものは、ロシア社会民主労働党にはくわわらず、党員によって設立されたサークル、あるいはあれこれの党グループに同調するサークル等々の地位にとどまるだろう。」（一七—一八ページ）[三九]私が傍点を打ったことばから、私の第一条の定式化の思想は、すでに『一同志にあたえる手紙』のなかで十分に言いあらわされていることが、とくにはっきりわかる。党所属の条件は、ここではっきり示されている。すなわち、（一）ある程度の組織性、（二）党委員会の承認、がそれである。さらに、その一ページさきで私は、どういうグループと組織を、またどういう理由で、党に加入させなければならないか（または加入させてはならないか）をも、だいたい指摘しておいた。「配布者グループは、ロシア社会民主労働党に所属しなければならず、ある数の党員と党役員を知っていなければならない。各職業の労働条件を研究し、職業上の要求の計画をつくりあげるグループは、かならずしもロシア社会民主労働党に所属する必要はない。一、二の党員が参加して学習している学生、将校、職員のグループは、ときにはこの人が党員だということを全然知ってはならないことさえある、等々」（一八—一九ページ）[四〇]と。

ここに、「素面」の問題にかんするいま一つの材料があ

る！　同志マルトフの草案の定式は、党と組織との関係にさえまったくふれていないのに、私は、すでに大会のほとんど一年もまえに、ある組織は党にくわわらなければならないが、他の組織はそうでないことを、指摘したのである。『一同志にあたえる手紙』のなかには、大会で私が擁護した思想がすでにはっきりと現われている。次のように言いあらわせば、この問題を一目でわかるようにすることができよう。一般的に組織性の程度により、とくに組織秘匿の度合いによって、だいたい次のような部類を区別することができる。（一）革命家の諸組織。（二）できるだけ広範で多種多様な労働者諸組織（私は労働者階級に話を限っているが、他の階級のある分子も一定の条件のもとではここにはいるのは自明なこととして前提している）。この二つの部類が党を構成する。さらに、（三）党と同調する労働者諸組織。（四）党と同調してはいないが、事実上党の統制と指導に従っている労働者諸組織。（五）ある程度まで――すくなくとも階級闘争の大きな現われの場合には――同じように社会民主党の指導に従う、労働者階級の未組織分子。私の見地からすれば、この問題はほぼ以上のように言いあらわされる。これに反して、同志マルトフの見地からは、党の限界はまったくはっきりしないままである。なぜなら、「どのストライキ参加者も」「自分は党員であると言明する」ことができるからである。こういうあいまいさからどんな利益が生まれるのか？　「名称」が広範にひろまることである。その害は、階級と党との混同という、組織を解体させる思想をもちこむことである。

以上に述べた一般的な諸命題を例証するために、規約第一条について大会でおこなわれたその後の討論にざっと目をとおしてみよう。同志ブルケールは、（同志マルトフを喜ばせたことに）私の定式化に賛成した。しかし、彼と私との同盟は、同志アキーモフとマルトフとの同盟とは違って、誤解によるものであったことがわかる。同志ブルケールは、「規約全体にも、この規約の趣旨全体にも同意しない」（二三九ページ）のであるが、私の定式を、「ラボーチエエ・デーロ」の味方にとって望ましい民主主義の基礎として、擁護したのである。同志ブルケールは、政治闘争ではときとしてまだしもましな害悪を選ばなければならないことがあるという見地まで、まだ高まってはいなかった。同志ブルケールは、わが党大会のような大会で民主主義を擁護するのは無益であることに、気がつかなかった。同志アキーモフは、もっと先見の明があった。「同志マルトフと同志レーニンとは、どれが（どの定式化が）彼らの共通の目的をよりよく達成するかについて論争している」（二五二ページ）と、彼が認めたのは、まったく正しく問題を提

起したものであった。彼はつづけて言った。「私とブルケールは、この目的を達成することの少ないほうを選ぼうと思っている。この立場から、私はマルトフの定式化を選ぶ」と。そして同志アキーモフは、自分は「彼らの目的そのもの」（プレハーノフとマルトフと私の目的――つまり、革命家の指導組織をつくること）は「実現不可能で有害」であると思う、と率直に説明した。彼は、同志マルトィノフと同じように、*「革命家の組織」は必要でないという「経済主義者」の思想を主張した。彼は、「実生活のゆく手をマルトフの定式でさえぎるか、レーニンの定式でさえぎるかにはかかわりなく、やはり実生活はわれわれの党組織のなかに侵入してくるだろうという確信にみちて」いた。この「追随主義的な」「生活」観は、もしわれわれが同志マルトフのところでもやはりそれに出あいさえしなかったなら、立ちいって述べる必要はなかったであろう。同志マルトフの第二の演説（二四五ページ）は、全体として非常に興味ぶかいので、くわしく調べてみる値うちがある。

* しかし、同志マルトィノフは、同志アキーモフと違うところを見せたがっている。彼は、陰謀的ということは秘密な、ということを意味しないということ、これらのことばの相違のかげには概念の相違が潜んでいることを、証明したがっている。とはいえ、この相違がどんなものかを、同志マルトィノフも、いまでは彼のうしろに従っている同志アクセリロードも、説明しなかった。同志マルトィノフは、私が、たとえば『なにをなすべきか？』のなかで（『任務』のなかでも私がやったように（二二））「政治闘争を陰謀にせばめること」に断固として反対しなかったかのような「ふりをしている」。同志マルトィノフは、私のたたかいの相手が革命家の組織の必要を認めていなかったこと――いまでも同志アキーモフはそれを認めていないのだが――を、聴衆に忘れさせようと望んでいるのである。

同志マルトフの第一の論拠はこうである。組織に所属しない党員にたいする党組織の統制は、「委員会がだれかに一定の機能を委任し、この機能を監視することができるかぎり、実行可能である」（二四五ページ）と。この命題はきわめて特徴的である。なぜなら、マルトフの定式化はだれに必要なのか、また実際にはだれに役だつであろうか、個々ばらばらのインテリゲンツィアにか、それとも労働者グループと労働者大衆にか、ということを、この命題は、こう言ってよければ、「洩らしている」からである。問題は、マルトフの定式には二とおりの解釈が可能なことにある。（一）党組織の一つの指導のもとに、党に規則的な個人的協力をおこなう者はすべて、「自分は」党員であると「言明する」（同志マルトフ自身のことば）権利をもつ。（二）あらゆる党組織は、党の指導のもとに党に規則的な

個人的協力をおこなう者を、すべて党員と認める権利をもつ。第一の解釈だけが、実際に「どのストライキ参加者にも」党員と名のる可能性をあたえるものであり、だから、この解釈だけがリーベルやアキーモフやマルトィノフらの心をたちまちとらえたのである。だが、この解釈は明らかに空文句である。なぜなら、そうとすれば、これは労働者階級全体にあてはまることで、党と階級との差異が抹消されるであろうから。「どのストライキ参加者をも」統制し、指導するなどということは、「象徴的」にしか言えないことである。だからこそ、同志マルトフは、彼の第二の演説のなかで、委員会は機能を委任し、その遂行を監視するという第二の解釈に、たちまち迷いこんだのである（もっとも、ついでに言っておけば、大会は、コースチチの決議案(二二)を否決して、この解釈をはっきり拒否した。二五五ページ）。こういう専門的な委任は、いうまでもなく、労働者大衆、数千のプロレタリア（同志アクセリロードや同志マルトィノフが語っているところの）にたいしてなされることは、けっしてないであろう。――そういう委任は、同志アクセリロードが言及した教授たちや、同志リーベルと同志ポポーフが心づかいを示した中学生たち（二四一ページ）や、同志アクセリロードが彼の第二の演説のなかで引合いにだした革命的青年（二四二ページ）にこそ、しばしばあたえられるであろう。一言でいえば、同志マルトフの定式は、死文に、空文句にとどまるか、でなければ、主として、ほとんどもっぱら、「ブルジョア的個人主義が骨の髄までしみこんでいて」組織に所属したがらない「インテリゲンツィア」に役だつか、どちらかである。口さきでは、マルトフの定式は、プロレタリアートの広範な層の利益を擁護しているが、実際には、この定式は、プロレタリア的な規律と組織とをきらうブルジョア・インテリゲンツィアの利益に役だつであろう。現代の資本主義社会における特別な層としてのインテリゲンツィアを全体として特徴づけるものが、ほかならぬ個人主義であり、規律に服し組織にはいる能力のないことであるのは、あえて否定する者は一人もないであろう（たとえば、カウツキーのインテリゲンツィアにかんする有名な諸論文(二三)を参照せよ）。とりわけこの点で、この社会層はプロレタリアートに劣るのである。この点に、プロレタリアートがしばしば痛感させられる、インテリゲンツィアの惰弱さとぐらつきの原因の一つがある。そして、インテリゲンツィアのこの性質は、非常に多くの点で小ブルジョア的な生存条件に近い（ひとりで、あるいは非常に小さな集団で働くこと）彼らの通常の生活条件、彼らの生計獲得の条件と、不可分の関連をもっているのである。最後に、ほかならぬ同志マルトフの定式の擁

護者たちが、教授や中学生の例をもちださなければならなかったことも、偶然ではない！　第一条にかんする論争では、同志マルトィノフと同志アクセリロードが考えたように、広範なプロレタリア的闘争の擁護者が極端な陰謀組織の擁護者に反対したのではなくて、ブルジョア・インテリゲンツィア的個人主義の味方が、プロレタリア的な組織と規律の味方と衝突したのである。

同志ポポーフはこう言った。「いたるところで、ペテルブルグでも、ニコラーエフまたはオデッサでも、これらの都市の代表者たちの証言によると、組織の成員となることができない労働者が数十人いる。彼らを組織に所属させることはできるが、その成員と見なすことはできない」（二四一ページ）と。なぜ彼らは組織の成員となることができないのか？　これは依然として同志ポポーフの秘密となっている。私はすでに、『一同志にあたえる手紙』のなかの一節をさきに引用しておいたが、その箇所は、こういう労働者（数十人ではなく、数百人の）をみな組織にいれることこそ、可能でもあれば必要でもあること、しかも、これらの組織の非常に多くのものが党に加入できるし、また加入しなければならないことを示している。

同志マルトフの第二の論拠はこうである。「レーニンの意見では、党内には党組織以外の組織はない。」……まったくそのとおりである！……「私の意見では、これに反して、そういう組織が存在しなければならない。実生活は、われわれがわれわれの職業革命家の戦闘組織の階層制にふくめることができるよりもいっそう速く組織をつくりだし、発生させる。」……これは、二つの点で事実でない。（一）「実生活」が発生させる有用な革命家の組織は、われわれが必要とするよりも、また労働運動が必要とするよりも、はるかに少数である。（二）わが党は、革命家の組織の階層制でなければならないだけでなく、多数の労働者組織の階層制でもなければならない。……「中央委員会は、原則上の点で十分に信頼できる組織にだけ党組織の称号を名のることを承認するだろう、とレーニンは考えている。だが、同志ブルケールは、実生活（原文のまま！）の要求がけっきょくものを言うであろう、そして中央委員会は、多数の組織を党外にほうっておかないために、これらの組織が十分信頼できるものでないにもかかわらず、それを公認するほかなくなるだろうことを、よく理解している。同志ブルケールがレーニンに賛成するのは、このためなのだ」と。……これこそ真に追随主義的な「生活」観である！　いうまでもなく、中央委員会が、自分自身の意見を基準とせずに他人がどう言うだろうかということを基準とする人たち（組

ればならない。われわれは、党を組織できるし、また組織しなければならない。わたしは、もちろんのことだが、こう言いたい、われわれは、中央委員会の指導のもとで……（ゆるがぬ？）

織委員会事件を見よ）からかならずなりたつべきだとすれば、そのときには、党の最も遅れた分子が優勢を占めるという意味で、「実生活の要求がけっきょくものを言う」であろう（遅れた分子から党「少数派」ができた現在、まさにそういうことが起こっているように）。だが、分別のある中央委員会が「信頼できない」分子を入党させざるをえないような筋のとおった理由は、なにひとつあげることができない。同志マルトフは、信頼できない分子を「発生させる」「実生活」をまさにこのように言いたてることによって、自分の組織計画の日和見主義的性格をまざまざと示しているのである！……彼はつづけてこう言った。「だが、もしこういう組織」（十分に信頼できない組織）「が党綱領と党の統制を受けいれることに同意するなら、われわれはこの組織を党にいれ、しかもそうしたからとて党組織にはしない、というふうにすることができる、と私は考える。たとえば、『独立派』のなにかの団体が、社会民主党の見地とその綱領を受けいれて、党にはいることを決定するなら、それはわが党の大きな勝利であると、私は考えたい。だがこのことは、われわれがこの団体を党組織にふくめることを意味しない」と。……マルトフの定式はまさにこういう混乱にみちびくのである。すなわち、党に所属する非党組織、と！　彼の図式をちょっと思いうかべてみたまえ。

党＝（一）革命家の諸組織＋（二）党組織と認められた労働者諸組織＋（三）党組織と認められない労働者諸組織（主として「独立派」からなる）＋（四）いろいろな機能を果たす個人、教授や中学生など＋（五）「すべてのストライキ参加者」。このみごとな計画に肩をならべることができるのは、同志リーベルの次のようなことばだけである。「組織を組織することだけがわれわれの任務ではない（!!）。われわれは、党を組織できるし、また組織しなければならない。」（二四一ページ）そうだ、もちろん、われわれはそうすることができるし、またそうしなければならない。しかし、そのために必要なのは、「組織を組織する」というような意味のないことばでなく、実際に組織するためにはたらくよう党員にはっきり要求することである。「党を組織する」ことをうんぬんしながら、あらゆる無組織状態とあらゆる混乱とを党ということばでおおいかくすのを弁護することとは、空虚な文句をしゃべることを意味する。

「われわれの定式化は、革命家の組織と大衆のあいだに一連の組織が存在するようにしたいという欲求を表現している」と、同志マルトフは言う。けっしてそうではない。なぜなら、マルトフの定式はこの真に必須の欲求を表現してはいない。マルトフの定式は、組織にはいろうという刺激をあたえず、また組織にはいれという要求をふくまず、組

織された者と組織されていない者とを区別していないからである。マルトフの定式は、称号をあたえるだけである。* そして、この点については、同志アクセリロードの次のことばを思いださずにはいられない。「どんな命令によっても、それらのもの」（革命的青年のサークルなど）「や個々人が社会民主主義者と名のるのを、禁止することはできないし」（神聖な真理である！）、「また自分を党の一部と見なすことすら、禁止することはできない。」……これは絶対にまちがっている！　社会民主主義者と名のるのを禁止することはできないし、またその必要もない。なぜなら、このことばは、直接には信念の体系を言いあらわすだけで、特定の組織上の関係を言いあらわすものではないからである。個々のサークルや個々人が、党の事業に害をあたえ、党を堕落させるか攪乱するときには、これらのサークルや人物が「自分を党の一部と見なす」のを禁止することはできるし、また禁止しなければならない。もし、サークルが「自分を」全体の「一部と見なす」のを、党が「命令によって禁止する」ことができないのなら、全体としての、政治勢力としての党をうんぬんするのは、滑稽であろう！　もしそうなら、いったいなんのために党から除名する手続や条件を規定するのか？　同志アクセリロードは、同志マルトフの基本的な誤りをはっきりと背理にしてしまった。彼がこれにつけくわえて、「レーニンの定式化した第一条は、プロレタリアートの社会民主党の本質そのもの（!!）、その諸任務と、まっこうから原則的に矛盾している」（一四三ページ）と言ったのは、この誤りを日和見主義的な理論にまつりあげさえしたものであった。これはまさしく、階級にたいする要求よりも高度の要求を党に提出するのは、プロレタリアートの任務の本質そのものと原則的に矛盾するという意味にほかならない。アキーモフがこのような理論を全力をあげて擁護したのも、異とするにたりない。

* 連盟の大会で同志マルトフは、彼の定式化を裏づけるもう一つの論拠をもちだしたが、それは嘲笑にしか値しないものである。彼はこう言っている。「レーニンの定式は、文字どおりに解するなら、中央委員会の受任者たちを党から除外するものであることを、われわれは指摘できよう。なぜなら、受任者たちは組織を構成しないからである」（五九ページ）と。この論拠は、議事録にのっているように、連盟の大会でも笑声で迎えられた。同志マルトフは、彼の指摘した「困難」は、中央委員会の受任者たちを「中央委員会の組織」に所属させることによってしか解決しえないと、考えている。だが、問題はそういうことにあるのではない。問題は、同志マルトフが、その用例によって、第一条の思想を彼がまったく理解していないことをはっきりと示したこと、じっさい嘲笑にしか値しない、まったくの字句の末にとらわれた批判の見本を示したことにある。形式的には、「中央委員会の受任者の組織」

をつくり、これを党にふくめるという決定をつくりさえすれば、同志マルトフの頭を非常に悩ました「困難」は、たちどころに消えてしまうであろう。ところが、私の定式化した第一条の思想は、「組織にはいれ！」という刺激にあり、現実の統制と指導とを確保することにある。問題の本質の見地からすれば、中央委員会の受任者たちが党にはいるかどうかという問題そのものが滑稽である。なぜなら、彼らにたいする現実の統制は、彼らが受任者に任命されたことですでに、彼らを受任者の職務にとどまらせていることですでに、十分に、無条件に確保されているからである。したがって、組織された者と組織されていない者との混同（同志マルトフの定式化における誤りの根源）は、ここでは問題にならない。同志マルトフの定式が役に立たない理由は、だれもかれも、どの日和見主義者も、どのむだ話屋も、どの「教授」も、どの「中学生」も、自分は党員であると言明することができるという点にある。同志マルトフは、自分を勝手に党員であると見なしたり、自分は党員であると言明したりすることがまったく問題となりえない用例を用いて、自分の定式化のこの致命的な弱点をごまかそうと試みているが、むだなことである。

公平を期するために述べておかなければならないが、いまこのまちがった、明らかに日和見主義に傾斜している定式化を、新しい見解の萌芽にしようと望んでいる同志アクセリロードも、大会では、反対に、「取引をする」用意があることを表明して、こう言った。「しかし、私は、自分があいている扉をノックしているのに気づいている。」……（私は、新『イスクラ』紙上にもそれがあるのに気づいている。）……「なぜなら、同志レーニンの言う、党組織の一部と見なされる外郭サークルとは、私の要求におうじるものだからである。」……（外郭サークルだけでなく、あらゆる種類の労働者団体と言っているのである。議事録二四二ページの同志ストラホフの演説および『なにをなすべきか？』と『一同志にあたえる手紙』とからの前掲の引用文を参照せよ。）……「なおこのほかに個々人がいるが、この場合にも取引をまとめることができよう」と。私は同志アクセリロードに、一般的にいえば取引をするつもりはある、と答えた。そこで私は、どういう意味でそう言ったのかを、いま説明しなければならない。ほかならぬ個々人、例の教授や中学生などといった連中については、私は譲歩に同意する気はさらさらなかった。だが、労働者の組織にかんして疑いが生じたのなら、私は、私の第一条に次のような注をつけくわえることに同意したであろう（私がさきに立証したように、こうした疑いはまったく根拠のないものであるにもかかわらず）。「ロシア社会民主労働党の綱領と規約とを受けいれる労働者組織は、できるだけ数多く党組織のうちにふくめられなければならない。」もちろん、厳密にいえば、こうした願望は、法的規定に限られるべき

規約では場ちがいで、説明的な注解や小冊子のなかにいれられるべきものであるが（そして、すでに述べたように、私は、この規約よりもずっとまえに、私のいろいろな小冊子のなかでそういう説明をあたえておいた）、しかし、こうした注には、少なくとも、同志マルトフの定式化に疑いもなくふくまれている、組織の解体にみちびくおそれのある誤った思想、日和見主義的な議論*や「無政府主義的見解」はみじんもふくまれてはいないであろう。

＊ マルトフの定式を基礎づけようと試みる場合にかならず姿をあらわすこうした議論の一つは、とくに同志トロツキーの次のような文句（二四八ページと三四六ページ）である。「日和見主義は、規約のあれこれの条項よりも、もっと複雑な原因によって生みだされる（あるいは、もっと深い原因によって規定される）。——それは、ブルジョア民主主義派とプロレタリアートとの相対的な発達水準によって引きおこされる。」……肝心なことは、規約のいろいろな条項が日和見主義を生みだすかもしれない、という点にあるのではなく、それらの条項の助けをかりて、日和見主義に対抗する多少とも鋭い武器を鍛えあげる点にある。日和見主義の原因が深ければ深いほど、この武器はいっそう鋭くなければならない。だから、日和見主義に門戸を開いている定式を、日和見主義には「深い原因」があるということで正当化することは、正真正銘の追随主義である。同志トロツキーが同志リーベルに反対したときには、彼は、規約というものが、部分にたいする全体の、遅れた部隊にたいする先進部隊の「組織された不信」であることを、理解していた。ところが、同志トロツキーは、同志リーベルの味方になると、もうこのことを忘れて、われわれがこの不信（日和見主義にたいする不信）を組織するうえでの弱さと無定見とを、「複雑な原因」や「プロレタリアートの発達水準」などで正当化さえしはじめたのである。同志トロツキーのもう一つの論拠はこうである。「なんらかの仕方で組織されているインテリゲンツィア青年にとっては、党の名簿に自分の名を記入する（傍点は私のもの）ことは、他の人々にくらべてはるかにたやすい」と。まさにそのとおりである。だからこそ、インテリゲンツィア的なあいまいさという欠陥をもっているのは、組織されていない分子でさえ自分は党員であると言明できるようにする定式であって、名簿に「自分の名を記入する」権利を排除する私の定式ではない。同志トロツキーはこう言っている。もし中央委員会が日和見主義者たちの組織を「認めない」とすれば、それはもっぱらこの人たちの性格のためであるが、この人たちは政治的な人物として知られているので、危険ではなく、全党のボイコットによって彼らを放逐することができる、と。これは、党から放逐する必要のある場合についてだけ正しい（それも、半分しか正しくない。なぜなら、組織された党は投票によって放逐するのであって、ボイコットによって放逐するのではないからである）。放逐するのが愚かしく、ただ統制する必要があるだけの、はるかにしばしば見られる場合にかんしては、これはまったく正しくない。統制する目的のために、中

央委員会は、十分には信頼できなくとも活動能力のある組織を、——それをためすために、それを正しい道に向けるようにやってみるために、中央委員会の指導でその部分的偏向を訂正させる等々のために、——一定の条件つきでわざと党に加入させることができる。もし党の名簿に「自分の名を記入する」ことが一般に許されてさえいなければ、こういう加入は危険ではない。まちがった見解とまちがった戦術を、公然と、責任ある態度で、統制をうけながら表明させる（そして討議する）ためには、こういう加入が有益なことがしばしばあるだろう。「しかし、法的規定が事実上の諸関係に合致すべきであるとすれば、同志レーニンの定式化は拒否しなければならない」と、同志トロツキーは言う、しかも、またもや日和見主義者として言う。事実上の関係は死んだものではなく、生きていて、発展するものである。法的規定は、その関係の前むきの発展に合致することもあろうし、また（この規定がまずければ）退歩または停滞に合致することもあろう。このあとの場合が、すなわち同志マルトフの「場合」なのである。

括弧にいれて引用した最後の表現は、同志パヴローヴィチのものであって、彼は、「責任を負うことのない、自分自身を党員と見なす」ような党員を認めるのは無政府主義である、と述べたが、これは非常に正しい。同志パヴローヴィチは、同志リーベルに私の定式化をこう説明した。この定式化は、「普通のことばに言いかえれば、もし党員でありたければ、組織上の関係をも、精神的に承認するだけであってはならない」という意味である、と。この「言いかえ」がどんなに単純であろうと、それは、いろいろないかがわしい教授や中学生にとってだけでなく、最もきっすいの党員にとっても、最上部の党員たちにとってさえも、よけいなものではなかった（大会後の出来事が示したように）。……同志パヴローヴィチはまた、同志マルトフの定式と当のマルトフがきわめて不手ぎわに引用した科学的社会主義の争う余地のない次の命題との矛盾をも、これにおとらず正しく指摘した。「わが党は無意識的な過程の意識的な表現者である」と。まさにそのとおりである。それだからこそ、「どのストライキ参加者も」党員と名のることができるようにしようとつとめるのは、正しくないのである。なぜなら、もし「どのストライキも」、強力な階級的本能と不可避的に社会革命にみちびく階級闘争との自然発生的な表現であるだけでなく、この過程の意識的な表現であるなら、……それならば、ゼネラル・ストライキは無政府主義的な空文句ではないことになろうし、わが党はすぐさま、一挙に、全労働者階級を包含するものとなるだろうし、したがってまた全ブルジョア社会の息の根をも一挙にとめるであろうから。実際に意識的な表現者となるためには、党は、一定の意識水準を保障するような、そしてこの

水準を系統的に高めてゆくような組織関係をつくりだすことができなければならない。同志パヴローヴィチはこう言った。「もしマルトフの道をすすむべきだとすれば、なによりもまず、綱領の承認にかんする条項を削除しなければならない。なぜなら、綱領を受けいれるためには、それを会得し、理解しなければならないからである。……綱領を承認するためには、政治的意識のかなり高い水準が条件となる」と。われわれは、社会民主党にたいする支持、社会民主党の指導する闘争への参加を、なんらかの要求（会得、理解その他の）によって人為的に制限することを、けっして許さないであろう。なぜなら、こういう参加そのものが、そういう事実が現われたということだけで、意識性をも組織的本能をも高めるからである。しかし、われわれが計画的活動のために党に団結した以上は、われわれはこの計画性の確保のために心をくばらなければならない。

綱領にかんする同志パヴローヴィチの警告がよけいなものでなかったことは、ほかならぬこの同じ会議のあいだにすぐさま明らかになった。同志マルトフの定式を通過させた同志アキーモフと同志リーベルとは、（党の「一員にな*る」ためには）綱領もただ精神的に、ただその「基本命題」だけを、認めればよいことにするように要求して（二五四—二五五ページ）、すぐさま自分の本性をさらけだした。「同志アキーモフの提案は、同志マルトフの見地からすれば、まったく論理的である」と、同志パヴローヴィチは指摘した。残念ながら、アキーモフの提案がどれだけの票数を集めたかは、議事録からはわからない。――おそらく、七票（五人のブンド派、アキーモフとブルケール）以下ではなかったであろう。そして、まさにこの七人の代議員が大会から退場したことこそ、規約第一条をめぐって形成されはじめた「結束した多数派」（反イスクラ派、「中間派」およびマルトフ派）を、結束した少数派に変えてしまったのである！　まさにこの七人の代議員の退場こそ、旧編集局を承認するという提案の敗北に――『イスクラ』の運営における「継承性」の一見はなはだしい侵害に――みちびいたのである！　この独特な七人組こそ、『イスクラ』の「継承性」の唯一の救い手であり保障であった。この七人組をつくっていたのは、ブンド派、アキーモフおよびブルケール、すなわち、『イスクラ』を中央機関紙として承認する理由文に反対投票したまさにその代議員たちであり、その日和見主義が大会によって数十回も確認された、とくに、第一条中の綱領についての要求を緩和するという問題に関連してマルトフとプレハーノフによって確認された、まさにその代議員たちであった。反イスクラ派によって守られる『イスクラ』の「継承性」！――ここでわれわれは、

大会後の悲喜劇の発端にたどりつくのである。

＊ マルトフの定式にたいする賛成は二八票、反対は二二票であった。八名の反イスクラ派のうち、七名はマルトフに賛成し、一名は私に賛成した。日和見主義者の助けがなかったら、同志マルトフは彼の日和見主義的な定式を通過させることはできなかったであろう。(連盟の大会では、同志マルトフはなぜかブンド派の票にしかふれず、同志アキーモフとその僚友のほうは忘れることで、正確にいえば、それが私に不利な証明となりえたときにだけ——同志ブルケールが私に同意したこと——彼らを思いだすことで、この疑いない事実を論駁しようという、ひどくまずい試みをした。)

＊＊

規約第一条にかんする投票のグループ分けは、言語の同権事件の場合とまったく同じ型の現象を明るみにだした。イスクラ多数派からその(約)四分の一が脱落したことが、「中間派」を味方につけた反イスクラ派に勝利の可能性をあたえたのである。もちろん、この場合にも、情景の完全な調和を破る個々の票もあった。——わが大会のような大きな会合では、その場しだいであるときはこちら側に、あるときはあちら側にくっつく一部の「気まま者」が現われることは避けがたい。第一条のように、意見の不一致の真の性格がようやく明らかになりかけたばかりで、多くの者が全然まだ問題を理解するひまのなかった(問題を文献のなかであらかじめ究明していなかったので)問題については、とくにそうである。イスクラ多数派から脱落したのは五票であった(ルソフとカルスキーが二票ずつ、レンスキーが一票)。反対に、反イスクラ派の一名(ブルケール)と中間派の三名(メドヴェーデフ、エゴーロフ、ツァリョーフ)がイスクラ多数派に味方した。総計は二三票(24－5＋4)となった。これは、〔中央諸機関の〕選挙のさいの最後的なグループ分けより一票少ない。マルトフに過半数を獲得させたのは、反イスクラ派であった。彼らのうち七票がマルトフに賛成し、一票が私に賛成した(「中間派」のうちやはり七票がマルトフに賛成し、三票が私に賛成した)。大会の終りごろと大会後に結束した少数派を形づくったイスクラ少数派と反イスクラ派および「中間派」とのあの連合が、形成されはじめた。マルトフとアクセリロードは、第一条の定式化において、とくにこの定式化を擁護したさいに、疑いもなく日和見主義と無政府主義的個人主義とにむかって一歩を踏みだしたのであるが、彼らの政治的な誤りは、大会の自由で公然たる舞台のおかげで、たちまち、とくにくっきりとさらけだされた。それは、最もぐらついた、原則上の点で最も堅固でない分子が、革命的社会民主党の見解のなかに現われたひび割れや裂け目をひろ

げようとして、ただちに全力をあげたおかげで、さらけだされたのである。組織の分野で相異なる目的をあからさまに追求していた人たち（アキーモフの演説を見よ）が大会で共同して活動していたことが、われわれの組織計画とわれわれの規約との原則的な反対者たちを、ただちに同志マルトフと同志アクセリロードの誤りを支持するほうに押しやった。この問題についても革命的社会民主党の見解を忠実に守ったイスクラ派は、少数派になった。これは非常に重大な事情である。なぜなら、このことをはっきりさせずには、規約の細目をめぐる闘争も、中央機関紙と中央委員会との人的構成をめぐる闘争も、まったく理解できないからである。

（j）日和見主義という無実の非難を理由なくこうむった人々

規約にかんする討論のつづきに移るまえに、中央諸機関の人的構成の問題についてのわれわれの不一致をはっきりさせるために、大会のあいだにひらかれたイスクラ組織の内輪の会議にふれなければならない。四回にわたってひらかれたこれらの会議のうち、最後の最も重要な会議は、規約第一条についての表決の直後にひらかれた。――したがって、この会議で起こった「イスクラ」組織の分裂は、時間的にもまた論理的にも、その後の闘争の前提条件であった。

「イスクラ」組織の内輪の会議*は、中央委員の予想される候補者の問題を討議するきっかけとなった組織委員会事件後まもなく始まった。拘束的委任が廃止されていたので、もちろん、これらの会議はまったく相談会的な性格をおびており、だれを拘束するものでもなかったが、その意義は、それにもかかわらず、非常に大きかった。匿名も知らず、また『イスクラ』が公式に承認される理由の一つとなった、「イスクラ」組織――党の事実上の統一をつくりだし、まあの実践運動の指導をおこなってきた組織――の内部活動も知らなかった代議員たちにとって、中央委員会の選出はいちじるしく困難であった。われわれがすでに見たように、イスクラ派が統一しているときには、イスクラ派には大会の約五分の三にのぼる大多数が十分に確保されていたし、代議員はみなこのことをよく理解していた。「イスクラ」組織が中央委員会の特定の人的構成を推薦することをこそ、イスクラ派全員が期待していた。そして、この組織の成員のだれひとりとして、「イスクラ」組織内で中央委員会の構成をあらかじめ討議することに、一言でも反対した者はなかったし、だれひとり、組織委員会の全員を確認するこ

と、すなわち、組織委員会を中央委員会に変えることなどを口にした者はなく、中央委員の候補者にかんして組織委員会の全員と協議するということさえ、口にした者はなかった。この事情もまたきわめて特徴的で、これを念頭におくことはきわめて重要である、なぜなら、今日、あとになってから、マルトフ派は熱心に組織委員会を擁護しているが、これは彼らの政治的無節操を百回目、千回目に証明しているにすぎないからである。** 中央諸機関の構成をめぐって生じた分裂がマルトフとアキーモフ一派とを結束させるまでは、次のことは、大会出席者の全員に明らかであったしまた、公平な人ならだれでも、大会議事録や「イスクラ」の全歴史から、たやすく納得するであろう。それは、組織委員会は主として大会招集のための委員会であって、わざとブンド派までもふくめたいろいろな色合いの代表者で構成された委員会であった、ということである。他方、党の組織的統一をつくりだす実際の仕事を全部自分の肩にになったのは、「イスクラ」組織であった（イスクラ派に属した若干の組織委員が、まったく偶然に、逮捕その他の「自分の意志にかかわらない」事情のために大会に出席していなかったことも、念頭におく必要[四]がある）。大会に出席していた「イスクラ」組織の顔ぶれは、すでに同志パヴローヴィチの小冊子のなかに述べられている（彼の『第二回大会にかんする手紙』、一三ページを見よ）。

＊ 私はすでに連盟の大会で、水掛論を避けるために、内輪の会合で起こったことはできるだけ限定して述べるようにつとめた。基本的な事実は、私の『「イスクラ」編集局への手紙』[三]のなかでも述べておいた（四ページ）。同志マルトフは、その『回答』のなかでこれらの事実に異議をとなえなかった。

＊＊ 次のような「風俗画」をまあちょっと思いうかべてみたまえ。「イスクラ」組織のある代議員が、大会では「イスクラ」組織だけと相談し、組織委員会と相談することなど口にさえださない。ところが、この組織内でも、また大会でも自分が敗北すると、この代議員は、組織委員会を確認しなかったことを残念がったり、あとになって組織委員会をほめそやしたり、自分に委任をあたえた組織を尊大な態度で無視したりしはじめるのである！　どの真の社会民主党、真の労働者党の歴史にも、これに類する事実はないと請けあってもよい。

「イスクラ」組織内での激烈な討論の最後の帰結は、私がすでに『編集局への手紙』のなかで述べた二回の表決であった。第一回の表決──「マルトフの支持した候補者の一人が四票対九票、棄権三票で否決された」。大会に出席していた「イスクラ」組織の一六名全部の一致した合意のもとに、予想される候補者の問題が討議され、同志マルトフの提案した候補者の一人（それは、いまではすでに同志マルトフ自身も隠しきれずに洩らしているように、ほかならぬ同志シテインを候補者とすることである──『戒厳状

態』、六九ページ）が多数で否決されたということ、こうした事実以上に簡単で当然な事実はありえないと、思われるであろう。われわれが党大会に集まったのは、とりわけ、まさにだれに「指揮棒」をゆだねるかという問題を審議し決定するためだったではないか。――そして、われわれ全員の党員としての義務は、日程のこの議題にきわめて真剣な注意をはらい、のちに同志ルソフがまったく正当に表現したように、「俗物的な思いやり」という見地からではなく、事業の利益という見地からこれを解決することであった。もちろん、大会で候補者の問題が審議されるさいには、ある種の個人的資質にもふれないわけにはいかなかったし、自分の承認ないし不承認*を表明しないわけにはいかなかった、とくに非公式の、内輪の会合ではそうであった。だから、私は連盟の大会ですでにこう警告しておいた。候補者として承認されなかったことを、なにか「不名誉なこと」のように考えるのは愚かなことであり（連盟議事録、四九ページ）、意識的に、慎重に役員を選ぶ党員の義務の直接の履行の一部をなす事柄について「ひと騒ぎ」もちあげたり、ヒステリーをおこしたりするのは、愚かなことである、と。ところが、わが少数派のあいだでは、じつにこのことからすったもんだの騒ぎが燃えあがったのだ。彼らは、大会が終わったのちに、「名声をきずつけられた」とわめきだし（連盟議事録、七〇ページ）、また、同志シテインは旧組織委員会の「主要な活動家」だったとか、彼はなんの根拠もないのに「あるそらおそろしい計画」をたくらんでいるという非難をうけた（『戒厳状態』、六九ページ）とかと、印刷物によって広範な大衆に断言しはじめた。ところで、候補者の承認不承認のことで「名声をきずつけられた」と叫びたてるのは、ヒステリーではないだろうか？「イスクラ」組織の内輪の会合でも、党の正式の、最高の会合である大会でも敗北したのちに、あとになって、公衆のまえで苦情を言い、選に洩れた候補者を「主要な活動家」だといって、尊敬すべき公衆に推薦するのは、――またあとになって、分裂をおこしたり、補充を要求することによって自分の推す候補者を党に押しつけたりするのは、泥仕合ではないだろうか？外国のかびくさい雰囲気のなかにいるわれわれのあいだでは、政治的概念がひどくごたごたになったので、同志マルトフはもう、党員としての義務とサークル根性や身内びいきとを区別することができないのである！なによりもまず重要な原則的諸問題を審議するために代議員たちが集まる大会、公平に人事問題を取り扱うことができ、また決定の票を投じるために候補者についてのあらゆる情報を要求し、集めることができる（また、そうする義務のある）運動の代表者たちが集まる大会、指揮棒

をめぐる論争に一定の場所をさくことが当然でもあれば必要でもある大会、こういう大会でのみ、候補者の問題を審議し決定するのが適当であると考えるのは、たぶん、官僚主義、形式主義だというのだろう。こうした官僚主義的で形式主義的な見解のかわりに、いまではわれわれのあいだではそれと違った慣習がとりいれられている。われわれは、大会のあとで、イヴァン・イヴァーヌィチが政治的に葬りさられたとか、イヴァン・ニキーフォロヴィチ(二〇)の名声がきずつけられたとかと、四方八方にしゃべりたてるであろうし、あれこれの文筆家は、小冊子のなかで候補者を推薦し、しかもそのさい自分の胸をたたいて、これはサークルでなくて党であると、パリサイ人式に断言することになろう。**……騒動が大好きな読者たちは、ほかならぬマルトフの確言によると何某は組織委員会の主要な活動家であったという、このセンセーショナルなニュースにむさぼるようにかじりつくであろう。これらの読者たちは、乱暴で機械的な決定を多数決でおこなう大会のような形式主義的な機関よりも、問題を審議し決定する能力をはるかに多くもっているというわけだ。……まったく、われわれの真の党活動家たちは国外の泥仕合という大きなアウギアスの厩を、まだこれから掃き清めなければならないのだ!

* 同志マルトフは、連盟で、私の不承認が峻烈だと言って、ひどく苦情を言ったが、彼の苦情から彼自身に不利な結論がでてくることには気がつかなかった。レーニンは――マルトフ自身の表現をつかえば――気ちがいのようにふるまった(連盟議事録、六三ページ)。そのとおり。レーニンは扉をバタンとしめた。ほんとうだ。レーニンはその行動(「イスクラ」組織の第二回の会議か第三回の会議での)によって、会議に残っていたメンバーを憤慨させた。まったくだ。だが、それからどういう結論がでてくるか? 論争問題の本質についての私の論拠が納得のゆくものであり、大会の成りゆきによって確認されたということにほかならない。じっさい、けっきょく「イスクラ」組織の一六名中の九名がやはり私に味方したとすれば、彼らは、有害な峻烈さにもかかわらず、またそれを乗りこえて味方についたことは、明らかである。つまり、もし「峻烈さ」がなかったなら、おそらく九名よりもっと多くの者が私の味方になったであろう、ということになる。つまり、それが打ちかたなければならなかった「憤慨」が大きければ大きいほど、その論拠と事実はそれだけ納得のゆくものであった、ということになる。

** 私もまた、「イスクラ」組織内で中央委員の候補者を推薦したが、マルトフと同じように、これをとおすことができなかった。この候補者については、私もまた、大会前や大会のはじめにおける彼の輝かしい名声――それは、特別の諸事実によって証明されている――について、話すことができたであろう。だが、そういうことは私の思いもよらないことであった。この同志は、だれにも、大会のあとで印刷物で彼を候補者に推薦したり、政治的に葬りさられたとか、名声をきず

つけられたなどという苦情を言うことを、許さないだけの、自尊心をもちあわせている。

「イスクラ」組織のもう一回の表決、「一〇票対二票、棄権四票で、五名の（中央委員候補者）名簿が採択され、そのなかには私の提案で、非イスクラ派分子の指導者一名とイスクラ少数派の指導者一名がくわえられていた」。（五七）この表決はきわめて重要である。なぜなら、われわれが非イスクラ派を党からほうりだすか、あるいは遠ざけようとしているとか、多数派は大会の半数によって、半数のなかから〔党中央諸機関を〕選挙したにすぎないなどという、のちに泥仕合の雰囲気のなかで積もりかさなったむだ話が、まったくのでたらめであることを、この表決ははっきりと、反駁の余地のないほどに証明しているからである。そういうことはみな、まったくのうそである。われわれは、非イスクラ派を、党からはいうまでもなく、中央委員会からさえ排除しなかっただけでなく、われわれの反対者に、相当大きな少数派の地位をあたえたことは、前記の表決が示している。問題の要点は、彼らが多数派になりたかったのだが、この遠慮ぶかい願望が実現しなかったとき、中央諸機関に参加することを完全に拒否して、騒動をもちあげたことにあった。連盟での同志マルトフの主張とは逆に、大会で規約第一条が採択されてからまもなく、「イスクラ」組織の少数派から、われわれイスクラ多数派（七名が退場してからは、大会多数派でもあった）に送ってきた次の手紙からはっきりわかる（私がいま述べた「イスクラ」組織の会合は、最後の会合であったこと、この会合ののち事実上組織は分解し、両派は自分が正しいことを、他の大会代議員に納得させようとつとめたことを、注意しておかなければならない）。

次にかかげるのが手紙のテキストである。

「編集局および『労働解放』団の多数派が（これこれの日の）会合に参加したいと希望している問題について、代議員ソローキンとサブリナの説明を聞き、また前回の会合でわれわれから出たものと称する中央委員候補者名簿が読みあげられて、われわれの政治的立場全体の誤った特徴づけのために利用されたことを、これらの代議員をつうじて確かめたのち、第一には、この名簿が、なんらその出所を確かめようと試みることなしにわれわれのものとされていることを考慮し、第二には、この事情が、『イスクラ』編集局および『労働解放』団の多数派は日和見主義におちいっているという、公然とひろめられている非難に疑いもなく関連があることを考慮し、第三に

は、この非難と、『イスクラ』編集局の構成を変えようとするまったく明確な計画が存在することとの関連が、われわれにはまったく明らかであることを考慮して、われわれは、会合への出席を許さない理由についてわれわれにあたえられた説明はわれわれを満足させないものであり、会合への出席を許そうとしないのは、上述の無実の非難を反駁する可能性をわれわれにあたえるのを望まない証拠であると考える。

中央委員候補者の共同名簿についてわれわれ双方が協定する可能性の問題については、われわれは、協定の基礎としてわれわれが受けいれることのできる唯一の名簿は次のようなものであると声明する。すなわち、ポポーフ、トロツキー、グレーボフがそれであり、そのさいこの名簿が妥協的な名簿の性格をもっていることを強調しておく。なぜなら、同志グレーボフをこの名簿にいれたことは、多数派の希望に譲歩したことを意味するものにほかならないからである。というのは、大会で同志グレーボフの演じた役割がわれわれにはっきりしている以上、同志グレーボフが中央委員候補者に提起されるべき諸要求をみたしているとは、われわれは考えないからである。

同時にわれわれは、中央委員候補者にかんして交渉する場合、われわれはこれを中央機関紙編集局の構成の問題とまったく無関係におこなうという事情を、強調する。なぜなら、われわれは、この問題（編集局の構成の問題）にかんしてはどのような交渉をすることにも同意しないからである。

同志一同にかわって
マルトフおよびスタロヴェール」

＊ 私の計算では、手紙のなかで述べられている日付は火曜日にあたっている。この会合は火曜日の晩に、すなわち、大会の第二八回会議のあとでおこなわれた。この日時の照合は非常に重要である。それは、われわれが仲間割れしたのは中央諸機関の組織の問題についてであって、その人的構成の問題についてではないという、同志マルトフの意見を、記録によって論駁している。それは、連盟の大会や『編集局への手紙』のなかで私が述べたことが正しいことを、記録によって証明している。大会の第二八回会議のあとで、同志マルトフと同志スタロヴェールとは、日和見主義という無実の非難について熱心に論じているが、評議会の構成の問題や、中央諸機関の補充の問題（これについてはわれわれは、第二五、第二六、第二七回会議で論争した）にかんする意見の不一致については、ひとことも述べていない。

論争している両派の気分と論争の状態とを正確に再現しているこの手紙は、一挙にわれわれを始まりつつある分裂の「核心」にみちびき、またその真の原因を示している。「イスクラ」組織の少数派は、その多数派と協定すること

を望まず、大会で自由な扇動をするほうを選び（いうまでもなく、そうする完全な権利をもっていたが）ながら、それにもかかわらず、多数派の「代議員」に、多数派の内輪の会合への自分たちの出席を認めさせようと試みたのである！　当然なことながら、いうまでもなく、この滑稽な要求は、われわれの会合で（手紙は、この会合で読みあげられた）ただ微笑と肩をすくめることでむかえられ、「日和見主義という無実の非難」という、もうヒステリーになりかけている悲鳴は、あけすけな笑声をまきおこした。しかし、はじめに、マルトフとスタロヴェールの愁訴を、一項ずつ調べてみよう。

名簿は誤って彼らのものとされている、彼らの政治的立場に誤った特徴づけがあたえられている、と彼らは言う。——しかし、マルトフ自身も認めているように（連盟議事録、六四ページ）、私は、名簿の作成者は彼ではないというう彼のことばの真実性を疑おうとは思いもしなかった。作成者の問題は、総じてここでは関係がない。また、名簿がイスクラ派のだれかの手でつくられたのか、それとも「中間派」の代表のうちのだれかの手でつくられたのか等々ということ——このことにも、まったくなんの意義もない。重要なのは、みな今日の少数派の成員からなっているこの名簿が、たとえたんなる臆測または予想としてであったにせよ、大会でとりざたされていたことである。最後に、なにによりも重要なことは、同志マルトフが、いまなら狂喜してむかえるにちがいないような名簿から、大会では、必死になって逃げをうたなければならなかったことである。このように二、三ヵ月のあいだに、「名誉毀損的なうわさ」のことでわめきたてることから、名誉毀損的な名簿にのっていた当の候補者たちを中央機関として党に押しつけることへと跳躍したこと以上に、人物や色合いの評価のぐらつきをまざまざと描きだすことはできない！*

* われわれが、同志グセフと同志デイチとの紛争についての通知をうけたときには、以上の文章はすでに組版を終えていた。だから、われわれは、この紛争については別に付録で論じることにする〔本書、三八五—三九四ページ〕。

同志マルトフは連盟の大会でこう言った。この名簿は、「政治的には、われわれおよび『ユージヌィ・ラボーチー』とブンドとの連合、直接の協定という意味での連合を意味していた」（六四ページ）と。これは正しくない、なぜなら、第一に、ブンド派が一人もはいっていない名簿についてブンド派が「協定」に応じることはけっしてなかったであろうし、第二に、直接の協定（マルトフには、それは不面目なものと思われたのだが）ということは、ブンドとばかりでなく、「ユージヌィ・ラボーチー」グループとのあ

いだでも問題にはならなかったし、また問題になるはずもなかったからである。問題は、協定ではなく、連合にあった。つまり、同志マルトフが取引を結んだということにではなく、大会の前半をつうじてマルトフがたたかった当の相手で、規約第一条におけるマルトフの誤りに飛びついてきたほかならぬ反イスクラ分子と無定見な分子が、不可避的にマルトフを支持せざるをえなかったことにあった。私が引用した手紙は、「感情を害した」ことの根源が、まさしく日和見主義だという公然たる、そのうえ無実の非難をうけたことにあるのを、争う余地のないように証明している。この「非難」は、すったもんだの騒ぎが燃えあがるもとになったものであって、いまでは同志マルトフは、私が『編集局への手紙』のなかでそれを思いださせたにもかかわらず、きわめて慎重にそれを避けているのであるが、この「非難」は二とおりであった。第一には、規約第一条にかんする討論のときにプレハーノフが、規約第一条の問題は「どんな種類の日和見主義の代表者をも」われわれから「切り離す」問題であり、私の草案はこの人々が党に侵入してくるのを防ぐ砦たるものであるから、「この理由だけでも、日和見主義のあらゆる反対者は」私の草案に賛成「投票しなければならない」と、はっきり述べたことである（大会議事録、二四六ページ）。この断固たることばは、私がすこしばかりそれをやわらげたにもかかわらず（二五〇ページ）、センセーションをまきおこしたのであって、それは、同志ルソフ（二四七ページ）、同志トロツキー（二四八ページ）、同志アキーモフ（二五三ページ）の演説のなかにはっきり表明されている。プレハーノフの命題は、われわれの「議会」の「控室」で活発な論評の的となり、規約第一条にかんする際限のない論争のなかで千とおりにも言いかえられた。ところが、わが親愛な同志諸君は、自分の主張の核心を擁護するかわりに、滑稽にも感情を害して、「日和見主義という無実の非難」にたいして手紙で苦情を言うにいたったのである！

万人の面前での公然たる論争という新鮮な外気に耐えることのできないサークル根性や、党員としての驚くべき未熟な心理が、ここにはっきりと現われている。これは、なぐりあいか、それともお手に接吻を！という古い格言に言いあらわされている、ロシア人にはおなじみの心理である。人々はこじんまりとした暖かな仲間づきあいという温室にひどく慣れてしまったので、自分の責任で、自由な公開の舞台に出たとたんに卒倒したのである。非難したって、いったいだれを？「労働解放」団を、しかもその多数派を、日和見主義だと言って非難するなんて――こんな恐ろしいことが考えられようか！　ぬぐいさることのできないこの

侮辱のために党を分裂させるか、それとも温室の「継承性」を復活して、この「内輪もめ」をもみ消すか——この二者択一は、ここに検討している手紙のなかにすでにかなり明確に現われている。インテリゲンツィア的個人主義とサークル根性との心理は、党の面前で公然と行動せよという要求と衝突した。「日和見主義だという無実の非難」に苦情を言うようなばかげたこと、泥仕合が、いったいドイツの党にありえたかどうか、ちょっと考えてみたまえ！　そこでは、プロレタリア的な組織と規律とがずっとまえに、こういうインテリゲンツィア的ないくじなさをやめさせたのである。たとえば、リープクネヒトにたいしては、だれも最大の敬意以外の気持をいだく者はないが、しかし、一八九五年の大会で、(二〇)彼が農業問題にかんして有名な日和見主義のフォルマルやその僚友たちのよからぬ仲間にくみしたとき、もし彼が（ベーベルといっしょに）「公然と日和見主義だという非難をうけた」ことに苦情を言ったとしたら、ドイツではどんなにもの笑いのたねになったことであろう。リープクネヒトの名がドイツの労働運動史と切り離すことのできないように結びついているのは、もちろん、リープクネヒトがこういう比較的小さな部分的問題についてたまたま日和見主義におちいったからではなく、そのようなことがあったにもかかわらず、そうなのである。これとまったく同じように、どんなに闘争に激しようと、たとえば同志アクセリロードの名は、ロシアのあらゆる社会民主主義者に尊敬の念をおこさせているし、またいつまでもおこさせるであろう。しかしこれは、同志アクセリロードが、わが党の第二回大会でたまたま古い無政府主義的な思想を擁護し、連盟の第二回大会でたまたま日和見主義的な思想をながらくたを掘りだしたからではなくて、そのようなことがあったにもかかわらず、そうなのである。ただ、なぐりあいか、それともお手に接吻を、という論理をかかげた、こちこちのサークル根性だけが、「『労働解放』団の多数派は日和見主義におちいっているという無実の非難」を理由として、ヒステリーや泥仕合や党の分裂を引きおこすことができたのである。

このそらおそろしい非難のもう一つの根拠は、右にあげた根拠と最も切り離しえないように結びついている（同志マルトフは、連盟の大会で（六三ページ）この出来事の一側面を回避し、ぼかそうと試みたが、むだだった）。この根拠はまさに、規約第一条について現われたあの反イスクラ分子および無定見な分子と同志マルトフとの連合のことである。いうまでもなく、同志マルトフと反イスクラ派とのあいだには、どんな直接の協定も、間接の協定もなかったし、またあるはずもなかった。そして、だれもこの点でマル

トフを疑った者はなかった。ただびくびくしているあまり、そう疑われているように彼に思えたにすぎない。だが、彼の誤りは、政治的にはほかならぬ次の点に現われた。それは、疑いもなく日和見主義に傾いている連中が、彼のまわりにますます緊密な「結束した」多数派（いまでは、七名の代議員が「偶然に」大会から退場したばかりに少数派になったが）をつくりはじめたということである。もちろん、われわれもまた公然と、規約第一条の審議の直後に、大会でも（さきにあげた同志パヴローヴィチの評言を見よ。大会議事録、二五五ページ）、「イスクラ」組織内でも（私の記憶するところでは、とくにプレハーノフがこのことを指摘した）、この「連合」を指摘した。一八九五年にツェトキーンがベーベルとリープクネヒトにむかって、《Es tut mir in der Seele weh, dass ich dich in der Gesellschaft seh'》（あなた——つまりベーベル——があんな人——つまりフォルマル一派——とお友だちなのが、私にはつらいのです）[(六〇)]と言って彼らを批評したが、これはそれと文字どおり同じ指摘であり、同じ嘲笑である。ベーベルとリープクネヒトが、当時カウツキーとツェトキーンに、日和見主義とは無実の非難だと言ってヒステリックな手紙を送らなかったのは、まことに不思議である。……

中央委員の候補者名簿についていえば、われわれとの話合いをまだ最後的に拒否しはしなかったと、同志マルトフが連盟で主張したのが誤りであることを、この手紙は示している。——それは、政治闘争では、記録を調べずに記憶にたよって会話を再現しようと試みることが、どんなに分別のないことかを示すいま一つの例である。じっさい、「少数派」は、「少数派」から二名をとり、「多数派」から一名をとる（妥協として、まったく、ひとえに譲歩のために！）という最後通告を「多数派」につきつけたほど、遠慮ぶかかった。これはとほうもないことであるが、しかし事実である。そして、この事実は、「多数派」は大会の半数によって半数にすぎない者の代表を選んだという、いま言いふらされている作り話が、どんなにでたらめなものであるかを明らかに示している。まさにその逆である。マルトフ派は、ひとえに譲歩のために、三名のうち一名をわれわれにあたえることを提案した。したがって、この独特の「譲歩」にわれわれが同意しない場合には、全員自分たちの候補者をとおそうと望んでいたのである！　われわれの内輪の会合で、われわれはマルトフ派の遠慮ぶかさを嘲笑して、次のような自分の名簿をつくった。グレボフ——トラヴィンスキー（のちに中央委員に選ばれた）——ポポーフ。われわれはポポーフを同志ヴァシーリエフ（のちに中央委員に選ばれた）ととりかえた（やはり二四人の内輪の

会合で）が、それは、同志ポポーフがわれわれの名簿にくわわることを拒否し、はじめには内輪の会合で、のちには大会でも公然と拒否したからにすぎない（三三八ページ）。

事態はまさにこうであった。

遠慮ぶかい「少数派」は多数派になりたいという遠慮ぶかい願いをいだいていた。この遠慮ぶかい願いがみたされなかったとき、「少数派」は、なにもかも拒否してひと騒動お始めなさったのである。ところが、いまでもまだ、尊大にかまえて「多数派」の「非妥協性」をうんぬんする連中がいるのだ！

「少数派」は大会での自由な扇動のたたかいの門出にあたって、「多数派」に滑稽な最後通告をつきつけた。ところが、敗北すると、わが英雄たちは泣きだし、戒厳状態だといって叫びはじめた。Voilà tout〔それだけのことである〕。

われわれが編集局の構成を変えるつもりでいる、というそらおそろしい非難も、われわれ（二四人の内輪の会合）は同じように微笑でむかえた。はじめに三人組を選出して編集局を刷新するという計画のことは、大会の当初から、すでに大会がひらかれるまえから、みながよく知っていた（これについては、大会における編集局の選挙について述べるときに、もっとくわしく述べよう）。「少数派」と反イスクラ派との連合がこの計画の正しさをみごとに確証したことを少数派が見てとったのちに、彼らがこの計画に恐れをなしたということ、——このことは、われわれには異とするにたりなかった。それはまったく当然のことであった。もちろん、われわれは、大会でたたかわないうちに自発的に少数派になれという提案を、まじめにうけとることはできなかったし、「日和見主義という無実の非難」をうんぬんするほどむちゃくちゃに憤慨している人々が書いた手紙全体を、まじめにうけとることもできなかった。われわれは、党員としての義務が「うっぷんを晴らしたい」という自然な願いにじきに打ちかつだろうと、確信をもって期待していた。

（k）規約にかんする討論のつづき。評議会の構成

規約のそれにつづく諸条項は、組織原則についての論争というより、はるかに多く、個々の細目についての論争を呼びおこした。大会の第二四回会議は、党大会への代表選出権の問題に終始した。そのさい、イスクラ派全体の共同の案にたいして、またもやブンド派（ゴリドブラットとリーベル、二五八—二五九ページ）と同志アキーモフだけが、断固たる明確な反対闘争をおこなった。同志アキーモフは、

称賛すべき率直さで、大会における自分の役割を次のように認めた。「私はいつも、自分の論拠が同志諸君をうごかさず、反対に、私が擁護しようとする論点をそこなうだろうということを、十分に意識しながら話している」（二六一ページ）と。この適切な意見は、規約第一条の討議の直後にはとくにふさわしいものであった。ただここで「反対に」という表現がつかわれているのは、かならずしも正しくない。というのは、同志アキーモフは、なにかある論点をそこなうことができただけでなく、それと同時に、またそうすることによって、日和見主義的空文句の好きな、ひどく首尾一貫しないイスクラ派に属する……「同志諸君をうごかす」こともできたからである。

全体として、大会への代表選出の条件を規定する規約第三条は、七票の棄権で大多数によって可決された（二六三ページ）。――棄権した者は明らかに反イスクラ派の人々であった。

大会の第二五回会議の大部分を占めた評議会の構成にかんする論争では、きわめて多数のいろいろな草案をめぐって、異常に細分されたグループ分けが現われた。アブラムソーンとツァリョーフは、評議会をつくる案を全然拒否した。パーニンは、評議会をもっぱら調停裁判所にすることを頑強に希望し、したがって、まったく首尾一貫したことであるが、評議会は最高の組織である、また、任意の二名の評議会員がこれを招集することができる、という規定を削除するようにと提案した。＊ヘルツとルソフは、規約委員の五名の委員の提案した三つの方法の補足として、評議会を構成するいろいろな方法を主張した。

＊ 同志スタロヴェールもまたどうやら同志パーニンの見解に傾いていたようである。ただ違う点は、パーニンは自分が望んでいるものを知っていて、まったく首尾一貫して、評議会を純粋に仲裁機関、調停機関に変える決議をもちだしたが、同志スタロヴェールは、自分が望んでいるものを知らないで、評議会は、草案によれば、「もっぱら紛争当事者の希望にもとづいて」招集される（二六六ページ）、と述べたことである。これはまったくまちがっている。

論争問題は、なによりもまず、評議会の任務の規定、それは仲裁裁判所なのか、それとも党の最高の組織なのか、ということに帰着した。すでに述べたように、同志パーニンは、終始一貫前者に賛成した。だが、彼は一人ぼっちであった。同志マルトフはきっぱりとそれに反対して、こう言った。「『私は、評議会は最高の組織である』ということばを削除せよという提案を拒否するように提案する。われわれの定式化」（すなわち、われわれが規約委員会で意見の一致した評議会の任務の定式化）「は、評議会を党の最高の組織に発展させる可能性をわざと残している。われわ

れにとって、「評議会は、調停機関にすぎないものではない」と。ところが、同志マルトフの草案によれば、評議会の構成は「調停機関」あるいは仲裁裁判所の性格にまったく合致しており、もっぱらそれだけに合致していた。すなわち、両中央機関から二名ずつと、この四名によって招請される一名からなっていた。評議会のこういう構成だけでなく、同志ルソフと同志ヘルツの提案にしたがって大会で可決された構成（五人目のメンバーは大会が任命する）も、もっぱら調停または斡旋の目的に合致したものであった。評議会のこういう構成と、党の最高の組織になるというその使命とのあいだには、和解しようのない矛盾がある。党の最高の組織の構成は恒常的なものでなければならないし、中央諸機関の構成に生じる偶然の（ときには逮捕のために生じる）変化に左右されてはならない。最高の組織は、党大会と直接に結びつき、その全権を、大会に従属した他の二つの党機関からあたえられるのではなく、党大会からあたえられなければならない。最高の組織は、党大会に知られている人々からなりたたなければならない。最後に最高の組織を、それの存在そのものが偶然に左右されるような仕方で、組織するわけにはいかない。すなわち、五人目の選挙について二つの合議体の意見が一致しなければ、党は最高の組織をもたないままになるというようであってはならない！　これにたいしては、次のように反論する者がいた。第一、五名のうち一名が棄権し、残りの四名が二人ずつの二組に分かれる場合にも、事態はやはり打開策がないことになるかもしれない（エゴーロフ）と。この反論はなりたたない。なぜなら、決をとることができないということは、ときとしてどの合議体にも避けられないことだからである。しかし、それはある合議体をつくることができないということでは、全然ない。第二の反論。「もし評議会のような機関が五人目のメンバーを選挙できないとすれば、それはつまり、この機関は総じて活動能力がないということを意味する。」（ザスーリチ）しかし、ここで問題なのは、活動能力がないということではなくて、最高の組織が存在しないということである。すなわち、五人目のメンバーがいなければ、どんな評議会も存在しないであろうし、どんな「機関」も存在しないであろう。だから、活動能力をうんぬんすることもできないであろう。最後に、党の合議体の一つがつくられない場合がありうるとしても、この合議体のうえに他の、より上級の合議体があるなら、それはまだ矯正しうる悪であろう。なぜなら、その場合には、このより上級の合議体が、非常の場合には、いつでもなんとかしてこの空白を埋めることができるからである。しかし、評議会のうえには、大会以外にはどんな合議体もない。だか

ら、評議会をつくることさえできなくなるような可能性を規約に残しておくのは、明らかに非論理的である。

この問題について私が大会でおこなった二つの簡単な演説は、ただこの二つの正しくない反論――マルトフ自身とその他の同志たちは、こういう反論によってマルトフの草案を擁護した――の検討だけにあてられていた（二六七ページおよび二六九ページ）（九二）。評議会のなかで中央機関紙が優位に立つか、中央委員会が優位に立つかという問題には、私はふれさえしなかった。この問題は、最初に同志アキーモフがすでに大会の第一四回会議でふれたもので、そのさい彼は、中央機関紙が優位に立つのは危険であることを指摘する趣旨でこれにふれたのである（一五七ページ）。そして同志マルトフ、同志アクセリロードその他は、大会ののちにはじめてアキーモフに追随して、「多数派」が中央委員会を編集局の道具に変えようとしているという、愚かな、デマゴギー的なお伽話をでっちあげたのである。同志マルトフは、彼の『戒厳状態』のなかでこの問題にふれているが、この問題のほんとうの提起者のことは、遠慮ぶかくも回避している！

文脈にかまわず抜いてきた個々の引用文では満足せずに、党大会で中央委員会にたいする中央機関紙の優位という問題が提起された事情の全体を知りたいと思う者には、同志マルトフが問題をゆがめていることは容易にわかるであろう。同志アキーモフは「中央機関紙の影響を弱めるために――このような（アキーモフ）方式の意味はもともとこの点に尽きるのだが――、党の頂点における『最も厳格な中央集権化』を擁護しよう」（一五四ページ、傍点は私のもの）としたのであるが、同志アキーモフの見解に反対してはやくも第一四回会議で論戦を始めたのは、ほかならぬ同志ポポーフであった。「こういう中央集権化を、私は擁護しないばかりでなく、あらゆる手段でそれとたたかうつもりでいる。なぜなら、それは日和見主義の旗だからである」と、同志ポポーフはつけくわえた。まさにここに、中央機関紙の中央委員会にたいする優位という悪名高い問題の根源がある。そして、同志マルトフがいままではこの問題の真の起源について沈黙を守るほかないのは、異とするにたりない。同志ポポーフでさえ、中央機関紙*の優位にかんするアキーモフのこのおしゃべりの日和見主義的な性格を認めないわけにはいかなかった。そして、自分を同志アキーモフからしっかりと区別するために、同志ポポーフは断固としてこう声明した。「この中央部（評議会）へは、編集局から三名、中央委員会から二名出せばよい。こんなことは第二義的な問題である（傍点は私のもの）。重要なことは、指導、すなわち党の最高の指導が一つの源から出ることである。」

（一五五ページ）同志アキーモフはこう言って反論した。「草案によると、編集局の構成は恒常的なのに中央委員会の構成は可変的であるという理由だけでも、中央機関紙に評議会内での優位が確保されている」（一五七ページ）と。これは、原則的な指導の「恒常性」（これは正常で望ましい現象である）だけに関係した論拠であって、自主性にたいする干渉とか、自主性の侵害とかいう意味での「優位」に関係したものではけっしてない。そして、当時はまだ同志ポポーフは、中央諸機関の構成にたいする不満を中央委員会が自主性をもたないというおしゃべりでつつみかくしている「少数派」に属してはいなかったので、同志アキーモフにまったく条理のある答えをした。「私は、それ（評議会）を党の指導的な中央部と見なすよう提案する。そうすれば、評議会に中央機関紙の代表のほうが多いか、あるいは中央委員会の代表のほうが多いかという問題は、すこしも重要なものではなくなる。」（一五七—一五八ページ、傍点は私のもの）と。

＊　同志ポポーフも、同志マルトフも、同志アキーモフを日和見主義者とよぶことをためらわなかった。彼らは、「言語の同権」や、規約第一条のことで、彼ら自身にこの名称が適用され、しかも正当に適用されたときに、はじめて感情を害し、憤慨しはじめたのである。しかし、同志マルトフが手本とした当の同志アキーモフは、党大会では、同志マルトフ一派が連盟でやったよりも、もっと威厳と勇気をもってふるまうことができた。同志アキーモフは党大会でこう言った。「私はここでは日和見主義者とよばれている。私個人としては、このことばは侮辱的な悪罵であると考える。私は、まったくこんなことを言われるおぼえはないと思っている。しかし、私はこれにたいして抗議はしない」（二九六ページ）と。ひょっとすると、同志マルトフと同志スタロヴェールは、日和見主義という無実の非難にたいする自分たちの抗議に同志アキーモフもくわわるように勧めたのに、同志アキーモフがそれを拒否したのではあるまいか？

第二五回会議で評議会の構成の問題の審議が再開されたとき、同志パヴローヴィチはまえからの討論をつづけ、「中央機関紙の安定性を念頭において」（二六四）、中央機関紙の中央委員会にたいする優位に賛成したが、彼が念頭においていたのは、原則上の確固さのことであった。そして、同志パヴローヴィチのすぐあとで発言した同志マルトフも、パヴローヴィチのことばをそういう意味に理解した。マルトフは、「一方の機関の他方の機関にたいする優位を固定化すること」は不必要だと考え、中央委員の一人が国外に滞在する場合もありうることを指摘して、「これによって、中央委員会の原則上の確固さはある程度維持されるだろう」（二六四）、と述べた。ここにはまだ、原則上の確

固さならびにそれを維持する問題と、中央委員会の自主性や独立性を維持することとをデマゴギー的に混同した形跡は全然ない。大会後には、同志マルトフのほとんど主要な切り札になったこの混同を、大会で頑強に実行したのは同志アキーモフだけであった。そのアキーモフは、当時はやくも「規約のアラクチェーエフ的精神」[202]（二六八）をうんぬんし、こう言った。「もし党評議会に中央機関紙の三人のメンバーがはいるなら、中央委員会は編集局の意志のたんなる執行者になってしまうだろう（傍点は私のもの）。外国に住んでいる三名は、党全体（!!）の活動を無制限に(!!)きりまわす権利をもつようになるだろう。彼らの安全は保障されている。だから、彼らの権力は終身的である」（二六八）と。思想的指導を党全体の活動にたいする干渉にすりかえるこのまったくでたらめなデマゴギー的な空文句（この空文句は、大会のあとで、「神政」をうんぬんする同志アクセリロード[203]に安っぽいスローガンを提供した）――こういう空文句に反論して、ふたたび同志パヴロービィチが次のように強調した。私は『イスクラ』を代表とする諸原則の強固さと純潔とを支持する。私は、中央機関紙編集局に優位をあたえて、これらの原則を強化したい」と。

悪名高い中央機関紙の中央委員会にたいする優位の問題の実状は、まさに以上のようなものである。同志アクセリロードと同志マルトフのこの有名な「原則的な意見の相違」は、同志アキーモフの日和見主義的でデマゴギー的な空文句の繰りかえしにほかならないのであって、この空文句の正体は、同志ポポーフでさえはっきり見てとったものである。つまり、彼がまだ中央諸機関の構成の問題で敗北していなかったときに見てとったものである！

***

評議会の構成の問題の総括。同志マルトフが『戒厳状態』のなかで、私が『編集局への手紙』のなかで述べたことが矛盾していて正しくないことを、証明しようと試みたにもかかわらず、大会の議事録がはっきり示すところによれば、この問題は規約第一条にくらべると細部問題にすぎなかったし、また、われわれが「ほとんどもっぱら」党中央諸機関の組織について論争したかのように述べている『わが大会』という論文（『イスクラ』第五三号）の言明は、完全な歪曲である。この歪曲は、この論文の筆者が規約第一条にかんする論争にまったくふれていないだけに、ますます驚くべきことである。さらに、評議会の構成の問題では、イスクラ派の明確なグループ分けがなかったことも、議事録の確証するところである。すなわち、記名投票はおこなわれなかった、マルトフとパーニンとは意見が分かれ

ていた、私はポポーフと同意見であった、エゴーロフとグセフは独自の立場をとっていた、等々。最後に、マルトフ一派と反イスクラ派との連合が強化したという私の最近の主張（ロシア革命的社会民主主義在外連盟の大会での）も、また同志マルトフと同志アクセリロードがこの問題でも同志アキーモフのほうへ転換したこと——このことはいまではだれの目にも明らかである——で確証されている。

（1）　規約にかんする討論の終り。中央諸機関の補充。「ラボーチェエ・デーロ」の代議員の退場

　規約にかんするそれ以後の討論（大会の第二六回会議）のうちで述べる価値のあるのは、中央委員会の権限の制限の問題だけである。なぜなら、この問題は、過度の中央集権主義にたいするマルトフ派の現在の攻撃の性格を明らかにしているからである。同志エゴーロフと同志ポポーフは、多少とも大きな確信をもって、自分自身あるいは自分の推す者が候補者となるかどうかにかかわりなく、中央集権主義を制限しようと努力した。彼らはすでに規約委員会で、地方委員会を解散する中央委員会の権限を制限して、評議会の同意を必要とするようにすること、そのうえとくに列挙した場合に限る（二七二ページ、注一）ことを提案した。三名の規約委員（グレーボフ、マルトフ、私）はこれに反対した。そして、大会では同志マルトフはエゴーロフとポポーフに反論して、「そういうふうにしなくとも、中央委員会は、組織の解散というような重大な措置をとることを決定するまえに、審議をかさねるだろう」と言って、われわれの意見を擁護した（二七三ページ）。ごらんのように、そのときはまだ同志マルトフは、あらゆる反中央集権主義的な意向に耳をかさなかった。そして、大会はエゴーロフとポポーフの提案を否決した。——ただ残念なことに、どれだけの票数で否決されたのか、議事録からは知ることができない。

　党大会では、同志マルトフはまた、「組織する」（党規約第六条の、中央委員会は〔地方〕委員会……を組織する）「ということばを承認するということばに代えることに反対」した。「組織する権限をもまたあたえなければならない」と、当時同志マルトフは言った。「組織する」という概念には承認することはふくまれていないという、連盟の大会ではじめて発見された注目すべき思想を、彼はまだ考えついていなかったのである。

　これら二つの点を除けば、規約第五条から第一一条にいたる細目についてのその他のまったく些細な討論（議事録、

二七三―二七六ページ）は、ほとんど興味のないものである。第一二条は、一般にすべての党合議体の、とくに中央諸機関の補充の問題である。委員会〔規約委員会〕は、補充に必要な多数決の有効最低限を三分の二から五分の四に引き上げることを提案した。報告者（グーレボフ）は、中央委員会の補充は全員一致制とすることを提案した。同志エゴーロフは、軋轢が生じるのは好ましくないと考えて、理由をあげた veto〔拒否〕の場合を除き、単純多数決とすることを主張した。同志ポポーフは、委員会にも、同志エゴーロフにも同意せずに、単純多数決（veto〔拒否権〕のない）か全員一致制か、どちらかをとることを要求した。同志マルトフは、委員会にも、グレーボフにも、エゴーロフにも、ポポーフにも同意せずに、全員一致制に反対し、五分の四に反対し（三分の二に賛成し）、「相互補充制」すなわち、中央委員会の補充に中央機関紙編集局が異議を申し立てる権利、およびその逆の権利（「補充を相互に統制する権利」）に反対した。

ごらんのように、生じたグループ分けは非常に錯雑しており、意見の相違はこまかく分かれ、各代議員の見解はほとんど「各人各説」と言えるほどにまちまちであった！

同志マルトフはこう言った。「不愉快な人たちといっしょに活動することが心理的にやりきれないことを、私は認める。しかし、われわれの組織に生活力があり、活動能力があることも、われわれには重要である。……補充のさいに中央委員会と中央機関紙編集局とが相互に統制する権利は必要ではない。私がこれに反対なのは、両者がたがいに相手の分野について十分な資格をもっていないと考えるからではない。そうではない！　たとえば、中央機関紙編集局は、たとえばナデージヂン氏を中央委員会にいれるべきかどうかについて、中央委員会によい忠告をあたえることができるであろう。私が反対するのは、おたがいをいらだたせるような渋滞をつくりだしたくないからである」と。

私は、彼にこう反論した。「ここには二つの問題がある。第一は、多数決の有効最低限の問題であり、私は、それを五分の四から三分の二に引き下げる提案には反対である。理由をあげた異議申立制をとりいれるのは分別を欠いたことであり、私はそれには反対である。中央委員会と中央機関紙が補充を相互に統制するという第二の問題は、比較にならないほど重要である。二つの中央機関の合意は、調和のために欠くことのできない条件である。ここで問題になっているのは、二つの中央機関の決裂である。分裂を望まないものは、調和がたもたれるように心をくばらなければならない。分裂をもちこむ人たちがいたことは、党の生活から知られている。この問題は原則的な問題、重要な問題

であって、党の将来の運命全体がこの問題によってきまることになりかねないのである」（二七六―二七七）と。これは、同志マルトフがとくに重大な意義をあたえている私の演説の、大会で書きとめられた概要の全文である。残念なことに、この演説に重大な意義をあたえたにもかかわらず、彼は、これをいっさいの討論や、この演説がおこなわれたときの大会の政治情勢全体と関連させて考える労をとらなかったのである。

最初に出てくるのは次の問題である。すなわち、私が私の最初の草案（三九四ページ、第一一条を見よ）（註）では、三分の二で満足し、また中央諸機関の補充の相互統制を要求していなかったのはなぜか、ということである。私のあとで発言した同志トロツキーは（二七七ページ）、すぐさまこの問題をとりあげた。

この問題にたいする回答は、連盟の大会で私がおこなった演説と、第二回大会にかんする同志パヴローヴィチの手紙とによってあたえられている。規約第一条が「壺をこわしてしまった」ので、「二重結びで」壺を縛らなければならなかったと、私は連盟の大会で言った。これは、第一には、純理論的な問題でマルトフが日和見主義者であることがわかり、またリーベルとアキーモフが彼の誤りを擁護したことを、意味していた。これは、第二には、マルトフ派（すなわち、イスクラ派のわずかな少数派）と反イスクラ派とが連合したので、中央諸機関の人的構成を決定するさい、彼らが大会の多数派になったことを、意味していた。ところで、私がここで、調和の必要を強調しながら、また、「分裂をもちこむ人たち」に気をつけろと警告しながら述べたのは、ほかならぬ諸機関の人的構成のことであった。この警告は、実際に重要な原則的意義をもつようになった。なぜなら、「イスクラ」組織（実践上のあらゆる問題と全部の候補者を最もくわしく知っていたので、中央諸機関の人的構成の問題については、疑いもなく、他の者より十分な資格をもっていた）は、この問題についてすでに自分の評議権を行使し、イスクラ組織の危惧をおこさせるような候補者については、われわれのすでに知っている決定を採択したからである。精神的にも、また事の本質からいっても（すなわち、決定をする資格の点でも）、「イスクラ」組織に、このデリケートな問題で決定的な意義があたえられるべきであった。だが、形式的には、もちろん、同志マルトフは、「イスクラ」組織の多数派に反対して、リーベルらやアキーモフらに訴える完全な権利をもっていた。ところで、同志アキーモフは、規約第一条にかんする彼のすばらしい演説のなかで、きわめて明瞭に、かつ分別をもってこう述べていた。イスクラ派のあいだに、彼らに共通のイ

スクラ的な目的を達成する方法について意見の相違が見られる場合には、自分は意識的に、わざと悪いほうの方法に賛成投票するであろう、なぜなら、自分アキーモフの目的はイスクラ派の目的とは正反対であるから、と。こうして、同志マルトフの意志や意識にさえまったくかかわりなく、中央諸機関の悪いほうの構成こそが、リーベルやアキーモフらの支持をうけるだろうということには、なんの疑う余地もなかった。彼らは（彼らのことばからではなく、行為すなわち第一条にかんする彼らの投票から判断すれば）まさに「分裂をもちこむ人たち」を参加させることになりかねない名簿に投票する、しかも、ほかならぬ「分裂をもちこむ」ために投票するおそれがあったし、また、投票するにちがいなかった。こういう情勢のもとで私が、党の将来の運命全体を左右するかもしれない重要な原則的な問題（二つの中央機関の調和）について述べたのは、奇異なことであろうか？

「イスクラ」の思想や計画や運動の歴史をいくぶんでも知っていて、いくぶんでもまじめにこの思想をともにしている社会民主主義者なら、だれひとり次のことを一瞬も疑うはずがなかった。それは、中央諸機関の構成について「イスクラ」組織内に起こった論争に、リーベルやアキーモフらが裁断をくだしたことは、形式上は正しかったけれども、ありうべき最悪の結果を保障するものであった、ということである。このありうべき最悪の結果とは、どうしてもたたかわなければならなかった。

では、どうやってたたかうのか？　われわれは、もちろん、ヒステリーをおこしたり、ひと騒動もちあげるというやり方でたたかったのではなく、まったく忠誠で、まったく正当な手段でたたかったのである。われわれは、われわれが少数派である（規約第一条の場合と同じように）ことを感じて、少数派の権利を守るように大会に要請しはじめた。構成員に採用するさいの有効最低限をもっと厳重にすること（三分の二のかわりに五分の四に）、補充の場合の全員一致制、中央諸機関の補充を相互に統制すること――、こうしたことを、われわれは、われわれが中央諸機関の人的構成の問題で少数派になったときに主張しはじめた。議事録全部と関係者のあらゆる「証言」とをまじめに研究せずに、友だちどうしで二、三度話し合ったあとで、大会についていいかげんな取りざたをすることが好きなイヴァンやピョートルらは、この事実をいつも無視している。この議事録やこれらの証言を良心的に研究しようと思う者ならだれでも、私が指摘した事実にかならず出くわすだろう。すなわち大会のその時点にあっては、論争の根源はまさに中央諸機関の人的構成の問題にあったし、またわれわれが

統制の条件をいっそう厳重にしようと努力したのは、われわれが少数派であったからにほかならず、マルトフがリーベルらとアキーモフらを大喜びさせながら、また彼らの大喜びの助力をうけながらこわしてしまった「壺を、二重結びで縛ろう」と思ったからにほかならなかった。

大会のこの時点について、同志パヴローヴィチはこう言っている。「もし事態がこういうふうでなかったなら、われわれが補充のさいの全員一致制の条項をもちだしたのは、自分の反対者のためになるように配慮したのだと推定するほかはないことになる。なぜなら、あれこれの機関で優位をたもっている側にとっては、全員一致制ということは、必要でないばかりか、不利でさえあるからである」（『第二回大会にかんする手紙』、一四ページ）。しかし、いまでは、諸事件の時間的順序があまりにもしばしば忘れられており、大会のある一時期をつうじて現在の少数派が多数派であったこと（リーベルらやアキーモフらが参加したおかげで）、そして、中央諸機関の補充にかんする論争――その真因は、中央諸機関の人的構成をめぐる「イスクラ」組織内の不一致にあった――が起こったのは、まさにこの期間のことであったことが、忘れられている。この事情を理解する者は、われわれの討論の激しさをも理解するであろうし、細目にかんするなにか小さな意見の相違が真に重要な原則的な諸問題を引きおこしているという外見上の矛盾にも驚かないであろう。

同じ会議で発言した同志デイチ（二七七ページ）が、「この提案がこの時点を考慮したものであることは疑いない」と言明したのは、きわめて正しかった。じっさい、この時点をそのあるがままの複雑さで理解してはじめて、この論争の真の意義を理解することができる。そして、われわれが少数派であったとき、ヨーロッパのすべての社会民主主義者が正当で許されるものと認めているやり方で少数派の権利を擁護したのだということ、すなわち、中央諸機関の人的構成にたいする統制をいっそう厳重にするように大会に要請したのだということを、念頭におくことがきわめて重要である。それとまったく同様に、同志エゴーロフがやはり大会で、ただし別の会議で次のように言ったのも、かなりの程度まで正しかった。「討論のなかでまたも原則を引合いにだしているのを聞くのは、私にははなはだ不思議なことに思われる。」……（これは、大会の第三一回会議で、すなわち、私の思いちがいでないなら木曜日の朝に、中央委員会の選挙について言われたことであるが、ここでいま述べている第二六回会議は、月曜日の晩のことであった。）……「だれにもはっきりしていると思うが、ここ数日の討論はみな、あれこれの原則的な問題提起をめぐって

おこなわれたのではなく、もっぱら、あれこれの人物が中央諸機関にはいるのを保障するには、あるいはこれを阻止するにはどうすればよいか、ということをめぐっておこなわれていた。この大会では、諸原則はとっくの昔に見うしなわれていることを認めて、物事をあからさまに言おう。」(満場の哄笑。ムラヴィヨーフ——「同志マルトフが笑ったことを議事録に記録するようにお願いする。」)（三三七ページ）同志マルトフも、われわれみなも、同志エゴーロフの実際に滑稽な苦情に大笑いしたのは、不思議ではない。いかにも「ここ数日」、きわめて多くのことが中央諸機関の人的構成の問題のまわりをめぐっておこなわれた。これはほんとうである。これは、実際に、大会ではだれにも明らかであった（そして、いまになってはじめて少数派は、この明らかな事情をあいまいにしようと努力しているのだ）。最後に、物事をあからさまに言わなければならないということも、ほんとうである。だが、いったいぜんたい、この場合、そのことが「原則が見うしなわれたこと」となんの関係があるのか？？　われわれがこの大会に集まったのは、最初の数日は綱領、戦術、規約を論じ、またそれに関係した諸問題の決着をつけ、そして、最後の数日は（日程第一八—第一九項）中央諸機関の人的構成を論じて、これらの問題に決着をつけるためだったではないか（一〇ページ、大会議事日程を見よ）。大会の最後の数日が指揮棒をめぐる闘争に費やされるのはあたりまえな、まったく、まったく当然な現象である（だが、大会のあとで指揮棒をめぐってつかみあうなら、それは泥仕合である）。だれかが大会で中央諸機関の人的構成の問題で敗北した場合に（同志エゴーロフのように）、あとになって「原則が見うしなわれた」などというのは、まったく滑稽である。だから、みなが同志エゴーロフのことを笑ったのは当然である。また、同志ムラヴィヨーフが、同志マルトフもいっしょに笑ったことを、議事録に記録してほしいと頼んだのも、当然である。同志マルトフが同志エゴーロフのことを笑ったのは、つまり自分自身のことを笑ったのだからである。……

同志ムラヴィヨーフの皮肉の補足として、次のような事実を報告しておくことは、おそらくよけいなことではあるまい。周知のように、大会後に同志マルトフは、われわれの不一致に根本的な役割を演じたものは、ほかならぬ中央諸機関の補充の問題であり、「旧編集局の多数派」は中央諸機関の補充の相互統制にとくに反対した、とだれかれの見さかいなく断言した。大会前には同志マルトフは、二つの三人組を選出し、三分の二の多数決による相互補充制を設けるという私の草案をうけいれて、このことについて私にこう書いてよこした。「このような相互補充の形態を採

用するにあたって強調しておかなければならないのは、大会後には、各合議体の補充はいくらか違った原則にもとづいておこなわれるであろうということである（私は次のようにすることを勧告したい。すなわち、各合議体は新構成員をみずから補充し、もう一方の合議体に自分の意向を表明する。後者はそれに異議を申し立てることができ、その場合には、評議会が争いを解決する。渋滞が生じないようにするために、この手続は、あらかじめ予定された候補者たち——すくなくとも中央委員会の場合には——について とられる。そうすれば、彼らのなかからいっそう手ばやく補充することができる）。その後の補充は、党規約の定める手続にしたがっておこなわれることを強調するために、第二二条に*『……〔大会は〕くだされた決定を承認するものとする』と、つけくわえなければならない」（傍点は私のもの）と。

＊ ここで問題になっているのは、代議員の全員に知られていた、私の最初の大会 Tagesordnung〔議事日程〕草案と、それにたいする注である。この草案の第二二条は、まさに、中央機関紙と中央委員会に二つの三人組を選出すること、この六名が三分の二の多数決によって「相互補充をおこなうこと」、この相互補充を大会が承認すること、中央機関紙と中央委員会のその後の補充は別々におこなうことを述べたものであった。

注釈は無用である。

——————

中央諸機関の補充について論争がおこなわれた時点の意義を説明したので、われわれは次にこれに関連した表決にすこしばかり立ちいらなければならない。討論に立ちいる必要はあるまい。なぜなら、私が引用した同志マルトフと私の演説のあとには、ほんの少数の代議員が参加した簡単なやりとりがあっただけだからである（議事録二七七—二八〇ページを見よ）。これらの表決について同志マルトフが連盟大会で主張したところによれば、私の叙述のなかで、「規約をめぐる闘争」……（同志マルトフは、第一条が採択されたのちもまさに規約をめぐって激しい論争がおこなわれたという、重大な真実をうっかり語ったのである）……「を、ブンドと連合を結んだマルトフ派にたいする『イスクラ』の闘争として描いている」のは、「最大の歪曲」（連盟議事録、六〇ページ）をおかしたものだという。「最大の歪曲」というこの興味ある問題をしらべてみよう。同志マルトフは、評議会の構成の問題の表決と補充の問題についての表決とを合わせて八回の表決をあげている。すなわち、（一）中央機関紙と中央委員会から二名ずつ評議会に選出する件——賛成二七票（マ）、反対一六票（レ）、

棄権七票。* (ついでに注意しておくが、議事録の二七〇ページには、棄権八票と記録されている。だが、これは些細なことである。) ——(二) 大会が五人目の評議会員を選出する件——賛成二三票(レ)、反対一八票(マ)、棄権七票。——(三) やめた評議会員の後任を評議会自身が任命する件——反対二三票(マ)、賛成一六票(レ)、棄権一二票。——(四) 中央委員会の補充のさいの全員一致制の件——賛成二五票(レ)、反対一九票(マ)、棄権七票。——(五) 構成員の不採用には、理由をあげた異議申立が一件あることを必要とする件——賛成二一票(レ)、反対一九票(マ)、棄権一一票。——(六) 中央機関紙の補充のさいの全員一致制の件——賛成二三票(レ)、反対二一票(マ)、棄権七票。——(七) 新しいメンバーの不採用についての中央機関紙または中央委員会の決定を破棄する評議会の権限にかんする表決を許す件——賛成二五票(マ)、反対一九票(レ)、棄権七票。——(八) この提案そのもの——賛成二四票(マ)、反対二三票(レ)、棄権四票。これについて同志マルトフはこう結論をくだしている(連盟議事録、六一ページ)。「この場合には、明らかに、ブンドの一代議員が提案に賛成し、他の者は棄権した」(傍点は私のもの)と。

* 括弧のなかのマやレという文字は、私(レ)とマルトフ(マ)がどちらについたかを示す。

そこでこういう疑問が起こる。記名投票がなかったのに、なぜ同志マルトフは、ブンドの一人が彼マルトフに賛成投票したことは明らかだと考えるのか？

それは、彼が投票者数に注意をはらっていて、この数がブンドの表決参加を示すときには、その参加が彼マルトフに有利だったことを、彼同志マルトフは疑わないからである。

ではこの場合、私のおかした「最大の歪曲」とは、いったいどういう点にあるのか？

総票数は五一票であったから、ブンド派を除けば四六票、ラボーチェエ・デーロ派を除けば四三票である。同志マルトフがあげている八回のうちの七回の表決には、それぞれ四三、四一、三九、四四、四〇、四四、四四名の代議員が参加し、一回の表決には四七名の代議員(より正しく言えば四七票)が参加した。そして、その表決では、同志マルトフ自身、ブンド派の一人が彼を支持したことを認めている。こうして、マルトフの描いた(しかも、われわれがすぐ見るように、不完全に描いた)情景は、闘争についての私の描写を確認し、強めているにすぎないことがわかる！非常に多くの場合に、棄権数がきわめて大きかったことがわかる。このことは、まさに、ある種の細目にたいしては

大会全体の関心が比較的小さかったこと、また、これらの問題についてはイスクラ派のあいだに十分明確なグループ分けがなかったことを、示している。ブンド派は「棄権することによって、明らかにレーニンを助けた」というマルトフのことば（連盟議事録、六二ページ）は、まさしくマルトフ自身に反駁している。つまり、ブンド派が欠席するか、棄権する場合にだけ、私はときたま勝利をあてにすることができたのである。これに反して、ブンド派が闘争に介入する価値があると考えたときには、いつでも彼らは同志マルトフを支持したし、しかも彼らがこうして介入したのは、さきにあげた四七名の代議員が参加した一つの場合だけに限られなかった。大会議事録を調べる気のある者には、同志マルトフの描いた情景がきわめて奇妙な不備を示していることがわかるだろう。同志マルトフは、ブンドが表決に参加したもう三つの場合をあっさりとぬかしてしまったが、いうまでもなく、そのすべての場合に同志マルトフが勝利者であった。次にあげるのがこれらの場合である。(一) 多数決の有効最低限を五分の四から三分の二に引き下げよ、という同志フォミーンの修正動議が採択されたとき。賛成二七票、反対二一票（二七八ページ）、すなわち、四八票が参加した。(二) 相互補充制を削除せよ、という同志マルトフの提案が採択されたとき。賛成二六票、反対二四票（二七九ページ）、すなわち、表決には五〇票が参加した。最後に、(三) 中央機関紙と中央委員会の補充は、評議会の全員の同意がある場合にだけ認められるという私の提案が否決されたとき（二八〇ページ）。反対二七票、賛成二二票（記名投票さえおこなわれたのであるが、残念なことには、議事録には記録されていない）、すなわち投票数は四九票であった。

総括。中央諸機関の補充の問題については、ブンド派は、四回の表決にしか参加しなかった（うち三回はいま私があげた場合で、参加者はそれぞれ四八、五〇および四九名であり、一回は同志マルトフがあげた場合で、参加者は四七名である）。これらすべての表決で、同志マルトフは勝利者であった。私の叙述は、ブンドとの連合を指摘した点でも、問題が比較的細目にわたるものであったことを確認している点でも（多くの場合に、多数の棄権があった）、イスクラ派の明確なグループ分けがなかったことを指摘している点でも（記名投票はなかった。討論で発言した者は非常に少なかった）あらゆる点で正しいことがわかる。

私の叙述のなかに矛盾を見つけだそうとした同志マルトフの企ては、不適当な手段を用いた企てであったことがわかる。なぜなら、同志マルトフは、全体としての情景を再現する労をはらわずに、個々の片言隻句をとりだしてきた

からである。

在外組織の問題にあてられた規約の最後の条項は、またもや、大会でのグループ分けという見地からみて、いちじるしく特徴的な討論と表決とを引きおこした。問題となったのは、連盟を党の在外組織として認めることであった。問題となったのは、連盟を党の在外組織として認めることであった。同志アキーモフは、いうまでもなく、ただちに異議をとなえ、第一回大会によって承認された在外同盟を思いださせて、この問題の原則的な意義を指摘した。彼はこう述べた。「私はこの問題がどう解決されるかということに、特別な実践的意義をあたえないことを、まず第一におことわりしておく。わが党内でこれまでおこなわれてきた思想闘争は、疑いもなくまだ終わってはいないが、闘争は、違った平面で、違った勢力配置のもとでつづけられるであろう。……規約第一三条[(八五)]には、わが大会を党の大会から分派の大会に変えようとする傾向が、またしても、しかも非常に鋭く反映している。すべての党組織を統合して、党の統一のためにロシアのすべての社会民主主義者を党大会の諸決定に服従させるのではなく、少数派の組織をなくし、少数派を消滅させることが大会に提案されている」（二八一）と。読者が見られるように、中央諸機関の構成の問題で同志マルトフが敗北してからは、彼にとって非常に貴重なものとなった「継承性」は、同志アキーモフにとってもこれにおとらず貴重なものであった。しかし、大会では、自分と他人とで別の尺度をあてがう人たちが、同志アキーモフに猛烈に反対した。綱領が採択され、『イスクラ』が承認され、規約のほとんど全部が採択されたあとであるにもかかわらず、連盟を同盟から「原則的に」分離したほかならぬその「原則」が、舞台にもちだされた。同志マルトフはこう叫んだ。「もし同志アキーモフが問題を原則的な基盤のうえにおきたがっているのなら、われわれには反対する理由はなにもない。同志アキーモフが二つの潮流にかんする闘争でのありうべき結合について語ったことを思えば、とくにそうである。『イスクラ』にむかってもう一度敬意を表するという意味ではなく、同志アキーモフが述べたありうべき結合のすべてに最後的に別れを告げるという意味で、一つの潮流の勝利を確認しなければならない」（これは大会の第二七回会議で言われたものであることに注意せよ！）（二八二ページ、傍点は私のもの）と。

情景はこうである。同志マルトフは、大会で綱領にかんする論争がすべて終わったのちも、ありうべき結合のすべてに最後的に別れを告げることをまだつづけていた、……大会で彼が中央諸機関の構成の問題で敗北するまでは！　大会で

は同志マルトフは、ありうべき「結合」に「最後的に別れを告げた」のだが、その「結合」を、彼は大会のすんだ翌日にきわめて気楽に実現するのである。しかし、同志アキーモフは、すでに当時でも、同志マルトフよりはるかに目さきがきいていた。同志アキーモフは、「第一回大会の意志によって委員会という名をおびている古い党組織」の五年間の活動を引合いにだして、きわめて毒々しい、先見の明のあるあてこすりでことばを結んだ。「わが党内に違った潮流が生まれるだろうと私が期待しているのはむだだ、という同志マルトフの意見についていえば、彼その人ですら私に期待をいだかせると、私は言わなければならない」(二八三ページ、傍点は私のもの)と。

そうだ、同志マルトフが同志アキーモフの期待にりっぱにそったことを、認めなければならない！

同志マルトフは、三年のあいだ活動したと見なされていた古い党合議体の「継承性」が侵害されたのちには、同志アキーモフが正しかったと確信して、彼のあとについていった。同志アキーモフが勝利をおさめるには、たいして骨はおれなかった。

けれども、大会で同志アキーモフを支持したのは――しかも、首尾一貫して支持したのは――、同志マルトィノフ、同志ブルケール、およびブンド派(八票)だけであった。同志エゴーロフは、「中間派」の真の指導者として、中庸の徳を守った。彼は、――よろしいか――イスクラ派に同意し、彼らに「共鳴し」(二八二ページ)、そしてこの共鳴を、提起された原則的な問題をまったく回避して、連盟についても同盟についてもなにも述べないという提案(二八三ページ)によって証明したのだ。この提案は、二七票対一五票で否決された。反イスクラ派(八票)以外に、ほとんど全部の「中間派」(一〇票)が同志エゴーロフに同調して投票したことは、明らかである(投票総数は四二票である。だから、相当多数が棄権するか、あるいは、興味のない表決、しかもはっきりと結果のわかっている表決のさいにはよくあるように、欠席したのである)。イスクラ派の原則を実際に遂行することが問題になるやいなや、「中間派」の「共鳴」がまったく口さきのものであること、われわれに賛成の票が三〇票以下、あるいは三〇票そこそこであることが、たちまちわかった。ルソフの提案(連盟を唯一の在外組織と認めるという)についての討論と投票は、いっそうはっきりとこのことを示している。反イスクラ派と「沼地」派ははっきりと原則的な見地に立ち、そのさい同志リーベルと同志エゴーロフがこの見地を擁護して、同志ルソフの提案は表決にかけることの許されない、不法なものである、と声明した。「その他の在外組織はみなこの

提案によって抹殺される」(エゴーロフ)と。そして、この演説者は、「組織の抹殺」に参加したくないというので、投票を拒否しただけでなく、退場さえしたのである。けれども、「中間派」のこの指導者にたいしては公平でなければならない。彼は、同志マルトフ一派の十倍も大きな確信(彼らのまちがった原則にたいする)と政治的な勇気とを示したし、また彼が「抹殺される」組織を擁護したのは、公然たる闘争で敗北した自分自身のサークルが問題となったときだけではなかったのである。

同志ルソフの提案は、二七票対一五票で、表決を許すべきものと認められ、ついで二五票対一七票で可決された。この一七票に、欠席した同志エゴーロフの票をくわえると、反イスクラ派と「中間派」の全票数(一八票)が得られる。

在外組織にかんする規約第一三条全体は、わずか三一票対一二票、棄権六票で可決された。この三一票という数は、大会におけるイスクラ派、すなわち、『イスクラ』の見解を一貫して主張し、実際に実行した人々の概数をわれわれに示しているが、われわれがこの数に出あうのは、大会の投票の分析ですでにじつに六回に達している(ブンド問題の順位、組織委員会事件、「ユージヌィ・ラボーチー」グループの解散、農業綱領にかんする二回の表決)。だが、同志マルトフは、こうした「狭い」イスクラ派グループを別にとりだす根拠はなにもないと、大まじめにわれわれに断言しようとしている!

規約第一三条の採択が、「表決に参加することを拒否する」(二八八ページ)という同志アキーモフと同志マルトィノフとの声明をめぐって、きわめて特徴的な討論を呼びおこしたことも、述べないわけにはいかない。大会ビューローはこの声明を審議して、——まったく正当にも——たとえ同盟がはっきりと解散させられたとしても、そのことは、けっして、大会の活動に参加するのを拒否する権利を同盟の代議員たちにあたえることにはならないのを認めた。投票を拒否することは、絶対に異常な、許せない事柄である——これこそ、イスクラ少数派をもふくめた大会全体が、ビューローとともに主張した見地である。このイスクラ少数派は、第二八回会議で彼らが猛烈に非難したそのことを、第三一回会議では彼らみずから実行したのだ! 同志マルトィノフが自分の声明を弁護しだしたとき(二九一ページ)、パヴローヴィチも、トロツキーも、カルスキーも、マルトフも、彼に反対した。同志マルトフは、不満な少数派の義務をとくにはっきりと理解していて(彼自身が少数派になるまでは!)、この義務について、とくに教訓に富んだ演説をした。彼は、同志アキーモフと同志マルトィノフとにむかってこう叫んだ。「君たちは大会の構成員なの

か、そうだとすれば、君たちは大会のあらゆる活動に参加しなければならない。」（傍点は私のもの）（当時はまだ同志マルトフは、少数派が多数派に従うのは形式主義、官僚主義であることに、気がついていなかったのだ！）。「それとも、君たちはその構成員でないのか、そうだとすれば、君たちは会議にとどまることはできない。……同盟の代議員たちの声明は、私に二つの質問を提出することをよぎなくさせる。すなわち、彼らは党員なのか、また彼らは大会の構成員なのか？」（二九二ページ）と。

同志マルトフが、党員の義務について同志アキーモフに教えているのである！　だが、同志アキーモフが、同志マルトフに若干の期待をかけていると言ったのは、理由のないことではなかった……。もっとも、この期待は、選挙でマルトフが敗北したのちにはじめて実現される運命にあった。同志マルトフは、問題が自分自身にかんすることではなく、他人にかんすることであったときには、同志マルトィノフによってはじめてつかわれた（私の思い違いでなければ）「例外法」というおどし文句にすら耳をかさなかった。同志マルトィノフは、彼の声明を撤回するように説得した人たちに、こう答えた。「われわれにあたえられた説明によっては、この決定が原則的なものか、それとも同盟にたいする非常措置なのかが、明らかにならなかった。もし後者であるなら、同盟に侮辱がくわえられたものと、われわれは考える。同志エゴーロフも、われわれと同じように、これが同盟にたいする例外法（傍点は私のもの）であるという印象をうけた。だから、会議場から退席さえしたのである」（二九五）と。同志マルトフも同志トロツキーも、プレハーノフといっしょになって、大会の投票を侮辱と見なすというこのばかばかしい、じつにばかばかしい考えに、猛烈に反対した。そして、同志トロツキーは、彼の提案によって大会で採択された決議（同志アキーモフと同志マルトィノフとは自分たちが十分満足をあたえられたものと考えてよい、という）を擁護して、こう断言した。「この決議は俗物的なものではなく原則的なものである。だから、だれかがこの決議に感情を害したとしても、それはわれわれにかかわりのないことである」（二九六ページ）と。しかし、わが党内にはサークル根性や俗物根性がまだあまりにも強いこと、私が傍点を打った誇らしげなことばはからっぽな大言壮語であることが、その後まもなくわかった。

同志アキーモフと同志マルトィノフとは自分の声明を撤回することを拒否し、「まったく理由のないことだ！」という代議員全員の叫びをあびながら、大会から退場した。

(m) 選挙。大会の終り

規約が採択されたのち、大会は地域的組織にかんする決議、個々の党組織にかんする一連の決議を採択し、そして、私がさきに分析した「ユージヌィ・ラボーチー」グループにかんするきわめて教訓に富んだ討論ののちに、党の中央諸機関の選挙の問題に移った。

われわれがすでに知っているように、大会全体は「イスクラ」組織が権威ある推薦をすることを期待していたが、「イスクラ」組織はこの問題をめぐって分裂した。というのは、この組織の少数派が、多数をたたかいとることができないかどうかを、大会での公然たる自由な闘争でためしてみようと望んだからである。これまたわれわれの知っているように、中央機関紙と中央委員会とに二つの三人組を選出することによって編集局を刷新するという案は、大会のずっとまえからも、また大会でも、すべての代議員に知られていた。大会での討論を明らかにするために、この案をもっとくわしく調べてみよう。

次にあげるのは、この案を述べた大会の Tagesordnung〔議事日程〕草案にたいする私の注解の正確な本文である。*「大会は、中央機関紙編集局に三名、中央委員会に三名を選出する。この六名は、必要な場合には、合同で三分の二の多数決によって中央機関紙編集局および中央委員会の構成をみずから補充し、それについて大会に報告する。この報告が大会によって承認されたのちは、その後の補充は、中央機関紙編集局および中央委員会が別々にこれをおこなう。」

* 私の『「イスクラ」編集局への手紙』、五ページ、および連盟議事録、五三ページを見よ。

この文面からすれば、この案は、まったく明確で、なんのあいまいなところもない。すなわち、この案は、実践活動の最も有力な指導者たちが参加して、編集局を刷新することを意味している。私のあげた、この案の二つの特徴は、右に引用した本文を多少とも注意して通読する労をおしまない者には、だれにでもすぐわかることである。だが、今日では、最も初歩的なことでさえ、くわしくこれを説明しなければならない。この案が意味していることは、まさに編集局の刷新であって、編集局員の数をかならずふやすとか、かならず減らすとかいうことではなく、まさしく刷新することである。なぜなら、ありうべき増減の問題は、未決定になっているからである。すなわち、補充は、それが必要な場合に限っておこなうことになっているのである。この刷新の問題についていろいろな人が発表した提案のな

かには、できれば編集局員を減らす案や、編集局員を七名にふやす案（私個人としては、七名のほうが六名よりも比較にならないほど適切だと、いつも考えていた）や、またこの数を一一名にふやそうとする案さえあった（一般にすべての社会民主主義組織、とくにブンドやポーランド社会民主党との合同が平穏におこなわれる場合には、そういうこともありうると、私は考えていた）。しかし、「三人組」について述べる人たちが普通に見おとしている最も重要なことは、中央機関紙のその後の補充の問題の決定に中央委員を参加させるという要求である。「少数派」に属する組織の成員や大会代議員の全員のなかで、この案を知っていてこれを承認した（あるいは自分の同意をとくに表明することで、あるいはなにも発言しないことで、これを承認した）者のうちで、この要求の意義を説明する労をとった同志は一人もいなかった。第一に、なぜ編集局刷新の出発点として、ほかならぬ三人組がとりあげられ、また三人組だけがとりあげられたのか？　もしもっぱら合議体の拡大ということだけが、でないまでも、主としてそれが考えられていたのなら、またこの合議体が実際に「調和のとれたもの」と認められていたのなら、そんなふうにすることは明らかにまったく無意味なことであったろう。「調和のとれた」合議体を拡大するのに、この合議体全体から出発せずに、その一部分だけから出発するのは、おかしなことであろう。この合議体の全員が、その構成を刷新する問題や、旧編集サークルを党機関に変える問題を審議し決定するのに完全に適当と認められたのでないことは、明らかである。個人的には拡大による刷新を望んでいた者さえ、旧来の構成は調和を欠き、党機関の理想にそわないと認めていたことは、明らかである。なぜなら、そうでなかったら、六人組を拡大するために、はじめにそれを三人に減らす理由はなかったであろうから。繰りかえして言うが、これは自明なことであって、ただこの問題が一時「人身攻撃」で混乱させられたことが、このことを忘れさせることができたのである。

第二に、さきに引用した本文から、中央機関紙の三名全部の同意があったところで、三人組を拡大するのになお十分でないことがわかる。このこともまたいつも見おとされている。補充のためには六票の三分の二、すなわち四票が必要である。だから、選出された三名の中央委員が「ノー」と言いさえすれば、三人組の拡大はまったく不可能であろう。反対に、三名の中央機関紙編集局員のうちの二名が、その後の補充に反対してさえ――三名の中央委員が全部これに同意する場合には、補充はなりたちうるわけである。こういうわけで、旧サークルを党機関に変えるさいに、

とが、念頭におかれていたことは、明らかである。そのさい、われわれがおよそどの同志を予定していたかは、大会で編集局の名で発言しなければならない場合にそなえて、大会前に編集局が全員一致で同志パヴローヴィチを第七の編集局員に選んだことからして明らかである。第七の編集局員の地位には、同志パヴローヴィチのほかにも、のちに中央委員会に選ばれた、「イスクラ」組織の古い成員で、組織委員会の一員だった人が推薦された。(六六)

こういうわけで、二つの三人組を選出する案が明らかに予定していたことは、(一) 編集局の刷新、(二) 党機関には不適当な古いサークル根性の若干の特徴を編集局から取りのぞくこと (取りのぞくべきものがなにもなかったなら、最初の三人組を考えだす必要はなかったであろう!)、最後に (三) 文筆家からなる合議体の「神政的」特徴を取りのぞくこと (三人組を拡大する問題の決定にすぐれた実践家を参加させることによって、これを取りのぞくこと) であった。編集局員の全員が知っていたこの案は、明らかに、三年間の活動の経験にもとづいたものであり、われわれが一貫して実施している革命的組織の諸原則に完全に合致していた。『イスクラ』が登場した分散の時代には、個々のグループは、しばしば偶然に、自然発生的に形成され、不可避的にサークル根性の二、三の有害な現われをもちあわせていた。党の創設は、こうした特徴を取りのぞくことを前提とし、またそれを取りのぞくことを要求した。これを取りのぞくことに、すぐれた実践家たちが参加することが必要であった。なぜなら、二、三の編集局員は、いつも組織上の仕事にたずさわっていたし、また党機関の体系にはいるのは、もっぱら文筆家からなる合議体でなくて、政治的指導者からなる合議体でなければならなかったからである。最初の三人組の選挙を大会にまかせることも、『イスクラ』の平素の政策の見地からすれば、同じく当然なことであった。われわれは、綱領、戦術、組織にかんする原則的な論争問題が完全に明らかになるのを待ちながら、このうえなく慎重に大会を準備したのであった。これらの基本的な問題で大多数の意見が一致するという意味で、大会がイスクラ的なものになるであろうことを、われわれは疑わなかった (このことは『イスクラ』を指導的機関紙として承認するという〔諸地方委員会の〕諸決議によっても、ある程度証明されていた)。だから、『イスクラ』の思想をひろめ、『イスクラ』を党に変える準備をする全活動をその双肩になってきた同志たちに、新しい党機関の最適の候補者の問題を彼ら自身で解決することを、われわれはまかさなければならなかったのである。「二つの三人組」とい

う案がこのように自然なものであったこと、それが『イスクラ』の全政策と完全に合致していたこと、そして多少とも事情に通じている人々が『イスクラ』について知っていたことのすべてと完全に合致していたこと、このことによってのみ、この案が一般の賛成を得たこと、またこれに対抗するどんな案もなかったことの説明がつく。

そこで大会では、まず最初に同志ルソフが、二つの三人組を選挙するように提案した。マルトフが、この案と日和見主義という無実の非難とのあいだには関連があるということを、われわれに手紙で通告してきたのに、マルトフの味方たちは、六名か三名かという論争を、この非難が正しいか正しくないかの問題に帰着させようとは考えもしなかった。彼らのうちのだれひとりとして、このことをおくびにもださなかった！　彼らのうちのだれひとりとして、六名か三名かという論争に関連した、いろいろな原則的な色合いの相違について、あえてひとことも述べようとしなかった！　彼らは、最もありきたりの安手な方法——憐れみに訴え、感情を害するおそれがあることを言いたて、編集局の問題は、『イスクラ』を中央機関紙に指定することですでに解決ずみであるようなふりをする方法——を選んだ。同志コリツォーフが同志ルソフに反対してもちだしたこの最後の論拠は、まっかなうそである。大会の日程には、第四項——「党の中央機関紙」と、第一八項——「中央委員会と中央機関紙編集局との選挙」という二つの別々の項目が（議事録、一〇ページを見よ）——もちろん、偶然にではなく——かかげられていた。これが第一。第二に、中央機関紙を指定したさい、すべての代議員が、これは編集局を承認するものではなく、その方向を承認するものにすぎない、とはっきり言明した。*そして、この言明は一つの抗議もまねかなかったのである。

* 議事録、一四〇ページを見よ。アキーモフの演説……「中央機関紙の選挙については、最後に論じることになる、と私は聞いている。」アキーモフに反対したムラヴィヨーフの演説。——アキーモフは「中央機関紙の将来の編集局の問題を非常に気にしている。」（一四一ページ）機関紙を指定したことでわれわれは「同志アキーモフが非常に心にかけている手術を施すことのできる具体的な材料」を得たのであり、『イスクラ』が「党の決定」に「従うこと」はまったく疑う余地がないと言ったパヴローヴィチの演説（一四二ページ）。トロツキーの演説……「われわれが編集局を承認するのでないからには、われわれは『イスクラ』のなにを承認するのか？……名まえでなく潮流を、……名まえでなく旗を承認するのである。」（一四二ページ）マルティノフの演説……「他の多くの同志と同じように、私はこう考えている。ある一定の潮流の新聞としての『イスクラ』をわれわれの中央機関紙として承認する問題を審議するのであるから、われわれはいま選

挙の方法、あるいはその編集局の承認にふれてはならない。これについてはあとで、日程中の適当な場所で論じることになろう。」……（一四三ページ）

こういうわけで、大会は特定の機関紙を承認することで実質上すでに編集局をも承認したのだという言明――少数派の味方（コリツォーフ、三二一ページ、ポサドフスキー、同所、ポポーフ、三二二ページ、その他多くの人々）が何回となく繰りかえした言明――は、実際にはまったくまちがっていた。これは、全員がまだ中央諸機関の構成の問題を実際に公平な態度で扱うことのできたときにとっていた立場からの退却をおおいかくす、だれの目にも明らかな駆引きであった。この退却は、原則的な理由づけで正当化することもできなかったし（なぜなら、大会で「日和見主義という無実の非難」という問題をもちだすことは、少数派にとってあまりにも不利であったので、少数派はこのことをおくびにもださなかったから）、また六人組と三人組のどちらが真の活動能力をもつかについての事実資料をあげてこれを正当化することもできなかった（なぜなら、この資料にふれただけでも、少数派に不利な証拠が山ほど出てくるであろうから）。彼らは「整然たる統一体」とか、「調和のとれた集団」とか、「整然たる、結晶のように完璧な統一体」とかいった空文句でお茶をにごさなければならなかった。こういう論拠がすぐさま「泣きおとし文句」（三二八ページ）とあからさまによばれたことは、驚くにあたらない。三人組という案そのものが、「調和」が欠けていたことをはっきり立証していたし、一ヵ月以上にわたる共同活動のあいだに代議員たちの得た印象は、明らかに、代議員たちが自主的な判断をくだすための材料を大量にあたえていた。同志ポサドフスキーがこの材料のことをほのめかした（彼の立場から見ると、それは慎重を欠いた、かるはずみなことであった。「軋轢」ということばを、彼が「条件つきで」つかっている三二一ページと三二五ページとを見よ）とき、同志ムラヴィヨーフは、はっきりこう述べた。「私の考えでは、こういう軋轢*が疑いもなく存在していることは、いまでは大会の多数者にまったく明らかである」（三二一）と。少数派は、同志ムラヴィヨーフの投げつけた手袋を拾いかねて、また六人組を擁護するためにただ一つの本質的な論拠さえもちだしかねて、「軋轢」ということば（これはポサドフスキーがつかったもので、ムラヴィヨーフがつかったのではない）を、もっぱらなにか人身攻撃的な意味にとろうとした。そこで、実りのない点でじつに滑稽な論争が起こった。すなわち、多数派は（同志ムラヴィヨーフの口をつうじて）六人組と三人組との真の意義は、自分たちには十分はっきりわかっている、と言

明したが、少数派はこれに耳をかすことを頑強に拒み、「われわれにはそれを検討する可能性がない」と断言した。多数派は、検討することは可能であると考えただけでなく、すでに「検討しており」、この検討の結果は彼らにはまったく明らかである、と言ったが、少数派は、明らかに、検討を恐れて、もっぱら「泣きおとし文句」のかげに隠れた。多数派は、「われわれの中央機関紙はたんなる文筆家グループではないことを念頭におく」ように忠告した。多数派は、「中央機関紙の先頭に、大会に知られていないまったく特定の人々、私が述べた要求」（すなわち、たんなる文筆上の要求にとどまらない要求）「を満足させることのできる人々をおくことを望んでいる」（三二七ページ、同志ランゲの演説）。少数派は、またも手袋を拾いあげかねて、たんなる文筆上の合議体にとどまらないような合議体には、彼らの意見ではだれが適しているか、「大会に知られている、まったく特定な」人物はだれか、について一言も述べなかった。少数派は、あいかわらず悪名高い「調和」のかげに隠れた。それだけではなかった。少数派は、原則上絶対にまちがっており、したがって当然に猛烈な反撃をまねくような論拠を、論証のなかにもちこみさえした。「大会は」――よろしいか――「編集局を改編する道義的な権限も政治的な権限ももたない」（トロツキー、三二六ページ）。「これは、あまりにもデリケートな（原文のまま！）問題である」（同人）。「選出されなかった編集局員は、大会が彼らをこれ以上編集局におくことを望んでいないという事実にたいして、どんな態度をとるべきであろうか？」（ツァリョーフ、三二四ページ）と。**

* 同志ポサドフスキーがまさにどういう「軋轢」を念頭においていたかは、われわれは大会では全然知ることができなかった。他方、同志ムラヴィョーフは、同じ会議で（三二一ページ）、彼の考えが正しく伝えられていないと言って、議事録を確認するときにはっきりこう言明した。「私が述べたのは、いろいろな問題について大会の討論のなかに現われた軋轢、残念ながらそれの存在はいまではもはやだれひとり否定しない事実となっている原則上の軋轢のことである」（三五三ページ）と。

** 同志ポサドフスキーの次の演説を参照せよ。……「諸君は、旧編集局の六名のうちから三名を選出することによって、とりもなおさず、他の三名は不必要な、よけいなものと認めるわけである。しかし、諸君にはそんなことをする権利もなければ、根拠もない。」

こういう論拠は、まったく問題を憐れみときずつけられた感情との基盤に移したものであって、真に原則的な、真に政治的な論証の分野での破産をはっきり認めたものである。だから、多数派は、ただちにこういう問題提起を俗物

根性（同志ルソフ）という的確なことばで特徴づけた。同志ルソフは、正しくも次のように言った。「革命家の口から、党活動や党倫理の概念とははなはだしく矛盾した奇妙な発言がなされている。三人組選出の反対者たちがよりどころとしている基本的な論拠は、党の事業にたいする純然たる俗物的な見解に帰着する。」（傍点は私のもの）……「こういう党的でない、俗物的な見地に立てば、われわれは、選挙のたびに次のような問題に当面するであろう。すなわち、ペトローフではなくイヴァノフが選出されたなら、ペトローフは感情を害しはしないだろうか、組織委員のだれそれは、自分でなしに他の者が中央委員に選出されたなら、感情を害しはしないだろうか、というのがそれである。同志諸君、そんなふうでわれわれはいったいどうなるだろうか？　われわれがここに集まったのは、おたがいの気にいるような演説をするためでも、俗物的な思いやりを示すためでもなく、党を創設するためである以上、われわれは、このような見解にはけっして同意できない。われわれは、役員の選挙という問題に当面しているのである。そしてこの場合、選出されなかっただれかれにたいする不信などという問題はありえないのであって、ただ事業の利益と、選出された者がその選出された当の職務に適するかどうかだけが、問題なのである」（三二五ページ）と。

われわれは、党分裂の原因を自主的に解明し、大会における分裂の根源を探りだしたいと思っているすべての人に、同志ルソフの演説を読むこと、これを読みなおすことをお勧めしたい。少数派は、彼の論拠を論駁しなかったばかりでなく、これについて言い争いさえしなかった。それに、こういう初歩的な、イロハというべき真理について言い争うことは不可能である。こういう真理を忘れるのは、すでに同志ルソフ自身が正しく説明したように、「神経のたかぶり」によるものでしかなかった。そして、この説明は、いったいどうして少数派は党的見地からそれて俗物根性やサークル根性の見地に落ちこむようなことになったのか、*ということの説明として、少数派にとって実際に最も不愉快さの少ないものなのである。

* 同志マルトフが、彼の『戒厳状態』のなかでこの問題を扱っている態度は、彼がそのふれた他の諸問題にたいしてとっている態度と同じである。彼は、論争の完全な情景を描きだす労をとらなかった。彼は、この論争のなかに現われたただ一つの真に原則的な問題、——俗物的な思いやりか、それとも役員の選挙か？——党的見地か、それともイヴァン・イヴァーヌィチ流のきずつけられた感情か？——を、遠慮ぶかくも回避した。同志マルトフは、ここでも、個々の関連のない出来事の断片をとりだし、私にたいするありとあらゆる悪罵をそれにつけくわえただけであった。同志マルトフ、それだ

けではいささか不足ですよ！

とくに同志マルトフは、なぜ同志アクセリロード、同志ザスーリチおよび同志スタロヴェールは大会で選出されなかったのか、という質問で、私にからんでくる。自分のとっている俗物的見地に妨げられて、彼は、こうした質問がぶしつけなものであることに気がつかないのである（なぜ彼は、編集局の同僚である同志プレハーノフにたずねないのか？）。六人組の問題について少数派が大会でとった態度を私が「分別を欠いたもの」と考えていることと、その一方で私が党内での問題の公開を要求していることとのあいだに、彼は矛盾を見いだしている。そこにはなんの矛盾もないのであって、もしマルトフが、この問題の断片でなしに、そのいっさいの曲折をたがいに関連させて叙述する労をとりさえしたら、マルトフ自身にもそのことはたやすくわかったであろう。俗物的見地から問題を提起し、憐れみときずつけられた感情とにうったえたのは、分別の欠けたことであった。問題の党内での公開のためには、三人組よりも六人組がすぐれている点の本質にふれた評価、この職務への候補者たちの評価、いろいろな色合いについての評価が必要であるが、少数派は、大会ではこのことをおくびにもださなかった。

議事録を注意ぶかく研究したなら、同志マルトフは、代議員たちの演説のなかに、六人組に不利な多くの論拠があるのに気づいたであろう。次にあげるのは、これらのなかから拾いだしたものである。第一、旧六人組のなかには、原則上の色合いという意味で軋轢がはっきり見られる。第二、編集活動を技術上単純化することが望ましい。第三、事業の利益は俗物的な思いやりよりも尊い。選挙だけが、選出された人々がその職務に適していることを保障するであろう。第四、大会による選挙の自由を制限してはならない。第五、いま党が中央機関紙に必要としているのは、たんなる文筆家グループではない。中央機関紙には文筆家だけでなく、行政家も必要である。第六、中央機関紙のなかにはまったく特定な、大会に知られている人がいなければならない。第七、六名からなる合議体は、しばしば活動能力を欠く。そして、その活動は、変則的な規約のおかげで実現されてきたのではなく、変則的な規約にもかかわらず実現されてきたのである。第八、新聞の運営は党の事業である（サークルの事業ではない）、等々。――もし同志マルトフが、選出されなかった原因の問題にそんなに関心をもっているのなら、以上のような考慮を一つひとつ深く検討し、そのうちの一つでもよいから論駁してみるがよい。

しかし、少数派には、選挙に反対して筋のとおった、実務的な論拠を捜しだす可能性がまったくなかったので、彼らは党の事業のなかに俗物根性をもちこんだばかりでなく、まったく恥ずべきやり方をとるにいたった。じっさい、同志ムラヴィヨーフに、「デリケートな依頼を引き受けないがよい」（三二一ページ）と勧告した同志ポポーフのやり方を、どうしてこうよばずにいられようか？　これは、同志ソローキンの正しい表現（三二八ページ）をかりれば、

「他人の心中に立ちいること」でなくてなんであろうか？　これは、政治的な論拠がないため、「人身攻撃」をもてあそぶことでなくてなんであろうか？　同志ソローキンが次のように言ったのは、真実を語ったものか、うそを言ったものか？「こうしたやり方には、われわれはいつも異議を申し立ててきた」、「同志デイチは挑戦的に、自分に同意しない同志たちをさらしものにしようと試みたが、彼のこういう態度は許せるものであろうか？*」（三二八ページ）と。

＊　この同じ会議で同志ソローキンは、同志デイチのことば（三二四ページ――「オルローフとの激しい問答」参照）をこう解した。同志デイチは、「それに似たことはなにも言わなかった」と釈明している（三五一ページ）が、しかしすぐそのあとで、それに非常に、非常によく「似た」ことを言ったことを、自分で認めている。同志デイチはこう説明している。「三名を選挙するというような犯罪的な（原文のまま！）提案をだれがあえて支持するか、とは私は言わなかった。どういう連中があえて支持するか、知りたいものだ」（原文のまま！　同志デイチは、とりつくろおうと思って、ますますぼろをだしている！）「と言ったのである」（三五一ページ）と。同志デイチは、同志ソローキンのことばを論駁したのではなく、確認したのである。「ここでは」（六人組に賛成する少数派の論拠のなかでは）「あらゆる概念がごちゃごちゃにされている」という同志ソローキンの非難を、同志デイチは確認したのである。同志ソローキンが「われわれは党員であるから、もっぱら政治的な考慮にしたがって行動しなければならない」というような初歩的な真理に注意をうながしたのが時宜を得ていたことを、同志デイチは確認したのである。選挙の犯罪性などと叫びたてることは、俗物根性になりさがることを意味するだけでなく、まったくの恥さらしをやるまでになりさがることを意味する！

編集局の問題にかんする討論の総決算をしよう。三人組案は大会のそもそものはじめから、また大会のまえからさえ代議員たちに知られており、したがってこの案は大会の出来事や論争とはかかわりのない考慮と材料から出発したものだ、という多数派の数多くの指摘を、少数派は論駁しなかった（また論駁しようともしなかった）。少数派は、六人組を主張するにあたって、俗物的な考慮という、原則的に誤った、許しえない立場をとった。少数派は、役員選挙にたいする党的見地をすっかり忘れたことをさらけだし、それぞれの役員候補者の評価や、その候補者がその職務に適しているかいないかの評価には、ふれさえもしなかった。少数派は悪名高い調和を言いたて、まるでだれかが「殺されようとしている」かのように、「涙をながし」、「悲嘆にくれながら」（三二七ページ、ランゲの演説）、問題の本質にふれた審議を回避した。少数派は、「他人の心中に立ちいり」、選挙の「犯罪性」についてわめきたて、またそれ

と同様な許しえないやり方にうったえるまでになった。「神経のたかぶり」(三二五ページ)にうごかされて、そういうことまでやるようになった。

俗物根性と党精神との闘争、最悪の「人身攻撃」と政治的考慮との闘争、泣きおとし文句と革命的責務の基本的な観念との闘争——これこそ、わが大会の第三〇回会議でおこなわれた六人組か三人組かをめぐる闘争の本質であった。

そして、第三一回会議で大会が、旧編集局全員を承認するという提案を一九票対一七票、棄権三票という多数票で否決し(三三〇ページと正誤表を見よ)、旧編集局員が会議場に帰ってきたとき、同志マルトフは、彼の「旧編集局多数派を代表しての声明」(三三〇—三三一ページ)のなかで、政治的立場と政治的概念の同じ無定見とぐらつきをいっそう大々的にさらけだした。この共同声明の各項と、これにたいする私の回答(三三一—三三三ページ)とを、くわしく調べてみよう。

同志マルトフは、旧編集局が承認されなかったあとで、次のように言った。「いまから旧『イスクラ』は存在しない。だから、その名称を変えるほうが、いっそう首尾一貫しているだろう。いずれにせよ、大会の新しい決定は、大会のはじめの会議の一つで採択された『イスクラ』にたいする信任投票の重大な制限であると、われわれは考える」と。

同志マルトフとその同僚たちは、政治的一貫性という、多くの点で真に興味があり、教訓に富んだ問題を提起している。私はすでに『イスクラ』を承認したさいにすべての人が言ったことを引合いにだして、これに答えた(議事録、三四九ページ。本書、八二ページ〔本書、二八六—二八七ページ〕を参照せよ)。われわれの当面しているものが、政治的一貫性の欠如の最も驚くべき事例の一つであることは、疑いない。どちらの側がそうなのか——大会の多数派の側か、それとも旧編集局の多数派の側か——は、読者の判断におまかせしよう。また、ちょうどおりよく同志マルトフとその同僚たちが提起した他の二つの問題に答えることも、読者におまかせしよう。すなわち、(一)中央機関紙編集局の役員選挙をおこなうという大会の決定を、「『イスクラ』にたいする信任投票の制限」と考えたいという願望のなかに現われているのは、俗物的な見地であろうか、それとも党的見地であろうか? (二)旧『イスクラ』はいつから実際に存在しなくなったのか? 私がプレハーノフと二人でそれを運営しはじめた第四六号からか、それとも、旧編集局の多数派がそれを運営するようになった第五三号からか? 第一の問題がきわめて興味のある原則問題であるとすれば、第二の問題はきわめて興味のある事実問題である。

同志マルトフはつづけてこう言った。「いままでは、三名からなる編集局を選出することが決定されたのだから、私は、自分と他の三名の同志たちとの名において、われわれのうちだれひとりこういう新編集局には参加しないことを声明する。私個人についてつけくわえれば、私の名をこの『三人組』の候補者の一人として記入したがっている若干の同志がいるということがほんとうなら、私は、このことを不当な侮辱と考えざるをえない（原文のまま！）。私がこう言うのは、編集局を変更することが決定されたいきさつを考えてのことである。編集局の変更は、なにかの『摩擦*』を考慮し、また前編集局に活動能力のないことを考慮して決定されたのであるが、そのさい大会は、編集局にこの摩擦のことを問いただすこともせず、またそれに活動能力がないという問題を明らかにするための小委員会を任命することとさえせずに、この問題をある特定の意味で解決したのである。」……（少数派のうちだれひとり、「編集局に問いただす」ことや、小委員会を任命することを、大会に提案しようと考えつかなかったのは、奇妙なことだ！　そうしなかったのは、「イスクラ」組織が分裂したあとでは、また同志マルトフとスタロヴェールが語っているあの話合いが失敗したあとでは、そうしても無益だったからではないのか？）……「このような事情のもとでは、このようなやり方で改革された編集局で活動することに私が同意するだろうという若干の同志の予想は、私の政治的名声に汚点をしるすものと考えざるをえない。**」……

* 同志マルトフは、おそらく同志ポサドフスキーの「軋轢」という表現を念頭においているのであろう。繰りかえして言うが、同志ポサドフスキーは、彼がなにを言いたいのかを、大会では全然説明しなかった。しかし、同じ表現をつかった同志ムラヴィヨーフは、大会での討論に現われた原則的な軋轢のことを言ったのだ、と説明した。読者は、四名の編集局員（プレハーノフ、マルトフ、アクセリロードおよび私）が参加した真に原則的な討論のただ一つの場合が、規約第一条にかんする討論であったこと、また同志マルトフや同志スタロヴェールが、「日和見主義という無実の非難」が編集局を「変えようとする」論拠の一つとされていると言って、手紙で苦情を言ったことを、思いだされるであろう。同志マルトフは、この手紙のなかでは、「日和見主義」と、編集局を変えようとする計画とのあいだにはっきりした関連があることを認めていたが、大会では、「なにかの摩擦」をぼんやりとほのめかすにとどめた。「日和見主義だという無実の非難」は、もう忘れられていたのである！

** 同志マルトフは、さらにつけくわえて次のように言った。「おそらくリャザーノフならそういう役割に同意するかもしれないが、その仕事ぶりから諸君がおそらくご存じのマルトフは、それに同意などしない」と。このことばがリャザーノフにたいする人身攻撃であるかぎりで、同志マルトフはこれ

を取り消した。しかし、リャザーノフが大会で普通名詞としての役割を演じたのは、彼のあれこれの個人的属性のためではまったくなく（それにふれるのは適当ではあるまい）、「ボリバ」団の政治的特性のためであり、その政治的誤りのためであった。同志マルトフが、仮定上の、あるいは実際にくわえられた個人的な侮辱を取り消すのなら、それは非常によい行ないであるが、しかし、だからといって、党にとって教訓となるべき政治的誤りを忘れてはならない。「ボリバ」団は、「組織上の混沌」と、「なんの原則的理由から生じたわけでもない細分」とをもちこんだと言って、わが大会で非難されたのである（三八ページ、同志マルトフの演説）。このような政治的行動は、それが党大会前の一般的な混沌の時期に一つの小グループに見られる場合にだけ非難に値するのではなく、それが、党大会後、混沌が取りのぞかれた時期に見られる場合にも、『「イスクラ」編集局の多数派や『労働解放』団の多数派」に見られる場合にさえも、無条件に非難に値する。

私がわざとこの論議を全文あげたのは、大会後にこんなにも爛漫と咲きほこっている、泥仕合としかよびようのないものの見本とその発端とを、読者にお目にかけるためである。私はこの表現を私の『「イスクラ」編集局への手紙』のなかですでにつかっ(二五)たが、編集局の不満にもかかわらず、それを繰りかえさざるをえない。というのは、それが正しいことは議論の余地がないからである。泥仕合は「下劣な動機」（新『イスクラ』の編集局が推論したように）を前提する、と考えるのはまちがっている。わが国の流刑者や亡命者の集団をいくらかでも知っている革命家ならだれでも、「神経のたかぶり」と、異常な、よどんだ生活条件とを基盤として、ばかげきった非難や疑いや自責や「人身攻撃」などがもちだされ、繰りかえされる泥仕合を、おそらく何十回となく見たことであろう。ものわかった人ならだれひとり、その現われがどんなに下劣であろうと、こういう泥仕合のなかにぜひとも下劣な動機を捜しだそうとはしないであろう。そして、私が引用した同志マルトフの演説の一節のような、ばかげたことや、人身攻撃や、想像上の非道さや、他人の心中への立ちいりや、ひねくれた侮辱感や、名声にしるされた汚点などからなる、このもつれた糸玉は、ほかならぬこの「神経のたかぶり」によってしか説明できないものである。よどんだ生活条件は、われわれのあいだにこういう泥仕合を何百となく生みだしている。そして、自分の病気をあからさまに名ざし、容赦のない診断をくだし、その治療法を見つけだすだけの勇気がないような政党は、尊敬に値しないであろう。

この糸玉からなにか原則的なものをとりわけることができるかぎりでは、どうしても次のような結論に達せざるをえない。すなわち、「選挙は、政治的名声にたいする侮辱とはなんのかかわりもない」ということ、「改選をおこな

い、役員の構成をどのようにでも変更し、自分が全権を委任する合議体を編成替えする大会の権限を否定すること」は、問題に混乱をもちこむことを意味しているということ、また、「古い合議体の一部分の選出が許されるかどうかについての同志マルトフの見解のうちには、政治的概念のこのうえない混同が現われている」ということ（私が大会で言ったように。三三二ページ）(三〇) である。

三人組案はだれが言いだしたものかという問題についての同志マルトフの「個人的な」意見はほぶいて、旧編集局を承認しないことの意義について彼があたえた「政治的」特徴づけに移ろう。……「いま起こったことは、大会の後半をつうじて演じられた闘争の最後の一幕である。」……（そのとおり！　そして、この後半は、マルトフが規約第一条の問題で、同志アキーモフにしっかりと抱きしめられた瞬間から始まった。）……「この改革にあたっては、『活動能力』が問題なのではなく、中央委員会にたいする影響力を獲得するための闘争が問題であることは、だれにとっても秘密ではない。」……（第一に、この場合には、活動能力と中央委員会の構成をめぐる意見の不一致との双方が問題であったことは、だれにとっても秘密ではない。なぜなら、「改革」案は、第二の意見の不一致がまだ問題となるはずもなかったとき、われわれが同志マルトフといっしょに同志パヴローヴィチを第七の編集局員に選出したときに提出されていたからである！　第二に、中央委員会の人的構成が問題となっていたということ、問題は à la fin des fins〔けっきょく〕名簿の相違に、グレーボフ＝トラヴィンスキー＝ポポーフか、グレーボフ＝トロツキー＝ポポーフか、に帰着するものであったということを、われわれは、すでに記録資料にもとづいて示しておいた。）……「編集局の多数派は、中央委員会を編集局の道具に変える気がないことを示した。」……（アキーモフ流の歌が始まる。いつ、どこでも、あらゆる党大会のあらゆる多数派がそれをめざしてたたかう影響力の問題、こうして、中央諸機関内に多数を占めることによってこの影響力を定着させる問題が、編集局の「道具」とか、編集局の「たんなる付属物」──（同じマルトフがすこしあとで言ったように。三三四ページ）──とかいう日和見主義的陰口の分野に移されているのである。）……「そこで、編集局員の数を減らす必要があったのだ（!!）。だから、私はこのような編集局にはいることはできない。」……（この「だから」を注意ぶかく調べてほしい。どうすれば編集局は、中央委員会を付属物なり道具なりに変えることができるであろうか？　それはただ、まさしく編集局が評議会で三票をもって、この優位を悪用する場合だけではないか？　これは明らかでは

ないだろうか？　そしてまた、第三の委員として選ばれた同志マルトフが、いつもあらゆる悪用を妨げ、自分の一票によるだけで、評議会における編集局のあらゆる優位を打破することができたであろうことも、また明らかではないだろうか？　だから、問題はほかならぬ中央委員会の人的構成に帰着するのであり、道具とか付属物とかいったおしゃべりが陰口であることは、すぐわかる。）……「旧編集局の多数派とともに、私は、大会が党内の『戒厳状態』を終わらせ、正常な秩序を党内にもたらすものと思っていた。ところが、実際には、戒厳状態と個々のグループにたいする例外法とはつづけられ、強化さえされている。旧編集局がそのままの構成でつづいている場合にだけ、規約によって編集局にあたえられた権限が党に害をもたらさないことを、われわれは保証することができる。」……

以上は、同志マルトフがはじめて「戒厳状態」という悪名高いスローガンをもちだした箇所の全文を、彼の演説からぬきだしたものである。こんどは、彼にたいする私の答えを見ていただきたい。

……「私は、二つの三人組の計画が個人的なものであるというマルトフの言明は訂正するが、旧編集局を承認しないというわれわれのとった措置が『政治的意義』をもっているという、同じマルトフの主張を訂正しようとは思わない。それどころか、この措置が大きな政治的意義をもっているという点で、同志マルトフに完全に無条件に同意する。ただし、この政治的意義は、マルトフがそれに認めているようなものではない。これはロシア国内の中央委員会にたいする影響力を獲得するための闘争の一幕である、と彼は言った。私はマルトフよりもさらにすすむ。これまで、私的なグループとしての『イスクラ』の全活動は、影響力を獲得するための闘争であったが、いまでは、たんに影響力を獲得するための闘争だけでなく、すでにもっと大きなものが、この影響力を組織的に定着させることが、問題になっているのである。この点で私と同志マルトフとのあいだに、政治的にきわめて深い意見のひらきがあることは、次の点から明らかである。すなわち、彼は、私がこのように中央委員会に影響をあたえようと望んでいることで私を責めているのだが、私のほうでは、自分がこの影響力を組織的に定着させようとつとめてきたし、また現につとめていることを、自分の功績と考えているのである。明らかに、われわれは別々のことばで話しているのだ。もしわれわれの全活動、われわれの全努力が、影響力を完全に獲得し、固めることで終わるのではなく、あいかわらず影響力を獲得するための旧来の闘争で終わるなら、いったいこの活動

と努力はなんのためのものだったのか？　そうだ、同志マルトフはまったく正しい。とられた措置は、疑いもなく、大きな政治的措置であって、今日現われてきた諸潮流の一つがわが党の今後の活動のために選びだされたことを、証拠だてるものである。そして、『党内の戒厳状態』だとか、『個々の人物やグループにたいする例外法』などといったおどし文句は、すこしも私をおどかしはしない。ぐらついた、無定見な分子にたいしては、われわれは『戒厳状態』をしいてもかまわないばかりでなく、そうする義務がある。そして、われわれの党規約全体、いま大会によって承認されたわれわれの中央集権制全体は、政治的あいまいさのあまたの源泉にたいする『戒厳状態』にほかならない。あいまいさにたいしては、まさに特別法が、例外法さえが、必要である。そして、大会のとった措置は、このような法律やこのような方策のために必要な、強固な土台をつくりだして、政治的方向を正しく定めたのである。（二〇）」

私は、大会でおこなった私の演説のこの概要のうち、同志マルトフが彼の『戒厳状態』（一六ページ）のなかではぶくほうがよいと考えた文句に、傍点を打っておいた。この文句が彼の気にいらなかったこと、また彼がそのはっきりした意味を理解したがらなかったことは、驚くにあたらない。

同志マルトフよ、「おどし文句」という表現はなにを意味しているのか？

それは嘲笑を、些細な事柄に大げさな名まえをつけ、簡単な問題を仰々しい空文句で混乱させる人たちにたいする嘲笑を意味している。

それのみが同志マルトフの「神経のたかぶり」の原因となりえたし、また実際になった、些細で簡単な事実は、ひとえに、同志マルトフが大会で中央諸機関の人的構成の問題で敗北したことである。この簡単な事実の政治的な意義は、勝利した党大会の多数派が、党指導部内でも多数を占めることによって、またこの多数派に無定見、ぐらつき、あいまいさと思えたものと、規約の助けをかりてたたかうための組織上の基盤をつくりだすことによって、自分の影響力を定着させた点にあった。＊　このことについて、恐怖の色を目にうかべながら「影響力を獲得するための闘争」をうんぬんし、「戒厳状態」について苦情を言うのは、仰々しい空文句、おどし文句以外のなにものでもなかった。

＊　イスクラ少数派のぐらつき、無定見、あいまいさは、大会ではどういう点に現われたか？　第一には、規約第一条にかんする日和見主義的な空文句に、第二には、大会の後半に急速に強化した〔彼らと〕同志アキーモフおよび同志リーベル

との連合に、第三には、中央機関紙の役員選挙の問題を、俗物根性や、泣きおとし文句、それどころか他人の心中への立ちいりにすら引き下げることをはばからない点に、現われた。そして、大会後には、これらのけっこうな資質はみな、つぼみから花や果実に熟したのである。

同志マルトフはこれには不同意なのではないのか？　彼は、多数派が（一）中央諸機関内に多数を占めることによって、（二）無定見、ぐらつき、あいまいさを麻痺させるために多数派に権力をあたえることによって、たたかいとった影響力を定着させせないような党大会がこの世にあったということ、また総じてそのような党大会が考えられるということを、われわれに示そうとはしないのか？

選挙に先だってわが大会は、次の問題を解決しなければならなかった。すなわち、中央機関紙と中央委員会との票数の三分の一を、党の多数派にあたえるべきか、それとも党の少数派にあたえるべきか、という問題である。六人組と同志マルトフの候補者名簿とは、われわれに三分の一をあたえ、彼の味方に三分の二をあたえることを意味していた。中央機関紙の三人組とわれわれの名簿とは、われわれに三分の二をあたえ、同志マルトフの味方に三分の一をあたえることを意味していた。同志マルトフは、われわれとの協定におうじること、あるいは譲歩することを拒否し、そして大会で一戦をまじえようと手紙でわれわれにいどんできた。ところが、大会で敗北すると、彼は泣きだし、「戒厳状態」に苦情を言いはじめたのである！　さあ、これが泥仕合でないだろうか？　これがインテリゲンツィア的ないくじなさの新しい現われではないだろうか？

これに関連して、このあとに述べた資質について近ごろK・カウツキーがあたえたみごとな社会的＝心理学的な特徴づけを思いださずにはいられない。今日いろいろな国の社会民主党はこれと同じ病気にかかっていることがまれでなく、そこでいっそう経験をつんだ同志たちから正しい診断と正しい治療法とを学ぶことは、われわれにとって非常に有益である。だから、K・カウツキーが若干のインテリゲンツィアについてあたえた以下の特徴づけは、われわれの論題からそれるように見えても、それは外見上のことにすぎないのである。

……「今日ふたたびわれわれの生きいきとした関心をよんでいる……問題は、インテリゲンツィア＊とプロレタリアートとの対立の問題である。私の同僚たち」（カウツキー自身インテリゲンツィアであり、文筆家であり、また編集者である）「のうちには、私がこの対立を認めていることに、ひどく腹をたてる人も多かろう。しかし、この対立は実際に存在しており、この場合にも」（他の

いろいろな場合と同じように）「事実を否定することによってそれを克服しようとするのは、最も不適当な戦術である。この対立は社会的な対立であって、階級にかんすることと同様に、個人にかんすることではない。個々の資本家と同様に、個々のインテリゲンツィアもまた、プロレタリアートの階級闘争に全身を投じることができる。そうする場合、インテリゲンツィアは自分の性格をも変えることができる。これから述べることのなかでさしあたって問題としているのは、いまでもまだ依然として自分の階級のあいだの例外であるこの種のインテリゲンツィアのことではない。これから述べることのなかで言っているインテリゲンツィアとは、はっきりそうでないとことわっていないかぎり、ブルジョア社会の基盤のうえに立っている、インテリゲンツィア階級の典型的な分子である普通のインテリゲンツィアだけをさしている。この階級は、プロレタリアートとある種の対立のうちにある。

だが、この対立は、労資の対立とは違ったものである。インテリゲンツィアは資本家ではない。なるほど彼はブルジョア的な生活水準にあり、零落すまいとすれば、この生活水準を維持することができなければならないが、しかし、彼は、自分の労働生産物の販売に、またしばしば自分の労働力の販売にたよるほかはない。そして、しばしば資本家に搾取されて、社会的屈辱をこうむっている。だから、インテリゲンツィアは、プロレタリアートとはどのような経済的対立のうちにもない。しかし、その生活状態とその労働条件はプロレタリア的なものではなく、そのことから、気分や思考の点である種の対立が生まれてくる。

プロレタリアは、孤立した個人としてはとるにたりないものである。彼は彼の力の全体、彼の進歩の全体、彼の期待と希望の全体を、組織のなかから、その同志たちとの計画的な共同活動のなかから、汲みとる。プロレタリアは、彼が大きく強力な組織体の一部を構成しているときには、自分が大きく強力であると感じる。この組織体は、彼にとって主要なものであって、これにたいして は個人は非常にちっぽけなものである。プロレタリアは、個人的な利益や個人的な名声を得る見込みがなくとも、無名の大衆の一員として、心から献身的にたたかい、彼の全感情と全思考とをみたしている自発的な規律に服しながら、自分が配置されたあらゆる部署で、自分の義務を果たす。

インテリゲンツィアはこれとはまったく違っている。彼はなんらかの力の手段を用いてたたかうのではなく、論証の助けによってたたかう。彼の武器は、彼の個人的

な知識、彼の個人的な能力、彼の個人的な信念である。彼は、自分の個人的資質によってしか声価を得ることができない。したがって自分の個性を発揮する完全な自由は、彼にとって活動に成功をおさめる第一の条件と見える。彼が奉仕する一員として全体に適応するのは、自発的にではなく、必要にせまられてやっとのことでそれに適応するにすぎない。彼は、大衆にとってだけ規律の必要を認め、選ばれた人士にとってはその必要を認めない。そして、もちろん彼は、自分をも、この選ばれた人士の一人に数えているのだ。……

……自分の個性の完成がすべてであり、個人が偉大な社会的目的に従属することはすべて低劣なことであり、軽蔑すべきことであると考える、超人の崇拝を説くニーチェの哲学、この哲学は、インテリゲンツィアのほんとうの世界観である。それはインテリゲンツィアをプロレタリアートの階級闘争に参加するのにまったく不適当なものにしている。

ニーチェとならんで、インテリゲンツィアの感情のうえに築かれた世界観の最も有力な代表者は、おそらくイプセンである。彼の著作（戯曲『民衆の敵』）に出てくる医者のストックマンは、多くの人が考えたように社会主義者ではなく、プロレタリア運動のなかで、一般にあらゆる民衆運動のなかで活動しようとするやいなや、この運動と衝突におちいらざるをえないインテリゲンツィアの型である。なぜなら、あらゆる民主主義運動の基礎**は、あらゆる民主主義運動の基礎と同じように、プロレタリア運動の基礎は、大多数の同志にたいする尊敬だからである。ストックマン流の典型的なインテリゲンツィアは、「結束した多数派」を、打ち倒さなければならない怪物と考えるのである。

……プロレタリア的な感情生活に完全に同化し、すばらしい著作家でありながら、特殊なインテリゲンツィア意識から完全に脱却し、倦まずたゆまず隊列にくわわってすすみ、任命されればどのような部署ででもはたらき、われわれの偉大な事業につねに完全に自己を従属させ、われわれがニーチェで教育されたインテリゲンツィアがいったん少数派になるとよくならべたてる、自分の個性が圧迫されているというめめしい泣き言（weichliches Gewinsel）を軽蔑した、インテリゲンツィアの理想的な模範――社会主義運動が必要とするインテリゲンツィアの理想的な模範は、リープクネヒトであった。マルクスの名もここであげることができる。マルクスは、けっしてでしゃばらなかったし、また一度ならず少数派となったインタナショナルで党規律に服従した点で、模範的であった。***」

* 私は、ドイツ語の Literat, Literatentum という表現をインテリゲンツィアと訳す。この語は、文筆家だけでなく、あらゆる教養ある人々、一般に自由職業人、筋肉労働者と区別した知能労働者（英語でいう brain worker）をふくんでいる。

** わがマルトフ派があらゆる組織問題のなかにもちこんだ混乱にとって非常に特徴的なのは、彼らがアキーモフや場ちがいの民主主義のほうへ転換しながら、それと同時に編集局の民主主義的な選挙に、まえもってすべての人が予定していた大会での選挙に、腹をたてていることである！　そしてこれは、おそらく、諸君の原則なのであろうか、諸君？

*** カール・カウツキー『フランツ・メーリング』、『ノイエ・ツァイト』第二二年、第一巻、九九―一〇一ページ、一九〇三年、第四号。

マルトフとその同僚が、たんに古いサークルが承認されなかったというだけの理由で職務を拒否したこと、戒厳状態やら、「個々のグループにたいする」例外法――それらのグループは、「ユージヌィ・ラボーチー」や「ラボーチエエ・デーロ」が解散させられたときにはマルトフにとってたいせつなものではなかったが、自分の属する合議体が解散させられると、たいせつなものになった――やらについて苦情を言ったこと、これこそまさに、少数派になったインテリゲンツィアの口にするそういうめめしい泣き言にほかならず、それ以上のなにものでもなかった。

マルトフのよい模範にしたがって、わが党大会で（大会後はそれ以上に）、滔々とながれでた「結束した多数派」についてのはてしない苦情や、非難や、ほのめかしや、とがめだてや、陰口や、あてこすり*はみな、少数派となったインテリゲンツィアのそういうめめしい泣き言にほかならなかった。

* 大会議事録、三三七、三三八、三四〇、三五二ページ、その他を見よ。

少数派は、結束した多数派が自分たちの内輪の会合をひらいたといって、ひどく愚痴をこぼしたが、じつは、少数派は、彼らにとって不愉快な次の事実をなにかでおおいかくさなければならなかったのである。それは、少数派が自分たちの内輪の会合に招待した代議員たちは、それへの出席をことわったが、他方、喜んでそれに出席しそうな代議員たち（エゴーロフら、マホフら、ブルケールら）は、大会でそれらの代議員とあれだけの闘争をまじえたあとなので、少数派としても招待するわけにいかなかったという事実である。

少数派は、「日和見主義という無実の非難」にたいしてひどい愚痴をこぼしたが、じつは、次のような不愉快な事実をなにかでおおいかくさなければならなかったのである。それは、結束した少数派をつくって、諸機関内のサークル

根性や、議論のなかの日和見主義や、党の事業における俗物根性や、インテリゲンツィア的無定見といくじなさに両手で飛びついたのは、ほかでもなく、たいていの場合に反イスクラ派の追随者であった日和見主義者であり、部分的にはこれらの反イスクラ派自身でもあった、という事実である。

大会の終りに「結束した多数派」が生まれたというきわめて興味ぶかい政治的事実の説明は、なにに求めるべきか、また、少数派が、どんなに挑戦されても、慎重なうえにも慎重に多数派成立の原因と歴史の問題を回避しているのはなぜかということは、次の節で示そう。しかし、まず大会での討論の分析を終えよう。

中央委員の選挙にあたって、同志マルトフは非常に特徴的な決議案をもちだした（三三六ページ）。その三つの基本的な特徴を、私はよく「三手の詰め」とよんだものであった。その特徴とは次のようなものである。（一）個々の候補者ではなく、中央委員の候補者名簿に投票する。（二）名簿を読みあげたのち、二回の会議をあいだにおく（明らかに、審議するために）。（三）絶対多数が得られなかった場合には、二回目の表決を最後的なものと認める。この決議案は、すばらしく考えぬかれた戦略であった（論敵にたいしても公平でなければならない！）。同志エゴーロフはこれに同意しなかったが（三三七ページ）、しかし、もしブンド派とラボーチェエ・デーロ派との七名が大会から退場しなかったなら、この決議案はきっとマルトフに完全な勝利を保障したであろう。この戦略は、イスクラ少数派が、ブンドやブルケールとだけでなく、同志エゴーロフらや同志マホフらとのあいだにも、「直接の協定」（イスクラ多数派がもっていたような）をもっていなかったし、またもつことができなかったということによってこそ、説明される。

同志マルトフが連盟の大会で、「日和見主義という無実の非難」は、彼がブンドと直接に協定したという推定にもとづくものだった、と泣き言をならべたのを、思いだしていただきたい。繰りかえして言うが、それはおびえたあまり同志マルトフにそう思われたのである。そして、同志エゴーロフが名簿への一括投票に同意しなかったことこそ（同志エゴーロフは、「自分の原則」――それはきっと、民主主義的保障の絶対的意義を評価する点で、彼をゴリドブラットに同調させたあの原則であろう――を「まだ見うしなっていなかった」）、エゴーロフとさえ「直接の協定」を結ぶことは問題となりえなかったという、非常に重要な事実を一目瞭然と示している。しかし、連合ならば、エゴーロフとのあいだにも、またブルケールとのあいだにもあり

えたし、また実際にあった。それは、マルトフ派がわれわれと重大な衝突をしたり、アキーモフとその僚友たちがまだしもましな害悪を選ぶ羽目におちいったりすると、いつでも彼らの支持がマルトフ派に保障されていたという意味での連合である。同志アキーモフと同志リーベルとが、まだしもましな害悪として、つまり、「イスクラ」の目的を達成するのに工合のわるいほうのものとして、(第一条にかんするアキーモフの演説と、マルトフにたいする彼の「期待」を見よ)、中央機関紙の六人組をも、またマルトフの出した中央委員候補者名簿をも、かならず選んだであろうことは、いささかの疑いもなかったし、またいまもない。名簿への一括投票、二回の会議をあいだにおくこと、および決選投票は、まさしく、直接の協定などすこしもなくても、ほとんど機械的な正確さでこうした結果を達成することをめあてとしたものなのである。

だが、わが結束した多数派が依然として結束した多数派であるかぎり、同志マルトフの迂回路は引き延ばし策にすぎなかったし、われわれはそれを拒否せざるをえなかった。少数派は、これにたいする自分たちの苦情を書面で(声明書のなかで、三四一ページ)ぶちまけ、マルトィノフやアキーモフの例にならって、「選挙がおこなわれたときの状況を考えて」投票と中央委員会の選挙とを拒否した。選挙のときの状況が正常でなかったというこの苦情(『戒厳状態』、三一ページを見よ)は、大会後に、党の何百人というおしゃべり屋のまえで相手かまわずにぶちまけられた。だが、この不正常はどういう点にあったのか？　秘密投票にあったのか？　だが、それは、あらかじめ大会の議事規則にきめられていたことであって(第六条。議事録、一一ページ)、それを「偽善」または「不公正」と見るのは滑稽であった。では、いくじないインテリゲンツィアの目に「怪物」と映る、結束した多数派が生まれた点にあったのか？　それともまた、大会のすべての選挙を承認する(三八〇ページ、大会規程、第一八条)という、自分が大会にあたえた約束を破りたいという、この尊敬すべきインテリゲンツィアの正常でない願望にあったのか？

同志ポポーフは、「参加者の半数が投票を拒否するとしても、大会の決定は有効で適法的であると、選挙の当日大会に提出して、この願望を巧妙にほのめかした。もちろん、ビューローは、そう確信している、と答え、同志アキーモフや同志マルトフの事件に注意をうながした。同志マルトフは、ビューローに味方して、同志ポポーフはまちがっている、「大会の諸決定は適法的である」(三四三ページ)と、はっきり言明した。党の面前でのこの言明と、大会後の行

動や、『戒厳状態』のなかにある「大会ですでに始まった党の半数の反逆」（二〇ページ）という文句とをならべてみるとはっきりすることの――おそらくはきわめて正常な――政治的一貫性については、読者が自分で判断していただきたい。同志アキーモフが同志マルトフにかけた期待は、マルトフ自身のつかのまの善良な意図に打ちかったのである。

「お前の勝ちだ」、同志アキーモフよ！

＊　三四二ページ。これは、五人目の評議会員の選挙をさしている。二四票（全部で四四票のうち）が投じられたが、そのうち二票は白紙であった。

＊＊＊

いまでは永遠に悲喜劇的な意味をおびるにいたった「戒厳状態」という悪名高い空文句が、どれほどまでに「おどし文句」であったかを示す役にたつのは、大会の終りに、すなわち選挙のあとの大会の終りに現われた、見たところ些細であるが、実質からいえば非常に重要な、若干の特色である。いま同志マルトフは、この悲喜劇的な「戒厳状態」をふりまわして、彼が考えだしたこのおどし道具は、「多数派」が「少数派」にくわえたある種の異常な迫害、責めたて、しごきを意味していたと、自分自身にも読者にも、大まじめで説いている。われわれはじきに、大会後はどうであったかを見ることにしよう。だが、大会の終りなりとってみたまえ。そうすれば、選挙のあとで、「結束した多数派」は、不幸な、しごかれ、侮辱され、刑場に引かれてゆくマルトフ派を迫害しなかったばかりでなく、反対に、自分のほうから彼らに（リャードフの口をとおして）、議事録委員会の三つの席のうち二つの席を提供した（三五四ページ）ことがおわかりになろう。戦術問題その他の問題にかんする諸決議をとってみたまえ（三五五ページ以下）。そうすれば、核心にふれた、純実務的な討議がすすめられたことがおわかりになろう。その場合、いろいろな決議を提出した同志たちの署名を見れば、怪物的な、結束した「多数派」の代表と、「恥ずかしめられ、侮辱された」「少数派」の味方とが、しばしばいりまじっていることがおわかりになろう（議事録、三五五、三五七、三六三、三六五、三六七ページ）。これは、なんと「仕事からの排除」とか、その他あらゆる「しごき」に似ているではないか？

ただ一つ興味のある、だが残念なことに簡単すぎる実質的な論争は、自由主義者にかんするスタロヴェールの決議をめぐって起こった。その決議は、大会によって採択されたが、それは、この決議の署名（三五七、三五八ページ）

から判断できるように、「多数派」の三名の味方（ブラウン、オルローフ、オーシポフ）がこの決議にもプレハーノフの決議にも賛成し、この両者のあいだには和解させようのない矛盾があることに気がつかなかったためである。ちょっと見ると、両者のあいだには和解させようのない矛盾などはないようである、というのは、プレハーノフの決議は、一般的な原則を確定し、ロシアにおけるブルジョア自由主義派にたいする一定の原則的および戦術的な態度を言いあらわしているが、スタロヴェールの決議は、「自由主義的または自由主義的＝民主主義的諸潮流」との「一時的な協定」が許される具体的な諸条件を規定しようと試みているのだからである。二つの決議の主題は別個のものである。だが、スタロヴェールの決議は、ほかならぬ政治的あいまいさという欠陥をもっていて、そのために、とるにたらない、つまらないものである。この決議は、ロシアの自由主義の階級的内容を規定していない。それは、この階級的内容を表明する特定の政治的諸潮流を示していない。それは、これらの特定の潮流にかんするプロレタリアートの宣伝扇動の基本的諸任務をプロレタリアートに説明していない。それは（そのあいまいさのために）、学生運動と『オスヴォボジデーニエ』というような、違った事柄をごっちゃにしている。それは、「一時的な協定」の許される三つの具体的な条件を、あまりにもこまごまと、決疑論的に、指示している。政治上のあいまいさは、この場合にも、他の多くの場合と同じように、決疑論にみちびいている。一般的な原則の欠如や、「条件」を数えあげようとする試みは、これらの条件をこまごまと、厳密に言えばまちがって指示する結果にみちびいている。じっさい、スタロヴェールのこの三つの条件を調べてみたまえ。（一）「自由主義的または自由主義的＝民主主義的諸潮流は、専制政府とたたかうにあたって、断固としてロシア社会民主党に味方することを、はっきり、明確に声明」しなければならない、と。自由主義的諸潮流と自由主義的＝民主主義的諸潮流との違いはどういう点にあるのか？　決議は、この問いに答える材料をなにもあたえていない。自由主義的諸潮流は、ブルジョアジーのなかで、政治的に最も進歩性の少ない層の立場を表現し、自由主義的＝民主主義的諸潮流は、ブルジョアジーと小ブルジョアジーの最も進歩的な層の立場を表現している、という点にあるのではないのか？　もしそうなら、はたして同志スタロヴェールは、ブルジョアジーの最も進歩性の少ない（だが、やはり進歩的な、というのは、もしそうでなければ自由主義について語るわけにはいかないであろうから）層が「断固として社会民主党に味方する」ことが可能だと、考えているのであろうか？？　これは

ノンセンスであって、たとえこの潮流の代表者たちが「このことをはっきり、明確に声明した」としてさえ（まったくありえない仮定だが）、われわれ、プロレタリアートの党は、彼らの声明を信じない義務があろう。自由主義者であることと、断固として社会民主党に味方することとは、両立しない事柄である。

さらに、「自由主義的または自由主義的＝民主主義的諸潮流」が、専制とたたかうにあたって断固として社会革命党に味方する、とはっきり、明確に声明する場合を仮定してみよう。この仮定は、同志スタロヴェールの仮定よりもはるかにありそうなことである（社会革命党の潮流の本質がブルジョア民主主義的なものなので）。彼の決議の趣旨からすると、この決議があいまいで決疑論的であるために、そういう場合には、そのような自由主義者との一時的な協定は許しえないことになる。ところが、同志スタロヴェールの決議から不可避的に生まれてくるこの結論は、まったくまちがった命題にみちびいてゆく。一時的な協定は、社会革命党とのあいだにも許されるし（社会革命党にかんする大会の決議を見よ）、したがって、社会革命党に味方するような自由主義者とのあいだにも許されるのである。

第二の条件、すなわち、もしこれらの潮流が「その綱領のなかに、労働者階級や一般に民主主義派の利益とあいいれない要求、あるいは彼らの意識をくもらせる要求をかかげない」ならば、という条件。ここにもまた、同じ誤りがある。労働者階級の利益とあいいれない要求をその綱領のなかにかかげず、彼ら（プロレタリアート）の意識をくもらせないような自由主義的＝民主主義的諸潮流はかつてなかったし、またありえない。わが国の自由主義的＝民主主義的諸潮流の最も民主主義的な分派の一つである社会革命党の分派でさえ、あらゆる自由主義的綱領と同じように混乱している自分の綱領のなかに、労働者階級の利益とあいいれず、その意識をくもらせる要求をかかげている。この事実から結論しなければならないのは、「ブルジョアジーの解放運動の限界性と不十分さとを暴露する」必要があるということであって、一時的な協定が許しえないということではけっしてない。

最後に、同志スタロヴェールの第三の「条件」（自由主義的民主主義者は、普通・平等・秘密・直接の選挙権をその闘争のスローガンとせよという）もまた、そこで提起されているような一般的なかたちでは正しくない。制限選挙制の憲法や、一般に「切りちぢめ」憲法のスローガンをかかげている自由主義的＝民主主義的諸潮流との一時的で、部分的な協定は、どんな場合にも許しえない、と宣言するのは、愚かなことであろう。実質上、「オスヴォボジデー

ニエ派」の諸君の「潮流」はまさにこれにあたるであろうが、しかし、たとえ最も臆病な自由主義者とであろうと、「一時的な協定」を結ぶことをまえもって禁止して、自分の手を縛ることは、マルクス主義の原則と一致しない政治的な近視であろう。

総括。同志マルトフも同志アクセリロードも署名している同志スタロヴェールの決議は、まちがっている。だから、第三回大会がそれを廃棄するのが合理的な行動であろう。この決議は、理論的および戦術的立場が政治的にあいまいだという欠陥をもっており、この決議が要求している実践的「諸条件」は決疑論的という欠陥をもっている。決議は次の二つの問題を混同している。(一)あらゆる自由主義的＝民主主義的潮流の「反革命的＝反プロレタリア的」諸特徴の暴露、およびこれらの特徴とたたかう義務、(二)これらの潮流のうちのどれかと一時的で部分的な協定を結ぶ条件。それは、必要なもの(自由主義の階級的内容の分析)をあたえずに、必要でないもの(「条件」の指示)をあたえている。きまった交渉相手——こういうありうべき協定の主体——さえ現に存在しないのに、一時的な協定の具体的な「条件」を党大会でつくりあげるのは、総じて愚かなことである。また、たとえこのような「主体」が現にあるとしても、一時的な協定の「条件」を規定する仕事は、大会が社会革命党の諸君の「潮流」にかんしてやったように(同志アクセリロードの決議の末文にたいするプレハーノフの修正を見よ。議事録、三六二ページと一五ページ)[202]、党の中央諸機関にまかせるほうが百倍も合理的であろう。

プレハーノフの決議にたいする「少数派」の異議については、同志マルトフのただ一つの論拠はこうであった。プレハーノフの決議は、「ある文筆家を暴露しなければならない、という貧弱な結論で終わっている。これは、『斧で蝿に打ち』かかることではなかろうか？」(三五八ページ)と。この論拠——そこでは、思想の欠如が「貧弱な結論」という辛辣なことばでおおいかくされている——は、仰々しい空文句の新しい見本をわれわれに提供している。第一に、プレハーノフの決議は、「ブルジョアジーの解放運動の限界性と不十分さを、どこであろうとそれが現われたいたるところで、プロレタリアートの前に暴露する」と言っている。だから、「ストルーヴェひとりに、一自由主義者に、すべての注意を向けるべきだというのだ」という同志マルトフの主張(連盟大会での。議事録、八八ページ)は、まったくくだらないものである。第二に、ロシアの自由主義者との一時的な協定が可能かどうかということが問題となっているときに、ストルーヴェ氏を「蝿」にたとえるのは、初歩的な政治上の自明の真理を、辛辣なことばの犠牲

にしてしまうことを、意味する。そうではない。ストルーヴェ氏は蝿ではなく、政治的に一かどの人物である。そして、彼が一かどの人物であるのは、彼個人が非常な大人物であるからではない。政治的に一かどの人物としての意義を彼にあたえているのは、彼の立場、すなわち、非合法の世界におけるロシア自由主義派の唯一の代表者、いくらかでも行動能力のある、組織された自由主義派の唯一の代表者という立場である。だから、ロシアの自由主義者や、彼らにたいするわが党の態度について述べながら、ほかならぬストルーヴェ氏を、ほかならぬ『オスヴォボジデーニエ』を考えにいれないということは、しゃべりはするがなにも言わないというものである。それとも、もしかしたら同志マルトフは、現在『オスヴォボジデーニエ』の潮流と多少ともくらべることができるような、ロシアの「自由主義的または自由主義的＝民主主義的潮流」を、ただの一つでもわれわれに示そうとするのではないだろうか？　そういう試みを拝見するのは、興味のあることであろう！*

* 連盟の大会で同志マルトフは、同志プレハーノフの決議に反対する論拠として、さらに次のものをあげた。「これに反対する主要な理由、つまり、この決議の主要な欠点は、専制とたたかうにあたって自由主義的＝民主主義的分子との同盟を避けないことがわれわれの義務であるということを、まったく無視している点にある。同志レーニンはこういう傾向をマルトィノフ的傾向とよぶであろう。新しい『イスクラ』にはこの傾向がすでに現われている。」（八八ページ）

この一節は、その内容の豊富な点で、まれにみる「珠玉」のコレクションである。(一) 自由主義者との同盟ということばは、非常な混乱である。同志マルトフよ、だれも同盟について論じたのではなく、一時的または部分的な協定について論じたにすぎない。これは大きな違いである。(二) プレハーノフは、決議のなかでは、ありそうもない「同盟」を無視して、一般的に「支持」についてしか述べていないが、それは彼の決議の欠点ではなく、長所である。(三) 同志マルトフは、総じて「マルトィノフ的傾向」がどういう特徴をもっているかを、われわれに説明する労をとらないのか？　彼は、この傾向と日和見主義との関係をわれわれに述べてはくれないのか？　彼は、この傾向と規約第一条との関係を調べてみないのか？　(四) 私は、「マルトィノフ的傾向」が「新しい」『イスクラ』のどこに現われたのかを、同志マルトフから聞きたくてたまらない。同志マルトフよ、どうぞ待つ身のつらさからはやく私を救ってくれたまえ！

「ストルーヴェという名は、労働者にとってはなんの意味もない」と言って、同志コストローフは同志マルトフを支持した。こうなるともう、まるで——同志コストローフと同志マルトフが立腹しないように願いたいが——アキーモフ的な論拠である。[一〇四] こうなるともう、生格におかれているプロレタリアートのたぐいである。

「ストルーヴェという名」（および、同志プレハーノフの決議のなかに、ストルーヴェ氏の名とならんであげられた『オスヴォボジデーニエ』という名）が、「なんの意味もない」のは、どんな労働者にとってのことだろうか？　ロシアの「自由主義的および自由主義的＝民主主義的諸潮流」をごく少ししか知らないか、あるいはまったく知らない労働者にとってそうなのである。ところで、おたずねするが、このような労働者にたいするわが党大会の態度は、どうでなければならないか？　ロシアにおけるただ一つの特定の自由主義的潮流をこれらの労働者に知らせることを、党員に委任することとなのか？　それとも、労働者は元来政治にあまり通じていないからという理由で、労働者のあまり知らない名は黙殺することとなのか？　もし同志コストローフが、同志アキーモフのうしろについて第一歩を踏みだしたものの、さらに彼のうしろについて第二歩を踏みだすことを望まないなら、彼は、きっとこの問題に第一の趣旨の解答をくだすであろう。だが、第一の趣旨の解答をくだしたなら、彼は、自分の論拠がどんなにいわれのないものであったかに気がつくであろう。いずれにしても、プレハーノフの決議のなかの「ストルーヴェ」ということばや『オスヴォボジデーニエ』ということばは、スタロヴェールの決議のなかの「自由主義的および自由主義的＝民主主義的潮流」ということばよりも何倍も多くのものを、労働者にあたえることができるのである。

現在ロシアの労働者は、わが国の自由主義派のいくらかでも率直な政治的傾向を、『オスヴォボジデーニエ』による以外には実際に知ることができない。合法的な自由主義的文献は、ほかならぬその不明瞭さのために、ここでは役に立たない。そして、きたるべき革命の瞬間にあたって、オスヴォボジデーニエ派の諸君がかならずこの変革の民主主義的な性格を切りちぢめようと試みるのを、プロレタリアートが、ほんものの武器の批判によって麻痺させることができるように、われわれはできるだけ熱心に（また、できるだけ広範な労働者大衆の前で）、オスヴォボジデーニエ派にわれわれの批判の武器をむけなければならない。

私がまえのほうで述べた、反政府運動と革命運動をわれわれが「支持する」問題にかんする同志エゴーロフの「当惑」のほかには、諸決議にかんする討論は興味のある材料をあたえなかった。それにほとんど討論はなかったのである。

大会の諸決定は全党員にたいして拘束力をもつ、という議長の簡単な注意で、大会は終わった。

（n）大会における闘争の概観。党の革命的翼と日和見主義的翼

大会での討論と表決の分析を終わったので、次にわれわれは、大会の資料にもとづいて次の問題に答えるために、総決算をしなければならない。われわれが選挙のときに見た最終的な多数派と少数派、ある期間わが党内の基本的な区分となる運命を負わされたこの多数派と少数派とは、どのような分子、どのようなグループ、どのような色合いからできあがったのか？　大会の議事録が非常に豊富に提供している原則上、理論上、戦術上のいろいろな色合いにかんする資料全体の総決算をすることが必要である。この資料はあまりにも断片的でばらばらなので、全体的な「総括」をすることとなしには、つまり、大会全体と表決のさいのあらゆる主要なグループ分けとの概観を示すことなしには、あれこれの個々のグループ分けは、ちょっと見たところ、偶然に生じたもののように思われる。とくに大会議事録を自主的に、そして全面的に研究する労をとらない者にとってはそうである（ところで、こういう労をとった読者はたくさんいるだろうか？）。

イギリスの議会報告を読むと、division[108]——区分——という特徴的なことばによくぶつかる。議院は、これこれの多数派と少数派に「区分された」と、ある問題の表決について言われる。大会で審議されたいろいろな問題の表決についてのわが社会民主党議院の「区分」は、党内闘争について、完全で正確な点でかけがえのない、この種のものとして唯一の一覧図をあたえている。この議院のいろいろな色合いやグループの一覧図をあたえている。この一覧図を一目瞭然とさせるために、脈絡のない、断片的な、個々ばらばらの、おびただしい大小の事実ではなくて真の一覧図を得るために、また個々の表決にかんするはてしない無意味な論争（だれがだれに賛成投票し、だれがだれを支持したかといった）を終わらせるために、私は、わが大会の「区分」の基本的な型の全部を、図表の形で描いてみることにきめた。こうしたやり方は、きっと、きわめて多くの人に奇妙に思われるであろうが、しかし、私は、これ以外に、真に概括と総決算をあたえる、できるだけ完全で正確な叙述の方法を見いだすことができるかどうか、疑わしく思う。あれこれの代議員がある提案に賛成の投票をしたか、反対の投票をしたかということは、記名投票の場合には絶対的に正確に確定することができるし、また、若干の重要な無記名投票につい

ては、議事録にもとづいて、高い確度をもって、かなり真実に近いところまでそれを確かめることができる。そのさい、記名投票の全部と、いくらかでも重要な（たとえば、討論のくわしさや激しさから判断して）問題にふれた無記名投票の全部とを考慮にいれれば、現存の資料にもとづいて達成しうるかぎりの最大の客観性をもった、わが党内闘争の描写が得られるであろう。そのさい、われわれは、写真ふうの描写ではなく、すなわち、それぞれの表決を別々に描くのではなく、一枚の一覧図をあたえるように、すなわち、問題を混乱させることにしかならないような比較的重要でない例外や変種は無視して、表決の主要な型を全部あげるように、努力しよう。いずれにせよ、だれでも議事録にもとづいてわれわれの図の一筆一筆を吟味することができるであろうし、それをどれでも好きな個々の表決によって補うことができるであろう。一言でいえば、個々の場合についての判断や疑問や指摘によってだけでなく、同じ資料にもとづいて別の一覧図を描くことによっても、これを批判することができるであろう。

表決にくわわった各代議員を図表に記載するにあたって、われわれは、大会の討論の経過全体をつうじてわれわれがくわしくあとづけてきた四つの基本的なグループ、すなわち、（一）イスクラ多数派、（二）イスクラ少数派、（三）「中間派」、（四）反イスクラ派を、それぞれ別の線影で示そう。これらのグループのあいだの原則的な色合いの相違を、われわれはたくさんの例で見てきた。そして、もし、「イスクラ」組織と「イスクラ」の潮流とをジグザグの愛好者たちにあまりにも思いださせる諸グループの名称が、だれかの気にいらないなら、われわれは彼らに、問題は名称にあるのではないことを指摘しておこう。われわれが大会のすべての討論にわたっていろいろな色合いをあとづけてきたいまでは、すでに確定され、つかいなれている党内での呼び名（だれかには耳ざわりな）を、諸グループのあいだのいろいろな色合いの本質の特徴づけとおきかえることは容易である。そのようにおきかえれば、この四つのグループにたいして次のような名称が得られるであろう。（一）首尾一貫した革命的社会民主主義者、（二）小日和見主義者、（三）中日和見主義者、（四）大日和見主義者（わがロシアの尺度で測れば大きい）。「イスクラ派」というのは一「サークル」の総称で、一潮流の総称ではないと、しばらくまえから自分にも他人にも請け合いはじめた人たちには、これらの名称のほうがまだしもショックをあたえることが少ないものと、信じる。

次にのせた図表にはどういう型の表決が「写しとられている」かについての、くわしい説明に移ろう（図表、「大

会における闘争の概観図」を見よ）
　表決の第一の型（A）は、「中間派」がイスクラ派に同調して、反イスクラ派あるいはその一部に反対したもろもろの場合をふくんでいる。こうした場合にはいるのは、綱領全体にかんする表決（同志アキーモフだけが棄権し、他は賛成）、連合制に反対する原則的な決議の表決（五名のブンド派以外は全部賛成）、ブンドの規約第二条にかんする表決（五名のブンド派はわれわれに反対し、五票、すなわち、マルトィノフ、アキーモフ、ブルケール、および二票をもったマホフは棄権し、他はわれわれに同調）である。図表のAに示されているのは、この表決である。さらに、『イスクラ』を党の中央機関紙として承認する問題にかんする三回の表決も、これと同じ型のものであった。編集局（五票）は棄権し、二名（アキーモフとブルケール）は三回の表決の全部にわたって反対し、そのほかに、『イスクラ』を承認する理由文の表決のさいには、五名のブンド派と同志マルトィノフとが棄権した。*

* なぜ、ほかならぬブンドの規約第二条にかんする表決が、図表の例解にとりあげられたのか？　それは、『イスクラ』の承認にかんする表決はこれほど完全でなく、また綱領と連合制とにかんする表決は、これほど具体的に規定されていない政治的決定にかんするものだからである。一般的に言って、一連の同種の表決のうちからあれなりこれなりのものを選びだすことは、一覧図の基本的な特徴をすこしも変えるものではないであろう。このことは、おのおのの場合に応じて変更をくわえてみれば、だれにでもたやすく納得できるであろう。

　いま検討している型の表決は、大会の「中間派」がどういう場合にイスクラ派に同調したか、という非常に興味のある重要な問題にたいする回答をあたえている。それは、わずかな例外を除いて反イスクラ派もわれわれに同調した場合（綱領の採択、理由文とは無関係に『イスクラ』を承認する件）か、あるいは、直接にはまだ一定の政治的な立場をとる義務を負わせないような声明が問題になっていた場合（「イスクラ」の組織活動を承認することは、まだ個個のグループにかんして「イスクラ」の組織政策を実際に実行する義務を負わせるものではない。連合制を拒否しても、それはまだ、同志マホフの例で見たように、連合制の具体的計画の問題について棄権することを妨げるものではない）か、どちらかである。われわれはすでにまえのほうで大会におけるグループ分け一般の意義を述べたさいに、この問題が公式の『イスクラ』の公式の叙述のなかでどれほどまちがって説明されているかを見た。公式の『イスクラ』は（同志マルトフの口をかりて）、反イスクラ派もわれわれに同調したような場合を引合いにだすことによって、

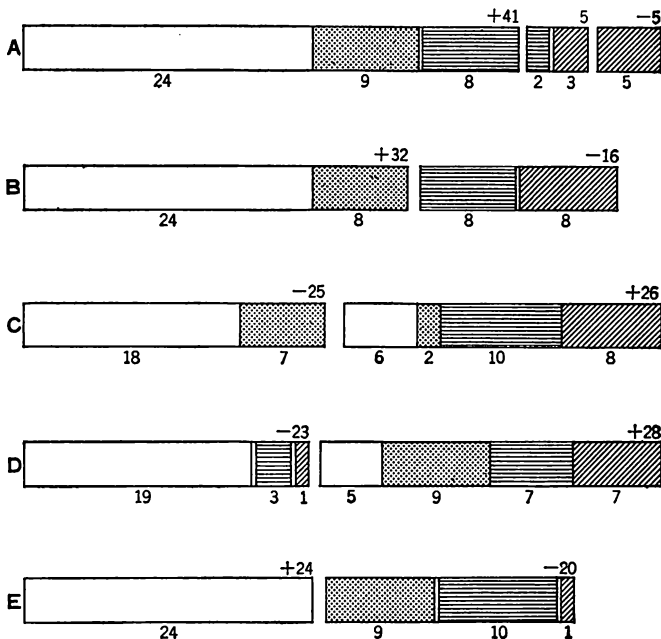
大会における闘争の概観図

A　+41　5　−5
24　9　8　2　3　5

B　+32　−16
24　8　8　8

C　−25　+26
18　7　6　2　10　8

D　−23　+28
19　3　1　5　9　7　7

E　+24　−20
24　9　10　1

＋と－がついている数字は，ある問題について投ぜられた賛成票または反対票の総数を示す。条帯の下方の数字は，四つのグループのおのおのの票の数を示す。AからEまでの型にどういう種類の表決がふくまれるかは，本文に説明がある。

イスクラ派と「中間派」との、首尾一貫した革命的社会民主主義者と日和見主義者との相違を、抹消し、ぼかしているのである！　ドイツやフランスの社会民主党内の日和見主義者のなかの最「右翼」でさえも、綱領を全体として承認するというような議題には反対投票していないのである。

第二の型（B）の表決は、首尾一貫したイスクラ派と首尾一貫しないイスクラ派とが同調して、反イスクラ派全員と「中間派」全員とに反対したもろもろの場合をふくんでいる。それは、主として、イスクラ的政策の具体的な特定の計画を実行することが問題になっていた場合、また『イスクラ』を口さきだけでなく、実際に承認することが問題になっていた場合であった。これにはいるのは、組織委員会事件、*党内におけるブンドの地位の問題を第一順位におく件、「ユージヌィ・ラボーチー」グループの解散、農業綱領にかんする二回の表決、最後に、六番目として、在外ロシア社会民主主義者同盟（『ラボーチェエ・デーロ』）に反対する表決、すなわち、連盟を党の唯一の在外組織として承認する件である。ここでは、党成立以前の古いサークル根性や、日和見主義的な組織または小グループの利害や、マルクス主義の狭い理解が、革命的社会民主主義の原則的に堅固な、首尾一貫した政策とたたかった。イスクラ少数派は、まだ多くの場合に、多くのきわめて重要な（組織委員会や、「ユージヌィ・ラボーチー」や、『ラボーチェエ・デーロ』の見地からみて）表決のさいに、われわれに同調した、……つまり、問題が彼ら自身のサークル根性、彼ら自身の一貫性の欠如にふれないかぎりは。ここに検討している型の「区分」は、われわれの諸原則の実行にかんする一連の問題で中間派が反イスクラ派に同調したこと、彼らがわれわれよりもはるかに反イスクラ派のほうに近かったこと、実際には彼らは社会民主党の革命的翼よりもはるかに日和見主義的翼のほうに傾いていたことを、一目瞭然と示している。イスクラ派であることを恥じていた名だけの「イスクラ派」は、その正体を暴露した。そして、避けられない闘争は少なからぬ激昂を生み、この激昂は、最も思慮の浅い、最も感情で動きやすい人たちの目をさえぎって、彼らがこの闘争に現われた原則上の色合いの意義を見るのを妨げた。だが、闘争の興奮がいくらか醒め、議事録が一連の激しい戦闘の客観的な要約として残っている現在、マホフらやエゴーロフらと、アキーモフらやリーベルらとの連合が偶然ではなかったし、また偶然ではありえなかったことを見ずにいられるのは、わざと目を閉じる人たちだけである。マルトフとアクセリロードは、議事録の全面的で正確な分析を避けるか、でなければ遺憾の意を極力表明することで、大会での自分の行動をあとからつくりかえよう

と試みるほかに、やりようがない。まるで、遺憾の意を表明すれば、見解の相違や政策の相違を取りのぞくことができるとでもいうようだ！　まるで、マルトフやアクセリロードが現在アキーモフ、ブルケール、マルトィノフと結んでいる同盟が、第二回大会で再建されたわが党に、この大会のほとんど全期間をつうじてイスクラ派が反イスクラ派にたいしておこなった闘争を忘れさせることができるとでもいうようだ。

* 図表のBに描かれているのが、ほかならぬこの表決である。すなわち、イスクラ派は三二票を獲得し、ブンド派の決議案には一六票が賛成した。この型の表決には記名投票が一つもないことを、注意しておこう。代議員がどういうふうに分かれていたかということは、二種類の資料が高い確度で示しているだけである。すなわち、（一）討論ではイスクラ派の両グループの演説者が賛成意見を述べ、反イスクラ派と中間派との演説者が反対意見を述べた。（二）「賛成」投票の数は、いつも三三という数に非常に近かった。さらに、大会での討論を分析するさいにわれわれが指摘しておいたように、表決以外にもなお、「中間派」が反イスクラ派（日和見主義者）と同調してわれわれに反対した場合がたくさんあったことも、忘れてはならない。そういう場合にはいるのは、民主主義的諸要求の絶対的価値の問題、反政府分子を支持する問題、中央集権主義の制限の問題、などである。

大会における第三の型の表決は、図表の五つの部分のうちのあとの三つ（すなわちC、D、E）をふくんでいるが、その特徴は、イスクラ派の小部分が分離して、反イスクラ派の側に移り、そのため反イスクラ派が勝利した（彼らが大会にとどまっていたあいだは）ことである。イスクラ少数派と反イスクラ派のこの有名な連合のことを述べただけで、マルトフは大会でヒステリックな手紙を書くにいたったのだが、この連合の発展を完全な正確さであとづけるために、われわれはこの種の記名投票の三つの基本的な型を全部あげておく。*C*——これは、言語の同権の問題についての表決である（この議題にかんする三回の記名投票のうち、最も完全なものである最後の表決をとった）。反イスクラ派の全員と中間派の全員は、われわれに反対して密集陣をつくり、他方、イスクラ派からは、多数派の一部と少数派の一部とが分離した。イスクラ派のどういう分子が大会の日和見主義的な「右翼」と最終的で永続的な連合を結びかねないかということは、まだ現われていない。次に、*D*型の表決がある。——これは規約第一条にかんするものである（二回の表決のうち、はっきりしたほう、すなわち、棄権者のなかったときをとった）。連合は、まえの場合よりもくっきりと現われ、より永続的な形をとる。* すなわち、イスクラ少数派は、すでに全員、アキーモフとリーベルに味方する。イスクラ多数派のなかからは、ほんの少数の者

が彼らに味方し、その埋めあわせに「中間派」の三名と反イスクラ派の一名がわれわれの味方に移ってくる。どの分子が、あるときは一方に、あるときは他方に、偶然に、また一時的に移っていったか、またどの分子が、とめようのない勢いでアキーモフらとの永続的な連合にむかってすすんだかを納得するには、図表を一目見れば十分である。最後の表決（E――中央機関紙、中央委員会および党評議会の選挙）は、まさに多数派と少数派への最後的な分離をあらわしているが、この表決では、イスクラ少数派が「中間派」全員、および反イスクラ派の残留者と完全に融合したことが、はっきりわかる。八名の反イスクラ派のうち、このときまで大会に残っていたのは、同志ブルケール一人であった（彼は、自分のおかした誤りについてすでに同志アキーモフから説明をうけて、マルトフ派のなかに彼が当然占めるべき地位を占めていた）。極「右」の日和見主義者である七人組の脱退は、選挙の結果がマルトフに不利になるように決定した。**

* あらゆる点から判断して、規約にかんする他の四回の表決も、これと同じ型のものであった。〔議事録〕二七八ページ――われわれの二二票にたいして、フォミーンに賛成の二七票。二七九ページ――われわれに賛成の二四票にたいして、マルトフに賛成の二六票。二八〇ページ――私に賛成の二三票にたいして反対の二七票。同所――われわれに賛成の二三票にたいして、マルトフに賛成の二四票。これらは、すでに私がまえのほうでふれておいた中央諸機関の補充の問題についての表決である。記名投票はなかった（一回あったが、その記録はなくなっている）。明らかに、ブンド派（全部あるいは一部）がマルトフを救った。この型の表決にかんするマルトフのまちがった主張（連盟で述べた）は、さきに訂正しておいた。

** 第二回大会から脱退した七名の日和見主義者とは、五名のブンド派（ブンドは、第二回大会で連合制の原則が否決されたので、脱党した）と「ラボーチェエ・デーロ派」の二名、――同志マルトィノフと同志アキーモフ――である。このあとにあげた二人は、イスクラ派の「連盟」だけが党の在外組織として承認されたので、すなわち、ラボーチェエ・デーロ派の在外「ロシア社会民主主義者同盟」が解散させられたので、大会から脱退した。〔一九〇七年版への原著者注〕

そこで、次にわれわれは、すべての型の表決にかんする客観的な資料にもとづいて、大会の総決算をおこなおう。

わが大会における多数派は「偶然的な」ものであるということが、大いに論じられた。同志マルトフは、彼の『ふたたび少数派として』のなかで、こういう論拠ただ一つで自分をなぐさめている。図表から明らかにわかるように、多数派は一つの意味では偶然的なものとよぶことができる。だが、そうよべるのは、ただ一つの意味においてである。

すなわち、七名の最も日和見主義的な「右翼」分子が脱退したのは偶然であった、という意味においてである。この脱退が偶然であるかぎりで、そのかぎりでは（それ以上ではない）わが多数派もまた偶然である。この七名は、だれの味方をしたであろうか、また味方するにちがいなかったかは、長たらしい議論をするよりも、図表を一目見たほうがよくわかる。ところで、問題は、この七名の脱退をどれほど真の偶然と見ることができるのか、ということである。これは、多数派の「偶然性」をこのんでうんぬんする人々が、自問したがらない質問である。これは、彼らには不愉快な質問である。脱退した者がわが党の左翼ではなくて右翼の最も熱烈な代表者たちであったのは、偶然であろうか？　脱退したのが日和見主義者で、首尾一貫した革命的社会民主主義者でなかったのは、偶然であろうか？　この「偶然な」脱退は、大会の全期間をつうじておこなわれ、われわれの図表のなかにあんなに一目瞭然と現われている、日和見主義的翼にたいする闘争と、いくらか関連があるのではあるまいか？

＊ われわれがのちほど見るように、大会後に、同志アキーモフも、また同志アキーモフに最も近い親縁関係にあるヴォローネジ委員会も、「少数派」にたいする自分たちの共感を率直に表明した。

多数派は偶然的なものであるというおしゃべりがどんな事実をつつみかくすためのものかを理解するためには、少数派には不愉快なこれらの質問を提出するだけで十分である。それは、少数派を構成したのは、日和見主義に最も傾いていたわが党の党員であったという、争いえない事実である。少数派を構成したのは、理論的に最もぐらついた、原則の点で最も堅固でない党内分子であった。少数派はほかならぬ党の右翼から形成された。多数派と少数派への分離は、社会民主党が革命的社会民主党と日和見主義的社会民主党へ、山岳党とジロンド党へ区分されたことの直接の、不可避的な継続である。この区分は、きのうはじめてロシアの労働者党のなかにだけ現われたものではなく、またたしかに、あすになれば消えさるものでもない。

この事実は、不一致の原因とその推移とをはっきりさせるうえで、根本的な意義をもっている。大会での闘争と、この闘争のうちに現われた原則上の種々な色合いとを否定し、あるいはぼかすことで、この事実を回避しようとするのは、——最も完全な知的および政治的貧困証明書を自分に交付することである。ところで、この事実を論駁するためには、第一に、わが党大会での表決と「区分」との概観図は私が示したようなものではなかったということを、示さなければならない。第二に、ロシアでイスクラ派という

名をとった最も首尾一貫した革命的社会民主主義者は、大会がそれをめぐって「区分された」問題のすべてについて本質上誤っていたということを、示さなければならない。* 諸君、それを示すよう、試みにやってみたまえ！

* 同志マルトフのための注。もし同志マルトフが、イスクラ派とはある潮流の味方をさすことばであって、あるサークルの成員をさすことばではないことを、いまでは忘れてしまっているのなら、われわれは、この問題について同志トロツキーが同志アキーモフにあたえた説明を、大会議事録で一読されるよう、お勧めする。大会では三つのサークルがイスクラ派のサークル（党にたいして）であった。すなわち、「労働解放」団、『イスクラ』編集局、「イスクラ」組織がそれである。この三つのサークルのうちの二つは、分別があったので、自分で解散した。第三のものは、そうするだけの党精神に欠けていることを示し、そこで、大会によって解散させられた。イスクラ派の最も広範なサークルであった「イスクラ」組織（そのなかには、編集局も「労働解放」団もふくまれていた）は、大会では全部で一六名にすぎず、そのうち、議決権をもっていた者は、一一名にすぎなかった。イスクラ派のどの「サークル」にも属さないが、その潮流からみてイスクラ派であった者は、私の計算では、大会に二七名いて、三三票をもっていた。つまり、イスクラ派のうちで、イスクラ派のいろいろなサークルに属していた者は、半数以下であった。

少数派が党内の最も日和見主義的な、最もぐらついた、最も堅固でない分子からなっていた事実は、とりわけ、事情をあまりよく知らないか、問題をあまり深く考えたことのない人たちが多数派に示している多くの疑惑や異論に一つの回答をあたえている。仲間割れを同志マルトフや同志アクセリロードの小さな誤りで説明するのは、くだらないではないか、とわれわれに言う者がある。諸君、たしかに、同志マルトフの誤りは大きなものではなかった（そして、私はすでに大会で、闘争のただなかに、このことを指摘した）。だが、多くの誤りをおかし、多くの問題で日和見主義への傾斜と原則上の堅固さの欠如とを示した代議員たちが、同志マルトフを自分たちの味方に引きずりこんだおかげで、この小さな誤りから、多くの害毒が生じるおそれがあった（また実際に生じた）。同志マルトフと同志アクセリロードがぐらつきを示したことは、個人的な、重要でない事実であったが、最もぐらついた分子の全員から、すなわち、「イスクラ」の潮流を全然承認せず、それと公然とたたかってきたか、あるいは、口さきでそれを承認しながら、実際にはいつも反イスクラ派と同調してきたような人たちの全員から、非常に有力な少数派が形成されたことは、個人的な事実でなく、党的な事実であり、まんざら重要でないとは言えない事実であった。

旧『イスクラ』編集局という小サークルのなかに頑迷なサークル根性や革命的俗物根性が支配しているということ

で仲間割れを説明するのは滑稽ではないだろうか？　いや、滑稽ではない。なぜなら、大会の全期間をつうじて、あらゆる種類のサークル根性を守ってたたかったわが党内のすべての人、総じて革命的俗物根性を脱することのできなかったすべての人、俗物根性、サークル根性の害悪が「歴史的」なものであると言いたてて、この害悪を正当化し、維持しようとしたすべての人が、この個人的なサークル根性を支持して立ちあがったからである。『イスクラ』編集局という一つの小サークルのなかで狭い、サークル的な利害が党精神に打ちかったというだけなら、おそらく、偶然なことと考えてもよいかもしれない。だが、このサークル根性を極力支持するために、有名なヴォローネジ委員会と悪名高いペテルブルグの「労働者組織」(108)との「歴史的継承性」を前者におとらず（それ以上ではないにしても）重視している同志アキーモフらや同志ブルケールらが立ちあがり、「ラボーチェエ・デーロ」の「抹殺」を旧編集局の「抹殺」と同じくらいにひどく（それ以上にひどく、ではないにしても）嘆いた同志エゴーロフらが立ちあがり、同志マホフら、その他が立ちあがったのは、偶然ではなかった。その人の友を見ればその人がわかる、と諺に言う。その人の政治的同盟者、その人に賛成投票する者を見れば、その人の政治的特性がわかる。

同志マルトフと同志アクセリロードとの小さな誤りは、それがこの二人とわが党の日和見主義的翼全体との永続的な同盟の出発点にならなかったあいだは、またそれが、この同盟の結果、日和見主義のぶりかえしをもたらさなかったあいだは、また『イスクラ』がたたかってきた相手であり、いまこそ革命的社会民主党の一貫した味方にうっぷんを晴らそうと大喜びで待ちかまえていた人々全部の復讐をもたらさなかったあいだは、小さなものであったし、またそうであることができた。大会後に生じたいろいろな出来事は、まさに次のような結果にみちびいた。すなわち、われわれはいま新『イスクラ』のなかに、ほかならぬ日和見主義のぶりかえしを、アキーモフらとブルケールらの復讐を（ヴォローネジ委員会のリーフレットを見よ）、そしてまた、過去のありとあらゆる侮辱のしかえしとして、ついに（ついに！）憎むべき『イスクラ』の紙上で憎むべき「敵」を蹴とばすことを許されたマルトィノフらの有頂天の喜びを見ている。このことは、イスクラ派の「継承性」を維持するためには、「旧『イスクラ』編集局を復活する」（一九〇三年一一月三日付の同志スタロヴェールの最後通告から）ことがどの程度まで必要であったかを、われわれにとくに一目瞭然に示している。……

大会（と党）が左翼と右翼に、革命的翼と日和見主義的

翼とに分かれた事実は、それ自体では、まだなにも恐るべきものでも、危機的なものでもなかっただけでなく、異常なことでさえまったくなかった。それどころか、ロシア（ロシアだけではないが）社会民主党の歴史上の最近の一〇年全体は、不可避的、必然的に、こうした区分にみちびいてきたのである。区分の根拠が、右翼の一連のきわめて小さな誤りであり、すこしも重要でない（比較的にいって）意見の相違であったこと、――この事情（表面的な観察者や、俗物的な頭脳の持ち主には、ショッキングに思われよう）は、全体としてのわが党にとっては偉大な一歩前進を意味していた。以前にはわれわれは、ときとすると分裂しても当然でさえあるような大きな問題をめぐって意見がくいちがっていたのだが、いまではもうわれわれは、すべての重要な大問題で意見の一致をみており、いまわれわれを分けているのは、色合いの違いであって、そういう色合いの違いをめぐって論争することはできるし、また論争しなければならないが、しかしそのために仲間割れするのは愚かで、子どもじみたことである（すでに同志プレハーノフが『なにをなすべきでないか？』という興味ある論文のなかで、まったく正当に言ったように。なお、この論文には、あとで立ちもどろう）。大会後に少数派のとった無政府主義的な行動が党をほとんど分裂にみちびいた現在、次のように言う賢人たちに出あうことがしばしばある。いったい、組織委員会事件や、「ユージヌィ・ラボーチー」グループまたは「ラボーチェエ・デーロ」グループの解散や、第一条や、旧編集局の解散などといった些細なことのために、大会でたたかうだけのことがあったろうか？と。こういうふうに論じる者は、＊ほかならぬサークル的見地を党の問題にもちこむものである。党内の種々な色合いのあいだの闘争は不可避であり、この闘争が無政府状態や分裂にみちびかないかぎり、またこの闘争が、すべての同志や党員によって一致して承認された枠内でおこなわれるかぎり、必要でもある。そして、大会における党の右翼であるアキーモフやアクセリロード、マルトィノフやマルトフとのわれわれの闘争もまた、けっしてこの枠をこえるものではなかった。このことを最も争う余地のない仕方で立証している二つの事実を思いだすだけで十分である。すなわち、（一）同志マルトィノフと同志アキーモフとが大会から脱退したときに、われわれはみな、「侮辱」という考えをあらゆる方法で取りのぞく用意があったし、またわれわれはみな、これらの同志に、釈明に満足して声明を撤回するように勧める同志トロツキーの決議を採択した（三二票で）。（二）中央諸機関を選挙する段になったとき、われわれは、大会の少数派（すなわち、日和見主義的翼）に、両中央機関内

での少数派としての地位をあたえようとした。すなわち、マルトフを中央機関紙に、ポポーフを中央委員会にいれようとしたのである。われわれがすでに大会以前に二つの三人組を選出することを決定していた以上、党の見地からすればわれわれはこれよりほかの行動をとることはできなかった。大会で明らかになったもろもろの色合いの相違は大きなものではなかったが、われわれがこれらの色合いの闘争から引きだした実践的な結論も、大きなものではなかったのだ。すなわち、この結論は、もっぱら、二つの三人組の三分の二は党大会の多数派にあたえられるべきである、ということに帰着したのである。

＊ これに関連して、大会で私が「中間派」の代議員のだれかとかわした会話を思いおこさずにはいられない。「われわれの大会には、なんという重くるしい空気が支配していることだろう！　この激しい闘争、たがいに反対し合うこの扇動、この激しい論戦、この非同志的な態度！……」と、彼は私に苦情を述べた。私は彼に答えて言った。「われわれの大会はなんとりっぱなものだろう！　公然たる、自由な闘争。いろいろな意見が述べられる。いろいろな色合いが明白になった。いろいろなグループが現われた。手があげられる。決定が採択される。一つの段階をとおりすぎた。前進！——これならわかる。これが生活というものである。これは、いつはてるともわからない、退屈なインテリゲンツィアの口論ではない。インテリゲンツィアの口論は、問題を解決したから終わるのではなくて、しゃべり疲れたから終わるにすぎない……」と。「中間派」の同志は、けげんな目つきで私をながめ、肩をすぼめた。われわれは別々の言語で話をしていたのである。

党大会の少数派が、中央諸機関内で少数派となることに同意しなかったことだけが、最初に、敗北したインテリゲンツィアの「めめしい泣きごと」をもたらし、ついで、無政府主義的な空文句と無政府主義的な行動とをもたらすにいたったのである。

終りにあたって、中央諸機関の構成の問題という見地から、もう一度図表を一瞥しよう。まったく当然なことであるが、選挙のさいには、いろいろな色合いの問題のほかに、あれこれの人物の適否や、活動能力などの問題もまた、代議員の考慮しなければならないものであった。現在では、少数派はこのんでこれらの問題を混同しようとする。だが、これが別々の問題であることは自明のことであり、また、中央機関紙へ最初の三人組を選出することは、すでに大会前に、マルトフとアクセリロードがマルトィノフおよびアキーモフと同盟するなどとはだれひとり予想できなかったときに計画されたものだという、簡単な事実からでもわかる。別々の問題には、解答もまた別々の仕方で出さなければならない。いろいろな色合いの問題にたいする解答は、

大会議事録のなかに、ありとあらゆる議題の公然たる審議と表決のなかに、求めなければならない。人物の適否の問題は秘密投票で解決するように、大会の全員によって決定された。大会の全員が満場一致でこのような決定を採択したのはなぜか？——このことは、それに立ちいって論じるのが奇妙なほど初歩的な問題である。だが、少数派は初歩的なことさえ忘れるようになった（選挙で彼らが敗北したあとでは）。われわれは、旧編集局を擁護する熱烈な、熱情的な、われを忘れるほど興奮した演説のかずかずを聞かされた。だが、われわれは、六人組か三人組かをめぐる闘争に結びついた、大会における種々な色合いのことは、まったくなにも聞かなかった。われわれは、中央委員に選ばれた人たちが無能力で、不適当で、悪だくみをいだいている、などというわさやおしゃべりを、四方八方から聞いている。だが、われわれは、中央委員会での優位をめざしてたたかった、大会におけるいろいろな色合いについては、まったくなにも聞かない。大会以外のところで、人物の資質や行動についておしゃべりをしたり、うわさをするのは、ぶしつけで、みっともないことだと、私には思われる（なぜなら、そうした行動は、九分九厘まで組織上の秘密であって、党の最高機関にたいしてしか発表できないものだからである）。大会以外のところでこうしたおしゃべりによって闘争することとは、私の確信するところでは、金棒ひきとして行動することを意味するであろう。だから、こうしたうわさ話について私が公衆にあたえうるただ一つの回答は、大会での闘争を指摘することであろう。中央委員会はわずかな差の多数によって選出されたと、諸君は言う。それはほんとうである。だが、このわずかな差の多数派は、口さきではなく実際に『イスクラ』の諸計画を実行するために、最も一貫してたたかってきた人たちの全部からなっていた。だから、この多数派の精神的な権威は、その形式的な権威よりもはるかに高いものであるはずである。——『イスクラ』の潮流の継承性をあれこれの「イスクラ」サークルの継承性よりもたいせつに思うすべての者にとって、はるかに高いものであるはずである。『イスクラ』の政策を実行するうえでのあれこれの人物の適否を、より大きな資格をもって判断できるのは、だれであったろうか？　大会でこの政策を実行した者か、それとも、多くの場合にこの政策とたたかい、あらゆる立ちおくれ、あらゆるがらくた、あらゆるサークル根性を固守した者か？

（ｏ）　大会後。二つの闘争方法

以上でわれわれは大会における討論と表決との分析を終

えたが、この分析は、じつのところ、大会後に起こったことをすべて in nuce (萌芽のかたちで) 説明している。そこで、わが党内危機のその後の段階を述べるのは、簡略にしてさしつかえない。

マルトフとポポーフが選挙に応じなかったことは、たちまち党内の色合いのあいだの党的闘争に、泥仕合の空気をもちこんだ。選出されなかった編集局員たちが本気でアキーモフとマルトィノフのほうへ転換する決意をするなどということはありそうもないと考え、事態をなによりも腹だちによるものと見なした同志グレーボフは、大会の翌日に私とプレハーノフに、和解すること、また編集局から評議会への代表選出を保証するという (すなわち、二名の代表のうち一名は、かならず党の多数派から出すという) 条件で、四名全部を「補充する」ことを提議した。この条件は、プレハーノフと私には合理的なものと思われた。なぜなら、この条件に同意することは、大会でおかした誤りを暗黙のうちに認めること、たたかいではなく平和を願っていることを意味していたし、また、アキーモフとマルトィノフ、エゴーロフとマホフよりも、私とプレハーノフのほうに近い立場を占めたいと願っていることを、意味していたからである。こういうわけで、「補充」についての譲歩は、個人的な性格をおびていたのであって、腹だちを取りのぞいて平和を回復するはずの個人的な譲歩を拒否するにはおよばなかった。だから、私とプレハーノフは、同意をあたえたのである。編集局の多数派はこの条件を拒否した。グレーボフは出発してしまった。われわれは、次になにが起こるか、マルトフが大会でとった (中間派の代表者である同志ポポーフに反対して) 忠誠な立場をたもつか、それとも、彼が追随していった、分裂に傾いたぐらつき分子が牛耳をとるかを、観望しはじめた。

われわれは、二者択一に当面していた。それは、同志マルトフは、大会での自分の「連合」をその場かぎりの政治的事実 (一八九五年のベーベルとフォルマルとの連合がその場かぎりのものであったのと同じような—— *si licet parva componere magnis* (小さなことを大きなことと同列においてもよければ)) と見なすであろうか、それとも彼はこの連合を固め、大会で私とプレハーノフとが誤りをおかしたことを証明しようと全力をあげ、わが党の日和見主義的翼の真の首領となろうとするだろうか、ということであった。言いかえれば、この二者択一は、泥仕合か、政治的な党的闘争か、という定式にまとめることができた。大会の翌日にいあわせた中央諸機関のメンバーの全員であったわれわれ三人のうち、グレーボフは、この二者択一の第一の解決法にだれよりも傾き、喧嘩していた子どもたち

を仲直りさせようと、だれよりも努力した。第二の解決法にだれよりも傾いていたのは、同志プレハーノフで、彼には、いわば、とりつく島もなかった。私は、こんどは「中間派」あるいは「沼地」派の役割を演じて、説得しようとしてみた。口で述べた説得をいま再現しようと試みても、手のつけられないほどこんがらかった企てとなろう。だから、同志マルトフや同志プレハーノフの悪い手本には従うまい。だが、私は、イスクラ「少数派」の一人に私が送ったある説得の手紙の数節を転載することが必要であると思う。

……「マルトフが編集局にはいるのを拒んだこと、彼やその他の党文筆家が寄稿を拒んだこと、多くの人々が中央委員会で活動することを拒んだこと、ボイコットまたは消極的な抵抗の思想を宣伝していること、すべてこうしたことは、たとえそれがマルトフや彼の僚友たちの意に反することであろうと、かならず党の分裂にみちびくであろう。マルトフが忠誠な立場を守るとしてさえ(彼は大会では断固としてこの立場をとったが)、他の人たちはそれを守るまい。——だから、私が述べた結末は避けることができないであろう。……

ところで、私は自問する。じっさい、われわれはいったいなにが原因で袂をわかとうとしているのか？……私は、大会での出来事や印象をみな吟味してみて、私がひどくいらだって、『気ちがいじみた』ふるまいや行動をした場合がしばしばあったことを、認める。もしその場の空気や、反発や、ことばのやりとりや、争いなどによって自然に引きおこされたものでも罪とよぶべきであるなら、私は、だれにたいしてでも、自分のこの罪をよろこんで認めるつもりでいる。だがいま、まったく冷静に、達成された成果を調べ、気ちがいじみた争いによって実現されたものを調べてみて、私は、この成果のうちに、党にとって有害なものをなにひとつ、まったくなにひとつ見ることができないし、また少数派の感情を害するもの、あるいは少数派にとって侮辱的なものを、絶対になにひとつ見ることができない。

もちろん、少数派となる羽目になったことだけでも、感情を害しないわけにはいかなかったが、しかし、私は、われわれがだれかに『汚点をしるした』とか、だれかを侮辱しよう、あるいは恥をかかせようと思ったとかという考えには、断固として抗議する。そんなことはなにもない。また、政治上の意見の不一致があるからといって、非良心的だとか、卑劣だとか、陰謀的だとか、そのほか、分裂が近づきつつある雰囲気のなかでますます頻繁に耳にするようになっているいろいろな気持ちのいい事柄で相手かたを非難するというやり方で、出来事を解釈する

ようなことを、許してはならない。そういうことを許してはならない。なぜなら、それは、すくなくとも、nec plus ultra〔極度に〕愚かなことだからである。

われわれはマルトフと政治的に（組織上でも）意見が一致しなかったが、これはこれまでにも何十回もあったことである。私は、規約第一条の問題で敗れたので、私に（また大会に）残された問題で仕返しするために全力をあげざるをえなかった。私は、一方では、厳密にイスクラ的な中央委員会をめざし、他方では、編集局の三人組をめざしてつとめざるをえなかった。……私は、この三人組だけが、身内びいきやだらしなさを基礎とした合議体ではなくて、職務を果たす機関となることのできるただ一つのものであると考えている。すなわち、だれもが、いつでも、どんな個人的な事柄にも、感情を害しはしないかとか、脱退しはしないかなどという考慮にもまったくわずらわされずに、自分の党的見地をそれに提出し主張するような、ただ一つの真の中央部であると考えている。

この三人組は、大会でのいろいろな出来事のあとでは、疑いもなく、ある一つの点でマルトフの意に反する政治上、組織上の方針を法制化したものであった。これは疑いをいれないことである。このために決裂しなければならないのか？　このために党をつぶさなければならないのか？？　ところで、デモンストレーションの問題では、マルトフとプレハーノフは私に反対したではないか？　綱領の問題では、私とマルトフとはプレハーノフに反対したではないか？　どの三人組も、つねに、その一面では、そのおのおのの参加者に対抗するものではないだろうか？　イスクラ多数派が、「イスクラ」組織内でも、大会でも、マルトフの方針のこの特殊な色合いを組織上および政治上の点でまちがっていると考えたとしても、そのことをなにかの『たくらみ』や、『けしかけ』などで説明しようとするのは、じっさい、愚かなことではあるまいか？　この多数派を『ならずもの』とののしって、それでこの事実を言いのがれようとするのは、分別のないことではあるまいか？

繰りかえして言おう。私も、大会のイスクラ多数派も、マルトフはまちがった方針をとった、だから彼を訂正する必要があったと、深く信じている。この訂正に感情を害し、そこから侮辱等々を引きだすことは、分別のないことである。われわれは、だれにも、どういう点でも、『汚点をしるし』はしなかったし、いまでも『しるし』てはいないし、また活動から遠ざけてもいない。だが、中央部から遠ざけられたために分裂を引きおこすのは、

私には理解できない無分別である。*」

* この手紙は、すでに九月（新暦）に書かれたものである。問題に関係がないと私に思われるものは、そのなかからはぶいてある。もしこの受信人が、はぶかれたところこそ重要であると考えるなら、彼がぬけたところを埋めるのはわけのないことである。ついでにこの機会にきっぱり言っておくが、私の反対者はだれでも、事業にとって有益だと考えるなら、私の私信を全部公表してさしつかえない。

私は、私の以上の声明文書をここに再録する必要があると考えた。なぜなら、この声明は、多数派が、一方の、辛辣で、「気ちがいじみた」等々の攻撃のために引きおこされる可能性のある（また激しい争いのさいには避けられない）個人的な侮辱感や個人的ないらだちと、――他方の、ある政治的な誤りや政治方針（右翼との連合）とのあいだに、ただちに明確な境界線を引こうと努力したことを、正確に示しているからである。

この声明が証明しているように、少数派の消極的な抵抗は大会の直後に始まり、それにたいしてわれわれはただちに次のような警告を発したのである。すなわち、これは党の分裂への一歩である。これは、大会でなされた忠誠の声明にまっこうから矛盾している。これは、ひとえに中央諸機関から遠ざけられたため（つまり選出されなかったため）に引きおこされる分裂であろう。なぜなら、党員のなかのだれをも活動から遠ざけようなどとは、だれも一度も考えたことはなかったからである。われわれのあいだの政治的な意見の不一致（これは、大会で誤った方針をとったのはマルトフか、それともわれわれか、という問題がまだ明らかにされず、また解決されないあいだは、避けられないものである）は、悪口や邪推などをともなった泥仕合にますます堕落しはじめている、と。

警告はむだだった。少数派の行動は、最もぐらついた、党を重んじることとの最も少ない分子が彼らのあいだで優勢であることを示していた。このため、私とプレハーノフとは、グレーボフの提案にたいするわれわれの同意を取り消さざるをえなかった。じっさい、もし少数派の行動が、原則の分野だけでなく、党にたいする基本的な忠誠の分野でも、彼らの政治的なぐらつきを証明していたとすれば、悪名高い「継承性」ということばはいったいどんな意義をもっていたろうか？　自分たちの新しい、ますます大きくなる不一致を公然と声明しているような人たちを党編集局に多数派として「補充」せよという要求がまったく愚かなことを、プレハーノフほど機知に富んだやり方であざわらった者は、だれもいなかった！　じっさい、新しい意見の相違が印刷物で党にたいして解明されるまえに、中央諸機関内の党多数派がみずからすすんで少数派になったというよ

うなことが、いったいこの世のどこにあったろうか？　まずはじめに意見の相違を述べるがよい、党に意見の相違の深さと意義を審議させるがよい、党が第二回大会でおかした誤り――もしなにかの誤りがあったことが証明されるなら――を、党自身に訂正させるがよい！　まだわかっていない意見の相違の名において、このような要求をかかげるということだけでも、これを要求している人たちが完全にぐらついていること、政治上の意見の不一致が泥仕合によって完全に圧倒されていること、党全体をも自分自身の信念をも完全に軽視していることを、示していた。原則上の信念をもっている人で、自分が説得によってその考えを変えさせようと思っている当の機関のなかで自分が多数派となる（非公式に）までは、説得をやろうとしないような者は、まだこの世にいなかったし、これからもけっしていないであろう。

最後に、一〇月四日に、同志プレハーノフは、この筋のとおらないやり方を終わらせるために、最後の試みをしようと思う、と言明した。新しい中央委員*の同席のもとに、六名の旧編集局員の会合がひらかれた。まる三時間、同志プレハーノフは、「多数派」の二名に「少数派」の四名を「補充する」ようにという要求が不合理なことを、示そうとした。彼は二名を補充することを提案した。それは、一方では、われわれがだれかを「しごき」、押しつぶし、戒厳状態のもとにおき、処刑し、葬りさろうと思っているといった危惧をことごとく取りさり、他方では、党の「多数派」の権利と立場を維持するためであった。二名の補充もまた拒否された。

* この中央委員は、そのほか、少数派と個別的な会談や集団的な会談をいくつもおこない、筋のとおらないおしゃべりを反駁し、党員としての責務を果たすように呼びかけた。

一〇月六日、私とプレハーノフとは、『イスクラ』の旧編集局員全員と寄稿者のひとりである同志トロツキーとに次のような内容の公式の手紙を出した。

「敬愛する同志諸君！　中央機関紙編集局は、諸君が『イスクラ』と『ザリャー』への参加を放棄していることに、公式に遺憾の意を表明する義務があると考える。われわれは、第二回党大会の直後にも、またその後も一度ならず繰りかえして、たびたび諸君に協力をお願いしたが、それにもかかわらず、われわれは諸君から一回も原稿を受け取らなかった。中央機関紙編集局は、諸君の協力放棄が、編集局によって引きおこされたものでは全然ないと考えることを声明する。なにか個人的ないらだちが党の中央機関紙での活動を妨げるものとなってはならないことは、言うまでもない。だが、もし諸君の協力

放棄が、諸君とわれわれのあいだのあれこれの見解の不一致によって引きおこされたものとすれば、この意見の相違をくわしく述べることが、党にとってきわめて有益であると、われわれは考える。それだけではない。われわれは、この意見の相違の性質とその深さが、できるだけ早くわれわれの編集する出版物の紙面で全党にたいして明らかにされることが、非常に望ましいと考える。*」

＊ 同志マルトフあての手紙のなかには、さらに、ある小冊子(三九)の問題について述べた一節と、次のような文句とがつけくわえられていた。「最後に、われわれは、われわれの事業の利益のために、もう一度次のことにあなたの注意をうながすものである。われわれは、いまでもあなたを中央機関紙の編集局員に補充して、あなたに、あなたのすべての見解を党の最高機関で正式に述べ、かつ主張する完全な可能性をあたえる用意がある(三〇)。」

読者が見られるように、「少数派」の行動をおもにうごかしていたものが、個人的ないらだちなのか、それとも機関紙（と党）に新しい方針をあたえたいという願望であるのか、もしそうなら、いったいどんな方針で、どんな問題についてのものなのか、われわれにはまだやはりまったくわかっていなかった。いまでも、どんな文献やどんな証言をもとにしてでも、たとえこの問題をはっきりさせる仕事に七〇名の解釈学者をあたらせても、彼らにもこのもつれを解きほぐすことはけっしてできないであろうと、思われる。泥仕合のもつれを解きほぐすなどということは、まず不可能である。そんなものは断ちきってしまうか、でなければそれから身をひかなければならない。*

＊ 同志プレハーノフは、おそらく、ここでこうつけくわえるであろう。でなければ、泥仕合を始めた連中のありとあらゆる要求を満足させなければならない、と。なぜそうすることができなかったかは、あとで見るだろう。

一〇月六日付の手紙にたいして、アクセリロード、ザスーリチ、スタロヴェール、トロツキーおよびコリツォーフは、下名の者は、『イスクラ』が新編集局の手に移ってからは『イスクラ』にはまったく参加していない、という二、三行の回答をよこした。同志マルトフは彼らより話好きで、われわれに次のような回答をよせる栄をたまわった。

「ロシア社会民主労働党中央機関紙編集局御中。敬愛する同志諸君！　一〇月六日付の諸君の手紙に答えて、私は次のように声明する。一〇月四日、一中央委員が出席してひらかれた会議以後は、同じ機関紙での共同活動の問題についてのわれわれの話合いはすべて終わったものと、私は考える。この会議では、われわれが同志レーニンをわれわれの『代表』として評議会に選出する約束をあたえることを条件として、アクセリロード、ザスー

リチ、スタロヴェールおよび私を編集局にいれるという、われわれへの提案を諸君が撤回するにいたった理由はなにか、という質問に、諸君は回答を拒絶した。右の会議で、諸君は、諸君自身が証人たちのまえで言明したことを公式に表明するのを一度ならず回避したのであるから、私が現在の事情のもとでは『イスクラ』で活動することを拒否する理由を、諸君に手紙で説明する必要はないと、私は考える。必要があれば、私はそれについて全党の面前でくわしく述べよう。もっとも党は、編集局と評議会のなかに部署を占めるようにという、いま諸君が繰りかえしておこなっている提案を私が拒否している理由を、すでに第二回大会の議事録から知ることができよう。*

……

エリ・マルトフ」

* 当時再版されようとしていたマルトフの小冊子にかんする回答ははぶく。

この手紙は、さきの諸文書とともに、同志マルトフが彼の『戒厳状態』のなかで一生懸命に回避している(感嘆符や点線によって)問題、すなわちボイコットや、組織の解体や、無政府状態や、分裂の準備といった問題――忠誠な闘争手段と忠誠でない闘争手段の問題にかんして、反駁しようのない説明をあたえている。

われわれは同志マルトフその他に、意見の相違を述べるようにと提案し、またいったいなにが問題なのか、彼らの意図はどうなのかを率直に述べるようにと要請し、またわがままをやめて、第一条についての誤り(右への転換の誤りと切り離しえないように結びついた)を冷静に検討するようにと説得した。ところが、同志マルトフ一派は、話合いを拒否して、こう叫んでいる。私は戒厳状態のもとにおかれている、私はしごかれている!と。「おどし文句」にたいする嘲笑も、この滑稽なわめきたての熱をさまさなかった。われわれは同志マルトフにこうたずねた。いっしょに活動することを拒んでいる人を、いったいどうしたら戒厳状態のもとにおくことができるのか? 少数派は少数派になることを拒んでいるのに、どうしたら、彼らの感情をきずつけ、彼らを「しごき」、圧迫することができるのか?? およそ少数派であるということは、少数派となった者にとって、かならず、必然的に、ある不利益を意味するではないか。この不利益は、ある問題について多数決で押しきられるような合議体にはいらなければならないか、あるいは、その合議体のそとにあって、それを攻撃し、したがって、堅固に設堡された砲台からの砲火をあびなければならない、という点にある。

同志マルトフが「戒厳状態」についてわめきたてたのは、

彼ら少数派となった人たちにたいして、不当な、不忠誠なやり方で闘争が、支配がおこなわれていると言いたかったのであろうか？　そういう命題だけが、いくらかでも道理らしいおもかげをそなえた（マルトフから見て）言い分であったろう。なぜなら、かならず、繰りかえして言うが、少数派であるということは、かならず、必然的に、ある不利益をともなうからである。だが、滑稽なのは次の点である。同志マルトフが話合いを拒んでいるかぎり、彼と闘争することは全然できなかったし、また、少数派が少数派であることを拒んでいるかぎり、少数派を支配することは全然できなかったということである！

同志マルトフは、私とプレハーノフが編集局にいたときの中央機関紙編集局に、ただ一つでも越権行為や権力濫用の事実があったということを、証明しなかった。少数派の実践家たちも、中央委員会に、ただ一つでもそういう事実があったことを証明しなかった。いま同志マルトフが彼の『戒厳状態』のなかでどんなに言いぬけようとしても、――戒厳状態についてのわめきたてには、「めめしい泣きごと」以外のなにもふくまれていないということには、まったく反駁の余地がない。

大会の任命した編集局に反対する筋のとおった論拠を、同志マルトフ一派がまったくもたないことは、「われわれは農奴ではない！」」（『戒厳状態』、三四ページ）という彼らのことばが、最もよく例証している。大衆の組織や大衆の規律より高いところにいる「選ばれた人士」の一人に自分をいれているブルジョア・インテリゲンツィアの心理が、ここに非常にはっきり現われている。「われわれは農奴ではない」ということで党内での活動拒否を説明するのは、自分の馬脚をあらわすことを意味し、論拠をまったくもちあわせないこと、理由をあげる能力がまったくないこと、不満の筋のとおった原因がまったくないことを承認することを意味する。私とプレハーノフとは、活動拒否のどんな理由もわれわれのほうからあたえなかったと考える、と声明し、意見の相違を述べるように要請しているのだが、それにたいして彼らは、「われわれは農奴ではない」と答えるのである（そして、われわれは補充についてはまだ取引をまとめていない、とつけくわえる）。

すでに第一条にかんする論争のさいに現われて、日和見主義的な論議と無政府主義的な空文句とへの傾向を示したインテリゲンツィア的個人主義には、あらゆるプロレタリア的な組織と規律が農奴制度のように思われるのである。読者諸君がまもなく知られるように、これらの「党員」や党「役員」には、新しい党大会もまた、「選ばれた人士」にとって恐ろしく、耐えがたい農奴制的機関と思われるの

である。……じっさい、この「機関」は、党員という称号はちょいと利用したがるが、この称号が党の利益や党の意志とは一致しないことを感じている人たちには、恐ろしいものである。

私が新『イスクラ』の編集局にあてた手紙のなかで列挙し、また同志マルトフが(三二)『戒厳状態』のなかで発表した、いろいろな委員会の諸決議は、少数派の行動が大会の諸決定にたいする不断の不服従であり、積極的な実践活動の攪乱であったことを、実際に証明している。日和見主義者と『イスクラ』憎悪者とからなっていた少数派は、大会でこうむった敗北の復讐をしようと望み、また正々堂々たる忠誠な手段では（印刷物または大会で問題を説明することでは）、第二回大会で彼らにくわえられた日和見主義やインテリゲンツィア的ぐらつきという非難を論駁することがけっしてできないと感じて、党を引き裂き、その活動をそこない、攪乱したのである。党を説得する力が自分にないことを意識しているので、彼らは、党を解体させ、あらゆる活動を妨害するというやり方ではたらきかけた。諸君は（大会でしくじりをやって）われわれの壺にひびをいれた、と彼らを非難すると、彼らはひびのはいった壺を完全に打ちこわすために全力をあげて努力することで、この非難にこたえた。

概念の混乱ぶりは、ボイコットや活動放棄を闘争の「正正堂々たる手段」*だと宣言するまでになった。同志マルトフは、いまこのデリケートな点をまわってあれやこれやと言いぬけにつとめている。同志マルトフははなはだ「原則的」なので、少数派が……ボイコットするときにはそれを擁護し、ボイコットがたまたま多数派になったマルトフ自身をおびやかすときには、それを非難するのである！

＊ 鉱業地帯の決議（『戒厳状態』、三八ページ）。

これが泥仕合であるか、それとも社会民主労働党内での正当な闘争手段にかんする「原則的な意見の相違」であるか、という問題は、検討するまでもないと私は思う。

「補充」のことで一騒ぎはじめた同志たちから説明を求める試み（一〇月四日と六日の）が失敗したので、中央諸機関にとっては、彼らが口さきで約束した忠誠な闘争とは実際にはどんなものかを、待ってみるより仕方がなかった。一〇月一〇日に中央委員会は、連盟にあてて通達を出し（連盟議事録、三－五ページを見よ）、中央委員会は〔連盟の〕規約の作成にとりかかっていると声明し、連盟員に協力を求めた。その当時、連盟の執行部は、連盟の大会を招集することを拒否していた（二票対一票で。同、二〇ペー

ジを見よ)。この通達にたいする少数派の回答によって、評判の忠誠や大会の諸決定の承認が空文句にすぎなかったこと、実際には、少数派は党の中央諸機関には絶対に従わない決心をしていて、力を合わせて活動するようにという党の中央諸機関の呼びかけに、詭弁と無政府主義的な空文句にみちたとおりいっぺんの回答をよせたのだということが、たちどころに明らかになった。執行部の一員であるデイチの悪名高い公開状(一〇ページ)にたいして、私は、プレハーノフその他の多数派の味方とともに、きっぱりしたことばで次のように答えた。「連盟の一役員が党規律にはなはだしく違反して党機関の組織活動をあえて妨害し、また他の同志たちに規律や規約にたいして同じように違反するよう呼びかけているというような、はなはだしい規律違反に、われわれは抗議する。『私には、中央委員会の要請におうじてそういう活動に参加する権利はないと考える』とか、『同志諸君！　われわれは、連盟の新しい規約の作成をけっしてそれ(中央委員会)にまかせてはならない』とかいうような文句は、党、組織、党規律という概念がなにを意味するのかをほんのすこしでも理解している者のだれにでも、憤慨の念しかおこさせないような種類の扇動方法に属している。こういう種類の方法は、それがつくられたばかりの党機関にたいして用いられており、したがって、疑いもなく、この機関にたいする党の同志たちの信頼の念を掘りくずそうとする企てであり、しかも連盟の執行部員の名で中央委員会に隠れてなされているのであるから、なおさら憤慨すべきものである。」(一七ページ)

こういう条件のもとでは、連盟大会は、騒動を予想させるものでしかなかった。

同志マルトフは、そもそものはじめから、「他人の心中に立ちいる」という彼の大会戦術をつづけ、今度は個人的な会話を歪曲することで、同志プレハーノフにたいしてこれをおこなった。同志プレハーノフは抗議した。そこで、同志マルトフは、かるはずみな、でなければ腹だちまぎれの非難を取り消さなければならなかった(連盟議事録、三九ページ、一三四ページ)。

次に報告の番になった。党大会における連盟の代議員は私であった。私の報告の要約(四三ページ以下)をちょっと参照してみただけでも、読者は、私が大会の表決の分析をあたえたことが、おわかりになろう。報告の重点は、まさしく、マルトフ一派が彼らのおかした誤りのためにわが党の日和見主義的翼になったことを証明する点にあった。この報告は、このうえなく憤激した反対者が過半数を占める聴衆の前でなされたにもかかわらず、彼らはこの報告の

なかに、党内闘争と論戦との忠誠なやり方にそむいている点を、なにひとつ見つけることができなかった。

これに反して、マルトフの報告は、私の叙述にたいする部分的な小「訂正」（この訂正が正しくないことを、私はまえのほうで示しておいた）を除けば、……病的な神経のある種の産物にすぎなかった。

多数派がこういう雰囲気のなかで闘争するのを拒んだのは、異とするにたりない。同志プレハーノフは、この「一騒ぎ」（六八ページ）——それは、じっさい、ほんとうの「一騒ぎ」であった！——への抗議を表明し、すでに用意していた、報告にたいする実質的な反論を述べることを拒否して、大会から退場した。多数派のその他の味方もほとんどみな、同志マルトフの「みっともないふるまい」に抗議文をだして、大会から退場した（連盟議事録、七五ページ）。

少数派の闘争方法は、だれにも、完全にはっきりしてきた。われわれは、少数派が大会で政治的な誤りをおかしたこと、日和見主義に転換したこと、ブンド派、アキーモフら、ブルケールら、エゴーロフらおよびマホフらと連合したことを非難した。少数派は大会で敗北し、いま二つの闘争方法を「仕上げた」が、それはかぎりなく多種多様な個個の出撃、攻撃、襲撃、などをふくむものである。

第一の方法——党活動全体を攪乱し、われわれの事業をそこない、「理由を説明せずに」なんにでもじゃまだてを企てること。

第二の方法——「一騒ぎ」演じること、等々。*

* すでに指摘しておいたように、亡命者や追放者の雰囲気のもとではありふれたものであるこの泥仕合の現われの最も下劣な形態でも、これを下劣な動機のせいにすることは、愚かなことであろう。これは、一種の病気であって、ある異常な生活条件のもとや、神経がいくらかかきみだされている場合などには、伝染病のようにひろがるものである。私がここでこの闘争方式の真の本性を想起しなければならなかったのは、同志マルトフがこの方式を、彼の『戒厳状態』のなかでそっくりそのまま繰りかえしているからである。

この「第二の闘争方法」は、連盟の悪名高い「原則的」諸決議——いうまでもなく、「多数派」はその審議にはくわわらなかった——にも現われている。同志マルトフが、いま彼の『戒厳状態』に転載しているこれらの決議を検討してみよう。

同志トロツキー、同志フォミーン、同志デイチその他が署名した第一の決議は、党大会の「多数派」を攻撃する二つの命題をふくんでいる。（一）「連盟は、大会で『イスクラ』のこれまでの政策と本質的にあいいれない諸傾向が現われた結果、党規約を作成するさい、中央委員会の独立性

と権威を守るのに十分な保障をつくりだす点で、当然はらうべき注意がはらわれなかったことに、深い遺憾の意を表明する。」(連盟議事録、八三ページ)

この「原則的な」命題は、われわれがすでに見たように、アキーモフ式空文句に帰着するものであって、その日和見主義的な性格は、党大会で、同志ポポーフさえこれを暴露したものである！　実際のところ、「多数派」が中央委員会の独立性と権威を守ろうと考えていない、という断言は、いつでも陰口以上にでることがなかった。私とプレハーノフとが編集局にいたときには、中央機関紙は評議会内で中央委員会にたいして優位を占めてはいなかったが、マルトフ派が編集局にはいると、評議会内で中央機関紙の中央委員会にたいする優位が生じたことを指摘するだけで十分である！　われわれが編集局にいたときには、評議会内では、ロシア国内の実践家が国外の文筆家にたいして優位を占めていたが、マルトフ派の場合にはその逆になった。われわれが編集局にいたときには、評議会がただ一つの実践的問題にでも介入しようと企てたことは、一度もなかった。全員一致による補充(三三)がおこなわれて以来、そういう介入が始まったが、読者諸君は、まもなく、このことをくわしく知るであろう。

いまわれわれが分析している決議の次の命題はこうである。「……党の正式の中央諸機関を設置するさいに、大会は、実際に形成されていた中央諸機関との継承関係を無視した。……」

この命題は、まったく、中央諸機関の人的構成の問題に帰着する。「少数派」は、古い中央諸機関が大会で自分の不適格を証明し、また一連の誤りをおかしたことには、ふれないほうがいいと考えた。だが、最も滑稽なのは、組織委員会にかんして「継承性」を言いたてていることである。すでにわれわれが見たように、大会では、だれひとりとして、組織委員会をそのままの構成で承認することなど、おくびにもださなかった。大会では、マルトフは、三名の組織委員をふくむ名簿は自分にたいする中傷だ、と夢中になって叫ぶことまでやった。大会では、「少数派」は、一名の組織委員をふくむ自分たちの最終名簿（ポポーフ、グレーボフまたはフォミーン、トロツキー）を提案したが、「多数派」は、三名のうち二名まで組織委員からなる名簿（トラヴィンスキー、ヴァシーリエフ、グレーボフ）を通過させたのである。ところで、おたずねするが、「継承性」をこういうふうに言いたてることを、「原則的な意見の相違」とよぶことができるであろうか？

次にもう一つの決議に移ろう。これは、同志アクセリロードをはじめとする四名の旧編集局員が署名したものであ

る。ここでわれわれは、のちに印刷物のなかで一度ならず繰りかえされた、「多数派」にたいする主要な非難の全部に出あう。ほかならぬ編集サークルのメンバーたちの定式化にしたがってこれを調べてみるのが、最も好都合である。非難の槍玉にあげられているのは、「専制的＝官僚主義的な党支配の方式」であり、「官僚主義的中央集権主義」である。この「官僚主義的中央集権主義」は、「真の社会民主主義的中央集権主義」と区別して、次のように規定されている。それは、「内的な統合を主眼とせずに、純機械的な手段により、個人の創意や社会的自主活動を組織的に抑圧することによって実現され維持される外的、形式的な統一を主眼とする」。だから、それは、「その本質そのものからして、社会の構成諸要素を有機的に統合することができない」と。

ここで同志アクセリロード一派がどういう「社会」のことを言っているのかは、アラーの神しかお知りにはならない。どうやら同志アクセリロードは、自分が望ましい行政改革についてのゼムストヴォの建白書を書いているのか、それとも「少数派」の苦情をぶちまけているのか、自分でもよくわからなかったらしい。不満をいだいている「編集局員たち」が叫びたてている党内の「専制」とは、いったいどういう意味をもっているのだろうか？　専制とは、なんの統制もうけず、だれにも責任を負わない、選挙によらない、一個人の最高権力である。「少数派」の文献からして非常によく知られているように、そういう専制君主と見なされているのは、私にほかならない。ここで検討している決議が起草され、採択されたとき、私はプレハーノフとともに中央機関紙にはいっていた。したがって、プレハーノフも、中央委員全員も、事業の利益についての彼らの見解にしたがってではなく、専制君主であるレーニンの意志にしたがって「党を支配」していたという確信を、同志アクセリロード一派は表明しているのである。専制的な支配という非難は、必然的に、また不可避的に、専制君主を除いた、他の支配参加者をみな、他人の手中ににぎられたたんなる道具、将棋の歩、他人の意志の執行者と認める結果になる。そこで、われわれはもう一度おたずねしよう。これが実際に、最も尊敬する同志アクセリロードの「原則的な意見の相違」なのか？

さらに、わが「党員たち」は、彼ら自身がおごそかに適法なものと認めた諸決定を採択した党大会から帰ってきたばかりであるのに、その彼らがここでうんぬんしているのは、どういう外的、形式的な統一のことなのか？　彼らは、いくらかでも強固な基礎のうえに組織された党の統一を達成するために、党大会以外の別の方法を知っているのでは

ないだろうか？　もしそうだとすれば、いったいなぜ彼らは、自分たちは第二回大会を適法な大会とはもう認めない、とはっきり言う勇気をもたないのか？　なぜ彼らは、いわゆる組織的な、いわゆる党の統一を達成するための、自分たちの新しい思想と新しい方法とを、われわれに説明しようとしないのか？

さらに、わが個人主義的インテリゲンツィアがうんぬんしているのは、「個人の創意」のどういう「抑圧」のことなのか？　党中央機関紙は、その直前に彼らにむかって、彼らの意見の相違を述べるように求めたばかりなのだが、彼らはそれを述べようとはしないで、「補充」にかんして取引しようとしたではないか？　そもそも、私とプレハーノフあるいは中央委員会は、われわれと共同して「活動する」ことをいっさい拒んだ人たちの創意や自主活動を、どうすれば抑圧することができるのか！　抑圧される人たちが参加を拒んだ機関や合議体のなかで、どうすればだれかを「抑圧する」ことができるのか？　選出されなかった編集局員は「支配される」のを拒んだのに、彼らは、いったいどうして「支配の方式」について、苦情を言うことができるのか？　われわれは、わが同志たちを指導するさいに、どんな誤りもおかすはずがなかった。それは、これらの同志がわれわれの指導のもとで活動したことが全然ない、という簡単な理由からである。

悪名高い官僚主義についてのわめきたては、中央諸機関の人的構成にたいする不満をつつみかくすものにすぎず、大会でおごそかにあたえた約束を破ったことを隠すイチジクの葉にすぎないことは、明らかであると思われる。君は官僚主義者だ、なぜなら、君は、私の意志にしたがってではなく、私の意志に反して大会で任命されたからである。君は形式主義者だ、なぜなら、君は、大会の形式的な決定をよりどころとしていて、私の同意をよりどころとしていないからである。君の行動は乱暴で機械的なものである。なぜなら、君は党大会の「機械的な」多数者を楯にとって、補充されたいという私の願いをかえりみないからである。君は専制君主だ、なぜなら、サークル根性を大会がきっぱりと否認したのを不愉快に思えば思うほど、ますます精力的に自分のサークル主義的な「継承性」を主張している古い、仲よし仲間の手に、君は権力を引きわたそうとしないからである、と。

官僚主義についてのこのわめきたてには、右に指摘したもの以外には、どんな現実的な内容もなかったし、いまでもない。*　そして、闘争のこうした方法こそ、少数派のインテリゲンツィア的なぐらつきを、さらにもう一度証明するものにすぎない。少数派は、中央諸機関の選挙がまずかっ

たことを、党に納得させたいと望んだ。どうやって納得させるのか？　私とプレハーノフが運営していた『イスクラ』を批判することによってか？　いや、彼らにはそういう批判をくわえる力はなかった。彼らは、憎むべき中央諸機関の指導のもとで活動することを党の一部が拒否するという手段で、納得させたいと望んだ。だが、世界のどの党のどの中央機関も、指導に従おうとしない人たちを指導する能力があることを、証明することはできないであろう。中央諸機関の指導に従うのを拒否することは、党にとどまるのを拒否するのも同然であり、党を破壊するのも同然である。それは、説得の手段ではなくて、破壊の手段である。そして、このように説得を破壊とおきかえていることこそ、原則的な堅固さがなく、自分の思想にたいする信念がないことを示すものである。

＊　同志プレハーノフが情けぶかい補充をおこなってからは、彼は、少数派の目に「官僚主義的中央集権主義」の味方とは映らなくなったことを指摘するだけで、十分である。

彼らは官僚主義をうんぬんする。官僚主義とは、メーストニチェストヴォ〔官職あさり〕というロシア語に翻訳することができる。官僚主義とは、事業の利益を出世の利益に従わせること、よい地位を汲々としてねらい、仕事を軽視すること、思想のための闘争のかわりに補充をめぐって喧嘩することを意味する。こういう官僚主義は、じっさい、無条件に、党にとって望ましからぬものであり、有害である。現在わが党内でたたかっている両当事者のうち、どちらがこういう官僚主義の罪をおかしているかは、やすんじて読者の判断におまかせしよう。……彼らは、乱暴で機械的な統合方法をうんぬんする。いうまでもなく、乱暴で機械的な方法は有害である。だが、新しい潮流が古い潮流とたたかうにあたって、新しい見解の正しさを党に納得させるまえに、またこの見解を党に説明する以上に、党の諸機関に人々をいれるということ、乱暴で機械的な闘争方法を考えることができるかどうか、これまた読者の判断におまかせしよう。

だが、もしかしたら、少数派の大好きな合言葉は、やはりいくらかの原則的な意義をもっていて、疑いもなく当面の場合の「転換」の出発点となった、ちっぽけな、部分的な動機とは関係なく、ある特別な思想圏をあらわしているのではなかろうか？　もしかしたら、「補充」をめぐる喧嘩を度外視すれば、この合言葉は、やはり異なった見解体系の反映なのではなかろうか？

この面から問題を検討してみよう。そのさい、われわれがまず第一に指摘しなければならないのは、最初にこういう検討に着手したのは同志プレハーノフで、彼が連盟で、

少数派は無政府主義と日和見主義に転換したのだと指摘したこと、また、ほかならぬ同志マルトフ（かならずしもみなが彼の立場を原則的な立場と認めようとしないため、いま非常に感情を害しているマルトフ）*は、彼の『戒厳状態』のなかでこの事件にはまったくふれないほうがいいと考えたことである。

* レーニンが原則的な意見の相違を見ようとしないというので、あるいはそれを否定しているというので、新『イスクラ』がこのように感情を害しているほど、滑稽なものはない。この問題にたいする諸君の態度が原則的であればあるほど、それだけ早く諸君は、日和見主義への転換についての私の再三の指摘を検討していたことであろう。諸君の立場が原則的であればあるほど、それだけ諸君は、思想闘争を官職あさりに引き下げることができなかったであろう。諸君自身が、原則的な人間と見られるのを妨げようとして全力をつくした以上、自分で自分を責めたまえ。たとえば、同志マルトフは、『戒厳状態』のなかで連盟の大会について述べながら、無政府主義にかんしてプレハーノフとたたかわせた論争については沈黙しているが、そのかわりに、レーニンは超中央部であるとか、中央部に命令を出させるにはレーニンが目くばせすればよいとか、中央委員会は白馬にまたがって連盟にのりこんだ、等々とか、語っている。ほかならぬこういう論題の選択によって、同志マルトフが自分の深い思想性と原則性を証明したことを、私はけっして疑わない。

連盟の大会では、次のような一般的問題が提起された。すなわち、連盟なり〔地方〕委員会なりが自分のために作成する規約は、中央委員会の承認を経なくとも有効であるか、また中央委員会の承認が得られない場合にも有効であるか、という問題である。この問題は、これ以上わかりきったことはないように思われるかもしれない。規約は、組織にはいっていることの形式的な表現であるが、委員会を組織する権利は、わが党規約の第六条によって、ほかならぬ中央委員会に無条件にあたえられている。規約は〔地方〕委員会の自治の範囲を規定しているが、この範囲をきめるうえでの決定権をもっているのは、党の中央機関であって、党の地方機関ではない。これはイロハである、そして、「組織する」ということは、かならずしも「規約の承認」を前提するものではないという深遠な議論（まるで連盟自身、ほかならぬ正式の規約にもとづいて組織されたいという自分の願望を、自主的に表明したことがないかのように）は、まったく子どもじみたものであった。だが、同志マルトフは、社会民主主義のイロハさえ忘れてしまった（一時忘れたのであってほしいが）。彼の意見では、規約承認の要求は、「以前の革命的なイスクラ的中央主権主義が、官僚主義的な中央集権主義とおきかえられつつある」ことの実現にほかならなかった（連盟議事録、九五ページ）。

しかも同志マルトフは、この同じ演説のなかで、自分はこれこそ問題の「原則的な側面」（九六ページ）――彼の『戒厳状態』のなかではふれないほうがいいと考えたその原則的な側面――だと考える、と言明しているのである！

同志プレハーノフはただちにマルトフに答えて、官僚主義や、ポンパドゥール主義などといった、「大会の威信を傷つける」表現をさしひかえるように求めた（九六ページ）。これらの表現を「ある潮流の原則的な特徴づけ」とみた同志マルトフとのあいだに、意見のやりとりがおこなわれた。その当時には同志プレハーノフは、多数派のすべての味方と同じように、これらの表現をその具体的な意義において考察しており、これらの表現が原則的な意味をもつものではなく、こう言ってよければ、もっぱら「補充に関係のある」意味をもっていることを、はっきり理解していた。けれども彼は、マルトフらやデイチらの強い要求（九六―九七ページ）に譲歩して、原則的見解と称するものの原則的な検討に移った。彼はこう言った。「もしそうなら」（すなわち、もし〔地方〕委員会が、その組織を創設し、その規約を作成する点で自治的であるなら）、「委員会は、全体すなわち党にたいして自治的だということになろう。これは、もはやブンド的な見地どころか、はっきり無政府主義的な見地である。じっさい、無政府主義者はこう論じている。個人の権利は無制限である、各人は自分で自分の権利の範囲を定める、と。だが、自治の範囲は、グループ自身によってきめられるべきものではなく、このグループをその一部分とする全体によってきめられるべきものである。この原則に違反した明瞭な例としては、ブンドをあげることができる。つまり、自治の範囲は、大会なり、大会がつくった最高機関なりが決定するのである。中央機関の権力は道徳的および思想的権威にもとづかなければならない、という。私は、もちろん、それに同意する。組織の代表者はだれでも、機関が道徳的権威をもつように心をくばらなければならない。しかし、だからといって、権威は必要だが権力は必要でない、ということにはならない。……思想の権威に権力の権威を対置するのは、無政府主義的な空文句であり、ここではこんな空文句をいれる余地があってはならない」（九八ページ）と。これらの命題はきわめて初歩的なものである。それは自明の公理であって、こういう公理が表決にかけられたのは（一〇二ページ）、おかしなことでさえあり、こういう公理に疑いがさしはさまれたのは「いまは概念の混乱がある」（同所）ためにすぎなかった。だが、インテリゲンツィア的個人主義は、不可避的に少数派を駆りたてて、大会をぶちこわすこと、多数派への

服従を拒むことを望ませるにいたった。この願望は無政府主義的な空文句で弁護する以外には、弁護のしようがなかった。非常に奇妙なことであるが、少数派は、プレハーノフが日和見主義や無政府主義などというような、法外にきつい表現を使用したといって苦情を言うほかには、なにも言うことができなかった。プレハーノフは、正当にもこの苦情を嘲笑して、こうたずねた。なぜ「ジョレス主義や、無政府主義という語をつかうのは不適当で、lèse-majesté（不敬罪）や、ポンパドゥール主義という語をつかうのはさしつかえない」のか、と。この質問にたいする答えはあたえられなかった。こうした独創的な qui pro quo〔とりちがえ〕は、同志マルトフや同志アクセリロード一派には、たえず見られる。彼らの新しい合言葉は、「腹立」の刻印をはっきりおびている。このことを指摘すると、彼らは感情を害する。――われわれは原則的な人間である、と。だが、もし諸君が部分の全体への服従を原則的に拒否するなら、諸君は無政府主義である、と彼らに言うと、このきつい表現に彼らはまたもや感情を害する！　言いかえれば、彼らはプレハーノフと一戦をまじえたがっているのだが、ただし、プレハーノフが本気に彼らを攻撃しないという条件でなのだ！

同志マルトフその他の「メンシェヴィキ」〔少数派〕はみな、これにおとらない子どもじみたやり方で、私に次のような「矛盾」があることを実証しようと、なんど企てたことであろう。『なにをなすべきか？』あるいは『一同志にあたえる手紙』から、思想的はたらきかけや、影響力の獲得のための闘争などを論じている箇所を引用して、規約による「官僚主義的」はたらきかけや、権力に基礎をおこうとする「専制的」欲求などをそれに対置する。なんとおめでたい人たちだろう！　以前にはわが党は正式に組織された全体ではなくて、個々のグループの総和にすぎなかったし、だから、これらのグループのあいだには思想的はたらきかけ以外に他の関係はありえなかったことを、彼らはもう忘れてしまったのである。いまでは、われわれは組織的な党になった。そして、このことは、まさに権力の創設、思想の権威から権力の権威への転化、党の上級機関にたいする下級機関の服従を意味する。じっさい、自分の古い同志たちにこうしたイロハを嚙んでふくめるように言ってきかせるのは、なんだか気づまりでさえある。問題が、選挙にかんして少数派が多数派に服従したがらないことに帰着すると感じられる場合には、とくにそうである！　だが、原則上からは、私に矛盾があるというこれらすべての際限のない摘発は、まったく無政府主義的空文句に帰着する。新『イスクラ』は、党機関という称号を用い、党機関の権

利を行使することはいやではないが、党の多数派に服従することはいやなのである。

もし官僚主義という空文句に原則があるとすれば、またこれが、部分が全体に服従する義務を無政府主義的に否定したものでないとすれば、それならば、われわれの見ているのは、プロレタリアートの党にたいして個々のインテリゲンツィアの負う責任を弱め、中央諸機関の影響力を弱め、最も確固としていない党内分子の自治を強め、組織上の関係を、口さきだけで純精神的にこの関係を承認することに帰着させようとつとめる日和見主義の原則である。われわれはそれを党大会で見た。そこでは、アキーモフやリーベルらが、連盟の大会でマルトフ一派の口から聞いたのと寸分たがわない、「奇怪な」中央集権主義についての演説をおこなった。日和見主義は、偶然にではなく、その本性そのものからして、またロシアだけでなく全世界で、マルトフやアクセリロードふうの組織上の見解にみちびいていること、このことをわれわれは、次に、新『イスクラ』所載の同志アクセリロードの論文を分析するさいに見るであろう。

(p) 些細な不快事が大きな満足を妨げてはならない

連盟の規約は中央委員会の承認を必要とするという決議案を連盟が否決したこと（連盟議事録、一〇五ページ）は、党大会の多数派全員がすぐさま指摘したように、「党規約の聯くべき違反」であった。こうした違反は、原則的な人人の行為としてみるなら、きっすいの無政府主義であったが、大会後の闘争の環境のもとでは、それは、党少数派が党多数派と「決着をつけ」ようとしているのだという印象をあたえざるをえなかった（連盟議事録、一一二ページ）。それは、党に服従して党内にとどまる気持ちがないことを意味していた。連盟は、規約の変更が必要であるという中央委員会の声明にかんする決議案の採択を拒否した（一二四―一二五ページ）が、その結果、党組織の会議と見なされることを望みながらも、それと同時に党の中央機関に服従することを望まないこの会合が、不法なものと認められるのは避けられなかった。だから、党多数派の味方は、みっともない喜劇の仲間いりをしないために、すぐにこのえせ党会議から退場したのである。

組織上の関係を精神的に承認するだけのインテリゲンツィア的個人主義――規約第一条の問題にかんする思想上の無定見に現われたところの――は、こうして、実践的には、その論理的結末――私がすでに九月に、すなわち一ヵ月半まえに予言しておいた結末――である党組織の破壊にゆき

ついた。しかもこの瞬間に、すなわち連盟の大会が終わったその日の晩に、同志プレハーノフは党の両中央機関内の自分の同僚たちにこう声明した。自分には「味方を撃つ」ことはできない、「分裂するよりも、額に弾丸を撃ちこんだほうがましだ」、大きな害悪を避けるために最大限の個人的な譲歩——じつをいうと、この譲歩のせいで（第一条にかんする誤った立場に現われた諸原則のためというより、はるかに多くこの譲歩のせいで）この破壊的な闘争がおこなわれているのである——をおこなわなければならない、と。ある種の全党的な意義をもつようになった同志プレハーノフのこの転換をいっそう正確に特徴づけるためには、個人的な会話や私信をもとにせずに（そういうものをもとにするのは、よくよくの場合の最後の手段である）、プレハーノフ自身が全党にたいしておこなった問題の叙述に、すなわち、連盟大会の直後、私が中央機関紙の編集局から脱退した（一九〇三年一一月一日）あとで、そしてマルトフ派が補充される（一九〇三年一一月二六日）まえに書かれて、『イスクラ』第五二号にのった彼の論文『なにをなすべきでないか？』をもとにするほうが、いっそう適切であると、私は考える。

『なにをなすべきでないか？』という論文の基本思想は、政治では一本調子であったり、度をこえて辛辣であったり、度をこえて非譲歩的であったりしてはならない、分裂を避けるためには、ときとして修正主義者（われわれに近づきつつある者、あるいは首尾一貫しない者のあいだの）にも、無政府主義的個人主義者にも譲歩する必要がある、というのである。まったく当然なことに、この抽象的な一般的命題は、『イスクラ』の読者全体を当惑させた。自分の言うことが理解されなかったのは、自分の思想が新奇なためであり、人々が弁証法を知らないためであるという、同志プレハーノフの高慢な言明（それにつづいた諸論文のなかでの）を読むと、笑わずにはいられない。実際には、『なにをなすべきでないか？』という論文が書かれたとき、これを理解できたのは、どちらも同じ頭文字で始まるジュネーヴの二つの郊外に住んでいた、一〇人ばかりの人々にすぎなかった。同志プレハーノフの不運は、大会後の少数派との闘争のあらゆる転変に参加してきたこの一〇人ばかりの人々だけをめあてとした、おびただしい暗示や、非難や、代数記号や、謎を、一万の読者のあいだに流布させた点にあった。同志プレハーノフがこの不運におちいったのは、彼がひどく不手ぎわにもちだした当の弁証法の基本命題——抽象的な真理は存在しない、真理はつねに具体的であるという——にそむいたからである。だからこそ、連盟の大会後にマルトフ派に譲歩するという、きわめて具体的な

思想を抽象的な形式につつんだのは、時宜をえないことだったのである。

同志プレハーノフが新しい鬨の声として提出したこの譲歩の精神は、次の二つの場合には正当であるし、必要でもある。すなわち、譲歩する者が、譲歩を要求する者の正しさを納得した場合（まじめな政治家は、こういう場合には、自分の誤りを率直に、公然と認める）か、より大きな害悪を避けるために、事業に有害な不合理な要求に譲歩する場合がそれである。いま検討中の論文からまったく明らかなように、筆者は第二の場合を念頭においている。彼は、はっきりと、修正主義者や無政府主義的個人主義者（すなわち、いまでは連盟の議事録から全党員が知っているように、マルトフ派）にたいする譲歩、分裂を避けるためにはどうしてもしなければならない譲歩について述べている。ごらんのとおり、同志プレハーノフの新しいと称する思想は、たいして新しくもない処生訓にそっくり帰着するのである。それは、些細な不快事が大きな満足を妨げてはならない、些細な日和見主義的愚行や些細な無政府主義的空文句は、党の大々的な分裂よりもましである、というのである。この論文を書いたとき、同志プレハーノフは、少数派がわが党の日和見主義的翼であること、少数派が無政府主義的な手段で闘争していることを、はっきり知っていた。同志プレハーノフは、ドイツ社会民主党がベルンシュタインとたたかったのと同じように（またしても si licet parva componere magnis〔小さなことと大きなことを同列においてよければ〕）、個人的譲歩によってこの少数派とたたかうという計画を提出したのである。ベーベルは自分の党の諸大会で公然とこう言明した。自分は同志ベルンシュタイン（同志プレハーノフが以前にこのんでよんだようにベルンシュタイン氏ではなくて、同志ベルンシュタイン）ほど、環境に左右される人を見たことがない。われわれは彼を仲間にいれよう、彼を帝国議会の議員にしよう。われわれは修正主義とたたかうであろうが、度をこえた辛辣さ（ソバケーヴィチ[三三]＝パルヴス流の）で修正主義者とたたかうことはしない。われわれはこの修正主義者を「親切で殺す」(kill with kindness) であろう、たしか同志M・ベーア (M. Beer) がイギリスの社会民主主義者のある会合で、イギリスのソバケーヴィチ＝ハインドマンの攻撃にたいして、ドイツ人の譲歩の精神、なごやかさ、親切さ、柔軟性、用心ぶかさを弁護して、こう特徴づけたように、と。ちょうどこれと同じように、同志プレハーノフも、同志アクセリロードや同志マルトフの些細な無政府主義と些細な日和見主義とを、「親切で殺そう」と望んだのである。なるほど、同志プレハーノフは、「無政府主義的個人主義」をま

ったくはっきり暗示する一方、修正主義者についてはわざとはっきりしない言い方をし、彼が念頭においているのは、日和見主義から正統主義へ転換しつつあるラボーチェエ・デーロ派であって、正統主義から修正主義へ転換を始めたアクセリロードとマルトフではないかのような言い方をしたが、しかしそれは、無邪気な戦闘上の策略であり、* 党内の公開性という砲火にはもちこたえることのできない貧弱な堡塁であった。

* 同志マルトィノフ、同志アキーモフ、同志ブルケールに譲歩するなどということは、党大会後には問題にもならなかった。彼らもまた「補充」を要求したなどということは、聞いたことがない。同志スタロヴェールまたは同志マルトフが彼らの文書と「通告」を「党の半数」の名においてわれわれに送ってきたとき、彼らがはたして同志ブルケールと相談したかどうかさえ、疑わしい。……連盟の大会で同志マルトフは、不屈の政治的闘士としての深い憤りに駆られながら、「リャザーノフまたはマルトィノフと結びつく」という考え、彼らとの「取引」が可能であるという考え、それどころか、共同して（編集局員として）「党務」につくことが可能であるという考えすら、拒否している（連盟議事録、五三ページ）。同志マルトフは、連盟の大会で、「マルトィノフ的傾向」を手きびしく断罪した（八八ページ）。そして、同志オルトドックスが、たぶんアクセリロードとマルトフは「同志アキーモフ、同志マルトィノフ、その他の同志についても、会合をもち、自分たちのために規約を作成し、それにしたがって自分たちの好きなように行動する権利を認めている」のではないか、とそれとなくほのめかしたとき（九九ページ）、マルトフ派は、ペテロがキリストを否認したように否認しはじめた（一〇〇ページ、「アキーモフら、マルトィノフらなどにかんする」「同志オルトドックスの懸念は」、「根拠がない」）。

ところで、だれでもここに書いている政治的時点の具体的状況を知った人、また同志プレハーノフの心理を洞察した人には、当時私が実際にとった行動以外の行動はとりえなかったことが、おわかりであろう。これは、編集局を明け渡したということで私を非難した、多数派の味方にむかって言うのである。同志プレハーノフが連盟の大会のあとで転換し、多数派の味方から、ぜがひでも調停という立場の味方になってしまったとき、私は、この転換を最もよい意味に解釈せざるをえなかった。ひょっとすると、同志プレハーノフは、その論文のなかで善意で名誉ある和解の綱領を示そうと思ったのではあるまいか？　およそそういう綱領は、当事者の双方が誤りを心から認めることに帰着する。同志プレハーノフは、多数派にどういう誤りがあると指摘していたか？――修正主義者にたいする、ソバケーヴィチ流の、度をこえた激しさ、ということである。同志プレハーノフがそのさいなにを念頭においていたのか、自分

が言ったロバうんぬんという皮肉なのか、それとも、アクセリロードのいるまえで軽率しごくにも無政府主義と日和見主義について述べたことなのかは、わからない。同志プレハーノフは「抽象的に」、しかも他人に罪を転嫁しながら述べるほうを選んだ。もちろん、これは趣味の問題である。だが、私はイスクラ派のひとりにあてた手紙のなかでも、連盟の大会でも、自分の個人的な辛辣さを公然と認めていたではないか。その私が、多数派のこうした「誤り」を認めないことが、どうしてできただろうか？ 少数派についていえば、同志プレハーノフは、彼らの誤りを、すなわち、修正主義（党大会での日和見主義についての彼のことばと、連盟の大会でのジョレス主義についての彼のことばとを参照せよ）と分裂にみちびいた無政府主義とをはっきり指摘している。個人的な譲歩や、一般にあらゆる種類の《kindness》（あいそよさ、親切さ、等々）によってこれらの誤りを認めさせ、それから生じる害悪を弱めようとする試みを、私が妨害できただろうか？ 同志プレハーノフが論文『なにをなすべきでないか？』のなかで、「いくらか一貫性を欠いているだけのために」修正主義者であるような修正主義者に属する「敵を許せ」と率直に説いたとき、私がこうした試みを妨害できただろうか？ たとえ私がこの試みの妥当性を信じていなかったとしても、中央機関紙にかんしては個人的に譲歩し、そして、多数派の立場を擁護するために中央委員会に移動する以外に、私にやりようがあったろうか？* そういう試みの可能性を絶対に否定すること、そして、せまりくる分裂の責任を自分ひとりで引き受けることとは、私自身一〇月六日付の手紙のなかで、この喧嘩を「個人的ないらだち」によるものと考えるほうに傾いていたという理由だけからでも、私にはできなかった。ところで、私は、多数派の立場を擁護することを、自分の政治的責務と考えていたし、いまでもそう考えている。この点で同志プレハーノフを頼みにすることは、困難でもあり、危険でもあった。なぜなら、あらゆる点からみて明らかだったように、同志プレハーノフは、「プロレタリアートの指導者は、自分の戦闘的な性向が政治的思慮に反するときには、この性向に従うべきではない」という、自分ののジュネーヴの空模様からみると）という意味にとりかねない空文句を弁証法的に解釈して、どうしても撃たなければならないなら、多数派を撃つほうが思慮あることだ（一一月のジュネーヴの空模様からみると）という意味にとりかねなかったからである。……多数派の立場を擁護することは必要であった。なぜなら、同志プレハーノフは、——弁証法は具体的かつ全面的に物事を検討することを要求しているにもかかわらず——革命家の自由（？）意志の問題にふれながら、革命家にたいする信頼の問題、党の一定の翼を

指導しているような「プロレタリアートの指導者」にたいする信頼の問題は、これを遠慮ぶかく回避したからである。同志プレハーノフが無政府主義的個人主義をうんぬんし、規律違反にたいして「ときには」目をつぶるように忠告し、インテリゲンツィア的な放縦は「革命思想への献身とはなんのかかわりもない感情に根ざす」ものとはいえ、「ときには」これに譲歩するようにと忠告したとき、彼はどうやら、党の多数派の自由意志をもまた考慮しなければならないこと、無政府主義的個人主義者にたいする譲歩の限度をきめることは、ほかならぬ実践家にまかさなければならないことを、忘れていたようである。子どもじみた無政府主義的なたわごととの文筆上の闘争はたやすいが、それにひきかえ同一の組織のなかで無政府主義的個人主義者とともに実践活動をすることは、むずかしい。実践上で無政府主義に譲歩してもよい限度をきめることを引き受けるような文筆家は、それによって、自分のとほうもない、真に空論家的な、文筆家的なうぬぼれをさらけだすにすぎないであろう。同志プレハーノフは、新しい分裂が起こる場合には労働者はわれわれを理解しなくなるであろう、といかめしい注意をあたえたが（バザーロフ[三〇]のことばを借りていえば、威厳をつけるために）、それと同時に、労働者はおろか世間一般にも、その真の、具体的な意味が理解できるはずがないような論文が新『イスクラ』紙上に数かぎりなく現われる端緒を、彼自身でひらいたのである。『なにをなすべきでないか？』という論文を校正刷で読んだ一中央委員[三一]が、同志プレハーノフに次のように警告したのは、異とするにたりない。二、三の刊行物（党大会および連盟大会の議事録）をいくらかちぢめようという同志プレハーノフの計画は、ほかならぬこの論文によってぶちこわされている。この論文は好奇心をあおり、なにか刺激的だが同時にまったくはっきりしないものを街の裁判にもちこみ**、「いったいなにが起こったのか？」という、当惑した疑問をかならず呼びおこす、と。同志プレハーノフの論議が抽象的で、彼のほのめかしがあいまいだったために、同志プレハーノフのほかならぬこの論文が社会民主党の敵の隊列を大喜びさせたこと、『レヴォリュツィオンナヤ・ロシア[三二]』紙上にはカンカン踊りを引きおこし、『オスヴォボジデーニエ』の首尾一貫した修正主義者たちからは有頂天の賛辞をまねいたことも、異とするにたりない。のちに同志プレハーノフがいかにも滑稽に、いかにも哀れなようすでそこからのがれでようとしたいろいろな滑稽で哀れな誤解[三三]の根源は、ほかでもなく、具体的な問題はその全具体性において検討しなければならない、という弁証法の基本命題にそむいたことにあった。とりわけ、ストルーヴェ氏が有頂天になった

のは、まったく当然である。同志プレハーノフが追求した（だが、達成することのできなかった）「良い」目的（kill with kindness）は、ストルーヴェ氏の知ったことではなかった。いまではだれもが見ているように、新『イスクラ』紙上で始まったわが党の日和見主義的翼への転換を、ストルーヴェ氏は歓迎したし、また歓迎せずにはおれなかった。たとえそれがきわめて小さな一時的なものであっても、すべての社会民主党における日和見主義へのあらゆる転換を歓迎するのは、ロシアのブルジョア民主主義者だけではない。賢い敵の評価には、まったくの誤解などはめったにないものである。君をほめるものの名を聞けば、君がどういう誤りをおかしたかがわかる、というわけである。そして、同志プレハーノフが不注意な読者をあてにして、多数派は補充にかんする個人的な譲歩に無条件に反対したのであって、党の左翼から右翼への移行に反対したのではないのだというふうに事態を見せかけようと考えているのは、むだなことである。肝心なことは、同志プレハーノフが分裂を避けるために個人的な譲歩をしたこと（これは非常に称賛すべきことである）にあるのではけっしてなく、彼が、首尾一貫しない修正主義者や無政府主義的個人主義者と争う必要を完全に認めていながら、無政府主義に実践上で譲歩してよい限度について意見を異にしていたにすぎない多数派と争うほうを選んだことにある。肝心なことは、同志プレハーノフが編集局の人的構成を変えたことにあるのではけっしてなく、彼が、修正主義や無政府主義と争うという自分の立場を裏切り、党の中央機関紙でこの立場を擁護するのをやめたことにある。

＊　同志マルトフがこれについて、私が avec armes et bagages〔武器と行李をもって〕移動した、と語ったのは、きわめて適切な表現であった。同志マルトフは、連盟にたいする戦役とか、戦闘とか、不治の負傷等々といった軍事的な比喩を、このんで用いている。私も軍事的な比喩が大好きである。現在のように、太平洋からの報道を食いいるような興味で追っているときには、とくにそうである。だが、同志マルトフ、もし軍事的にいうならば、問題はこうだったではないか。われわれは党大会で二つの砦を占領した。あなたは、連盟の大会でそれを攻撃した。最初のちょっとした撃ち合いのあとで、私の同僚である一要塞の司令官が、敵に要塞を明け渡す。もちろん、私は自分の小さな砲兵隊を集めて、ほとんど防備をほどこしていないもう一つの砦に移って、数のうえで圧倒的な敵にたいして「もちこたえよう」とする。私は、講和を提案さえする。二つの軍勢とどうして戦うことができようか？　だが、新しい同盟軍は、講和提案への返答として、私の「残った」砦を砲撃する。私は撃ちかえす。すると私のかつての同僚——司令官——は、居丈高になってこう叫ぶ。まあ見たまえ、諸君、みなさん、このチェンバレンはなんと争いずきなのだろう！　と。

** われわれは、ある締めきった部屋で、熱烈な、激しい論争をしていた。とつぜん、われわれの一人がとびあがり、街路に向いた窓を明けはなし、ソバケーヴィチ、無政府主義的個人主義者、修正主義者、等々の非を鳴らしはじめる。当然、街路にはやじ馬が集まり、われわれの敵どもは、それみろと喜びはじめた。他の論争者たちも窓に近づいて、だれも知らないようなことをほのめかさずに、われわれのそもそものはじめから、よくわかるように話してほしい、と願う。すると、窓はパタンと締められ、泥仕合のことを話すにはあたらないという（『イスクラ』第五三号、八ページ、第二欄、下から二四行目）。同志プレハーノフよ、「泥仕合」についてのおしゃべりを〔三四〇〕『イスクラ』で始めるにはあたらなかった――そう言ったほうが正しいであろう！

その当時多数派の唯一の組織された代表者として行動していた中央委員会についていえば、同志プレハーノフは、当時はもっぱら無政府主義に実践上で譲歩してよい限度の点で、中央委員会と意見が分かれていた。私が自分の脱退によって、kill with kindness 政策を自由にやれるようにしてやった一一月一日からほとんど一ヵ月たった。同志プレハーノフには、いろいろな連絡によってこの政策の適否を検討する完全な可能性があった。同志プレハーノフは、このとき論文『なにをなすべきでないか？』を発表したが、これは、マルトフ派が編集局にはいるための、いわば唯一の入場券であったし、いまでもそうである。この入場券には、修正主義（これとはたたかわなければならないが、しかし敵を許さなければならない）と無政府主義的個人主義（これは、口説きおとして、親切さで殺さなければならない）というスローガンが、目につくゴシック体で印刷されていた。みなさん、どうぞおはいりください、私は、みなさんを親切さで殺してあげますよ、――これこそ、同志プレハーノフがこの招待券によって編集局の新しい同僚たちに言っていることである。当然なことであるが、中央委員会としては、中央委員会の見地からみて無政府主義的個人主義に実践上で譲歩してよい限度について、自分の最後のことば（最後通告、つまり、和解の可能性についての最後のことば）を述べるよりしかたがなかった。諸君は和解を望むのか――それなら、諸君に、われわれの親切さ、なごやかさ、譲歩の精神などを証明すべき、しかじかの数の地位を提供する（党内の平和――論争がないという意味の平和ではなく、無政府主義的個人主義が党を破壊しないという意味での平和――を保障するには、それ以上あたえることはできない）、これらの地位を受け取って、もう一度アキーモフからプレハーノフのほうへすこしずつ転換したまえ。それとも諸君は、諸君の見地を固執し、発展させ、最後的に（たとえ組織問題の分野だけであっても）アキーモ

フのほうへ転換し、プレハーノフが正しいのではなく諸君が正しいのだということを党に納得させたいと思っているのか――それなら、文筆家グループという地位を占め、次の大会への代表選出権を手にいれ、正々堂々たる闘争によって、公然たる論戦によって多数を獲得することに着手したまえ。一九〇三年一一月二五日付の中央委員会の最後通告のなかで、マルトフ派に非常にはっきりと突きつけられたこの二者択一（『戒厳状態』と『連盟議事録への注解*』を見よ）は、一九〇三年一〇月六日に、私とプレハーノフとが旧編集局員あてにだした手紙――個人的ないらだちか（それならば、いよいよ手だてがなければ、「補充する」こともできる）、それとも原則的な意見の不一致か（それならば、まず党を納得させ、そのあとではじめて、中央諸機関の人的構成の変更を論じはじめなければならない）――と完全に合致していた。同志マルトフが、ちょうどこのとき、彼の profession de foi（信仰告白）（『ふたたび少数派として』）のなかで、次のような文章を書いただけに、中央委員会は、なおさらこのデリケートな二者択一の解決を、マルトフ派自身にまかせることができたのである。

* もちろん、マルトフが『戒厳状態』のなかで、個人的な会話などを引合いにだして、中央委員会のこの最後通告のまわりにまきつけたこんがらかった糸玉を、私は解きほぐさずにおく。それは、私が前節で特徴づけた「第二の闘争方法」であって、それを解くことに成功する見込みがあるのは、神経病理学の専門家だけであろう。同書で同志マルトフは、話合いの内容を発表しないという協定が中央委員会と結ばれていたと主張しているが、そういう協定は、いくら捜してもいままで見つけだすことができなかった、ということを述べておけば十分である。中央委員会を代表して話合いをおこなった同志トラヴィンスキーは、編集局にあてた私の手紙を『イスクラ』以外のところで発表する権利が私にあると考えると、書面で私に知らせてきた。

同志マルトフの用いた一つの言いまわしだけは、とくに私の気にいった。それは、「最悪のボナパルティズム」ということばである。私は、同志マルトフがこのカテゴリーをちょうどよいときにもちだしたと考える。この概念がなにを意味するかを、冷静に調べてみようではないか。私の考えでは、それは、形式的には適法であるが、実質的には人民（または党）の意志に反した方法で、権力を獲得することを意味する。そうではないか、同志マルトフ？　もしそうだとすれば、この「最悪のボナパルティズム」をおかしたのはどちらの側なのか、マルトフ派をはいらせない自分の形式的な権利を行使することができたのに、この権利を行使しなかったレーニンとイグレックの側なのか、――それとも、形式的には適法に編集局を占領した（「全員一致による補充」）が、それが実質的には第二回大会の意志にそわないことを知っていて、この意志が

第三回大会で点検されるのを恐れている人々の側なのか、ということは、やすんじて公衆の判断におまかせしよう。

「少数派は一つの名誉をわれわれのものとして主張する。それは、『敗北者』となっても新しい党を結成せずにやっていけるという、わが党の歴史上最初の実例を示したという名誉である。少数派のこういう立場は、党の組織上の発展にかんする彼らの見解から生まれてくるものであり、また、これまでの党活動との自分たちの強固な結びつきの自覚から生まれてくるものである。少数派は、『紙上の革命』の神秘的な力を信じないし、自分たちの努力が生活に深く根をおろしていることこそ、党の内部での純思想的な宣伝によって自分たちの組織原則の勝利をたたかいとる保障であると考えている。」（傍点は私のもの）

なんとりっぱで、誇らしいことばであろう！　そして、これが口さきだけのことであるのを体験によって納得するのは、なんとつらいことであったろう。……はばかりながら、同志マルトフ、いま私は、君たちがうける資格のなかったこの「名誉」を、多数派の名においてわれわれのものだと主張する。この名誉は、実際に大きなものであろうし、そのためにたたかう値うちがある。なぜなら、サークル根性の伝統が、異常に軽々しい分裂と、なぐり合いか、それともお手に接吻を、という格言の異常に熱心な適用とを、遺産としてわれわれに残しているからである。

大きな満足（単一の党をもつという）は些細な不快事（補充のための泥仕合のような）に優先しなければならなかったし、また実際に優先した。私は中央機関紙から脱退し、同志イグレック（私とプレハーノフとが中央機関紙編集局から党評議会へ派遣していた）は評議会を脱退した。マルトフ派は、和解を提案した中央委員会の最後のことばに、宣戦布告にひとしい手紙（さきに引用した諸出版物を見よ）で答えた。そのときに、しかもそのときはじめて、私は編集局にあてて問題の公開を要求する手紙（『イスクラ』第五三号）[三三]を書いたのである。もし修正主義をうんぬんし、一貫性の欠如や無政府主義的個人主義やいろいろな指導者の敗北について論争するのなら、諸君、つつみかくさずに、いっさいをありのままに話そうではないか、——これこそ問題の公開について述べたこの手紙の内容であった。編集局は、憤然たる悪罵と、「サークル生活の些事や泥仕合」（『イスクラ』第五三号）をもちだすな、という堂々たる訓戒とでこれに答えた。私はひそかに考えた。ああ、そうか、「サークル生活の些事や泥仕合」だって、……ああ、

ist mir recht〔けっこうだ〕。諸君、私もそれに賛成だ。これは、君たちが「補充」さわぎをはっきりサークルの泥仕合としていることを、意味するではないか。それはほんとうだ。だが、同じ（同じらしくみえる）編集局が同じ第五三号の社説で、官僚主義や形式主義などについてのおしゃべりをもちだしているのは、なんという不協和音であろう。*君は中央機関紙への補充のための闘争の問題などを提起してはならない、なぜなら、それは泥仕合だから。だが、われわれは、中央委員会への補充の問題を提起し、これを泥仕合とよばずに、「形式主義」にかんする原則的な意見の不一致とよぼう、と。——私はこう考えた。だんじて否だ、親愛な同志諸君、失礼だが、君たちにそうはさせない。君たちは私のとりでを砲撃したがっている、しかも私には、大砲を引き渡せと要求している。冗談を言うな！と。そこで、私は、『イスクラ』とは別個に、『編集局への手紙』（『私はなぜ「イスクラ」編集局から脱退したか？』）[133]を書いて、それを印刷し、そのなかで、ありのままのことを簡単に物語り、そして、君たちは中央機関紙をとり、われわれは中央委員会をとるという分配を基礎にして、和解が可能かどうか、ともう一度おたずねしたのである。どちらの側も、自分の党内にあって「よそもの」と感じることはなくなるであろうし、われわれは日和見主義への転換について論争するであろう、はじめは著作で、それから、おそらく第三回党大会でも、論争するであろう、と。

* あとでわかったところでは、この「不協和音」は、中央機関紙の編集局員のあいだの不協和音によって、ごく簡単に説明がつく。「泥仕合」のことを書いたのはプレハーノフであるが（第五七号所載の『悲しむべき誤解』のなかに述べられた彼の告白を見よ）、『わが大会』という社説を書いたのはマルトフである（『戒厳状態』、八四ページ）。各人各様というわけだ。

和解について述べたことへの返答として、評議会もふくめて、敵のすべての砲台から、砲火があびせかけられた。弾丸は雨あられとふりそそいだ。専制君主、シュヴァイツァー、官僚主義者、形式主義者、超中央部、一面的、一本調子、頑迷、狭量、疑いぶかい、親しみにくい……まことにけっこうだ、諸君！それでおしまいかね？もうそれ以上補給品はないのかね？諸君の弾薬は貧弱だね。……

こんどは、私の言う番だ。新『イスクラ』の新しい組織上の見解の内容を見よう、そして、われわれが第二回大会の討論と表決との分析によってその真の性質をすでに明らかにした、あの「多数派」と「少数派」とへのわが党の区分にたいして、この見解がどういう関係にあるかを、見ることにしよう。

（q）新『イスクラ』。組織問題における日和見主義

新『イスクラ』の原則的立場を検討する基礎としてとりあげなければならないのは、疑いもなく、同志アクセリロードの二つの小論*である。彼にとくに気にいった多くの文句の具体的な意味は、まえのほうですでにくわしく示しておいたので、いまここでは、われわれは、この具体的な意味を度外視して、「少数派」を、（あれこれの小さなことや些細なことを動機として）なにかほかのスローガンにではなく、ほかならぬこれらのスローガンにゆきつかせた思考の道すじを立ちいって調べ、これらのスローガンの原則上の意義を、その起原とかかわりなく、すなわち「補充」の問題とはかかわりなく、検討するようつとめなければならない。譲歩の精神ということが今日の旗じるしである。そこで、われわれは同志アクセリロードに譲歩して、彼の「理論」を「まじめにうけとる」ことにしよう。

* これらの小論（三三）は、論集『「イスクラ」の二年間』第二部、一二二ページ以下（サンクト・ペテルブルグ、一九〇六年）にはいっている。〔一九〇七年版への原著者注〕

同志アクセリロードの基本命題（『イスクラ』第五七号）はこうである。「われわれの運動は、そもそものはじめから、二つの相対立する傾向を潜めていたのであって、この二つの傾向の相互の敵対は、この運動自体の発展とともに発展せざるをえなかったし、また運動のうえに反映せざるをえなかった。」すなわち、「原則的にいえば、運動（ロシアにおける）のプロレタリア的目標は、西欧の社会民主党のそれと同じものである」。だが、わが国では、労働者大衆へのはたらきかけが、「彼らとは縁のない社会的分子」である急進的インテリゲンツィアによってなされている、と。つまり、同志アクセリロードは、わが党内のプロレタリア的傾向と急進的インテリゲンツィア的傾向との敵対を確認しているわけである。

この点では、同志アクセリロードは無条件に正しい。この敵対が現にあること（しかも、ロシア社会民主党のなかだけではなく）は、疑う余地がない。そればかりではない。だれでも知っているように、ほかならぬこの敵対は、今日の社会民主党が革命的（また正統的）社会民主主義派と日和見主義的（修正主義的、入閣主義的、改良主義的）社会民主主義派とに分かれている理由の大部分をなしている。そして、この区分は、ロシアでもわれわれの運動のこの一〇年間に完全に明らかになっているのである。同じく周知のことであるが、運動のほかならぬプロレタリア的傾向を

代表しているのは正統的社会民主主義派であり、民主主義的インテリゲンツィア的傾向を代表しているのは、日和見主義的社会民主主義派である。

だが、同志アクセリロードは、この周知の事実のまぢかに近づくと、臆病にもあともどりを始める。彼は、この区分が一般にロシア社会民主党の歴史上に、とくにわが党大会でどう現われたかを分析する試みを、すこしもしていない、――同志アクセリロードが書いているのは、ほかならぬこの大会のことであるにもかかわらず！　新『イスクラ』の編集局全体と同じように、同志アクセリロードも、この大会の議事録にたいして死ぬほどの恐怖を示している。このことは、以上に述べてきたことから考えれば、われわれに奇異の感をいだかせるはずもないが、しかし、われわれの運動内のいろいろな傾向を研究すると称する「理論家」の示すものとしては、真理恐怖症の独特な事例である。彼のこうした性質のために、同志アクセリロードは、われわれの運動のいろいろな傾向にかんする最も正確な最新の資料をしりぞけて、気持ちのよい夢想の分野に救いを求めている。彼はこう言っている。「合法マルクス主義または半マルクス主義は、わが国の自由主義者に文筆上の一首領をあたえたではないか。どうしていたずらものの歴史が、革命的ブルジョア民主主義派に、正統的革命的マルクス主義学派出身の一首領をあたえないわけがあろうか？」と。同志アクセリロードに気持ちのよいこの夢想について言えることは、歴史がいたずらをするようなことがあるとしても、そのことは、この歴史の分析に着手する者の思想のいたずらを正当化するものではない、ということだけである。半マルクス主義の首領という仮面の下から自由主義者がのぞいたとき、彼の「傾向」をあとづけようとした（またそうすることができた）人たちは、歴史はいたずらをすることもあるということをよりどころとするのではなしに、この首領の心理と論理の数十、数百の実例をよりどころとし、またブルジョア文献におけるマルクス主義の反映を示す彼の文筆上の性格全体の特質をよりどころとしたのである。ところが、「われわれの運動内の一般革命的傾向とプロレタリア的傾向」を分析することにとりかかった同志アクセリロードが、彼の憎んでいる党の正統的翼のあれこれの代表者たちに一定の傾向があることを、なにによっても、絶対になににによっても立証し、実証することができなかったとすれば、彼はこれによって、本式の貧困証明書を自分に発行したにすぎない。歴史はいたずらをすることもあるということをよりどころとするよりほかにしかたがないとすれば、同志アクセリロードの仕事は、全然うまくいっていないにちがいない！

同志アクセリロードのもう一つのよりどころ――「ジャコバン派」――も、いっそう教訓に富んでいる。同志アクセリロードもおそらく知らないわけはないと思うが、今日の社会民主党の革命派と日和見主義派とへの区分は、ずっとまえから――しかも、ロシアにおいてだけでなく――「フランス大革命時代との歴史的な類比」のきっかけをあたえてきた。同志アクセリロードもおそらく知らないわけはないと思うが、今日の社会民主党のジロンド派は、自分の反対者を特徴づけるのに、いつどこでも、「ジャコバン主義」とか、「ブランキ主義」などという用語にうったえている。だが、われわれは、同志アクセリロードの真理恐怖症をまねずに、わが大会の議事録を調べ、われわれが考察している諸傾向や、われわれが検討している類比を分析し確かめる資料がそのなかにないかどうか、見てみよう。

第一の例。党大会での綱領論争。同志アキーモフ（同志マルトィノフに「まったく同意している」ところの）はこう言明している。「政治権力の獲得（プロレタリアートの独裁）にかんする節は、他のすべての社会民主党綱領とくらべて、指導組織の役割がこの組織に指導される階級を後方に押しやり、前者を後者から分離しなければならないという意味に解釈できる書き方になっているし、また実際にプレハーノフはそう解釈している。だから、われわれの政治的任務の定式化も、『人民の意志』派のそれとまったく同じである」（議事録、一二四ページ）と。同志プレハーノフその他のイスクラ派は、同志アキーモフに反論して、彼を日和見主義者だと非難した。同志アクセリロードは、この論争が、社会民主党内の今日のジャコバン派と今日のジロンド派との敵対をわれわれに示している（想像上の歴史のいたずらとしてではなく、実際に）とは、考えないのだろうか！　また同志アクセリロードがジャコバン派をうんぬんしはじめたのは、彼が社会民主党内のジロンド派の仲間いりをした（彼のおかした誤りのために）からではないのだろうか？

第二の例。同志ポサドフスキーは、「民主主義的諸原則の絶対的価値」という「基本的な問題」にかんして、「重大な意見の相違」があると主張した（一六九ページ）。彼は、プレハーノフといっしょに、その絶対的価値を否認した。「中間派」または沼地派の指導者（エゴーロフ）と反イスクラ派の指導者（ゴリドブラット）は、これにきっぱり反対し、プレハーノフが「ブルジョアの戦術を模倣している」と考えた（一七〇ページ）。――これは、正統派とブルジョア的傾向とは結びついているという、ほかならぬ同志アクセリロードの考えと同じであって、ただ違うところは、アクセリロードの場合には、この考えが宙に浮いて

いるのに、ゴリドブラットの場合には特定の討論と結びついていたことである。もう一度おたずねするが、同志アクセリロードは、わが党大会でのこの討論も、今日の社会民主党内のジャコバン派とジロンド派との敵対をはっきりとわれわれに示しているとは考えないのだろうか？　同志アクセリロードがジャコバン派に反対して叫んでいるのは、彼がジロンド派の仲間いりをしたからではあるまいか？

第三の例。規約第一条にかんする論争。「われわれの運動のなかのプロレタリア的傾向」を擁護しているのはだれか、労働者は組織を恐れないこと、プロレタリアは無政府状態に共鳴しないこと、プロレタリアは「組織にはいれ！」というはげましを尊重することを強調しているのはだれか、日和見主義が骨の髄までしみこんでいるブルジョア・インテリゲンツィアを警戒せよと言っているのはだれか？　社会民主党のジャコバン派である。また急進的インテリゲンツィアを党に引きいれているのはだれか？　教授、中学生、個々人、急進的青年のことに心をくばっているのはだれか？　ジロンド派のリーベルと結びついた、ジロンド派のアクセリロードである。

ところが、同志アクセリロードは、わが党大会で「労働解放」団の多数派にたいして公然とひろめられた、「日和見主義という無実の非難」をまぬかれようとして、なんと不手ぎわに弁解していることとか！　彼は、ジャコバン主義だ、ブランキ主義だという、陳腐なベルンシュタイン流の節まわしの繰りかえしでこの非難を裏づけるというやり方で、弁解するのである！　彼は、急進的インテリゲンツィアは危険だと叫んでいるが、それは、党大会で自分自身がやった、急進的インテリゲンツィアへの配慮にあふれた演説をもみ消すためなのである。

ジャコバン主義うんぬんというこの「おどし文句」は、日和見主義以外にはなにも言いあらわしていない。自分の階級的利害を自覚しているプロレタリアートの組織と不可分に結びついたジャコバン主義者、これこそ革命的社会民主主義者である。教授や中学生のことで心をいためて、プロレタリアートの執権（ディクタツーラ）を恐れ、民主主義的諸要求の絶対的価値にあこがれるジロンド主義者、これこそ日和見主義者である。政治闘争を陰謀にせばめる思想が文献のうえで数千回も論破され、実生活によってとっくに論破され、駆逐されてしまった現在でも、大衆的な政治的扇動がなによりも重要なことが明らかにされ、いやになるほど噛んでふくめるように説明されてきた現在でもまだ、陰謀組織は危険であると考えたりするのは、日和見主義者だけである。陰謀主義やブランキ主義にたいする恐怖の真の原因は、実践運動のあれこれの特徴にあるのではなく（ベルンシュタイン

一派は、ずっとまえからそうだというふうに証明しようとむだ骨おりをしているが)、ブルジョア・インテリゲンツィアのジロンド主義的な臆病にあるのであって、このインテリゲンツィアの心理は、今日の社会民主主義者のあいだに非常にしばしば現われているのである。四〇年代と六〇年代のフランスの陰謀家的革命家の戦術をとるなと警告するというかたちで、新しいことば(かつて何百回も述べられた)を述べようという新『イスクラ』のこうしたむだ骨おり(第六二号、社説(註))ほど、滑稽なものはない。たぶん『イスクラ』の次の号では、今日の社会民主党のジロンド派は、労働者大衆のあいだの政治的扇動の意義や、階級にたいする党のはたらきかけの基礎としての労働者新聞の意義を、イロハとしてずっとまえから暗記し、そらでおぼえているような、そういうフランス陰謀家のグループが四〇年代にあったということを、示してくれるであろう。

けれども、新しいことばという触れこみで、わかりきったことを繰りかえし、イロハをくどくどしく述べたてようとする新『イスクラ』の傾向は、けっして偶然ではなく、アクセリロードやマルトフがわが党の日和見主義的翼に足を踏みこんだためにおちいった立場から生まれる、避けられない結果である。この立場がそうさせるのである。大会での闘争の見地と大会で生じた党のいろいろな色合いや区分との見地からすれば弁護しようのない自分の立場を、いくらかでも是認してくれるものを遠い過去に求めるためには、日和見主義的な空文句を繰りかえさねばならないし、あともどりしなければならない。同志アクセリロードは、ジャコバン主義がどうだブランキ主義がどうだというアキーモフ流の迷論につけくわえて、「一面的」で「熱中」しすぎていたのは、「経済主義者」だけでなく「政治家」もそうであったなどというアキーモフ流の愚痴をもちだしている。自分はこうした一面性と熱中を完全に超越しているものとうぬぼれている新『イスクラ』紙上に、こういう主題についての大げさな議論がのっているのを読むと、諸君は当惑して自問するであろう。彼らはだれの肖像(註)を書いているのか? どこでこんな話を聞いてくるのか? と。いったい、ロシアの社会民主主義者が「経済主義者」と政治家に分かれていたのはずっと昔の話であることを、知らない者があるだろうか? 党大会前の一、二年間の『イスクラ』に目をとおしてみれば、「経済主義」との闘争がはやくも一九〇二年にはおさまってゆき、まったくやんでしまったことが、おわかりになろう。また、たとえば一九〇三年七月(第四三号)には、「『経済主義』の時代」が「最後的に克服された」時代として述べてあり、「経済主義」は「最後的に葬りさられた」ものと見なされ、政治家の熱中

が明らかな隔世遺伝と見なされていることが、おわかりになろう。では、なぜ『イスクラ』の新編集局は、この最後的に葬りさられた区分に立ちかえるのか？　いったい、われわれが大会でアキーモフらとたたかったのは、彼らが二年前に『ラボーチェエ・デーロ』でおかした誤りのためだったろうか？　もしわれわれがそういうふうにふるまったのだとすれば、愚の骨頂であろう。だが、だれでも知っているように、われわれはそういうふうにはふるまわなかった。われわれがアキーモフらと大会でたたかったのは、『ラボーチェエ・デーロ』で彼らのおかした古い、最後的に葬りさられた誤りのためではなく、彼らが大会でのその討論や、その投票でおかした新しい誤りのためであった。われわれが、どの誤りは実際に克服されているか、どの誤りはまだ生きていて、論争を必要としているかを判断する基礎にしたのは、彼らが『ラボーチェエ・デーロ』でとった立場ではなく、彼らが大会でとった立場であった。大会のころには、経済主義者と政治家とへの古い区分は、もう存在してはいなかった。だが、多種多様な日和見主義的傾向はまだ存続していて、それらの傾向は多くの問題にかんする討論や投票に現われ、けっきょく、「多数派」と「少数派」への党の新しい区分にみちびいたのであった。要点はまさに、『イスクラ』の新編集局が、たやすく理解できる理由から、この新しい区分とわが党内の今日の日和見主義との関連をぼかそうとつとめているという点に、また、そのために彼らが新しい区分から古い区分に逆もどりせざるをえなくなっているという点にある。新しい区分の政治的起原を説明する能力がないために（あるいは、譲歩の精神からこの起原にヴェールをかけたがっているために）、彼らは、ずっとまえに克服された古い区分について言いふるされたことを、くどくど繰りかえさざるをえないのである。だれでも知っているように、新しい区分の基礎にあるのは、組織原則（規約第一条）にかんする論争に始まって、無政府主義者にふさわしい「実践」に終わった組織問題についての意見の不一致である。ところが、「経済主義者」と政治家とへの古い区分の基礎にあったのは、主として戦術問題についての意見の不一致であった。

* 『イスクラ』第五三号の「経済主義」にかんするプレハーノフの論文を見よ。この論文の副題には、小さな誤植があるようだ。「第二回党大会にかんするひとりごと」のかわりに、明らかに「連盟大会にかんする」とか、おそらくは「補充にかんする」とかあるべきである。ある条件のもとでは個人的要求について譲歩するのは適当であるが、それにひきかえ、党を騒がせている諸問題を混同したり、正統派から日和見主義へ転換しはじめたマルトフやアクセリロードの新しい誤りの問題を、おそらくいまでは綱領や戦術の多くの問題で日和

見主義から正統派へ転換する用意のあるマルトィノフらやアキーモフらの古い（いまでは、新『イスクラ』以外のだれも思いださない）誤りの問題とすりかえることは、許されない（俗物的な見地からではなく、党的見地からみて）ことである。

党生活のいっそう複雑な、真に今日的な、さしせまった諸問題から、とっくに解決ずみで、いまわざわざほじくりかえされている諸問題へと、こういうふうに後退することを、新『イスクラ』は滑稽な迷論で正当化しようと努力しているが、こうした迷論は追随主義とよぶほかはない。同志アクセリロードを筆頭に、新『イスクラ』のすべての記事をつらぬいているものは、内容は形態よりも重要であり、綱領と戦術は組織よりも重要であるとか、「組織の生活力は、この組織が運動にもちこむ内容の範囲と意義とに正比例する」とか、中央集権主義は「自足的なあるもの」ではなく、「万能のお守り札」でもない、等々という深遠な「思想」である。深遠で、偉大な真理だ！　たしかに、綱領は戦術より重要であり、戦術は組織より重要である。イロハは語原学より重要であり、語原学は文章論より重要である。――だが、文章論の試験に落第してしまい、いまや、原級にもう一年とどめられたことをえらがったり、自慢している人たちのことを、どう言ったらいいのか？　同志アクセリロードは、原則的な組織問題にかんしては日和見主義者として論じたし（第一条）、組織内では無政府主義者として行動したが（連盟の大会）、――いまや、次のように言って社会民主主義を深めるのである。そんなブドウはすっぱくって食えない！　いったい組織とはなにか？　それは形態にすぎない。中央集権主義とはなにか？　それはお守り札ではない。文章論とはなにか？　それは語原学より重要ではない、それは語原学の諸要素の結合形式にすぎない、と……。『イスクラ』の新編集局は、勝ちほこってこう質問する。「規約がどんなに完全なものに思われようと、大会は規約を採択したことよりも、党の綱領を作成したことで党活動の中央集権化をはるかに促進した、とわれわれが言うなら、同志アレクサンドロフはわれわれに同意するのではないだろうか？」（第五六号、付録）と。この古典的な格言は、社会民主党は人類と同じようにつねに自分で解決できる任務だけを自分に提起するという、同志クリチェフスキーの有名な文句におとらず、広範でゆるぎない歴史的名声を博するであろうと期待してよい。なぜといって、新『イスクラ』のこの迷論も、それとまったく同じ流儀のものではないか。同志クリチェフスキーの文句はなぜ嘲笑されたのか？　それは、ある一部の社会民主主義者の戦術問題における誤りと、政治的任務を正しく提起する

能力を欠いていることとを、彼が哲学のように見せかけた俗論で正当化しようとしたためである。それとまさに同じやり方で、新『イスクラ』もまた、ある一部の社会民主主義者の組織問題における誤り、ある同志たちに無政府主義的空文句を吐かせるにいたったインテリゲンツィア的なぐらつきを、綱領は規約よりも重要であるとか、綱領問題は組織問題よりも重要であるとかいった俗論で正当化しようとしているのである！　いったい、これは追随主義ではあるまいか？　これは、原級にもう一年とどめられたのを自慢することではあるまいか？

綱領の採択は、規約の採択よりも活動の中央集権化をいっそう促進する。哲学のように見せかけられたこの俗論は、社会民主主義よりもブルジョア・デカダン主義にはるかに近い急進的インテリゲンツィアの心理のにおいをなんとぷんぷんさせていることだろう！　この有名な空文句のなかでは、中央集権化ということばは、まったく象徴的に理解されているではないか。この空文句の筆者たちに考える能力がなく、あるいは考える意志がないにしても、すくなくとも彼らは、ブンド派と共同の綱領を採択したことがわれわれの共同活動の中央集権化をもたらさなかっただけでなく、われわれを分裂から守ってもくれなかったという、簡単な事実なりと思いだすがよかろう。綱領問題と戦術問題とにおける統一は、党を統合し党活動を中央集権化するための必要条件ではあるが、まだ十分な条件ではない（やれやれ！　あらゆる概念がごっちゃにされてしまった現在では、なんというイロハをくどくどと述べたてなければならないことだろう！）。そのためには、さらに組織の統一が必要である。そして、この組織の統一は、家族的なサークルの枠をいくらかでもはみだしている党にとっては、はっきりとした形をもった規約なしには、多数にたいする少数の服従なしには、全体にたいする部分の服従なしにはありえない。われわれのあいだに綱領や戦術の基本問題における統一がなかったあいだは、われわれは、自分たちは分散とサークル主義の時代にあると、率直に述べていた。統合するまえに分界線を引かなければならないと、率直に言明していた。共同の組織の形態のことなどはもちださずに、綱領と戦術の分野で日和見主義と闘争するという、新しい（当時は、実際に新しかった）諸問題について、もっぱら論じていた。いまでは、われわれみなが認めているように、この闘争によってすでに十分な統一が確保されており、この統一は、党の綱領や、戦術にかんする党の諸決議のうちに定式化されている。いまやわれわれに必要なことは、次の一歩を踏みだすことである。そして、われわれは、われわれみなの合意にもとづいて、この一歩を踏みだした。す

なわち、すべてのサークルを一つに融合させる単一の組織の諸形態をつくりあげたのである。ところがいま、われわれはうしろに引きもどされ、これらの形態はなかばぶちこわされて、無政府主義的行動に、無政府主義的空文句に、党の編集局に代わるサークルの復活に引きもどされたのである。そしていまこの一歩後退が、イロハは文章論の知識よりも正しい話し方に役だつといって、正当化されているのである！

三年前に戦術の諸問題について咲きほこっていた追随主義の哲学は、いまや組織の諸問題に適用されて復活している。新編集局の次のような議論をとってみたまえ。同志アレクサンドロフは言う。「戦闘的な社会民主主義的潮流は、党内で思想闘争によるだけでなく、特定の組織形態によっても実現されなければならない」と。すると編集局はわれわれにこう教える。「思想闘争と組織形態とのこうした対比は悪くはない。思想闘争は一つの過程であるが、組織形態はたんなる……形態」（第五六号の付録、四ページ、第一欄の下のほうに、ほんとうに、このとおり印刷してある！）、「流動し発展してゆく内容――党の発展してゆく実践活動をつつむべき形態にすぎない」と。これは砲弾とは砲弾のこと、爆弾とは爆弾のこと、という小咄とまったく同じ趣旨のものである。思想闘争は一つの過程であるが、組織形態は内容をつつむ形態にすぎない、と！　問題は、われわれの思想闘争が今後より高い諸形態、全員に拘束力をもつ党組織の諸形態につつまれるか、それとも古い分散状態と古いサークル主義との諸形態につつまれるか、ということにある。われわれはより高い形態からより原始的な形態へ引きもどされた。しかもこのことが、思想闘争は一つの過程であるが、形態は――形態にすぎないということで正当化されているのだ。ちょうどこれと同じように、かつて同志クリチェフスキーは、われわれを計画としての戦術から過程としての戦術に引きもどそうとした。

形態に気をとられて内容を見おとしかねないとかいう人に対抗してだされた、「プロレタリアートの自己教育」という新『イスクラ』のこの仰々しい空文句（第五八号、社説）をとってみたまえ。これは、アキーモフ主義第二号ではあるまいか？　アキーモフ主義第一号は、戦術上の任務を提起する点でのある一部の社会民主主義的インテリゲンツィアの立ちおくれを、「プロレタリア的闘争」のいっそう「深い」内容とか、プロレタリアートの自己教育とかを言いたてて正当化しようとした。アキーモフ主義第二号は、組織の理論と実践との問題におけるある一部の社会民主主義的インテリゲンツィアの立ちおくれを、同じような深遠さで、組織は形態にすぎないとか、肝心なことはプロ

レタリアートの自己教育にあるとかと言いたてて、正当化している。ちっちゃな弟の世話をしてくださる紳士諸君よ、プロレタリアートは組織と規律を恐れない！　プロレタリアートは、組織にはいりたがらない教授諸君や中学生を、彼らが組織の統制のもとで活動しているからといって、党員と認めるようにする世話はしないであろう。プロレタリアートは、その全生活によって、多くのインテリ分子よりもはるかに徹底的に、組織に服するように教育される。われわれの綱領とわれわれの戦術をいくらかでも理解したプロレタリアートは、組織上の立ちおくれを、形態は内容よりも重要ではないなどと言いたてて正当化しようとはしないであろう。組織と規律の精神、無政府主義的空文句にたいする敵意と軽蔑の精神による自己教育に欠けているのは、プロレタリアートではなくて、わが党内の若干のインテリゲンツィアである。それはアキーモフ第一号らが、政治闘争をやる準備ができていないといって、プロレタリアートを中傷したのと同じように、アキーモフ第二号らは、組織にはいる準備ができていないといって、プロレタリアートを中傷するのである。自覚した社会民主主義者となり、自分は党員であると感じるようになったプロレタリアは、戦術問題における追随主義を拒否したときと同じ侮蔑の念をもって、組織問題における追随主義を拒否するであろう。

最後に、新『イスクラ』の「一実践家」の深遠な迷論をとってみたまえ。彼はこう言っている。「革命家の活動」（意味を深遠にするための傍点なのだ）「を統合し、中央集権化する『戦闘的な』中央集権的組織という思想は、正しくこれを理解すれば、当然、この活動が現に存在する場合にはじめて実現されるものである」（新しくもあれば、賢明でもある）。「形態としての組織そのものは」（謹聴、謹聴！）「その内容をなす革命的活動の成長と同時にしか」（この引用文のなかの傍点はすべて原筆者のもの）「成長することができない」（第五七号）と。これは、葬列を見て、いくら運んでも運びきれないように、と叫んだ民話の主人公を、またしても思いださせるではないか？　ほかならぬわれわれの活動の形態（すなわち組織）がずっとまえから内容に立ちおくれていること、しかもひどく立ちおくれていること、また遅れた人々にむかって、歩調を合わせろ！　先ばしるな！　と叫びかけることが、党内のばかのイヴァヌーシカらにしかふさわしくないことを理解しないような実践家（括弧なしの）は、おそらく、わが党内に一人もいまい。試みにわが党を、たとえばブンドとでもくらべてみたまえ。わが党の活動の内容が、*ブンドのそれよりもはるかに豊富で、多面的で、広範で、深いことは、すこしも疑う余地がない。理論上の視野はより広く、綱領はより進

んだものであり、労働者大衆へのはたらきかけ（組織された手工業者へのはたらきかけだけでなく）はより広くまた深く、宣伝と扇動はより多面的で、先進分子や一般党員の政治活動はより生きいきと脈うち、デモンストレーションやゼネラル・ストライキのさいの民衆運動はより壮大で、非プロレタリア層のあいだの活動はより精力的である。ところで、「形態」は？　われわれの活動の「形態」は、ブンドのそれにくらべると、許せないほど遅れていて、自分の党の事業を「鼻くそをほじくりながら」見物していない者なら、だれでも見るにしのびず、顔を赤らめずにはいられないほど遅れている。活動の内容にくらべて活動の組織が遅れていることが、われわれの弱点であり、またそれは、大会のずっとまえから、組織委員会が組織されるずっとまえから、われわれの弱点であった。形態が未熟で強固でないことは、内容の発展のうえでさらに大きく前進することを不可能にし、恥ずべき停滞を引きおこし、力の浪費にみちびき、言行の不一致にみちびいている。だれもがこの不一致に悩まされていた。――ところがそこへ、アクセリロードらや新『イスクラ』の「一実践家」らが現われて、形態は、自然に、内容と同時にのみ成長しなければならない！　という深遠な説教をするのである。

＊　わが党活動の内容が大会で革命的社会民主主義の精神に立って定められた（綱領その他で）のは、もっぱら闘争を代価としてであったこと、その代表たちがわが「少数派」のなかで数的に優勢を占めているあの反イスクラ派やあの沼地派にたいする闘争を代価としてであったことは、いまさら言うまでもない。「内容」の問題にかんして、たとえば、旧『イスクラ』の六号（第四六―第五一号）と、新『イスクラ』の一二号（第五二―第六三号）とをくらべるのも、また興味がある。だが、これは他の機会にゆずろう。

諸君がたわごとを深遠にしたり、日和見主義的空文句を哲学的に基礎づけたりしようとすると、組織問題（第一条）にかんする小さな誤りから、こういう結果になるのである。のろのろとした足どりで、おずおずとジグザグ踏んで！――以前、われわれは、このテーマを戦術問題にあてはめて歌うのを聞いたものだ。ところが、いまではわれわれは、それを組織問題にあてはめて歌うのを聞いている。組織問題における追随主義は、無政府主義的個人主義が自分の（はじめはおそらく偶然の）無政府主義的な偏向を、見解の体系に、特別の原則的な意見の相違に高めはじめるとき、この無政府主義的個人主義の心理から生まれてくる、当然で避けられない産物である。連盟の大会では、この無政府主義の端緒が見られたが、新『イスクラ』のなかでは、これを見解の体系に高めようとするいろいろな試みが見られる。

これらの試みは、社会民主党に同調するブルジョア・インテリゲンツィアの見地と、自分の階級的利害を自覚したプロレタリアの見地との相違にかんしてすでに党大会で述べられた考えを、みごとに裏書きしている。たとえば、われわれがその深遠さをすでに承知している新『イスクラ』の例の「一実践家」は、私のことを、党を中央委員会という支配人をいただく「巨大工場」と考えていると言って責めている。(第五七号、付録)。この「一実践家」は、彼のもちだしたこのおどし文句が、プロレタリア組織の実践にも理論にも通じていないブルジョア・インテリゲンツィアの心理を一挙にさらけだしていることに、気づいてもいない。ある人にはおどし道具としか見えない工場こそ、まさにプロレタリアートを結合し、訓練し、彼らに組織を教え、彼らをその他すべての勤労・被搾取人民層の先頭に立たせた資本主義的協業の最高形態である。資本主義によって訓練されたプロレタリアートのイデオロギーとしてのマルクス主義こそ、ぐらついたインテリゲンツィアに、工場がそなえている搾取者としての側面(餓死の恐怖にもとづく規律)と、その組織者としての側面(技術的に高度に発達した生産の諸条件によって結合された共同労働にもとづく規律)との相違を教えたたし、いまも教えている。ブルジョア・インテリゲンツィアには服しにくい規律と組織を、プロレタリアートは、ほかならぬ工場というこの「学校」のおかげで、とくにやすやすとわがものにする。この学校を法外に恐れ、その組織者としての意義をまったく理解しないことは、ほかならぬ小ブルジョア的生活条件を反映する思考方法の特徴であって、この思考方法は、ドイツの社会民主主義者が Edelanarchismus すなわち「高貴な」人士の無政府主義——私なら貴族的無政府主義とでも言いたい——とよんでいる無政府主義の一種を生みだしているのである。この貴族的無政府主義は、とくにロシアのニヒリストに固有のものである。党組織は、彼らには奇怪な「工場」のように思われ、部分が全体に服従し、少数が多数に服従することは、彼らには「農奴的隷属」のように思われる(アクセリロードの小論を見よ)。中央部の指導のもとでの分業は、彼らに、人間を「歯車とねじ」に転化することに反対する悲喜劇的な悲鳴をあげさせる(なかでも、編集局員を寄稿者に変えることは、特別ひどい種類の転化だと考えられている)。党の組織規約について述べると、さげすむように顔をしかめ、規約など全然なくてもよいという、軽蔑的な(「形式主義者」にたいして)意見を吐く。

これはありそうもないことであるが、事実なのである。ほかならぬこういう教訓に富んだ批評を、同志マルトフは『イスクラ』第五八号で私にくだしているが、説得力をい

っそうもたせるために、『一同志にあたえる手紙』のなかの私自身のことばを引合いにだしている。ところで、党ができている時代に、分散の時代、サークルの時代からとった例をひいて、サークル根性と無政府状態の維持とを合理化するのは、「貴族的無政府主義」ではあるまいか、それは追随主義ではあるまいか？

　なぜ以前には、われわれには規約が必要でなかったのか？　それは、党が組織上のどんな結びつきによっても結合されていない個々ばらばらのサークルからなっていたからである。一つのサークルから他のサークルに移ることは、あれこれの個人の「自由意志」の問題にすぎなかった。というのは、彼らは、全体の意志を一定の形に表現したものにまったく当面していなかったからである。サークル内部の論争問題は、規約にしたがって解決されたのではなく、「闘争と脱退するとおどしとによって」解決されていた――私は、一般に多くのサークルの経験にもとづき、とくに六名からなるわれわれ自身の編集局の経験にもとづいて、『一同志にあたえる手紙』[三〇]のなかでこのように述べた。サークルの時代には、こういう現象は当然で避けられなかったが、この現象をほめたたえたり、それを理想と考えようなどとは、だれにも思いもよらなかった。だれもがこの分散状態を嘆き、だれもがこれに苦しみ、ばらばらなサークルを一定の形をもった党組織に融合したいと、熱望していた。ところが、この融合ができあがったいま、われわれはあとに引きもどされ――最高の組織上の見解という触れこみで――無政府主義的な空文句をふるまわれているのである！　家族的サークルのオブローモフかたぎ[三九]というゆったりした部屋着とスリッパに慣れた人たちには、形式的な規約は狭くるしく、窮屈で、厄介で、いやしく、官僚主義的で、農奴制的で、思想闘争の自由な「過程」を拘束するもののように思われる。貴族的無政府主義には、狭いサークル的な結びつきを広い党的な結びつきとおきかえるためにこそ、この形式的な規約が必要であることがわからない。サークル内部の結びつき、あるいはサークル相互の結びつきに一定の形をあたえることは不必要であったし、不可能でもあった。なぜなら、この結びつきは友情か、でなければ説明ぬきの、理由ぬきの「信頼」にもとづいて維持されていたからである。党的な結びつきは、そのいずれにもとづいても維持できないし、また維持してはならない。それは、ほかならぬ形式的な、「官僚主義的に」（あまやかされたインテリゲンツィアの見地からすれば）書かれた規約を基礎としなければならない。そしてこの規約の厳守だけが、サークル的な意地っぱりや、サークル的なわがままや、思想闘争の自由な「過程」とよばれているサークル的な口論

の方法からわれわれを守ってくれるのである。

新『イスクラ』の編集局は、アレクサンドロフに反対する切札として、「信頼というものはデリケートなものであって、それを無理に心や頭のなかにたたきこむことはけっしてできない」（第五六号、付録）という訓戒じみた指摘をしている。信頼、なまの信頼というカテゴリーをこういうふうにもちだすことこそ、彼らの貴族的無政府主義と組織上の追随主義とを、さらにもう一度さらけだすものであることが、編集局にはわからないのである。編集局の六人組であれ、イスクラ組織であれ、私がたんなるサークルの一メンバーにすぎなかったときには、私は、たとえば、イクスといっしょには活動したくないという自分の気持ちを、説明ぬきの、理由ぬきの不信だけを根拠にして正当化する権利をもっていた。だが、党員となったなら、私には、漠然とした不信だけを根拠にする権利はなくなる。なぜなら、そういうものを根拠にすることは、古いサークル主義のあらゆるむら気やあらゆる意地っぱりに戸をあけはなすことになるからである。私には、自分の「信頼」または「不信」の理由を正式な論拠によって説明する、すなわち、われわれの綱領、われわれの戦術、われわれの規約の正式に確立されたあれこれの命題にもとづいて説明する義務がある。私は、説明ぬきで「信頼する」とか、「信頼しない」とか言うだけにとどまらずに、自分の決定や、一般に党のあらゆる部分のすべての決定について、全党に説明する責任のあることを認める義務がある。自分の「不信」を表明し、この不信から生まれてくる見解や希望をとおすためには、私は正式にきめられた手続に従う義務がある。すでにわれわれは、説明ぬきの「信頼」というサークル的な見地から、信頼を表明し点検するための、説明義務をともなう、正式にきめられた方法を守ることを要求する党的な見地に、高まったのである。ところが、編集局は、われわれをうしろに引きもどし、自分の追随主義を新しい組織上の見解とよんでいるのである！

文筆家諸グループが編集局に自分たちの代表をいれよと要求するような場合について、われわれのいわゆる党編集局がどう論じているかを見てみたまえ。「われわれは、腹をたてはしない、規律について叫びだしはしない」——いつどこでも、上から規律など見くだしてきた貴族的無政府主義者たちは、われわれにこう教える。われわれは、そのグループが有能であれば、それと「話をつけよう」（原文のまま！）し、有能でなければその要求を一笑に付そう、と彼らは言う。

まあ考えてくれたまえ、ここでは、なんと高尚な貴族趣味が、野卑な「工場的」形式主義に反対していることだろ

う！　だが、実際には、ここに見られるのは、自分が党機関ではなくて旧サークルの残片であることを感じている編集局が、サークル主義の空文句を装いを新たにして党にささげていることである。こういう立場に固有ないつわりは、口さきではもう終わったと偽善的に宣言されているあの分散を、社会民主党の組織原則にまつりあげる無政府主義的な迷論に、かならずみちびく。下級から上級にいたる党合議体や機関の階層制はすこしも必要でない。――貴族的無政府主義には、こういう階層制は、省や局などのようなお役所ふうの作りごとに思われる（アクセリロードの小論を見よ）。――また、部分が全体に服従する必要はすこしもなく、「話をつける」ための、あるいは境界を定めるための党的な方法を「形式的＝官僚主義的に」規定する必要はすこしもない。古いサークル的な口論を、「真に社会民主主義的な」組織方法についての空文句できよめればよいのである。

ここでこそ、「工場」という学校を卒業したプロレタリアが、無政府主義的個人主義に教訓をあたえることができるし、またあたえなければならない。自覚した労働者は、インテリゲンツィアをインテリゲンツィアだからといって避けていた幼年時代を、もうとっくにぬけだしている。自覚した労働者は、社会民主主義的インテリゲンツィアのもっている、いっそう豊かな知識のたくわえ、いっそう広い政治的視野を、評価することを知っている。だが、われわれのあいだに真の党が形成されるにつれて、自覚した労働者は、プロレタリア軍の戦士の心理と、無政府主義的空文句をひけらかすブルジョア・インテリゲンツィアの心理とを区別することを、学ばなければならない。一般の党員だけでなく、「上層幹部」にも、党員としての義務の履行を要求することを、学ばなければならない。かつて彼らが戦術問題における追随主義に立ちむかったときと同じ侮蔑の念をもって、組織問題における追随主義に立ちむかうことを、学ばなければならない。

ジロンド主義や貴族的無政府主義と不可分の関係にあるのは、組織問題における新『イスクラ』の立場の最近の特徴である。それは、中央集権主義に反対して自治主義を擁護することである。官僚主義だとか専制だとかいうわめきたてや、「非イスクラ派」（大会で自治主義を擁護した）の不当な軽視」を残念がることや、「絶対服従」を要求されているという滑稽なわめきたてや、「ポンパドゥール主義」にたいする激しい苦情その他等々は、ほかならぬこのような原則的意味をもっている（もしなにかの意味をもっているとすれば）[*]。どの党の日和見主義的翼も、綱領上でも、戦術上でも、組織上でも、あらゆる種類の立ちおくれ

をつねに固執し正当化する。新『イスクラ』の組織上の立ちおくれの擁護（追随主義）は、自治主義の擁護と固く結びついている。もっとも、自治主義は、一般的にいって、旧『イスクラ』の三年間の宣伝によって、すでにひどく信用をおとしているので、新『イスクラ』も、これに公然と賛成することをまだ恥じている。新『イスクラ』はまだ、中央集権主義に共鳴するとわれわれに断言しているが、しかしこのことは、中央集権主義ということばを傍点つきで書くことで、証明されているにすぎない。実際には、新『イスクラ』の「真に社会民主主義的な」（無政府主義的な、ではないのか？）えせ中央集権主義の「諸原則」をほんの軽く批判にかけるだけで、いたるところに自治主義の見地が暴露されるのである。アクセリロードとマルトフが組織問題でアキーモフのほうへ転換したことは、いまでは、だれの目にも明らかではあるまいか？　彼らは、「非イスクラ派の不当な軽視」という意味深長なことばで、自分でもこのことをおごそかに承認しているではないか？　ところで、アキーモフとその僚友たちがわが党大会で擁護したのは、自治主義ではなかったか？

＊　ここでは、一般にこの節ではそうであるが、これらのわめきたての「補充に関係した」意味はいちおう度外視する。

マルトフとアクセリロードが、連盟の大会で、部分は全体に服従しなくてもよく、部分は全体にたいする自分の関係を決定するにあたって自治的であり、この関係を定式化している在外連盟の規約は党多数派の意志や党中央部の意志に反しても有効であると、滑稽なほど熱心に論証したとき、彼らが擁護したものは、この自治主義（無政府主義でないとすれば）にほかならなかった。いま同志マルトフは、公然と、新『イスクラ』（第六〇号）紙上でも、中央委員会による地方委員の任命の問題についてほかならぬこの自治主義を擁護している。(二三〇) 同志マルトフが自治主義を擁護するために連盟の大会で用い、いままた新『イスクラ』で用いている＊子どもじみた詭弁は、ここでは度外視しよう。ここで私に重要なのは、中央集権主義に反対して自治主義を擁護する歴然たる傾向が、組織問題における日和見主義に固有な原則的特徴であることを、指摘することである。

＊　規約のいろいろな条項を検討するさい、同志マルトフは、ほかならぬ部分にたいする全体の関係を述べている条項、すなわち、中央委員会は「党の勢力を配分する」（第六条）を省略した。活動家をある委員会から他の委員会に移動させずに、勢力を配分することができるであろうか？　じっさい、こういうイロハに立ちいって説明するのは、なんだかきまりがわるいくらいである。

官僚主義の概念を分析しようとするおそらく唯一の試みは、新『イスクラ』（第五三号）で「形式的民主主義の原

則」（傍点は原筆者のもの）と「形式的官僚主義の原則」とを対置していることである。この対置（残念なことには、非イスクラ派についての指摘と同じように、展開されてもいないし、説明されてもいないが）は真理の一片をふくんでいる。官僚主義対民主主義、これはまさしく中央集権主義対自治主義であり、まさしく革命的社会民主主義派の組織原則対社会民主党の日和見主義者の組織原則である。後者は下から上へすすもうとつとめ、したがって、できればどこでも、できるかぎり自治主義、「民主主義」を固執し、（法外に熱心な者の場合には）無政府主義にゆきつく。前者は上から出発しようとつとめ、部分にたいする中央部の権利と権限とを拡大することを固執する。分散とサークル主義との時代にこの上部となり、そして革命的社会民主主義派が組織上の出発点にしようとつとめたのは、不可避的に、サークルの一つ、その活動とその革命的な首尾一貫性とによって最も有力なサークル（われわれの場合には「イスクラ」組織）であった。党の事実上の統一が再建され、時代おくれになった諸サークルがこの統一のなかに解消された時代にこの上部となるのは不可避的に、党の最高機関としての党大会である。この大会は、活動的な諸組織のすべての代表をできるかぎり結びつけ、中央諸機関（しばしば、党の遅れた分子よりも先進分子を満足させ、党の日和見主義的翼よりも革命的翼の気にいるような構成をもった）を任命して、それらの機関を次の大会までの彼らの上部とする。すくなくとも、ヨーロッパ人の社会民主主義者のあいだでは、そうなっている。そして、無政府主義者が原則的にきらっているこの習慣は、アジア人の社会民主主義者にも――すこしずつではあるが、困難をともない、争いや泥仕合をともないながらも――ひろがりはじめている。

私が述べた組織問題における日和見主義の原則的特徴（自治主義、貴族的またはインテリゲンツィア的無政府主義、追随主義およびジロンド主義）が、革命的翼と日和見主義的翼とへの区分があるところでさえあれば（ところで、この区分のないところがあろうか？）全世界のあらゆる社会民主党のうちに mutatis mutandis（必要な変更をくわえて）見うけられることを指摘するのは、きわめて興味ぶかい。このことは、ごく最近、ほかでもなくドイツ社会民主党で現われた。それは、ザクセン第二〇選挙区における選挙の敗北（いわゆるゲーレ事件*）が、党組織の原則を日程にのぼせたときのことであった。この事件がきっかけとなって原則的な問題が提起されたのには、ドイツの日和見主義者たちの熱心さがあずかって力があった。ゲーレ（元牧師で、かなり有名な著書『工場労働者としての三ヵ月』[三]の著者で、ドレスデン大会の「花形」の一人）は、彼自身

最も熱烈な日和見主義者であって、ドイツの首尾一貫した日和見主義者たちの機関誌である『社会主義月刊』(三三)は、すぐさま彼を「擁護した」。

＊　ゲーレは、一九〇三年六月一六日、ザクセン第一五区から国会に選出されたが、ドレスデン大会のあとで国会議員を辞任した。ローゼノフの死後、欠員のできた第二〇区の選挙人は、ふたたびゲーレに立候補を勧めようとした。党中央部とザクセン中央扇動委員会とは、これに反対した。そして、形式上はゲーレの立候補を禁止する権限をもっていなかったが、それでもゲーレに立候補をやめさせることができた。選挙では、社会民主党は敗北した。

綱領における日和見主義は、当然に、戦術における日和見主義および組織問題における日和見主義と結びついている。この「新しい」見地の叙述にとりかかったのは、同志ヴォルフガング・ハイネである。社会民主党に加入し、自分の日和見主義的な思考の習慣を党にもちこんだこの典型的なインテリゲンツィアの特性を読者に描いてみせるには、同志ヴォルフガング・ハイネはドイツ版の同志アキーモフよりはいくらか小さく、ドイツ版の同志エゴーロフよりはいくらか大きい〔日和見主義者〕、と言えば十分であろう。

同志ヴォルフガング・ハイネは、『社会主義月刊』誌上で、新『イスクラ』紙上の同志アクセリロードにもおとらないはなやかさで出征した。『ゲーレ事件にかんする民主主義的論評』(『社会主義月刊』四月、第四号)という論文の表題からしてたいしたものである。しかも、その内容は、表題におとらずどえらいものである。同志W・ハイネは、「選挙区の自治の侵害」に反対し、「民主主義的原則」を固守し、国民による代議士の自由な選挙に「任命された当局」(すなわち、党中央部)が介入するのに抗議している。同志W・ハイネはわれわれに教えて言う。ここでは、問題は偶然の出来事にあるのではなく、「官僚主義と中央集権主義をめざす党内の」一般的「傾向」にある。この傾向は以前にも見られたが、いまやとくに危険なものになってきた。「党の地方機関が党生活の担い手であることを原則的に認める」必要がある(これは同志マルトフの小冊子『ふたたび少数派となって』からの剽窃である)。「重要な政治的決定がすべて一つの中央部から出されることに慣れ」てはならない。「生活との結びつきを失う空論的政策」(これは、「実生活の要求が、けっきょく、ものをいう」と言った、同志マルトフの党大会での演説から借りてきたものである)におちいらないように、党をいましめる必要がある。さらに自分の論証を深めて、同志W・ハイネはこうつづける。「……問題の根本についていえば、そしていつでもそうであるように、ここでも少なからぬ役割を演じた個人的な衝突を度外視するなら、われわれは、修正主義者」(傍点は

原筆者のもの。これはおそらく、修正主義にたいする闘争という概念と、修正主義者にたいする闘争という概念との相違をほのめかしているのであろう）「にたいするこの激怒のなかには、主として『局外分子』」（W・ハイネは、戒厳状態との闘争についてのマルトフの小冊子をまだ読んでいないらしい。だから、Outsidertum〔局外者〕という英語の語法にたよっているのだ）「にたいする党役員の不信、慣習的でないものにたいする伝統の不信、個人的なものにたいする非人格的機関の不信」（個人的創意の抑圧にかんするアクセリロードの連盟大会での決議を見よ）、「一言でいえば、さきに官僚主義と中央集権主義をめざす党内の傾向として特徴づけておいた、あの同じ傾向を見るのである」と。

「規律」という概念は、同志アクセリロードに負けない気高い怒りを、同志W・ハイネに呼びおこしている。彼はこう書いている。「……修正主義者は、『社会主義月刊』——党の統制下にないという理由で、社会民主主義的雑誌として認めることさえ拒まれようとした機関誌——に書いたため、規律が欠けているといって非難された。『社会民主主義』という概念をこういうふうにせばめようとする試み自体、また、無条件な自由の支配しなければならない思想的生産の分野で」（思想闘争は一つの過程だが、組織形態は形態にすぎないということばを思いだしていただきたい）、「規律をこういうふうに要求すること自体、すでに、官僚主義と個性抑圧への傾向を証明している」と。そしてW・ハイネは、「すべてを包括する、できるだけ中央集権化された一つの大組織、一つの戦術、一つの理論」をつくりだそうとするこの憎むべき傾向を、さらにながながと、ありとあらゆる調子で痛撃し、「絶対服従」や「盲目的服従」の要求を痛撃し、「単純化された中央集権主義」その他等々を痛撃している——文字どおり「アクセリロード流に」。

W・ハイネのまきおこした論争は燃えひろがった。そして、ドイツの党では、この論争は補充にかんする泥仕合のごみをかぶることが全然なかったし、またドイツのアキーモフらは、大会の席上だけでなく、独自の機関紙で、たえず自分の特性をはっきりさせているので、論争は急速に、組織問題における正統派の原則的傾向と修正主義の原則的傾向との分析に煮つまった。革命的潮流（それは、わが国の場合と同じように、「独裁制（ディクタトゥルストボ）」、「異端審問」その他の恐ろしいものとして非難されたことは、言うまでもない）の代表者の一人として、K・カウツキーが登場した（『ノイエ・ツァイト』、一九〇四年、第二八号、論文《Wahlkreis und Partei》——『選挙区と党』。彼はこう述べた。W・ハイネの論文は「修正主義的潮流全体の思考過程を示

している」。ドイツだけでなく、フランスでも、イタリアでも、日和見主義者は全力をあげて自治主義を支持し、党規律を弱めて、それをなくしてしまうことに賛成している。どこでも、彼らの傾向は組織の解体にみちびき、「民主主義的原則」を無政府主義にゆがめる結果になっている、と。K・カウツキーは、組織問題における日和見主義者たちにこう教えている。「民主主義とは支配がないことではない。民主主義とは無政府状態ではない。そうではなく、それは、いわゆる人民の公僕が実際には人民の支配者となっている他の支配形態とは違って、大衆の委任代表にたいするこの大衆の支配である」と。K・カウツキーは、各国の日和見主義的自治主義の解体的役割をくわしくあとづけ、「大量のブルジョア分子」*が社会民主党に参加することこそ、日和見主義、自治主義および規律違反への傾向を強めることを示し、ほかならぬ「組織が、プロレタリアートを解放する武器であり」、ほかならぬ「組織が、プロレタリアートに固有の階級闘争の武器」であることを、繰りかえし想起させている。

* 一例としてK・カウツキーは、ジョレスをあげている。こういう人たちが日和見主義に傾けば傾くほど、それだけ彼らには「党規律が、彼らの自由な人格を不当にせばめるものと思われるにちがいない」と。

日和見主義がフランスやイタリアよりも弱いドイツでは、「自治主義的な諸傾向は、いまのところ独裁者や、大異端審問官や、破門*や、異端狩りやを攻撃する多かれ少なかれ激越な熱弁と、それを検討しても、はてしない口論を生むだけの、はてしないとがめだてと泥仕合をもたらしただけである」。

* Bannstrahl——破門。これはロシア語の「戒厳状態」または「例外法」と同義のドイツ語である。これは、ドイツの日和見主義者たちの「おどし文句」である。

党内の日和見主義がドイツよりもさらに弱いロシアでは、自治主義的傾向が生んだ思想がいっそう少なく、「激越な熱弁」と泥仕合がいっそう多かったことは、異とするにたりない。

カウツキーが次のような結論に達しているのは、異とするにたりない。「まさに組織問題ほど、すべての国の修正主義が、——それがきわめて多様で、多彩であるにもかかわらず、——一致している問題は、おそらくほかにはないであろう」と。この分野における正統派と修正主義の基本的傾向を、K・カウツキーは、官僚主義 versus（対）民主主義という「おどし文句」の助けをかりて定式化している。K・カウツキーはこう書いている。——われわれにこう言うものがある。地方選挙区が候補者（国会議員の）を選ぶ

のを左右する権限を党執行部にあたえることとは「民主主義的原則を最もあつかましく侵害すること」を意味する、「民主主義的原則は、いっさいの政治活動が上から下へと官僚主義的な方法によるのではなく、下から上へと大衆の自主活動によって展開されることを要求する、と。……だが、真に民主主義的な原則というものがあるとすれば、多数は少数にたいして優位をもつべきであって、その反対ではないというのが、この原則である。……」どの個々の選挙区からであれ、国会議員の選出は、全体としての全党の重要な問題であって、党としては、党の受任者（Vertrauensmänner）を仲介としてでも、候補者の指名を左右しなければならない。「これでは官僚主義的すぎるとか、中央集権的すぎるとかと思う人は、党員全部（sämtliche Parteigenossen）の直接投票で候補者をきめるように提案してみるがよい。そういうことが実行できない以上、この機能が、全党に関係のある他の多くの機能と同じように、一つの党機関なり、いくつかの党機関なりによって遂行されるとしても、民主主義が不足しているなどと苦情を言ってはならない。」ドイツの党の「慣習法」によれば、以前にも個々の選挙区は、あれこれの候補者の立候補について、党執行部と「友好的に話をつけていた」。「だが、党があまりにも大きくなったので、この暗黙の慣習法では不十分になった。慣習法は、それが自明なものと認められなくなると、その規定の内容に、いなその存在そのものにさえ疑いがはさまれるようになると、法ではなくなる。そのときには、この法を厳密に定式化し、法典化すること……」、「成文によって」いっそう「厳密に確定すること*（statutarische Festlegung）に、それとともにまた組織上の厳格さを強めること（grössere Straffheit）に」とりかかることが「絶対に必要になる」。

* 黙認されている慣習法を正式に確定された成文法とおきかえることについてのK・カウツキーの以上の指摘を、一般にわが党が、とくに編集局が、党大会以後に経験している「入れかえ」全体と対比することは、きわめて教訓に富んでいる。おこなわれている入れかえの全意義をほとんどさとっていないヴェ・イ・ザスーリチの演説（連盟大会での。六六ページ以下）を参照せよ。

こうして、情勢は違っているが、組織問題にかんする党の日和見主義的翼と革命的翼との同じ闘争が、自治主義と中央集権主義との、民主主義と「官僚主義」との、組織や規律の厳格さを弱めようとする傾向と強めようとする傾向との、ぐらついたインテリゲンツィアの心理と確固たるプロレタリアの心理との、インテリゲンツィア的個人主義とプロレタリア的結束との、同じ衝突が見られるのである。そこで問題になるのは、この衝突にたいして、ブルジョア、

民主主義派――いまはまだいたずらものの歴史が同志アクセリロードにいつか見せてやるとこっそり約束しただけのブルジョア民主主義派ではなく、ほんとうの、現実のブルジョア民主主義派、すなわち、ドイツでもわが国のオスヴォボジデーニエ派の諸君におとらず賢明で目先のきいた代表者をもっているほんとうの、現実のブルジョア民主主義派は、どんな態度をとったか、ということである。ドイツのブルジョア民主主義派は、すぐさま新しい論争に反応を示し、全力をあげて――ロシアのブルジョア民主主義派と同じように、またいつどこでもそうであるように――社会民主党の日和見主義的翼に味方した。ドイツの取引所資本の指導的機関紙『フランクフルト新聞』[213]は、激烈な主張をかかげた（《Frankf. Ztg.》、一九〇四年四月七日付、第九七号、Abendblatt〔夕刊〕）。この社説は、アクセリロードから恥しらずに剽窃することが、ほんとうにドイツの新聞の一種の病気になりかけていることを示している。フランクフルト株式取引所のきびしい民主主義者たちは、社会民主党の「専制」、「党の独裁」、「党機関の専制支配」を糾弾し、「どうやら修正主義全体を罰する」手段とされようとしているらしい「破門」（「日和見主義という無実の非難」を思いおこせ）を糾弾し、この「盲目的服従」や「硬直した規律」の要求、「下僕的服従」の要求、党員を「政治的な屍」（これはねじや歯車よりずっときつい！）に変えようとする要求を糾弾している。株式取引所の騎士たちは、社会民主党の反民主主義的秩序を見て、憤慨する。「見たまえ、あらゆる個人的特性、あらゆる個性は」、ザクセンの社会民主主義者の党大会で「この問題についての報告者ジンダーマンが率直に言明したように、フランスのような事態を、ジョレス主義とミルラン主義をもたらすおそれがあるので、迫害されなければならないのだ」と。

要するに、新『イスクラ』の組織問題にかんする新しい文句のなかに、原則的意味があるかぎりでは、この意味が日和見主義的なものであることは疑問の余地がない。この結論は、革命的翼と日和見主義的翼とに区分されたわが党大会の分析全体によっても、またヨーロッパのすべての社会民主党――これらの党では、組織問題における日和見主義が同じ傾向、同じ非難、しばしばまたまったく同じ文句となって現われている――の実例によっても、確認されている。もちろん、いろいろな党の国民的な特殊性や、いろいろな国の政治的条件の相違は、その痕跡を残しており、そのためドイツの日和見主義はフランスのそれに、フランスのそれはイタリアのそれに、イタリアのそれはロシアの

それに、すこしも似ていない。だが、これらすべての党の革命的翼と日和見主義的翼への基本的な区分が同種のものであること、また組織問題における日和見主義の思考の道すじや諸傾向が同種のものであることは、諸条件が右に述べたように非常に違っているにもかかわらず、はっきり現われている。* わが国のマルクス主義者やわが国の社会民主主義者の隊列内に、急進的インテリゲンツィアに属する者が非常に多いことは、彼らの心理によって生みだされる日和見主義が、種々さまざまな分野に、種々さまざまなかたちで存在することを避けられないものにしたし、またいまでも避けられないものにしている。われわれは、われわれの世界観の基本問題で、綱領の諸問題で、日和見主義とたたかった。そして、目標の点での完全な不一致から、わが国の合法マルクス主義を腐敗させた自由主義者と、社会民主主義者とのあいだには決定的な分界が生じた。われわれは、戦術の諸問題で日和見主義とたたかった。そして、前者よりも重要でないこの問題にかんする同志クリチェフスキーや同志アキーモフとの不一致は、当然一時的なものにすぎなかったし、相異なる党の結成をともなうものではけっしてなかった。われわれはいま組織問題で、マルトフやアクセリロードの日和見主義を克服しなければならない。この問題はもちろん、綱領問題や戦術問題ほど根本的なものではないが、現在われわれの党生活の前面に出てきているものである。

* いまではだれひとり、ロシアの社会民主主義者がかつて戦術問題にかんして「経済主義者」と政治家とに区分されたことは、国際社会民主主義全体が日和見主義者と革命家とに区分されたのと同種のものであったことを、疑う者はあるまい。もっとも、一方の同志マルトィノフやアキーモフと、他方の同志フォン・フォルマルや同志フォン・エルム、あるいはジョレスやミルランとの相違は非常に大きくはあるが。さらに、政治的無権利の国と政治的に自由な国とでは条件が非常に違うにもかかわらず、組織問題にかんする基本的な区分が同種のものであることも、まったく同じように疑う余地がない。新『イスクラ』の原則的な編集局が、カウツキーとハイネの論争にちょっとふれたとき（第六四号）、あらゆる日和見主義とあらゆる正統派との組織問題における原則的諸傾向の問題を臆病に回避したことは、きわめて特徴的である。

日和見主義との闘争を語る場合には、ありとあらゆる分野における今日の日和見主義全体の特徴、すなわち、それが不明確で、あいまいで、とらえがたいことを、けっして忘れてはならない。日和見主義者は、その本性そのものからして、つねに問題を明確に、きっぱりと提起することを避け、合成力を捜しもとめ、たがいにあいいれない諸見地のあいだをくねくねして、どちらにも「同意しよう」とつとめ、自分たちの意見の相違点を小修正、疑念、善良で罪

のない願望等々に帰してしまう。綱領問題における日和見主義者の同志エドゥアルト・ベルンシュタインは、党の革命的綱領に「同意」しており、綱領の「根本的な改正」――それを望んでいるにちがいないのに――を時宜に適せず、合目的でないと考え、またそれよりは「批判」の「一般的原則」（それは主として、ブルジョア民主主義派から諸原則や合言葉を無批判に借りてくることにある）を明らかにすることのほうが重要だと考えている。戦術問題における日和見主義者の同志フォン・フォルマルも、革命的社会民主主義の古い戦術に同意しており、同じようにおもに熱弁や、小修正や、嘲笑にとどまっていて、明確な「入閣主義的」戦術をけっして主張しない。組織問題における日和見主義者の同志マルトフや同志アクセリロードも、公然たる挑戦をうけたにもかかわらず、「成文によって確定」できるような明確な原則的命題を、これまでなに一つ出していない。彼らもまた、われわれの組織規約の「根本的改正」を望んでいるのだろうし、絶対的に望んでいるのであろうが、（『イスクラ』第五八号、二ページ、第三欄）、はじめは「組織の一般的問題」に取り組むほうがよいと考えるであろう（なぜなら、第一条にもかかわらず依然として中央集権主義的であるわれわれの規約をほんとうに根本的に改正することは、それが新『イスクラ』の趣旨でおこなわれるとすれば、不可避的に自治主義にみちびくであろうが、同志マルトフは、自分自身にたいしてさえ白状したくないかを、もちろん、自分自身にたいしてさえ白状したくないからである）。だから、組織問題にかんする彼らの「原則的」立場は、七色の虹彩にきらめいている。なかでもおもなものは、専制や、官僚主義や、盲目的服従や、ねじと歯車についての無邪気で激越な熱弁である。――それはあまりにも無邪気なため、この熱弁のうちで真に原則にかかわるものと真に補充にかかわるものとを見わけることは、非常に、非常にむずかしい。だが、森の奥にゆけばゆくほど、薪はますます多くなる。憎むべき「官僚主義」を分析し、正確に規定しようとする試みは、不可避的に自治主義にみちびくし、「深め」、基礎づけようとする試みは、かならず立ちおくれを正当化することに、追随主義に、ジロンド主義的空文句にみちびく。最後に、唯一の真に明確な、したがって、実践においてとくにあざやかに現われてくる（実践はつねに理論にさきだつ）原則として、無政府主義の原則が表面化する。規律の嘲笑――自治主義――無政府主義、これこそ、わが組織上の日和見主義が、段から段へと飛びながら、また自分の原則を明確に定式化することをわざとまったく避けながら、降りたり昇ったりしている梯子である。＊これとまったく同じ度合いの差は、綱領や戦術上の日和見

主義にも見られる。すなわち、「正統派」や、正教や、偏狭性や、硬直性にたいする嘲笑――修正主義的「批判」と入閣主義――ブルジョア民主主義。

＊　第一条にかんする討論を思いだす人には、同志マルトフと同志アクセリロードが第一条についておかした誤りが展開され深められると、不可避的に組織上の日和見主義にみちびくことが、いまやはっきりわかるであろう。自分で自分を党員と見なす、という同志マルトフの基本思想は、まさしくまちがった「民主主義」、党を下から上へ建設するという思想にほかならない。これに反して、私の思想は、党が上から下へ、党大会から個々の党組織へと建設される、という意味で「官僚主義的」である。ブルジョア・インテリゲンツィアの心理も、無政府主義的空文句も、日和見主義的、追随主義的な迷論も――これらはみな、すでに第一条にかんする説論に現われていた。同志マルトフは『戒厳状態』のなかで（二〇ページ）、新『イスクラ』で「始まった思想活動」について述べている。これは、彼とアクセリロードが、第一条から始めて、思想を新しい方向に実際に押しすすめている、という点ではほんとうである。ただ、困ったことは、この方向が日和見主義的な方向であることである。彼らがこの方向にむかって「活動」をすすめればすすめるほど、またこの活動が「補充」にかんする泥仕合からきよめられればきよめられるほど、彼らはますます深く沼地にはまりこむであろう。同志プレハーノフは、すでに党大会でこのことをはっきりと見てとった。そして論文『なにをなすべきでないか？』のなかで、もう一度彼らに警告した。私は諸君を補充することさえいとわない、ただ、もっぱら日和見主義や無政府主義にみちびくこの道はすすみたもうな、と。――マルトフとアクセリロードは、このよい忠告を聞きいれなかった。なんだって？　すすむなだって？　補充は泥仕合にすぎない、というレーニンの意見に同意するのか？　とんでもない！　われわれは、自分が原則的な人間であることを彼に示してやる！　と。――そして、彼らはそれを示した。彼らに新しい原則があるかぎりでは、それが日和見主義の原則であることを、だれの目にもはっきりと示したのである。

一般に今日のすべての日和見主義者の、とくにわが少数派のあらゆる著作が、感情を害した人の語調でたえずくどくどと文句をならべているのは、心理的に規律にたいする憎しみと密接に結びついたことである。自分たちは迫害され、圧迫され、たたきだされ、戒厳状態のもとにおかれ、しごかれている。こうしたことばのなかには、しごかれる者としごく者という愛すべき、機知に富んだしゃれの作者自身がおそらく感づいていたであろうよりも、はるかに多くの心理的および政治的真実がある。じっさい、わが党大会の議事録をとってみたまえ！　少数派とはみな感情を害した人たちであること、みな、いつかなにかの理由で、革命的社会民主主義派にたいして感情を害した人たちであることがおわかりになろう。そこには、大会から退場するほ

どわれわれにたいして「感情を害した」ブンド派とラボーチェエ・デーロ派がある。そこには、一般に組織が、とくに彼ら自身の組織が抹殺されたことで、はなはだしく感情を害したユージヌィ・ラボーチー派がある。そこには、発言するたびに感情を害した（なぜなら、そのたびに確実に恥をかいていたから）同志マホフがいる。最後にそこには、規約第一条のために「日和見主義という無実の非難をうけ」選挙で敗北したことに感情を害した同志マルトフと同志アクセリロードがいる。そして、これらのいたましいきずつけられた感情はみな、いまでも非常に、非常に多くの俗物がそう思っているように、許すべからざる皮肉や、激しい攻撃や、狂気じみた論戦や、戸をばたんとしめたことや、拳骨をふりあげたことから生じた偶然な結果ではなくて、『イスクラ』の三年間にわたる思想活動全体の避けられない政治的結果だったのである。われわれがこの三年間、ただしゃべりちらしていたのではなく、実行に移さなければならない信念を表明していたのだとすれば、われわれは大会で反イスクラ派や「沼地」派とたたかわないわけにはいかなかった。ところで、われわれが、第一線で素面でたたかっていた同志マルトフといっしょになって、こんな多くの人たちの感情をかたっぱしから害したのであるから、ちょっと、ほんのすこしばかり同志アクセリロードと同志マルトフとの感情を害するだけで、堰を切るのに十分だった。量は質に転化した。否定の否定が起こった。感情を害した人たちはみな、たがいの宿怨を忘れ、号泣しながら抱きあい、「レーニン主義にたいする蜂起*」の旗をかかげたのである。

＊　この驚くべき表現は、同志マルトフのものである（『戒厳状態』、六八ページ）。同志マルトフは、私一人にたいして「蜂起」するために、自分のほうが五人になる時を待っていたのだ。同志マルトフの論戦は不手ぎわである。彼は、自分の論敵にこのうえないお世辞を言うことによって、この論敵をやっつけようと考えているのである。

蜂起は、先進分子が反動分子にたいして蜂起するのなら、すばらしいものである。革命的翼が日和見主義的翼にたいして蜂起するのなら、それはよいことである。しかし、日和見主義的翼が革命的翼にたいして蜂起するのなら、それはよくないことである。

同志プレハーノフは、いわば捕虜としての資格でこのよくない仕事に参加しなければならなくなっている。彼は、「腹いせ」をしようとして、「多数派」支持のあれこれの決議の起草者たちの個々のまずい文句をあさって、こう叫んでいる。「気のどくな同志レーニン！　彼の正統的な味方はたいしたものだ！」（『イスクラ』第六三号、付録）と。

さて、同志プレハーノフ、もし私が貧しい（ベードヌイ）なら、新『イスクラ』の編集局のほうは、まったく乞食同然ではないか。どんなに貧しかろうとも、私は、党大会に目を閉じて、自分の機知をためす材料を委員会のメンバーたちの決議のなかで捜しださなければならないほどの絶対的貧困には、まだおちいっていない。どんなに貧しかろうとも、私は、たまたまあれこれのまずい文句を述べるのではなくて、すべての問題で、すなわち組織問題でも、戦術問題でも、綱領問題でも、革命的社会民主主義の原則に対立する原則に頑強に、しっかりとかじりついている連中を味方にもっている人たちよりは、千倍も富んでいる。どんなに貧しくとも、私は、こういう味方から私にささげられる賛辞を、公衆に隠さなければならないほどにはなっていない。ところが、新『イスクラ』編集局は、そうしなければならなくなっているのだ。

読者よ、諸君は、ロシア社会民主労働党ヴォローネジ委員会とはなにか、ご存じであろうか？　もし諸君がそれをご存じでなければ、党大会の議事録をすこし読んでいただきたい。それを読めば、諸君は、この委員会の方向が同志アキーモフや同志ブルケールによって完全に代表されていることがおわかりになるであろう。そして、この二人は、大会で、党の革命的翼と全線にわたってたたかい、同志プレハーノフから同志ポポーフにいたるすべての人たちから、何十回も日和見主義者として扱われたのである。ところで、このヴォローネジ委員会は、そのリーフレット一月号（第一二号、一九〇四年一月）のなかで、次のように声明している。

「たえまなく成長しているわが党には、昨年、党にとって重要な大事件が起こった。ロシア社会民主労働党の――その諸組織の代表の――第二回大会がひらかれたのである。党大会の招集は、きわめてこみいった事業であり、君主制度のもとでは、きわめて危険な難事業である。だから、大会の招集の仕事が非常に不完全にしか遂行されず、大会そのものも――まったく順調にすすみはしたが――党が大会に提出した要求のすべてを満足させなかったことは、異とするにたりない。一九〇二年の会議（相談会）から大会の招集を委任された同志たちは検挙され、大会のお膳だてをしたのは、もっぱらロシア社会民主党内の一潮流であるイスクラ派だけから出た人たちであった。イスクラ派でない多くの社会民主主義者の組織は、大会の活動に参加させられなかった。いくぶんはこのために、党の綱領と規約を作成するという大会の任務は、きわめて不完全にしか遂行されず、規約には『危険な誤解をまねくおそれのある』大きな欠陥があること

は、大会の参加者自身によって認められている。大会では、イスクラ派そのものが分裂し、以前には『イスクラ』の行動綱領を完全に受けいれているように見えたわがロシア社会民主労働党の多くの有力な活動家が、主としてレーニンとプレハーノフの説いている『イスクラ』の見解の多くは実行できないことを理解した。レーニンとプレハーノフは大会を牛耳ったとはいえ、実際生活の力、すべての非イスクラ派も参加している現実の活動の提起する諸要求が、急速に理論家たちの誤りを訂正しつつあり、大会後にすでに重大な訂正をもたらした。『イスクラ』は非常に変わって、社会民主党の活動家全体の要求に注意ぶかく耳をかたむけることを約束している。こういうわけで、大会の活動は、次期大会の再検討に付せられるべきであり、大会参加者自身がはっきり認めているように、満足すべきものではなく、したがって、不易の決定として党にとりいれることはできないとはいえ、大会は、党内の事態を明らかにし、党の今後の理論活動と組織活動に多くの材料をあたえ、全党の活動にとって教訓に富む巨大な経験であった。大会の諸決定と大会によって作成された規約は、あらゆる組織によって考慮にいれられるであろうが、それらは明らかに不完全なものであるから、多くの組織はそれらだけを指針とすることはさしひかえるであろう。

ヴォローネジ委員会は、全党的活動の非常な重要性を理解しているので、大会の組織にかんするすべての問題に生きいきとした反応を示した。本委員会は、大会で起こったことの非常な重要性を理解し、中央機関紙（主要な機関紙）となった『イスクラ』のおこなった転換を歓迎する。党内や中央委員会内の事態は、まだわれわれを満足させていないとはいえ、われわれは、党を組織する困難な活動が、共同の努力によって改善されるであろうと信じている。ヴォローネジ委員会は、誤った風評にかんがみ、ヴォローネジ委員会の脱党などは問題にならないことを、同志諸君に声明する。ヴォローネジ委員会のような労働者組織がロシア社会民主労働党から脱退することが、どんなに危険な先例（手本）となるかを、またこのことが党にどんな非難を負わせることになるかを、さらにまた、それがこの手本にならうかもしれない労働者組織にとってどんなに不利益となるかを、ヴォローネジ委員会はよく理解している。われわれに必要なのは、新しい分裂をつくりだすことではなくて、すべての自覚した社会主義者を一つの党に統合するために、根気よく努力することである。しかも、第二回大会は定例大会であって、創立大会ではなかった。党からの除名は、党裁

判によってしかやれないし、どんな組織も——中央委員会自身であっても——社会民主党のある組織を党から除名する権限はもたない。それればかりではなく、第二回大会では規約第八条が採択されたが、これによると、いっさいの組織はその地方問題については自治的（自主的）である。だから、ヴォローネジ委員会は、その組織上の見解を実行し、党内でそれを説く完全な権利をもっているのである」。

新『イスクラ』の編集局は、第六一号でこのリーフレットを引用するさいに、以上の長談義のうち大きな活字で組んだ後半を転載し、小さな活字で組んだ前半は、省略するほうを選んだ。

恥ずかしかったのだ。

（r）　弁証法について少々。二つの変革

わが党の危機の発展を概観すれば、あいたたかう両派の基本的な構成が、小さな例外を除けば、いつも同じものだったことが、たやすく知られるであろう。それはわが党の革命的翼と日和見主義的翼との闘争であった。しかし、この闘争は、種々様々な段階をとおってきた。そして、すでに積みかさねられているおびただしい文献、多数の断片的な指摘、前後の関連から切り離された引用句、個々の非難、等々のなかにあって状況を理解したい者はだれでも、これらの各段階の特殊性を正確に知る必要がある。

はっきりとたがいに区別されている主要な段階を数えあげてみよう。（一）規約第一条にかんする論争。組織の基本原則にかんする純思想的な闘争。プレハーノフと私とは少数派である。マルトフとアクセリロードは、日和見主義的な定式を提案して、日和見主義者たちに抱擁される。（二）『イスクラ』組織の分裂。つまり、中央委員の候補者名簿をめぐっての「イスクラ」組織の分裂。つまり、五人組の場合にはフォミーンをいれるか、ヴァシーリエフをいれるか、三人組の場合にはトロツキーをいれるかトラヴィンスキーをいれるかで分裂する。プレハーノフと私とは過半数をたたかいとる（九対七）が、それは、いくぶんかは、われわれが第一条について少数派となった、まさにそのおかげである。マルトフが日和見主義者たちと連合を結んだことは、組織委員会事件によって呼びおこされた私の危惧を、すべて実際に確証した。（三）規約の細目にかんする論争のつづき。マルトフは、またしても日和見主義者たちに救われる。われわれは、ふたたび少数派となって、中央諸機関内の少数派の権利を主張する。（四）極端な日和見主義者の七人組が大会から脱退する。われわれは多数派になり、選挙で連合（イスクラ少数派、

「沼地」派、反イスクラ派の）を打ちやぶる。マルトフとポポーフは、われわれの提案した二つの三人組に席を占めることを拒絶する。（五）補充のことから起こった党大会後の泥仕合。無政府主義的なふるまいと無政府主義的空文句との横行。「少数派」のなかの最も堅固さに欠けた、ぐらついた分子が牛耳をとる。（六）プレハーノフは、分裂を避けるために、《kill with kindness》政策に移る。「少数派」は、中央機関紙編集局と評議会とをのっとり、全力をあげて中央委員会を攻撃する。ひきつづき泥仕合があらゆるものをうずめる。（七）中央委員会にたいする最初の攻撃は撃退される。泥仕合は、いくらか静まりだしたように見える。党を深くゆりうごかしている次の二つの純思想的な問題を比較的平静に討議する可能性が生まれる。（a）第二回大会で生じて、これまでのいっさいの区分にとってかわった「多数派」と「少数派」へのわが党の区分は、どんな政治的意義をもち、またなににもとづくものであるか？（b）組織問題にかんする新『イスクラ』の新しい立場は、どんな原則的意義をもっているか？

これらの段階はそれぞれ、闘争の状況と直接の攻撃目標とを、本質的に異にしている。各段階は、いわば、ある一つの戦役全体のうちの個々の戦闘である。一つひとつの戦闘の具体的事情を研究しないかぎり、われわれの闘争についてなにも理解することはできない。だが、これを研究するなら、発展が実際に弁証法的に、矛盾をつうじてすすんでいることが、はっきりと知られるであろう。すなわち、少数派は多数派となり、多数派は少数派となる。どちらの側も、防御から攻撃に、また攻撃から防御に移る。思想闘争の出発点（第一条）は「否定され」て、あらゆるものを支配する泥仕合に席をゆずる。* だが、ついで「否定の否定」が始まり、いろいろな中央機関のなかで、あてがわれた相手といっしょにどうにかこうにか「折れ合って暮らした」のち、われわれは純思想闘争という出発点に立ちもどる。だが、この「定立」はすでに「反立」のいっさいの結果によって豊かにされて、より高い「総合」に転化している。ここでは、第一条にかんする個別的な、偶然の誤りが、組織問題にかんする日和見主義的見解のえせ体系に成長していて、この現象と、革命的翼と日和見主義的翼とへのわが党の基本的区分との関連が、すべての人の前にますますはっきりと現われてくる。一言でいえば、カラスムギだけがヘーゲル流に成長するのでなく、ロシアの社会民主主義者もまたヘーゲル流にたたかいあうのである。

* 泥仕合と原則的な意見の不一致との境界をきめるという困難な問題は、いまではひとりでに解決されつつある。補充にかんすることは、みな泥仕合である。大会における闘争の分

析、第一条についての論争、日和見主義と無政府主義とへの転換にかんすることはみな、原則的な意見の不一致である。

しかし、マルクス主義が受けついで正しく据えなおした偉大なヘーゲルの弁証法と、党の革命的翼から日和見主義的翼に鞍がえする政治家たちのジグザグな歩みを正当化する俗悪な方法や、単一の過程の別々の段階における個々の言明、個々の発展契機をいっしょくたにする俗悪なやり方とを、けっして混同してはならない。真の弁証法は、個人的な誤りを正当化するものでなく、避けられない転換を研究し、まったく具体的に考察された発展の最もくわしい研究にもとづいて、その転換の避けられないことを証明するものである。弁証法の基本命題は、抽象的な真理は存在しない、真理はつねに具体的である、というのである。……さらにまた、この偉大なヘーゲルの弁証法を、mettere la coda dove non va il capo（頭がはいらないところにはしっぽを突っこめ）というイタリアのことわざによって言いあらわされる、卑俗な処世術と混同してはならない。

わが党の闘争の弁証法的発展の帰結は、二つの変革に帰着する。党大会は、同志マルトフがその著作『ふたたび少数派となって』のなかで正しく指摘したように、真の変革であった。さらに、少数派中の才人たちが、世界は革命によってすすむ、だからわれわれも革命を遂行したのだ！と言っているのも、また正しい。彼らは大会のあとで真に革命を遂行した。一般的にいって、世界は革命によってすすむということも、また真実である。だが、それぞれの具体的な革命の具体的な意義は、この一般的な格言では、まだ規定されない。忘れがたい同志マホフの忘れがたい表現を言いかえて用いるなら、反動に類する革命もある。変革を遂行した現実の勢力が党の革命的翼であったか、それとも日和見主義的翼であったかを、知らなければならない。あれこれの具体的革命が「世界」（わが党）を前進させたか、それとも後退させたかを決定するためには、闘士たちを鼓舞したものが革命的原則であったか、それとも日和見主義的原則であったかを、知らなければならない。

わが党大会は、ロシアの革命運動の全歴史に前例のない、独特な現象であった。秘密の革命党は、はじめて地下のくらやみから白日のもとに現われ、わが党内闘争の全経過と結果とを、また綱領、戦術、組織の問題にかんするわが党とその多少とも注目すべき各部分との全貌を、万人に示すことに成功したのである。われわれは、はじめてサークル的放縦と革命的俗物根性の伝統とをふりすて、これまでしばしば激しく敵視しあい、もっぱら思想の力で結ばれていただけの数十の種々さまざまなグループを一つに結集することに成功した。それらのグループは、われわれがはじめ

て実際につくりだしつつある偉大な全体――党のために、あらゆるグループ的孤立性とグループ的自主性とを犠牲にする心がまえをもっていた（原則としては）。だが、政治では、犠牲は無償で得られるものではなく、たたかいによって獲得されるものである。諸組織の抹殺のためのたたかいは、恐ろしいほど激烈にならざるをえなかった。公然たる自由な闘争のさわやかな風は疾風に変わった。この疾風は、いっさいのサークル的な利害、感情、伝統の残存物を一つのこらず掃きさって――それを掃きさったのはすばらしいことだ！――、ここにはじめて、真の党役員の合議体をつくりだした。

だが、これこれのものと名のることと、実際にそうであることとは、別である。原則のうえで党のためにサークル根性を犠牲にすることと、自分自身のサークルを放棄することとは、別である。さわやかな風は、かびくさい俗物根性に慣れたものには、さわやかすぎたことがわかった。同志マルトフが、その『ふたたび少数派となって』のなかで正しく述べた（思わずしらず正しく述べた）ように、「党はこの最初の大会を耐えぬくことができなかった」。諸組織の抹殺による感情の傷は強すぎた。荒れくるう疾風は、わが党の流れの底にあるいっさいの沈澱物をまきあげ、そしてその沈澱物は復讐した。古いこりかたまったサークル根性は、まだ若い党精神を圧倒した。潰走した党の日和見主義的翼は、アキーモフという偶然の獲物の増援をうけて、革命的翼を圧倒する――もちろん、一時的に――にいたった。

その結果として現われたのが、新『イスクラ』であった。新『イスクラ』は、その編集局員たちが党大会でおかした誤りを、さらに発展させ、深めざるをえなかった。旧『イスクラ』は革命闘争の真理を教えた。新『イスクラ』は、譲歩の精神と折れ合いという処世術を教えている。旧『イスクラ』は戦闘的正統派の機関紙であった。新『イスクラ』は、われわれに日和見主義――主として組織問題で――のぶりかえしを提供する。旧『イスクラ』は、ロシアの日和見主義者からも西ヨーロッパの日和見主義者からも、名誉ある憎悪をかちえた。新『イスクラ』は「賢くなった」、だから、極端な日和見主義者たちからあびせかけられている賛辞を、まもなく恥ずかしがらないようになるだろう。旧『イスクラ』は、ひたむきに自分の目的にむかってすすんだ。それには言行の不一致はなかった。新『イスクラ』にあっては、その立場に固有ないつわりは、不可避的に――だれかの意志や意識にかかわりなく――政治的な偽善を生みださざるをえない。それは、党精神にたいするサークル根性の勝利をおおいかくすために、声を大にして

サークル根性を責めている。それは、いくぶんでも組織されたいくぶんでも党らしいもののなかで、少数が多数に服従することをほかにして、分裂を避けるなにか他の手段が考えられるかのように、偽善的に分裂を非難している。それは、革命的な世論を考慮する必要があると声明して、アキーモフらの賛辞を隠しながら、党の革命的翼に属する諸委員会についてくだらない陰口をたたくのを仕事としている。* なんという恥さらしであろう！　なんと彼らはわが旧『イスクラ』をはずかしめたことであろう！

* このけっこうな仕事のために、すでに型で押したような形式さえ、つくりあげられている。いわく、本紙自身の通信員Xが多数派のY委員会について報じるところによれば、同委員会は少数派の同志Zにひどい仕打ちをしたとのことである、と。

一歩前進、二歩後退。……これは、個人の生活にも、国民の歴史にも、党の発展にも、よくおきることである。革命的社会民主主義、プロレタリア的組織、党規律の諸原則がかならず、完全に勝利することを、一瞬間でも疑うことは、最も犯罪的な臆病さであろう。われわれはすでにきわめて多くの成果をたたかいとっている。われわれは、失敗に会っても気をおとさずに、今後もたたかわなければならない。サークル的口論の俗物的方法をさげすみながら、多大の努力をはらってつくりだされたロシアのすべての社会民主主義者の単一の党的な結びつきを極力維持しながら、ねばりづよい、組織的な活動によって、全党員に、とくに労働者に、党員の義務を、第二回党大会における闘争を、われわれの不一致のすべての原因と推移を、日和見主義の全害悪を、完全にまた意識的に理解させながら、今後もしっかりとたたかわなければならない。この日和見主義は、組織問題の分野でも、われわれの綱領や戦術の分野におけるとまったく同じように、ブルジョア的心理に無力にも屈服し、ブルジョア民主主義派の立場を無批判的にとりいれ、プロレタリアートの階級闘争の武器をにぶらせているのである。

権力獲得のためにたたかうにあたって、プロレタリアートは、組織のほかにどんな武器ももたない。ブルジョア世界の無政府的競争の支配によって分裂させられ、資本のための強制労働によって押しひしがれ、まったくの貧困と野蛮化と退化の「どん底」にたえず投げおとされているプロレタリアートは、マルクス主義の諸原則による彼らの思想上の統合が、幾百万の勤労者を一つの労働者階級の軍隊に融合させる組織の具象的統一で打ちかためられることによってのみ、不敗の勢力となることができるし、またかならずなるであろう。この軍隊にむかっては、ロシアの専制の

老衰した権力も、国際資本の老衰しつつある権力も、もちこたえることはできない。この軍隊は、あらゆるジグザグと後退にもかかわらず、今日の社会民主党のジロンド派の日和見主義的空文句にもかかわらず、遅れたサークル根性の自己満足的な賛美にもかかわらず、インテリゲンツィア的無政府主義のまがいものの金ピカや空騒ぎにもかかわらず、ますます緊密に隊列を結集してゆくであろう。

付録

同志グセフと同志デイチとの衝突

この衝突は、本文の（j）節で引用した同志マルトフと同志スタロヴェールの手紙のなかにふれられている、いわゆる「にせの」（同志マルトフの表現によれば）名簿と密接な関係があるが、その核心は次の点にある。同志グセフが同志パヴローヴィチに伝えたところでは、同志シテイン、同志エゴーロフ、同志ポポーフ、同志トロツキーおよび同志フォミーンからなるこの名簿は、同志デイチが彼グセフに渡したものだということであった（同志パヴローヴィチの『手紙』、一二ページ）。同志デイチは、同志グセフのこの報告は「故意の中傷」であるとして、彼を告訴し、同志仲裁裁判は、同志グセフの「報告」を「不正確なもの」と認めた（『イスクラ』第六二号所載の裁判の決議を見よ）。『イスクラ』編集局が裁判の決議を発表したのち、同志マルトフ（今度は編集局ではなく）は、『同志仲裁裁判の決議』と題する別刷りのリーフレットをだし、そのなかで、

裁判の決議全文だけでなく、また、事件の審理全体の完全な報告を再録し、さらに自身のあとがきをつけた。このあとがきのなかで、同志マルトフは、とりわけ、「分派闘争のために名簿を偽造した事実」を「恥ずべきこと」とよんでいる。第二回大会の代議員である同志リャードフと同志ゴーリンは、『仲裁裁判の傍聴者』と題するリーフレットでこのリーフレットに答えた。そのなかで彼らは、裁判は故意の中傷があったとは認めず、ただ同志グセフの報告が不正確であると決定したにすぎないのに、「同志マルトフがあえて裁判の決定をこえて、同志グセフに不純な動機があったとしていることに激しく抗議」した。同志ゴーリンと同志リャードフは、同志グセフの報道がまったくむりからぬ間違いにもとづくものと考えられることをくわしく説明し、同志マルトフが、自分でも多くのまちがった言明をした(そして、自分のリーフレットのなかでもやっている)にもかかわらず、ほしいままに、同志グセフに不純なもくろみがあったとしているふるまいを「みっともないもの」と特徴づけている。そもそも、不純なもくろみなどこの場合にあるはずがなかった、と彼らは言った。私の思いちがいでなければ、以上がこの問題にかんする全「文献」であるが、私は、この問題の解明を助けることを自分の義務と考える。

なによりもまず必要なことは、読者がこの名簿(中央委員候補者名簿)が生まれた時期と事情とを、はっきり理解することである。私がすでに本文で述べたように、「イスクラ」組織は、共同して大会に提案できるような中央委員候補者名簿にかんして、大会で協議した。協議は意見の不一致に終わった。「イスクラ」組織の多数派は、トラヴィンスキー、グレーボフ、ヴァシーリエフ、ポポーフおよびトロツキーからなる名簿を採択したが、少数派は譲歩を望まず、トラヴィンスキー、グレーボフ、フォミーン、ポポーフ、トロツキーからなる名簿を固執した。「イスクラ」組織の両派は、これらの名簿が提出され表決されたこの会合ののちには、もはや共同の会合をひらかなかった。両派は、両派を分けた論争問題を党大会全体の投票で解決しようとして、大会で自由な扇動を始め、できるだけ多くの代議員を自分の味方にしようと努力した。大会におけるこの自由な扇動は、私が本文で非常にくわしく分析したあの政治的事実を一挙に表面化した。すなわち、われわれに勝つためには、イスクラ少数派(マルトフを先頭とする)は「中間派」(沼地派)や反イスクラ派にたよる必要があったということが、それである。このことが必要だったのは、『イスクラ』の綱領、戦術および組織計画を反イスクラ派と「中間派」との攻撃から首尾一貫して守った代議員の圧倒

的多数が、非常に急速に、かつ非常に断固として、われわれの味方についたからである。反イスクラ派にも「中間派」にも属さない三三名の代議員（正確には三三票）のうち、われわれはきわめて急速に二四名を獲得し、彼らと「直接の協定」を結び、「結束した多数派」を形成した。ところが、同志マルトフには、わずか九票しか残っていなかった。勝利を得るためには、彼には反イスクラ派と「中間派」の全票数が必要であった。彼は、これらのグループと行動をともにすることはできたし（規約第一条の場合のように）、「連合すること」もできた、すなわち、彼らの支持を得ることはできた。だが、直接の協定を結ぶことはできなかった。それができなかったのは、ほかでもない、大会のあいだじゅう、彼はわれわれにおとらず激しくこれらのグループとたたかったからである。ここにこそ、同志マルトフの立場の悲喜劇があった！　同志マルトフは、その『戒厳状態』のなかで、ひどく悪意をふくんだ質問で、私をやっつけようと考えた。『『ユージヌィ・ラボーチー』は大会ではだれにとって局外者であったか、という質問に率直に答えてくださるよう、つつしんで同志レーニンにお願いする』（一二三ページ、注）と。つつしんで、また率直にお答えする、同志マルトフにたいして局外者だったのである、と。その証明はこうである。私はイスクラ派と非常に急速に直接の協定を結んだが、同志マルトフは、「ユージヌィ・ラボーチー」とも、同志マホフとも、同志ブルケールとも、直接の協定を結ばなかったし、また結ぶこともできなかったのである。

この政治的情勢をはっきりのみこむことによってのみ、悪名高い「にせの」名簿という面倒な問題の「核心」がどこにあるかを理解することができる。「イスクラ」組織が分裂し、われわれが各自の名簿を擁護して大会で自由に扇動する、という事態を、具体的に思いうかべていただきたい。この擁護にあたっては、数多くの個々の私的会談で、名簿は百とおりも組み合わされ、五人組のかわりに三人組が考慮され、ある候補者を他の候補者と入れかえるありとあらゆる提案が出された。たとえば、私はよくおぼえているが、多数派の内輪の会談で、同志ルソフ、同志オーシポフ、同志パヴローヴィチ、同志デードフを候補とすることが提議され、ついで、討議と論争のあとで否決された。私の知らない他の候補者も提案されたということは、大いにありそうなことである。大会のどの代議員も、こういう会談で自分の意見を述べ、修正を提案し、論争し等々した。こういうことが多数派のあいだだけで起こったなどということは、きわめてありそうにないことである。少数派のあいだでも、まったく同じことが起こったことは、疑う余地

さえない。なぜなら、彼らの最初の五人組（ポポーフ、トロツキー、フォミーン、グレーボフ、トラヴィンスキー）は、同志マルトフと同志スタロヴェールの手紙からわれわれが知ったように、あとでグレーボフ、トロツキーおよびポポーフの三人組とおきかえられたからである。しかも、グレーボフは彼らの気にいらなかったので、彼らはよろこんでグレーボフをフォミーンとおきかえた（同志リャードフと同志ゴーリンのリーフレットを見よ）。私は、この小冊子の本文で大会代議員をいろいろなグループに分けているが、これらのグループは、post factum〔事後に〕おこなった分析にもとづいて私が区分けしたものであることを、忘れてはならない。ところで、実際には、これらのグループは選挙前の扇動のときにはやっと現われかけたにすぎず、代議員のあいだの意見の交換はまったく自由におこなわれていた。われわれのあいだには、どんな「壁」もなかったし、各人は個人的に話し合いたいと思うどの代議員とでも話し合った。こうした事情であったので、ありとあらゆる組合せや名簿のなかには、「イスクラ」組織の少数派の名簿（ポポーフ、トロツキー、フォミーン、グレーボフ、トラヴィンスキー）とならんで、それとたいして違わないポポーフ、トロツキー、フォミーン、シテイン、エゴーロフという名簿が生まれたことも、すこしも異とするにたりない。候補者のこういう組合せが生まれるということは、しごく当然であった。なぜなら、われわれの側の候補者であるグレーボフとトラヴィンスキーとは、明らかに「イスクラ」組織の少数派には気にいらなかったからである（本文（j）節にのせた彼らの手紙を見よ。そのなかで彼らは、トラヴィンスキーを三人組からしりぞけ、またグレーボフについては、これは妥協である、と率直に言っている）。グレーボフとトラヴィンスキーを組織委員会のメンバーであるシテインおよびエゴーロフと入れかえることは、まったく自然であった。もし党少数派の代議員のうちだれひとり、こういう入れかえを思いつかなかったとしたら、奇妙なことであったろう。

ここで、次の二つの問題を考えてみよう。（一）エゴーロフ、シテイン、ポポーフ、トロツキー、フォミーンからなる名簿は、だれから出たものか？（二）なぜ同志マルトフは、この名簿が彼のつくったものとされたことにひどく腹をたてたのか？　第一問に正確に答えるためには、大会のすべての代議員に問い合わせることが必要であろう。いまとなってはそれはできない。とくに党少数派（これを「イスクラ」組織の少数派と混同してはならない）に属するどの代議員が、大会で、「イスクラ」組織の分裂を引きおこした諸名簿のことを聞いていたか、彼らは、「イスク

ラ」組織の多数派と少数派との両名簿にどういう態度をとったか、「イスクラ」組織の少数派の名簿を自分たちに望ましいように修正する件について、なにか提案なり意見なりを出しはしなかったか？　またそういうものを聞きはしなかったか？　以上を明らかにすることが、必要であろう。残念ながら、仲裁裁判でも、どうやらこうした質問は提出されなかったようである。仲裁裁判には（決定の本文から判断すると）、「イスクラ」組織がどういう「五人組」をめぐって意見が分かれたかということさえ、わからずじまいであった。たとえば、同志ベローフ（私は彼を「中間派」にいれている）が「証言したところでは、同志ベローフはデイチと仲のよい同志的な間柄にあり、デイチは、彼と大会の議事にかんする自分の印象を話し合っていたので、もしデイチがあれこれの名簿を支持してなにか扇動していたとしたら、デイチはそのことをベローフにも知らせたはずである」という。残念に思わざるをえないのは、同志デイチは、大会で、「イスクラ」組織のいろいろな名簿について の印象を同志ベローフと話し合ったかどうか、また話し合ったとすれば、同志ベローフは「イスクラ」組織の少数派が提案した五人組の名簿にどういう態度をとったか、彼はこの名簿にたいするなにか望ましい変更を提案しはしなかったか、あるいはそういうものを聞きはしなかったかということが、明らかにされずにしまったことである。こういう事情が明らかにされなかったために、同志ベローフと同志デイチとの証言には、同志ゴーリンと同志リャードフとがすでに指摘している矛盾が生じた。すなわち、同志デイチは、彼自身の主張するところとは違って、「イスクラ」組織の予定した「あれこれの中央委員候補者を支持して扇動した」のである。同志ベローフはさらにこう証言している。「大会でとりざたされていた名簿のことは、大会の終わる二日まえ、同志エゴーロフ、同志ポポーフおよびハリコフ委員会の代議員たちに会ったとき、非公式に知った。そのさい、エゴーロフは、彼の名が中央委員候補者名簿のなかにのっていたのに奇異の念を表明した。なぜなら、彼の立候補は、多数派といわず、少数派といわず、大会代議員のあいだで共感をよぶことはありえないというのが、彼エゴーロフの意見だったからである」と。きわめて特徴的なのは、ここで言っているのが、明らかに「イスクラ」組織の少数派のことだということである。なぜなら、それ以外の党大会少数派のあいだでは、組織委員会の委員で「中間派」の有力な演説者である同志エゴーロフの立候補は、共感をよぶことができるだけでなく、おそらく、共感をよんだにちがいないからである。残念ながら、「イスクラ」組織に属していなかった党少数派のメンバーがいったい共感

したかあるいは共感しなかったかについては、同志ベローフはなにも知らせてくれない。ところが、重要なのはまさにこの問題である。というのは、同志デイチは、この名簿が「イスクラ」組織の少数派のつくったものだとされたことに立腹したのだが、名簿は、この組織に属していなかった少数派から出たのかもしれないからである！

候補者のこういう組合せの腹案をだれが最初に言いだしたのか、また、それについてわれわれ各人はだれから聞いたかを思いだすことは、もちろん、いまとなっては非常にむずかしい。たとえば、私は、このことばかりでなく、私の述べたルソフ、デードフその他の人の立候補を最初にもちだしたのが、いったい多数派のなかのだれだったかということも、思いだせない。候補者のありとあらゆる組合せにかんする多くの談話や腹案やうわさのなかで私の記憶に残っているのは、「イスクラ」組織で、あるいは多数派の内輪の会合ではっきり表決に付されたいくつかの「名簿」だけである。これらの「名簿」は、大部分口づたえにされた（私の『「イスクラ」編集局への手紙』の四ページ、下から五行目で、私が「名簿」とよんでいるのは、会合で私が口頭で提案した五名の候補者の組合せにほかならない）が、また非常にしばしばメモに書きつけられ、総じて大会の会議のときに代議員から代議員にまわされ、普通は会議のあとで破りすてられた。

悪名高い名簿の出所について正確な資料がない以上は、「イスクラ」組織の少数派の知らない党少数派の一代議員が、この名簿に見るような候補者の組合せを主張し、そしてこの組合せが口頭や文書で大会でまわされたのか、あるいは、「イスクラ」組織の少数派のだれかが大会でこの組合せを主張し、あとになってそれを忘れてしまったのか、どちらかであると推測するほかはない。私には、第二の推測のほうがあたっているように思われる。なぜかといえば、同志シテインの立候補は、疑いもなく、すでに大会の席上で「イスクラ」組織の少数派の共感をよんでいたし（この小冊子の本文を見よ）、またこの少数派は、疑いもなく、大会後には同志エゴーロフを候補にするという考えをもつようになったからである（なぜなら、連盟の大会でも、『戒厳状態』のなかでも、組織委員会が中央委員会として承認されなかったことについて遺憾の意が表明されているが、同志エゴーロフは組織委員会の一員だったからである）。組織委員会の委員を中央委員に変えようという、どうやら、空気中にただよっていたらしいこの考えを、少数派のだれかが私的な会話のなかや党大会で述べたと推測するのは、自然ではあるまいか！

しかし、同志マルトフと同志デイチは、自然な説明を求

めるかわりに、なにかきたないやり口、悪だくみ、なにか不正直なもの、「中傷を目的とした故意の虚偽のうわさ」の流布、「分派闘争のための偽造」などを、ぜひとも見つけだしたがっている。この病的な欲求は、亡命生活の不健全な諸条件か異常な神経状態によってしか説明できない。だから、私は、もし一同志の名誉に不当な攻撃がくわえられるところまで事態がすすまなかったなら、この問題に立ちいることすらしなかったであろう。まあ考えてみたまえ。同志デイチと同志マルトフには、いったいどんな根拠があって、不正確な報道やまちがったうわさのなかに、いまわしい、不純なもくろみを求めているのだろうか？　多数派が、少数派の政治的な誤り（第一条および日和見主義者との連合）を指摘することによってではなく、「故意の虚偽の」名簿、「偽造された」名簿を少数派になすりつけることによって、彼らを「中傷する」というような情景を、彼らに描いてみせたのは、明らかに彼らの病的な想像だったのである。少数派は、事態を自分たちの誤りによってではなく、多数派のきたない、不正直な、恥ずべきやり方によって説明するほうを選んだ！　「不正確な報告」のなかに不純なもくろみを求めることが、どんなに分別を欠いたことであるかを、われわれはすでにまえのほうで、この事情を述べたときに示しておいた。同志仲裁裁判もこのことをはっきりと理解していたので、どんな中傷も、どんな悪だくみも、どんな恥ずべきことも、確認しなかったのである。最後に、このことを最もはっきり証明しているのは、次の事実である。すなわち、「イスクラ」組織の少数派は、すでに党大会で、選挙にさきだって、まちがったうわさについて多数派と話し合ったし、また同志マルトフは、多数派の全代議員二四名の会合の席上で読みあげられた手紙のなかでさえ、自分の意見を述べていたのである！　多数派は、そういう名簿が大会でとりざたされていることを、「イスクラ」組織の少数派に隠そうとは思いもしなかった。同志レンスキーはそれについて同志デイチに話し（裁判の決定を見よ）、同志プレハーノフはそれについて同志ザスーリチに話し（「彼女とは話ができない。彼女は私をトレポフととりちがえているらしい」と、同志プレハーノフは私に言った。そして、何回となく繰りかえされたこの冗談は、かさねて少数派の異常な興奮を示すものである）、私は同志マルトフにむかって、彼の確言（この名簿は彼マルトフのつくったものではないという）で私には十分である、と言明した（連盟議事録、六四ページ）。すると、同志マルトフは（たしか、同志スタロヴェールと連名で）、ほぼ次のような内容のメモをわれわれビューローに書いてよこした。「『イスクラ』編集局の多数派は、彼らについてひろめ

られている名誉毀損的なうわさを反駁するために、彼らを〔イスクラ組織の〕多数派の内輪の会合に出席させるよう、お願いする」と。私とプレハーノフとは、このメモに次のように書いて答えた。「名誉毀損的なうわさなどわれわれは聞いていない。編集局の会合が必要なら、それについては別に打合せしなければならない。——レーニン、プレハーノフ」と。夜、多数派の会合に出たとき、われわれはこのことを二四名の代議員の全部にものがたった。誤解の生じる可能性をいっさい取りのぞくために、われわれ二四名全部のなかから共同で代表を選んで、この代表を同志マルトフと同志スタロヴェールのもとに送り、彼らと話し合いをやらせることが決定された。選ばれた代表の同志ソローキンと同志サブリナとは彼らのところにゆき、次のように説明した。名簿をことさらにマルトフまたはスタロヴェールのつくったものとしている者は、——とくに彼らが声明を出したあとでは——だれもいないし、またこの名簿が、あれこれのかたちで「イスクラ」組織の少数派から出たか、それともこの組織に属していない大会少数派から出たかは、すこしも重要なことではない。じっさい、大会で尋問をやるわけにはいかないではないか！　このような名簿のことを全代議員にたずねるわけにはいかないではないか！と。だが、同志マルトフと同志スタロヴェールは、そのうえなお、正式の反駁状をわれわれに書いてよこした（(j)節を見よ）。この手紙を、われわれの全権代表である同志ソローキンと同志サブリナが二四名の会合の席で読みあげた。事件はこれで終わったと考えていいと思われるであろう。終わったといっても、名簿の出所が究明されたという意味ではなく（それがだれかに興味があるとしても）、「少数派に損害をあたえる」とか、だれかを「中傷する」とか、「分派闘争のために偽造」にうったえるとかいうなんらかの意図があったという考えが、いっさい完全に取りのぞかれたという意味である。ところが、同志マルトフは、連盟で（六三―六四ページ）、病的な想像からしぼりだしたこのきたないものをまたもひっぱりだし、そのさい幾多の不正確な報告をした（明らかに、興奮状態の結果である）。彼は、名簿には一名のブンド派がのっていた、と言った。これはまちがっている。同志シテインと同志ペローフをもふくめて、仲裁裁判の証人はみな、名簿には同志エゴーロフがのっていたと、確言している。同志マルトフは、この名簿は直接の協定という意味での一つの連合を意味していた、と言った。これは、私がすでに説明したように、まちがっている。同志マルトフは、これ以外に、「イスクラ」組織の少数派から出た（そして、大会の多数派をこの少数派から離反させることになりかねないような）名簿は「な

かったし、偽造されさえしなかった」と言った。これはまちがっている。なぜなら、党大会の多数派の全員は、同志マルトフ一派から出て、多数派の同意を得られなかった名簿を、すくなくとも三つ知っていたからである（リャードフとゴーリンのリーフレットを見よ）。

いったいどうしてこの名簿が同志マルトフをこんなに立腹させたのか？ それは、この名簿が党の右翼への転換を意味していたからである。当時同志マルトフは、「日和見主義という無実の非難」のことで声を大にして叫びたて、「彼の政治的立場の誤った特徴づけ」に腹を立てていたが、いまでは、あれこれの名簿が同志マルトフと同志デイチのつくったものであったかどうかの問題は、なにも政治的な意味をもちえなかったこと、この名簿にも、その他のどういう名簿にもかかわりなく、本質上、この非難はうそではなく、真実であったし、政治的立場の特徴づけはまったく正しかったことは、だれでもみな知っている。

悪名高い偽造名簿にかんするこの不愉快な、むりにつくりあげた事件の総括は、次のようになる。

（一） 同志マルトフが、「分派闘争のために名簿を偽造するという恥ずべき事実」について叫びたてることで、同志グセフの名誉をきずつけたのは、同志ゴーリンと同志リャードフが言ったように、みっともないこととよばざるをえない。

（二） 空気を健全にするために、また党員があらゆる病的な言動をまじめにとらなくてもいいようにするために、第三回大会では、おそらく、ドイツ社会民主労働党の組織規約にあるような規則を設けなければならないであろう。この規約の第二条はこう述べている。「党綱領の諸原則にはなはだしく違反するか、あるいは恥ずべき行動をとった者は、党に所属することはできない。今後の党籍の問題は、党指導部の招集する仲裁裁判がこれを決定する。審判員の半数は、除名の請求者が指名し、他の半数は、除名の被請求者が指名する。議長は、党指導部が指名する。仲裁裁判の決定にたいして、統制委員会または党大会に上訴することが許される。」こういう規則は、なんであれ、不誠実な行為だという非難を軽率にあびせる（あるいは、そのうわさをひろめる）すべての人とたたかうためのすぐれた武器となることができる。こういう規則のあるところでは、非難する者が党の前で原告となって、所管党機関の判決を得ようとする道義的な勇気をもたないかぎり、このような非難はすべて、きっぱりと、みっともない陰口と見なされるであろう。

一九〇四年二—五月に執筆

一九〇四年五月にジュネーヴで単行本として印刷
全集、第五版、第八巻、一八五—四一四ページ所収
邦訳全集、第七巻、二〇五—四五六ページ所収

事項注

（一）著書『なにをなすべきか？ われわれの運動の焦眉の諸問題』は、すでに一九〇一年の春に構想されていた。五月には論文『なにから始めるべきか？』が書かれたが、この論文は、レーニンのことばによると、のちに『なにをなすべきか？』のなかでくわしく展開されたプランの下書きであった。一九〇一年の秋になってやっとレーニンはこの著書の執筆にとりかかった。一二月に『イスクラ』第一二号に『経済主義の擁護者たちとの対話』というレーニンの論文が発表された（全集、第五巻、三二五—三三四ページ）。レーニンは、のちにこれを『なにをなすべきか？』の概要と呼んでいる。一九〇二年一月にレーニンはこの著書の執筆を終え、二月に序文を書き、三月一〇日付『イスクラ』第一八号に、出版予告が掲載された。

『なにをなすべきか？』は、ロシアの労働者階級の革命的マルクス主義政党のためのたたかいで、またロシア社会民主労働党の諸委員会や組織のなかで、ついで第二回党大会で、レーニンの「イスクラ」派が勝利するうえで、すぐれた役割を果たした。

一九〇二年から一九〇三年にかけて本書は全ロシアの社会民主主義組織のあいだに広く普及した。キエフ、モスクワ、ペテルブルグ、ニジニ-ノヴゴロド、カザン、オデッサその他の都市での社会民主主義者の家宅捜索や逮捕のさいに、本書が発見された。

本書は論集『一二年間』に再録された（一九〇七年一一月、もっとも表紙と扉には一九〇八年となっている）。この版では、レーニンは本書をいくらか短くし、個々のこまかな点や小さな論争上の意見を省略した。同時に新しい版には五つの脚注がつけくわえられた。九

（二） レーニンの論文『なにから始めるべきか？』は『イスクラ』第四号の社説として発表された。この論文には、当時のロシアの社会民主主義運動にとってきわめて重要な諸問題にたいする回答がふくまれていた。その問題とは、政治的扇動の性格と主要な内容、組織上の任務と戦闘的な全国的マルクス主義政党の建設計画の問題である。

この論文は革命的社会民主主義派の綱領的文書で、ロシアの内外に広く普及した。各地の社会民主主義組織は本論文を『イスクラ』で読み、単行の小冊子として再刊した。シベリア社会民主主義連盟は、この小冊子を五〇〇〇部覆刻してシベリア全域に配布した。小冊子はルジェーフでも印刷され、サラトフ、タンボフ、ニジニ-ノヴゴロド、ウファその他の都市に配布された。

レーニンが本論文で提出し『なにをなすべきか？』のなかでくわしく展開した組織上、戦術上の思想は、ロシアにマルクス主義政党を創立するための日常の実践活動の指針となった。九

（三）『イスクラ』——一九〇〇年にレーニンが創刊した最初の全国的なマルクス主義的非合法新聞で、労働者階級の革命的マルクス主義党を創立するうえで決定的な役割を果たした。

警察の追及が激しく、ロシア国内で革命的新聞を発行することが不可能だったので、レーニンはまだシベリアの流刑地にいたあいだに、これを国外で発行する計画をくわしく考えぬいた。一九〇〇年一月に流刑が終わると、レーニンはすぐさま自分の計画の実現にとりかかった。

レーニンの『イスクラ』第一号は一九〇〇年一二月にライプチヒで発行され、それにつづく諸号はミュンヘンで、一九〇二年七月以降はロンドンで、一九〇三年の春以後はジュネーヴで、発行された。新聞の刊行に大きな援助をあたえたのは、ドイツ社会民主党員のクラーラ・ツェトキーン、A・ブラウンその他、当時ミュンヘンに住んでいたポーランドの革命家ユリアン・マルフレフスキ、イギリス社会民主主義連盟の指導者のひとりハリ・クウェルチであった。

『イスクラ』の編集局には、レーニン、ゲ・ヴェ・プレハーノフ、ユ・オ・マルトフ、ペ・ベ・アクセリロード、ア・エヌ・ポトレソフおよびヴェ・イ・ザスーリチがはいった。編集局の書記には、はじめイ・ゲ・スミドーヴィチ－レーマンがなり、一九〇一年の春からエヌ・カ・クループスカヤがなった。クループスカヤはまた、ロシアの社会民主主義諸組織と『イスクラ』の文通全体を担当した。レーニンは事実上『イスクラ』の編集主筆であり、指導者であった。彼は、『イスクラ』紙上に党建設とロシア・プロレタリアートの階級闘争のあらゆる基本問題について論文を書いた。

『イスクラ』は党勢力の団結の中心となり、党基幹要員の結集と教育の中心となった。ロシアの幾多の都市（ペテルブルグ、モスクワ、サマラ、その他）に、「イスクラ」派に属するロシア社会民主労働党のグループや委員会が創設された。各地の「イスクラ」組織は、レーニンの弟子であり戦友であるエヌ・エ・バウマン、イ・ヴェ・バーブシキン、エス・イ・グーセフ、エム・イ・カリーニン、ペ・ア・クラーシコフ、ゲ・エム・クルジジャノフスキー、エフ・ヴェ・レングニク、ペ・エヌ・レペシンスキー、イ・イ・ラードチェンコなどの直接の指導のもとに成立し、活動した。

『イスクラ』編集局は、レーニンの提唱により、また彼の直接の参加のもとに、党綱領草案（『イスクラ』第二一号に発表）を作成し、ロシア社会民主労働党第二回大会を準備した。この大会は一九〇三年七―八月にひらかれた。大会は特別決定で、党建設のための闘争における『イスクラ』のなみなみならぬ役割を指摘し、同紙をロシア社会民主労働党の中央機関紙とすることを宣言した。第二回大会では、レーニン、プレハーノフ、マルトフで構成される編集局が承認されたが、マルトフがそれまでの編集局員六名を全部留任させることを主張し、党大会の決定に反して編集局にはいることを拒否したので、『イスクラ』第四六―五一号は、レーニンとプレハーノフの編集で発行された。その後、プレハーノフは、メンシェヴィズムの立場に移って、大会によってしりぞけられたメンシェヴィキ派の旧編集局の全員を『イスクラ』編集局にくわえるように要求した。レーニンはそれに同意できなかったので、一九〇三年一〇月一九日（一一月一日）に『イスクラ』編集局から脱退し、中央委員会に補充され、この陣地からメンシェヴィキ的日和見主義者とたたかった。第五二号はプレハーノフ一人の編集で出された。一九〇三年一一月一三（二六）日、プレハーノフは独断で、大会の意志にそむいて、『イスクラ』編集局に以前のメンシェヴィキ編集局員たちを補充した。メンシェヴィキは、第五二号以後、『イスクラ』を自分たちの機関紙に変えてしまった（いわゆる新『イスクラ』）。九

（四）在外社会民主主義諸組織を統合する試み――一九〇一年の春から夏にかけて、在外社会民主主義諸組織（「在外ロシア社会民主主義者同盟」、ブンド在外委員会、革命的組織「社会民主主義者」団、「イスクラ」および「ザリャー」在外組織）のあいだに、「ボリバ」団の仲介と提唱で、協定と統合の交渉がおこなわれた。統合がおこなわれるはずであった大会にそなえて、一九〇一年六月にジュ

ネーヴでこれら諸組織の代表の会議がひらかれた(「六月」会議またはジュネーヴ」会議)。

ロシア社会民主労働党在外諸組織の合同大会は、一九〇一年九月二一―二二日(一〇月四―五日)にチューリヒでひらかれた。大会には、「イスクラ」および「ザリャー」在外組織から六名(レーニン、クループスカヤ、マルトフ、その他)、革命的組織「社会民主主義者」団から八名(そのうち三名は「労働解放団」のプレハーノフ、アクセリロード、ザスーリチ)、「在外ロシア社会民主主義者同盟」から一六名(そのうち五名はブンド在外委員会)、「ボリバ」団から三名の代表が出席した。大会では、「ロシア社会民主主義者同盟」の第三回大会で採択された、六月決議への日和見主義的な修正提案と補足が公表された。そこで、大会の革命的部分(「イスクラ」および「ザリャー」組織と「社会民主主義者」団との代表たち)は、合同は不可能であるとの声明を発表して、大会を退場した。レーニンの提唱によりこれらの組織は一九〇一年一〇月に合同して「ロシア革命的社会民主主義在外連盟」(注一三〇を参照)をつくった。九

(五)『ラボーチエエ・デーロ』(『労働者の事業』)――「在外ロシア社会民主主義者同盟」の機関誌。一八九九年四月から一九〇二年二月までジュネーヴで発行され、ベ・エヌ・クリチェフスキー、ペ・エフ・テプローフ(シビリャク)、ヴェ・ペ・イヴァンシン、ついでさらにア・エス・マルティノフがその編集にあたった。全部で一二号(九冊)発行された。『ラボーチェエ・デーロ』の編集局は、「経済主義者」の在外中央部であった。『ラボーチェエ・デーロ』は、マルクス主義「批判の自由」というベルンシュタイン主義のスローガンを支持し、ロシア社会民主党の戦術と組織上の任務にかんする諸問題で日和見主義的立場をとった。ロシア社会民主労働党第二回大会では、「ラボーチェエ・デーロ」一派は党の日和見主義的極右翼を代表した。九

(六)「経済主義」――一九世紀末―二〇世紀はじめのロシア社会民主党内の日和見主義的潮流、国際日和見主義の一変種。「経済主義者」は、労働者階級の任務を、賃金の引上げや、労働条件の改善などをめざす経済闘争に限り、政治闘争は自由主義的ブルジョアジーのやるべきことだと主張し、労働者階級の党の指導的役割を否定した。労働運動の自然発生性の前に拝跪する「経済主義者」は、革命的理論の意義を軽視し、マルクス主義党が社会主義的意識を外部から労働運動のなかにもちこむ必要を否定し、それによってブルジョア・イデオロギーに道をひらいた。「経済主義者」は、社会民主主義運動の分散と手工業性を擁護し、労働者階級の中央集権的な党を創立する必要に反対した。レーニンは著書『なにをなすべきか?』のなかで、「経済主義」を思想的に粉砕しつくした。九

(七)『ラボーチャヤ・ガゼータ』(『労働者新聞』)――キエフの社会民主主義者の非合法機関紙。ベ・エリ・エイデリマン、ペ・エリ・トゥチャプスキー、エヌ・ア・ヴィグドルチク、その他の参加と編集のもとにキエフで発行された。全部で二号、第一号は一八九七年八月に、第二号はその年の一二月(日付は一一月)に出た。『ラボーチャヤ・ガゼータ』を中心に結束した社会民主主義者は、ロシア社会民主労働党第一回大会の準備活動をおこなった。

一八九八年三月にひらかれたロシア社会民主労働党第一回大会は、『ラボーチャヤ・ガゼータ』を党の公式機関紙として承認した。大会後に中央委員と『ラボーチャヤ・ガゼータ』編集局員が逮捕され、またその印刷所が破壊されたため、組版にまわすばかりになっていた第三号は陽の目をみなかった。一八九九年、『ラボーチャヤ・ガ

ゼータ』の再刊が企てられた。レーニンは著書『なにをなすべきか?』のなかで、この企てについて語っている。一〇

(八) 全集、第五巻、三二五—三三四ページを参照。一〇

(九) ラサール派とアイゼナッハ派——一九世紀の六〇年代から七〇年代はじめにいたるドイツ労働運動内の二つの党。主として戦術上の問題、なによりもまずドイツ再統一の進路という当時のドイツの政治生活上の最も切迫した問題をめぐって、両党のあいだに激しいたたかいがおこなわれた。

ラサール派——ドイツの小ブルジョア社会主義者F・ラサールの支持者と追随者、一八六三年にライプチヒの労働者協会の大会で創立された全ドイツ労働者協会のメンバーたち。協会の初代会長はラサールで、彼が協会の綱領と戦術の基礎とをまとめあげた。マルクスとエンゲルスは、ラサール主義の理論、戦術および組織原則を、ドイツ労働運動内の日和見主義的潮流として何度も激しく批判した。

アイゼナッハ派——一八六九年にアイゼナッハの創立大会で設立されたドイツ社会民主労働党の党員たち。マルクスとエンゲルスの思想的影響のもとにあったアウグスト・ベーベルとヴィルヘルム・リープクネヒトが、アイゼナッハ派の指導者であった。ドイツ社会民主労働党はみずからを「国際労働者協会の一支部」と見なし、「その志向をともにする」と、アイゼナッハの綱領には述べてあった。アイゼナッハ派は、マルクスとエンゲルスの不断の助言と批判をうけたために、ラサールの全ドイツ労働者協会よりも一貫した革命的政策をとった。とくにドイツ再統一の問題では、アイゼナッハ派は「民主主義的およびプロレタリア的進路」を堅持し、「プロイセン主義、ビスマルク主義、民族主義にたいするほんのわずかな譲歩ともたたかった」(レーニン全集、第一九巻、三〇九ページ)。

一八七一年におけるドイツ帝国の成立は、ラサール派とアイゼナッハ派のあいだの戦術上の主要な意見の相違を取りのぞいた。そして労働運動の高揚と政府の弾圧の強化とにうごかされて、両党は一八七五年にゴータ大会(注五一を参照)で合同して、単一のドイツ社会主義労働党(のちのドイツ社会民主党)をつくった。三

(一〇) ゲード派——一九世紀の終りから二〇世紀初頭にかけてのフランス社会主義運動内の革命的マルクス主義的潮流で、ジュール・ゲード、ポール・ラファルグに指導されていた。一八八二年、サン-テティエンヌ大会でフランス労働党が分裂したあと、ゲード派は、党名はそのままで、独立の政党を結成した。

一九〇一年、ゲードをはじめとする革命的階級闘争の支持者は、フランス社会党(Parti socialiste de France)と合同した(同党の党員もゲード派と呼ばれるようになった)。一九〇五年、ゲード派は改良主義的なフランス社会党(Parti socialiste français)と合同した。第一次世界大戦のときには、この党の指導者(ゲード・サンバその他)は、労働者階級の大業を裏切って、社会排外主義の立場に移った。

可能主義者(ポシビリスト)——一九世紀の八〇年代にフランス社会主義運動内に生まれた小ブルジョア的改良主義的潮流で、プロレタリアートを革命的闘争方法からそらせようとした。その指導者はポール・ブルス、ブノア・マロンその他であった。ポシビリストは「社会革命労働党」を結成した。彼らは、プロレタリアートの革命的綱領と革命的戦術を否定し、労働運動の社会主義的目標をあいまいにし、労働者の闘争を「可能な」(ポシブルな)枠に限るように提案した。ポシビリストの影響は、主としてフランスの経済的に遅れた地方と労働者階級の遅れた層にひろがっていた。

その後ポシビリストの大多数は、ゲード派のフランス社会党に合流した。三

(二) フェビアン派——一八八四年に創立されたイギリスの改良主義的団体「フェビアン協会」の会員たち。この協会の名は、ハンニバルとの戦争で決戦を避ける持久戦術をとって「クンクタトル」(「ぐずぐずする者」)の異名を得た紀元前三世紀のローマの司令官ファビウス・マクシムスの名にちなんでいる。フェビアン協会員は、主としてブルジョア・インテリゲンツィア——学者、作家、政治家(たとえば、ウェッブ夫妻、バーナード・ショー、ラムジ・マクドナルドなど)であった。彼らは、プロレタリアートの階級闘争と社会主義革命の必要を否定し、資本主義から社会主義への移行はこまごました改良、社会の漸進的改革によってのみ可能だと主張した。マルクス主義に敵対するフェビアン協会は、労働者階級にブルジョアジーの影響を伝える用具の一つとなり、イギリスの労働運動に日和見主義と社会排外主義の思想を普及させるものになった。レーニンはフェビアン主義を「極端な日和見主義の潮流」と規定した(全集、第一三巻、三六三ページ)。一九〇〇年、フェビアン協会は労働党に加入した。「フェビアン社会主義」は、労働党のイデオロギーの源泉の一つになっている。

社会民主主義者——ここは、イギリス社会民主主義連盟をさす。

イギリス社会民主主義連盟——一八八四年に創立されたもので、改良主義者(ハインドマンその他)や無政府主義者とならんで、マルクス主義の支持者(ハリ・クウェルチ、トマス・マン、エドワード・エーヴリング、エリナー・マルクス-エーヴリングその他)がはいっており、イギリス社会主義運動の左翼を形成していた。エンゲルスは、連盟が教条主義とセクト主義におちいり、イギリスの大衆的労働運動から遊離し、イギリスの特殊性を無視していると言って批判した。一九〇七年、連盟は社会民主党と改称、後者は一九一一年独立労働党の左派とともにイギリス社会党を結成した。一九二〇年、社会党は、社会主義統一グループとともに、イギリス共産党の結成に重要な役割を果たした。三

(三)「人民の意志」派——ナロードニキの組織「土地と自由」が分裂した結果、一八七九年八月に成立したナロードニキ派テロリストの秘密政治団体。「人民の意志」派の先頭に立っていた執行委員会には、ア・イ・ジェリャーボフ、ア・デ・ミハイロフ、エム・エフ・フロレンコ、エヌ・ア・モロゾフ、ヴェ・エヌ・フィグネル、エス・エリ・ペローフスカヤ、ア・ア・クヴャトコフスキー、その他がはいっていた。「人民の意志」派はナロードニキ的ユートピア社会主義の立場に立ちながら、政治闘争の道に踏みだし、専制の打倒と政治的自由の獲得を最も重要な任務と見なした。一八八一年三月一日(アレクサンドル二世の暗殺)以後、政府は組織を壊滅させた。八〇年代に「人民の意志」を再建する企ては再三試みられたが、成功しなかった。こうして、一八八六年、レーニンの兄ア・イ・ウリヤーノフやペ・ヤ・シェヴイリョフらが、「人民の意志」の伝統を継ぐグループを組織した。だが一八八七年、アレクサンドル三世の暗殺が失敗したのち、同グループは摘発されて、積極的な参加者は処刑された。

レーニンは、「人民の意志」派のユートピア主義的な綱領と個人的テロルの戦術との誤りを批判したが、同時に彼らのツァーリズムとの献身的なたたかいを非常に尊敬していた。三

(三) 入閣主義者(ミルラン主義者)——フランスの改良主義的社会主義者アレクサンドル・ミルランに代表される社会民主党内の

日和見主義的潮流。ミルランは、一八九九年、フランスの反動的なブルジョア政府に入閣し、その反人民政策を支持した。レーニンは、ミルラン主義を修正主義、裏切りと規定し、社会改良主義者は、ブルジョア政府にはいると、かならず資本家のイチジクの葉、衝立となり、この政府が大衆をあざむく手段になると指摘している。三

(一四) ベルンシュタイン派——一九世紀の終りにドイツに生まれた国際社会民主主義内の日和見主義的・反マルクス主義的潮流。最も露骨に修正主義を表明したエドゥアルト・ベルンシュタインの名をとってこうよばれた。

ロシアではベルンシュタイン理論は、「合法マルクス主義者」や「経済主義者」によって支持された。

ベルンシュタイン主義とその追随者にたいして一貫した断固たるたたかいをおこなったのは、ロシアの革命的マルクス主義者——レーニンを先頭とするボリシェヴィキだけであった。レーニンはすでに一八九九年に『ロシア社会民主主義者の抗議』、『われわれの綱領』(全集、第四巻、一八〇—一九四、二二四—二二九ページ)のなかでベルンシュタイン主義者に反対したが、また『なにをなすべきか?』、『マルクス主義と修正主義』(全集、第一五巻、一四—二三ページ)、『ヨーロッパの労働運動内の意見の相違』(全集、第一六巻、三六四—三六九ページ)で、ベルンシュタイン主義を全面的に批判している。三

(一五) ユピテルとミネルヴァ——古代ローマの神々。ユピテルは天空、光、雨、雷電の神で、のちにローマ国家の最高神。ミネルヴァは戦争の女神で、工芸、科学、芸術の保護神。神話では、ミネルヴァがユピテルの頭から完全に武装した姿でとびだしたことになっている。三

(一六) エンゲルス『マルクスの「ルイ・ボナパルトのブリュメール一八日」第三版への序文』、全集、第八巻、五四四ページを参照。三

(一七) 空樽の寓話——ロシアの寓話作家クルィローフの寓話『二つの樽』から。クルィローフはこの寓話の教訓を次のようにまとめている。「たえず自分の仕事のことを叫びたてる者は、まったくたいしたことを言っていないのだ。」一六

(一八) 「在外ロシア社会民主主義者同盟」——「労働解放」団(注四八を参照)の綱領を承認することを条件として、一八九四年に同団の提唱によってジュネーヴに創立されたもの。はじめ「労働解放」団に「同盟」の出版物の編集がまかされていたが、一八九五年三月に同団はその印刷所を「同盟」に提供した。

ロシア社会民主労働党第一回大会(一八九八年三月)は、「同盟」を党の在外代表部として承認した。その後、日和見主義分子(「経済主義者」、すなわち、いわゆる「青年組」)が同盟を牛耳った。一八九八年一一月チューリヒでひらかれた「在外ロシア社会民主主義者同盟」第一回大会で、日和見主義的多数派は、ロシア社会民主労働党第一回大会の『宣言』に同意することを拒絶した。「同盟」の内部闘争はその第二回大会(一九〇〇年四月、ジュネーヴ)までつづき、大会の席上でもおこなわれた。この闘争の結果、「労働解放」団とその同志たちは大会を退場して、独立の組織「社会民主主義者」団を結成した。

ロシア社会民主労働党第二回大会で、「同盟」の代表たち(「ラボーチェエ・デーロ」派)は極端に日和見主義的な立場をとり、大会が「ロシア革命的社会民主主義在外連盟」(注一三〇を参照)を党の唯一の在外組織として承認したので、大会を退場した。第二回党大会は「同盟」の解散を宣言した。一五

（一九）『ザリャー』（『あかつき』）――マルクス主義的な学術＝政治雑誌で、一九〇一年から一九〇二年にかけて、シュトゥットガルトの『イスクラ』編集局から出ていた。全部で四号（三冊）、第一号は一九〇一年四月に（実際は新暦の三月二三日に出た）、第二―三合併号は一九〇一年一二月に、第四号は一九〇二年八月に発行された。『ザリャー』の任務は、レーニンがロシアで書いた『イスクラ』および『ザリャー』編集局の声明のなかで明確にされている（全集、第四巻、三四七―三五九ページ）。

雑誌『ザリャー』は内外の修正主義を批判し、マルクス主義の理論的基礎を擁護した。一六

（二〇）山岳党とジロンド党――一八世紀末のフランス・ブルジョア革命当時にあったブルジョアジーの二つの政治的集団の名まえ。山岳党（ジャコバン党）とよばれたのは、絶対主義と封建制度を廃止する必要を主張していた当時の革命的階級、ブルジョアジーの最も断固たる代表者たちであった。ジロンド党はジャコバン党とは違って、革命と反革命とのあいだを動揺し、君主制との取引の道にすすんだ。

レーニンは、社会民主党内の日和見主義的潮流を「社会主義的ジロンド党」とよび、革命的社会民主主義者をプロレタリア的ジャコバン党または「山岳党」とよんだ。ロシア社会民主労働党がボリシェヴィキとメンシェヴィキとに分裂したのち、レーニンは、メンシェヴィキが労働運動内のジロンド的潮流を代表するものであることを、しばしば強調した。

なお一八世紀末のフランス革命当時、この両派のそとにあって、本能的に保守的でありながら、確固たる信念をもたず、両派のあいだを右往左往していた分子は、「沼地党」または「平原党」を結成していた。彼らはまた「沼の蛙」とよばれていた。一六

（二一）カデット――ロシアの自由主義的＝君主主義的ブルジョアジーの主要な政党であった立憲民主党の党員のこと。同党は、一九〇五年一〇月に結成され、ブルジョアジーの代表者、地主のなかのゼムストヴォ活動家、ブルジョア・インテリゲンツィアが、これに参加した。カデットの有力な指導者は、ペ・エヌ・ミリュコーフ、エス・ア・ムーロムツェフ、ヴェ・ア・マクラコーフ、ア・イ・シンガリョーフ、ペ・ベ・ストルーヴェ、エフ・イ・ローヂチェフその他であった。その後、カデットは帝国主義ブルジョアジーの政党となった。第一次世界大戦中、カデットはツァーリ政府の侵略的対外政策を積極的に支持した。二月革命のときには君主制を救おうとつとめた。ブルジョア臨時政府内で指導的な地位を占めたカデットは、アメリカ、イギリス、フランスの帝国主義者に有利な反人民、反革命の政策を推しすすめた。十月革命が勝利すると、ソヴェト権力に敵対し、あらゆる反革命的武力行動や干渉軍の軍事行動にくわわった。彼らの多くは国外に亡命して、反ソ活動をつづけた。一六

（二二）「ベズザグラフツィ」（「無表題」派）――一九〇五―一九〇七年の革命が後退しはじめた時期に生まれたロシアのブルジョア・インテリゲンツィアの半カデット的、半メンシェヴィキ的グループ（エス・エヌ・プロコポーヴィチ、イェ・デ・クスコーヴァ、ヴェ・ヤ・ボグチャルスキー、ヴェ・ヴェ・ポルトゥガーロフ、ヴェ・ヴェ・ヒジニャコーフ、その他）。このグループの名は、一九〇六年一月―五月にペテルブルグでプロコポーヴィチの編集のもとに発行されていた政治週刊雑誌『ベズ・ザグラヴィヤ』（『無表題』）からきている。のち「ベズザグラフツィ」はカデット左派の新聞『タヴァーリシチ』（『同志』）のまわりに集まった。「ベズザグラフ

ツイ」はその形式的な無党派性を隠れみのとして、ブルジョア自由主義と日和見主義との思想を宣伝し、ロシアおよび国際社会民主主義内の修正主義者を支持した。一六

(二三)「イロヴァイスキー流に」歴史を考察する――革命前のロシアの初等および中等学校でつかわれていたイロヴァイスキーの歴史教科書では、歴史はおもにツァーリや将軍の活動に帰着させられていた。一七

(二四) 社会主義者取締法――ドイツで一八七八年にビスマルク政府が労働運動と社会主義運動を弾圧するために施行したもの。この法律によって、すべての社会民主党組織、労働者の大衆団体、労働者出版物は禁止され、社会主義文献は没収され、社会民主主義者は追及され追放された。しかし、弾圧も社会民主党を粉砕することはできず、その活動は非合法の条件におうじて再建された。国外で党中央機関紙『ゾツィアルーデモクラート』が発行され、党大会が定期的にひらかれた。国内では、非合法の中央委員会に指導される社会民主党の組織やグループが地下に急速に再建された。同時に党は、合法的可能性を広く利用して大衆との結びつきを強化した。党の影響力はたえず増大し、国会選挙で社会民主党候補に投じられる票数は、一八七八年から一八九〇年までに三倍以上にふえた。マルクスとエンゲルスはドイツ社会民主党に大きな援助をあたえた。大衆的労働運動の強化に押されて、一八九〇年に同法は廃止された。一七

(二五) 講壇社会主義者――一九世紀の七〇―八〇年代におけるブルジョア経済学の一流派の代表者たち。彼らは大学の講壇から、社会主義という触れこみでブルジョア自由主義的改良主義を説いた。講壇社会主義の反動的本質は、マルクスとエンゲルスによって暴露された。レーニンは講壇社会主義者を、マルクスの革命的学説を憎悪する「警察的=ブルジョア的な大学ふう学問」の南京虫どもとよんだ(全集、第一三巻、二四ページ)。ロシアでは、講壇社会主義者たちの見解は「合法マルクス主義者」によって宣伝された。一七

(二六) 一八七七年五月二七―二九日に、ゴータ市でドイツ社会主義労働党の定期大会がひらかれた。大会の席上で党機関紙誌の問題が討議されたとき、一部の代議員(モスト、ヴァールタイヒ)は、デューリングを批判したエンゲルスの論文(一八七八年に単行本『反デューリング論。オイゲン・デューリング氏の科学の変革』として出たもの)を掲載したかどで党中央機関紙『フォールヴェルツ』(『前進』)を非難し、また論調の激しさのかどでエンゲルス自身を非難する動議を提出した。大会はこの動議を否決したが、同時に実際上の考慮から、理論上の問題にかんする討論を、機関紙ではなく機関紙の学術付録でつづけることを決定した。一七

(二七)『フォールヴェルツ』(『前進』)――ドイツ社会民主党の日刊の中央機関紙。ハレ党大会(一八九〇年一〇月一二―一八日)の決定により、一八八四年以来発行されていた『ベルリーナー・フォルクスブラット』(『ベルリン人民新聞』)の後継紙として、一八九一年からベルリンで『フォールヴェルツ。ベルリーナー・フォルクスブラット』という名で発行されていた。エンゲルスは、同紙の紙面で日和見主義のあらゆる現われとたたかった。エンゲルス死後の九〇年代後半からは、『フォールヴェルツ』編集局は党の右翼の手におち、日和見主義者の論文を系統的に掲載するようになった。『フォールヴェルツ』は、第一次世界大戦の時期に社会排外主義の立場をとり、十月革命後は反ソ宣伝の中心のひとつとなった。同紙は一九三三年に廃刊された。一七

(二八) ノズドリョーフ式の意味で「歴史的」――ノズドリョーフ

は、ゴーゴリの作品『死せる魂』に出てくる、たえず他人といざこざをおこす地主の名。いざこざの「歴史」を残すという意味で、「歴史的」な人物。一八

(二九) ハノーヴァー決議——ドイツ社会民主党ハノーヴァー大会(一八九九年一〇月九—一四日)の決議『党の立場と戦術の基礎にたいする攻撃』をさす。この決議では、マルクス主義の基本原則を修正して、社会民主党の戦術を変更させ、党を民主主義的改良の党にしようとしていたエドゥアルト・ベルンシュタインを思想的指導者とする党の日和見主義的な企てが、非難されている。しかし、この決議には修正主義とその具体的な担い手にたいする鋭い批判が欠けていたので、左派(ローザ・ルクセンブルクその他)の不満を買った。ベルンシュタイン派はこの決議に賛成した。一八

(三〇) リューベック決議——ドイツ社会民主党のリューベック大会(一九〇一年一一月二二—二八日)で採択されたベルンシュタインに反対する決議をさす。ベルンシュタインは、一八九九年のハノーヴァー大会後も社会民主党の綱領と戦術にたいする攻撃をやめなかったばかりか、かえってこの攻撃を強化し、党外にまでもちだした。討論の過程でも、ベーベルが提案し大会の圧倒的多数によって採択された決議でも、ベルンシュタインにたいして直接の警告が発せられた。しかし、リューベック大会では、マルクス主義の修正と社会民主党の隊列内にとどまることとが両立しないという問題は、原則的に提起されなかった。一八

(三一) ドイツ社会民主党のシュトゥットガルト大会——一八九八年一〇月三—八日におこなわれ、そこではじめてドイツ社会民主党内の修正主義の問題が審議された。大会では、亡命中のベルンシュタインからとくに送られてきた声明が発表された。そのなかで彼は、以前に雑誌『ノイエ・ツァイト』所載の連続論文『社会主義の諸問題』のなかで述べた自分の日和見主義的見解を叙述し、擁護した。大会でベルンシュタインに反対した人々のあいだには一致がなかった。ベーベルとカウツキーを先頭とする一部の者は、党の分裂を恐れて、ベルンシュタイン主義にたいする原則的闘争を慎重な党内戦術と結びつけようとした。少数派の他の者(ローザ・ルクセンブルク、パルヴス)は、それより断固とした態度をとった。大会はこの問題についてなんの決議も採択しなかったが、討論の過程からも、他の諸決定からも明らかなように、大会の多数派は革命的マルクス主義の思想を忠実に守った。一九

(三二) これは、一九〇一年四月発行の雑誌『ザリャー』第一号に掲載されたア・エヌ・ポトレソフ(スタロヴェール)の論文『なにが起こったのか?』をさす。二〇

(三三) 古くさくなった社会的＝政治的世界観とはナロードニキ主義をさす。

ナロードニキ主義(人民主義)——一八六〇年代のロシアに生まれ、地主の抑圧および農奴制の遺物にたいする農民の抗議を反映した社会的潮流。ナロードニキ主義は、資本主義的発展の合法則性が理解できないで、人類社会をいっそう発展させるうえでプロレタリアートの果たす革命的役割を否認した。それは、農民共同体を社会主義の萌芽と見なし、また農民を主要な革命勢力と見なした。ナロードニキ主義は、農民国にとって典型的なユートピア社会主義の一変種であった。

一八七〇年代のはじめに、ナロードニキのあいだにバクーニン、ラヴローフおよびミハイロフスキーの観念論的折衷主義理論がひろまった。彼らは、歴史における人民大衆の役割を過小評価し、少数

の「批判的に思考する個人」が人類社会の発展を規定するという見解をとった。ここからしてまた、ナロードニキのあいだに無政府主義的な傾向が生まれた。その後、ナロードニキは、ツァーリズムと妥協する自由主義的コースをたどった。こうして、はじめ進歩的だった運動は反動的な運動に転化し、一八八〇年代には民主主義的な革命運動の発展を妨げるようになった。ナロードニキのイデオロギーを粉砕して、ロシアにマルクス主義が普及する道をひらいたのは、プレハーノフおよびとくにレーニンであった。三二

(三四)「思いあがった作家」——ア・エム・ゴーリキーの初期の小説の題名。三二

(三五) ここでレーニンが念頭においているのは、カ・トゥーリンという筆名で書いた自分の論文『ナロードニキ主義の経済学的内容とストルーヴェ氏の著書におけるその批判(ブルジョア文献におけるマルクス主義の反映)』(全集、第一巻、三五一—五四六ページ)と、論集『一二年間』の序文(全集、第一三巻、八五—一〇二ページ)とである。前者は論集『わが国の経済的発展の特徴づけのための資料集』に収録され、一九〇七年にレーニンの論集『一二年間』に再録された。後者では、この論文が生まれたときの情勢の特徴づけと、そのいきさつとが示されている。三三

(三六) ヘロストラトスふうに有名な——ヘロストラトスは、前三五六年ごろのエフェソスの人。後世に自分の名を残そうとして、著名なエフェソスのアルテミスの神殿を焼いた。三三

(三七) ベルンシュタインの著書のロシア語訳——一九〇一年に、エドゥアルト・ベルンシュタインの著書『社会主義の諸前提と社会民主党の任務』の三種のロシア語訳が、それぞれ違った表題で出版された。その一つは同年中に版をかさねた。三三

(三八) ベルンシュタインやプロコポーヴィチの著書がズバートフの推薦をうけたことが、『イスクラ』編集局あての手紙『ズバートフ運動について』のなかで報じられた。この手紙は、マルトフの論文『いま一度今日の政治的堕落について』(一九〇一年一一月の『イスクラ』第一〇号)のなかで利用された。三三

(三九)『クレード』(『信条』)——一八九九年に「経済主義者」のグループが『青年組のクレード』という名称で出した文書をさす。筆者はイェ・デ・クスコーヴァとエス・エヌ・プロコポーヴィチで、彼らはのちカデット党員になり、十月革命後は白系亡命者となった。この文書には、プロレタリアートの独自の政治的役割と労働者階級の党の必要性を否定した「経済主義者」の日和見主義的見解が述べられていた。当時シベリアの流刑地にあって『クレード』を手にしたレーニンは、ただちに『ロシア社会民主主義者の抗議』(全集、第四巻、一八〇—一九四ページ)を書いて、「経済主義者」に断固たる反撃をくわえた。三三

(四〇)『ラボーチャヤ・ムィスリ』(『労働者の思想』)——「経済主義者」の機関紙で、一八九七年一〇月から一九〇二年一二月まで出ていた。一六号出た。カ・エム・タフタリョフその他が編集にあたっていた。

レーニンは『イスクラ』紙上の論文や『なにをなすべきか?』のなかで、国際日和見主義のロシアにおける変種として、同紙の立場を批判している。三四

(四一)『ヴァデメクム』(『手引き』)——『「ラボーチェエ・デーロ」編集局のためのヴァデメクム。資料集。「労働解放」団発行。ゲ・ヴェ・プレハーノフの序文付』(ジュネーヴ、一九〇〇年二月)のこと。ロシア社会民主労働党内の日和見主義、主として「在外ロ

シア社会民主主義者同盟」とその機関誌『ラボーチェエ・デーロ』の「経済主義」に鋒先をむけたもの。二四

（四二）『プロフェシオン・ド・フォア』（『信仰告白』）――ロシア社会民主労働党キエフ委員会の日和見主義的見解を述べたリーフレットで、一八九九年末に書かれた。リーフレットの内容は、多くの点で「経済主義者」の有名な『クレード』と一致していた。この文書にたいするレーニンの批判は、手書きや印書でひろめられた彼の論文『「プロフェシオン・ド・フォア」について』（全集、第四巻、三〇七―三一九ページ）にあたえられている。二四

（四三）『クレード』にたいする一七人の抗議――『ロシア社会民主主義者の抗議』をさす。ペテルブルグの姉ア・イ・ウリヤーノヴァ―エリザーロヴァから送ってきた『クレード』を受け取ったのち、一八九九年八月にレーニンが書いたもの（全集、第四巻、一八〇―一九四ページ）。ロシアのベルンシュタイン主義者に鋒先をむけたこの『抗議』の草案は、ミヌシンスク管区エルマコフスコエ村（ア・ア・ヴァネーエフ、ペ・エヌ・レペシンスキー、エム・ア・シリヴィンその他の流刑地）でひらかれた一七名の社会民主主義者の流刑者の会議で討議され、全員一致で採択された。抗議には、さらにトゥルハンスクとヴャトカ県オルロフ市在住の流刑者も賛成した。二四

（四四）『プィロエ』（『既往』）――主としてナロードニキ主義やそれ以前の社会運動の歴史を扱った歴史雑誌で、ヴェ・エリ・ブルツェフが創刊したもの。一九〇〇年から一九〇四年まではロンドンで発行され、一九〇六年から一九〇七年までは、ブルツェフも参加して、ヴェ・ヤ・ボグチャルスキーとペ・イェ・シチョーゴレフの編集でペテルブルグで発行された。一九〇七年、『プィロエ』はツァーリ政府によって禁止され、第一一、一二号のかわりに史論集『わが国』が出版された。一九〇八年に『プィロエ』のかわりに雑誌『ミヌーフシエ・ゴードィ』（『過去の歳月』）が発行され、一九〇九年には『過去のこと』という史論集が出版された。一九〇八年にブルツェフはパリで同誌の国外版を復刊し、一九一二年までつづけた。ロシア国内では、一九一七年に再刊されて、一九二六年までつづいた。十月革命後の編集者はシチョーゴレフであった。二四

（四五）イスクラ第一二号所載の手紙――一経済主義者から寄せられた『イスクラ』の方針を批判した手紙。この手紙の全文とそれへのレーニンの回答については、レーニンの論文『経済主義の擁護者たちとの対話』、全集、第四巻、三二五―三三四ページを参照。二五

（四六）「在外社会民主主義者同盟」の決議――「在外ロシア社会民主主義者同盟」第三回大会で採用されたもの。この大会は、一九〇一年九月にチューリヒでひらかれた。大会の決定は、同盟内で日和見主義が最後的に勝利を占めたことを立証していた。大会では、ロシア社会民主主義者の在外諸組織の原則協定案（一九〇一年六月のジュネーヴ会議で作成されたもの）にたいする修正と補足が採択されたが、これははっきり日和見主義的な性格をおびていた。このため、大会の数日後にひらかれたロシア社会民主労働党在外組織「合同」大会は不成功に終わった。同盟の大会ではまた、『「ラボーチェエ・デーロ」編集局への指令』が承認されたが、この指令は、国際社会民主主義およびロシア社会民主党内部の革命的潮流と日和見主義的潮流との闘争や、修正主義を批判してマルクス主義の革命的核心を基礎づける必要には口をとざしていたので、事実上修正主義者を勇気づけるものであった。二五

（四七）全集、第四巻、三八八ページを参照。二七

（四八）「労働解放」団――一八八三年にゲ・ヴェ・プレハーノフ

によってスイスで創立された最初のロシア・マルクス主義者のグループ。プレハーノフのほか、ペ・ペ・アクセリロード、エリ・ゲ・デイチ、ヴェ・イ・ザスーリチ、ヴェ・エヌ・イグナートフが同団にくわわっていた。

「労働解放」団は、ロシアでマルクス主義を宣伝するうえで大きな仕事を遂行した。同団は、ロシアにおけるマルクス主義の普及と社会民主主義運動の発展を妨げる主要な思想的障害であったナロードニキ主義に、強力な打撃をくわえた。プレハーノフによって一八八三年と一八八五年に書かれ、「労働解放」団から出版されたロシア社会民主主義者の二つの綱領草案は、ロシアにおける社会民主党の準備と創立にとって重要な一歩であった。「労働解放」団は、国際労働運動と連絡をつけ、一八八九年の第二インタナショナル第一回大会（パリ）以来、その各大会でロシアの社会民主主義派を代表していた。しかし、「労働解放」団には重大な誤りもあった。自由主義的ブルジョアジーの役割の過大評価、プロレタリア革命の予備軍としての農民の革命性の過小評価がそれである。これらの誤りは、プレハーノフその他の団員の、のちのメンシェヴィキ的見解の萌芽であった。レーニンは、「労働解放」団は「理論的に社会民主党を創設し、労働運動にむかって一歩を踏みだしただけである」と指摘した（全集、第二〇巻、二九二ページ）。

『「労働解放」団の出版再開の知らせ』は、一八九九年一二月にアクセリロードが書いたもので、一九〇〇年のはじめに単行のリーフレットとして発表され、また前出の『ヴァデメクム』にものった。『知らせ』に述べられている文書活動計画は、『ザリャー』、『イスクラ』が発行されはじめてからやっと実現された。二六

（四九）　一八七五年五月五日付のマルクスからヴィルヘルム・ブラッケへの手紙。全集、第一九巻、一三ページを参照。二六

（五〇）　「いくら運んでも運びきれないように！」――ロシアの古い民話からとったことば。ばかのイヴァンが結婚式に招かれ、あいさつができずに恥をかいて戻ったところ、母親から、そういうときには、結婚の贈り物が「いくら運んでも運びきれないように」と言うものだ、と教えられる。その次に道ばたで葬式行列を見て、「いくら運んでも運びきれないように！」と叫んでなぐられるという話。二六

（五一）　ゴータ綱領――一八七五年にゴータでドイツ労働運動の両派アイゼナッハ派とラサール派が合同したときに（注九を参照）、採択されたドイツ社会主義労働党の綱領。この綱領は、重要問題でラサール派に譲歩し、ラサールの定式を採用したので、折衷主義の欠陥をもち、日和見主義的なものであった。マルクスとエンゲルスは、ゴータ綱領草案をきびしく批判し、これをアイゼナッハ綱領からの大きな一歩後退と見なした（マルクスの論文『ゴータ綱領批判』、全集、第一九巻、一五―三二ページを参照）。二九

（五二）　アクセリロードが「経済主義者たち」に予言したこと――アクセリロードは、小冊子『ロシア社会民主主義者の今日の任務と戦術の問題によせて』（ジュネーヴ、一八九八年）のなかで次のように書いた。もし社会民主主義者が純経済闘争だけにその注意を集中するなら、プロレタリアートの最も革命的な分子は、自分たちの政治的意欲にたいする活動分野を見いだせないで、七〇年代のようにテロルにそれたり、一般にブルジョア民主主義的革命運動のなにかの変種にそれてしまうおそれがある、と。二九

（五三）　エンゲルス『「ドイツ農民戦争」一八七〇年版の序文への追記』、全集、第一八巻、五〇八―五一〇ページを参照。三三

（五四）　一八九六年のペテルブルグの産業戦争——一八九六年五―六月のペテルブルグ労働者の大衆的ストライキをさす。ストライキは、ペテルブルグ「労働者階級解放闘争同盟」の指導のもとにおこなわれた。「同盟」は、リーフレットを出して、協力一致して頑強に自分の権利を守るよう、労働者に呼びかけた。「闘争同盟」は、労働日を一〇時間半に短縮せよ、出来高単価を引き上げよ、賃金の遅配をなくせ、等々といったストライキ労働者のおもな要求（『ペテルブルグの綿紡績工場の労働者はなにを要求するか』）を印刷し、散布した。ペテルブルグのストライキは、全ロシアのストライキ運動の発展をうながした。このストライキに押されて、ツァーリ政府は工場法の改正をいそぎ、労働時間を一一時間半以下に短縮する一八九七年六月二（一四）日の法律を公布しなければならなかった。後年レーニンが書いたように、これらのストライキは「その後、たゆみなく高揚した労働運動の一時代をひらいた」（全集、第一三巻、八五ページ）。三

（五五）　小冊子『扇動について』——一八九四年にヴィルナで、ア・クレーメル（のち「ブンド」創立者のひとり）が書いたもので、ユ・オ・マルトフが校訂した。この小冊子は、ヴィルナでの社会民主主義活動の経験を総括したもので、ロシアの社会民主主義者に大きな影響をあたえた。というのは、そのなかには、狭いサークル内の宣伝をやめて、労働者の日常要求にもとづいて彼らのあいだでの大衆的扇動に移るように、という呼びかけがあったからである。しかし、経済的な闘争の役割と重要性を過大評価し、一般民主主義的な要求にもとづく政治的扇動をないがしろにしたことは、将来の「経済主義」の萌芽であった。三

（五六）「労働者階級解放闘争同盟」——一八九五年の秋にレーニンが組織したもの。ペテルブルグのおよそ二〇のマルクス主義的サークルがこれに統合された。「闘争同盟」の全活動は、中央集権制と厳格な規律を原則としていた。「闘争同盟」の先頭に立った中央グループには、レーニン、ア・ア・ヴァネーエフ、ペ・カ・ザポロージェッツ、ゲ・エム・クルジジャノフスキー、クループスカヤ、ユ・オ・マルトフ、エム・ア・シリヴィン、ヴェ・ヴェ・スタルコフ、その他がはいった。直接の指導者は、レーニンを頭とする五名の中央グループ員の手に集中されていた。

一八九五年一二月、ツァーリ政府は「闘争同盟」に大打撃をくわえた。一八九五年一二月八日から九日（二〇日から二一日）にかけての夜、レーニンをはじめとする「同盟」の活動家の大部分が逮捕され、組版にまわすばかりになっていた新聞『ラボーチェエ・デーロ』創刊号も没収された。

レーニンは獄中にあっても、「同盟」を指導し、これに助言をあたえ、暗号で書いた手紙やリーフレットを獄外に送り、小冊子『ストライキについて』（未発見）、『社会民主党綱領草案と解説』（全集、第二巻、七七―一〇三ページ）を書いた。

ペテルブルグの「労働者階級解放闘争同盟」の意義は、レーニンの表現によれば、それが労働運動に立脚し、プロレタリアートの階級闘争を指導する革命党の萌芽であった点にある。逮捕をまぬかれた旧「同盟」員たちは、一八九八年のロシア社会民主労働党第一回大会の準備と開催に参加し、大会の名で出された『宣言』の作成にくわわった。しかし、「闘争同盟」の創立者たち、まず第一にレーニンがシベリアに流刑にされて、長いあいだ不在であったため、「青年組」、「経済主義者」が日和見主義的政策をとることが容易になった。彼らは、一八九七年以来、『ラボーチャヤ・ムィスリ』を

つうじて、組合主義とベルンシュタイン主義をロシアに植えつけようとした。一八九八年の下半期から、「同盟」の指導は、最も露骨な「経済主義者」である「ラボーチャヤ・ムィスリ」派がおこなうようになった。三五

（五七）『ルースカヤ・スタリナ』（『ロシアの往時』）――エム・エス・セメフスキーの創刊した月刊の歴史雑誌。一八九〇年から一九一八年までペテルブルグで発行されていた。

なおレーニンが新聞『ラボーチェエ・デーロ』のために書いた社説『ロシアの労働者にうったえる』は、いまなお発見されていない。三五

（五八）レーニン全集、第二巻、七三―七六ページを参照。三六

（五九）ヤロスラヴリ県における労働者の殺戮――一八九五年四月二七日（五月九日）、ヤロスラヴリの大織物工場のストライキ労働者にくわえられた暴行をさす。四〇〇〇人以上の労働者をまきこんだこのストライキの原因は、工場管理者側が労働者の賃金を引き下げるような新しい出来高単価を実施したことであった。ストライキの弾圧にはファナゴリースキー連隊の一〇個中隊が呼びよせられた。武器が使用された。その結果一人が死亡し、一四名が負傷した。同連隊司令官の報告書に、ニコライ二世は、「ファナゴリースキーの勇士が工場の擾乱のさい剛毅な行動をとったことを感謝する」と書きつけた。

一八九五年のヤロスラヴリのストライキにかんする論文は、レーニンの書いたものであるが、いまなお発見されていない。三六

（六〇）『サンクト・ペテルブルグスキー・ラボーチー・リストーク』（『サンクト・ペテルブルグ労働者小新聞』）――ペテルブルグの「労働者階級解放闘争同盟」の機関紙。みなで二号発行された。第一号は一八九七年二月（日付は一月）にロシア国内で謄写版印刷によって三〇〇部ないし四〇〇部刊行され、第二号は一八九七年九月にジュネーヴで活版印刷によって刊行された。

同紙は、労働者階級の経済闘争を広範な政治的要求と結びつける任務をかかげ、労働者党創立の必要を強調した。三六

（六一）ロシア社会民主労働党は、一八九八年三月にミンスクの第一回大会で創立された。大会には、六つの組織――ペテルブルグ、モスクワ、エカテリノスラフ、キエフの各「労働者階級解放闘争同盟」、キエフの『ラボーチャヤ・ガゼータ』、ブンド――を代表する九人の代議員が参加した。大会は、中央委員会を選出し、『ラボーチャヤ・ガゼータ』を党の正式の機関紙として承認し、「在外ロシア社会民主主義者同盟」を党の在外代表部と認めた。大会の直後に中央委員会のメンバーは逮捕された。

『宣言』は、ロシア社会民主党の主要任務として政治的自由と専制の打倒のための闘争をかかげ、政治闘争と労働運動の一般的諸任務とを結びつけていた。三六

（六二）ある私的な会合――「労働者階級解放闘争同盟」の創立者であるレーニン、ヴァネーエフ、クルジジャノフスキー、マルトフその他の「老人組」と「同盟」の新しい顔ぶれとの会合のことで、「同盟」の古いメンバーが、シベリアに送られるまえに釈放されたときを利用して、一八九七年二月一四日から一七日のあいだにペテルブルグのエス・イ・ラードチェンコとマルトフの住居でひらかれた。会合では組織問題、戦術問題で重大な意見の相違が現われた。一八九三―一八九五年に「老人組」にはいっていたア・ア・ヤクーボヴァは、会議の席上で、生まれかけていた「経済主義」の立場を

主張したが、一方「青年組」の一人ペ・イ・ゴーレフ（ゴリドマン）は、レーニン、「老人組」を支持した。これについてレーニンは、一九〇三年五月一五日付『イスクラ』第四〇号に発表された、ペテルブルジェッ（カ・エム・タフタリョフ）の『編集局への手紙』につけた注で、「つまり、私の分け方で不正確な点は、『青年組』の一人はその時（論争のさいに）『老人組』を支持したように思われ、『老人組』の一人は『青年組』を支持したように思われた点にある」と書いている。三八

(六三) 『小型版「ラボートニク」』（『小型版「労働者」』）——「在外ロシア社会民主主義者同盟」の不定期刊行物。一八九六年から一八九八年までジュネーヴで発行されていた。全部で一〇号出た。その一号から八号までは「労働解放」団の編集で発行された。「同盟」員の大多数が「経済主義」に転向した結果、「労働解放」団が「同盟」の出版物の編集を拒否したので、第九—一〇合併号（一八九八年一一月）は「経済主義者」の編集で発行された。三八

(六四) 「ロシア社会民主党のヴェ・ヴェたち」——ヴェ・ヴェは、一九世紀の八〇—九〇年代の自由主義的ナロードニキの思想家ヴェ・ペ・ヴォロンツォフの仮名。彼は、ナロードニキの古ぼけた思想をだれよりも多く代表しており、九〇年代には政治的大衆闘争を否定するまでに反動化した。「ロシア社会民主党のヴェ・ヴェたち」ということばで、レーニンは、ロシア社会民主党内の日和見主義的潮流の代表者たち、すなわち経済主義者をさしている。四〇

(六五) オーストリア社会民主党のウィーン大会（一九〇一年一一月二—六日）では、これまでのハインフェルト綱領（一八八八年）に代わって新しい綱領が採択された。一八八九年のブリュン（ブルノ）大会の委任で特別委員会（ヴィクトル・アードラーその他）が起草した新綱領草案では、ベルンシュタイン理論に重大な譲歩がなされていたので、多くの批判をよんだ、とくにカウツキーは、『ノイエ・ツァイト』（一九〇一—一九〇二年、第三号）に発表された論文『オーストリア社会民主党綱領の改訂』のなかで、歴史的過程全体の歩みと労働者階級の任務にたいする社会民主党の理解をいっそう完全に正しく表明しているものとして、ハインフェルト綱領の原則的な部分を残しておくように主張した。四二

(六六) ドイツ進歩党——一八六一年六月九日に創立された。同党の綱領は、プロイセンを盟主とするドイツの統一、地方自治の原理の実現のような諸要求をふくんでいた。四五

(六七) これは、エス・エヌ・プロコポーヴィチの著書『西欧における労働運動。批判的研究の試み。第一巻、ドイツ、ベルギー』（一八九九年）と、『社会立法統計アルヒーフ』第一四巻、ベルリン、一八九九年、に発表されたストルーヴェの論文『マルクスの社会発展理論』、およびベルンシュタインの『社会主義の前提と社会民主党の任務』、カウツキーの『ベルンシュタインと社会民主党綱領』にたいするストルーヴェの書評をさしている。

プロコポーヴィチは、その著書のなかで、ドイツとベルギーの労働運動には社会民主党の革命的闘争と革命的政策の条件がないことを立証しようとしている。一方、ストルーヴェはその諸論文のなかで、ベルンシュタイン主義の立場からマルクス主義の一般理論とその哲学的前提を排撃し、社会革命とプロレタリアートの独裁の不可避性および必要性を否定している。四五

(六八) ヒルシュ＝ドゥンカー組合——ドイツの改良主義的労働組合組織で、ブルジョア自由主義的な進歩党の活動家マックス・ヒルシュとフランツ・ドゥンカーが一八六八年に創立したもの。その活

動はもっぱら共済組合や文化・教育団体の枠内に限られていた。ヒルシュ＝ドゥンカー組合は、一九三三年五月まで存続したが、ブルジョアジーの尽力や政府機関の支持にもかかわらず、ドイツ労働運動内でとるにたる勢力になったことは、一度もなかった。一九三三年、ヒルシュ＝ドゥンカー組合の日和見主義的活動家たちは、ファシストの「労働戦線」にはいった。四五

（六九）「労働者階級自己解放団」――「経済主義者」の小グループで、一八九八年秋にペテルブルグで創立され、数ヵ月間存続した。同団は、自己の目的を述べた檄文（一八九九年三月の日付で、雑誌『ナカヌーネ』の一八九九年七月号に掲載）、規約、労働者にあてた扇動ビラを発表した。四七

（七〇）『ナカヌーネ』（『前夜』）――「社会革命評論」。ナロードニキ的傾向の月刊雑誌。一八九九年一月から一九〇二年二月まで、ロンドンでイエ・ア・セレブリャコーフの編集のもとにロシア語で発行されていた。全部で三七号出た。この雑誌は、一般にマルクス主義に、とくにロシアの革命的社会民主党に敵意をいだいていた。四七

（七一）「労働解放」団と『ラボーチェエ・デーロ』の論戦――「労働解放」団と『ラボーチェエ・デーロ』編集局との論戦は、レーニンの小冊子『ロシア社会民主主義者の任務』、ジュネーヴ、一八九八年（全集、第二巻、三二一―三四五ページ）にたいする書評が、一八九九年四月の『ラボーチェエ・デーロ』創刊号に掲載されたことから始まった。

ロシアの革命的社会民主党の政治綱領と戦術を創始し、マルクス主義党の社会主義的活動と民主主義的活動との不可分の関係を示したレーニンのこの小冊子は、一八九七年末に流刑地で書かれ、一八九八年後半にアクセリロードの序文をつけて「労働解放」団の手で出版された。この序文のなかで、アクセリロードは、レーニンの見解に同意を表明するとともに、遠い亡命地にあって判断できるかぎりでは、ロシア国内の社会民主主義者の活動は、まだレーニンの言っているような段階には達していないように見える、というのは、「比較的最近に国外に来た若い同志たち」は「ほとんど例外なく本書の著者の実践的見地からまだかなりへだたっている」からである、と書いた。この「若い同志たち」というなかに、アクセリロードは、経済主義に転向した「在外ロシア社会民主主義者同盟」の指導的メンバーたち、とりわけ『ラボーチェエ・デーロ』の編集者ヴェ・ペ・イヴァンシン（ヴェ・イ）をふくめていたのである。

『ラボーチェエ・デーロ』編集局は、その書評のなかで、「在外ロシア社会民主主義者同盟」が日和見主義的性格をもつこと、またロシア国内の社会民主主義諸組織内で「経済主義者」の影響力が強まったことを否定し、「小冊子の論旨は、『ラボーチェエ・デーロ』の編集綱領と完全に一致する」、小冊子の序文で「アクセリロードはどういう『若い』同志たちのことを言ったのか」、われわれにはわからない、と主張した。

アクセリロードは、一八九九年八月に『「ラボーチェエ・デーロ」編集局への手紙』でこれに答え、レーニンによって小冊子『ロシア社会民主主義者の任務』のうちに述べられた革命的社会民主党の立場と、ロシア内外の日和見主義者の立場とを同一視しようとする『ラボーチェエ・デーロ』の試みが根拠のないことを示した。

一九〇〇年二月、「労働解放」団は前出『ヴァデメクム』（注四一を参照）を出版したが、プレハーノフはこの『ヴァデメクム』に、アクセリロードの小冊子『ロシア社会民主主義者の今日の任務と戦術の問題によせて』にたいするエス・エヌ・プロコポーヴィチの

『回答』(手稿で流布していた)と、イェ・デ・クスコーヴァとグリーシン(テ・エム・コペリゾン)のいくつかの政治的内容の手紙を発表して、『ラボーチェエ・デーロ』編集局の主張を反駁し、「在外ロシア社会民主主義者同盟」と『ラボーチェエ・デーロ』を中心として集まっているロシア人亡命者のあいだでは、日和見主義分子と「経済主義」の思想が事実上支配していることを立証した。

一九〇〇年二―三月ペ・クリチェフスキーの書いた『ペ・アクセリロードの「手紙」とゲ・プレハーノフの「ヴァデメクム」にたいする「ラボーチェエ・デーロ」編集局の回答』は、ラボーチェエ・デーロ派の日和見主義をはっきり表面化していた。その後、『ラボーチェエ・デーロ』にたいする論争は、『イスクラ』と『ザリャー』の紙上に移された。四八

(七二)　レーニン『われわれの運動の緊要な諸任務』、全集、第四巻、四〇五ページを参照。五〇

(七三)　レーニン『なにから始めるべきか？』、全集、第五巻、六ページを参照。五〇

(七四)　レーニン『われわれの運動の緊要な諸任務』、全集、第四巻、四〇三ページを参照。五三

(七五)　ナルツィス・トゥポルィロフ流の英知――これは、『ザリャー』第一号(一九〇一年四月)に「ナルツィス・トゥポルィロフ」の筆名で発表されたユ・オ・マルトフの風刺詩『最近のロシア社会主義者の賛歌』のことで、この詩には、自然発生的運動に順応する「経済主義者」が嘲笑されていた。五四

(七六)　レーニン『なにから始めるべきか？』、全集、第五巻、五―六ページを参照。五五

(七七)　農村司政長(ゼムスキー・ナチャールニク)――一八八九年から一九一七年までロシアの農村における行政権力の代表者で、世襲貴族のうちから任命されていた。農村司政長は、村役所や郷役所の活動を監督し、公職者や郷判事の任命を承認するなど、農村の行政機関を支配する権力を一身に集中し、また司法面では、一九一二年まで(実質上はその後も)、以前に治安裁判所で扱われていたような裁判事務を管掌した。農村司政長の上級機関は、郡貴族団長を議長とする郡農村司政長会議であった。農村司政長制度の導入は、一八六一年の農奴制廃止以後において、農村における世襲貴族の権力の強化をめざしてツァーリ政府が実施した一連の反動的措置の頂点をなすものであった。六〇

(七八)　「在リトアニア・ポーランド・ロシア・ユダヤ人労働者総同盟」(ブンド)――一八九七年にヴィルナのユダヤ人社会民主主義者グループの創立大会で設立され、主としてロシア西部諸州のユダヤ人手工業者中の半プロレタリア分子を組織していた。一八九八年のロシア社会民主労働党第一回大会で、ブンドは「もっぱらユダヤ人プロレタリアートに関係のある諸問題でのみ自主的な自治的組織として」同党に加盟した。

一九〇一年四月、ブンド第四回大会は、ロシア社会民主労働党第一回大会で確立された組織関係を廃止することに賛成し、自治に代わって連合を採用するという決議を採択した。決議『政治闘争の手段について』のなかで、第四回大会は「広範な大衆を運動に引きいれる最良の手段は経済闘争である」と述べている。

ロシア社会民主労働党の第二回大会で、ブンド派は、ブンドをユダヤ人プロレタリアートの唯一の代表者と認めよ、と要求した。大会がブンド派の要求を拒否したので、ブンドは脱党した。一九〇六年、第四回「合同」大会の決定にもとづいて、ブンドはふたたびロ

シア社会民主労働党に加盟した。
ブンド派はロシア社会民主労働党の内部にあって、つねに党の日和見主義的翼（「経済主義者」、メンシェヴィキ、解党派）を支持し、ボリシェヴィキおよびボリシェヴィズムとたたかった。一九一七年には、ブンドは反革命の臨時政府を支持し、十月革命の敵に味方してたたかった。外国の武力干渉と内戦の時代には、ブンドの指導部は反革命軍と結んだ。それと同時に、ブンドの一般成員のあいだには、ソヴェト権力と協力する方向への転換が始まった。一九二一年三月、ブンドはみずから解散し、一部の成員は共通の原則にもとづいてロシア共産党（ボ）に加入した。六三

(七九)　これは、シドニーおよびビアトリス・ウェッブ夫妻共著『労働組合運動史』、一八九四年、をさしている。六四

(八〇)　これは、『イスクラ』所載のレーニンの論文『飢えた人々との闘争』と『懲役規則と懲役の判決』、および『ザリャー』所載のレーニンの論文『国内評論』、「一、飢饉」（全集、第五巻、二三六―二四三、二四八―二五四、および二五五―二七七ページ）をさしている。六八

(八一)　**人類と同じように、つねに自分で解決できる任務だけを自分に提起する**――レーニンは、マルクスの『経済学批判』の「序言」のなかの次の句を念頭においている。「人類はつねに自分が解決しうる任務だけを自分に提起する。」（全集、第一三巻、七ページ）六八

(八二)　**この春の諸事件**――一九〇一年の二月から三月にかけて、ペテルブルグ、モスクワ、キエフ、ハリコフ、カザン、トムスク、その他の諸都市でおこなわれた学生と労働者の大衆的な革命的行動――政治的デモンストレーション、集会、ストライキをさす。一九〇一年二―三月の諸事件は、ロシアに革命的高揚が始まったことを示した。政治的スローガンのもとにおこなわれた運動に労働者が参加したことは、大きな意義をもっていた。七四

(八三)　レーニン『一八三人の学生の兵籍編入』、全集、第四巻、四五三―四五九ページを参照。七四

(八四)　ベ――ヴェと署名したこの筆者は、のちのエス・エル指導者ベ・ヴェ・サーヴィンコフ（ロープシン）である。七六

(八五)　『スヴォボーダ』（『自由』）――革命的社会主義者団「スヴォボーダ」（イェ・オ・ゼレンスキー（ナデージヂン））が一九〇一年五月に創立した団体）がスイスで出していた雑誌。一九〇一年に第一号、一九〇二年に第二号と、二号出ただけであった。レーニンは同団を「しっかりした本格的な思想も、綱領も、戦術も、組織もなく、大衆のなかに根をおろしていない」「基盤をもたないグループ」の一つに数えていた。同団は雑誌『スヴォボーダ』のほかに、『革命の前夜。理論、実践問題の不定期評論』第一号（ジュネーヴ、一九〇一年）、綱領的小冊子『ロシアにおける革命主義の再生』（ジュネーヴ、一九〇一年）等を出版した。同団は一九〇三年に消滅した。
同団の特徴づけについては、『雑誌「スヴォボーダ」について』（全集、第五巻、三二三―三二四ページ）、『「スヴォボーダ」団について』（全集、第六巻、二八七―二八八ページ）を参照。七七

(八六)　マルクス＝エンゲルス『共産党宣言』、全集、第四巻、五〇七ページを参照。八四

(八七)　**ゼムストヴォ**――一八六四年に設けられたロシアの地方自治体。郡および県の二段階があった。ゼムストヴォの設置は、クリミア戦争敗北後の社会的憤激と革命的攻勢の圧力によってツァーリズムがよぎなくされたブルジョア的改革の一つであって、わずかな

譲歩によって穏健自由主義者を買収することを目的とするものであった。ゼムストヴォの権限は、経済、保健、教育、行刑、土木、消防などの純地方的な問題に限られ、国の政治を動かすうえではきわめて無力であった。ゼムストヴォ内では地主貴族が優勢であったが、一方、ゼムストヴォの諸施設は、ブルジョア的反政府派の運動の拠点ともなった。一八九〇年代以後には、ゼムストヴォに勤務するインテリゲンツィア分子が有力となり、これには自由主義者やナロードニキ、さらには社会民主主義者さえふくまれていた。(三)

(八八)　全集、第五巻、八―九ページを参照。(九)

(八九)　『イスクラ』第七号（一九〇一年八月）の「労働運動日誌と工場通信」欄にペテルブルグの一織物工の手紙が発表されたが、これは、レーニンの『イスクラ』が先進的労働者にあたえた巨大な影響を証言していた。

筆者はこう書いている。「私は『イスクラ』をたくさんの同志に見せたので、この号はすっかりぼろぼろになってしまった。それでも、これはたいせつなものである。……そこには金銭で評価できない、時間で測れない、われわれの問題、ロシア全体の問題が書いてある。それを読むと、なぜわれわれ労働者と、われわれをみちびいているインテリゲンツィアたちとを、憲兵や警察が恐ろしがっているのか、その理由がわかる。じっさい、われわれは、雇主のポケットにとってだけでなく、ツァーリにも、雇主にも、みなに恐ろしいのだ。……いまでは、働く人民はすぐ燃えつくばかりになっている。もう底のほうでは、みなくすぶっているのだ。ただ火花さえあれば、火事になるだろう。ああ、火花から炎が燃えあがるとは、じつに正しく言ったものだ！……まえには、どんなストライキでも一事件だった。だが、いまでは、ストライキだけではなんにもならないことを、だれでも知っている。いまでは、獲得しなければならないものは、自由である。いまでは、年よりも、若い者も、みな本を読みたがっている。けれども、残念なことに本がない。このまえの日曜日に私は一一人の人を集めて、『なにから始めるべきか？』を読んだ。こうしてわれわれは夜になるまで散会しなかった。なんと万事が正しく述べられていることだろう。なんと万事が考えぬかれていることだろう。……われわれは、この、あなたがたの『イスクラ』にじかに手紙を書いてお願いしたい。どのように始めるべきか、ということだけでなく、いかに生き、そして死ぬべきかを教えよ、と。」(三〇)

(九〇)　ペ・ベ・アクセリロードが一八九七年一一月に『ラボーチェエ・デーロ』第二号のために書いた手紙から。しかし、この手紙は同誌にはのらないで、もう一つの手紙と合わせて、一八九八年に ジュネーヴで刊行された彼の小冊子『ロシア社会民主主義者の今日の任務と戦術の問題によせて』におさめられた。(三三)

(九一)　論文『専制とゼムストヴォ』――一九〇一年の二月と五月付の『イスクラ』第二号および第四号に掲載されたペ・ベ・ストルーヴェの論文『専制とゼムストヴォ』をさす。ストルーヴェの論文を『イスクラ』にのせ、またエス・ユ・ヴィッテの秘密回想録『専制とゼムストヴォ』にストルーヴェの序文をつけて『ザリャー』から出版することは、『イスクラ』および『ザリャー』編集局と「民主的反政府派」（ストルーヴェに代表される）との一九〇一年一月の協定によるものであった。レーニンの意見に反して、プレハーノフの支持のもとにアクセリロードとザスーリチによって結ばれたこの協定は、長くつづかなかった。一九〇一年の春には、社会民主主義者がブルジョア民主主義者とそれ以上協力することは、まったく

不可能であることがわかった。そこで、ストルーヴェとのブロックは崩壊した。六三

(九二) レーニン『一八三人の学生の兵籍編入』、全集、第四巻、四五三—四五九ページを参照。六三

(九三) レーニン『労働者党と農民』、全集、第四巻、四六〇—四六九ページを参照。六四

(九四) レーニン『農奴主たちは仕事をしている』、全集、第五巻、八七—九二ページを参照。六四

(九五) レーニン『ゼムストヴォ大会』、全集、第五巻、九三—九五ページを参照。六四

(九六) これは、ヴェ・イ・ザスーリチの論文『現下の諸事件について』、および「わが国の社会生活から」欄の学生騒擾日誌(『イスクラ』、一九〇一年四月、第三号)をさしている。なおここで問題になっているのは、一九〇一年二月二三日から二五日にかけてモスクワで学生のデモンストレーションがおこなわれ、カザークや警官と衝突したさい、モスクワ学生執行委員会が、学内での「抵抗」をつづける勢力を保存するためにデモンストレーションに参加しないように、という檄を発した事件のことである。六四

(九七) 『ロシア』——一八九九年から一九〇二年までペテルブルグで発行されていた穏健自由主義派の日刊新聞。編集者はゲ・ペ・サゾーノフで、社会批評家のア・ヴェ・アムフィテアートロフとヴェ・エム・ドロシェーヴィチも参加していた。一九〇二年一月、アムフィテアートロフの随筆『オブマーノフ家の諸公たち』を掲載したかどで、政府から禁止された。六四

(九八) これは、ア・エヌ・ポトレソフの論文『ばかげた夢想について』、および記事『文筆界にたいする警察の襲撃』(『イスクラ』、一九〇一年六月、第五号)をさしている。前者で問題になっているのは、新文部大臣ヴァンノスキーの就任にあたって、新聞『ロシア』がおこなった、青年を「過激派と反徒」の有害な影響から引きはなすために、新大臣を支持せよ、という趣旨の呼びかけであり、後者で問題になっているのは、一九〇一年三月四日にペテルブルグでカザークと警官が男女学生の大群衆を襲撃したことに関連して、これに抗議した教授たちや、著作家その他の個人が逮捕され、流刑に処せられ、またロシア著作家相互扶助協会が解散させられた事件である。六五

(九九) レーニン『貴重な告白』、全集、第五巻、七三—八〇ページを参照。六五

(一〇〇) これは、一九〇一年八月および一〇月付の『イスクラ』第七号および第九号にのった無署名の記事『エカテリノスラフのゼムストヴォの出来事』と『ヴャトカのストライキ破り』をさしている。ここで問題になっているのは、エカテリノスラフのゼムストヴォに勤務する一統計家が免職されたことに関連して、他の統計家たちが総辞職した事件と、他の土地の統計家もこれに同調したなかに、ヴャトカの統計家たちがエカテリノスラフの統計家を支持することを拒否した事件である。六五

(一〇一) ブレンターノ式の階級闘争の理解(ブレンターノ主義)——「プロレタリアートの非革命的『階級』闘争を認める自由主義的ブルジョア学説」(全集、第二八巻、二四一ページ)で、工場立法と、労働者を労働組合に組織することとによって、資本主義の枠内でも労働問題を解決することができると説くもの。ブルジョア経済学中の講壇社会主義学派の主要な代表者のひとりルーヨ・ブレンターノの名にちなんで、こうよばれている。六六

(一〇二)『サンクト・ペテルブルグスキエ・ヴェードモスチ』(『サンクト-ペテルブルグ報知』)――一七〇三年に創刊されたロシア最初の新聞『ヴェードモスチ』(『報知』)の後身として、一七二八年以後ペテルブルグで出ていた新聞。一七二八年から一八七四年までは科学アカデミーから、一八七五年以降は文部省から発行されていた。一九一七年末に廃刊。九六

(一〇三)『ルースキエ・ヴェードモスチ』(『ロシア報知』)――一八六三年以来モスクワで発行されていた新聞。穏健自由主義的インテリゲンツィアの見解を代表していた。八〇―九〇年代には、民主主義陣営の作家たち(エム・イエ・サルトィコーフ-シチェドリーン、ゲ・イ・ウスペンスキー、ヴェ・ゲ・コロレンコ、その他)が参加し、自由主義的ナロードニキの作品が掲載された。一九〇五年からは、カデット党右派の機関紙となった。レーニンが指摘したように、『ルースキエ・ヴェードモスチ』は独特な仕方で「右翼のカデット主義をナロードニキ主義と」結びつけた(全集、第一九巻、一二九ページ)。一九一八年に、『ルースキエ・ヴェードモスチ』は他の反革命的諸新聞とともに禁止された。九六

(一〇四)「労資闘争」団――一八九九年春にヴェ・ア・グトフスキー(のちの有名なメンシェヴィキのイエ・マエフスキー)がペテルブルグで組織したもの。同団は若干の労働者やインテリゲンツィアからなり、ペテルブルグの労働運動と固い結びつきをもたず、まもなく一八九九年夏にほとんど全員が検挙されたのちに消滅した。その見解は「経済主義」に近かった。同団は『われわれの綱領』というリーフレットを印刷したが、これは配布されなかった。一〇三

(一〇五)論集『プロレタリア闘争』――ウラル地方の社会民主主義者の一グループが一八九九年に刊行した論集。同書の提起した命題は次のようなものであった。――政治革命は当面の問題であるが、「革命をおこなう」のに厳格な組織は必要でない、ゼネラル・ストライキを宣言すれば十分である、と。一〇四

(一〇六)全集、第五巻、四ページを参照。一〇六

(一〇七)これは、一九〇一年にレーニンがア・エス・マルトィノフとはじめて会ったときのことをさすらしい。一一〇

(一〇八)アファナーシー・イヴァーヌィチとプリヘーリヤ・イヴァーノヴナ――ゴーゴリの小説『昔かたぎの地主たち』のなかに描かれた旧式な小田舎地主。一一四

(一〇九)一アルシン＝〇・七一一メートル。一ヴェルショーク＝一六分の一アルシン。一一四

(一一〇)イヴァノヴォ-ヴォズネセンスクの「経済主義的な」労働者たち――一九〇〇年二月にイヴァノヴォ-ヴォズネセンスクの「社会民主主義労働同盟」が、「ロシアの全労働者団体へ」の宣言を発表して、全ロシア労働者大会の開催を提唱した。その宣言の一節に、「代議員はインテリでなしに、もっぱら労働者だけから構成されることが望ましい」と書かれていた。一一八

(一一一)大衆の「たくましい鉄拳」――ドイツに社会主義者取締法がしかれていた当時に、ドイツ社会民主党の前国会議員で半無政府主義者ハッセルマンが直接の革命的行動を扇動するのにつかったことば。一二〇

(一一二)あるサークル――レーニンの指導していたペテルブルグの社会民主主義者(「老人組」)のサークルをさす。このサークルを基礎にして、一八九五年に「労働者階級解放闘争同盟」(注五六を参照)がつくられた。一二五

(一一三)「耳は額よりうえへは伸びない!」――ロシアの風刺作家

サルトィコーフ－シチェドリーンの小説『外国で』のなかのことば。　一三九

（一二四）「土地と自由」派――一八七六年の秋、ペテルブルグで結成された革命的ナロードニキの組織。はじめは「北方革命的ナロードニキ・グループ」とよばれたが、一八七八年以後「土地と自由」団として知られている。そのメンバーは、マルクおよびオリガ・ナタンソーン、プレハーノフ、オ・ヴェ・アプテクマーン、ア・デおよびア・エフ・ミハイロフ、ア・ア・クヴャトコフスキー、エム・エル・ポポーフ、エス・エム・クラフチンスキー、デ・ア・クレーメンツ、ア・デ・オボレーシェフ、エス・エリ・ペローフスカヤその他の七〇年代のすぐれた革命家であった。最終目標として社会主義を考えていたが、当面の目標は、「いま現にある人民の要求と希望」、つまり「土地と自由」の要求を実現することにおいていた。

七〇年代前半のナロードニキ・グループとは違って、「土地と自由」派は整然とした組織をつくり、その基礎に厳重な中央集権制と規律の原則をおいていた。

一八七九年ごろ、農民のあいだでの社会主義の宣伝が不成功に終わったこと、政府の弾圧が強まったことに影響されて、同派の大多数は、自分の綱領を実現する闘争の主要手段として政治的テロルに傾きはじめた。従来の戦術の支持者（プレハーノフをはじめとする）とテロル論者（ア・イ・ジェリャーボフその他）との意見の相違の結果、ヴォローネジ大会（一八七九年六月）で同派は分裂した。前者は「黒い割替」派を組織し、後者は「人民の意志」派（注一一二）を組織した。

黒い割替派（プレハーノフ、エム・エル・ポポーフ、ペ・ペ・アクセリロード、デイチ、ヤ・ヴェ・ステファノーヴィチ、ザスーリチ、オ・ヴェ・アプテクマーン、ヴェ・エヌ・イグナートフ、のちにア・ペ・ブラーノフその他）は、その綱領上の要求のなかで、大体において「土地と自由」の政綱を擁護した。ロシア国内と国外（一八八〇年にプレハーノフ、デイチ、ザスーリチ、ステファノーヴィチその他が国外に亡命した）で、雑誌『黒い割替』と新聞『ゼルノ』（『穀粒』）が発行された。その後、黒い割替派の一部はマルクス主義に進化した（プレハーノフ、アクセリロード、ザスーリチ、デイチ、イグナートフは、一八八三年にロシア最初のマルクス主義団体「労働解放」団（注四八を参照）を結成した）が、他の人たちは一八八一年三月一日に「人民の意志」派と合同した。なお「黒い割替」とは、すべての土地の民主主義的割替を要求する当時の農民のスローガンであった。　一三三

（一二五）　全集、第二巻、三三五―三三六ページを参照。　一三三

（一二六）　前掲書、三三七ページを参照。　一三三

（一二七）　これは、イェ・ラーザレフの論文『ロシア社会民主党内の分裂』（『ナカヌーネ』、第一五、一六号、一九〇〇年四―五月）と『ある分裂について』（同、第一七―一八合併号、一九〇〇年六月）をさしている。　一三七

（一二八）　アレイオパゴス――アテナイの小丘の名。古代には、ここで旧アルコン〔執政官〕たちからなる貴族会議がひらかれたので、転じてこの会議の呼称となった。アレイオパゴスはすべての国務をつかさどり、また国事犯裁判所でもあった。　一三七

（一二九）　これは、カール・カウツキーの著書『議会制度、人民立法および社会民主党』、シュトウットガルト、一八九三年、をさしている。　一三九

（一三〇）　これは、小冊子『一九〇〇年のパリ国際社会主義者大会

にたいするロシア社会民主主義運動についての報告』、ジュネーヴ「ロシア社会民主主義者同盟」発行（一九〇一年）をさしている。この報告は、「同盟」の委任をうけて『ラボーチェエ・デーロ』編集局が執筆したもの。一四三

（一三一）　これは、『「ラボーチャヤ・ムィスリ」別冊付録』に発表されたエル・エムの論文『わが国の現実』の思想をさしている。本書七〇―七一ページを参照。一四五

（一三二）『ユージヌイ・ラボーチー』（南部労働者』）――同名のグループによって一九〇〇年一月から一九〇三年四月まで非合法に発行されていた社会民主主義新聞、一二号出た。編集者と寄稿家には、イ・ハ・ララヤンツ、ア・ヴィレンスキー（「イリヤ」）、オ・ア・コーガン（エルマンスキー）、ベ・エス・ツェイトリン（バトゥルスキー）、イェ・ヤおよびイェ・エス・レーヴィン、ヴェ・エヌ・ロザノフその他がいた。

『ユージヌイ・ラボーチー』は「経済主義」とテロリズムに反対し、大衆的革命運動を繰りひろげる必要を主張した。しかし、同派は、全国的政治新聞を中心として中央集権的なマルクス主義党をロシアに創設するという『イスクラ』の計画に対抗して、地方の社会民主主義者の連合体を創設するという手段でロシア社会民主労働党を再建する計画をもちだした。

同派はロシアで大きな革命的活動をおこなったが、同時に、自由主義的ブルジョアジーや農民運動にたいする態度の問題を解決するさいに日和見主義的傾向をあらわし、また『イスクラ』と平行して全国的新聞を創刊するという分離主義的な計画をもっていた。

ロシア社会民主労働党第二回大会では、「ユージヌイ・ラボーチー」派は「中央派」の立場をとった（レーニンはこれを「中日和見主義者」とよんだ）。第二回大会は、その他の社会民主主義者グループや組織と同様に、同派を解散することを決定した。一四六

（一三三）　一八八五年のモスクワ地区の織物工の闘争――一八八五年のストライキ運動は、ヴラヂーミル、モスクワ、トヴェリ、その他の工業的中部諸県の多数の企業をまきこんだ。最も有名なものは、一八八五年一月にサッヴァ・モローゾフのニコリスク織物工場の労働者がおこしたストライキであった（モローゾフのストライキ）。労働者の要求のうちおもなものは、罰金の引下げ、雇用条件の改善などであった。ストライキを指導したのは、先進的労働者のペ・ア・モイセエンコ、エリ・イヴァノフ、ヴェ・エス・ヴォルコフであった。約八〇〇〇人の労働者が参加したモローゾフのストライキは、軍隊の応援を得て弾圧された。三三人のストライキ労働者が裁判にかけられ、六〇〇人をこえる労働者が追放された。一八八五―一八八六年のストライキ運動に押されて、ツァーリ政府も一八八六年六月三（一五）日の法律（いわゆる「罰金法」）を公布せざるをえなかった。一四八

（一三四）　これは、新聞『ラボーチャヤ・ムィスリ』編集局の出したリーフレット『ロシアにおける労働者階級の状態についての質問』（一八九八年）および小冊子『ロシアにおける労働者階級の状態についての情報収集のための質問』（一八九九年）をさしている。リーフレットには、労働者の労働条件や生活条件にかんする一七の質問が、小冊子には一五八の質問がのっていた。一四九

（一三五）　アウギアスの厩――ギリシア神話のうちの物語で、エリスの国王アウギアスの厩には三〇〇〇頭の牛がおり、三〇年間掃除されずに放置されていた。英雄ヘラクレスが二つの河の河水をそそぎこんで、一日でこの牛舎を掃除した。「アウギアスの厩」とは非

常な汚穢の代名詞である。一五〇

(二六) この節は、論集『一二年間』に『なにをなすべきか』が再録されたさいには著者の手ではぶかれ、脚注にその理由が次のように述べられた。「『(a) だれが論文「なにから始めるべきか?」』という節は、今回の版でははぶくことにする。というのは、この節は、『イスクラ』が『号令しよう』と企てたうんぬんの問題について『ラボーチェエ・デーロ』とブンド相手におこなった論戦をふくんでいるだけだからである。とくにこの節には、ブンド自身が(一八九八年と一八九九年とに)『イスクラ』の成員たちにたいして、中央機関紙を復刊し、『文書実験所』を組織するように要請したことが、述べられていた。」一五〇

(二七) 全集、第五巻、七ページを参照。一五三

(二八) 四つの事実——党史上の次のような事実をさす。

第一の事実。一八九七年の夏、ペテルブルグ「労働者階級解放闘争同盟」は、シベリアの流刑地(シュシェンスコエ村)にいたレーニンに、特別な労働者文庫を出版するのに参加してくれるように提案した。この文庫のためにレーニンは、本文に述べてある二つの小冊子を書いた(両方ともジュネーヴで出版された。前者は一八九八年、後者は一八九九年に出版)。全集、第二巻、三二二—三四五、二六五—三一三ページを参照。

第二の事実。一八九八年、トゥルハンスクの流刑地にいたエリ・マルトフ(ユ・オ・ツェデルバウム)は、ブンド中央委員会の提案によって小冊子『ロシアにおける労働者の事業』(一八九九年にジュネーヴで出版)を書いた。

第三の事実。一八九九年、ブンド中央委員会の提唱で、『ラボーチャヤ・ガゼータ』を復刊することが企てられた。ここにあげてある論文は、『ラボーチャヤ・ガゼータ』第三号のためにレーニンが書いたもの。全集、第四巻、二二四—二二九、二三〇—二三五、二三六—二四二ページを参照。

第四の事実。一九〇〇年のはじめ、ブンドと「在外ロシア社会民主労働党エカテリノスラフ委員会の提唱で、ブンドと「在外ロシア社会民主主義者同盟」の支持をうけて、第二回党大会を招集し、党中央委員会を再建し、中央機関紙『ラボーチャヤ・ガゼータ』を復刊することが企てられた。一九〇〇年二月、レーニンと交渉するためにエカテリノスラフ委員会の一員イ・ハ・ラヤンツがモスクワにやってきた。彼は、一八九三年に、レーニンの指導したサマラのマルクス主義者グループにくわわっていた。ラヤンツは『イスクラ』グループ——レーニン、マルトフ、ポトレソフ——に大会に参加し、『ラボーチャヤ・ガゼータ』の編集を引きうけてくれるように提案した。レーニンと「労働解放」団員は、大会の招集を時機尚早と考えた(全集、第四巻、三五〇ページ)が、「労働解放」団は大会参加をことわりきれず、レーニンに国外から委任状を送って、大会でレーニンに同団を代表してもらうことにした。一九〇〇年四—五月の一斉検挙のため、大会はひらかれなかった。一九〇〇年の春、大会がひらかれるはずだったスモレンスクには、ブンド、『ユージヌイ・ラボーチー』、在外「ロシア社会民主主義者同盟」の各代表が集まっただけであった。以上のように、レーニンのあげている事実は、実際に起こった順序になっている。一五三

(二九) 『イスクラ』が「詐称者」だというブンドのほのめかし——ブンドは、ロシア社会民主労働党の第一回大会(一八九八年)で、「もっぱらユダヤ人プロレタリアートに関係のある諸問題でのみ自主的な自治的組織として、党に加入」したが、その後ブンドの

内部に分離主義的傾向が強くなり、一九〇一年四月のブンド第四回大会は、「ロシア社会民主労働党をロシア国家内に居住するすべての民族の社会民主主義諸党の連合体と見なし、『ブンド』はユダヤ人プロレタリアートの代表者として、連合体の一構成部分としてこの党に加入する」という決議を採用した。『イスクラ』は、その第七号（八月）でこの大会決議を批判し、党内における「ブンド」の地位の変更についての決定は無効であると強調した。ブンド中央委員会は、八月二九日（九月一一日）付の手紙でこれに答え、ブンドの行動の有効性の問題については、ブンドは、「［ロシア社会民主労働］党中央委員会または党大会にたいしてのみ弁明する義務があり、党に所属する個々の組織や、いわんやその出版物の表題を除いてはさしあたって党に所属しているというなんらの証明もないいグループごときに弁明する義務はない」と声明した。この最後の文句に、レーニンの言う、『イスクラ』が「詐称者」だというあてこすりがふくまれている。一三三

（一三〇）「連盟」——一九〇一年一〇月にレーニンの提唱によって創設された「ロシア革命的社会民主主義在外連盟」のこと。「連盟」には、「イスクラ」の在外組織と革命的組織「社会民主主義者」団（「労働解放」団をふくむ）とがくわわった。「連盟」の任務は、革命的社会民主主義の思想をひろめ、戦闘的な社会民主主義組織の創設を助けることであった。「連盟」は、規約上は「イスクラ」組織の在外代表であった。

ロシア社会民主労働党第二回大会以後は、メンシェヴィキが「在外連盟」のなかで地歩を固め、そこからレーニンとボリシェヴィキにたいする闘争をおこなった。一九〇三年一〇月にひらかれた「連盟」の第二回大会で、メンシェヴィキはロシア社会民主労働党第二回大会で採択された党規約に反する新しい「連盟」規約を可決した。それ以来、「連盟」はメンシェヴィキの拠点となり、一九〇五年まで存続した。一五四

（一三一）「みずからは燃え、たえることなく燃えるが、なんぴとをも燃えたたせない、燃えつきることのないくさむら」——旧約聖書、出埃及記、第三章第二節および第三節から。一五六

（一三二）バシバズーク——元来はトルコ軍の不正規兵をさす。略奪と残忍で有名であった。そこから暴兵の意味につかわれる。一五八

（一三三）デ・イ・ピーサレフ『未熟な考えからきた失敗』からの引用。一六〇

（一三四）『小型版「ラボーチエエ・デーロ」』——雑誌『ラボーチエ・デーロ』の不定期の付録で、一九〇〇年六月から一九〇一年七月までジュネーヴで刊行され、全部で七号出た。同誌第六号（一九〇一年四月）の論文『歴史的転換』のなかで、同誌編集局は、一九〇一年二—三月にロシアの多くの都市に起こった労働者と学生の政治的デモンストレーションに関連して、社会民主党の戦術を「根本的に変更する」よう、そして専制にたいする強襲の始まりと称するものに参加するように呼びかけたが、レーニンは論文『なにから始めるべきか？』のなかで、これを無原則的な折衷主義とよんでいる（全集、第五巻、三—四ページ）。同誌編集局は、レーニンの批判に答えて、ベ・クリチェフスキーの論文『原則、戦術および闘争』を掲載した（『ラボーチエエ・デーロ』第一〇号、一九〇一年九月）。一六〇

（一三五）ヴェーチェ——古代ルーシの町人会議で、国事や公事を審議するためにひらかれたもの。一六八

（一三六）歴史的事件の原本は悲劇であっても、その模倣は茶番で

しかない、という格言――マルクスの著作『ルイ・ボナパルトのブリュメール一八日』のなかの次の句をさす。「ヘーゲルはどこかで、すべて世界史的な大事件や大人物はいわば二度現われる、と述べている。ただ彼は、一度は悲劇として、二度目は茶番として、とつけくわえるのを忘れた。」（全集、第八巻、一〇七ページ）一六八

（一三七）『イスクラ』第一三号と第一四号とに記述されているデモンストレーション――一九〇一年一一月から一二月にかけて、労働者に支持される学生デモンストレーションの波がロシア全土にひろがった。ニジニ－ノヴゴロドの（ゴーリキー追放をきっかけとする）デモンストレーション、モスクワの（エヌ・ア・ドブロリューボフ記念の夕べ禁止に抗議する）デモンストレーション、エカテリノスラフのデモンストレーション、キエフ、ハリコフ、モスクワ、ペテルブルグにおける学生の集会と騒擾。これらについての通信は、『イスクラ』第一三号（一九〇一年一二月二〇日付）と第一四号（一九〇二年一月一日付）の「わが国の社会生活」欄に掲載された。レーニンの論文『デモンストレーションの始まり』（『イスクラ』第一三号。全集、第五巻、三三六―三三九ページ）と、プレハーノフの論文『デモンストレーションについて』（『イスクラ』第一四号）も、これらのデモンストレーションにあてられていた。一七〇

（一三八）イェニチェリ――一四世紀に設けられたスルタン時代のトルコの正規兵。スルタン政府の重要な警察力で、異常な残虐さを特徴としていた。ここではツァーリの警察をさす。一七一

（一三九）この付録は、『なにをなすべきか？』が論集『一二年間』に収録されたときには省略された。一七七

（一四〇）全集、第四巻、四一四―四一五ページを参照。一七七

（一四一）国際社会主義ビューロー――第二インタナショナルの常設執行＝情報機関で、第二インタナショナルのパリ大会（一九〇〇年九月）の決定で設立され、インタナショナル加盟のすべての社会主義政党が代表を出していた。ロシア社会民主主義者の代表には、プレハーノフとベ・エヌ・クリチェフスキーが選ばれていた。一九〇五年からは、レーニンがロシア社会民主労働党の代表としてはいった。国際社会主義ビューローは一九一四年に活動を停止した。一七七

（一四二）革命的組織「社会民主主義者」団――「在外ロシア社会民主主義者同盟」がその第二回大会で分裂したあとで（注一八を参照）、一九〇〇年五月に「労働解放」団員とその同志たちによって創設された。一九〇一年一〇月、同団は、レーニンの提唱で、「イスクラ」組織の在外部と合同して、「ロシア革命的社会民主主義在外連盟」をつくった。一七八

（一四三）レーニン『なにから始めるべきか？』、全集、第五巻、三―一一ページを参照。一七八

（一四四）新しい「調停者」グループ――在外社会民主主義者のグループ「ボリバ」団をさす。これには、デ・ベ・リャザーノフ、ユ・エム・ステクローフ（ネヴゾーロフ）、エ・エリ・グレーヴィチ（ヴェ・ダーネヴィチ、イエ・スミルノーフ）がはいっており、一九〇〇年夏にパリで成立し、一九〇一年五月以後「ボリバ」団と称した。「ボリバ」団は、ロシア社会民主党内の革命的潮流と日和見主義的潮流との調停をくわだて、『イスクラ』および『ザリャー』編集局、「社会民主主義者」団、「ロシア社会民主主義者同盟」の在外社会民主主義諸組織の代表者のジュネーヴ会議の招集を提唱し、一九〇一年一〇月の「合同」大会に参加した。同団は、社会民主主義の見解と戦術から後退し、組織攪乱活動をおこない、ロシア国内の社会民主主義諸組織と結びついていなかったので、ロシア社会民

主労働党第二回大会への参加を許されなかった。第二回大会の決定により、同団は解散された。一六八

（一四五）『フォールヴェルツ』編集局とカウツキーと『ザリャー』のあいだの論戦——この論戦は、マルトフの論文『ドイツ社会民主党のリューベック大会』（『ザリャー』第二—三号、一九〇一年一二月）がきっかけとなって起こった。マルトフは、ドイツ社会民主党中央機関紙『フォールヴェルツ』にのったベ・エヌ・クリチェフスキーのパリ通信の一方的なことを指摘したのである。クリチェフスキーは、この通信のなかで、フランス社会主義運動内の状態について誤まった情報を伝え、ゲード派を攻撃し、ミルランと、ミルラン支持のジョレス派とに有利な宣伝をたえずおこなっていた。『フォールヴェルツ』編集局は、クリチェフスキーを弁護して、マルトフを不誠実だと言って非難した。これをきっかけとして、『フォールヴェルツ』紙上に論争が起こり、カウツキーもこれにくわわって、編集局はマルトフの論文の主旨をゆがめていると指摘した。マルトフとクリチェフスキーも発言した（『フォールヴェルツ』編集局は後者に結語を述べさせた）。しかし、論争は『フォールヴェルツ』の枠をはみだし、クラーラ・ツェトキーン（ベルリンの労働者集会で報告をおこなった）や、フランス労働党機関紙『ル・ソシアリスト』が『ザリャー』を弁護して発言し、またパルヴスも、論文『ミルランと「フォールヴェルツ」』（『ザリャー』第四号、一九〇二年八月）によせて』（『ザリャー』第四号、一九〇二年八月）を発表した。

『イスクラ』第一八号（一九〇二年三月一〇日付）の「党から」欄には、『「ザリャー」と「フォールヴェルツ」編集局』という記事が掲載され、このなかで論争にたいする『イスクラ』および『ザリャー』編集局の見解が述べられた。一八三

（一四六）　レーニンは、著書『一歩前進、二歩後退』のために、一九〇四年一月に出版された大会会議の議事録、大会決議、各代議員の発言、大会で生まれた政治的グループ分け、党中央委員会と評議会の文書を綿密に研究しながら、数ヵ月にわたって準備をした。本書は一九〇四年五月に出版された。

この著作のなかでレーニンは、組織問題におけるメンシェヴィキの日和見主義に決定的な打撃をあたえた。この著書の大きな歴史的意義は、なによりも、マルクス主義の党学説をいっそう発展させながら、プロレタリア革命党の組織原則をつくりあげ、マルクス主義の歴史上はじめて組織上の日和見主義にあますところのない批判をくわえ、組織の意義を低めることが労働運動にとってとくに危険なことを示した点にある。

本書は、メンシェヴィキの怒りにみちた攻撃をまねいた。プレハーノフは、レーニンのこの著書と一線を画するよう、中央委員会に要求したし、中央委員会内の調停派は本書の出版と普及をおさえようとした。

日和見主義者のあらゆる努力にもかかわらず、本書はロシアの先進的労働者のあいだに広く普及した。警保局の資料によれば、モスクワ、ペテルブルグ、キエフ、リガ、サラトフ、トゥーラ、オリョール、ウファ、ペルム、コストロマ、シチグルィ、シャヴリ（コヴノ県）その他で、逮捕や家宅捜索のさいに本書が発見された。

本書は、一九〇七年に論集『一二年間』に再録されたが、その序文でレーニンは次のように書いている。

「小冊子『一歩前進、二歩後退』は、一九〇四年の夏にジュネーヴで出版された。それは、第二回大会で始まったメンシェヴィキとボリシェヴィキとの分裂の第一段階を述べている。……。ここでは、

第二回大会における戦術上その他のいろいろな見解の闘争の分析とメンシェヴィキの組織上の見解にたいする論戦とが重要だと、私は思う。わが革命における労働者党の全活動にその刻印を押した潮流としてのメンシェヴィズムとボリシェヴィズムを理解するには、この両者ともに必要である。」（全集、第一三巻、九八ページ）一〇七

（四七）　**ロシア社会民主労働党第二回大会**――一九〇三年七月一七日（三〇）日―八月一〇（二三）日にひらかれた。はじめの一三回の会議はブリュッセルでおこなわれたが、ついで警察の追及のために会議はロンドンに移された。

大会の重要問題は、党の綱領と規約を承認し、中央指導機関を選出することであった。レーニンとその同志は、大会で日和見主義者にたいして断固たるたたかいを繰りひろげた。

大会は、全員一致で（一名棄権）、党綱領を承認した。綱領には、きたるべきブルジョア民主主義革命における党の当面の任務（最小限綱領）と、社会主義革命の勝利とプロレタリアートの執権（ディクタトゥーラ）の樹立を予定した任務（最大限綱領）とが定式化されていた。

党規約を討議するさい、党建設の組織原則の問題について鋭い闘争が繰りひろげられた。

レーニンとその同志は、労働者階級の戦闘的な革命党の創設のためにたたかい、ぐらついた動揺分子が党内にはいるのをいっさい困難にするような規約を採択することが必要だと考えていた。ぐらつき分子が党にはいるのを容易にしていたマルトフの定式は、大会の席上、反イスクラ派や「沼地派」（「中間派」）から支持されたばかりでなく、「軟弱な」（ぐらついた）イスクラ派からも支持され、小差の多数票で採択された。しかし大会は、基本的にはレーニンの作成した規約を承認した。大会は、戦術問題についての一連の決議をも採択した。

大会では、イスクラの方針の一貫した支持者――レーニン派――と、「軟弱な」イスクラ派――マルトフ支持者――との分裂が生じた。レーニン派は党の中央機関の選出のさいに多数票を得たので、多数派（ボリシェヴィキ）とよばれるようになり、少数票を得た者は、少数派（メンシェヴィキ）とよばれるようになった。

大会は、ロシアの労働運動の発展上で大きな意義をもっていた。大会は、社会民主主義運動内の手工業主義とサークル主義を終わらせ、ロシアにおける革命的マルクス主義党（ボリシェヴィキ党）の端緒をひらいた。レーニンはこう書いている。「ボリシェヴィズムは、政治思想の潮流として、また政党として、一九〇三年以来存在している。」（全集、第三一巻、九ページ）

第二回大会は、すべての国の革命的マルクス主義者の模範となった新しい型のプロレタリア党をつくりだし、国際労働運動の転換点になった。一〇七

（四八）　**新『イスクラ』**――メンシェヴィキの手におちたのちの『イスクラ』をさす。なお注三を参照。一〇七

（四九）　これは、「一実践家」という署名で、『イスクラ』第五七号（一九〇四年一月一五日）にのったエム・エス・マカジューブ（パーニン）の論文『われわれの党的諸任務の問題によせて。組織について』をさしている。一一〇

（五〇）　レーニン『「イスクラ」編集局の声明』、全集、第四巻、三八八ページを参照。一一〇

（五一）　**一九〇二年の会議**――一九〇二年三月二三―二八日（四月五―一〇日）にベロストックでひらかれたロシア社会民主労働党の委員会や組織の代表者会議のこと。会議に代表を送ったのは、ベ

テルブルグとエカテリノスラフの各党委員会、「南部委員会組織連盟」、ブンド中央委員会とその在外委員会、「在外ロシア社会民主主義者同盟」、『イスクラ』編集局（代表エフ・イ・ダンは「ロシア革命的社会民主主義在外連盟」の委任状をもっていた）であった。「経済主義者」と彼らを支持したブンド派は、この会議を第二回党大会にして、ロシア社会民主党内での地歩を固め、『イスクラ』の影響力の増大を麻痺させるつもりだったが、成功しなかった。

ベロストック会議では、会議成立についての決議と、ブンド中央委員会が提出した原則的決議が、「南部委員会組織連盟」の代表の修正つきで採択された（独自の原則的決議の草案を提出した『イスクラ』代表は、ブンドの草案に反対投票した）。メーデーのリーフレットの文案も承認された。このリーフレットの基礎には『イスクラ』編集局のつくった草案がおかれていた。会議は、『イスクラ』（ダン）、「南部委員会組織連盟」（オ・ア・エルマンスキー）、ブンド中央委員会（カ・ポルトノイ）の各代表からなる、第二回大会準備のための組織委員会を選出した。会議ののち、代表の大多数（組織委員会の二名もふくめて）は逮捕された。新しい組織委員会は、一九〇二年一一月にペテルブルグ党委員会、「イスクラ」国内組織、「ユージヌィ・ラボーチー」の各代表のプスコフ相談会で結成された。新しい組織委員会には、「イスクラ」組織からクルジジャノフスキー、レングニク、クラーシコフ、アレクサンドロヴァ、ストパーニ、ガリペルシュタット、「ユージヌィ・ラボーチー」からレービンとロザノフ、ブンドからポルトノイの計九人がはいった。一九〇

（一五二）　レーニン『組織委員会の結成についての通知』、全集、第六巻、三一五―三一七ページを参照。一九〇

（一五三）　全集、第七巻、六二―七三ページを参照。一九二

（一五四）　前掲書、二二―二九ページを参照。一九二

（一五五）　ブンドの規約第二条――一九〇三年六月のブンド第五回大会で採択された改正規約の第二条は、次のようになっていた。「ブンドは、その行動においていかなる地方的枠によっても制限されないユダヤ人プロレタリアートの社会民主主義的組織であって、ユダヤ人プロレタリアートの唯一の代表者としてロシア社会民主労働党に所属する。そのさい、特定の地域に、党に所属する他の諸組織とならんでブンドが活動している場合には、その地域のプロレタリアート全体の名における行動は、ブンドの参加があってはじめて許される。」一九六

（一五六）　これは、パヴローヴィチ（ペ・ア・クラーシコフ）『ロシア社会民主労働党第二回大会について同志たちにあたえる手紙』、ジュネーヴ、一九〇四年、をさしている。一九八

（一五七）　コリツォーフの決議案――イスクラ派のコリツォーフが提出したもので、資格審査委員会が選出された時点から、組織委員会は合議体として大会の構成に関与する権限を失う、というもの。

ユージンの決議案――ブンド派のユージンが提出したもので、組織委員会が大会の構成にかんする活動報告を大会におこなった時点から、合議体としての同委員会の活動は終了したものと見なされる、というもの。なお、この数行前にあるリャザーノフ招請にかんするユージンの決議案と混同してはならない。二〇三

（一五八）　新『イスクラ』編集局とマルトィノフとの意見の一致――メンシェヴィキの『イスクラ』編集局は、かつての「経済主義者」ア・マルトィノフの論文『人民のなかからの一つの声』を、一九〇四年一月一五日付の『イスクラ』第五七号の付録にのせた。この論文でマルトィノフは、ボリシェヴィズムの組織原則を攻撃し、レー

ニンにくってかかった。『イスクラ』編集局は、マルトィノフの論文につけた注のなかで、筆者の若干の意見には同意しがたいとの形式的な留保をつけながらも、全体としてはこの論文を支持し、その基本的諸命題に同意した。二〇七

（一五九）　決疑論――道徳法を外的、律法的に規定し、多くの義務のあいだに衝突が起こる一々の場合について、その律法に照らして価値判定をする方法。中世のスコラ学派や、とくに近世のイエズス会がこのんで用いた方法。二二三

（一六〇）　この歴史的不正――切取地をさす。マルトィノフは、農業綱領草案中の「切取地の返還」の要求に反対して、これは農民改革のさいにおかされた「歴史的不正の是正」をめざすものにすぎず、無益にも四〇年の昔に立ちもどろうとするものだ、と主張した。

切取地――一八六一年の農民改革のさい、法定の分与地面積をこえる土地は農民から取りあげられて、地主にあたえられた。これらの土地の大部分は、従来農民が用益していたものなので、農民はそれを「切り取られた土地」あるいは「切取地」とよんだ。二二三

（一六一）　最初の農民蜂起――一九〇二年にポルタヴァ、ハリコフ、ヴォローネジその他の諸県に起こった農民蜂起をさす。この蜂起は、従来の農民一揆とは異なって、革命的労働運動に影響された最初の革命的な農民蜂起であった。二二四

（一六二）　レーニン『労働者党と農民』、全集、第四巻、四六〇―四六九ページを参照。二二四

（一六三）　ランゲの提案――ランゲ（ア・エム・ストパーニ）は、農業綱領の第四項に規定された農民委員会の目的に、切取地以外に、農民の隷属化に役だっているすべての土地（水利、農道等）の収奪をつけくわえるよう、提案したのである。ランゲの提案は大会によって否決された。二二八

（一六四）　社会革命党（略称エス・エル）――ロシアの小ブルジョア政党。一九〇一年末から一九〇二年はじめにかけて、さまざまなナロードニキ的グループおよびサークル（「社会革命同盟」、「社会革命党」など）の合同によって成立した。同党の公式機関紙誌は『レヴォリュツィオンナヤ・ロシア』（『革命ロシア』）（一九〇〇―一九〇五年）と『ヴェーストニク・ルスコイ・レヴォリューツィイ』（『ロシア革命通報』）（一九〇一―一九〇五年）であった。エス・エルの理論的見解は、ナロードニキ主義の思想と修正主義の思想との折衷的混合物であった。レーニンの表現によれば、エス・エルは、「ナロードニキ主義の欠陥」を「当今はやりの日和見主義的なマルクス主義『批判』というつぎきれで」つくろおうとつとめた（全集、第九巻、三二五ページ）。

ボリシェヴィキ党は、社会主義者の仮面をかぶろうとするエス・エルのたくらみを暴露し、農民にたいする影響力をめぐってエス・エルとねばりづよくたたかい、個人的テロルという彼らの戦術が労働運動に有害なことを明らかにした。それと同時に、ボリシェヴィキは、一定の条件のもとで、ツァーリズムにたいする闘争でエス・エルと一時的な協定を結んだ。第一次ロシア革命の時代に、エス・エル党から脱党した右翼は、カデットに近い見解をもつ合法政党「勤労人民社会党」（エヌ・エス）を創立し、またその左翼は半無政府主義的な「マクシマリスト」同盟を結成した。ストルィピン反動期には、エス・エルは思想的および組織的に完全に崩壊した。第一次世界大戦中、エス・エルの大多数は社会排外主義の立場をとった。

一九一七年二月のブルジョア民主主義革命が勝利したのち、エス・エルは、メンシェヴィキやカデットとともに、ブルジョア＝地主

主の反革命的臨時政府の主要な支柱となり、その指導者（ケーレンスキー、アウクセンチエフ、チェルノーフ）は入閣した。エス・エルは、地主的土地所有の一掃という農民の要求を支持することを拒否し、地主的土地所有の存続を主張した。エス・エルの臨時政府大臣たちは、地主の土地を占拠した農民に討伐隊をさしむけた。

外国の軍事干渉と内戦の時期には、エス・エルは反革命的破壊活動をおこない、干渉軍と白衛軍を積極的に支持し、反革命陰謀にくわわり、ソヴェト国家と共産党の活動家にたいするテロルを組織した。内戦が終わってからも、エス・エルは国内でも、白系亡命者のあいだでもソヴェト国家にたいする敵対活動をつづけた。二三〇

（一六五）注二一を参照。二三一

（一六六）『われわれの組織上の任務について一同志にあたえる手紙』、全集、第六巻、二三四―二五一ページを参照。二三一

（一六七）全集、第七巻、一二六―一二七ページを参照。二三三

（一六八）全集、第六巻、四九一―四九二ページを参照。二三四

（一六九）これは、マルトフの『ロシア社会民主労働党内の戒厳状態とのたたかい（エヌ・レーニンの手紙にたいする回答）』、ジュネーヴ、一九〇四年、をさしている。二三四

（一七〇）全集、第六巻、五一六ページを参照。二三三

（一七一）ポンパドゥール――エム・イエ・サルトィコーフ－シチエドリーンの作品『ポンパドゥールたちとポンパドゥール夫人たち』に出てくる風刺的な形象。この作品のなかで彼はツァーリの高官、大臣や県知事を糾弾している。ポンパドゥール、ポンパドゥール主義は、行政官のえてがって、わがままの代名詞になっている。元は、フランス国王ルイ一五世の寵妾ポンパドゥール侯爵夫人の名に由来することば。二三四

（一七二）マニーロフかたぎ――ゴーゴリの作品『死せる魂』に出てくる地主。いくじのない空想家で、無能なおしゃべり屋の典型。二三七

（一七三）本書、一一九ページを参照。二三八

（一七四）全集、第六巻、五一五ページを参照。二四〇

（一七五）本書、一〇五ページを参照。二四〇

（一七六）本書、一一二ページを参照。二四一

（一七七）一九〇〇年のハンブルク石工事件――「石工自由組合」を結成したハンブルクの一二二名の石工は、ストライキのときに中央連合の禁止にさからって出来高払いの仕事をした。石工連合ハンブルク支部は、社会民主党員の組合員のストライキ破りの問題を地方組織にもちだし、後者は、この問題をドイツ社会民主党中央委員会の検討にゆだねた。中央委員会の任命した仲裁裁判は、党員である組合員の行動を非難したが、除名提案は拒否した。二四一

（一七八）本書、一二四ページを参照。二四一

（一七九）全集、第六巻、二四二、二四四、二四五ページを参照。二四三

（一八〇）前掲書、二四六ページを参照。二四三

（一八一）全集、第二巻、三二二―三四五ページを参照。二四四

（一八二）コースチチの決議案――大会で否決されたエス・ズボルスキー（コースチチ）の決議案は、規約第一条を次のように述べている。「党の綱領を承認し、物質的手段によって党を援助し、かつ党組織の一つの指導のもとに、党に規則的な個人的協力をおこなうものは、すべて党員と見なされる。」二四五

（一八三）これは、『ノイエ・ツァイト』一八九四―一八九五年、第二七―二九号にのったカウツキーの論文『インテリゲンツィアと社

会民主党』をさしている。二四五

（一八四）大会に出席していた「イスクラ」組織の顔ぶれ――全部で一六人、うち多数派は、レーニン、プレハーノフ、クループスカヤ（サブリナ）、ゼムリャーチカ（オーシポフ）、クニポーヴィチ（デードフ）、バウマン（ソローキン）、ウリヤーノフ（ヘルツ）、クラーシコフ、ノスコフ（グレーボフ）の九人、少数派はマルトフ、アクセリロード、ポトレソフ（スタロヴェール）、ザスーリチ、デイチ、トロツキー、クロホマルの七人。括弧内は大会での匿名。二五五

（一八五）『私はなぜ「イスクラ」編集局を脱退したか？（「イスクラ」編集局への手紙）』、全集、第七巻、一一四ページを参照。二五五

（一八六）イヴァン・イヴァーヌィチとイヴァン・ニキーフォロヴィチ――ゴーゴリの短篇小説『イヴァン・イヴァーヌィチとイヴァン・ニキーフォロヴィチが喧嘩をした話』の二人の主人公。つまらない口喧嘩がもとで一〇年あまりも裁判沙汰をつづけ、老いさらばえてしまったが、根は善良なふたりの隣人。二五七

（一八七）全集、第七巻、一一四ページを参照。二五八

（一八八）『党規約の審議にさいしての第二の演説』、全集、第六巻、五一六―五一八ページを参照。二五八

（一八九）ドイツ社会民主党の一八九五年の大会――一八九五年一〇月六日から一二日までブレスラウでひらかれた。大会の中心議題は農業綱領草案の審議であったが、この草案は、一八九四年のフランクフルト大会の決定で設置された農業委員会によって提出されたものであり、重大な誤りをふくんでいた。とりわけ、プロレタリア党を「全国民的」政党にしようとする傾向が現われていた。日和見主義者のほか、ベーベルとリープクネヒトもこの草案を支持したので、二人は大会で同志たちから非難された。農業綱領草案は大会の席上で、カウツキー、ツェトキーンその他一連の社会民主党員からきびしく批判された。大会は六三対一五八の多数で委員会の提出した農業綱領草案を否決した。二六二

（一九〇）「あなたがあんな人とお友だちなのが、私にはつらいのです」――ゲーテの戯曲『ファウスト』第一部、マルテの家の庭の場のなかのマルガレーテのせりふを、ツェトキーンがドイツ社会民主党大会で心おぼえで引用したもの。二六三

（一九一）全集、第四一巻、七五ページを参照。二六七

（一九二）アラクチェーエフ的精神――アラクチェーエフは、帝政時代の陸軍大臣で、彼の名まえは無制限の警察的専制支配の代名詞となっていた。二六九

（一九三）これは、アクセリロードの論文『ロシア社会民主党の統合とその任務』（一九〇三年一二月一五日付、『イスクラ』第五五号）をさしている。この論文は、ボリシェヴィズムの組織原則に鋒先をむけたものであった。二六九

（一九四）全集、第六巻、四九二ページを参照。二七三

（一九五）党規約第一三条――規約第一三条は次のとおりである。『ロシア革命的社会民主主義在外連盟』はロシア社会民主労働党の唯一の在外組織として、国外で宣伝、扇動をおこない、またロシア国内の運動を助けることを目的とする。『連盟』は委員会のもつ権利をすべてもつ。ただし、例外として、ロシア国内の運動への支援は、かならず中央委員会の特別に任命した人物およびグループをつうじておこなわれなければならない」二七九

（一九六）「イスクラ」組織の古い成員で、組織委員会の一員だった人――ゲ・エム・クルジジャノフスキーのこと。二八五

（一九七）全集、第七巻、一一七ページを参照。二九四

(一九八) 『「イスクラ」編集局の選挙のさいの演説』、全集、第六巻、五二一ページを参照。二九五

(一九九) 前掲書、五二二—五二三ページを参照。二九七

(二〇〇) **プレハーノフの決議**——次のようになっていた。「(a) 社会民主党は、ブルジョアジーがツァーリズムとの闘争で革命的であるか、すくなくとも反政府的であるかぎり、これを支持しなければならないこと、(b) だから、社会民主党は、ロシアのブルジョアジーの政治的意識のめざめを歓迎しなければならないこと、だが他方では、ブルジョアジーの解放運動の限界性と不十分さを、どこであろうとそれが現われたところでプロレタリアートの前に暴露しなければならないことを考慮し、——ロシア社会民主労働党第二回定例大会は、すべての同志に、その宣伝において、ペ・ストルーヴェ氏の機関誌に現われた潮流の反革命的・反プロレタリア的性格に労働者の注意をむけさせるよう、力をこめて勧告する。」三〇五

(二〇一) **『オスヴォボジデーニエ』**(『解放』)——隔週刊雑誌。一九〇二年六月一八日(七月一日)から一九〇五年一〇月五(一八)日まで、ペ・ベ・ストルーヴェの編集で国外で発行されていた。ロシア自由主義的ブルジョアジーの機関誌で、穏健な君主主義的自由主義の思想を一貫して説いていた。一九〇三年、同誌を中心に「解放同盟」が結集され(一九〇四年一月に正式に成立)、一九〇五年一二月まで存続した。「オスヴォボジデーニエ派」は立憲派のゼムストヴォ議員とともに、一九〇五年一〇月に結成されたカデット(ロシアにおける主要なブルジョア政党)(注二一を参照)の中核となった。三〇五

(二〇二) **社会革命党にかんする大会の決議**——この決議の最後の一節には次のように述べている。「……大会は、社会民主主義者と『社会革命派』とを統合しようとするあらゆる試みを断固として非難し、社会革命派とのあいだには、ツァーリズムとの闘争の個々の場合における部分的な協定のみが可能であると認め、そのうえ、そういう協定の条件を中央委員会の統制下におく。」三〇六

(二〇三) **アクセリロードの決議にたいするプレハーノフの修正**——アクセリロードの決議とは『社会革命党にかんする決議』のこと。プレハーノフは、決議の最後の一節を前注のように修正したのである。アクセリロードの原案では、これにあたる箇所は「大会は、たとえ一般民主主義的任務の狭い枠内でも、社会民主党と『社会革命党』との多少とも恒久的な同盟が可能であるとは考えないが、しかし、力関係により、また企図されている絶対主義にたいする攻撃の性質からして両党の一時的協定が必要とされる場合には、そういう協定の可能性を排除しない」となっていた。三〇七

(二〇四) **生格におかれたプロレタリアート**——第二回党大会で党綱領を審議したさい、アキーモフは、イスクラ派の草案の欠陥の一つはプロレタリアートの利益を忘れていることだ、と言った。イスクラ派の綱領草案では、党は能動的に行動するものとして主語になっているが、プロレタリアートは受動的なものとしていつでも生格(所有格)になっている、というのが彼の論拠であった。三〇八

(二〇五) **division**〔分列表決〕——イギリス議会の慣習で、賛成者と不賛成者が議場外に出て、別々の表決者控廊下にはいって投票をする方法。三一〇

(二〇六) **ペテルブルグの「労働者組織」**——一九〇〇年の夏に成立した「経済主義者」の組織。同年秋、「労働者組織」は、ロシア社会民主労働党ペテルブルグ委員会として承認されていた「労働者階級解放闘争同盟」に合流した。ペテルブルグの党組織内でレーニ

ンのイスクラ的潮流が勝利すると、「経済主義者」の影響をうけていたペテルブルグの社会民主主義者の一部は、一九〇二年の秋にペテルブルグ委員会を離れて、独自の「労働者組織」を再興した。「労働者組織」委員会は、レーニンの『イスクラ』に敵対する態度をとり、マルクス主義党を建設するその組織計画に反対した。第二回党大会後の一九〇四年はじめに、一般の党組織に合流して「労働者組織」は消滅した。三二九

(二〇七)　この手紙は、一九〇三年九月一三日付でレーニンがア・エヌ・ポトレソフにあてて書いたもの。全集、第三四巻、一七四—一七七ページを参照。三二六

(二〇八)　新しい中央委員——一九〇三年九月にロシアからジュネーヴに来たエフ・ヴェ・レングニクのこと。三二七

(二〇九)　これは、マルトフの小冊子『ロシアにおける赤旗。ロシア労働運動小史』、ジュネーヴ、初版——一九〇〇年、再版——一九〇四年をさしている。三二八

(二一〇)　全集、第三四巻、一八五—一八六ページを参照。三二八

(二一一)　全集、第七巻、一一七ページを参照。三二三

(二一二)　『ロシア社会民主労働党第二回大会についての報告』、全集、第七巻、六二—七三ページを参照。三二三

(二一三)　全員一致による補充——レーニンの『イスクラ』編集局脱退後、ただ一名の編集局員となったプレハーノフによる旧編集局員四名の補充をさす。「全員一致」の原語 единогласный は、文字どおりには「一票による」の意。この両義をかけている。三二四

(二一四)　同じ頭文字で始まるジュネーヴの二つの郊外——たぶん、クリューズとカルージのことで、ここには多数派の支持者と少数派の支持者が住んでいた。三二三

(二一五)　ソバケーヴィチ——ゴーゴリの作品『死せる魂』に出てくる粗野で貪欲な地主の名。三三三

(二一六)　バザーロフ——トゥルゲーネフの作品『父と子』の主要人物。ニヒリスト。三三六

(二一七)　一中央委員——エフ・ヴェ・レングニクのこと。三三六

(二一八)　「レヴォリュツィオンナヤ・ロシア」(『革命ロシア』)——エス・エルの非合法新聞、「社会革命同盟」によって一九〇〇年の末からロシア国内で発行され、一九〇二年一月から一九〇五年一二月までは、エス・エル党の公式機関紙としてジュネーヴで出ていた。三三六

(二一九)　プレハーノフの誤解——プレハーノフの論文『滑稽な誤解』(一九〇三年一二月一五日付、『イスクラ』第五五号)と『悲しむべき誤解』(一九〇四年一月一五日付、『イスクラ』第五七号)とをさす。三三六

(二二〇)　「泥仕合」についてのおしゃべり——一九〇三年一一月二五日付の『イスクラ』第五三号に、レーニンの『「イスクラ」編集局への手紙』(全集、第七巻、一〇七—一一一ページ)といっしょに、プレハーノフの書いた編集局の回答が掲載された。この手紙で、レーニンは、ボリシェヴィキとメンシェヴィキとの原則的な意見の相違を新聞の紙面で討議することを提案した。プレハーノフは、こうした意見の相違を「サークル生活の泥仕合」と称して、拒否の回答をした。三三八

(二二一)　全集、第七巻、一〇七—一一一ページを参照。三四〇

(二二二)　前掲書、一一二—一一九ページを参照。三三一

(二二三)　これは、一九〇三年一二月一五日付および一九〇四年一月一五日付の『イスクラ』第五五号、第五七号にのったアクセリロ

ードの論文『ロシア社会民主党の統合と党の任務』をさす。三五三

(二四) **ブルジョア文献におけるマルクス主義の反映**――「これは、「合法マルクス主義」の著名な代表者ペ・ベ・ストルーヴェの見解をさしている。彼は、一八九四年に著書『ロシアの経済的発展の問題についての論評』をだした。ストルーヴェのこの初期の労作には、すでに彼のブルジョア弁護論的見解がはっきりと現われていた。レーニンは、ストルーヴェその他の「合法マルクス主義者」の見解に反対して、一八九四年の秋にペテルブルグのマルクス主義サークルで、『ブルジョア文献におけるマルクス主義の反映』と題する研究報告をおこなった。この研究報告は、一八九四年末―一八九五年はじめに執筆されたレーニンの論文『ナロードニキ主義の経済学的内容とストルーヴェ氏の著書におけるその批判』(全集、第一巻、三五一―五四六ページ)の基礎となった。三五三

(二五) マルトフの論文『われわれはそのように準備すべきなのか?』のこと。彼は、全国的武装蜂起の準備をユートピアで陰謀主義であると考え、その準備に反対した。三五六

(二六) エム・ユ・レールモントフの詩『ジャーナリスト、読者、作者』のなかのことば。三五六

(二七) これは、マルトフの論文『日程上の問題(サークルか党か)』をさしている。三六〇

(二八) 全集、第六巻、二五一ページを参照。三五四

(二九) **オブローモフかたぎ**――オブローモフは、ゴンチャローフの同名の小説の主人公で、無為で優柔不断な夢想家の典型。三五四

(三〇) これは、マルトフの論文『番にあたって』(『イスクラ』第六〇号、一九〇四年二月二五日)をさす。このなかでマルトフは、地方委員会の人的構成の問題の決定については、党地方委員会は中央委員会から「独立」しているべきだと主張して、モスクワ委員会を攻撃した。モスクワ委員会は、この問題を討議したさいに、党規約第九条にもとづいて、モスクワ委員会は中央委員会のすべての指令に服従するという決議を採択したのである。三六七

(三一) **ドイツ社会民主党ドレスデン大会**――一九〇三年九月一三―二〇日にドレスデンでひらかれた。大会の中心議題は、党の戦術と修正主義にたいする闘争との問題であった。大会はベルンシュタイン、ゲーレ、ダーヴィット、ハイネその他若干のドイツ社会民主党員の修正主義的見解を批判した。しかし、修正主義にたいする闘争で、大会は十分に一貫した態度をとらなかった。ドイツ社会民主党の修正主義者は、党から除名されずに、大会後もひきつづきその日和見主義的見解を宣伝した。三六九

(三二) 『**社会主義月刊**』――ドイツ社会民主党内の日和見主義者のおもな機関誌で、同時に国際日和見主義の機関誌。一八九七年から一九三三年までベルリンで発行されていた。第一次世界大戦のときには社会排外主義の立場をとった。三六九

(三三) 『**フランクフルト新聞**』――ドイツの大株式取引業者の機関紙。一八五六年から一九四三年までフランクフルト・アム・マインで発行されていた。三五三

(三四) **しごかれる者としごく者**――マルトフの論文『番にあたって』(一九〇四年一月二五日付『イスクラ』第五八号)の付録としてのせられたおどけた『ロシア社会民主労働党の簡単な憲法』のなかのことば。マルトフはその『憲法』のなかで、ボリシェヴィズムの組織原則を皮肉り、メンシェヴィキにたいする不当な態度と称するものに不平を鳴らし、ボリシェヴィキとメンシェヴィキの意味で「しごく者」と「しごかれる者」と書いた。三六八

人名注

（括弧内でゴシック体になっているものは本名を示す）

アウアー、イグナーツ（一八四六―一九〇七）――ドイツ社会民主党の日和見主義的指導者のひとり、元皮革工。

アキーモフ（**マフノーヴェツ**）、**ヴェ・ペ**（一八七二―一九二一）――「経済主義」の著名な代表者、極端な日和見主義者。第二回党大会後はメンシェヴィキ。反動期に社会民主党から離れた。

アクセリロード、ペ・ベ（一八五〇―一九二八）――メンシェヴィキの指導者、第一次大戦中、はじめ社会排外主義者、のちツィンメルヴァルト中央派。十月革命後は反ソ活動に従事した。

アダモーヴィチ ↓ヴォロフスキー、ヴェ・ヴェ

アブラムソーン（**ポルトノイ、カ**）（一八七二―一九四一）――第二回党大会でブンド派の代議員。一九三九年までポーランドのブンド中央委員会議長。

アラクチェーエフ、ア・ア（一七六九―一八三四）――ロシアの反動政治家、軍国主義者、陸軍大臣。

アレクサンドロフ――新『イスクラ』の一九〇四年一月一日付第五六号にのった論文『組織問題（編集部への手紙）』の筆者。

アレクセーエフ、ペ・ア（一八四九―一八九一）――一八七〇年代の労働者革命家。モスクワのナロードニキの宣伝サークルに加入し、モスクワおよびペテルブルグで社会主義を宣伝、織工と鉄道従業員のグループを組織した。流刑中に殺害された。

イヴァノフ、イェ・エフ（**レーヴィナ、イェ・エス**）（一八七四―一九〇五）――第二回大会でハリコフ委員会の代議員。「ユージヌィ・ラボーチー」派。大会後はメンシェヴィキ。まもなく政治活動から離れた。

イヴァンシン、ヴェ・ペ（ヴェ・イ）（一八六九―一九〇四）――「経済主義者」。一八九八年には「在外ロシア社会民主主義者同盟」の活動的メンバー、のちメンシェヴィキ。

イクス ↓マースロフ、ペ・ペ

イグレック ↓ガリペリン、エリ・イェ

一実践家 ↓マカジューブ、エム・エス

イプセン、ヘンリク（一八二八―一九〇六）――ノルウェーの劇作家。近代劇の創始者のひとり。その作品でブルジョア社会を批判した。

イロヴァイスキー、デ・イ（一八三二―一九二〇）――ロシアの歴史家、革命前ロシアの初等・中等学校にひろく普及していた官製歴史教科書の著者。

ヴァイトリング、ヴィルヘルム（一八〇八―一八七一）――ドイツのユートピア共産主義者。元仕立屋。

ヴァシーリエフ ↓レングニク、エフ・ヴェ

ヴァシーリエフ、エヌ・ヴェ（一八五五生）――大佐、ミンスク県の憲兵司令官、ズバートフの協力者。

ヴァネーエフ、ア・ア（一八七二―一八九九）――革命家。ペテルブルグ「労働者階級解放闘争同盟」の組織者のひとり。

ヴァールタイヒ、カール・ユーリウス（一八三九生）――ドイツの右翼社会民主主義者、全ドイツ労働者協会の創立者のひとり。社会主義者取締法の時期にアメリカに移住した。

ヴィッテ、エス・ユ（一八四九―一九一五）――帝政ロシアの政

治家。蔵相として財政改革（金本位制の採用、保護関税の強化、ウォトカの専売制）や鉄道敷設などによって資本主義の発展を促進した。日露戦争のさいの講和全権、一九〇五年に首相となり、若干の譲歩と国会の招集によって革命の終熄をはかった。

ヴィルヘルム二世（一八五九—一九四一）——ドイツ皇帝（一八八八—一九一八）。

ヴェ・イ　↓イヴァンシン、ヴェ・ペ

ヴェ・ヴェ　↓ヴォロンツォフ、ヴェ・ペ

ウェッブ夫妻（夫シドニ、一八五九—一九四七、妻ビアトリス、一八五八—一九四三）——イギリスの改良主義的社会活動家、フェビアン協会の創立者、労働党員。イギリス労働組合運動史の著者。

ヴォルトマン、ルートヴィヒ（一八七一—一九〇七）——ドイツの修正主義者。社会主義とダーウィン主義との綜合を試み、またマルクス主義とカント主義を結びつけようと試みた。

ヴォルムス、ア・エ（一八六八—一九三七）——法律家、一九〇一—一九〇三年にモスクワ大学教授。ズバートフが創立した「モスクワ機械工相互扶助協会」の集会で講演をおこなった。

ヴォロフスキー、ヴェ・ヴェ（アダモーヴィチ）（一八七一—一九二三）——共産主義者、一八九四年に革命運動に参加、一九〇二年には『イスクラ』に協力、党分裂後はボリシェヴィキ。一九一七年に党中央委員会在外ビューローの一員。十月革命後スウェーデン、イタリアへのソヴェト・ロシアの外交代表であった。ファシストによってイタリアで暗殺された。

ヴォロンツォフ、ヴェ・ペ（ヴェ・ヴェ）（一八四七—一九一八）——一八八〇—九〇年代の自由主義的ナロードニキ主義の主要な理論家のひとり、マルクス主義の激しい敵。

ウリヤーノフ、デ・イ（ヘルツ）（一八七四—一九四三）——ボリシェヴィキ、レーニンの弟。

エゴーロフ（レーヴィン、イエ・ヤ）（一八七三生）——社会民主主義者、ユージヌィ・ラボーチー派の指導者。一九〇三年に逮捕、政治活動から離れた。

N・N　↓プロコポーヴィチ、エス・エヌ

エル・エム——『「ラボーチャヤ・ムィスリ」別冊付録』（一八九九年）にのった論文の筆者。

エルム、アードルフ（一八五七—一九一六）——ドイツ社会民主党員、改良主義者、『社会主義月刊』の寄稿者。

エンゲルス、フリードリヒ（一八二〇—一八九五）

オーエン、ロバート（一七七一—一八五八）——イギリスの偉大なユートピア社会主義者。

オーシポフ　↓ゼムリャーチカ、エル・エス

オーゼロフ、イ・ハ（一八六九—一九四二）——経済学者、モスクワ大学教授。ズバートフの「警察社会主義」を支持した。

オルトドックス（アクセリロード、エリ・イ）（一八六八—一九四六）——婦人社会民主主義者、哲学者、「イスクラ」派。のちメンシェヴィキ。プレハーノフの支持者。

オルローフ（マハリーン、エリ・デ）（一八八〇—一九二五）——「イスクラ」派、第二回党大会ではエカテリノスラフ選出の代議員、大会多数派に属した。大会後メンシェヴィキ。十月革命後は労働組合活動および経済活動にしたがった。

カウツキー、カール（一八五四—一九三八）——第二インタナショナルおよびドイツ社会民主党の指導的理論家、日和見主義者。第一次大戦中は中央派。十月革命後はソヴェト権力の激しい敵。

カトコーフ、エム・エヌ（一八一八―一八八七）――ロシアの反動的ジャーナリスト、『モスコーフスキエ・ヴェードモスチ』の編集者。スラヴ主義と専制思想の鼓吹者、あらゆる社会的進歩の激しい敵。

ガリペリン、エリ・イエ（イグレック）（一八七二―一九五一）――カフカーズ地方の活動家、第二回党大会後中央委員、調停派。のち政治活動から離れた。

カルスキー（トプリッゼ、デ・ア）（一八七一―一九四二）――第二回党大会ではチフリス委員会の代議員。大会では一貫したイスクラ多数派、大会後はメンシェヴィキ。十月革命後、グルジアのソヴェト権力のもとで評論活動をおこなった。

カレーエフ、エヌ・イ（一八五〇―一九三一）――教授、歴史家かつ評論家、ミハイロフスキーとともに「主観的社会学派」の代表者のひとり。第一次革命のときカデットに加入、その中央委員。

クスコーヴァ、イエ・デ（一八六九―一九五八）――ブルジョア政論家。一八九〇年代にはベルンシュタイン主義者、「経済主義者」、のちカデット左派。一九二二年に反革命活動のため国外に追放された。

グセフ、エス・イ（ドラブキン、ヤ・デ）（一八七四―一九三三）――「労働者階級解放闘争同盟」時代からの活動家。第二回党大会ではドン委員会の代議員、ボリシェヴィキ。十月革命後党中央委員となり、コミンテルンでも活動した。

クニポーヴィチ、エリ・エム（デードフ）（一八五六―一九二〇）――一八七〇年以来の革命家、はじめ「人民の意志」派のナロードニキ、のち社会民主党員、ボリシェヴィキ。

クラーシコフ、ペ・ア（パヴローヴィチ）（一八七〇―一九三九）――「イスクラ」派のひとり、ボリシェヴィキ。十月革命後は司法関係の分野ではたらいた。ソヴェト中央執行委員。

クリチェフスキー、ペ・エヌ（一八六六―一九一九）――「経済主義」の指導者、ベルンシュタイン主義の宣伝家。第二回党大会後、社会民主主義運動から離れた。

クルジジャノフスキー、ゲ・エム（トラヴィンスキー）（一八七二―一九五九）――古くからの党員、ボリシェヴィキ。一九二〇年にロシア電化委員会（ゴエルロ）を主宰。一九二一―一九三〇年ゴスプランを指導。のち党中央委員、科学アカデミー副総裁。

クループスカヤ（ウリヤーノヴァ）、エヌ・カ（サブリナ）（一八六九―一九三九）――共産党とソヴェト国家のすぐれた活動家、レーニンの妻。

グレーボフ　↓ノスコーフ、ヴェ・ア

ゲード、ジュール（一八四五―一九二二）――フランスの社会主義運動および第二インタナショナルの組織者で指導者。マルクス主義思想の普及と社会主義運動の発展に貢献したが、セクト主義的な誤りをおかした。第一次大戦が始まると、社会排外主義の立場をとり、ブルジョア政府に入閣した。

ゲルツェン、ア・イ（一八一二―一八七〇）――ロシアの革命的民主主義者、唯物論哲学者、ユートピア社会主義者、『コーロコル』の編集者。

ゲーレ、パウル（一八六四―一九二八）――ドイツの社会民主党員、日和見主義者。一九二二年にプロイセン政府の閣僚。

コースチチ（ズボロフスキー、エム・エス）（一八七九―一九三五）――第二回党大会でオデッサ委員会の代議員、メンシェヴィキ。十月革命後は国外で反ソ活動をおこなった。

コストローフ　↓ジョルダニア、エヌ・エヌ
コリツォーフ、デ（ギンズブルグ、ベ・ア）（一八六三―一九二〇）――元ナロードニキ、「労働解放」団の一員。第二回大会後メンシェヴィキ。第一次大戦中は祖国擁護派。十月革命に敵対的な態度をとった。
ゴリドブラット（メデム、ヴェ・デ）（一八七九―一九二三）――ブンドの活動家、理論家。社会民主党の第二回大会および第五回大会に参加、最右翼の民族主義的立場をとった。
ゴーリン（ガルキン）、ヴェ・エフ（一八六三―一九二五）――ボリシェヴィキ、第二回党大会ではサラトフ委員会の代議員。十月革命後、赤軍内の政治活動の組織化に大きな役割を演じた。
ゴルスキー（ショートマン、ア・ベ）（一八八〇―一九三九）――金属労働者、「労働者階級解放闘争同盟」時代からの活動家。第二回党大会でペテルブルグ委員会の代議員。ボリシェヴィキ。第一三回党大会以来党中央統制委員。
サーヴィンコフ、ベ・エヌ（ローブシン、ベ――ヴェ）（一八七九―一九二五）――エス・エル党の指導者。第一次大戦中は社会排外主義者。二月革命後、陸軍次官、ついでペトログラード軍事総督。十月革命後は一連の反革命的反乱の組織者。のち逮捕され、獄中で自殺。
ザスーリチ、ヴェ・イ（一八四九―一九一九）――ナロードニキ運動、ついで社会主義運動の著名な婦人活動家。「労働解放」団員、『イスクラ』編集局員。第二回党大会後はメンシェヴィキ。十月革命に否定的な態度をとった。
サブリナ　↓クループスカヤ（ウリヤーノヴァ）、エヌ・カ
サルトィコーフ-シチェドリーン、エム・イエ（一八二六―一八八九）――ロシアの大風刺作家。
サン-シモン、アンリ・クロード（一七六〇―一八二五）――フランスの偉大なユートピア社会主義者。
ジェリャーボフ、ア・イ（一八五〇―一八八一）――「人民の意志」派の指導者、一八七九―一八八一年における同党のテロル計画の組織者。アレクサンドル二世を暗殺し、処刑された。
シチェドリーン　↓サルトィコーフ-シチェドリーン、エム・イエ
シテイン（アレクサンドロヴァ、イエ・エム）（一八六四―一九四三）――元「人民の意志」派、一九〇二年に『イスクラ』組織に参加。第二回党大会後、メンシェヴィキ的な中央委員会に補充された。十月革命後は文化・教育機関で働いた。
シュヴァイツァー、ヨハン・バプティスト（一八三三―一八七五）――ラサールの死後、全ドイツ労働者協会の首領。ベーベル、リープクネヒトの「アイゼナッハ」派と執拗にたたかった。
シュラム、カール・アウグスト――ドイツの社会民主主義者、日和見主義者。
シュルツェ-デーリチュ、フランツ・ヘルマン（一八〇八―一八八三）――ドイツのブルジョア経済学者。労働者を資本主義にたいする革命闘争から引き離すために、生産協同組合や信用貯蓄銀行を唱道した。
ジョルダニア、エヌ・エヌ（コストローフ）（一八七〇―一九五三）――カフカーズのメンシェヴィキ指導者。第一次大戦中は社会排外主義者。十月革命後はグルジアの反革命的メンシェヴィキ政府の首班。のち亡命。
スタロヴェール　↓ポトレソフ、ア・エヌ

ステパーノフ（ニキーチン、イ・カ）（一八七七—一九四四）——ボリシェヴィキ。第二回党大会ではキエフ委員会の代議員。のち政治活動から離れたが、一九二五年に復党。

ステパーノフ、エス・イ（ブラウン）（一八七六—一九三五）——有名なボリシェヴィキで金属労働者。第二回党大会ではトゥーラ委員会の代議員。第一三回党大会で党中央統制委員。

ストラホフ（タハタリョフ、カ・エム）（一八七一—一九二五）——『ラボーチャヤ・ムィスリ』の編集者、経済主義の支持者、第二回党大会後はメンシェヴィキを支持したが、まもなく政治活動から離れた。

ストルーヴェ、ペ・ベ（一八七〇—一九四四）——ブルジョア経済学者、評論家、「合法マルクス主義」の著名な代表者。一九〇五年以後、カデット党の指導者。ロシア帝国主義の思想的代弁者。十月革命後はソヴエト権力の狂暴な敵。

ズバートフ、エス・ヴェ（一八六四—一九一七）——憲兵大佐、モスクワの秘密警察長官。御用組合を組織し、労働者を革命的活動から引きはなそうと試みた。二月革命の直後、自殺した。

ゼムリャーチカ、エル・エス（オーシポフ）（一八七六—一九四七）——古くからのボリシェヴィキ。一九〇一—一九〇三年、南ロシアで『イスクラ』の受任者、第二回党大会後、中央委員。十月革命後は、赤軍ではたらく、のち党中央統制委員。

セレブリャコーフ、イェ・ア（一八五四—一九二一）——ロシアの最も古い革命家のひとり、元将校。「土地と自由」団に参加、亡命地で『ナカヌーネ』を発行した。のちエス・エルに入党し、その右翼に属した。

ソローキン　→バウマン、エヌ・エ

ダーヴィット、エドゥアルト（一八六三—一九三〇）——ドイツの経済学者、社会民主党員、ベルンシュタイン主義者。第一次大戦中は社会排外主義者。一九一九—一九二〇年、内相。

チェルヌイシェフスキー、エヌ・ゲ（一八二八—一八八九）——ロシアの革命的民主主義者、ユートピア社会主義者。一八五〇—六〇年代の革命運動の指導者。一八六二年に逮捕、流刑に処され、赦免直後に死んだ。

チェンバレン、ジョーゼフ（一八三六—一九一四）——イギリスの政治家。植民相として帝国主義的政策を強行した。

ツァリョーフ（ロケルマン、ア・エス）（一八八〇—一九三七）——第二回党大会ではドン委員会の代議員。大会後はメンシェヴィキ。十月革命後は反革命活動にしたがった。

ツェトキーン、クラーラ（一八五七—一九三三）——ドイツの著名な婦人革命家。ドイツ社会民主党員、のち共産党員、コミンテルン執行委員。

デイチ、エリ・ゲ（一八五五—一九四一）——一八七〇年代にナロードニキとして革命運動にはいり、のち「労働解放」団に属し、『イスクラ』に参加、メンシェヴィキ。十月革命後、政治活動から離れた。

デードフ　→クニポーヴィチ、エリ・エム

デューリング、オイゲン（一八八三—一九二一）——ドイツの経済学者、哲学者、講壇社会主義者。マルクスおよび科学的社会主義の反対者。

トゥーリン、カ　→レーニンの筆名

ドゥンカー、フランツ・グスタフ（一八二二—一八八八）——ドイツのブルジョア政治家、進歩党員、労資協調の立場に立つ「ヒル

シュ＝ドゥンカー組合」の創立者のひとり。
トカチョーフ、ペ・エヌ（一八四四―一八八五）――革命的ナロードニキ主義のイデオローグのひとり、政論家、文芸批判家、ブランキ主義に近い立場をとった。
トラヴィンスキー　↓クルジジャノフスキー、ゲ・エム
トレポフ、デ・エフ（一八五五―一九〇六）――ズバートフの協力者。一九〇五年からペテルブルグ知事、内務次官、警察部長、憲兵隊長を歴任。革命運動の敵。
トロツキー（ブロンシテイン）、（エリ・デ）（一八七九―一九四〇）――メンシェヴィキ。第一次大戦中は中央派。二月革命後、第六回党大会でボリシェヴィキ党に入党。つねに党の一般方針に反対する分派闘争をおこない、一九二七年に党から除名された。
ナイト、ロバート――イギリス労働組合運動の著名な活動家、下院議員。
ナデージヂン、エリ（ゼーレンスキー、イエ・オ）（一八七七―一九〇五）――はじめナロードニキ、一八九八年以後社会民主主義者。一九〇一年にスイスで「スヴォボーダ」団を組織した。第二回党大会後はメンシェヴィキの雑誌に寄稿した。
ナルツィス・トゥポルィロフ　↓マルトフ、エリ
ニーチェ、フリードリヒ・ヴィルヘルム（一八四四―一九〇〇）――ドイツの主観的観念論哲学者、権力哲学を唱道した。民主主義とヒューマニズムの敵、ファシズムのイデオロギー的源泉の一つ。
ノスコーフ、ヴェ・ア（グレーボフ）（一八七八―一九一三）――「労働者階級解放闘争同盟」時代からの党活動家、「北ロシア労働者同盟」の組織者。第二回党大会で中央委員となった。党分裂後は調停派。反動期に政治活動から離れた。
ハイネ、ヴォルフガング（一八六一生）――ドイツ社会民主党員、ベルンシュタイン主義者。第一次大戦中は社会帝国主義者。
ハインドマン、ヘンリ・メアズ（一八四二―一九二一）――イギリスの社会主義者、改良主義者。イギリス社会党の指導者。第一次大戦中は社会排外主義者。十月革命に敵意を示した。
バウマン、エヌ・エ（ソローキン）（一八七三―一九〇五）――「イスクラ」派の活動家、ボリシェヴィキ。第二回党大会では、モスクワ委員会の代議員。一九〇五年一〇月、黒百人組によって殺害された。
パヴローヴィチ　↓クラーシコフ、ペ・ア
バクーニン、エム・ア（一八一四―一八七六）――無政府主義者。一八四八―四九年のドイツ革命に参加。ナロードニキの運動に思想的な影響をあたえた。国際労働者協会内でマルクス主義の敵として行動し、一八七二年に分裂活動の理由で除名された。
ハッセルマン、ヴィルヘルム（一八四四生）――全ドイツ労働者協会の指導者のひとり。一八八〇年に無政府主義者として、ドイツ社会民主党から除名された。
パーニン　↓マカジューブ、エム・エス
パルヴス（ゲリファント、ア・エリ）（一八六九―一九二四）――一八九〇年代末からロシアおよびドイツの社会民主主義運動に参加、メンシェヴィキ。第一次大戦中は排外主義者、ドイツ帝国主義の手先。
ハルトゥーリン、エス・エヌ（一八五七―一八八二）――労働者革命家、「北ロシア労働者同盟」（一八七八―一八七九）の主要な組織者のひとり。一八八〇年に「人民の意志」派執行委員会の命によってツァーリ暗殺のため冬宮に地雷を仕かけた。一八八二年、

オデッサの検事ストレーリニコフを暗殺し、捕縛されて処刑された。

バルホルン、ヨハン（一五三一―一五九九）――ドイツの出版業者。

ピーサレフ、デ・イ（一八四〇―一八六八）――革命的民主主義者、評論家。一八六〇年代のインテリゲンツィアのあいだの革命的イデオロギーの形成に貢献した。

ヒルシュ、マックス（一八三二―一九〇五）――ドイツの経済学者で評論家、社会主義の激しい敵。「ヒルシュ＝ドゥンカー組合」の創立者のひとり。

フィグネル、ヴェ・エヌ（一八五二―一九四二）――有名な婦人革命家、「人民の意志」派の指導者で、一八七六―一八八三年に同派のテロル活動を指導した。

フォミーン（クロホマリ、ヴェ・エヌ）（一八七三―一九三三）――第二回党大会ではウーファ委員会の代議員。メンシェヴィキ。第四回党大会でメンシェヴィキ派の中央委員。

フォルマル、ゲオルク（一八五〇―一九二二）――ドイツの社会民主主義者、日和見主義者、党の右翼指導者のひとり。

ブラウン　↓ステパーノフ、エス・イ

ブランキ、ルイ・オギュスト（一八〇五―一八八一）――フランスの革命家、ユートピア共産主義者。革命的陰謀家の小グループによる権力奪取をめざし、大衆の組織が革命的闘争に果たす決定的な役割を理解しなかった。

フーリエ、シャルル（一七七二―一八三七）――フランスの偉大なユートピア社会主義者。

ブルガーコフ、エス・エヌ（一八七一―一九四四）――ブルジョア経済学者、観念論哲学者。一八九〇年代には「合法マルクス主義者」、のちカデット。一九二二年に反革命活動のため国外に追放された。

ブルケール（マフノーヴェツ、エリ・ペ）（一八七七生）――「経済主義者」。第二回党大会代議員。のち政治活動から離れた。

プルードン、ピエール-ジョゼフ（一八〇九―一八六五）――フランスの小ブルジョア社会主義者。無政府主義の理論的創始者のひとり。

プレハーノフ、ゲ・ヴェ（ベリトフ）（一八五六―一九一八）――ロシアのマルクス主義の礎石をおいた理論家、「労働解放団」の創立者。『イスクラ』編集局員、一九〇三年の党分裂後はメンシェヴィキ、第一次大戦中は祖国防衛派。十月革命には否定的であったが、反ボリシェヴィキ的な行動はとらなかった。

ブレンターノ、ルーヨ（一八四四―一九三一）――ドイツのブルジョア経済学者、講壇社会主義者。マルクス主義的用語をつかうマルクス主義の反対者。

プロコポーヴィチ、エス・エヌ（N・N）（一八七一―一九五五）――極右派の「経済主義者」。一九〇六年にはカデット党中央委員。二月革命後はブルジョア臨時政府の食糧相。十月革命後、国外に亡命。

ベーア、マックス（一八六四生）――社会主義史家。ドイツ社会民主党右派、のち左派。その代表的著作に『社会主義通史』などがある。

ペ――ヴェ　↓サーヴィンコフ、ペ・エヌ

ヘーゲル、ゲオルク・ヴィルヘルム・フリードリヒ（一七七〇―一八三一）――ドイツの大哲学者、客観的観念論者。弁証法を深く

研究し、全面的に仕上げた。

ヘヒベルク、カール（一八五三—一八八五）——ドイツの改良主義者、社会博愛家、デューリング主義者。一八七〇年代に社会民主党に加入。

ベーベル、アウグスト（一八四〇—一九一三）——ドイツおよび国際労働運動の著名な活動家。第一インタナショナル会員、ドイツ社会民主労働党（アイゼナッハ派）の創立者。ベルンシュタイン主義とたたかったが、後年いくつかの中央主義的誤りをおかした。

ベリトフ、エヌ　→プレハーノフ、ゲ・ヴェ

ベリンスキー、ヴェ・ゲ（一八一一—一八四八）——ロシアの大政治評論家、革命的民主主義者。

ベルヂャーエフ、エヌ・ア（一八七四—一九四八）——政論家、哲学者。マルクス主義から観念論へ、さらに神秘主義へと転落した。第一次革命のときにはカデットに協力、革命の敗北後は正教会と和解した。

ヘルツ　→ウリヤーノフ、デ・イ

ヘルツ、フリードリヒ・オットー（一八七八生）——オーストリアの経済学者、社会民主主義者、農業問題におけるマルクス「批判家」。

ベルンシュタイン、エドゥアルト（一八五〇—一九三二）——ドイツ社会民主党および第二インタナショナルの極右日和見主義派の指導者。一八九〇年代末にマルクス主義の理論的基礎にたいする全面的な日和見主義的修正を試みた。

ベローフ（ツェイトリン、エリ・エス）（一八七七生）——もと『ユージヌィ・ラボーチー』と関係があった。第二回党大会ではモスクワ委員会の代議員。大会後はメンシェヴィキ。のち政治活動から離れた。

ペロフスカヤ、エス・エリ（一八五三—一八八一）——婦人革命家、「人民の意志」派の主要な指導者のひとり。しばしばテロルに参加、一八八一年三月のアレクサンドル二世暗殺に指導的役割を演じ、処刑された。

ポサドフスキー（マンデリベルグ、ヴェ・イエ）（一八七〇生）——第二回党大会でシベリア連盟の代議員、メンシェヴィキ。

ポトレソフ、ア・エヌ（スタロヴェール）（一八六九—一九三四）——『イスクラ』編集局員、メンシェヴィキの指導者。第一次大戦中は社会排外主義者。一九一七年には悪質なボリシェヴィキ攻撃をおこなった。十月革命後、国外に亡命。

ポポーフ（ロザノフ、ヴェ・エヌ）（一八七六—一九三九）——第二回党大会で『ユージヌィ・ラボーチー』の代議員。大会後はメンシェヴィキ。第四回党大会ではメンシェヴィキ派からの中央委員に選ばれた。十月革命後は反革命活動にしたがった。

ポンパドゥール侯爵夫人（一七二一—一七六四）——フランス国王ルイ一五世の寵妾。国政に容喙して、これを左右した。

マカジューブ、エム・エス（パーニン、「一実践家」）（一八七六生）——第二回党大会でクリミア連盟の代議員、メンシェヴィキ。

マースロフ、ペ・ペ（イクス）（一八六七—一九四六）——経済学者、メンシェヴィキ。反動期には解党派。第一次大戦中は社会排外主義者。十月革命後、政治活動から離れた。

マホフ（カラファーチ、デ・ペ）（一八七一—一九四〇）——一八九〇年代のなかごろ、ニコラーエフで社会民主主義運動に参加した。第二回党大会ではニコラーエフ委員会の代議員。大会後はメンシェヴィキ。反動期に政治活動から離れた。

マルクス、カール（一八一八—一八八三）

マルトィノフ、ア（ピケル、ア・エス）（一八六五—一九三五）——「経済主義者」、メンシェヴィキ、のち共産党員。第一次大戦中は中央派。二月革命後、国際派メンシェヴィキ。十月革命後、メンシェヴィキから離れた。一九二四年以後コミンテルンで活動した。

マルトフ、エリ（ツェーデルバウム、ユ・オ）（一八七三—一九二三）——『イスクラ』編集局員、メンシェヴィキの指導者。第一次大戦中は中央派、二月革命後は国際派メンシェヴィキ。十月革命後はソヴェト権力に反対し、ドイツに亡命した。

ミハイロフ、ア・デ（一八五五—一八八四）——革命家、「人民の意志」党の組織者。多くの戦闘行動を組織した。獄死した。

ミハイロフ、エヌ・エヌ（一八七〇—一九〇五）——歯科医、挑発者。エス・エルのテロリストによって殺された。

ミハイロフスキー、エヌ・カ（一八四二—一九〇四）——自由主義的ナロードニキ主義の理論家、実証論者、社会学の主観主義学派の代表者のひとり。マルクス主義の敵。

ミュールベルガー、アルトゥル（一八四七—一九〇七）——ドイツの小ブルジョア政論家、プルードン主義者。

ミルラン、アレクサンドル－エティエンヌ（一八五九—一九四三）——フランスの政治家、はじめ社会党員。一八九九年ヴァルデック－ルソーの反動的ブルジョア政府に入閣。一九〇四年に除名され、「独立社会党」を創立。一九二〇—一九二四年フランス大統領。

ムィシキン、イ・エヌ（一八四八—一八八五）——一八七〇年代の革命運動のすぐれた指導者のひとり。非合法印刷所の組織者で農民運動宣伝家。獄内で射殺された。

ムラヴィヨーフ（ミシェネフ、ゲ・エム）（一九〇六死）——労働者。第二回党大会ではウーファ委員会の代議員、ボリシェヴィキ。

メシチェルスキー、ヴェ・ペ（一八三九—一九一四）——反動新聞『グラジダニーン』の発行者かつ編集者。アレクサンドル三世とニコライ二世の反動政策の鼓吹者のひとり。

メドヴェーデフ（ニコラーエフ、エリ・ヴェ）——第二回党大会ではハリコフ委員会の代議員。大会では中間派、大会後はメンシェヴィキ。

メーリング、フランツ（一八四六—一九一九）——ドイツ社会民主党左派の指導者、理論家。第一次大戦中は国際主義者、「スパルタクス」団の指導者のひとり。十月革命を歓迎し、ドイツ共産党の創立に大きな役割を果たした。

モスト、ヨハン・ヨーゼフ（一八四六—一九〇六）——ドイツ社会民主党員、のち無政府主義者。一八八〇年に党から除名された。

ユーヂン（アイゼンシタット、イ・エリ）（一八六七—一九三七）——第二回党大会でブンド中央委員会の代議員。のちメンシェヴィキ。

ラヴローフ、ペ・エリ（一八二三—一九〇〇）——革命的ナロードニキ主義の主要な理論家。一八六〇年代に「土地と自由」団の団員、亡命してパリ・コミューンに参加。第一インタナショナル会員。亡命地で新聞『フペリョード』を発行し、「人民のなかへ」の思想を唱道した。

ラサール、フェルディナント（一八二五—一八六四）——ドイツの小ブルジョア社会主義者。一八六三年に全ドイツ労働者協会を創立、大衆的労働運動の基礎をすえたが、ビスマルクと結んで労働運動を絶対君主制支持の方向へむけようとした。

ラファルグ、ポール（一八四二—一九一一）——フランスの社会

主義者。フランス労働運動におけるマルクス主義派の指導者のひとり、マルクス主義思想の普及に貢献した。

ランゲ（ストパーニ、ア・エム）（一八七一―一九三二）――イスクラ派の活動家、ボリシェヴィキ。十月革命後は党およびソヴェトで指導的活動を果たした。

リヴォーフ（モシンスキー、イ・エヌ）（一八七五―一九五四）――ドン鉱山労働者同盟の組織者。第二回党大会では同組織の代議員、中央派、大会後はメンシェヴィキ。十月革命後政治活動から離れた。

リッティングハウゼン、モーリッツ（一八一四―一八九〇）――ドイツの社会民主主義者。一八四八年には『新ライン新聞』に協力した。国会議員。一八八四年にコペンハーゲン大会の党規律にかんする決定に服従を拒んだため、社会民主党から除名された。

リープクネヒト、ヴィルヘルム（一八二六―一九〇〇）――ドイツおよび国際労働運動の著名な活動家、ドイツ社会民主党の創立者かつ指導者。

リーベル（ゴリドマン）、エム・イ（一八八〇―一九三九）――ブンドの指導者。第一次大戦中は社会排外主義者。二月革命後は臨時政府を支持。十月革命に敵対したが、のち経済活動に従事。

リャザーノフ（ゴリデンダッハ）、デ・ベ（一八七〇―一九三八）――メンシェヴィキ。第一次大戦中は中央派。一九一七年、ボリシェヴィキ党に入党。一九三一年までマルクス＝エンゲルス研究所長。

リャードフ（マンデリシタム）、エム・エヌ（一八七二―一九四七）――はじめナロードニキ、「モスクワ労働者同盟」の創立者のひとり。第二回党大会ではサラトフ委員会の代議員。ボリシェヴィキ。のちモスクワ党委員。反動期には召還派。十月革命後に復党し、一九二三年以後はスヴェルドローフ大学学長。

ルソフ（クヌニャンツ、ベ・エム）（一八七八―一九一一）――イスクラ派。ボリシェヴィキ。一九一〇年に逮捕され、獄死した。

レングニク、エフ・ヴェ（ヴァシーリエフ）（一八七三―一九三六）――ボリシェヴィキ。第二回党大会で中央委員。一九〇三―一九〇四年メンシェヴィキとの闘争に積極的に参加。第一二回党大会以後、党中央統制委員。

レンスキー（ヴィレンスキー、エリ・エス）（一八八〇―一九五〇）――第二回党大会でエカテリノスラフ委員会の代議員。ボリシェヴィキ。のち無政府主義者。十月革命後はゴスプランで働いた。

ロガチョーフ、デ・エム（一八五六―一八八四）――革命家、「人民の意志」派の主要なメンバー、同派のテロル計画に参加、軍事組織の創設に指導的役割を演じた。処刑された。

ローゼノフ、エーミール（一八七一―一九〇四）――ドイツの社会民主党員。国会議員。

ロモノーソフ、エム・ヴェ（一七一一―一七六五）――ロシアのすぐれた学者、詩人、古今の言語、哲学、科学に通じ、多くの著作によってロシア語を醇化した。ロシア文芸および科学の父。

レーニン10巻選集　（2）

1970年8月28日第1刷発行
1981年2月27日第14刷発行

定価1200円

訳　者© 日本共産党中央委員会
レーニン選集編集委員会

発行者　平　智　享

発行所　株式会社　大　月　書　店

印刷　三晃印刷
製本　関山製本

〒113 東京都文京区本郷2-11-9 電話（813）4651 振替東京 3-16387